芥川龍之介全集

第九巻

筆蹟

（昭和二年七月）

袴　着

（明治二十九年十一月）

第九卷目錄

詩歌

飜譯

未定稿・斷片

第一

第二

*

手記其他

初期の文章

初期の文章

補遺第一

補遺第二

補遺第三

別稿

發句

蝶の舌ゼンマイに似る暑さかな

木がらしや東京の日のありどころ

暖かや蕊(しべ)に蠟塗る造り花

痨咳の頬美しや冬帽子

夏山や山も空なる夕明り

竹林や夜寒のみちの右ひだり

霜どけの葉を垂らしたり大八つ手

木がらしや日刺にのこる海のいろ

臘梅や枝まばらなる時雨ぞら

お降りや竹深ぶかと町のそら

一游亭來る

草の家の柱半ばに春日かな

白桃や莟うるめる枝の反り

薄曇る水動かずよ芹の中

炎天にあがりて消えぬ箕のほこり

初秋の蝗つかめば柔かき

桐の葉は枝の向き向き枯れにけり

自嘲

水洟や鼻の先だけ暮れ残る

元日や手を洗ひをる夕ごころ

湯河原温泉

金柑は葉越しにたかし今朝の霜

あてかいな　あて宇治の生まれどす

茶畠に入り日しづもる在所かな

白南風（しらばえ）の夕浪高うなりにけり

秋の日や竹の實垂るる垣の外

野茨にからまる萩のさかりかな

荒あらし霞の中の山の襞

洛陽

麥ほこりかかる童子の眠りかな

秋の日や榎の梢の片なびき

伯母の言葉を

薄綿はのばし兼ねたる霜夜かな

庭芝に小みちまはりぬ花つゞじ

薄日

ひと籃の暑さ照りけり巴旦杏

病中

あかつきや蟬なきやむ屋根のうら

唐黍やほどろと枯るる日のにほひ

しぐるるや堀江の茶屋に客ひとり

再び長崎に遊ぶ

唐寺（からでら）の玉巻芭蕉肥りけり

更くる夜を上ぬるみけり泥鰌汁

木の枝の瓦にさはる暑さかな

夏の日や薄苔つける木木の枝

蒲の穗はなびきそめつつ蓮の花

一游亭を送る　別情愴然

霜のふる夜を菅笠の、ゆくへ哉

園藝を問へるひとに

あさあさと麥藁かけよ草いちご

山茶花の蕾こぼるる寒さかな

菊地寛の自傳體小說
「啓吉物語」に

元日や啓吉も世に古簞笥

高野山

山がひの杉冴え返る谺かな

雨ふるやうすうす燒くる山のなり

再び鎌倉平野屋に宿る

藤の花軒ばの苔の老いにけり

震災の後增上寺のほとりを過ぐ

松風をうつつに聞くよ夏帽子

朝顔や土に匐ひたる蔓のたけ

春雨の中や雪おく甲斐の山

竹の芽も茜さしたる彼岸かな

風落ちて曇り立ちけり星月夜

小春日や木兎をとめたる竹の枝

切支丹坂を下り來る寒さ哉

初午の祠ともりぬ雨の中

金澤

簑むし子や雨にもねまる蝸牛

乳垂るゝ妻となりつも草の餅

松かげに鷄はらばへる暑さかな

苔づける百日紅や秋どなり

室生犀星金澤の蟹を贈る

秋風や甲羅をあます膳の蟹

一平逸民の描ける夏目先生の
カリカテユアに

餅花を今戸の猫にささげばや

明星の銚(ちろり)にひびけほととぎす

寄內

ひたすらに這ふ子おもふや笹ちまき

日ざかりや青杉こぞる山の峡(かひ)

越後より來れる婢、當歳の兒を「たんたん」と云ふ

たんたんの咳を出したる夜寒かな

久米三汀新婚

白じらと菊を映(うつ)すや絹帽子(きぬばうし)

臘梅や雪うち透かす枝のたけ

春雨や檜は霜に焦げながら

偶坐

鐵線の花さき入るや窓の穴

車中

しののめの煤ふる中や下の關

庭土に皐月の蠅の親しさよ

悼亡

更けまさる火かげやこよひ雛の顏

唐棕櫚の下葉にのれる雀かな

鵠沼

かげろふや棟も沈める茅の屋根

さみだれや青柴積める軒の下

糸萩の風軟かに若葉かな

破調

兎も片耳垂るる大暑かな

朝寒や鬼灯垂るる草の中

金澤

町なかの銀杏は乳も霞けり

旭川

雪どけの中にしだるる柳かな

計七十七句。大正六年より昭和二年に至る。

短歌

青根溫泉

枝蛙木ぬれひそかに鳴く聲のきよらなるかも道細りつつ

吉井勇に戯る　二首

末の世のくどきの歌の歌ひじり吉井勇に酒たてまつる

赤寺の南京寺の瘦せ女餓鬼まぎはまぐとも酒なたちそね

丸善の二階

しぐれふる町を幽(かそ)けみここにして海彼(かいひ)の本をめでにけるかも

小澤碧童に

窓のへにいささむら竹軒のへに糸瓜ある宿は忠兵衞が宿

きみが家の軒の糸瓜はけふの雨に臍落ちたりやあるひはいまだ

即景

手水鉢の水にいささか濁り立ち南天の花は咲きすぎにけり

上海

うす曇るちまたを見つつ暗緑の玉子食ひをれば風吹きにけり

戯れに河郎の圖を作りて

橋の上ゆ胡瓜なぐれば水ひびきすなはち見ゆる禿(かむろ)のあたま

湯河原温泉

おぼろかに栗の垂り花見えそむるこのあかつきは靜かなるかな

閑庭

秋ふくる晝ほのぼのと朝顔は花ひらきたりなよ竹のうらに

朝顔のひとつはさけるたけのうらともしきものは命なるかな

「となりのいもじ」香取先生に

冬心の竹の晝見に來ひさかたの雪茶を煮つつわが待つらくに

椎の木

さ庭べに冬立ち來らし椎の木の葉うらの乾きしるくなりけり

霜疊るさ庭を見ればば椎の木の葉かげの土も荒れてゐにけり

本所の舊居を憶ふ

露霜の朝朝ふれば甘柿は葉をおとしたり澁柿はまだ

佐藤惣之助君琉球諸島風物詩集を贈る
ミヤラビは娘子の稱なり

空みつ大和扇をかざしつつ來よとつげけむミヤラビあはれ

しぐれ

この朝けしぐれの雨のふりしかば濡れしづまりぬ庭土の荒れ

わが庭はかれ山吹の青枝のむら立つなべにしぐれふるなり

寒木堂所藏の靑畫を觀る　二首

葉をこぞり風になびける墨の竹誰か描きけむこの墨の竹

題したる詩長くしてうす墨の墨繪の花は傾きてをり

室生犀星君に

遠山にかがよふ雪のかすかにも命を守ると君につげなむ

香取先生に

金澤の鯺のすしは日をへなばあぶらや浮かむただに食し給へ

鵠沼

春雨はふりやまなくに濱芝の雫ぞ見ゆるねてはをれども

犬

わが前を歩める犬のふぐり赤しつめたからむとふと思ひたり

病中偶作

わが門のうすくらがりに人のゐてあくびせるにも驚く我は

計二十六首。大正八年より昭和二年に至る。

越びと　旋頭歌二十五首

一

あぶら火のひかりに見つつこころ悲しも、
み雪ふる越路のひとの年ほぎのふみ。

むらぎものわがこころ知る人の戀しも。
み雪ふる越路のひとはわがこころ知る。

現(うつ)し身を歎けるふみの稀になりつつ、
み雪ふる越路のひとも老いむとすあはれ。

二

うち日さす都を出でていく夜ねにけむ。
この山の硫黄の湯にもなれそめにけり。

みづからの體溫守(も)るははかなかりけり、
靜かなる朝の小床(をどこ)に目をつむりつつ。

何しかも寂しからむと庭をあゆみつ、
ひつそりと羊齒(しだ)の卷葉(まきば)にさす朝日はや。

ゐましげに君と語らふ君がまな子(ご)を
ことわりにあらそひかねてわが目守(まも)りをり。

寂しさのきはまりけめやこころ搖（ゆ）らがず、
この宿の石菖（せきしやう）の鉢に水やりにけり。

朝曇りすずしき店（みせ）に來（こ）よや君が子、
玉くしげ箱根細工をわが買ふらくに。

池のべに立てる楓（かへで）ぞいのちかなしき。
幹に手をさやるすなはち秀（ほ）をふるひけり。

腹立たし君と語れる醫者の笑顔（ゑがほ）は。
馬じもの嘶（いば）ひわらへる醫者の齒ぐきは。

うつけたるこころをもちて街ながめをり。
日ざかりの馬糞にひかる蝶のしづけさ。

うしろより立ち來る人を身に感じつつ、
電燈の暗き二階をつつしみくだる。

たまきはるわが現し身ぞおのづからなる。
赤らひく肌をわれの思はずと言はめや。

君をあとに君がまな子は出でて行きぬ。
たはやすく少女ごころとわれは見がたし。

言(こと)にいふにたへめやこころ下(した)に息づき、
君が瞳(め)をまともに見たり、鳶いろの瞳(め)を。

三

秋づける夜を赤(あか)赤(あか)と天(あま)づたふ星、
東京にわが見る星のまうら寂しも。

わがあたま少し鈍(にぶ)りぬとひとり言(ごと)いひ、
薄じめる蚊(か)遣(やり)線(せん)香(こ)に火をつけてをり。

ひたぶるに昔くやしも、わがまかずして、
垂(たら)乳(ち)根(ね)の母となりけむ、昔くやしも。

たそがる土手の下べをか行きかく行き、
寂しさにわが摘みむしる曼珠沙華はや。

曇り夜のたどきも知らず歩みてや來し。
火ともれる自働電話に人こもる見ゆ。

寢も足らぬ朝目に見つつい行く日經にけむ。
風きほふ狹庭のもみぢ黑みけらずや。

小夜ふくる炬燵の上に顋をのせつつ、
つくづくと大書棚見るわれを思へよ。

今日(けふ)もまたこころ落ちゐず黄昏(たそが)るるらむ。
向うなる大き冬木(ふゆき)は梢(うら)ゆらぎをり。

門(かど)のべの笹吹きすぐる夕風の音(おと)、
み雪ふる越路(こしぢ)のひともあはれとは聞け。

詩

山吹

あはれ、あはれ、旅びとは
いつかはこころやすらはん。
垣ほを見れば「山吹や
笠にさすべき枝のなり。」

相聞　一

あひ見ざりせばなかなかに
そらに忘れてやまんとや。
野べのけむりも一すぢに
立ちての後はかなしとよ。

相聞　二

風にまひたるすげ笠の
なにかは路に落ちざらん。

わが名はいかで惜しむべき。
惜しむは君が名のみとよ。

相聞　三

また立ちかへる水無月の
歎きを誰にかたるべき。
沙羅のみづ枝に花さけば、
かなしき人の目ぞ見ゆる。

風琴

風きほふ夕べをちかみ
戸のかげに身をひそめつつ、
（いかばかりわれは羞ぢけむ。）
風琴（オルガン）をとどろとひける
女（め）わらべの君こそ見しか。
とし月の流るるままに
男（を）わらべのわれをも名をも
いまははた知りたまはずや。
いまもなほ知りたまへりや。

冬

まばゆしや君をし見れば
薄ら氷に朝日かがよふ
えふれじや君としをれば
臘梅の花ぞふるへる
冬こそはここにありけめ

手袋

あなたはけふは鼠いろの
羊の皮の手袋をしてゐますね、
いつもほつそりとしなつた手に。
わたしはあなたの手袋の上に
針のやうに尖つた峯を見ました。
その峯は何かわたしの額（ひたひ）に
きらきらする雪（ゆき）を感じさせるのです。
どうか手袋をとらずに下さい。
わたしはここに腰かけたまま

ぢつとひとり感じてゐたいのです、
まつ直に天を指してゐる雪(ゆき)を。

苔

さびしとも人こそ言はめ。
わが戀ふはいまだ見ねども
秋しぐれすぎゆくなべに
清らなる濱木綿(はまゆふ)の花、……

鏡

丈なせる鏡のまへに
ひもすがらひとりしをれば
かきつばたにほへるひとは
まみえじとつげこそ來しか。
すべなしと知りは知れども
おもかげをしばしうつせる
鏡にぞ言ふべかりける。——
ひもすがらひとりしをれば
わがともはわれのみぞとよ。

臘梅

臘梅の匂を知つてゐますか？
あの冷やかにしみ透る匂を。
わたしは――實に妙ですね、――
あの臘梅の匂さへかげば
あなたの黑子を思ひ出すのです。

修辭學

ひたぶるに耳傾けよ。
空みつ大和言葉に
こもらへる箜篌の音ぞある。

父ぶり

庭んべは
淺黃んざくらもさいたるを、
わが子よ、這ひ來。

遊ばなん。

おもちやには何よけん。

風船、小鞠、笛よけん。

主ぶり

新むろの疊すがしみ、わがをれば、

ここだ、ほづ枝の花ぞさきける、

ここだ、しづ枝の花ぞさきける。

酒ほがひ

なさめそねや。
さ公だちや。
市に立ちたる礫ものに、
鴉はさはにむるるとも、
豐の大御酒つきぬまは、
箄簗ふけや。
さ公だちや。

百事新たならざるべからざるに似たり

な古りそねや。
さ公だちや。
新水干に新草履、
新さび烏帽子ちやくと着なば、
新はり道にやとかがみ、
新糞まれや。
さ公だちや。

「となりのいもじ」より酒をたまはる

この酒はいづこの酒ぞ。
みこころを難波(なだた)の灘の
黒松の酒、
白鷹の酒。

洞庭舟中

しらべかなしき蛇皮線に、
小翠花(シャウスヰホア)は歌ひけり。

耳環は金にゆらげども、
君に似ざるを如何にせん。

劉園

人なき院にただひとり
古りたる岩を見て立てば、
花木犀は見えねども
冷たき香こそ身にはしめ。

不眠症

眞夜中の廊下の隅に
笠の青い電燈のスタンドが一本
ひつそりと硝子戸に映つてゐる。——
いつも頭の中を見つめる度に。

棕櫚の葉に

風に吹かれてゐる棕櫚の葉よ。
お前は全體もふるへながら

縦に裂けた葉も一ひらづつ、
絶えず細かにふるへてゐる。
棕櫚の葉よ、俺の神經よ。

Melancholia

この田舎路はどこへ行くのか？
唯憂鬱な畑の土に細い葱ばかり生えてゐる。
わたしは當どもなしに歩いて行く、
唯憂鬱な頭の中に剃刀の光りばかり感じながら。

心境

廢れし路をさまよへば
光は草に消え行けり
けものめきたる欲念に
怯ぢしは何時の夢ならむ

時雨

西の田の面にふる時雨
東に澄める町の空

二つ心のすべなさは
人間のみと思ひきや

沙羅の花

沙羅のみづ枝に花さけば
うつつにあらぬ薄明り
消なば消ぬべきなか空に
かなしきひとの眼ぞ見ゆる

船乗りのざれ歌

この身は鱶の餌ともなれ
汝を賭け物に博打たむ
びるぜん・まりあも見そなはせ
汝に夫(つま)あるはたへがたし

船中

ゆふべとなれば海原も
遠島山も煙るなり

今は忘れぬおもかげも
老いては夢にまがふらん

雪

初夜の鐘の音聞ゆれば
雪は幽かにつもるなり
初夜の鐘の音消え行けば
汝はいまひとと眠るらむ

夏

微風は散らせ柚の花を
金魚は泳げ水の上を
汝は並べ畫團扇を
虎疫(ころり)は殺せ汝が夫(つま)を

惡念

松葉牡丹をむしりつつ
ひと殺さむと思ひけり

光まばゆき晝なれど
女ゆゑにはすべもなや

曉

「ひとの音せぬ曉に
ほのかに夢に見え給ふ」
佛のみかは君もまた
「うつつならぬぞあはれなる」

佛

涅槃のおん眼ほのぼのと
とざさせ給ふ夜半にも
かなしきものは釋迦如來
邪淫の戒を說き給ふ

戯れに　(1)

汝と住むべくは下町の
水どろは青き溝づたひ

汝が洗湯の往き來には
晝もなきづる蚊を聞かん

戯れに　(2)

汝と住むべくは下町の
晝は寂しき露路の奥
古簾垂れたる窓の上に
鉢の雁皮も花さかむ

ひとりあるもののうたへる

I

ちまたにさせる夜の月
をぐらきみづのへをゆけば
かなしきものぞひとりなる
すがれし花のにほひより

II

雨あがりなる青いばら
ひとり徑(みち)ゆく朝かげの
こころは汝(なれ)に似るものか

いばらに懸るかたつむり

III

おち葉をしける徑の奥
いのちの秋をかこちつつ
ひとり見しこそ忘られね
清らにくもるひるの月

IV

雪にたわめるひともとの
竹のこころとなりにけり
ひとり世にある寂しさは
雪よりただに身にぞしむ

僕の瑞威スキツツルから

信條

裟婆苦を最小にしたいものは
アナアキストの爆彈を投げろ。

裟婆苦を裟婆苦だけにしたいものは
コンミユニストの棍棒をふりまはせ。

娑婆苦をすつかり失ひたいものは
ピストルで頭を撃ち抜いてしまへ。

レニン第一

君は僕等東洋人の一人だ。

君は僕等日本人の一人だ。

君は源の頼朝の息子だ。

君は――君は僕の中にもゐるのだ。

レニン第二

君は恐らくは知らずにゐるだらう、
君がミイラになつたことを?

しかし君は知つてゐるだらう、
誰も超人は君のやうにミイラにならなければならぬことを?

(僕等の仲間の天才さへエヂプトの王の屍骸のやうに美しいミイラ
に變つてゐる。)

君は恐らくあきらめたであらう、
兎に角あらゆるミイラの中でも正直なミイラになつたことを?

註　レニンの死體はミイラとなれり。

レニン第三

誰よりも十戒を守つた君は
誰よりも十戒を破つた君だ。

誰よりも民衆を愛した君は
誰よりも民衆を輕蔑した君だ。

誰よりも理想に燃え上つた君は
誰よりも現實を知つてゐた君だ。

君は僕等の東洋が生んだ
草花の匂のする電氣機關車だ。

カイゼル第一

君は碌に散歩も出來ない。

君は樂々と立ち小便も出來ない。

君は一行の詩も殘せない。

君は罷業も怠業も出來ない。

君は勝手に自殺も出來ない。

君は、――あらゆるカイゼルは最も割りに合はない職業に就いてゐる！

カイゼル第二

君を褒める言葉はこればかりだ――

君が賣る勳章は割に安い！

手

諸君は唯望んでゐる、
諸君の存在に都合の善い社會を。

この問題を解決するものは
諸君の力の外にある筈はない。

ブルジョアは白い手に
プロレタリアは赤い手に

どちらも棍棒を握り給へ。

ではお前はどちらにする?

僕か?　僕は赤い手をしてゐる。

しかし僕はその外にも一本の手を見つめてゐる、——あの遠國に餓ゑ死したドストエフスキイの子供の手を。

註　ドストエフスキイの遺族は餓死せり。

生存競爭

優勝劣敗の原則に從ひ、

狐は鶏を嚙み殺した。

さて、どちらが優者だつたかしら?

立ち見

薄暗い興奮に滿ちた三階の上から
無數の目が舞臺へ注がれてゐる、
ずつと下にある、金色(こんじき)の舞臺へ。

金色(こんじき)の舞臺は封建時代を
長方形の窓に覗かせてゐる、

或は一度も存在しなかつた時代を。

薄暗い興奮に滿ちた三階の上から
彼の目も亦舞臺に注がれてゐる、
一日の勞働に疲れきつた十七歳の人夫の目さへ。

ああ、わが若いプロレタリアの一人も
やはり歌舞伎座の立ち見をしてゐる!

（昭和二年）
〔遺稿〕

飜譯

バルタザアル

——Anatole France——

一

其頃はギリシア人にサラシンとよばれたバルタザアルがエチオピアを治めてゐた。バルタザアルは色こそ黑いが、目鼻立の整つた男であつた。其上又素直なたましひと大樣な心とを持つた男であつた。

卽位の第三年行年二十二の時に王は國を出て、シバの女王バルキス聘問の途に上つた。追隨するのは魔法師のセムボビチスと宦官のメンケラとである。行列の中には七十五頭の駱駝がゐて、それが皆肉桂、沒藥、砂金、象牙などを負うてゐるのである。

みちみち、セムボビチスが王に遊星の力や寶石の德を敎へたり、メンケラが尊い祕文の歌を謠つて聞かせたりする。けれども王は餘りそんな物には氣を止めない。其代り沙漠のはてにちやんと坐つて耳を立ててゐるジヤツカルと云ふ獸を見て面白がつてゐるのである。

十二日の旅が了ると、漸く薔薇のにほひがし始めた。それからぢきに、シバの市をめぐつてゐる庭園が見え出した。一行は通りすがりに、花ざかりの柘榴の木の下で若い女が大ぜい踊つてゐ

るのに遇つた。

「踊は祈禱ぢや。」と魔法師のセムボビチスが云ふ。

「あのをな子どもはよい價に賣れるわ。」と宦官のメンケラが云ふ。

市へはひると、倉庫と工場とが何處迄もつづいてゐる。其中には久無量の商品が山の如く積んである。之が先づ一行の眼を驚かした。

それから長い間市を歩いた。市は路東や搬夫や驢馬や騾馬追ひで埋められてゐるのである。すると眼界が急に開けて、バルキスの王宮の大理石の壁と紫の帘幕と金の圓天井とが一行の眼の前に現れた。

シバの女王は一行を庭上に迎へた。香水の噴きあげが涼を搖つてゐる。噴きあげは眞珠の雨のやうなうつくしい音を立てて滴るのである。

ほほゑみながら、女王は一行の前に立つた。寶石をちりばめた長い袍を着てゐる。

バルタザアルは女王を見ると何うしたらいいのかわからなくなつた。女王が「夢」よりも愛らしく、「望」よりもうつくしく見えたのである。

「陛下、女王と都合のよい商業上の條約を結ぶのを御忘れなさいますな。」とセムボビチスが小聲で云ふ。

「陛下、御氣をつけなさいませ。女王は魔法を使うて男の愛を得るのぢやと云ふ事でございます。」とメンケラがつけ加へた。

それから魔法師と宦官とは伏拜をして退出した。
バルタザアルはバルキスと差向ひになつたので何か云はうと思つた。そこで口を開いて見たが一言も出ない。王は「默つてゐたら女王は怒るだらう」と思つた。
けれども女王は未だほほゑんでゐる。怒つて居る氣色は少しもない。先へ口をきつたのは女王である。聲は最も微妙な音樂よりも更に微妙であつた。
「よくいらつしやいました。わたくしの側へお坐り遊ばせ。」女王は白い光の様な、しなやかな指で、地に鋪いてある紫の褥を指ざすのである。バルタザアルは坐つて、長いため息をついて、それから兩手で褥をつかみながら、慌ててから云つた。
「陛下、寡人はこの二の褥が、あなたに仇をする二人の巨人であればよいと思ふ。寡人は卽座に其頸を扭切つて御眼にかけたい。」
かう云ひながら、王は力任せに兩手で褥を摑んだ。柔な布が音を立てて裂けると、雪のやうに白い羽毛が中から雲の如く飛び立つた。小さな羽が一つしばらく空にたゆたひながら、女王の胸の上に落ちた。
「バルタザアル陛下。陛下は何故巨人を殺さうと御意遊ばしますの。」顏を赤めながら、バルキスが云つた。
「寡人はあなたを愛してゐるからです。」
「陛下のお出でになる市の井戸にはよい水がございますか。お教へ下さいましな。」

「左様。」バルタザアルは少し驚いた。
「わたくしは、それから、エチオピアではどうして果物の砂糖漬を拵へるのだか知りたくて仕方がございませんの。」
王は何と答へていいかわからない。
「よう、お教へ下さいましよ。よう。」と女王はせがむのである。
そこで王は畢生の記憶力を絞つて、エチオピアの料理人が榲桲(マルメロ)を蜜の中へ入れて貯へる方法を敍述しようとした。ところが女王は、碌々聞きもしないで父急に話をかへた。
「陛下、陛下は御隣邦のカンデエケの女王に戀をしていらつしやるさうでございますね。其方はわたくしより美しうございますか。譃をおつきになつては嫌でございますよ。」
「あなたより美しい?」王はバルキスの足下に身を伏せて叫んだ。「そんな事がある訣はありません。」
「さう? それなら其方のお眼は? 其方のお口は? 其方のお色つやは? 其方のお喉は?」
女王は口を絶たない。
そこでバルタザアルは兩腕を女王の方へのばしながら、「寡人にあなたの頸に落ちた小さな羽を下さるなら、寡人は其代に寡人の王國の半を差上げる。あの賢いセムボビチスも宦官のメンケラも差上げる。」とかう叫んだ。
けれども女王は座を立つて、冴々した笑ひ聲と共ににげて仕舞つた。魔法師と宦官とがかへつ

て來た時に、王は何時になく深い物思ひに沈んでゐた。
「陛下、都合のよい商業上の條約をお結びになりましたか。」セムボビチスはかうたづねた。
其日、バルタザアルはシバの女王と晩餐を共にして、椰子の酒を飲んだ。一緒に食事をしてゐるとバルキスが、「それではカンデエケの女王が私ほど美しくないと云ふのはほんたうでございますか。」とたづねた。
「カンデエケの女王はまつ黑です。」とバルタザアルが答へた。
バルキスは意味ありげにバルタザアルを見た。
「黑くつても不器量とは限りませんわ。」
「バルキス！」
王はかう叫びながら、二言と云はずに女王を抱きしめた。王の脣に壓されて、女王の頭は力なくうしろへ下がるのである。けれども王は女王が泣いてゐるのを見て、甘つたるい、小さな聲で話しかけた。乳母が乳のみ兒にものを云ふ時のやうな口調である。王は女王を「わが小さき花」と云つたり「わが小さき星」と云つたりした。
「どうして泣くのです？　泣きやむ樣にするには何をしなければならないと云ふのです？　したい事があるなら仰有い。何でも聞いてあげます。」
女王は泣きやんだ。けれどもまだ思に沈んでゐる。王は長い間女王に其願を打明けてくれと願つた。其揚句にやつと女王がかう云つた。

「わたくしは怖と云ふ事を知りたいのでございます。」

バルタザアルには解し兼ねた様に見えた。そこで女王は是迄久しい間、何か未知らぬ危險に出あひたいと思つても、シバの人民と神々とが見張つてゐるので、遇ふ事が出來ないと云ふ事を話してくれた。

「それでも」と女王が云ふ。吐息を洩しながら云ふのである。「それでも夜中、わたくしは怖い嬉しいをののきが體に通ふのを待つて居るのでございます、おそろしさに髪が逆立つのを待つてゐるのでございます。『こはがる』と云ふ事はどんなに嬉しい事でございませう。」

女王は兩手を黒い王の頸にからんで、子供のせがむ様な聲でかう云つた。

「夜がまゐります。假装をして御一緒に市を歩きませう。おいやでございますか。」

王は同意した。女王はすぐに窓に走りよつて格子の間から下の十字街路を見下した。

「乞食が一人、王宮の壁によりかかつて横になつて居ります。あの乞食に陛下のお召しをおつかはしになつて、其代に駱駝毛の頭巾とあの男のしめてゐる荅布の帶とをお貰ひ遊ばせ。早くなさいまし。わたくしは自分で支度を致しますから。」

女王は嬉しさうに手を拍ちながら、饗宴の間を走り出た。バルタザアルは金で繍をしたリンネルの下衣を脱いで、乞食の衣を身に纏つた。どう見てもほん物の奴隷である。女王も亦たすぐに縫目のない青い衣をきて出て來た。

畑で働く女たちが着る着物である。

「さあ、まゐりませう。」
かう云つて、女王は狹い宮廊を、野へ出る小さな戶口の方へバルタザアルをひつぱつて行つた。

二

夜は暗かつた。さうして夜の暗につつまれて、バルキスが大へん小さく見えた。
女王はバルタザアルをある居酒屋へ伴れて行つた。宿無しや立ん坊が私窩子をひきずりこむ處である。二人は食卓について、いやな臭のするランプの光で不潔な空氣の中に浮き出してゐる人の皮をかぶつた汚い獸どもを見た。女一人、酒一杯の爭から拳骨とナイフで、嚙合ひが始まる。外の奴は外の奴で、鼾をかきながら、握り拳を拵へて食卓の下に寢そべつてゐる。居酒屋の亭主は又ズツクを重ねた上に橫になつて眼を光らせながら、いがみあふ醉たんぼを見張つてゐるのである。バルキスは鹽魚が天井の桷から下つてゐるのを見て、連れにかう云つた。
「わたくしは搗き葱をつけてあのおさかなを一つたべて見たうございますの。」
バルタザアルがいひつけた。けれども食べて仕舞つて見ると、王は金を持つて來るのを忘れたのに氣がついた。尤もこれは格別苦にならない。勘定を拂はず二人で拔け出すのも訣無しだと思つたからである。處が其段になると亭主が「折助め、ひきずりめ。」とわめき立てて、何うしても二人を通すまいとする。そこでバルタザアルは拳をかためて亭主を一なぐりに毆り仆した。之を見て醉たんぼが五六人、ナイフを拔いて、二人に向つて來た。けれどもバルタザアルが埃及葱を搗

くのに使ふ大きな杵を取つて、いきなり向つて來る奴を二人叩き仆したので、外の奴はしり込みをして手を出さない。女王はバルタザアルの陰にぴつたりくつついて小さくなつてゐる。そこで王は始終バルキスの肌の温みを感じる事が出來た。王をして勇往果敢ならしめた理由は蓋し茲にあつたのである。

　居酒屋の亭主の仲間は、側へは寄りつかずに、酒場の隅から油壺だの白蠟をひいた皿小鉢だの火のついたランプだのを抛りつける。仕舞には羊が丸ごと煮えてゐた大きな青銅の鍋さへも投げつけた。鍋は恐しい音を立てながら、バルタザアルの頭の上に落ちて腦天に傷を負はせた。流石のバルタザアルも暫の間は眼が眩んだ様に立つてゐたが、やがて渾身の力をあつめて其鍋を投げ返した。鍋の目方が十倍になる程の勢である。凄じい音を立てて鍋がぶつかると共に名狀し難い怒號と斷末魔の叫喚とが起つた。バルキスに怪我でもあつてはと、王は生殘つた奴の恐れに乘じて、女王を抱いたまま、人通りの無い側路へ逃げこんだ。路はまつ暗でしんとしてゐる。夜の靜けさが地をつつんでゐるのである。逃げて來た二人は、偶然其跡を追つて來た女や醉どれの罵る聲が暗の中に消えてゆくのを聞いた。間もなく聞えるのは唯血の滴る音ばかりになつた。血はバルタザアルの額からバルキスの胸に滴るのである。

「わたくしはあなたを愛して居りますわ。」とつぶやくやうに女王が云つた。

　雲を洩れる月の光で王は女王の半ば閉ぢた眼が水々しく、白くかがやいてゐるのを見た。二人は小川の水のない河床を、下つて行くのである。不意にバルタザアルが苔に足を滑らせた。緊く

抱きあつたまま、二人は地に仆れた。永遠に歡樂の淵に沈んで行くやうな氣がする。世界も二人の戀人には何處かへ行つて仕舞つた。夜があけて石間の窪地へ羚羊が水をのみに來た時にも、二人はまだ時間を忘れ、空間を忘れ、別々の體を持つて生れた事を忘れて、温柔の夢に耽つてゐたのである。

其時に通りがかりの盗人の一隊が、苔の上に寢てゐる戀人を見つけた。そして「奴等は金はないが、いい價に賣れるぜ。若くつて、面がいいからな。」と云つた。

そこで二人を取卷いてぐるぐる卷きにした。それから驢馬の尻尾にくくりつけて又路を急いだ。

エチオピア王は縛られながら「殺すぞ。」と云つて盗人を嚇したが、バルキスは冷い朝風に身をふるはせながら、未だ見ぬ物を見るやうに、唯ほほゑむばかりであつた。

おそろしい寂寞の中に、驢馬は蹄を鳴らしながら行つた。其中にそろそろ眞晝の暑さを感ずるやうになつた。日が高くなつてから、盗人たちは二人の俘の繩を解いて岩の陰に坐らせた。それから黴た麵麭を投げてくれた。バルキスはひもじさうに食べたが、バルタザアルは見向きもしない。

女王が哂つた。盗人の頭は之を何故哂ふと訊ねた。

「今にね、お前たちを皆絞罪にしてやるのだと思ふとをかしくなるのだよ。」

「へん、手前の様な下司の女の口から大層な熱をふくぜ。どうだい、いろ女。お前はてつきりあの黑奴のいい人に己達の首をしめさせようと云ふのだらう。」盗人の頭が大きな聲でかう云つた。

バルタザアルは之をきくと火のやうに怒つた。そして矢庭にとびかかつて其盗人の頸を摑んだ。絞め殺し兼ねない勢である。

けれども相手はナイフを拔いて、王の體へ柄元迄づぶりとつき立てた。可哀さうに王は地に轉んで、最後の一瞥をバルキスの上に投げると、其儘視力を失つて仕舞つたのである。

三

此時人馬劍戟の響が騷然として起つた。バルキスには家來のアブナアが護衞兵の先頭に立つて女王を救ひに來たのが見えた。家來は女王が行方知れずになつたのを夜の中に聞いてゐたのである。

アブナアは三度バルキスの足下に拜伏して、それから女王を迎へる爲に用意した輿を持つて來させた。其間に、護衞兵は盗人の手を悉く縛つてしまつた。

「お前さん、あたしはお前さん達を絞罪にすると云ひましたね。約束に譃はないでせう。」女王は盗人の頭に向つて、やさしい聲でかう云つた。

此時アブナアの側に立つてゐた魔法師のセムボビチスと宦官のメンケラとが、おそろしい叫び聲をあげた。王が腹にナイフを突立てられて身動きもせずに仆れてゐたからである。

二人はそつと王を抱き起した。藥物の學に精通してゐるセムボビチスは、王がまだ呼吸のある事がわかつた。そこでメンケラが王の脣から泡を拭つてゐる間に假に傷口を繃帶した。それから

二人で王を馬に括りつけ、靜かに女王の宮殿へつれて行つた。

バルタザアルは十五日の間、人事不省に陷つたまま横になつてゐた。王は譫言に止度なく、煮え立つてゐる大鍋と谷あひの苔の事とを云ふのである。絶えず大きな聲でバルキス、バルキスと叫ぶのである。やつと六十日目に王は眼を開いて床の側にゐるセムボビチスとメンケラとを見た。けれども女王は見えない。

「女王はどこにゐる？　女王は何をしてゐる？」

「陛下、女王はコマギイナの王と密室で謁見して居られます。」とメンケラが答へた。

「きつと商品を交易する契約を致して居るのでございませう。」と賢人のセムボビチスがつけ加へた。

「御機嫌を惡くなさいますな。陛下、御熱がまた上りますといけません。」

「己は女王に會はなければならぬ。」バルタザアルは大きな聲でかう云つた。さうして女王の部屋の方へと飛んで行つた。賢人も宦官も止める事が出來ない。女王の寢室に近づくと王は、コマギイナの王が來るのに遇つた。王は金に蔽はれて太陽の樣に輝いてゐたのである。バルキスはほほゑみながら眼を閉ぢて、紫の臥榻の上に横はつて居た。

「バルキス！　バルキス！」とバルタザアルが呼んだ。けれども女王はふり向きもしない。唯一刻でも夢を延ばさうとしてゐる樣に見える。バルタザアルは側へよつて女王の手をとつた。女王は素氣なく其手を振離した。そして「何か御用。」と云つた。

「何の用だかわからないのかい。」から云つて黒人の王は涙を流した。女王は瞳を王の上に轉じた。つれない、靜かな眼ざしである。王は女王が何も彼も忘れて居るのだと思つた。そこであの小川の夜を思出させようとした。けれども女王はから云ふのである。

「陛下、わたくしには陛下が何を仰有つていらつしやるのだか、まつたくわからないのでございますよ。陛下には椰子の酒が御體に合はないのでございませう。きつと夢を御覽になつたのでございますわ。」

「夢だ？」王は身悶えをして叫んだ。「お前の接吻が、己の體に創痕を殘したナイフが夢だと云ふのか。夢だと？」

女王は身を起した。袍についてゐる寶石が霰のやうな音を立てて、きらきらと光るのである。

「陛下、丁度議會が始まる時刻でございます。わたくしには陛下の御酒機嫌の夢を御解き申上げる暇がございません。少し御休息遊ばしませ。では失禮致します。」

バルタザアルは立つて居られないやうな氣がした。けれども此妖婦に弱みを見せてはならないと、根限りの力を盡して、自分の部屋へ駈けて歸つて來た。歸ると、王は卒倒した。そして傷口が又開いてしまつたのである。

四

王は三週間人事不省のまま橫はつてゐたが、二十二日目に人心地がついて、メンケラと共に看

病してゐたセムボビチスの手をとつた。王は泣きながらかう云ふのである。
「お前たち、お前たちは何と云ふ仕合せなのだらう。一人は年をとつてゐるし、一人は年よりも同じ事ではないか。けれども此世には幸福と云ふものは無い。皆悪いものばかりだ。何故と云ふがいい。戀も禍ならバルキスも不貞ではないか。」
「智慧は幸福を與へまする。」とセムボビチスは答へた。
「己もさうして見ようと思つてゐる。が一刻も早くエチオピアへ歸らうではないか。」バルタザアルはかう云つた。
王は愛するすべての物を失つたので、一身を智慧に捧げて魔法師の一人にならうと決心した。此決心は格別王に快樂を與へなかつたにしても、少くとも平靜な心だけは回復してくれたのである。王は毎夜、魔法師のセムボビチスと宦官のメンケラと共に王宮の露臺に坐して、地平線を遮つてそよりともせずに立つてゐる椰子の木を見つめたり、材木のやうにナイル河を下つて來る鰐の群を月あかりで見守つたりした。
「自然の美しさはたたへて倦む事を知りませぬ。」とセムボビチスが云つた。
「それは確だ。しかし自然には其外に、椰子の木や鰐よりも美しい物があるのだ。」王はバルキスの事を考へながらかう云つた。
けれ共年老つたセムボビチスが答へるには、
「勿論ナイル河の氾濫の様な現象もございます。併しそれは私がもう解釋致しました。人間は理

辨する爲につくられたものでございます。」

「人間は愛する爲に造られたものだ。世の中には解釋の出來ぬ事が澤山ある。」

歎息しながら、バルタザアルが云つた。

「それは何でございませうか。」とセムボビチスが問ふと、王はかう答へた。

「女の心がはりだ。」

けれどもバルタザアルは魔法師にならうと決心したから、塔を一つ建てた。其の頂からは多くの王國と無邊の天空とが望まれるのである。塔は煉瓦造りですべての塔の上に高く聳えてゐる。落成するには二年の日子を費した。

バルタザアルは此塔の建築に父王の全財寶を傾けたのであつた。毎夜王は塔の頂に登つた。其處で賢人セムボビチスの指導の下に天文の研究をするのである。

「天上の星宿は人間の運命を示すものでございます。」とセムボビチスが云つた。

「しかし其しるしはよく解らぬものだと云はねばなるまい。唯其研究をしてゐる間だけは己はバルキスの事を忘れてゐる。それが何よりの賜物だ。」と王が答へた。

魔法師は、是非知らねばならぬ眞理の一として、星は鋲のやうに蒼穹に固着してゐるものだと云ふことを敎へた。それから又空には五の遊星がある。ベルとメロダクとネボは陽で、シンとミリタは陰だと云ふ事を敎へた。魔法師は說明の步をすすめて、

「銀はシンに相當致します。シンとは月の事でございます。又鐵はメロダクに、錫はベルに相當

致します。」

バルタザアルはかう答へた。「己の望んでゐる知識と云ふのはそれだ。天文を研究してゐる間は、己はバルキスの事も思はなければ、其他の地上の塵事をも忘れてゐる。學問はよいものだ。學問は人間を考へさせずに置くものだ。セムボビチス、お前は己に知識を教へてくれるがよい。知識は人間の持つてゐるすべての感情を破壞するものだ。知識を教へてくれるならば、己はお前に萬民の瞻仰する名譽を與へてやる。」

之がセムボビチスの王に知識を教へた理由であつた。

魔法師は王にアストラムプシコスやゴブリアスやバザタスの道に從つて魔術の力を敎へた。バルタザアルは太陽の十二宮を研究すればする程、バルキスの事を忘れて行つた。メンケラは之を見て歡喜にみたされたのである。

「陛下、バルキス女王の金の袍の下には、山羊の樣な趾の裂けた足があるさうでございます。」

「誰がそんな馬鹿な事を云つた。」

「陛下、シバとエチオピアでは誰でも申す事でございます。バルキス女王の片脛は毛だらけで、片足は二つに裂けた黑い爪ぢやと申して居ります。」と宦官はかう答へるのである。

バルタザアルは肩を聳かした。バルキスが足でも脛でも外の女と變りなく、其上點の打ち所の無い程美しいのを知つてゐるからである。けれども其何でもない考があのやうに深く愛してゐた女の記憶を傷けた。王はバルキスの美しさが、何も知らない人々の想像では瑕物になつてゐると

云ふ事を考へると、今更のやうに女王が嫌になつた。事實は玉のやうに美しいにせよ、異類で通つてゐる女と關係したのだと思ふと、王ははげしい嫌惡の情を感ぜずにはゐられなかつた。二度とバルキスに逢ふ氣は起らない。バルタザアルは單純な心を持つてゐた。けれども戀と云ふものは複雜な情緒だつたのである。

其日から王は魔術にも星占術にも長足の進步をした。綿密な注意を拂つて星の交會を研究したり、セムボビチスと寸毫も變らず正確に星占圖を引いたりする。

「セムボビチス、お前は己の星占圖の眞だと云ふ事を首にかけてもうけ合ふ心算か。」から王が尋ねたことがある。

「陛下、學問に間違ひはございませぬ。けれども、學者は度々間違ひを致します。」と賢人セムボビチスが答へた。

バルタザアルはすぐれた官能を持つてゐた。そこで「眞なる物のみが聖である。聖なる物は人間の智を絕してゐる。人間は空しく眞理を探求するに過ぎない。けれども己は空に新しい星を發見した。美しい星である。生きてゐる樣にも思はれる。きらめく時はやさしく瞬く天上の眼のやうに見える。己はそれが呼んでゐる樣な氣がする。此星の下に生れるものは何と云ふ幸福だらう。セムボビチス、此愛らしい美しい星がどんなに己たちを照してゐるか見たがよい。」とかう云つた。

けれどもセムボビチスは星を見なかつた。それは見ようと思はなかつたからである。賢くしかも年老いた魔法師は新奇を好まない。

夜の沈默の中にバルタザアルは獨り繰返した。「此星の下に生れたものは何と云ふ幸福だらう。」

五

バルタザアル王がバルキスを愛さなくなつたと云ふ噂がエチオピアと近隣の王國とに播つた。其知らせがシバの國に傳はると、バルキスは裏切でもされた樣に腹を立てた。そしてシバの都に自分の國も忘れてうかうかと時を過してゐたコマギイナの王の所へ駈けて行つた。
「あなた、今あたしが何を聞いたか御存じ？　バルタザアルがもうあたしを愛さないのでございますとさ。」
「そんな事は何でもないぢやないか。己達はお互に愛しあつてゐるのだから。」とコマギイナの王が答へた。
「だつて、あなたはあの黑奴がわたくしを侮辱したとはお思ひになりませんの。」
「さうは思はないね。」
そこで女王は王をさんざん辱めて目通りを却けた。それから宰相に云ひつけて、エチオピアへ旅の支度をさせた。
「わたし達は今夜立つのだよ。日暮迄に支度が出來ないと、お前の首を斬るからさうお思ひ。」
けれども獨りになると女王はさめざめと泣きはじめた。
「わたくしはあの人を戀してゐる。あの人はもうわたしを思つてゐないのだ。それだのにわたし

はあの人を戀してゐる。」女王はかう云つてまごころから歎息をついたのであつた。
或夜バルタザアルが塔の上であの不思議な星を眺めてゐた時に、ふと眼を地上に轉ずると、蟻の群の樣に一條の黑い長い線が沙漠の遠いはてに逶迤としてうねつてゐるのが見えた。
蟻と見えた物が少しづつ大きくなつて、やがて王には多くの馬、多くの駱駝、多くの象を辨別する事が出來る樣になつた。
旅人の隊が市に近づいた時に、バルタザアルはシバの女王の護衛兵の黑い馬と夜目にも輝く偃月刀とを認めたのである。否、女王自身さへも認めたのである。王ははげしい懊惱を感じた。それは又女王に戀をし兼ねない樣な氣がしたからである。星は神祕な光明を放つて天上に輝いてゐる。下には紫と金との輿の上にバルキスが星のやうに小さくきらめいて見えるのである。
バルタザアルは恐しい力で女王の方に引寄せられるのを感じた。けれども王は猶必死の勇を鼓して頭をそむけた。そして眼を上げて再び星を眺めた。すると星がかう云ふのである。
「天なる神に光榮あれ。地なる善人に平和あれ。國王バルタザアルよ。一斗の沒藥をとりてわれに從へ。われ汝を導きて、今や廐の中、驢馬と牡牛との間に生れむとする幼な兒の足下に至らしめむ。
此幼な兒は王の中なる王なり。そは慰めを要するなべての者を慰めむとするなり。
主は汝を主の下に召給へり。バルタザアルよ。汝のたましひは汝の面の如く黑けれど、汝の心は幼な兒の心の如くけがれ無し。

主は汝を選み給へり。そは汝の苦しめるが故なり。主は汝に富と幸福と愛とを與へ給はむ。
主は汝に云ひ給はむ。『貧しきをよろこべ。そはまことの富なり』と。主は又汝に云ひ給はむ。
『まことの幸福は幸福をすつるにあり。われを愛せ。わが外なる一切の者を愛する勿れ。そはわれのみ愛なればなり』と。」
此言葉と共に神聖な平和が、光の洪水の如くバルタザアルの黒い面に落ちた。
バルタザアルは恍惚として星の云ふ事に耳を傾けた。王は自ら新に生れた人間になりつつあるのを感じたのである。
王の傍には身をひれ伏して、セムボビチスとメンケラとが面を石につけて禮拜してゐる。
バルキスはぢつとバルタザアルを見た。女王は、神の愛にみちた心には己の愛を容るるの餘地の無いのを知つたのである。色を變へて憤りながら、女王は一行に直にシバへ歸れと命を下した。
星が語り止むと共に、バルタザアルと其從者とは塔を下つた。それから一斗の沒藥を調へ、旅隊をつくつて、星の導く方に出發した。
一行は長い間、見もしらぬ國から國へと旅を續けた。其の間も星は常に一行の前に立つて導いてくれるのである。
或日、三の路が一になる處へ來ると、一行は二人の王が無數の行列を從へて來るのに出遇つた。其一人は若くて美しい顏をしてゐる。
それがバルタザアルに禮をしてから云ふのである。

「寡人の名はガスパアと云ふ。ユダヤのベツレヘムに生れようとしてゐる小兒へ贈物の黃金を持つて行く所なのだ。」
第一の王が代つて前へ出た。老人で白い髯が胸を掩つてゐる。
「寡人の名はメルキオルと云ふ。人間に眞理を敎へようとする尊い小兒に乳香を持つて行く所なのぢや。」
「寡人も卿等の行く所へ行かなければならぬ。寡人は樂欲に克つた其の爲に、星が寡人に言をかけてくれたのだ。」とバルタザアルが云つた。
「寡人は驕慢に克つた。寡人の召されたのは其爲ぢや。」とメルキオルが云つた。
「寡人は虐行に克つた。其故に寡人は卿等と共に行くのだ。」とガスパアが云つた。
かくして三人の賢人は共に旅を續けた。東方に見えた星は彼等に先立つて、遂に其小兒のゐる所へ來ると、其上に止つた。星の止つてゐるのを見て、彼等は我を忘れて喜んだのである。
家の中に入ると、彼等は小兒が母のマリヤと共にゐるのを見た。そこで身をひれ伏して、彼等は其幼な兒を禮拜した。それから其財寶をひらいて、金と乳香と沒藥とを捧げたのは、福音書に書いてある通りである。

（Mrs. John Lane の英譯より）

（大正三年一月十七日）

春の心臟

——W. B. Yeats——

一人の老人が瞑想に耽りながら、岩の多い岸に坐つてゐる。顔には鳥の脚のやうに肉がない。處はジル湖の大部を占める、榛(はしばみ)の林に掩はれた、平な島の岸である。其傍には顔の赭い十七歳の少年が、蠅を追つて靜な水の面をかすめる燕(つばくら)の群を見守りながら坐つてゐる。老人は古びた青天鵞絨を、少年は青い帽子に粗羅紗(フリイズ)の上衣をきて、頸には青い珠の數珠をかけてゐる。二人のうしろには、半ば木の間にかくれた、小さな修道院がある。女王に黨(くみ)した瀆神な人たちが、此僧院を一炬に附したのは、遠い昔の事である。今は此少年が再び燈心艸の屋根を葺いて、老人の殘年を安らかにすごすべきたよりとした。僧院の周圍にある庭園には、少年の鋤の入らなかつた爲であらう。僧人の植ゑのこした百合と薔薇とが、一面にひろがつて、今では四方から此廢園を侵して來る羊齒と一つになりながら、百合も薔薇も入り交つて、うつくしく咲いてゐるのである。百合と薔薇との彼方には、爪立つて歩む子供の姿さへ隱れんばかりに、羊齒が深く茂つてゐる。羊齒を越えると榛と小さな柘榴の木の林になる。

少年が云ふ、「御師匠様、此長い間の斷食と、日が暮れてから秦皮樹(とねりこ)の杖で、山の中や、榛と檞

との中に住む物を御招きになる戒行とは、あなたの御力には及ばない事でございます。暫くそのやうな勤行はおやめになさいまし。何故と申しますと、あなたの御手は何時よりも重く、私の肩にかかつて居りますし、あなたのおみ足は何時もより確でないやうでございます。人の話すのを聞きますと、あなたは鷲よりも年をとつてゐらつしやると申すではございませんか。それでもあなたは、老年にはつきものになつて居る休息と云ふものを、お求めなさらないのでございます。」

少年は熱心に情に激したやうに云ふ。恰も其心を瞬刻の言と思とにこめたやうに云ふのである。老人は遅々として迫らぬ如く答へる。恰も其心を遠き日と遠き行とに奪はれた如く答へるのである。

「己はお前に、己の休息する事の出來ない訣を話して聞かせよう。何も隠す必要はない。お前は此五年有餘の年月を、忠實に、時には愛情を以て己に仕へてくれた。己は其おかげで、何時の世にも賢哲を苦める落寞の情を、僅なりとも慰める事が出來たのだ。其上己の戒行の終と心願の成就とも、今は目の前に迫つてゐる。それ故お前は一層此訣を知る必要があるのだ。」

「御師匠様、私があなたにおたづね申したいやうに思召して下さいますな。火をおこして置きますのも、雨の洩らぬやうに茅葺を緊(かた)くして置きますのも、遠い林の中へ風に吹飛されませぬやうに茅葺を丈夫にして置きますのも、皆私の勤でございます。重い本を棚から下しますのも、精靈の名を連ねた大きな畫卷を其隅から擡げますのも、其間は純一な敬虔な心になつて居りますのも、亦皆私の勤でございます。そしてそのやうな事を致しますのが、私の智慧なのでございます。」

「お前は恐れてゐるな。」老人の眼はかう云つた。さうしてその眼は一瞬の怒に煌いた。

「時によりますと夜、あなたが秦皮樹の杖を持つて、本をよんでお出になりますと、私は戸の外に不思議な物を見ることがございます。灰色の巨人が榛の間に豕を驅つて行くかと思ひますと、大ぜいの矮人が紅い帽子をかぶつて、小さな白い牝牛を、其前に逐つて參ります。私は灰色の人ほど、矮人を怖くは思ひませぬ。それは矮人が此家に近づきますと、牛の乳を搾つて其泡立つた乳を飲み、それから踊りをはじめるからでございます。私は踊の好きな者の心には、邪のないのをよく知つて居ります。けれども私は矢張矮人が恐しうございます。それから私は、あの空から現れて、靜に其處此處をさまよひ歩く、丈の高い、腕の白い、女子たちも怖うございます。あの女子たちは百合や薔薇をつんで、花冠に致します。そしてあの魂のある髮の毛を左右に振つてゐるのでございます。其女子たちの互に話すのをききますと、その髮は女子たちの心が、動きますままに、或は四方に亂れたり、或は頭の上に集つたりするのだと申します。あの女子たちはやさしい、美しい顏をして居りますが、エンガスよ、フオビスの子よ、私はすべてあのやうな物が怖いのでございます。私は精靈の國の人が怖いのでございます。私はあのやうな物をひきよせる、祕術が怖いのでございます。」

「お前は古の神々を恐れるのか。あの神々が、戰のある每に、お前の祖先の槍を强うしてくれたのだぞ。お前はあの矮人たちを恐れるのか。あの矮人たちも昔は夜になると、湖の底から出て來て、お前の祖先の爐の上で、蟋蟀と共に唄つたのだぞ。此末世になつても、猶彼等は地上の美し

さを守つてゐるのだ。が、己は先づ他人が老年の眠に沈む時に、己一人斷食もすれば戒行もつとめて來た。其訣をお前に話して聞かさなければならぬ。それは今一度お前の扶を待たなくては、己の斷食も戒行も成就する事が出來ないからだ。お前が己の爲に此最後の事を爲遂げたなら、お前は此處を去つて、お前の小屋を作り、お前の畑を耕し、誰なりとも妻を迎へて、あの神々を忘れてしまふがよい。己は伯爵や騎士や扈從から贈られた金貨と銀貨とを悉く貯へて置いた。それは己が彼等を蠱眼(イヴルアイ)や戀に誘はうとする魔女共の呪詛から、守つてやつた爲に贈られたのだ。己は伯爵や騎士や扈從の妻から贈られた金貨と銀貨とを悉、貯へて置いた。それは己が精靈(ファリイ)の國の人たちが彼等の飼つてゐる家畜の乳房を干上らしてしまはぬやうに、彼等の攪乳器(チャアン)の中から牛酪を盜んでしまはぬやうに、守つてゐてやつたら贈られたのだ。己は又之を己の仕事の終る日の爲に貯へた。其終も間近くなつたからは、お前の家の棟木を強うする爲にも、お前の窖(あなぐら)や火食房(ファダア)を充たす爲にも、お前は金貨や銀貨に不足する事はない。己は、己の全生涯を通じて、生命の祕密を見出さうとしたのだ。己は己の若い日を幸福に暮さなかつた。それは己が、老年の來ると云ふ事を知つてゐたからであつた。この樣にして己は青年と壯年と老年とを通じて、この大いなる祕密を求むる爲に一身を捧げたのだ。己は數世紀に亙るべき悠久なる生命にあこがれて、八十春秋に終る人生を侮蔑したのだ。己は此國の古の神々の如くにならうと思つた。――いや己は今もならうと思つてゐる。己は若い時に己が西班牙の修道院で發見した希伯來の文書を讀んで、かう云ふ事を知つた。太陽が白羊宮に入つた後、獅子宮を過ぎる前に、不死の靈たちの歌を以て震へ動く

一瞬間がある。そして誰でも此瞬間を見出して、其歌に耳を傾けた者は必、不死の靈たちとひとしくなる事が出來る。己は愛蘭土にかへつてから、多くの精靈使ひと牛醫とに此瞬刻が何時であるかと云ふことを尋ねた。彼等は皆之を聞いてゐた。けれども砂時計の上に、其瞬刻を見出し得る者は一人もなかつた。其故に己は一身を魔術に捧げて、神々と精靈との扶けを得んが爲に生涯を斷食と戒行とに費した。そして今の精靈の一人は遂に其瞬刻の來らんとしてゐる事を己に告げてくれた。それは紅い帽子を冠つて、新らしい乳の泡で脣を白くしてゐる精靈が、己の耳に囁いてくれたのだ。明日黎明後の第一時間が終る少し前に、己は其瞬間を見出すのだ。それから、己は南の國へ行つて、橙の樹の間に大理石の宮殿を築き、勇士と麗人とに圍まれて、其處にわが永遠なる青春の王國に入らうと思ふ。けれど己が其歌を悉、聞くために、お前は多くの青葉の枝を運んで來て、それを己の室の戸口と窓とにつみ上げなければならぬ。――これは脣に新しい乳の泡をつけてゐる矮人が己に話してくれたのだ。――お前は又新らしい綠の燈心艸を床に敷き、更に卓子と燈心艸とを、僧人たちの薔薇と百合とで掩はなければならぬ。お前は之を今夜のうちにしなければならぬ。そして夜が明けたら、黎明後の第一時間の終に此處へ來て己に逢はなければならぬ。」

「其時にはすつかり若くなつてお出になりませうか。」

「己は其時になればお前のやうに若くなつてゐるつもりだ。けれども今は、まだ年をとつてもゐれば疲れてもゐる。お前は己を己の椅子と本との所へ、つれて行つてくれなければならぬ。」

少年はフオビスの子エンガスを其室に殘して、其魔術師の工夫した、異花の馨のやうなにほひを放つ燈火に火を點じると、直に森に行つて、榛からは青柴の枝を切り、小さな岩がなだらかな砂と粘土とに移つてゐる島の西岸からは、燈心艸の大きな束を刈り始めた。要るほどのものを切つた時には、もう日が暮れてゐた。そして、最後の束を家の中に運んで、再び薔薇と百合とをとりに返つて來た時には、既に夜半に近かつた。それはすべての物が寶石を刻んだ如くに見える、溫な、美しい夜の一つであつた。スルウスの森は遠く南に至るまで綠柱石を刻んだ如くに見え、それを映す水は亦青ざめた蛋白石の如く輝いてゐた。少年の集めてゐる薔薇は燦めく紅寶石の如く、百合はさながら眞珠の鈍い光りを帶びてゐた。あらゆるものが其上に不死なる何物かの姿を止めてゐるのである。ただかすかな炎を、影の中に絕えずともしてゐる螢のみが、生きてゐるやうに思はれる。人間の望みの如く何時かは死する如く思はれる。

少年は薔薇と百合とを兩腕に抱へきれぬほど集めた。そして螢をも其眞珠と紅寶石との中に押し入れて、それを老人のまどろんでゐる室の中へ運んで來た。少年は一抱へづつ薔薇と百合とを床の上と卓子の上とに置いた。それから靜に戶を閉ぢて、燈心艸の床の上に橫になつた。彼は此床の上に、傍に其選んだ妻を持ち、耳にその子供たちの笑ひ聲を聞き、平和な壯年の時代を夢みようとするのである。黎明に少年は起きて、砂時計を携へながら湖の岸に下りた。彼は小舟の中へパンと一瓶の葡萄酒とを入れた。それは彼の主人が悠久の途に上るのに際して、食物に不足しない爲であつた。それから彼は坐つて其第一時間が黎明を去るのを待つてゐた。次第に鳥が唄ひ

はじめた。かくて砂時計の最後の砂が落ちてゐた時に、忽ちすべてのものは其音樂を以て溢るるやうに見えた。これは其年の中の最も美しい、最も生命に滿ちた時期であつた。そして今や何人も其中に鼓動する春の心臟に耳を傾けることが出來たのである。少年は立つて、其主人を見に行つた。青葉の枝が戶口を塞いでゐる。彼はそれを押しのけて、はいらなければならなかつた。彼が室に入つた時に、日の光は環をなしてゆらめきながら、床の上や壁の上に、落ちてゐた。あらゆる物が柔な綠の影に滿たされてゐるのである。

けれ共、老人は薔薇と百合との束を、緊く抱きながら坐つてゐた。頭は胸の上に低れてゐる。左手の卓子の上に、金貨と銀貨とに滿ちた皮袋ののつてゐるのは、旅に上る爲であらう。右手には長い杖があつた。少年は老人にさはつてみた。けれ共彼は動かなかつた。またその手を上げて見た。けれ共それは冷かつた。そして又力なく垂れてしまつた。

「御師匠様は外の人のやうに、數珠を算へたり祈禱を唱へたりして、いらつしやればよかつたのだ。御師匠様のお尋ねなすつた物は、御心次第で御行狀や御一生の中にも見當つたものを。それを不死の靈たちなどの中に、お探しなさらなければよかつたのだ。ああ、さうだ。祈禱をなすつたり、數珠に接吻したりしていらつしやればよかつたのだ。」

少年は老人の古びた青天鵞絨を見た。そしてそれが薔薇と百合との花粉に掩はれてゐるのを見た。そして彼がそれを見てゐるうちに、窓につみ上げてある青葉の枝に止つてゐた一羽の鶇が唄ひ始めた。

（大正三年）

「ケルトの薄明」より

—W. B. Yeats—

I　寶石を食ふもの

平俗な名利の念を離れて、暫く人事の匆忙を忘れる時、自分は時として目ざめたるままの夢を見る事がある。或は糢糊たる、影の如き夢を見る。或は歴々として、我足下の大地の如く、個體の面目を備へたる夢を見る。其糢糊たると、歴々たるとを問はず、夢は常に其赴くが儘に赴いて、我意力は之に對して殆ど其一劃を變ずるの權能すらも有してゐない。夢は夢自らの意志を持つて居る。そして彼方此方と搖曳して、其意志の命ずるままに、われとわが姿を變へるのである。

一日、自分は隱々として、胸壁をめぐらした無底の大坑を見た。坑は漆々然として暗い。胸壁の上には無數の猿がゐて、掌に盛つた寶石を食つてゐる。寶石は或は綠に、或は紅に輝く。猿は飽く事なき饑を以て、ひたすらに食を貪るのである。

自分は、自分がケルト民族の地獄を見たのを知つた。己自身の地獄である。藝術の士の地獄である。自分は又、貪婪止むを知らざる渴望を以て、美なる物を求め奇異なる物を追ふ人々が、平和と形狀とを失つて、遂には無形と平俗とに墮する事を知つた。

自分は又他の人々の地獄をも見た事がある。其一つの中で、ピイタアと呼ばるる幽界の靈を見た。顔は黑く脣は白い。奇異なる二重の天秤の盤の上に、見えざる「影」の犯した惡行と、未行（いまだ）はれずして止んだ善行とを量つてゐるのである。自分には天秤の盤の上り下りが見えた。けれ共ピイタアの周圍に群つてゐる多くの「影」は遂に見る事が出來なかつた。

自分は其外に又、ありとあらゆる形をした惡魔の群を見た。魚のやうな形をしたのもゐる。蛇のやうな形をしたのもゐる。猿のやうな形をしたのもゐる。犬のやうな形をしたのもゐる。それが皆、自分の地獄にあつたやうな、暗い坑のまはりに坐つてゐる。そして坑の底からさす天空の、月のやうな反射をぢつと眺めてゐるのである。

II　三人のオービユルンと惡しき精靈等

幽暗の王國には、無量の貴重な物がある。地上に於けるよりも、更に多くの愛がある。地上に於けるよりも、更に多くの舞踏がある。そして地上に於けるよりも、更に多くの寶がある。太初、大塊は恐らく人間の望を充たす爲に造られたものであつた。けれ共、今は老來して滅落の底に沈んでゐる。我等が他界の寶を盜まうとしたにせよ、それが何の不思議であらう。

自分の友人の一人が或時、スリイヴ・リイグに近い村にゐた事がある。或日其男がカシエル・ノアと呼ぶ砦の邊を散歩してゐると、一人の男が砦へ來て地を掘り始めた。憔悴した顔をして、髪には櫛の目もはいつてゐない。衣服はぼろぼろに裂けて下つてゐる。自分の友人は、傍に仕事

をしてゐた農夫に向つて、あの男は誰だと訊ねた。「あれは三代目のオービユルンです。」と農夫が答へた。

それから五六日經つて、かう云ふ話をきいた。多くの寶が異教の行はれた昔から此砦の中に埋めてある。そして悪い精靈（フェアリイ）の一群が其寶を守つてゐる。けれ共何時か一度、其寶はオービユルンの一家に見出されて其物になる筈になつてゐる。がさうなる迄には三人のオービユルン家のものが、其寶を見出して、そして死ななければならない。二人は旣にさうした。第一のオービユルンは掘つて掘つて、遂に寶の入れてある石棺を一目見た。けれ共忽、大きな、毛深い犬のやうなものが山を下りて來て、彼をずたずたに引裂いてしまつた。寶は翌朝、再深く土中に隱れて又と人目にかからないやうになつて仕舞つた。それから第二のオービユルンが來て、又掘りに掘つた。とうとう櫃を見つけたので、蓋を擡けて中の黄金が光つてゐるのまで見た。けれ共次の瞬間に何か恐しい物を見たので、發狂すると其まま狂ひ死に死んでしまつた。そこで寶も亦土の下へ沈んでしまつたのである。第三のオービユルンは今掘つてゐる。彼は、自分が寶を見出す刹那に何か恐しい死方をすると云ふ事を信じてゐる。けれ共又呪が其時に破れて、それから永久にオービユルン家のものが昔に變らぬ富貴になると云ふ事も信じてゐる。

近隣の農夫の一人は嘗て此寶を見た。其農夫は草の中に兎の脛骨の落ちてゐるのを見つけた。取上げてみると穴が明いてゐる。其穴を覗いて見ると、地下に山積してある黄金が見えた。そこで、急いで家へ鋤をとりに歸つたが、又砦へ來てみると、今度は何うしてもさつきそれを見た場

所を見つける事が出來なかつた。

III　女王よ、矮人の女王よ、我來れり

或夜、一生を車馬の喧噪から遠ざかつて暮した中年の男と、其親戚の若い娘と、自分との三人が、遠い西の方の砂濱を歩いてゐた。此娘は野原の上、家畜の間に動く怪し火の一つをも見逃さない能力があると云はれてゐる女であつた。自分たちは「忘れやすき人々」の事を話した。「忘れやすき人々」とは時として、精靈(フエアリイ)の群に與へらるる名前である。話半に、自分たちは、精靈の出沒する場所として名高い、黑い岩の中にある淺い洞窟へ辿りついた。濡れた砂の上には、洞窟の反影が落ちてゐる。

自分は其娘に何か見えるかと聞いた。それは自分が「忘れやすき人々」に訊ねようと思ふ事を、澤山持つてゐたからである。娘は數分の間靜に立つてゐた。自分は彼女が、目ざめたる夢幻に陷つて行くのを見た。冷な海風も今は彼女を煩はさなければ、懶い海のつぶやきも今は彼女の注意を擾さない。

自分は其時、聲高く大なる精靈たちの名を呼んだ。彼女は直に岩の中で遠い音樂の聲が聞えると云つた。それから、がやがやと人の語りあふ聲や、恰も見えない樂人を賞讃するやうに、足を踏鳴らす音が、きこえると云つた。それ迄、もう一人のつれは、二三間はなれた所を、あちこちと步いてゐたが、此時自分たちの側を通りながら、急に、「何處か岩の向ふで、小供の笑ひ聲が聞

えるから、きつと邪魔がはいりませう。」とかう云つた。けれ共、此處には自分たちの外に誰もゐない。これは彼の上にも亦、此處の精靈が既に其魅力を投げ始めてゐたのである。

忽、彼の夢幻は娘によつて更につよめられた。彼女は、どつと人々の笑ふ聲が、樂聲や、ざやがやした話し聲や、足音にまじつて聞えはじめたと云つた。それから又、今は前よりも深くたつたやうに見える洞窟から流れ出る明い光と、紅の勝つた、さまざまの色の衣裳を着て、何やら分らぬ調子につれて踊つてゐる侏人の一群とが見えると云つた。

自分は彼女に侏人の女王を呼んで、自分たちと話しをさせるやう命じた。けれ共彼女の命令には何の答も來なかつた。そこで自分は自ら聲高く其語を繰り返した。すると忽、美しい、丈の高い女が洞窟から出て來た。此時には、自分も亦既に夢幻の一種に陷つてゐたのである。此夢幻の中にあつては容華と云ひ鏡花と云ふ一切のものが、嚴として犯す可からざる眞を體して來る。自分は、其女の黃金の飾がかすかにきらめくのも、黑ずんだ髮にさしてゐる、ほの暗い花も見ることが出來た。

自分は娘に、此丈の高い女王に話して其とも人たちを、本來の區劃に從つて、整列させるやうに云ひつけた。それは自分が、彼等を見度かつたからであつた。けれ共、矢張又前のやうに自分は此命令を自ら繰返さなければならなかつた。

すると、其もの共が洞窟から出て來た。そして、もし自分の記憶が誤らないならば、四隊を作つて整列した。其一隊は手に手に山秦皮樹の枝を持つてゐる。もう一隊は、蛇の鱗で造つたやう

に見える首環をかけてゐた。けれ共、彼等の衣裳は自分の記憶に止つてゐない。それは自分があのかがやく女に心を奪はれてゐたからである。

自分は彼女に、是等の洞窟が此近傍で最、精靈の出沒する所になつてゐるかどうかを、つれの娘に話してくれと願つた。彼女の脣は動いたが、答を聞きとる事は出來なかつた。自分は娘に手を、女王の胸に置けと命じた。さうしてからは、女王の云ふ事が娘によくわかつた。いや、此處が、最、精靈の集る所ではない。もう少し先きに、更に多く集る所がある。自分はそれから、精靈が人間をつれてゆくと云ふ事が眞實かどうか、眞實ならば、精靈がつれて行つた靈魂の代りに、他の靈魂を置いてゆくと云ふ事があるかどうかを訊ねた。「我らは形をかへる。」と云ふのが女王の答であつた。「あなた方の中で今までに人間に生まれた方がありますか。」「ある。」「來生以前にあなた方の中にゐたものを、私が知つてゐますか。」「知つてゐる。」「誰です。」「それを知る事はお前に許されてゐまい。」自分はそれから女王と其とも人とが、自分等の氣分の劇化（ドラマチゼエション）ではないかどうかと訊ねた。「女王にはわかりません、けれ共精靈は人間に似てゐますし、又大抵人間のする事をするものだと云ひます。」とかう自分の友だちが答へた。

自分は女王に、まだ色々な事を訊ねた。女王の性質をきいたり、宇宙に於ける彼女の目的をきいたりしたのである。けれ共それは唯彼女を苦めたやうに思はれた。

遂に女王は堪へきれなくなつたと見えて、砂の上にかう書いて見せた。――幻の砂である。足下に音を立ててゐる砂ではない。――「心づけよ、餘りに多くわれらが上を知らむと求むる勿れ。」

女王を怒らしたのを見て、自分は彼女の示してくれた事、話してくれた事を彼女に感謝した。そして又元の通り彼女を洞窟に歸らせた。暫してつれの娘が其夢幻から目ざめ、再此世の寒風を感じて、身ぶるひを始めた。

自分は是等の事を出來得る限り正確に話すのである。そして又話を傷けるやうな、何等の理論をも之に加へない。畢竟するにすべての理論は、憐む可きものである。そして自分の理論の大部は既に久しい以前に其存在を失つて仕舞つてゐる。

自分は、如何なる理論よりも、扉を啓く「象牙の門」の響を熱愛してゐる。そして又、其薔薇を撒く戸口をすぎたもののみが、「角の門」の遠きかがやきを捕へ得る事を信じてゐる。われらがもし、占星者リリイがウインゾアの森に發した叫び――REGINA, REGINA PIGMEORUM, VENI（女王よ。矮人の女王よ。我來れり。）の聲をあげ、彼と共に神は夢に幼な兒を訪れ給ふ事を記憶するなら、それは恐らくわれらの爲に幸を齎すであらう。丈高く、光まばゆき女王よ。願くは來りて、再、汝が黑める髮にかざせしほの暗き花を見せしめよ。

（大正三年四月）

クラリモンド

――Théophile Gautier――

兄弟、君はわしが戀をした事があるかと云ふのだね、それはある。が、わしの話は、妙な怖しい話で、わしもとつて六十六になるが、今でさへ成る可く、其記憶の灰を搔き廻さないやうにしてゐるのだ。君には、わしは何一つ分隔(わけへだ)てをしないが、話が話だけに、わしより經驗の淺い人に話しをするのは、實はどうかとも思つてゐる。何しろわしの話の顚末(いきさつ)は、餘り不思議なので、わしが其事件に現在關係してゐたとは自分ながらわしにも殆ど信じる事が出來ぬ。わしは三年以上、最も不可思議な、そして、最も奇怪な幻惑の犧牲になつてゐたのである。

　わしはみじめな田舍の僧侶をしてゐたが、毎夜、夢には――わしはそれが悉く夢ならむ事を祈つてゐるが――最も五慾に染んだ、呪ふ可き生活を、云はばサルダナパルスの生活を送つてゐた。そして或女をうつかり一目見たばかりに、危(あぶな)くわしの靈魂を地獄に墮す所だつたが、幸にも神の惠と、わしを加護してくれた聖徒の扶けとによつて、遂にわしは、わしに附いてゐた惡魔の手から免れる事が出來た。思へばわしの晝の生活は、長い間、全く性質の異つた夜の生活と、織り交ぜられてゐたのである。晝間は、わしは祈禱と神聖な事物とに忙しい神の僧侶であるが、夜、眼

をつぶる刹那からは、忽ち若い貴族になつてしまふ。女と犬と馬とにかけては、眼のない人間になつてしまふ。博奕も打つ、酒も飲む、罵詈をして神を馬鹿にもする。そして、曉方に眼を醒ますと、却つてわしがまだ眠つてゐて、唯、僧侶になつた夢をみてゐるやうな心持がする。此夢遊病者のやうな生活の或場面とか或語とかの回想は、未だにわしの心に殘つてゐて、わしはどうしてもそれを、わしの記憶から拭ひ去る事が出來ない。わしは、實際、わしの住居を離れた事のない人間なのだが、人はわしの話すのを聞くと、わしは浮世の歡樂に倦みはてて、信心深い、波瀾に富んだ生涯の結末を神に仕へて暮さうと云ふ沙門だと思ふかもしれない。此世紀の生活からさへ絶縁された、森の奧の、陰鬱な僧房に住みふるした學僧だとは思はぬかもしれない。

わしは戀をした。わしの樣に烈しく戀をした者は此世に一人もゐない程、戀をした——愚な、凄じい熱情を以て——わしは寧ろその熱情がわしの心臓をずたずたに裂かなかつたのを怪しむ位である。ああ如何なる夜——如何なる夜であつたらう。

わしは幼い時から、わしの天職の僧侶にあるのを感じてゐた。そこでわしの凡ての研究は、其理想を目標として積まれたのである。二十四歳までのわしの生活は云はば唯、長い今道心の生活であつた。神學を修めると共に、わしは引續いて凡ての下級の僧位を得た爲めに、先達たちは、若いながらわしが、最後の、恐しい位階を得る資格がある事を認めてくれた。そしてわしの授位式は、復活祭の一週中に定められたのである。

わしはそれ迄に世間を見た事がなかつた。わしの世界は大學と研究室との壁に限られてゐたの

である。尤も「女」と云ふ者があると云ふ事は、漠然と知つてゐたが、わしはわしの思想が此樣な題目の上に止る事を許さなかつたので、わしは全く純眞無垢な生活をつづけて來た。一年に二度、わしは、年をとつた體の弱い母親に逢ふが、此二回の訪問の中に、わしの外界に對する、凡ての關係が含まれてゐたのである。

わしは何も悔いる所はなかつた。わしは此最後の、避く可からざる一歩を投ずるのに、何等の躊躇もしなかつた。わしは唯、喜悅と短氣とに滿たされてゐたのである。婚禮をする戀人でも、わし以上の熱に浮かされた感激を以て、遲い時の步みを數へはしなかつたであらう。わしは眠りさへすれば、必ず祈禱を唱へてゐる夢を見た。僧侶になるより愉快な事はない。かうわしは信じてゐた。元より國王になる氣も、詩人になる氣も無い。わしの野心は、之以上に高い目標を認める事が出來なかつたのである。

わしが君に此樣な事を云ふのは、わしの身の上に起つた事が、順當に行けば決して起らなかつたと云ふ事を知らせる爲に云ふのである。そしてわしが、不可解な蠱惑の犧牲であつたと云ふ事を理解して貰ふ爲に云ふのである。

終に當日が來た。わしは、自分が空に浮んでゐるか、肩に翼が生えたかと疑はれる程、輕快な足取りで、敎會へ步いて行つた。わしには、自分が天使であるかの如く思はれた。そして、わしの同輩の眞面目な考深い顏をしてゐるのが、如何にも不思議に思はれた。それは敎會にも、わしの同輩が五六人ゐたからである。わしは一夜を祈禱に明した後なので、殆ど恍惚として一切を忘

れようとしてゐた。年をとつた僧正も、わしには「永遠」に倚つてゐる神の如くに見えた。わしは實に、殿堂の穹窿を透して、天國を望む事が出來たのである。

あの式の個條は君もよく知つてゐる――祓淨式、二つの形式の下に行はれる聖餐式、「改宗者の膏」を手の掌に塗る式、それから、僧正と一しよに恭しく、神の前へ犧牲を捧げる式……

ああ、ヨブが「輕忽なる者は、眼を以て聖約を爲さざる者なり」と云つたのは、眞理である。わしは不圖、其時迄下を向いてゐた頭を擧げて、わしの前にゐる女を見た。女はわしが觸れる事が出來るかと思はれる程、近くにゐる――が實際は、わしから可也離れて、內陣のずつと向うの欄干の邊にゐたのである――年も若く、容貌も驚くばかり美しい。そして立派な着物迄着てゐる。丁度、其時わしはわしの眼から、急に鱗が落ちたやうな氣がした。わしは、思ひがけなく明を得た盲人のやうな心持になつたのである。一瞬間以前には、光彩に溢れてゐた僧正も、急に何處かへ行つてしまへば、金色の燭架の上の蠟燭も、曉の星のやうに靑ざめて、わしには無限の闇黑が、全寺院を領したやうに思はれた。そして其美しい女は、其闇黑を背景に燦爛とした浮彫になつて、丁度天使の來迎を仰ぐやうに、わしの眼の前に現れて來た。彼女は、自ら輝いてゐるやうに、しかも光を受けてゐると云ふよりは、自ら光を放つてゐるやうに見えたのである。

わしは眼を閉ぢた。そして二度と再び眼をあけまいと決心した。わしは外界の事物の影響を蒙るのを恐れてゐた。それは、殆どわしが何をしてゐるか知らぬ內に、次第に蠱惑がわしの心を捕へてしまつたからである。

それにも關らず、忽ち又、わしは眼を開いた。何故と云へば、わしは睫毛の間からも、彼女が虹色にきらめきながら、太陽を凝視(みつめ)てゐる時に見えるやうな、紫の半陰影に圍まれてゐるのを見たからであつた。

　おお如何に彼女は美しかつたであらう。理想の美を天上に求めて、其處から聖母の眞像を地上に齎し歸つた大畫家でも、其輪廓に於ては到底、わしが今見てゐる、自然の美しい實在に及ぶ事は出來ない。詩人の詩、畫家の畫板も、彼女の概念を與へる事は、全く不可能である。彼女はどちらかと云へば、脊の高い方で、女神のやうな姿と態度とを備へてゐる。柔かな金髮は、眞中から分れて、顳顬(こめかみ)の上へ二つの漣立(さざなみた)つた黃金の河を流してゐた。丁度、王冠を頂いた女王のやうにも思はれる。すき透るばかりに靑白い額は又靜に眉毛の上に擴がつてゐる。其眉毛は不思議にも殆ど黑く、抑へ難い快活と光明とに溢れた海の如く靑い眼の感じを飽く迄もうつくしく強めてゐる。ああ、何と云ふ眼であらう。唯一度瞬けば一人の男の運命を定めるのも容易なのに相違ない。其眼はわしが是迄人間の眼に見る事の出來なかつた生命と光明と情熱と潤ひのある光とを持つてゐる。其眼は又絕えず矢のやうに光を射てゐる。そしてわしは確にその光がわしの心の臟に這入つたのを見た。わしは其眼に輝いてゐる火が、天上から來たのか、地獄から來たのかを知らない。けれども、それは確に其二つの中のどちらかから來たのである。彼女は天使か、さもなくば惡魔である。そして恐らくは又兩方であつたらしい。兎に角、彼女が我等の同じき母なるエヴの胎から生れた者で無い事は確である。それから此上もなく光澤(つや)のある眞珠の齒が、紅い微笑(ほほゑみ)の中にき

らめいて、脣の彎む毎に、小さな靨が、繻子のやうな薔薇色のうつくしい頰に現れる。そして鼻の孔の正しい輪廓にも、高貴な生れを示す嫋やかさと誇らしさとが見えてゐる。半ば露した肩の滑な光澤のある皮膚の上には、瑪瑙の光がゆらめき、大きな黄味のある眞珠を綴つた紐は――其色の美しさは殆ど彼女の頸に匹敵する――彼女の胸の上にたれてゐる。時々、彼女は物に驚いた蛇か孔雀のやうな、をのゝくやうな嬌態を作つて、首をもたげる。すると銀の格子細工のやうに頸を捲いてゐる高いレースの襞襟がをのゝくやうに動くのである。

　彼女は橙色がかつた眞紅の天鵞絨の袍を着てゐた。其黄鼬の毛皮のついた、廣い袖口からは、限りなく優しい、上品な手が、覗いてゐる。手は曙の女神の指のやうに、光を透すかと思はれる程、淸らかなのである。

　凡て是等の事柄を一つ一つわしは昨日の如く思ひ返す事が出來る。何故と云へば其時、わしはどぎまぎしながらも、何一つ見落すやうな事をしなかつたからである。ほんの微かな陰影でも、顋の先の一寸した黑い點でも、脣の隅の有るか無いかわからない程の生毛でも、額の上にある天鵞絨のやうな毛でも、頰の上に落ちる睫毛のゆらめく影でも、何でもわしは驚く程明瞭な知覺を以て、注意する事が出來た。

　そしてわしは凝視を續けながら、わしの心の中に、今迄鎖されてゐた門をわしが開いてゐるのを感じた。長い間塞がれてゐた孔が開けて、内部の見知らない景色を垣間見る事が出來たのである。人生は忽ち全く新奇な光景を、わしの前に示してくれた。わしは、今新しい世界と新しい事

物の秩序との中に生れて來るのであつた。
するとひ恐しい苦痛がわしの心を、赤熱した釘抜のやうに苛みはじめた。一分一分が、わしには一秒であると共に又一世紀であるやうに思はれた。此間に式が進んで、わしは間も無く、わしの新たに生れた欲望が烈しく、闖入しようとしてゐた世界から、遠くへ引離されてしまつたのである。わしは「否」と云ひたい所を「然り」と答へた。これはわしの心の中にある凡ての物がわしの靈魂に加へた舌の暴行に對して極力反抗したが其甲斐がなかつたのである。恐らく、多くの少女が斷然父母の定めた夫を拒絶する心算で、祭壇へ歩んで行くのにも關らず、一人として其目的を果す者の無いのも、かうした訣からに相違ない。そして多くの憐れな新參の僧侶が誓言を述べに呼ばれる時には、面帕をずたずたに裂く決心をしてゐながら、阿容々々とそれを取つてしまふのも亦確にかうした訣からである。かくして人は、其處にゐる凡ての人々に對して大なる誹謗の聲を擧げる事を敢てしないと共に、又多くの人々の期待を欺く事も敢てしない。凡ての夫等の人々の眼、凡ての夫等の人々の意志は、恰も鉛の如く君の上に蔽ひかかるやうに思はれるのである。それのみならず、規則も正しく定まつてゐれば、萬事が豫め、完全に整つて、しかも多少必然的に避ける事の出來ないやうに出來上つてゐるので、個人の意志は事情の重みに屈從して遂には全く破壞されてしまふのである。
式の進むのにつれて、其知らぬ美人の顏も表情が違つて來た。彼女の顏色は、最初は撫愛するやうな優しさを示してゐたが、今は恰もそれを理解させる事が出來ないのを、憎み且つ恥づるや

うな容子に變つたのである。

山をも拔くに足りる意志の力を奮つて、わしは、僧侶などにたり度く無いと叫ばうとした。が、どうしてもそれが出來なかつた。わしには舌が上顎に附着してしまつたやうな氣がしたのである。わしは否定の綴音を一つでも洩して、わしの意志を表白する事すら出來なかつた。わしは眼を醒めてゐながら、生命（いのち）にも關はる一語を叫ばうとして、魘されてゐる人間のやうな心持がした。

彼女もわしの殉教の苦しみを知つてゐるかの如くに見えた。そして恰も、わしを勵ますやうに、最も神聖な約束に滿ちた眼色（めつき）をして見せるのである。彼女の眼が詩なら彼女の一瞥は正に唄であつた。

彼女はわしにかう云つてくれる。「貴方（あなた）が私のものになる思召しなら、私は貴方を天國にゐる神樣より仕合せにしてあげます。天使たちでさへ貴方を嫉むでせう。貴方は貴方を包まうとする經帷子を裂いておしまひなさい。私は『美』です、『若さ』です、『生命』です。私の所へいらつしやい。エホバはその代りに何を貴方に呉れるのでせう？　私たちの命は夢のやうに、永久の接吻の中に流れて行きます。其聖杯の葡萄酒を投げすてておしまひなさい。さうすれば貴方は自由です。私は貴方を『知られざる島』へつれて行つてあげます。貴方は、銀の天幕の下で厚い金の床の上で、私の胸にお眠りなさい。私は貴方を愛してゐるのですから。私は貴方の神の手から貴方を離してしまひたいのですから。貴方の神の前では、大ぜいの尊い心性（こゝろね）の人たちが、愛の血を流します。けれども其血は神のゐる玉座の階（きざはし）にさへとどきません。」

是等の語は、わしの耳に無限の情味にあふれた諸律を作つて漂つて來るやうに思はれた。そして彼女の眼の聲は、恰も生きた脣がわしの生命の中に聲を吹き込んだやうに、わしの心臟の奧迄も反響した。わしはわし自らが神を捨てようとしてゐるのを感じた。が、わしの舌は猶機械的に式の凡ての形式を滿したので、わしはわしの胸が聖母の劍よりも銳い刃に貫かれるやうな氣がせずにはゐられなかつた。

凡ての事が圓滿に終を告げた。わしは遂に僧侶となつた。

此時、彼女の顏に現れた程、人間の顏に深く苦痛が描かれた事はない。婚約をした惡人が突然、己の傍に仆れて死んだのを見た少女、歿（なく）なつた子供の搖籃に倚懸つてゐる母親、樂園の門の閾に立つてゐるエヴ、寶は盜まれて其跡に石の置いてあるのを見た吝嗇な男、偶然其最も傑れた作の原稿を火の中に取落した詩人——是等の人々もかう迄絕望した、かう迄慰め難い顏附きをする事はないであらう。血と云ふ血は彼女の愛らしい顏を去つて、それが今は大理石よりも白くなつてゐる。彼女の美しい兩腕は、恰も其筋肉が急に弛緩したかのやうに、力なく兩脇に垂れてゐた。彼女は身を支へる柱を求めた。それは殆ど手足が彼女の自由にならなくなつてゐたからである。そしてわしも亦、敎會の戶口の方に蹌踉（よろめ）いて行つた。死のやうに靑ざめて、額にはカルヴアリイ（註。耶蘇の礫殺された地名）の汗よりも血のやうな汗を流しながら。わしはまるで縊り殺されてゐるやうな氣がした。さうかと思ふと又圓天井がわしの肩の上へ平になつて落ちて來るやうな氣もした。そして其圓天井の重量をわしの頭だけで支へてゐるやうな心持になつたのである。

わしが戸口を出ようとすると、忽に一つの手がわしの手を捕へた――女の手だ！　其時迄わしは一度も女の手に觸れたことは無かつた。其手はさながら蛇の皮膚のやうに冷い。しかも其感觸は、恰も熱鐵に烙れたやうに、わしの手首を燃やすのである。彼女だ。「不仕合せな方ね。何と云ふ事をなすつたの。」彼女は低い聲でかう叫ぶと、忽ち群集の中に隱れて見えなくなつてしまつた。

すると、老年の僧正がわしの傍を通り過ぎた。そして嚴格な、不審さうな一瞥をわしの上に投げた。わしは顏を赤くしたり、青くしたりした。と、同輩の一人がわしを憐れんで、手を執つてわしを外へ連れ出してくれた。恐らくわしが、人の扶けを借りずに、研究室へ歸るのは、到底出來なかつた事であらう。所が往來の角で、同輩の若い僧侶の注意が一寸他に向いてゐる隙を見て、空想的な衣裳を着た、黑人の扈從がわしの側へやつて來た。そして歩きながら、わしの手に小さな金縁の手帳を忍ばせると同時に、それを隱せと云ふ相圖をした。わしはそれを袖の中に隱した。そしてわしの部屋へ歸つて獨りになるまで、そこにしまつて置いた。それからわしは其捺金を開いた。中には紙が二枚はひつてゐる。其紙にはかう書いてあつた。「クラリモンド、コンチニの宮にて」當時わしは、世間の事に疎かつたので、クラリモンドの名さへ、有名だつたのにも關らず、耳にした事は一度も無かつた。そして又コンチニの宮が何處にあるかと云ふ事も、一向に分らなかつた。そこでわしは何度となく推量を逞くして見た。そして推量を重ねる度に想像は益〻方外になつたが、實際、わしは唯もう一度、彼女に逢へさへするならば、彼女が貴夫人であらうと、

娼婦であらうと、それは大して構ひもしなかつたのである。

わしの戀は、僅一時間程經つ内に、拔き難い根を下ろして了つた。わしは其戀を思切らうなどとは夢にも思はなかつた。わしには其樣な事は、全然不可能だとしか信じられなかつた。彼女を一目見たばかりにわしの性質は一變してしまつたのである。彼女は己の意志をわしの生命の中に吹き込んだ。そしてわしはもうわし自身の肉體の中に生活しないで、彼女の肉體の中に、しかも彼女の爲に生活するやうになつた。わしはわしの手の、彼女の觸れた所を接吻した。わしは何時間も續けさまに、彼女の名を繰返して呼んで見た。何時でも眼さへ閉ぢればわしには彼女の姿が其處にゐるやうにはつきりと見えるのである。わしは彼女が教會の玄關で、わしの耳に囁いた語を反覆した。「不仕合せな方ね。不仕合せな方ね。何と云ふ事をなすつたの。」わしは遂に、わしの現狀の恐しさを、判然と理解する事が出來た。わしの今、就いた職業の恐る可き嚴肅な制限が、明かにわしの前に暴露された。僧侶になる！——それは獨身でゐると云ふ事だ。決して戀をしないと云ふ事だ。性(セツクス)とか年齡とかの區別を構はなくなる事だ。凡ての美から背き去る事だ。眼を抉りぬいてしまふ事だ。永久に寺院とか僧院とかの冷い影の中に蹲つて隱れてゐる事だ。見知らない屍體に番をされてゐる事だ。死にかかつてゐる人間ばかり訪ねて行く事だ。そして己自身の死を悼む喪服として、何時でも黑い法衣を着てゐる事だ。云はば君の着物が、君の亡骸(なきがら)を納めた柩の棺布(かんきぬ)の役に立つのである。

わしは今更のやうにわしの生命が、丁度地下の湖のやうに、擴がりつつ溢れつつ水嵩を増して

來るのを感ずる。わしの血は烈しくわしの動脈をめぐつて躍り上る。わしの久しく埋伏してゐた青春は、千年に一度花の咲く蘆薈のやうに、生々と萌え出でて迅雷の響と共に花を開くのだ。

　クラリモンドに、再び逢ふ爲にわしは何をする事が出來るのだらう。わしは市にゐる人を一人も知らない。それでどうして研究室を去る口實が得られよう。わしは暫くでも此處に止つてゐられさうもない。唯、待ち遠いのは、わしが今後就任すべき牧師補の辭令ばかりである。わしは窓の鐵格子を取去らうと試みた。けれども窓は地を離れる事が遠いので、梯子が無ければ、かうして逃げるなどと云ふ事を考へるだけ愚だと氣がついた。其上、わしが夜に乘じて其處から逃げる事が出來たとしても、其後どうして錯雜した街路の迷宮を、わしの思ふ所へ辿り着く事が出來るだらう。多くの人々には全く無意味に思はれる是等の凡ての事が、昨日始めて戀に落ちた、經驗も無く金も無く、美しい着物も無い憐れな學僧のわしには、偉大な事のやうに思はれたのである。わしは戀の闇に迷ひながら、かう自ら叫んだ。「ああ、わしが僧侶で無かつたなら、わしは彼女を毎日見る事が出來るのだ、彼女の戀人にも彼女の夫にもなれるのだ。さうしたら此陰氣な法衣に包まれてゐる代りに、外の美しい騎士のやうに絹と天鵞絨の袍を着て、金の鎖を下げて、劍を佩いて、美しい鳥の羽毛を着けるやうになるだらう。わしの髮も、短く刈られてしまふ代りに、波立ちながら渦を卷いて、わしの頸の上に垂れるだらう。わしの髭にも美しく蠟を引くだらう。そしてわしは一廉の貴公子になれるのだ。」それを唯、祭壇の前で一時間を過した爲に、忙しく口にした五六の語の爲に、わしは永久に生きてゐる人間の仲間から追拂はれて、わし自身の墓石に封

をするやうな事になつたのだ。

わしは窓の所へ行つた。空は青く美しい。木は春の着物を着てゐる。わしには自然が皮肉な歡喜を飾り立ててゐるやうに見えた。廣場には人が一杯ゐる。行く者もある、來る者もある、若い遊冶郎と若い美人とが二人づつ、茂みや花園の方へぶらぶら歩いて行くのも見える。愉快らしい青年が、樂しさうに「將進酒」の疊句を唄ひ連れて歩むのも見える、——それは悉くわしの悲哀と寂寞とに辛い對照を造る愉悦、興奮、生活、活動の畫圖である。門の階段の上には若い母親が其子供と遊びながら坐つてゐる。母親は、未だ乳の滴が眞珠のやうについてゐる子供の小さな薔薇色の脣に接吻をする。そして子供をあやす爲に、唯女親のみが發明する事の出來る神聖な樣々のとぼけた事をする。父親は少し離れて佇みながら此愛すべき二人を眺めて微笑を洩してゐる。それが兩腕を組んだ中に其喜をぢつと胸に抱き締めてゐるやうに見える。わしは之を見てゐるのに忍びなかつた。そこで手荒く窓を鎖して床の上に荒々しく身を横へた。わしの心は恐しい憎惡と嫉妬とに滿ちてゐたのである。そして丁度十日も食を得なかつた虎のやうに、わしはわしの指を噛み、又わしの夜着を噛んだ。わしは、わしがどれ丈かうしてゐたか知らない。が、遂に痙攣的な怒りの發作に襲はれて、床の上で身を悶えてゐると急に僧院長、セラピオンが室の中央に直立して、ぢつとわしを注視してゐるのを認めた。わしは、慚愧に堪へないで、頭を胸の上に垂れた。そして兩手で顏を蔽つた。

「ロミュアルよ、わしの友達よ、何か恐しい事がお前の心の中に起つてゐるのではないか。」數分

の沈默の後にセラピオンが云つた。「お前のする事はわしには少しもわからない。お前は――何時もあのやうに靜な、あのやうに清淨な、あの様に溫和しい――お前が野獸のやうに部屋の中で怒り狂つてゐるではないか。氣をつけるがよい。兄弟よ――惡魔の暗示には耳を傾けぬがよい。惡魔は、お前が永久に身を主に捧げたのを憤つて、お前のまはりを餌食を探す狼のやうに追ひまはりながら、お前を捕へる最後の努力をしてゐるのぢや。征服されるよりは、祈禱を胸當てにして苦行を楯にして、勇士のやうに戰ふがよい。さうすれば必ずお前は惡魔に勝つ事が出來るだらう。徳行は、誘惑によつて試みられなければならない。黄金は試金者の手を經て一層純な物になる。恐れぬがよい、勇氣を落さぬやうにするがよい。最も忠實な、最も篤信な人々は、屢々このやうな誘惑を受けるものぢや。祈禱をしろ、斷食をしろ、默想に耽れ、さうすれば惡魔は自ら離れるだらう。」

　セラピオンの話は、わしを平常のわしに歸してくれた。そして少しはわしの氣も鎭つて來た。彼は又から云ふのである。「わしは、お前がヒーの牧師補を授けられた事を知らせに來たのぢや。其處を管理してゐた僧侶が死んだので、僧正は直にお前を任命するやうにわしにお命令なすつた。それだから、明日立てるやうに準備をするがよい。」わしは頭を垂れて之に答へた。そして僧院長はわしの部屋を出て行つた。わしは祈禱の書を開いて、祈りの句を讀み始めた。が、字が霞んで何の事が書いてあるのだか解らない。わしの頭腦の中では、觀念の絲が無暗にもつれ出して、遂にはわしの氣が附かぬ内に祈禱の書はわしの手から落ちてしまつた。

明日、彼女に二度と逢はずに立つて仕舞ふと云ふ事、わしと彼女との間に置いてある多くの障碍物に、更に新しい障碍物を加へると云ふ事、實に奇蹟による外は、彼女に逢ふ一切の望を失つてしまふと云ふ事！　ああ彼女に手紙を書くと云ふ事さへわしには不可能になるだらう。何故と云へば、わしは誰にわしの手紙を託(ことづ)けると云ふ事も出來ないからである。わしは僧侶と云ふ神聖な職務に就きながら誰にわしの心の中を打明ける事が出來るだらう。誰に信用を置く事が出來るだらう。

其時急にわしは、僧院長(アベ)セラピオンが惡魔の謀略(たくみ)を話した語を思出した。今度の事件の不可思議な性質、クラリモンドの人間以上の美しさ、彼女の眼の燐のやうな光、彼女の手の燃え立つばかりの感觸、彼女がわしを陷し入れた苦痛、わしの心に急激な變化が起ると共に、凡てのわしの信心が、一瞬の間に消えた事——是等の事は、其惡魔の仕業なのをよく證據立ててゐるではないか。恐らく繻子のやうな手は爪を隱した手袋であるかも知れぬ。是等の想像に愕(おどろか)されてわしは、再びわしの膝からすべつて、床の上に落ちてゐた祈禱の書を取り上げた。そして再び祈禱に身を捧げようとしたのである。

翌朝セラピオンはわしを伴れに來た。みすぼらしいわし達の鞄を負つて、騾馬が二頭、門口に待つてゐる。彼は一頭の騾馬に乘り、わしは他の一頭に跨つた。

わし達が此市(まち)の街路を過ぎて行つた時に、わしは、クラリモンドが見えはしないかと思つて、凡ての窻、凡ての露臺を注意して眺めて行つた。が、朝が早いので、市はまだ殆ど其眼を開かず

にゐた。わしはわし達が通りすぎる、凡ての家々の簾や窗掛を透視する事が出來たらばと思つた。セラピオンは、わしの此好奇心を確に、わしが建築を賞讃してゐるのだと思つたらしい。かういふのは彼が、わしにあたりを見る時間を與へる爲に、わざと騾馬の歩みを緩めたからである。遂にわし達は市門を過ぎて其向うにある小山を上りはじめた。其頂に着いた時である。わしはクラリモンドが住んでゐる土地の最後の一瞥を得ようと思つたので、その方に頭をめぐらして眺めると、大きな雲の影が、全市街の上に垂れかかつて、其靑と赤と反映する屋根の色が、一樣な其中間の色に沈んでゐた。其色の中を、其處此處から白い水沫のやうに、今し方點ぜられた火の煙が上へ上へと昇つて行く。と、不思議な光の關係で、まだ糢糊とした蒸氣に掩はれてゐる近所の建物よりは遙に高い家が一つ、太陽の寂しい光線で金色に染められながら、うつくしく輝いて聳えてゐる——實際は一里半も離れてゐるのであるが、其割には近く見える。そして其建築の細い點迄が明に辨別される——多くの小さな塔や高臺や窗枠や燕の尾の形をしてゐる風見迄が、はつきりと見えるのである。

「向うに見える、あの日の光をうけた宮殿は何でせう。」とわしはセラピオンに尋ねた。彼は眼に手をかざして、わしの指さす方を眺めた。と其答はかうであつた。

「コンチニの王が、娼婦クラリモンドに與へた、古の宮殿だや。あそこで怖しい事をしてゐるさうな。」

其刹那に、わしには實際か幻惑かはしらぬが、眞白な姿の露臺を歩いてゐるのが見えたやうに

想はれた。其姿は通りすがりに、瞬く間日に輝いたが、忽ち又何處かへ消えてしまつた。それがクラリモンドだつたのである。おお、彼女は知つてゐたであらうか。其時、熱を病んだやうに慌しく――わしを彼女から引離してしまふ嶮しい山路の上に、ああ、わしが再び下る事の出來ない山路の上に、彼女の住んでゐる宮殿を望見してゐたと云ふ事を。此主となつて、此處に來れとわしを招くやうに嘲笑ふ日の光に輝きながら、此方へ近づくかと思はれた宮殿を、望見してゐたと云ふ事を。疑も無く彼女はそれを知つてゐた。何故と云へば彼女の心は、わしの心と同情に繋がれてゐたので、其最も微かな情緒の時めきさへ感ずる事が出來たからである。其鋭い同情があればこそ、彼女は――寢衣を着てはゐたけれども――露臺の上に登つてくれたのである。

影は其宮殿をも掩つて、滿目の光景は、唯屋根と破風との動かざる海になつた。そして其中には一つの山のやうな波動が明かに見えてゐるのである。セラピオンは、騾馬を急がせた。わしの馬も同じ歩みを運んで、其後に從つた。そして其內に路が鋭く曲る所へ來たので、S――の市は終に、永久にわしの眼から隱されてしまつた。しかもわしは決して其處へ歸る事の出來ない運命を負つてゐるのである。退屈な三日の旅行の末に、陰鬱な田園の間を行き盡して、わしはわしの管轄すべき寺院の塔上にある風見の鷄が、森の上から覗いてゐるのを見た。それから茅葺の小家と小さな庭園とに挾まれた、曲りくねつた路を行くと、やがて、多少の莊嚴を保つた寺院の正面へ出た。五六の塑像で飾られた玄關、荒削りに砂岩を刻んだ圓柱、柱と同じ砂岩の控壁のついた瓦葺の屋根――唯これだけである。左手には雜草が脊高く生えた墓地があつて、其中央には大き

な鐵の十字架が聳えてゐる。右手には寺院の影になつて牧師の住む家がある。家は恐しく簡單で、しかも冷酷な清潔が保たれてゐる。わし達は垣の内へ入つた。五六匹の雛つ仔が地に撒いてある麥を啄んでゐる。見た所では、僧侶の黑い法衣にも慣れたやうに、少しもわし達を怖がらない。そして殆どわし達の歩く道を明けようとさへしない。と嗄がれた、喘息やみのやうな犬の聲が、耳に入つた。老いぼれた犬が、此方へ駈けて來るのである。それは先住の牧師の犬であつた。懶い、爛れた眼をして、灰色の毛を垂らしてゐる。そして犬の達し得る、極度の老年に達したと云ふあらゆる徴が現れてゐる。わしは犬をやさしく叩いてやつた。犬は直に云ふ可らざる滿足の容子を示してわし達と一しよに歩き始めた。以前の牧師の家庭を處理してゐた老婆も亦迎へに出て、わし達を小さな後の客間へ案内してから、わしが猶引續いて彼女を傭つてくれるかどうかと尋ねた。わしは、老婆も犬も雛つ仔も、先住が、死際に讓つた其老婆の一切の家具も、殘らず面倒を見てやると答へた。之を聞いて、老婆は我を忘れて喜んだ。そして僧院長セラピオンは、彼女が其僅な所有物に對して要求した金を、卽座に拂つてやつた。

　わしの就任がすむと間もなく、僧院長セラピオンは僧侶學校に歸つた。そこでわしは助力をして貰ふのにも、相談相手になつて貰ふのにも、自分より外に誰もゐなくなつた。そしてクラリモンドの思ひ出は、再びわしの心に浮び始めたのである。わしは、極力それを打消さうと努めたが、わしの默想には常に彼女の影が伴つて來た。或日暮にわしが黃楊の木にくぎられた路に沿うて、わしの家の小さな庭を散歩してゐると、氣のせゐか楡の木の陰にわしと同じやうに步いてゐる女

の姿が見え、しかも其楡の葉の間からは、海のやうな綠色の眼の輝いてゐるのが見えた。併しそれも幻に過ぎなかつたらしく、庭の向う側へまはつて見ると唯、砂地の路の上に足跡が一つ殘つてゐるばかりであつた——が其足跡は、子供の足跡かと思はれる程小さかつた。其癖庭は高い塀に圍まれてゐるのである。わしは庭の隅と云ふ隅を探して見たが、誰一人見附からない。わしにはこれが不思議に思はれてならなかつたが、其後起つた奇怪な事に比べると、之などは全く何でも無かつたのである。

滿一年間、わしはわしの職務上の義務を、最も嚴格な精密さを以て果しながら、祈禱をしたり、斷食をしたり、說敎をしたり、病人に靈魂の扶けを與へたり、又屢〻わし自身が其日の生活にも差支へる位、施しをしたりして暮してゐた。しかしわしは心の中にはげしい焦立しさを感じてゐた。そして天惠の泉も、わしには湧かなくなつてしまつたやうに思はれた。わしは神聖な使命を充す事から生れる幸福を味ふ事が出來なかつた。わしの思想は遠く漂つて、唯クラリモンドの語のみがわれ知らず繰返へす疊句のやうに、常にわしの脣に上るのである。おお、兄弟よ、よく考へて見てくれるがいい。唯一度、眼をあげて一人の女を見た爲に、一見些細な過失の爲に、わしは數年間、最もみじめな苦痛の犧牲になつてゐたのだ。そしてわしの生活の幸福は永久に失はれてしまつたのだ。

わしは、絕えずわしの心に繰りかへされた勝利と敗北を、しかも常に一層恐しい墮落にわしを陷れた勝利と敗北を此上話すのは止めようと思ふ。そして直にわしの物語の事實に話を進めよう

と思ふ。或夜、わしの戸口の呼鈴が、長く荒々しく鳴らされた。家事まかなひの老婆が起きて、戸を開けると、見知らぬ人が立つてゐる。バルバラ(老婆の名)の角燈の光の中に、青銅のやうな顔をして、立派な外國の裝ひをした男の姿が、帶に短刀をさげて、佇んでゐるのである。老婆は、初め恐しい氣がした。が、其見知らぬ人は、彼女が安心するやうに用事を告げて、わしの奉じてゐる神聖な職務に關して、至急わしに會ひたいと云ふことを述べた。バルバラは丁度わしが引込んだばかりの二階へ、其男を案內した。彼は彼の女主人になる或貴夫人が、今息を引取るばかりのところで、是非牧師に來て貰ひたがつてゐると云ふことを話した。そこでわしは、何時でも彼と一しよに行くと答へた。そして臨終と塗式に必要な、神聖な品々を携へて、大急ぎで二階を下りた。と、門の外には夜のやうに黑い馬が二匹、焦立たしげに土を蹴つて鼻孔から吐く煙のやうな水蒸氣の長い流に、胸をかくしながら、立つてゐる。其男は鐙を執つて、わしの馬に乘るのを扶けて吳れた。それから彼は唯、手を鞍の前輪へかけた許りで、ひらりともう一頭の馬にとび乘ると、膝で馬の橫腹を締めて手綱を緩めた。と、馬は忽ち矢の如く走り出でたのである。伴の馬に遲れまいと、其男が手綱を執つてゐたわしの馬も、宙を飛んで奔馳する。わし達はひたすらに途を急いだ。大地はわしたちの下で、靑ざめた灰色の長い縞のやうに、後へ後へ流れて行く。木立の黑い影畫は、打破られた軍隊のやうに、わしたちの右左を、逃げて行くやうに見える。わし達が暗い森を通りぬけた時には、わしは冷い闇の中に迷信じみた恐怖から、わしの肉がむづつくのを感じた。わし達の馬の蹄鐵に打たれて、石高路から迸る明い火花の雨は、わし達の後に火光の

徑(こみち)の如く輝いてゐた。此眞夜中に、わし達二人を見た人があつたなら――わしの案內者とわしと――その人は二人の幽鬼が夢魔に騎して走るのだと思つたに相違ない。狐火は時々、路の行く手に明滅して、夜鳥は怖しげに、彼方の森の奧で啼き叫んでゐる。其森には、時として山猫の燐火を放つ眼がきらめくのさへ見えるのである。馬の鬣は益々亂れ、汗は太腹に滴つて、つく息も急に又苦しげに鼻孔を洩れるが、案內の男は馬の步みの緩むのを見ると、殆ど人間とは思はれぬやうな、不思議な喉音を上げて、叱咤する。すると馬は又、元のやうに無二無三に狂奔するのである。遂に旋風のやうな競走が起つた。多くの輝いた點が開(あ)いてゐる大きな黑い物が、急に眼の前に聳えた。わし達の馬の蹄は、丈夫な木造の刎橋の上に前よりも聲高く鳴りひびいて、二人はやがて二つの巨大な塔の間に口を開(ひら)いた大きな穹窿形の拱廊に馬をすすめた。城廓の中は確に一種の大きな興奮に支配されてゐた。廣庭には松明を持つた從者が縱橫に馳け違ひ、頭の上には又燈火の光が階段から階段へ上下してゐた。わしは此尨大な建築の形を、混雜の中に瞥見する事が出來たが――丸柱や迫持(せりもち)の廊下や階段や段梯(だんばしご)や――それは誠に魔法の國にもふさはしい、堂々とした豪奢の趣致と楚々とした優麗の風格とを倂せ有してゐるものであつた。すると黑人の扈從が――以前にクラリモンドの手帳を持つて來た男である、わしはすぐにそれと氣が附いた――わしの馬から下りるのを手傳ひに來た。それから、黑天鵞絨の着物を着て首に金鎖をかけた家令も、象牙の杖によりながらわしに會ひに出て來た。見ると大きな涙の滴が眼から落ちて、頰と白い髯の上に流れてゐる。

「間に合ひませんでした。」と彼は悲しさうに首を振りながら叫んだ。「間に合ひませんでした。靈魂を救ふ事はお出來になりませんでも、せめてどうかいらしつてお通夜をなすつて下さいまし。」彼はわしの手を執つて、死者の室へ案内した。わしの泣いたのも決して此老人に劣らなかつたであらう。それは死者が、クラリモンド其人、わしがあのやうに深くあのやうに烈しく戀してゐたクラリモンド其人だつた事を知つたからである。寢床の足の方には祈禱机が置いてある。

青銅の酒盞に明滅する青い光は、室内を朦朧とさした、深祕な光にみたして、唯暗い中に家具や軒蛇腹の突出した部分を、其處此處に時々明く浮き出さしてゐる。卓子の上にある、彫刻を施した甕の中には、一輪の素枯れた白薔薇が生けてある。其葩は――一つだけ殘つてゐたが――皆、香のいい涙のやうに落ち散つて、甕の下にこぼれてゐる。壞れた黑い面と扇と其外肘掛椅子の上に置いてある樣々な扮裝の道具を見ても、「死」が急に何の案内もなく此華麗を極めた城廓に闖入した事がわかるであらう。わしは寢床の上を見るに忍びないので跪いたまま「死者の爲の讚美歌」を誦し始めた。そして烈しい熱情を以て、神がわしと彼女の記憶との間に墳墓を造つて、今後わしが祈禱をする時にも彼女の名を永久に「死」によつて淨められた名として、口にし得るやうにして下すつた事を感謝した。けれ共、わしの熱情は次第に弱くなつて、わしは思はずある夢幻の中に陷つてしまつた。一體其室は、死人の室らしい所を少しも備へてゐない室であつた。わしが通夜の間に嗅ぎなれた不快な屍體の匂の代りに、ものうい東洋の香料の匂が――わしは艶いた女の匂がどんなものだか知らないのである――柔に生溫い空氣の中に漂つてゐる。青ざめた光は屍體

の傍に黄色く瞬く通夜の蠟燭の代りと云ふよりは、寧ろ淫惑な歡樂の爲にわざと作られた薄明りの如く思はれる。わしは、クラリモンドが永久にわしから失はれた瞬間に再び彼女を見る事が出來た、不思議な運命をつくづくと考へて見た。そして、殘り惜しい懊惱の吐息がわしの胸を洩れて出た。其時、わしにはわしの後で誰かが亦吐息をしたやうに思はれた。で、振返つて見たがそれは、唯反響にすぎなかつた。けれ共、其刹那に、わしの眼は其時迄見るのを避けてゐた死者の寢床の上に落ちた。刺繡の大きな花で飾られた、赤いダマスコの帳(とばり)が、黄金の房にくくられて、うつくしい屍體を見せてくれるのである。屍體は長々と横になつて、手を胸の上に合せてゐる、眩ゆいやうな白いリンネルの褻衣(したぎ)に掩はれたのも、掛衣(かけぎぬ)の陰鬱な紫と、著しい對照を作つて、しかも地合(ぢあひ)のしなやかさが、彼女の肉體のやさしい形を何一つ隱す所もなく、見る人の眼を、美しい輪廓の曲線に從はしめる――白鳥の首の如くになよやかな――其輪廓の持つてゐる豐麗な、優しさは「死」すらも奪ふ事が出來なかつたのである。彼女はさながら或巧妙な彫刻家が女王の墳墓の上に据ゑる爲に造り上げた雪花石膏の像か、或は又恐らくは、眠つてゐる少女の上に聲もない雪が一點の汚れもない掛衣(かけぎぬ)を織りでもしたかの如く思はれた。

わしはもう、力めて祈禱の態度を支へてゐる事が出來なくなつた。閨房の空氣はわしを醉はせ、半ば凋んだ薔薇の花の熱を病んだやうな匂はわしの頭腦に滲み込んだ。わしは休みなく彼方此方と歩きながら、歩を轉ずる毎に、屍體をのせた寢床の前に佇んで、其透いて見えさうな經帷子の下に、横はつてゐる優しい屍(しかばね)の事を、何と云ふ事もなく想ひはじめた。わしの頭腦には、熱した

空想が徂徠して來たのである。わしは彼女が恐らく、本當に死んだのではあるまいと思つた。唯わしを此城へ呼び寄せて、其戀を打明ける爲に、わざと死を裝つてゐるのだと思つた。そしてわしは、同時に彼女の足が、白い掛衣(かけぎぬ)の下で動いて、少しく捲いてある經帷子の長い眞直な線を亂したとさへ思つた。

それからわしはかう自問した。「これが本當にクラリモンドであらうか、之が彼女だと云ふ何んな證據があるだらうか。あの黑人の扈從は外の貴夫人に傭はれたのではないだらうか。この樣に獨りで苦しがつてゐては、屹度わしは氣が狂ふのに相違ない。」けれども、わしの心臟ははげしく動悸を打ちながら、かう答へる。「之が彼女だ。確に彼女だ。」わしは再び寢臺に近づいた。そして再び注意して、疑はしい屍體を凝視した。ああ、わしは之も白狀しなければならないであらうか。其すぐれた肉體の形の完全さは、「死」の影で淨められてゐるとは云へ、常よりも更に淫惑な感じを起さしめた。そして又、其安息が何人も「死」とは思はぬほど、眠りによく似てゐるのである。わしは、此處へ葬儀を勤めに來たと云ふ事も忘れてしまつた。いや寧ろ花嫁の閨へはひつた花婿だと想像した。花嫁はしとやかに、美しい顏を隱して、羞しさに姿を殘る隈なく掩はうとしてゐるのである。わしは胸も裂けむ許りの悲しみを抱きながら、しかも物狂はしい希望にそそられて、恐怖と快樂とにをののきながら、彼女の上に身をかがめて、經帷子の端に手をかけた。そして、彼女の眠を醒ますまいと息をひそめながら其經帷子を上げて見た。わしの動脈は狂ほしく鼓動して顳顬(こめかみ)のあたりには蛇の聲に似た音が聞えるかとさへ疑はれる。汗が額から瀧の如く滴る

のも、丁度わしが大きな大理石の板を擡げでもしたやうに思はれるのである。そして其處には實にクラリモンドが横はつてゐた。わしの得度(とくど)の日に見たのと寸分も違ひなく横はつてゐた。彼女の姿は其時と變りなく美しい。「死」も彼女にとつては、最後の嬌態に過ぎないのである。青ざめた頬、やや色の褪せた脣の肉色、其白い皮膚に黑い房をうき出させる長い睫毛、其等の物が皆彼女に悲しい貞淑と内心の苦痛との云ふ可らざる妖艶な容子を與へてゐる。未だ小さな青い花で編んである長い亂れ髮は、彼女の頭にまばゆい枕を造つて、其房々した卷き毛は、裸身(はだかみ)の肩を掩つてゐる。聖麵よりも淸く、淨らかな美しい手は組合せたまま、淸淨な安息と無言の祈禱とを捧げるやうに、胸の上にのつてゐる。未だ眞珠の腕輪も外さない、裸身(はだかみ)の腕が象牙のやうにつやつやと、圓(まと)かな肉附きを見せてゐる艶めかしさに——死後さへも猶——之のみが、反抗の意を示してゐるのである。わしは長い間、無言の默想に沈んでゐた。すると、見てゐれば見てゐる程、わしには、「生」がこの美しい肉體を永久に去つたと云ふ事が信じられなくなつて來た。所が燈火(ともしび)の光の反射かそれはわしにも解らないが、(彼女はぢつと動かずにはゐるけれど)其命の無い青ざめた皮膚の下では、再び血液の循環が始つたやうに思はれた。わしは輕くわしの手を、彼女の腕の上に置いて見た。勿論それは冷かつた。が、あの寺院の玄關で、わしの手に觸れた時よりも冷たくはないのである。わしは再び彼女の上にうつむいて、溫かな淚の露に彼女の頬を沾した。ああ、わしはぢつと彼女を見守りながら、如何なる絕望、自棄の苦悶に、如何なる不言の懊惱に堪へなければならなかつたであらう。わしは徒にわしの生命を一塊の物質に集めてそれを彼女に與へたいと思

つた。そして彼女の冷かな肉體に、わしを苛む情火を吹き入れたいと思つた。が夜は次第に更けて行つた。わしは永別の瞬間が近づくのを感じながらも、猶わが唯一の戀人なる彼女の傍に、接吻を印してゆく最後の悲しい快樂を、棄てる事が出來なかつた……と奇蹟なるかた、かすかな呼吸はわしの呼吸に交つて、クラリモンドの口は、わしの熱情に溢れた接吻に應じたのである。彼女の眼は開いて、先きの日の輝きを示してくれる。しかも長い吐息をついて、組んでゐた腕をほどくと、溢るるばかりの悦びを顏に現して、わしの頸を抱きながら「ああ、貴方ね、ロミュアル。」と呟いてくれる。竪琴の最後の響のやうな、懶い美しい聲である。「何が悲しいの。餘り長い間貴方を待つてゐたから死んだのだわ。けれど私たちはもう結婚の約束をしたのだわね。もう貴方に會ひにも行かれるわ。左様なら。ロミュアル、左様なら。私は貴方に戀をしてゐるのよ。私の話したい事はそれだけなの。貴方の接吻で一寸の間かへつて來た命を、貴方に返してあげませうね。また直にお目にかかつてよ。」

彼女の頭は垂れた。腕は猶、わしを引止めるやうに、わしを抱いてゐる。其時凄じい旋風が急に窻を打つて、室の中へはひつた。すると白薔薇の最後の一瓣は暫く莖の先で、胡蝶の羽の如くふるへてゐたが、それから莖を離れて、クラリモンドの魂をのせたまま、明けはなした窻から外へ翻つて行つてしまつた。と、燈火が消えた。そしてわしは、美しい死人の胸の上へ氣を失つて倒れてしまつたのである。

正氣に歸つて見ると、わしは牧師館の小さな室の中にある寢臺の上へ横になつてゐた。先住の

老犬が、夜着の外へ垂れたわしの手を舐めてゐる。バルバラは老年と不安とでふるへながら、抽斗をあけたりしめたり、杯の中へ粉薬を入れたりして、忙しく室の中を歩きまはつてゐる。が、わしが眼を開いたのを見ると彼女が喜びの叫を上げれば、犬も吠え立てて尾を掉つた。けれどもわしは未だ疲れてゐたので、一口もきく事も出來なければ、身を動かす事も出來なかつた。其後はわしは、わしが微かな呼吸の外は生きてゐる樣子もなく、此儘で三日間寢てゐたと云ふ事を知つた。其三日間はわしは殆ど何事も記憶してゐない。バルバラは、わしが牧師館を出た夜に訪ねて來たのと同じ銅色の顏の男が、次の朝、戸をしめた輿にのせてわしを連れて來て、それから直に行つてしまつたと云ふ事を聞いた。わしがきれぎれな考を思合せる事が出來るやうになつた時に、わしは其恐しい夜の凡ての出來事を心の中に思ひ浮べた。わしは初め或魔術的な幻惑の犧牲になつたのだと思つたが、間も無く夫れでも眞實な適確な事實とする事の出來る他の事情を思出したので、此考を許す事も出來なくなつて來た。わしは夢を見てゐたのだとは信じられない。何故と云へばバルバラもわしと同じやうに、二頭の黑馬をつれた見知らぬ男を見て、其男の形なり風采なりを、正確に細かい所迄述べる事が出來たからである。其癖、わしがクラリモンドに再會した城の樣子に合ふやうな城の、此近所にある事を知つてゐる者も一人も無い。

或朝、わしはわしの室で僧院長セラピオンに會つた。バルバラもわしの病氣だと云ふ事を告げたので、急いで見舞に來てくれたのである。急いで來てくれたのは、彼から云へばわしに對する愛情ある興味を證據立ててゐるのであるが、其訪問は、當然わしの感ずべき愉快さへも與へてく

れなかつた。僧院長セラピオンはその凝視の中に、何處となく洞察を恣にするやうな、審問をしてゐるやうな樣子を備へてゐるので、わしは非常に間が惡かつた。彼と對ひあつてゐる丈でも、わしは當惑と有罪の感じを去る事が出來ないのである。一日見て彼は、わしの心中の苦痛を察したのに違ひない。わしは實に此洞察力の爲に彼を憎んだのであつた。

彼は僞善者のやうな優しい調子でわしの健康を尋ねながら、絶えず其獅子のやうな黄色い大きな眼をわしの上に注いで、測深錘のやうな透視をわしの靈魂の中に投入れるのである。それから彼は、わしがどう云ふ方針で此教會區を管轄するか、ここへ來てから幸福かどうか、教務の餘暇をどうして暮すか、此處に住んでゐる人々と大勢近附きになつたか、何を讀むのが一番好きかと云ふやうな事を、數知れず尋ねた。わしは是等の問ひを出來る丈、短く答へたが、彼は何時でもわしの答を待たずに、急いで一つの問題から一つの問題へ移つて行つたのである。此會話は、彼が實際云はうとしてゐる事とは何の關係もないのに違ひない。遂に彼は何の豫告もなく、丁度其時思ひ出した知らせを、忘れずに繰り返しておくやうに、明晰な聲で急にかう云つた。其聲はわしの耳に最後の審判の喇叭のやうに響いたのである。

「あの名高い娼婦のクラリモンドが、五六日前の事、八日八夜續いた饗宴の終にとうとう死んでしまつたわ、大した非道な事であつたさうな。ベルサガアルとクレオパトラの饗宴に行はれた罪惡が又犯されたと云ふものぢや。神よ、わし達は何と云ふ末世に生きてゐるのでござらう。客人たちは皆黒人の奴隷に給仕もして貰つたさうな。其奴隷共は又何やらわからぬ語を饒舌る、わし

の眼には此世ながらの惡魔ぢや。其中の一番卑しい者の服でさへ、皇帝が祭禮に着る袍の役に立つさうな。此クラリモンドには、始終妙な噂があつたつて。何でも女性の夜叉だと云ふ噂ぢや。が、わしは確かにビイルゼハッブだと信じてゐるて。」

彼は話すのを止めて、恰も其話の效果を觀察するやうに、前よりも一層、注意深くわしを見始めた。わしは彼がクラリモンドの名を口にした時に思はず躍り立たずには居られなかつた。そして彼女の死の知らせは、わしの見た其夜の景色と符合する爲に、わしの胸を畏怖と懊惱とに滿したのである。其畏怖と懊惱とはわしが出來る限り力を盡したにも拘らず、わしの顏に現はれずにはゐなかつた。セラピオンは心配さうな、嚴格な眸でぢつとわしを見たが、やがて云ふには「わしはお前に忠告せねばならぬて。お前は足をつまだてて奈落の邊に立つてゐるのぢや。落ちぬやうに注意をしたがよい。惡魔の爪は長いわ、墓もあてにはならぬ物ぢや。クラリモンドの墓は、三重の封印でもせねばなるまい。人の云ふのが誠なら、あの女の死ぬのは始めてでは無いさうな。神がお前を御守り下されればよいがの、ロミュアル。」

から云つて僧院長セラピオンは靜かに戶口へ步んで行つた。わしは其時二度と彼に會はなかつた。それは彼が殆ど直にS――へ歸つたからである。

わしは全く健康も恢復すれば、又日頃の職務に服する事も出來る樣になつた。がクラリモンドの記憶と老年の僧院長の語とは一刻もわしを離れない。けれども格別、彼の氣味の惡い豫言を實現するやうな大事件も起らなかつたので、わしは彼の掛念もわしの恐怖も、誇張されたのに過ぎ

ないと信じるやうになつた。すると、ある夜、不思議な夢を見た。それはわしが眠るか眠らないのに、寢床の帳の輪が、鋭い音を立てて、其輪のかかつてゐる棒の上をすべつたので、わしは帳が開いたなとかう思つた。そこで素早く肘をついて起き上ると、わしの前に眞直に立つてゐる女の影がある。わしは直にそのクラリモンドなのを知つた。彼女は手に、墓の中に置くやうな形をした小さなランプを持つてゐる。その光に滿された彼女の指は、薔薇色にすきとほつて、それが亦次第に不透明な、牛乳のやうに白い、裸身の腕に溶けこんでゐる。彼女の着てゐるのは、末期の床の上に横はつてゐた時に彼女を包んでゐた、リンネルの經帷子である。彼女はこの様にみすぼらしい衣服を纒ふのを恥ぢるやうに、其リンネルの褶に胸をかくさうとしたものの、彼女の小さな手は其役に立たなかつた。彼女は其經帷子の色がランプの青ざめた光の中で彼女の肉の色と一つになる程白いのである。彼女の肉體のあらゆる輪廓を現すやうな、したやかな、織物に包まれた彼女の姿は、生きた女と云ふよりも寧ろ美しい古の浴みする女の大理石像のやうに眺められる。が、死んでゐるにせよ、生きてゐるにせよ、石像にせよ女にせよ、影にせよ肉體にせよ、彼女の美しさは依然として美しい。唯違ふのは彼女の眼の緑色の光が、前よりも輝かないのと嘗ては燃えたつやうな眞紅の脣が、今は其頬の色のやうな、微かなやさしい薔薇色に染んでゐるとの二つである。わしが前に氣の附いた、髪にさしてある小さな青い花も今は見る影もなく枯れ凋んで、殆どのこらず葉を振ひつくしてゐるが、之とても彼女の愛らしさを妨げる事はない——彼女は、此事の性質が不思議なのにも拘らず、又わしの室へはひつて來た様子が奇怪なのにも關らず、

暫くはわしが何等の恐怖をも感じなかつた程、愛らしく見えたのである。

彼女はランプを卓の上へのせて、わしの寢床の後に坐つた。それからわしの上に身をかがめて、銀のやうに冴えてゐる、しかも天鵞絨のやうにやさしく柔かい聲で、かう云つた。其聲は彼女を除いては誰の脣からも聞く事の出來ぬやうな聲である。

「貴方を隨分長い間待たせて置いてね。ロミュアル、私が貴方の事を忘れてしまつたのだと思つたでせう。でも私は遠い處から來たのよ、それはずうつと遠い處なの。其處へ行つた者は誰でも歸つて來た事の無い國なの。さうかと云つてお日樣でもお月樣でもないのよ。唯、空間と影ばかりある處なの、大きな路も小さな路もない處でね。踏むにも地面のない、飛ぶにも空氣のない處なの。それでよく此處へ歸つて來られたでせう。何故と云へば戀が『死』より強いからだわ。戀がしまひには『死』を負かさなければならないからだわ。まあ、此處へ來る途中で、何と云ふ悲しい顏や、恐しい物を見たのでせう。唯意志の力だけで又此大地の上へ歸つて來て、體を見附けて其中へはひる迄に、私の靈魂は何と云ふ苦しい目に遭つたでせう。私を掩つて置いた重い石の板を擡げる迄に、何と云ふ苦勞をしなければならなかつたでせう。ごらんなさい、私の手の掌は傷だらけぢやありませんか。手を接吻して頂戴。さうすれば屹度癒るわ。」彼女は冷い手の掌を代り代りわしの口に當てた。わしは何度となくそれを接吻した。其間も彼女は、溢るる許りの愛情の微笑をもらして、わしをぢつと見戍つてゐるのである。

わしは恥しながら白狀する。此時わしは僧院長セラピオンの忠告もわしの服してゐる神聖な職

務も悉く忘れてしまつた。わしは何の抵抗もせずに、一撃されて堕落に陷つてしまつたのである。クラリモンドの皮膚の新たな冷さはわしの皮膚に滲み入つて、わしは淫慾のをののきが、全身を通ふのを感ぜずにはゐられなかつた。わしが後に見た凡ての事があるのにも拘らず、わしは今も猶彼女が惡魔だとは殆ど信じる事が出來ない。少くも彼女は何等さうした姿を示さなかつた。惡魔がこの樣に巧に其爪と角とを隱した事は、嘗て無かつた事に相違ない。彼女は床をあげて寢臺の緣に坐りながら、しどけない媚に滿ちた姿をして、時々小さた手をわしの髮の中に入れては、どうしたらわしの顏に似合ふかを見るやうに、わしの髮を撚つたり捲いたりしてゐるのである。わしが、罪障の深い悅樂に醉つて、彼女の手にわしの體を任せると、彼女は又、其やさしい戯れと共に、樂しげに種々な物語をしてくれる。しかも最も驚くべき事は、わしが此樣な不思議な出來事に際會しながら何等の驚異をも感じなかつたと云ふ事である。丁度夢の中では人がどの樣な空想的な事件でも、單なる事實として受入れるやうに、わしにも、是等の事情は全く自然であるが如くに思はれたのである。

「貴方に會はないずつと前から私は貴方を愛してゐてよ。可愛いいロミュアル、さうして方々探してあるいてゐたのだわ。貴方は私の愛だつたのよ。あの時あの教會で始めてお目にかかつたでせう。私、直に『之があの人だ』つて云つたわ、それから、私の持つてゐた愛、私の今持つてゐる、私の是から先に持つと思ふ、すべての愛を籠めた眸で見て上げたの——其眼で見ればどんな大僧正でも王樣でも家來たちが皆見てゐる前で、私の足下に跪いてしまふのよ。けれど貴方は平氣で

いらしつたわね、私より神様の方がいいつて。
「私、ほんたうに神様が憎らしいわ、貴方はあの時も神様が好きだつたし、今でも私より好きなのね。
「ああ、ああ、私は不仕合せね、私は貴方の心をすつかり私の有にする事が出來ないのね。貴方が接吻で生かして下すつた私――貴方の爲に私の門を崩して、貴方を仕合せにしてあげたいばつかりに、命を貴方に捧げてゐる私。」
彼女の話は、悉く最も熱情に滿ちた撫愛に伴はれた。其撫愛はわしの感覺と理性とを惱ませて、わしは遂に彼女を慰める爲に、恐しい瀆神の言を放つて、神を愛する如く彼女を愛すると叫ぶのさへ憚らないやうになつた。
すると、彼女の眼は、再び綠玉髓の如く輝いた。「ほんたう？――ほんたうに？――神様と同じ位。」彼女は其美しい胸にわしを抱きながら叫んだ。「それなら、貴方、私と一しよにいらつしやるわね、どこへでも私の好きな處へついていらつしやるわね、貴方はもう、あの醜い黑法衣を投げすてておしまひなさるのよ。貴方は騎士の中で、一番偉い、一番羨まれる騎士におなりになるのよ、貴方は私の戀人だわ。法王の云ふ事さへ聞かなかつたクラリモンドの晴れの戀人になるのだわ。少しは得意に思ふやうな事ぢやあなくつて。ああ、美しい、何とも云へぬ程仕合せな生涯を、うるはしい、黃金色の生活を、二人で樂むのね。さうして、何時立つの。」
「明日、明日。」とわしは夢中になつて叫んだ。

「ぢや明日にするわ。其間に御化粧をかへる事が出來てね。これでは少し薄着だし、旅をするにはをかしいわ。それから、私を死んだと思つて此上もなく悲しがつてゐるお友達に知らせを出さなければならないわ。お金に着物に馬車に―― 皆支度が出來てゐてよ。私、今夜と同じ時刻にお尋ねするわ。さやうなら。」彼女は輕く脣を、わしの額にふれた。ランプは消えて、帳が元のやうに閉されると、凡てが又暗くなつた。と、鉛のやうな、夢も見ない眠りがわしの上に落ちて、次の朝迄、わしを前後を忘れさせてしまつたのである。

わしは何時ものやうに朝遲く眼をさました。そして其不思議な出來事の回想が終日、わしを煩した。わしは遂にそれを、わしの熱した空想が造つた霧のやうなものだと思ひ直した。が、其感覺が餘りに潑剌としてゐるので、其事實でない事を信ずるのは、甚しく困難であつた。そしてわしは來るべき事實に對する多少の豫感を抱きながら、凡ての妄想を拂つて、清淨な眠りを守り給はむ事を神に祈つた後に、遂に床に就いたのであつた。わしは直に深い眠りに落ちた。そしてわしの夢も續けられた。帳が再び開いて、わしはクラリモンドの姿を見た。青ざめた經帷子を青ざめた身に纏つて、頰に「死」の紫を印した前夜とは變つて、喜ばしげに活々して、緑がかつた菫色の派手な旅行服の、金のレースで縁をとつたのを着て、兩脇を綻ばせた所からは、繻子の袴がのぞいてゐる。金髮の房々した捲毛を、いろいろな形に面白く撚つてある白い鳥の羽毛をつけた、黑い大きな羅紗の帽子の下から、こぼしてゐる彼女は、手に金色の呼笛のついた小さな鞭を持つて、輕くわしを叩きながら、かう叫んだ。「さあ、よく寢てゐる方や、これが貴方の御支度なの。

私、貴方がもう起きて着物を着ていらつしやるかと思つたわ。早くお起きなさいよ。愚圖々々しちやゐられないわ。」

　わしは直に寢床からとび出した。

「さあ、着物をきて頂戴。それから出かけませう。」彼女は一しよに持つて來た小さな荷包を指さしながら、「馬が待遠しがつて、戸口で轡（くつわ）を嚙んでゐるわ。今時分はもう此處から三十哩も先きへ行つてゐる筈だつたのよ。」

　わしは急いで着物を着た。彼女はわしに着物を一つ一つ渡してくれた。そしてわしがどうかして間違へると着物の着方を敎へながら、時にわしの不器用なのに呆れては噴き出してしまふのである。それがすむと今度は急いでわしの髮をなでつけてくれる。それもすむと、ヴェネチアの水晶に銀の細工の縁をとつた懷中鏡を、わしの前へ出して、面白さうにかう尋ねる。「どんなに見えて？　私をお附き（ヴァレエ・ド・シャムブル）にかかへて下すつて？」

　わしはもう、何時ものわしではない。そして自分でさへこれが自分とは思はれない。云はば今のわしが、昔のわしに似てゐないのは、出來上つた石像が、石の塊に似てゐないのと同じ事なのである。わしの昔の顏は、鏡に映つた今の顏を下手な畫工の描き崩した肖像のやうに思はれた。わしは美しい。わしの虛榮心は此變化に心からそそられずにはゐられなかつた。美しく刺繡をした袍はわしを全くの別人にしてしまつたのである。わしは或型通りに斷（た）つてある五六尺の布がわしの上に加へた變化の力を、驚嘆して見戍つた。わしの衣裳の精靈は、わしの皮膚の中に滲み入

つて、十分だつかたたぬ中にわしはどうやら一廉の豪華の兒になつてしまつた。

此新衣裳に慣れようと思つて、わしは室の中を五六度歩いて見た。クラリモンドは花のやうな快樂を味ひでもするやうに、わしを見戍りながら、さも自分の手際に滿足するらしく思はれた。「さあ、もう遊ぶのは澤山よ、ロミュアル、これから出かけるのよ。私達は遠くへ行かなければならないのだわ。さうして遲れちやあいけないのだわ。」彼女はわしの手を執つて、外へ出た。戸と云ふ戸は、彼女が手をふれると忽ちに開くのである。わし達は犬の眼もさまさずに其の側を通りぬけた。

門口でわしは、前にわしの護衛兵だつた、あの黑人の扈從のアルゲリトンを見た。彼は三頭の馬の轡を控へてゐる――三頭共、わしをあの城へ伴れて行つた馬のやうに黑い。一頭はわしの爲、一頭は彼の爲、一頭はクラリモンドの爲である。是等の馬は、西風の神の胎をうけた牝馬が生んだと云ふ西班牙馬に相違ない。何故と云へば彼等は風のやうに疾いからである。門を出る時に丁度東に上つて路上のわし達を照した明月は戰車から外れた車輪のやうに、空中を轉げまはつて、右の方、梢から梢へ飛び移りながら、息を切らしてわし達に伴いて來る。間も無く一行はとある平野に來た。其處には四頭の大きな馬に曳かせた馬車が一臺一叢の木蔭に待つてゐる。で、それへ乘り移ると今度は馭者が氣違ひのやうに馬を走らせる。わしは片手をクラリモンドの肩にまはして、彼女の片手をわしの手に執つてゐた。彼女の頭はわしの肩に靠れて、わしは半ば露した彼女の胸が輕く、わしの腕を壓するのを感じるのである。わしは此樣な熾烈な快樂を味つた事はな

い。其間にわしは凡ての事を忘れてゐた。わしが僧侶だつたと云ふ事を覺えてゐるのも、わしが母の腹の中にゐた事を覺えてゐるのと同じ程にしか考へられなかつた。此惡魔がわしの上にかけた蠱惑は、是程大きかつたのである。其夜からわしの性質は、或意味に於て二等分されたやうに思はれる。云はばわしの内に二人の人がゐて、それが互に知らずにゐるのである。或時はわしは自分が夜になると紳士になつた夢を見る僧侶だと思ふが、又或時には、僧侶になつた夢を見てゐる紳士だと思ふ事もある。わしは夢と現實とを分つ事も出來なければ、何處に現實が始まり、何處に夢が完るかさへも見出す事が出來なかつた。貴公子の道樂者は僧侶を馬鹿にするし、僧侶は、貴公子の放埒を罵るのである。互にもつれ合ひながら、しかも互に觸れる事のない二つの螺線は、わしの此二面(ふたおもて)の生活を、遺憾なく示してゐる。しかしわしは、此狀態が此樣な不思議な性質を持つてゐるにも拘らず、一分でも氣違ひになる氣などは起らなかつた。わしは常に、思切つて潑剌とした心で、わしの二つの生活を氣長く觀照してゐたのである。が、唯一つ、わしにも說明の出來ない妙な事があつた——卽ちそれは同じ個人性の意識が、全く性格の背反した二人の人間の中に存在してゐたと云ふ事である。わしが自ら、C——の寒村の牧師補と思つたか、クラリモンドの肩書附きの戀人、ロムアルドオ閣下と思つたか、どうか——これがわしの不思議に思ふ一つの變則なのである。

兎も角も、わしはヴェニスに住んだ。少くも住んだと信じてゐた。わしが此幻怪な事實の中にどれ程の幻想と印象とが含まれてゐるかを正確に發見するのは到底不可能である。わし達は、カ

ナレイオの邊(ほとり)の、壁畫と石像との澤山ある、大きな宮殿に住んでゐた、それは一國の王宮にしても恥しくないやうな宮殿で、わし達は各々ゴンドラの制服を着たバルカロリも、音樂室も、御抱への詩人も持つてゐた。殊にクラリモンドは、大規模な生活を恣にするのが常であつた。彼女の性格にはクレオパトラに似た何物かが潜んでゐるのである。わしはと云ふと又王子のやうな宮臣の一列を從へて、常に大國の四福音宣傳師か十二使徒の一人と一家でもあるやうな、畏敬を以て迎へられてゐた。わしは大統領(ドォチ)を通すのでさへ、道を讓らうとはしなかつた。魔王(サタン)が天國から墮落して以來、わしより傲慢不遜な人間が此世にゐたとは信じられぬ。わしは又、リドットにも行つて、地獄のものとしか思はれぬ運をさへ弄んだ。わしはあらゆる社會の最も善良な部分——沒落した家の子供達とか女役者とか奸黠な惡人とか佞人とか空威張(からゐばり)をする人間とか——を歡待した。そして此樣な生活に沈湎しながらも、わしは常にクラリモンドを忘れなかつた。わしは實に狂氣のやうに彼女を愛してゐたのである。一人のクラリモンドを持つのは、二十人の情婦を持つのにも均しい。否、あらゆる女を持つのにも均しい。彼女は其一身に、無數の容貌の變化と無數の清新な嬌艶とを藏してゐる——眞に彼女は女のカメレオンである。彼女はわしの愛を百倍にして返して呉れた。彼女の求めるのは唯、愛である——彼女自身によつて目醒まされた、清淨な青春の愛である。しかも其愛は最初の、又最後の情熱でなければならない。かくしてわしも常に幸福であつた。唯、不幸なのは、毎夜必ず魘される時だけで、其の時はわしが貧しい田舍の牧師補になつた夢を見ながら、晝間の淫樂を悔いて、贖罪と苦行とに一身を捧げてゐるのである。わし

は、常は彼女と親しんでゐられるのに安んじて、わしがクラリモンドと知るやうになつた不思議な關係を此上考へて見ようとはしなかつた。併し彼女に關する僧院長セラピオンの語は、屢々わしの記憶に現れて、わしの心に不安を與へずにはゐなかつた。

其内に暫くの間クラリモンドの健康が平素のやうにすぐれなかつた。顏の色も日にまし青ざめる。醫師を呼んで診せても、病氣の質がわからないので、どう治療していいか見當が附かない。彼等は皆、役にも立たぬ處方箋を書いて、二度目からは來なくなつてしまふのである。けれ共彼女の顏色は、著しく青ざめて、一日は一日と冷くなる。そして遂には殆どあの不思議な城の記憶すべき夜のやうに、白く、血の氣もなくなつてしまつた。わしは此樣に徐々と死んでゆく彼女を見るに堪へないで、云ふ可からざる苦痛に苛まれたが、わしの苦悶に動かされたのであらう、彼女は、丁度死なねばならぬ事を知つた者の末期の微笑のやうに、悲しく又やさしく、わしの顏を見てほほ笑んだ。

或朝、わしは彼女の寢床の傍に坐つて、直側に置いてある小さな食卓で朝飯を認めてゐた。それはわしが一分でも彼女の側を離れたくないと思つたからである。で、或る果物を切らうとした所が、わしは誤つて稍深くわしの指を傷けた。すると血がすぐに小さな鮮紅の玉になつて流れ出したが、其滴が二滴三滴、クラリモンドにかかつたと思ふと彼女の眼は忽ちに輝いて、其顏にも亦、わしが嘗て見た事の無いやうな、荒々しい、恐しい喜びの表情が現れた。彼女は忽ち獸の如く輕快に、寢床から躍り出て——丁度猿か猫のやうに輕快に——わしの傷口に飛びつくと、云ひ

難い愉快を感じるやうに、わしの血をすすり始めた。しかも彼女は靜かに注意しつつ、恰も鑑定上手が、セレスやシラキュウズの酒を味ふやうに、其小さな口に何杯となく啜つて飽かないのである。と、次第に彼女の瞼は垂れ、綠色の眼の瞳は圓いと云ふよりも、寧ろ橢圓になつた。そしてわしの手に接吻しようとしては、口を離すかと思ふと、又更に幾滴かの紅い滴を吸ひ出さうとして、わしの傷口に其脣をあてるのであつた。血がもう出ないのを見ると、彼女は瑞々した、光のある眼を輝かしながら、五月の朝よりも薔薇色に若やいで、身を起した。顏はつやつやと肉附いて、手も溫かにしめつてゐる――常よりも一層美しく、健康も今は全く恢復してゐるのである。

「私もう死なないわ、死なないわ。」悅びに半ば狂したやうにわしの首に縋りつきながら、彼女はかう叫んだ。「私はまだ長い間貴方を愛してあげる事が出來てよ。私の命は貴方の有だわ。私の中にある物は皆、貴方から來たのだわ。貴方の豐な貴い血の滴が、世界中のどの不死の藥よりも得難い、力のつく藥なの。その血の滴のおかげで私は命を取返したのだわ。」

此光景は長い間、わしの記憶に上つて來た。そしてクラリモンドに對する不思議な疑惑をわしに起させた。丁度其の夜、睡がわしを牧師館に移した時に、わしは僧院長セラピオンが平素よりは一層眞面目な、一層氣づかはしさうな顏をしてゐるのを見た。彼はぢつとわしを見つめてゐたが、悲しげに叫んで云ふには「お前は靈魂を失ふ丈では飽足りなくて、肉體をも失はうとするのかの。見下げ果てた奴め、何と云ふ恐しい目にあふものぢや。」彼のかう云つた調子は、强くわし

を動かした。が、此記憶の鮮かなのにも拘らず、其印象さへ間も無く消えてしまつて、數知れぬ外の心配がわしの心からそれを移してしまつた。遂にある夜わしはクラリモンドが、食事の後で日頃わしにすすめるを常とした香味入りの酒の杯へ、何やら粉薬を入れるのを見てとつた。それは彼女がさうとは氣が附かずに立てて置いた鏡に映つて見えたのである。わしは杯をとり上げて、口へ持つてゆく眞似をして、それから、後で飲むつもりのやうに手近にあつた家具の上へのせて置いた。で、彼女が後を向いた隙を窺つて、中の酒を卓の下へあけると、其儘、わしの閨へ退いて床の上に横になつた。わしは少しも眠らずに、此神祕から何が起るか氣を附けて見出さうと決心したのである。待つ間もなく、クラリモンドは、寢衣を着てはひつて來た。そして寢床の上に上つてわしの傍に横になつた。彼女はわしが睡つてゐるのを確めると、わしの腕をまくつて、髮から金の留針をぬきながら、低い聲でかう呟き始めた。「一滴(しづく)、たつた一滴、私の針の先へ紅寶玉(ルビイ)をたつた一滴……貴方はまだ私を愛してゐるのですから、私はまだ死なれません……ああ可哀さうに、私は美しい血を、まつ赤な血を飲まなければならないのね、お休(やす)みなさい、私のたつた一の寶物、お眠みなさい、私の神、私の子供、私は貴方に害をしようと思つてはゐなくつてよ。私は唯、貴方の命から、私の命が永久に亡びてしまはない丈の物を頂くのだわ。私は貴方を愛してゐるのでせう、だから私は外に戀人を拵へて、其人の血管を吸ひ干す事にした方がいいのだわ。けれど貴方を知つてから、私、外の男は皆厭になつてしまつたのですもの……まあ美しい腕ね、何と云ふ圓いのだらう、何と云ふ白いのだらう、どうして私は此樣な青い血管を傷ける事が出來

るのだらう。」から呟き乍ら、彼女はさめざめと涙を流した。其時わしは、彼女がわしの腕を執りながら、其上に落す涙を感じたのであつた。遂に彼女は意を決して、其留針で一寸わしを刺した。そして其處から滴る血を吸ひ始めた。彼女はほんの五六滴しか飲まなかつたが、わしの眼を醒ますのを恐れたので、丁寧に小さな布でわしの腕を括つてくれた。それから後で又傷を膏藥でこすつてくれたので、傷は直に癒つてしまつた。

もう疑の餘地はない。僧院長セラピオンが正しかつたのである。が、此積極的な知識があるにも拘らず、わしはクラリモンドを愛するのを禁ずる事が出來なかつた。そして喜んで其人工の生命を與へるに足る丈の血潮を、自ら進んで與へようと思つた。加之、わしは殆ど彼女を怖しく思はなかつた。わしはわしの血を一滴づつ取引するよりも、わしの腕の血管を自ら割いて、彼女にかう云つてやりたかつた。「お飲み、さうしてわしの愛をわしの血潮と一しよに、お前の體に滲透らせておくれ。」わしは、彼女がわしに拵へてくれた魔醉の酒の事や、あの留針の出來事には、氣をつけて一言もそれに及ばないやうにした。そしてわし達は最も圓滿な調和を樂しんでゆく事が出來たのである。

けれ共、わしの沙門らしい優柔は、常よりも一層、わしを苛み始めた。そしてわしは、わしの肉を苦しめ制する爲に、何か新しい贖罪を發明するのさへ、想像するに苦しむやうになつた。是等の幻は無意志的なもので、わしは實際それに關する何事にも與らなかつたがそれでも猶、わしは事實にせよ夢幻にせよ、此樣な淫樂に汚れた心と不淨な手とを以てしては、到底基督の體に觸

れる事が出來なかつた。わしは此懶い幻惑の力に壓へられるのを免れようとして、先づ眠りに陷るのを防がうと努力した。そこでわしは指で瞼を開いてゐたり、數時間も眞直に壁に倚り懸つてゐたりして、全力を振つて眠りと戰つて見たのである。けれ共睡魔は絶えずわしの眼を襲つて、凡ての抵抗が無駄になつたと思ふと、わしは極度の疲勞に堪へずして、兩腕を力なく下げたまま、再び睡の潮流に樂慾の彼岸に運ばれて了ふ。セラピオンは、峻烈を極めた訓戒を加へて、嚴しくわしの意氣地の無いのと、勇猛心の不足なのとを責めたが、遂に或日、わしが平素より一層心を苦しめてゐると、わしにかう云つてくれた。「此不斷の呵責を免れることの出來るのは、唯、一策がある許りぢや。尤も非常に出た策だと云ふ嫌はあるが役には立つに相違ない。難病は劇藥を要すると云ふものぢや。わしはクラリモンドの埋められた處を知つてゐるし、それにはあの女の屍を發いて、お前の戀する女がどのやうな憐な姿になつてゐるかを見なければならぬ。さうすればお前も、蛆に食はれた、塵になるばかりの屍の爲に、靈魂を失ふやうな迷には陷らぬやうにならう。此策は必ずお前を救ふに相違ないて。」わしは此二重生活に困憊してゐたので、貴公子か僧侶かどちらが幻惑の犧牲だかを確め度いばかりに直に之を快諾した。わしは全くわしの心の中にゐる二人の男の一人を、もう一人の利益の爲に殺すか、又は二人共殺すか、どちらか一つにする決心でゐた。それは此樣な怖しい存在は續けられる事も、堪へられる事も出來なかつたからである。そこで僧院長セラピオンは鶴嘴と梃と角燈とを整へて、わし達二人は眞夜中に場所も位置も彼のよく知つてゐる――の墓地へ出かけたのであつた。暗い角燈の光を五六の墓石の碑銘に向

けた後に、わし達は遂に、半大きな雜草に掩はれて、其上又苔と寄生植物とに侵された大きな一枚石の前に出た。そして其上に、わし達は下のやうな墓碑銘の首句を探り讀む事が出來たのである。

女性の中の最も美しき女性として
生ける日に譽ありし
クラリモンドこそ此處に眠れ

「確に此處ぢや。」とセラピオンが呟いた。そして角燈を地上に置くと、石の端の下へ梃の先を押入れて、其石を擡げ始めた。石が自由になると彼は更に寄生植物を取除けにかかつた。わしは夜よりも暗く、夜よりも更に語なく、傍に立つて、ぢつと彼のする事を見戍つた。其間に彼は其凄慘な勞働に腰をかがめて、汗にぬれながら喘いでゐる。わしには彼の苦しさうに吐く息が、末期の痰のつまる音のやうな調子を持つてゐるかと疑はれた。それは眞に幽怪な光景であつた。外から誰でもわし達を見る人があつたなら、其人はわし達を神の僧侶と思ふよりは寧ろ瀆神の蠻者か經帷子を盜む者と思つたに相違ない。セラピオンの熱心には、執拗な酷烈な何物かがあつて、それが彼に天使とか使徒とか云ふものよりも却つて邪鬼の形相を與へてゐた。其大きな、鷲のやうな顏は、角燈の光で、鋭い浮彫りを刻んでゐる。峻嚴な目鼻立ちと共に、不快な空想を誘ふやうな、恐る可き何物かを有してゐるのである。わしは氷のやうな汗が大きな粒になつてわしの額に湧いて來たのを感じた。わしの髮は恐しい畏怖の爲によだつてゐる。わしの心の底では、辛辣なセラピオンの行が、憎むべき神聖冒瀆の如く感じてゐる。わしは、頭上に油然と流れてゐる黑雲

の内臓から、火の三戟刑具が迸り出でて、彼を焦土とするやうに祈禱しようかとさへ思つてゐた。絲杉に宿つてゐた梟は、角燈の光に驚いて、時々それに飛んで來る。しかも其度に灰色の翼で角燈の硝子を打つては悲しい慟哭の叫び聲を揚げるのである。野狐は遠い闇の中に鳴き、數千の不吉な物の響は、沈默の中から自ら生れて來る。遂にセラピオンの鶴嘴は、柩を打つた。其板に觸れた響は、深い高い音を、打たれた時に「無」が發する戰慄すべき音を、陰々と反響した。それから彼は柩の蓋を捩ぢはなした。わしは其時クラリモンドが大理石像のやうに青白く、兩手を組んでゐるのを見た。彼女の白い經帷子は、頭から足迄ただ一つの襞を造つてゐる。しかも彼女の色褪せた脣の一角には、露の滴つたやうに、小さな眞紅の滴がきらめいてゐるのである。之を見ると、セラピオンの怒氣は心頭に上つた。「ああ、此處に居つたな、惡魔めが、不淨な賣婦めが、黄金と血とを吸ふ奴めが。」彼は聖水を屍と柩の上に注ぎかけて、其上に水刷毛で十字を切つた。憐む可きクラリモンドは、聖水がかかると共に、美しい肉體も忽ち塵土となつて、唯、形もない、恐しい灰燼の一塊と、半ば爛壞した腐骨の一堆とが殘つた。

「お前の情人を見るがよい、ロミュアル卿。」決然として僧院長は此悲しい殘骸を指さしながら、叫んだ。「是でもお前は、お前の戀人と一しよに、リドオやフシナを散歩しようと云ふ氣になるかの。」わしは、無限の破滅がわしにふりかかつた樣に、兩手で顏を隱した。わしはわしの牧師館へ歸つた。クラリモンドの戀人ロミュアル卿も、今は長い間不思議な交際を續けてゐた、憐れな僧侶から離れてしまつたのである。が、唯一度、其次の夜にわしはクラリモンドに逢つた。彼女は、

教會の玄關で始めてわしに逢つた時にさう云つたやうに、「不仕合せな方ね、何をなすつたの？」と云ふのである。「何故、あの愚かな牧師の云ふ事をおききなすつたの？　仕合せぢやなかつて？　私が貴方に何か惡い事をして？　それだのに貴方は私の墓を發いて、私の何もないみじめさを人目にお曝しなすつたのね。私たちの、靈魂と肉體との交通はもう永久に破られてしまつたのよ。さやうなら。それでも貴方は屹度私をお惜みになるわ。」彼女は煙のやうに空中に消えた。そしてわしは二度と彼女に會つた事はない。

ああ、彼女の語は正しかつた。わしは一度ならず彼女を惜んだ。いや今も彼女を惜んでゐる。わしの靈魂の平和は、高い代價を拂つて始めて贖ふ事が出來たのである。神の愛は彼女のやうな愛を償つて餘りある程大きなものではない。兄弟よ、之がわしの若い時の話なのだ。忘れても女の顏は見ぬがいい。そして外へ出る時には、何時でも視線を地におとして步くがいい。何故と云へば、如何に信心ぶかい、愼みぶかい人間でも、一瞬間の誤が、永遠を失はせるのは容易だからである。

（大正四年）

ババベックと婆羅門行者

——Voltaire——

私が恆河の岸にある、婆羅門の本地、ベナアルの市(まち)にゐた時の事である。私は骨を折つて、いろいろの事を知らうとした。私には印度語が可也よくわかる。そこで私は澤山の事に耳を傾け、あらゆる事に注意を拂つた。私が宿を定めたのは、私が前に手紙を交換した事のあるオムリと云ふ男の家である。私はオムリ程、立派な人間には遇つた事がない。この男は婆羅門教の信者だつた。が、私は回教徒たる名譽を有してゐる。しかし我々はマホメットと婆羅吸摩(ブラアマ)との問題で、爭論した事などは一度もない。我々は垢離(こり)をとる丈は別々にしたが、その外は兄弟のやうに同じ果物の汁を飲み、同じ皿の飯を食つた。

或日、我々は一しよに毗瑟拏(ヴイシユヌ)の塔へ行つた。するとそこには、幾群(いくむれ)かの婆羅門行者が控へてゐる。その或者はジアンギスであつた。と云ふのは、瞑想に一身を捧げてゐる婆羅門行者と云ふ事である。又或者は古の赤脚仙の弟子たちで、これは活動的な生活を營んでゐた。彼等は誰でも知つてゐる通り、最も古い婆羅門が使つてゐた、むづかしい語(ことば)を心得てゐる。さうしてこの語で書いた、吠陀(ヴエダ)と云ふ本を持つてゐる。吠陀は勿論亞細亞全土で、最も古い書物である。ゼンダヴェ

スタでさへも、その點では、吠陀の右に出る事は出來ない。

私はこの本を讀んでゐる一人の婆羅門行者の前を通りかかつた。するとその男が叫ぶには、「あゝ、何と云ふひどい奴だ。お前は己が數へてゐた母音の數を忘れさせてしまつたな。その御かげで、己の靈魂は鸚鵡の體へはいる代りに、今度は兎の體へ行かなければならないぞよ。己はもう確に鸚鵡の體へはいるものだと思ひこんでゐたのだが。」

そこで私はその男に一ルウピイやつて、機嫌をとつた。それから又數歩先へ行くと、今度は不幸にも嚏が出た。その嚏で目を覺ましたのは、恍惚狀態にはいつてゐた一人の婆羅門行者である。するとその男が喚くのには、

「己は何處にゐるのだ。己は何と云ふ恐しい墮ち方をしたのだ。己はもう己の鼻の先を見る事が出來ない。天上の光も消えてしまつた。」

「もし私のせゐで、とうとう君の鼻の先が見えないやうになつたと云ふのなら、ここに一ルウピイあるから、これで私の仕損じを償つてくれ給へ。さうして君の天上の光も恢復するやうにね。」

私はかう云つた。

かうしていろいろ氣を使ひながら、難儀の場所を切りぬけると、私はやがて赤脚仙たちのゐる所へ來かかつた。するとそこにゐた連中の或者は、私にひどく綺麗な小さい釘を持つて來てくれた。これは婆羅吸摩の爲に、私の腕や腿へその釘をつき通せと云ふのである。私はその釘を買つて、後で絨毯を止めるのに使つた。それから又、中には逆立ちをしながら、踊つてゐる奴がある。

ゆるんだ綱の上を渡つて、轉がり落ちる奴がある。片脚で絶えず跳ねてゐる奴がある。鎖をひきずつてゐる奴がある。荷鞍を背負つてゐる奴がある。頭へ枡をかぶつてゐる奴がある。が、これらの連中は、皆その道德が高いと云ふ名譽を持つてゐる。私の友だちのオムリは、私をかう云ふ哲學者たちの中で、一番有名な一人の小家へつれて行つてくれた。それはババベツクと云ふ名の男である。この男は猿のやうに眞裸で、頸のまはりに大きな鎖をさげてゐた。目方はどうしても、六十磅以上あるに相違ない。それから坐つてゐるのは、木造の椅子で、その上には尖つた小さな釘が、ちやんと綺麗に植つてゐる。だからこの男の尻は釘に刺されてゐる訣だが、見た所はまるで天鵞絨の蒲團に坐つてゐるものとしか思はれない。大ぜいの女は皆家庭上の事で御託宣でも聞くやうにこの男の所へ相談にやつて來る。して見ると、最高の名譽を博してゐると云ふ事は、どうも嘘ではないらしい。私はそこで、オムリがこの男とした重大な問答を耳にした。

「先達、あなたは私の靈魂が七生の試錬を經た後で、私は婆羅吸摩のゐる所へ行かれると御思ひですか。」からオムリが云つた。

「それはお前の生活の仕方次第だ。」から婆羅門行者が答へた。

「私は善い市民になり、善い夫になり、善い父親になり、善い友人にならうとして、努力してゐます。私は金持ちには入用のあり次第、無利子で金を貸してやります。貧乏人にはそれも唯でくれてやります。それから又近所の人とは喧嘩などをした事がありません。」

「お前は尻へ釘を打ちこんだ事があるか。」

「いえ、先達。」

「それは殘念だな。お前はきつと第九天へははいれまい。重々氣の毒だが。」

「よろしうござります。私は私の運命に全く甘んじて居ります。輪廻を經る間に私の義務を果して、最後に天上に迎へられるのでございましたら、第九天にせよ、第十二天にせよ、そんな事は毛頭私はかまひません。この世で正直な人間となり、婆羅吸摩の國で幸福になると致しましたら、それでもう十分ではございませんか。ババベック先達、あなたは釘と鎖とで、一體第何天に行かうと思つていらつしやるのです。」

「第三十五天へ。」とババベックが答へた。

「私より高い所へ住みたいとは、あなたも可笑しい方ですね。その御望は唯法外な野心から出て來るのです。あなたはこの世で名譽を求める者を御叱りになる。では何故あなたはあの世で、御自分からそんな大した名譽を御求めになるのです。その上あなたは一體何を當にして、私より善い取扱ひを受けると御思ひになるのです。失禮ながら申し上げますが、私は十日の内に、あなたが尻に打ちこむ釘の十年間の値段よりは、もつと高い施しを出して居ります。あなたが眞裸で、鎖を頸へまきつけて、日を暮してゐた所で、それが婆羅吸摩には何になりませう。さうしてあなたの御國に御仕へになるには、誠に結構ななさり方ですね。私はかう思ひます。鍋釜を蒔いたり、木を植ゑたりする人の方が、鼻の先を見つめたり、荷鞍をかついだりしてまでも靈魂の尊さを見せようとするあなたやあなたの御仲間を皆一まとめにしたよりは、どの位立派だかわからない位

ですとね。」

かう云つて、オムリは慰めたり、賺したり、說きつけたりした揚句に、やつとババベックを勸誘して、その時その場かぎり釘と鎖とは緣を切る事にしてしまつた。それからこの婆羅門行者を自分の家へつれて來て、地道な生活を送らせた。先この男をよく洗つてやつて、次に香水を體中へもみこんでやり、最後にちやんと相當な着物を着せてやる。そこでババベックは二週間ばかりの間、完く正當な暮し方をした。さうして前よりは百倍も幸福だと白狀した。が、人民の信用はすつかり失つてしまつたので、女たちも二度と相談にはやつて來ない。ババベックはその爲に、オムリの家を去つて、もう一度釘を尻へ刺す事になつた。名聲を恢復しようと云ふつもりで。

（大正七年五月）

散文詩

師

——Oscar Wilde——

今や闇路の上に來れり。
その時アリマシヤのジョセフは松の木の松明(たいまつ)を燃やし丘より下りて谷に入りぬ。
そは彼が家になすべき事ありし故なり。
「亡滅(ほろび)の谷」なる燧石のちりほへるに跪きて、彼は人の若者の裸にて泣けるを見たり。
其の髪は蜜の色をなし、
そが體は白き花の如くなりき。
されど彼荊もて體を傷け、
髪をも亦王冠の如く灰にまみらせたり。
家豊かなるアリマシヤは裸にて泣ける若者に云ふやう、
「我爾(いまし)が悲しみの大なるを怪しまず、そは眞に『彼』は義(ただ)しき人なりし故なり。」

若者答へけるは「我が嘆くは『彼』が爲ならず。我自らの爲なり。
われ亦水を化して葡萄酒となし、
われ亦癩を病む者の惱みを癒し、
われ亦盲し者の眼を開かしめ、
われ亦水の上を歩み、
われ亦塚穴の中に住む者より惡鬼を逐ひ、
われ亦食なき砂漠に饑ゑたる者を飽かしめ、
われ亦死せる者をそが狹き家より立たしめ、
われ亦人みなの群れたる前に實なき無花果の木を呪ひして凋ましめつ、
されど人々のわれを十字架にかけんとせざるはいかに。」

弟子

ナアシツサスのみまかりし時、
そが快樂の泉は甘き水の杯より化して鹹き涙の杯となりぬ。
されば木精ら森しげきあたりを嘆きもとほりぬ。
彼が潦の甘き水の杯より鹹き涙のさかづきに化せしを見て、
そが髮のみどりなる花たばをみだし、

泣く泣く云ひけるは
「うべ爾がかくナアシツサスをいたむこと彼さこそ美しかりしか。」
「されどナアシツサスは美しかりしや。」と潦云ふ。
木精ら答ふらく
「爾にまして誰かよくそをわきまへん。
彼屢〻われらが傍をよぎりつ、
されど爾がもとへは、
彼いましをもとめて來るなり。
彼爾のきしに伏し、
爾を見下ろし、
爾の水の鏡に己が美しさをうつし見つ。」
潦の答へけるは
「さればわれナアシツサスを愛せしは、
彼がわがきしに伏し、
われを見下ろす時、
われ彼が眼の鏡にうつれる、
われみづからの美しさを見たればぞ。」とよ。

（大正九年十一月）

パステルの龍

これは上海滞在中、病間に譯したものである。シムボリズムからイマジズムに移つて行つた、英佛の詩の變遷は、この二人の女詩人の作にも、多少は窺ふ事が出來るかも知れない。名高いゴオテイエの娘さんは、カテユウル・マンデスと別れた後、Tin-tun-Ling と云ふ支那人に支那語を習つたさうである。が、李太白や杜少陵の譯詩を見ても、譯詩とはどうも受け取れない。まづ八分までは女史自身の創作と心得て然るべきであらう。ユニス・テイツチエンズはずつと新しい。これは實際支那の土を踏んだ、現存の亞米利加婦人である。日本ではエミイ・ロオウエル女史が有名だが、テイツチエンズ女史も庸才ではない。女史の本は二冊ある。これは一九一七年に出た、二冊目の PROFILES FROM CHINA から譯した。譯はいづれも自由譯である。

月光

——Judith Gautier——

満月は水より出で、
海は銀(しろがね)の板となりぬ。

小舟には、人々盞(さかづき)を干し、
月明りの雲、かそけきを見る。
山の上に漂ふ雲。

人々あるひは云ふ、——
皇帝の白衣の后(きさき)と、
あるひは云ふ、——
天翔る鵠(くぐひ)のむれと。

——同上——

陶器の亭

人工の湖(みづうみ)のなか
緑と青と、陶器(すゑもの)の亭(ちん)一つ。

かよひぢは碧玉の橋なり。
橋の反り、虎の背に似つ。

亭中に、綵衣の人ら。
涼しき酒、盃に干し。
物語り又は詩つくる、
高々と袖かかげつつ、
のけ様に帽頂きつつ。

水のなか、
明かにうつれる橋は
碧玉の三日の月めき、
綵衣の人ら
逆様に酒のめる見ゆ、
陶器の亭のもなかに。

夕明り

——Eunice Tietjens——

乾いた秋の木の葉の上に、雨がぱらぱら落ちるやうだ。美しい狐の娘さんたちが、小さな足音をさせて行くのは。

洒落者

——同上——

彼は緑の絹の服を着ながら、さもえらさうに歩いてゐる。彼の二枚の上着には、毛皮の縁がとつてある。彼の天鵞絨の靴の上には、褲子の裾を巻きつけた、意氣な踝が動いてゐる。ちらちらと愉快さうに。

彼の爪は非常に長い。

朱君は全然流行の鏡とも云ふべき姿である！

その華奢な片手には、——これが最後の御定りだが、——竹の鳥籠がぶらついてゐる。その中には小さい茶色の鳥が、何時でも驚いたやうな顔をしてゐる。

朱君は寛濶な微笑を浮べる。流行と優しい心、と、この二つを二つながら、満足させた人の微笑である。

鳥も外出が必要ではないか？

作詩術

——同上——

二人(ふたり)の宮人は彼の前に、石竹の花の色に似た、絹の屛風を開いてゐる。一人の嬪妃は跪きながら、彼の硯を守つてゐる。その時泥酔した李太白は、天上一片の月に寄せる、激越な詩を屛風に書いた。

（大正十一年一月）

飜譯小品

一　アダムとイヴと

小さい男の子と小さい女の子とが、アダムとイヴとの畫を眺めてゐた。
「どつちがアダムでどつちがイヴだらう？」
さう一人が言つた。
「分らないな。着物着てれば分るんだけれども。」
他の一人が言つた。(Butler)

二　牧歌

わたしは或南伊太利亞人を知つてゐる。昔の希臘人の血の通つた或南伊太利亞人である。彼の子供の時、彼の姊が彼にお前は牝牛のやうな眼をしてゐると言つた。彼は絕望と悲哀とに狂ひながら、度々泉のあるところへ行つて、其水に顏を寫して見た。「自分の眼は、實際牝牛の眼のやう

だらうか？」彼は恐る怖る自らに問うた。「ああ、悲しい事には、悲し過ぎる事には、牝牛の眼にそつくりだ。」彼はかう答へざるを得なかつた。

彼は一番懇意な、又一番信頼してゐる遊び仲間に、彼の眼が牝牛の眼に似てゐるといふのは、ほんたうかどうかを質ねて見た。しかし彼は誰からも慰めの言葉を受けなかつた。何故と云へば、彼等は異口同音に彼を嘲笑ひ、似てゐるどころか、非常によく似てゐると云つたからである。それから、悲哀は彼の靈魂を蝕み、彼は物を喰ふ氣もしなくなつた。すると、とうとう或日、其土地で一番可愛らしい少女が彼にかう言つた。

「ガエタアノ、お婆さんが病氣で薪を採りに行かれないから、今夜わたしと一所に森へ行つて、薪を一二荷お婆さんへ持つて行つてやる手傳ひをして頂戴な。」

彼は行かうと言つた。

それから太陽が沈み、涼しい夜の空氣が栗の木蔭に漾つた時、二人は其處に坐つてゐた。頬と頬とを寄せ合ひ、互ひに腰へ手を廻しながら、

「をう、ガエタアノ、」少女が叫んだ。「わたしはほんたうに貴方が好きよ。貴方がわたしを見ると、貴方の眼は――貴方の眼は」彼女は此處で一寸言ひよどんだ。――「牝牛の眼にそつくりだわ。」

それ以來彼は無關心になつた。（同上）

三　鴉

鴉は孔雀の羽根を五六本拾ふと、それを黒い羽根の間に插して、得々と森の鳥の前へ現れた。

「どうだ。おれの羽根は立派だらう。」

森の鳥は皆その羽根の美しさに、驚嘆の聲を惜まなかつた。さうしてすぐにこの鴉を、森の大統領に選擧した。

が、その祝宴が開かれた時、鴉は白鳥と舞踏する拍子に折角の羽根を殘らず落してしまつた。

森の鳥は卽座に騷ぎ立つて、一度にこの詐僞師を突き殺してしまつた。

すると今度はほんたうの孔雀が、悠々と森へ歩いて來た。

「どうだ。おれの羽根は立派だらう。」

孔雀はまるで扇のやうに、虹色の尾羽根を開いて見せた。

しかし森の鳥は悉、疑深さうな眼つきを改めなかつた。のみならず一羽の梟が、「あいつも詐僞師の仲間だぜ。」と云ふと、一齊にむらむら襲ひかかつて、この孔雀をも亦突き殺してしまつた。

(Anonym)

(大正十四年十二月)

未定稿・斷片

第一

銀座通りを通る圓太郎馬車の喇叭の音が、雪曇りの空の下に、肌寒く聞えて來る。時折、埃をまき上げて通る風も、今日ばかりは身にしみるやうに冷い。

うす暗い店に坐つて、藝州正德丸の金看板を後に、獨りで賣藥の包紙を刷つてゐた父は、ばれんの手を止めると、黑く潤陽湯と出た半紙を、叮嚀に版木から離しながら、

「おい、私の留守に池田さんが來はしなかつたかい。」と、次の間へ聲をかけた。

「いいえ。」と答へたのは、姉の聲である。四五日前から、面疔で寢てゐる母の世話はもとより、十六になる妹の面倒から、朝夕の水仕業まで、皆、この姉がひとりでした。尤も、店には、まだ肩あげのとれない小僧を一人、使つてゐたが、それさへ、一昨日、親の病氣だと云つて歸つたぎり、未に何のたよりもない。――姉は今も、妹の留守を病人の枕もとで、皸のきれた指の先を氣にしながら、一時の間も惜しいやうに、潤陽湯の袋を縫つてゐるのである。

「阿父さん。」病人の眼のさめるのを憚るやうな聲で、今度は姉の方から、語をかけた。

「何だい。」

「それよりかね。」
「ああ。」父は又、賣藥の包紙を刷り始めた。
「今日はね。大へんな騷ぎがあつてよ。」
「大へんな騷ぎだ？」
「ええ。」
姉は、麻の袋のふちを、赤い絹糸でかがりながら、こんな話をした――同じ南大阪町の露路に、永年亞米利加でコツクをしてゐた男が住んでゐる。つい近頃、あつちから歸つて來たばかりで、築地の異人館か何かに勤めてゐるらしい。向ふへ行く前から、お上さんがあつたので、今では二人の間に、小供が三人出來てゐる。所が、今日、亞米利加の女唐が一人、不意にこの男の家へやつて來た。お上さんが、亭主に白狀させた所によると、亞米利加でこの女唐と夫婦約束までした事があるのださうである。お上さんが泣けば、女唐も泣くと云ふ始末で、板挾みになつた亭主は隨分、困りきつたらしい。すると、女唐の方では、この男に欺されて、はるばる日本へ來て見ると、賴みにしてゐた當人が、女房子もあるとわかつたので、口惜しまぎれに、逆上したものか、いきなりその露路にある井戸の中へ、身を投げた。早速、長屋の連中が出て、引上げたから、命には別狀がなかつたものの、逆上は中々鎭まらない。さつき、姉がそつと覗きに行つた時も、毛布のやうな物にくるまりながら、その家の上りはなに腰をかけて、氣違ひのやうにおいおい泣いてゐたさうである。

「いくら、異人だつて、あんまり可哀さうですわ。」

「さうさね。」

父は氣のなささうな聲で、かう云つた。氣のなささうな聲を出すのも、無理はない。御維新以來、ひきつづいて、二度も火事に遇つてからと云ふものは、何かにつけて手違ひが多く、以前は手廣く諸方の御金御用をつとめてゐた津國屋も、今では賣藥を渡世にして、僅に一家の口を糊してゆくばかりである。所が、それでさへ、近頃の不景氣には、何かと不如意な事が多いので、とうとう父は、懇意にしてゐた池田と云ふ道具屋をつてに、妹の雛道具を、三十圓で横濱の異人に、賣渡す約束をした。手つけの金は、もうとうに貰つてある。あとは唯、殘金と引かへに、池田が雛道具をひきとつて行きさへすればよい。――父は、その手つけの金の中で、今日自分がわざわざ行つて買つて來た、五分心のランプの事を思つた。さうして、その新しいランプの光で、一家四人でしたためる夕飯の事を思つた。

「無盡燈も今夜でお暇か。」刷上げた何枚かの包紙を揃へながら、獨言のやうに、父はかう呟いた。

×　　×　　×　　×　　×　　×

曇つてゐるせいか、日の暮が慌しい。――留守にしてゐた妹が、「ただいま」と父や母の前に手をついた時には、もうランプの光が、あかるく部屋の中にともつてゐた。

妹は、從來、津國屋へ出入りをしてゐた肴屋が、今度商賣換をして、その頃評判の人力車夫になつた所から、何でもお孃さんをのせてあげると云ふので、下谷黒門町の親類をたづねかたがた、

午前からその車にのつて、上野と淺草とを見物に出て行つた。——唯、人力車にのると云ふだけで、冬枯れの上野と淺草とを見に出かける程、當時の人々は、まだ「開化」が齎した一切の物を、珍らしがつてゐたのである。

父と姉妹とは、明るいランプの下で、夕飯の膳についた。寢がへりも碌に出來ない母には、かうして夫と娘との食事をするのを見てゐるのが、何よりも樂しみだつたらしい。

「黑門町ではみんな丈夫かい。」母は力のない聲で、妹にかう尋ねた。

「ええ。」ランプの火が、乳色の蓋の下で、黃いろく燃えてゐるのを、もの珍らしさうに眺めてゐた妹は、慌てて眼を母の方へむけながら、「榮どんが下つたんですつて。」

「榮どんつて云ふのは？」

「あの小僧さんでせう。この頃來た……」姉が父の給仕をしながら、口を添へた。

「阿母さんは知らないよ。黑門町へも久しく行かないからねえ。」

「榮どんはね、あの氣違ひになつたんですつて。」

妹は、自分ばかりがさう云ふ事を知つてゐるのを得意にするやうな口調で、食事のあひまにかう云ふ話をし始めた。——黑門町の店には、橫濱から買つて來た舶來の時計がある。これには不思議な機關の仕掛があつて、時を打つ時になると、振子の下から、靑い鳥が三羽出て來る。さうして、それがその打つ時の數だけ、規則正しく羽ばたきをする。これが近所の評判になつてゐた。そこで、往來を通る人が、皆この時計を見ようとして、必家の內をのぞきこむ。中にはわざわざ

立止つて、氣長に時の打つのを待つてゐる人もある。すると、これが新參の榮吉と云ふ小僧の氣にかかつた。通る人も通る人も、皆自分の顏をのぞいて行く。何故あんなに人が自分を氣にするだらう。から思ふのが嵩じると、始終自分が誰かにつけねらはれてゐるやうな氣がし始めた。榮どんは、かうして、舶來の時計の爲に、追跡妄想狂になつてしまつたのである。

「時計が仇だな。」父は、茶碗へ湯をつぎながら、冴えない顏をして、こんな冗談を云つた。

「新しい物はいやだねえ。時計だの汽車だのつて……」

母は呟くやうにかう云ひながら、眩しいランプの光に疲れたらしく、睫の長い眼を合せた。

× × × × ×

食事がすむと、姉は妹の床をとつて、それから、母の疔を蒟蒻で溫めながら、妹の手習ひを見てやるのが常になつてゐた。

「まだ、お雛樣はある？」

細い指に、黃いろい軸の筆を持つて、たく／＼と云ふ字を書いてゐた妹は、父の方をぬすみ見ながら、そつと姉にかう尋ねた。

「ああ。」

姉も亦、父の方をちよいと見て、それから首をたてに振つた。父は、姉の縫つて置いた袋へ、せつせと煎じ藥をつめてゐるのである。――暫くすると、妹は又、小さな聲で、

「私、もう一遍見たいわ。」

「そんな事を云ふと、阿父さんに叱られてよ。」姉がやはり、小聲でたしなめた。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

義理がたい父は、賣買の相談がきまつた日から、姉妹に雛をいぢらせなかつた。勿論、賣つた相手にすまないと思つたからばかりではない。さう云ふ事をして、なまじひに二人の思切りを惡くする事を、惧れたからである。

姉は、その時、眠たと思つてゐた母の眼から涙が流れるのを見た。

「お前は早くねな。」

藥を包んでゐた父は、下を向いたまま、叱るやうに、妹に云つた。

「もう、それを拵らへなくつても、いいから。」

日頃から、父の嚴しい性質を知つてゐた妹は、おづおづ、丸藥を拵へるのをやめて、さつき姉がとつて置いてくれた床の中へはいつた。姉との内證話が、父の耳にはいつたと思ふと、流石に小供ながら胸が痛むのである。しかし、床の中は、姉の入れてくれた行火で心もちよく、暖まつてゐる。その上、一日のりなれない人力車にのつた疲れも、亦少くない。妹は、何時の間にか、眠入つてしまつた。

それから、何時間の後だか知らない。妹がふと眼をさまして見ると、何時の間にか、ランプが行燈にかはつてゐる。すやすや寐息の聞える容子では、母も姉もよく寐ついてゐるらしい。妹は、

その時、父がまだ寝ずに、獨りで起きてゐるのを見た。それから、雛道具を入れた箱が、幾つとなく、戸棚の奥から、取出されてゐるのを見た。最後に、父が、その箱の中から出した、内裏雛や五人囃しを、左近の櫻や右近の橘と一しよに、眼の前へならべながら、何時までも飽かずに、ぢつと眺めてゐるのを見た。

妹は、その時心に、二度とお雛樣を見たいなどとは、云ふまいと誓つたのである。

× × × × × ×

その時の妹が、今年六十…の春をむかへた。自分の母がそれである。

（紺珠十篇の中）

（大正五年）

〔題未定〕

教室の窓かけが、新しくなつた。――今までは、埃で鼠色になつたやつが、だらりと、ペンキのはげた窓枠の兩側にぶら下つてゐたが、今日からは、それがまつ白な、糊のまだ落ちない位、新しい金巾に變つたのである。

前の窓かけを見ては、自分はよく、古い旗の事を思つた。その頃、少年世界に、「プレプナの喊聲」と云ふのが出てゐて、それが露土戰爭の次第を小供にわかる程度で、可成詳しく、紹介してゐる。自分はその中で、オスマンパシヤが、とうとう、露西亞の攻圍軍に降服する件を、何度となく愛讀した。降服の通知を發すると共に、土耳古の將軍は、部下に命じて、要塞の上の軍旗を下させる。軍旗は、煙硝の煙にまみれたまま、空から力なく下りて來る。――古ぼけた窓かけは、自分に、屢〻このプレプナの半月旗を思ひ出させた。オスマンパシヤは、實に、當時の自分にとつて、クルーゲルと共に、誰よりも「えらい人」だつたのである。

自分の席は、丁度その窓の前にあつた。教室にならんでゐる机の順から云へば、教壇に最も遠い、一番、後の列である。机は、二人づつ並んで腰をかけるやうな構造で、自分たちは、これを

思ふ。

自分と同じ御座には、丹阿彌保之助と云ふ、古風な名前の人が坐つてゐた。苗字通り、漆屋の息子で、色のくろい、大がらな、それでゐて、どこか敏捷な、如何にも下町で育つたらしい人である。自分は丹阿彌の事を、よくなまつて、「たんがみ」さんと云つた。さうして、中央新聞の日曜附錄か何かの講談にある、觀阿彌と云ふ、人の好い茶坊主を、單に發音上の聯想から、この人の名前とむすびつけて、覺えてゐた。

窓かけのうしろは、運動場で、乾いた赤土が、學校と回向院との境にある、黑塀の所までつづいてゐる。回向院に、相撲の小屋がけが出來ると、その黑塀の後で、始終、やかましい群集の聲がした。大砲が橫綱を張つて、常陸山と梅ケ谷とが、東西の大關だつた頃である。――自分と丹阿彌とは、その聲が一しきり高くなる度に、そつと後を見た。後には、新しい窓かけが、丁度聲にゆすられたやうに、日の光の中を、靡揚に動いてゐる。……

その頃、學校には、掃除番と云ふものがあつた。一つの御座にゐる二人が、遊步時間に教室へのこつてゐて、黑板を拭つたり、御座へはたきをかけたりするのである。

或日、自分と丹阿彌とが、その掃除番になつた。十分の遊步時間は、教室にのこつてゐる者には、可成長い。自分は御座の腰かけの上へのつて、丹阿彌と二人で、オスマンパシヤが、要塞の上にひるがへる半月旗を下す眞似をした。

並んでゐる幾つもの御座は、皆、味方の要塞や敵の堡壘である。窓の外には、運動場が、黑海の水面を、眩しく日にかがやかせてゐる。黑板と地圖との山々も、敵の砲列が擊ち出す煙で、もう姿を隱さうとしてゐるらしい。副將の丹阿彌は、窓かけの一方のすみを握りながら、自分の命令を待つてゐる。オスマンパシヤは――自分は、手を額にかざして、敵味方の陣地を見渡した。敵の兵力は、味方に十倍してゐる。しかも、味方は旣に、糧食も彈藥も、つきてしまつた。もう降服の外に道はない。

「軍旗を下せ。」

自分は、窓かけの他のすみをつかんで、かう云つた。さうして二人とも、力を合せて左右へ窓かけを引張つた。

その拍子に、窓かけは、びりりと音を立てて、二つに裂けた。

オスマンパシヤと副將とは、あつけにとられて、顏を見合せた。もう要塞も堡壘もない。一切の空想は、瞬刻に跡を拂つて、二人の前には、唯、新しい窓かけが、裂けたまま、風に動いてゐる。……

二人は、當惑した。が、オスマンパシヤは幸に、まだヒロイズムを忘れなかつた。

「僕が先生にさう云つてくる。君は默つてゐ給へ。」

自分は、敎員室へ行つて、擔任の小林先生の前に立つた。

「先生、僕は窓かけをやぶきました。一人で。」

十何年かを隔てた今日になつても、自分はこの得々とした一語を思出す度に、不快な氣がしない事はない。さうして、こんなこましやくれた小供だつた自分を、情無く思はない事はない。

（大正五年）

絹帽子

その頃自分は、S――と云ふ海水浴場のある町から二三町はなれた、或素人家に宿をとつてゐた。この近所にはめづらしい瓦葺の二階建で、家の前は丁度S――から、停車場のあるN――へ行く、砂の多い街道である。後は芋や豆を植ゑた畠の間を十歩ばかり行くと、一列につゞいた黍を境にして、向ふは割合になぞへな崖になる。その崖を下りさへすれば、すぐに海岸の砂濱で、それから波打際を海水浴場まで行くには、十分とかゝらない。勿論、海は家の中からも、黄ばんだ豆の葉の上に、一目に見渡す事が出來るのである。

宿の家族は、年より二人きりで、二人とも元は東京に住んでゐたとか云ふ事である。これは自分にこの宿の世話をした、S――にゐる友だちが話してくれた。亭主は脊の低い、猫背の男で、N――から乘合馬車で、こゝへ着いた時にも、細引きでからげた荷物を解くのに、うるさい程世話をやいたが、上さんはそれと反對に、どこか尊大な所のある、でつぷり肥つた婆さんで、一言で形容しようとすると、どうしてもまづ「老皮嚢」と云ふ漢語でも借りるより外に仕方がない。自分はこの上さんの、始終彼女自身の鼻を見てゐるやうな、傲慢な態度が氣に入らなかつた。實

は小さなおぼこに結つて、洗ひざらした藍鼠の帷子の紋附きを着て、叮嚀な東京辯で、初對面の挨拶をされた時から、何となく夫を剋してゐさうな、面憎い氣もちがしてゐたのである。

この先入はその後間もなく、「老皮囊」が髮結ひをしてゐるのを見てから、一層確な肯定を與へられたやうな氣がし出した。殊に亭主はこれと云つて、きまつた商賣も持たないらしい。大抵晝間は長羅宇の煙管で、漫然と莨をのみながら、髮を結ひに來る近所の上さんたちと、氣樂な饒舌を弄してゐる。これでは「老皮囊」に一日でも、二日でも置くやうになつたのは、別段不思議でも何でもない。だからここへ來た三日目に、亭主が頭を搔きながら、のその二階へ上つて來て、宿料を兎も角も半月分、先拂ひにしてくれと云つた時も、自分はこれも「老皮囊」の指圖にちがひないと臆測した。

亭主は莨をふかせるのと、無暗に舌を動かすのとを何よりも樂しみにしてゐるらしい。外の往來を通る人でも、隣の軍鷄屋へ來た人でも、人の顏を見さへすれば、何かしらきつと話しかける。さうして向ふが返事さへしてゐれば、何時までも獨りで饒舌つてゐる。もし「老皮囊」が何か用をたのまなければ、長い夏の一日中、駄辯ばかり振つてゐるかも知れない。所が上さんは風呂を沸かす時になると、亭主が髭を剃りかけてゐても、必裏にある井戸から、何杯でも水を汲みこませる。それでも亭主は唯、「おい來た」とか何とか云つて、別に腹を立てる容子もない。晒木綿の襦絆を着た亭主が、半分髭を剃りかけたまゝ、豆畠の中にある据風呂へ、忙しさうに水を汲み出すのを見ると、自分は何時でも氣の毒と云ふよりは、滑稽な感じが先に立つた。

「夫婦と云ふものは、妙なものだね。」――自分はこの話をS――にゐる友だちに話した後で、かう云つて笑つた事がある。

所が一週間ばかりする内に、亭主がだんだん二階へ上つて、饒舌つて行く事が多くなつた。自分が少しでも暇だと思へば、何時でも手のついた莨盆をさげて、狭い猿梯子を上つて來る。それから始は此方の話を聞くやうな態度で、駒込へも市内電車が通じたさうですなどと云つてゐるが、少したつと對手には全然無頓着で、饒舌りたい丈根氣よく饒舌つて行く。殊にこの男は忌々しさうに、「老皮嚢」のかげ口をよく云つた。

「うちの婆あのやうな奴にかゝつちやあ、たまりませんや。手前さへよければ、人はどうでもいいつて云ふやうな奴ですからね。」

まるで水を汲まされてゐる時とは、別人のやうな口吻である。その時自分はよく亭主の顔に、卑しい、しかも狡猾さうな侮蔑の表情の浮ぶのを見た。さうしてこの駄辯家の亭主が、老妻の頤使に甘んじながら、肚の底ではその老妻を莫迦にしてゐる事を知つた。

すると或日の午前、自分が何時もの通り空氣枕の上へ頭をのせて、持つて來た書物を讀んでゐると、階下で亭主が「老皮嚢」と、何か言合つてゐる聲がした。勿論自分は憐むべき亭主の平生を知つてゐるから、又何か餘計な事をして、上さんに油を取られてゐるのに違ひないと思つてゐた。すると、暫くたつてから、急にどたばた取組合ひが、始まつたやうな音がしたと思ふと、何時になく亭主が一調子張上げて、惡體をつく聲が聞えた。それからどつちかが何かで一方を打つたら

しい音がした。自分は彼是五分ばかり、半分頭をもちあげたまま、階下の容子を窺つてゐたが、あまり騒ぎが大きいので、そつと梯子の中段まで下りて見ると、もう隣りの軍鶏屋の親方が來て手と頭とを振り立てながら、しきりに兩方を宥めてゐる。唯意外に思つたのは、打たれたのが強い「老皮嚢」の方で、その時もまだ入口の土間へ跣足でしよんぼり佇んだまゝ、帷子の袂に顏をかくして、娘のやうにしくしく泣いてゐた。自分があの尊大な「老皮嚢」を可哀さうに思つたのは、この時が正に始である。

それから二階へ引き返して、又本を讀んでゐると、やがて亭主が莨盆と將棋盤とを兩手に持ちながら、悟然と猿梯子を上つて來た。折角養生にやつて來たのに、本ばかり讀んでゐたのでは、毒になるに違ひないから、一つ將棋でもおさしなさいと云ふのである。自分は今この亭主と、將棋をさすと云ふ事が、階下に泣いてゐた老妻の爲に、何故かある善行をしてやるやうな心もちがした。そこで何も知らないやうに、さしたくもない將棋を二番さした。亭主は見慣れない鉈豆の煙管で、悠々と莨をのみながら、時々お手はなどと云つてゐたが、それでも流石に落着いてはゐられないやうな調子だつた。將棋は、二番とも飛車取王手で、造作なく自分が勝つてしまつた。

その日の午後海水浴に行くので、芋畑の中の干物棹にかけて置いた猿股をとりに行くと、上さんが縁側に腰をかけながら、軍鶏屋の親方と話してゐた。亭主は留守の容子である。猿股は紐が絡んでゐるから、ほどくのに中々手間がとれる。その間に自分は「老皮嚢」が、親方に喧嘩の顚末を話してゐるのが耳にはひつた。何でも亭主がこの間から洗つておけと云つた梅干の瓶を洗はず

にゐたものだから、とうとう亭主が腹を立てたのださうである。親方はお上さんの話を聞きながら、そのあひ間に兎角亭主が亂暴すぎるのを攻擊してゐた。
「何だつてお前、煙管の羅宇が折れる程、人を毆ると云ふ法があるもんぢやねえ。」
すると、不思議にも「老皮囊」は、反つて熱心に、彼女を打つた亭主の立場を辯護し始めた。うちのお爺さんは昔から弱い者にはやさしいが、强い者には意地になつて、楯をつくと云ふ癖がある。それを承知で强く出たのは、私の方が惡かつた。その外にお爺さんはこれと云つて、惡氣なぞある人ではない。——自分は又この老妻が可哀さうに感じられた。「老皮囊」は亭主を頤使しながら、しかもその亭主を肚の底ではちやんといとしんでゐるのである。自分は頤使に甘んじながら、内心上さんを輕蔑してゐる亭主の事を考へた。さうして、前とは全く逆な意味で、夫婦と云ふものは妙なものだと思つた。
その翌日は亭主が又、手のある莨盆をぶらさげて、例の通り二階へ上つて來た。今度は自分で、昨日やつた夫婦喧嘩の話をしに來たのである。
「時時こらしてやらないと、つけ上りやあがるんでね、始末におへない婆あです。」
亭主は、話の續きとして、今のお上さんには子がないと云ふ事、先妻の子は銀座の時計屋で番頭をしてゐると云ふ事、老より二人の生活費はその仕送りから出ると云ふ事を話した。その時自分の同情は、ひとり「老皮囊」に向つて動いたばかりではない。かう云ふ下等な親父を養ふ爲にせつせと働いてゐる息子にさへ、氣の毒な心もちがした位である。

しかし四五日たつてから、又亭主がいつもの樣に、晒木綿の繻絆一枚で、風呂へ水を汲んでゐるのを見ると、自分は「老皮囊」に同情したのが多少莫迦げてゐるやうな氣にもなつた。

亭主が好んで話題にするのは、宮內省の內情と華族仲間の生活とだつた。しかもそれを聽き手から、或程度の尊敬を當然拂つて貰ふつもりで、あひ間あひ間に人の顏を見ながら、得意らしく話すのである。自分は亭主の駄辯の中でも、これに一番まゐらされた。しかし又或點ではこれが自分の好奇心を挑撥する事もないではなかつた。一體かう云ふ話をするこの男は、東京では何を商賣にしてゐたらうと思つたからである。自分はさう思ふ度に、あの「老皮囊」が着用してゐる、帷子の紋附きを眼に浮べた。けれども勿論それだけでは、確な推測を下しやうもない。亭主自身は、何時でも面と向つて御商賣は何ですと訊かれると、いやはや、どうも御話にもならないやうな事をしてゐましたとか何とか云ふ丈で、それ以上は此方で何と云つても、きつと話をそらしてしまふ。尤も一つには不快な方が、好奇心よりも強いものだから、自分も大抵それよりは立入つて訊かうともしなかつた。

所が自分の滯在も終りに近くなつた或日、亭主は豆畠と芋畠との間へ、二枚續きの蓆を敷いて、その上へ絹帽子を幾つもならべて、土用干をし始めた。絹帽子の數は勘定すると、丁度みんなで十一ある。自分は二階のてすりによりかゝつて、黃色い豆の葉と暗い綠色の芋の葉との中に、合計十一個の絹帽子が、土用の日の光に照らされながら、油を塗つたやうに光つてゐるのを見ると、思はず笑はずにはゐられなかつた。しかも亭主は猫背を屈めて、蓆のまはりを歩きながら、時々

絹帽子の一つをとつては、わざわざ頭へのせて見てゐる。もし自分が亭主の饒舌をさほど不快に思はなかつたら、恐らく自分は階下へ下りて、亭主と一しよにその絹帽子を頭にのせて見たかも知れない。

しかしその又一方では、何故この亭主が十一の絹帽子を持つてゐるか、それが自分は知りたかつた。そこでこの頃割合に好意を持つてゐる「老皮嚢」が、晩飯の膳を持つて來た時に、なる可く當らずさはらずに、亭主の商賣を尋ねて見た。すると、

「なにあなた、馭者をして居りましたのさ」と云ふ答があつた。

自分は落語の落ちを聞いた時のやうな、可笑しさをこらへなければならなかつた。馭者と云ふ單語一つで、帷子の紋附きと華族と宮内省と絹帽子との間に、今まで摸索して得なかつた連絡が、訣なく出來上つてしまつたからである。

それから二三日の間曇天がつゞいた。さうして、その頃から海水浴場には、だんだん海月が多くなつた。泳ぎさへすれば、必刺される。刺された痕が自分は又、亞鉛軟膏をつけても癒らない。そこで愈、東京へ引上げる事に決心した。道化じみた亭主の顏を見なくなるだけでも惡くはない。——さう思ふと、俗惡な仕事が待つてゐる殘暑の東京へ歸るのさへ、可成うれしい心もちがした。

愈、歸ると云ふ一日前に、ちやんと荷造りをすませてから、自分はS——にゐる友だちの家へ、暇乞ひに行く事にした。階下では亭主も上さんも、今日はめづらしく日が出たから、虫干のあと片づけに忙しい。梯子を下りると、緣側にならべたフロツクコオトに目がついた。これも、絹帽

子と同じやうに、馭者をしてゐた頃の紀念であらう。自分は事によると今夜は、泊るかもしれないと云つて宿を出た。

友だちの家に一晩厄介になつて、翌朝海岸の砂濱を獨りで歸つて來たのは、丁度五時少しすぎであつた。N――S――間を連絡する乘合馬車の時間の都合で、朝早く宿へ歸つてゐる必要があつたからである。空を見ると昨日とはちがつて、一面にどんより曇つてゐる。海にも今日は靑い色が見えない。唯一面に見渡す限り、綠がかつた灰色の波が、退屈さうな呟きを送つてゐる。自分は爪先へ眼をやりながら、大股にすたすた步いて來た。

しばらくしてふと顏を上げると、五六間向うの砂の上に、一人の男が立つてゐる。絹帽子をかぶつて、フロツクコオトを着た、脊の低い、猫背の男である。男は鍬を立てたやうに、唯一人まつすぐに佇んだ儘、灰汁のやうな海を眺めてゐる。氣がつくと自分は何時の間にか、宿の前の砂濱に來てゐたのである。

自分は默つて、亭主に近づいた。

「お早う。」

亭主は、何時になく口數を少く、自分の「お早う」に返事をした。

「大へん立派ななりをしてゐますね。」

「へえ、なに、昔こんな物をきた事があるもんですから。」

亭主はフロツクコオトに絹帽子をかぶつて、自分に遇ふと云ふ芝居じみた事を少しも恥しいと

は思つてゐないらしい。自分も亦この間だけは、この卑しい亭主に對する、何時もの反感を忘れてゐた。それ程この時の亭主の顔は、ふだんの卑しい、狡猾さうな表情を失つてゐたのである。自分たちは一列の黍がそよりともせずに立つてゐる、なぞへな崖を後にして、並びながら海を見た。徒に疲勞のみ多い、日常生活のやうに退屈な、曇つてゐる海を見た。さうして——別れた。

それぎり自分はまだ一度も、この亭主と「老皮囊」とに顔を合せた事がない。夏毎にS——の海岸を記憶にばかり浮べるのが、もう三年あまりになる。何故亭主が、さう云ふなりをして、獨り海岸に立つてゐたか、何故その時それが自分を動したか、それは自分の知る所ではない。唯自分は偶然が、たとひ短い時間だけでも、あの下等な亭主に對して、不可解な同情を抱かせた事を感謝したいと思ふのである。

（大正五年—同十年補筆）

遺書

已がこの遺書を書く理由は、非常に複雜してゐる。已自身でも何故已が之を書くかはつきりとはわからない。何故と云へばこの遺書を書くと云ふ事は、事實に於て、已の生涯の目的を——少くとも已が近頃になつて企畫した生涯の目的を破壞する事になるからである。しかし已はこの遺書を書かずにはおく訣にはゆかない。已の中にある或物が已にそれを要求する。いや、已の中にある或物は已にそれを否定するが、その或物に對する已の不安が强ひて之を書かせるのである。兎に角、已はこの遺書を書く事にした。書き了る事が出來るかどうか、書き了つてもそれを已があとまで保存する勇氣があるかどうかそれは完くわからない。もし書き了る事が出來て、更にそれを保存する事が出來たとしたら、君は之を讀む第一の人間になる筈だ。その時、君は事によると、一切を已の精神狀態の異常な事に歸着させようとするかも知れない。已は其解釋も一應は尤な事を認める。しかしそれをこの遺書の上まで擴充しようとするなら、それは斷じて間違ひである。已は君がこの遺書を、正氣な已の書いた物として、卽、こゝに書いてある凡ての事實に正當な信用を置いて、讀んでくれる事を希望する。さもなければ、已がこの遺書を書くことは全然、

無意味になつてしまふ。一生の大部分を無意味に浪費した事を悔いてゐる己にとつて、遺書を書く事さへ無意味になると云ふ事は餘りに殘酷な皮肉である。己は君が己の希望に〔添〕ふ事を信じて、これから本文へはいらうと思ふ。

己がこの病氣になつたのは、去年の十月であつた。その時、君は己にこの病氣が何でもないやうな事を云つた。しかし己は欺れなかつた。己は死ぬ、遲くとも來年の十月迄には死ぬ――かう己は確信した。何故と云へば己は、己のこの眼で、この病氣にかゝつた己の兄や己の從姉が、一年足らずで死んだのを現に見た事があるからである。己は醫者としての君の噓に感謝しない訣ではない。しかしその噓は、己を己の兄や己の從姉のやうに不用意に死なせる惧がある噓であつた。その點で己はこの噓を惡むと同時に、又この噓をついた君を惡む事になつた。成程、己は、己の死を豫知してゐる點で、兄や從姉より不幸かも知れない。しかし來る可き死に對して、己のしようと思ふ事を出來る丈滿足にし得る點では、彼等より遙に幸福である。今でも己はかう信じてゐる。それなら己は、己の死を前にして何をしようとしたか――己が君に今、書き遺さうと思ふのはこの事である。

當時、己の頭腦(あたま)を支配してゐた考は、己の死後に關する不安である。死後と云つても、死後の己の生命がどうなるかと云ふやうな問題ではない。己がスウェデンボルグやマアテルリンクに最も遠い人間である事は、君もよく知つてゐるだらう。かう云ふ人間だつたからこそ、君とも親交が結べ、一しよにラウベの顯微鏡を覗いた事さへあつたのである。己の感じた不安と云ふのは、全

然己の死後、己を知つてゐた周圍が如何に己を批評するかと云ふ問題にかゝつてゐた。勿論、その毀譽褒貶が死後の己に意識されるとは思つてゐない。しかし己にはそれが何よりも氣にかゝつた。之は明に矛盾である。が己の理性は之を矛盾と認めても、己の情意の要求は殆、不可抗な力で己の全意識をこの矛盾に吸收させた。人間の虚榮心（ヴァニティ）がその人間の生存してゐる期間よりより以上に擴大されると云ふ事は、遲蒔ながら己にとつてこの時始めて發見した事實である。そこで己は日夜に焦慮して、どうしたら死後の己の評價を高くする事が出來るかを考究し始めた。

己は職業から云へば、學者である。昔から言語學の講座を擔任して、今日までどうにか研究と講義とをつゞけて來た。しかし己は己の學問に關しては殆、何等の興味も持つてゐない。元來己は文藝上の創作に一身を委ねる心算でゐた。もし境遇と教育とが許したら、己は今までに幾篇かの創作を殘してゐた事だらう。所が事情は己を強ひて「文學」と云ふ學問の研究に從事させた。文藝上の作品を對象とする以上、その研究は必然に鑑賞と云ふ事を伴隨するから、純粹な科學としての「文學」と云ふ學問を成立させる事は、云ふ迄もなく不可能である。だから己は言語學の研究に步を轉じた。この場合は對象が「藝術」でなく、單なる文字の集合となる代りに、それ丈容易に一般科學の成立に必要な條件の下に立つ事が出來ると思つたからである。しかし、己がかう云ふ研究をしたのは、單に職業上の便宜からばかりで、己自身の興味からした事ではない。己にとつて、己の生命に關係のない知識の堆積は、全然無用の長物である。己は生涯の中で、最、單なる學者を輕蔑した。彼等は冬籠りをしてゐる熊が木の實を貯へて生活する如く、知識の貯蓄によ

つて、衣食する人間にすぎない。

（未完）

（大正五年頃）

天狗

私は十九の時に剃髪して、佛眼寺の仁照阿闍梨の弟子になりました。何故若い身そらで受戒なぞをしたかと云ひますと、それは今になつて見ればわれながら冷汗の出るやうな次第ですが、まつたく世間的な意味での立身出世がしたかつたからにすぎません。出家でもしなければ、門地のない私なぞは、一生、人の下に立つて暮さなければならないと云ふやうな事を、親たちから聞かされてゐましたし、私自身も僧正とか律師とか云ふ人たちの生活を見たり聞いたりして、羨しく思つてゐた時ですから、かたがた二つ返事で得度をしてもらふ事になつたのです。

所が愈〻出家して見ると、仕合せと少しづつ僧侶の生活と云ふものに興味を持つやうになつて來ました。勿論、それには俗人を下目に見る事が出來ると云ふ虛榮心の滿足もはいつてゐたのでせう。兎に角、立身出世と云ふ事を除いても、觀念三昧の生活が、可成私には意味のあるものになつて來たのです。

そこで十九、廿、廿一と三年の間は、佛眼寺の坊で無事にすごしました。しかし私の修業に、魔障がはいつたのは、それから間もなくの話です。私はその爲に、今まで夢想さへしなかつた苦

痛を經驗するやうになりました。性欲と懷疑との――中でも性欲の障碍です。

勿論、この二つの障碍が、今までは全然なかつたと云ふのではありません。唯この頃になつて、から云ふ事を罪惡と考へるのが、だんだん强くなつて來たものですから、それだけ又苦痛が大きくなつて來たのです。尤もこの二つの障碍は、ちよいと考へると實は一つのもので、懷疑が起れば從つて性欲も動く。だから一方さへ克服すれば一方は自然に消滅するとも見られさうですが、實際は中々さう簡單に埒があきません。それは二つが互に影響しあふ事は事實としても、その間の關係が見かけよりも遙に複雜なものだからでせう。兎に角私は始終、三熱の苦を受けてゐる天竺の龍蛇のやうな氣がしてゐました。

尤も同じ坊にゐた僧侶の中には「かはつるみ」の風がありましたから、性欲の壓迫をさう云ふ方面へ逃れてゐる人も可成ゐました。成程沙彌戒を外面的に守る爲なら、それもいゝでせう。しかし心の中で行はれる罪業を恐れてゐた私には、とてもさう云ふ事は出來ません。いえ、寧、女犯よりもさう云ふ事を惡みました。

しかしこの誘惑も、全然なかつたと云ふ訣には行きません。現に私は、同じ坊にゐた僧侶の一人が、脣の薄い、瘦せぎすな小童子と、さう云ふ關係になつてゐるのを見た時には羨しいやうな氣さへした事がありました。しかも、その羨しいやうな氣の後(うしろ)にあるものは、友情を求める心ではなくて飽く事を望んでゐる性欲でした。唯、この誘惑が懷疑の後援を得てゐなかつたのは何よりの幸です。――そこで私はさう云ふ事を誰にも憚らず惡めました。

それにも關らず、私の外面の生活は、何の變化もなく、順當に進んで行きました。他人の眼から見れば、私は持戒堅固な沙門だと思はれてゐたのに違ひありません。しかしさう思はれるだけ、私の心の苦痛は增して來るばかりです。私が何か序に、「玉に似たるの黃石」と云ふ句を見つけて、それがわざわざ私の爲に造られてゐるやうな氣がしたのも、丁度その頃の事でした。かうなつて來ると、もう私を苦しめてゐるのは、邪淫戒ばかりではありません。私は私の生活そのものが既に妄語戒を破つてゐると云ふ事さへ感じるやうになりました。

かうして私は、妄語と邪淫との二つの魔障のどちらかに墮ちなければならないやうなはめになりました。さうかと云つて、又、どちらに墮ちた方がいいと云ふ事を云はれる筈もありません。そこで私は、最後にこの魔障の克服を、諸佛菩薩の加護に求めようとして見ました。しかし懷疑はそれすらも私には許しません。邪淫とは何だ――かう云ふ疑問が絶えず私を襲つて來て、專念に祈誓を凝らさうとする私の心を紊すのです。さうかと云つて當時の私には積極的にこの疑問を解かうとする意志も勇氣も虧けてゐました。私は白狀します。還俗と云ふ考が起つたのも、二度や三度ではありません。

私は或日、恥しいのを堪へて、とうとう、私が性欲に苦しめられてゐると云ふ事を、阿闍梨の前で懺悔しました。さうして、この魔障を却けるには、どうしたらいいかと云ふ事を尋ねました。その時の私には、これがこの難關を切りぬける、唯一の手段のやうに思はれたからなのです。

阿闍梨は御承知の通り、誦經の聲のいいのを自慢にしてゐる人です。息をするのも苦しさうな

位肥つてゐる、眉のうすい、眼の小さな、見た所では如何にも感じの鈍ぶさうな、もののわからなさうな人ですが、それでも何處か親切な所があつて、私たちのやうな者でも一概に莫迦にするとか、始から相手にしないとか云ふやうな事は決してありません。阿闍梨は、私の懺悔を聞いてしまふと、その小さな眼をさも眠むさうにまたたきながら、大儀らしく首を傾けて、こんな事を云つてくれました。——成程、さう云ふ魔障のあると云ふ事は、惡い事には相違ない。しかし一方から考へれば、その魔障を魔障として感じる事が出來るのは、まだしも諸佛の功德に浴してゐると云ふものであらう。さうしたら、一層不退轉の志を勵まして、違順の魔を調伏するのが、我我佛弟子の務ではあるまいか。……

私は默つて阿闍梨の前を下りました。懺悔をした事が、豫期した何物も私に與へなかつた事を知つたからです。尤もこれは少しも阿闍梨が惡かつたからではありません。全く私自身に、懺悔をする人にふさはしいやうな謙遜な心持が虧けてゐた爲なのです。これは後になつて氣がついた事ですが、私はこの問題に關しては、阿闍梨自身にさへ、或疑を懷かずにはゐられませんでした。それは阿闍梨もやはり性欲の壓迫から自由になりきらないのではないかと云ふ疑です。或は一歩進んで、自由になりきらないのに、その壓迫を壓迫として感じる程眞面目に生活してゐないのではないかと云ふ疑です。たとへそれが識閾の外にあつたにせよ、兎に角かう云ふ疑を懷いて、私は阿闍梨の前へ出たのでした。何と云ふ矛盾でせう。瞽者の私は、同じ瞽者と知りながら、阿闍梨に津頭を問うたのです。

しかし、矛盾はまだ忍ぶ事が出來ました。それより今の私に最も不快な感じを與へるのは、その時その矛盾の後に潛んでゐた或淺ましい期待です。勿論これも敢へて意識に上つてゐたとは云ひません。が、幾分でもそれが識閾の外に伏在してゐた事は、私にとつて可成明な事實です――私は阿闍梨の僞善を期待してゐました。

私は阿闍梨の口から、手づよく性欲を否定して貰ひたかつたのです。それは惡い事とも思ひません。さう云ふ事に苦しまされる者を人畜のやうに貶めて貰ひたかつたのです。しかしその一方では阿闍梨が、自ら省みたらさう云ふ事の云へない人間だと云ふ事を、漠然と考へてゐたのです。云はば自分が妄語戒を破るのを恐れてゐた私は、恬然として阿闍梨が妄語戒を破るのを期待してゐました。人間はかうまで自分の利害ばかり考へるものでせうか。

何しろ、私はさう云ふ人間です。さう云ふ人間には、又さう云ふ人間で、懺悔をしたと云ふ事が意外な結果を齎しました。それは阿闍梨の前で、私が性欲に苦しまされてゐると云ふ事を懺悔してゐる中に、自然と性欲を肯定する氣もちが私の心の底へ忍びこんで來た事です。私はそれと同時に或慰安を感じました。さうして、その慰安の爲に、一層私自身がみじめな人間のやうな氣がしました。懺悔をしたその晩です。私は夜中寐ずに私の卑しい心に鞭策を加へました。しかしその間でさへ、魔障は私を去らないのです。私は私自身を惡まずにはゐられませんでした。

私が阿闍梨の許をうけて、寺から十町ほど離れてゐる、東山の奧のさびしい庵室へ、わざわざ獨りで引移つたのは、それから三日經たない内の事でした。私の私自身に對する嫌惡の情が、懺

悔をした日から一層つよくなつて、周圍の人たちに顔を合せるのさへしまひには苦しくなつて來たからです。唯、獨りでゐたい――これが私の願でした。獨りでゐると云ふ事が、私の修業にどれほど利益があるか、さもなければどれほど危險があるか、さう云ふ事を商量する餘裕なぞは全然私にはなかつたのです。

その庵室には一月ばかり前まで、私と同じ寺の僧が獨住みをしてゐましたが、その僧が老病で歿くなつた後は、暫く誰も住ひてがなかつたので、早速私の望が滿される事になつたのです。庵室と云ふのは山を後にした、藁葺きの一つ家で、廣さはほんの三間ばかりしかありません。まはりは低い竹垣になつてゐて、その片隅に先住が丹精してゐた、形ばかりの小さな藥草の畑があります。庭にはひよろ長い桐の木が一本、所々に大きな黄色い葉を落して、これもやはり先住が植ゑて置いてくれたのでせう。いぢけた豆菊が雁來紅と一つになつて、もの靜な秋の日に、細な花を簇らせてゐます。庵室の後は、山の崖との間に僅な空地を殘して、崖の向ふから水を引く筧の上に、時々四十雀が來てとまるばかり、その空地に立つてゐる柿の木には、實さへ稀になりません。下に立つて見上げると、それでも珊瑚珠のやうな物が晴れた空を後に一つ二つと數へられますが、それよりもこの木を、この庵室に住む人が忘れられないのは、秋の末から冬の始へかけて、よく筧の水を止める柹落葉があるからです――兎に角あたりはこの上もなく靜だし、さうかと云つて、又人里へもあまり遠くはなし、私にとつてこの位都合のいい所はありません。

そこで私は、黑い皮籠を一つ持つたなりで、愈〻この庵室に獨住みをする事になりました。

所が庵室へ住むやうになつてから、まだ十日も經たない內に、私は前よりも甚しい誘惑をうけるやうな事が出來ました。それは私の庵室へ、七條あたりに住んでゐる箔打の女房が時々、尋ねて來るやうになつたからです。

私は一目見た時から、それが「性」といふ事を考へさせずには置かない性質の女だと思ひました。もう彼是三十にはなつてゐたでせう。下賤のたるんだ、小鼻の際が何時でも潤つてゐるやうた、どことなく勝氣らしい顏をした女です。それが五日置き、十日置きに、下司の女を一人つれて、私の庵室へやつて來ました。何でも先住の僧とも懇意にしてゐたとか云つてゐましたが、それがほんとうかどうかは今でもよくはわかりません。唯、私の所へ來る口實?は、歿くなつた兒の追福を祈つて貰ひたいと云ふのです。

云はば私が今まで恐れてゐた誘惑が、今度は具體的に目前に迫つて來たのですから、たまりません。私は殆、日毎に、西の壁へかけた不動明王の畫像の前に手を合せて、不斷香の煙の中にひれ伏しながら、一切の卑しい妄想を拂はうと努めました。駄目です。或時、その女のした或身ぶりが、眼の前へ浮んで來て、どうしても離れません。……

それはかう云ふ時にした身ぶりです――或日、その女が精げた米を入れた餌袋と飾を入れた折櫃とを、下司女に持たせて來た事がありました。丁度、雨あがりで、私は不動明王に手向けた豆菊の花がらを、閼伽棚の下へ捨てに出た所でしたが、女は私を見ると、たるんでゐる下瞼を一層

たるませて、甘えるやうに笑ひながら、「路が悪いものですから、足をこんなに汚してしまつて」と云ひました。見ると、成程、右の足の指に泥がついてゐます。

——あすこの坂ででですか。

——いいえ、あの手前の藪の所で。

私はわざと無愛想な顏をして、それぎり口も聞かずに、又豆菊を切りはじめました。

——お前、それをここへお置き。

女は下司女の持つてゐた餌袋と折櫃とを庵室の簀子の上へ置かせました。さうして自分もそこへ腰をかけて、

——少し休ませて頂きませうね。

と云ひながら、泥のついてゐた足を少し上げて、それから右の手に鼻紙を持つて、その上げた足の指を、叮嚀に拭きました。勿論私は女の方には眼もやらずに、豆菊を切つてゐたのですが、その時その女のした身ぶりは苦しいほどはつきりわかりました。身ぶりばかりではありません。泥のついた細い指の形から、やさしい圓味を持つた踝(くるぶし)まで、一つ一つよく見えました。——祈誓を凝らしてゐる私の眼の前に浮んで來るのは、その時の女の身ぶりです。その時の女の足の指です。私は何度も身ぶるひをして、この想像を却けようとして見ました。しかしさうしてゐる内に、私がほんとうに心からこの想像を却けようとしてゐるのだかどうか、それさへもはつきりとしなくなつて來ます。私はしまひには、唯、不動明王の前に坐つてゐると云ふだけで、とめどなくそ

の女の事を考へてしまひました。

　さう云ふ日が何日續いたかわかりません。そこで私はとうとうこんな事を考へるやうになりました。「自分はとても一生この壓迫に堪へる事は出來ない。何時かしら必この欲望を充す時が來る。しかしそれが今である必要はない。第一自分はまだ廿二だ。それからあの女に格別愛情を持つてゐると云ふわけでもない。さうして見ればいくら苦しくても、今はこの壓迫に耐へる必要がある。醍醐を待つものは、酥を味はない」——私は丁度、母親が泣く兒をだますやうに、私の性欲をだまさうとしたのです。事實に於て私は、もうこの誘惑の前に屈服してしまつたと云つてもいいでせう。

　しかし私は兎に角「自分はあの女に格別愛情を持つてゐるわけでもない」と云ひ切りました。その癖、毎日その女の來るのが待遠しくてなりません。朝起きた時に、四十雀の啼く聲がする日には、きつと來る。——そんな迷信さへ持つやうになりました。尤も女が來ても、何を話すと云ふ事もありません。私は一つには自分に氣が咎めるのと、一つには下司女の手前を兼ねるのとで、何時もより無口になつてしまひますから、話も大抵平凡な世間話で、それも始終途切れ勝です。……さう云ふ具合で、どうにか一月ほど經ちました。

　すると或時雨のした日の午後、女がぬれながら獨りで私の庵室を尋ねました。この近くまで來たから、雨やみがてら寄つて見たのだと云ふのです。紫苑色の袷の衣を著て、何時になくはればれした顏をしてゐました。一體が血色のいい女なのですが、路を急いで來たと見えて、今日は耳

の根まで赤くしてゐます。

さう云つて、小鼻を動かしながら、笑ひました。あの始終、潤つてゐるやうな小鼻です。私はその時に、自分の顏がほてるやうな氣がしました。この女と二人きりでゐると云ふ事が私の心を騷がせたからばかりではありません。私が今、この女を「性」と云ふ點ばかり考へて見てゐるのを、自分ながら淺ましく思つたからです。

――御邪魔ぢやあありませんか。

――まあこつちへお上りなさい。そこでは、雨がかかるから。

私は、寺から持つて來た古い圓座(わらふだ)を出して女にすすめました。女は返事をしながら、簀子に腰をかけて、足についた泥を紙でふいてゐます。私の想像には又、あの女の足が浮びました。溺れる者は藁をつかむと云ふのでせう。私は横をむいて無意識に、机の上にあつた經文へ眼を落しました。それも乘彌陀願力　必生安樂國と云ふ句が、ちらりと見えたと思つたばかりです。又正面を見た時には、女がもうそこへ、小さな白い足が見えるやうに、しだらなく坐りながら、私が今までに見た事のないやうな眼をして、私の顏を見てゐました。それを見た時に私はもう、この誘惑に抵抗しようとする私の意志が、何の役にも立たなくなつてゐるのを感じました。――それだけです。私はその日、長い間私を苦しめてゐた沙彌戒の一つをとうとう破つてしまひました。

晴れ間を見て女が歸つた後で、私は枯れた藥草が雨にぬれて匂ふのを嗅ぎながら、ぼんやり經机に凭れてゐました。その時の私の心もちは、何と云つたらいいのでせう。勿論破戒したと云ふ

良心の苛責がなかつたとは云ひません。しかしそれよりも大きかつたのは或滿足です。それも感覺欲が滿足された時の心もちとは違つて、今まで解らなかつた事が解つたと云ふ——安心したやうな、その癖どこか物足りない所のある、一種別な滿足です。それも今でこそかう云ふ事も出來ますけれど、その時には一體滿足したのだか、それとも失望したのだか、それさへ判然とは解かりません。私は、さう云ふとりとめもない心もちに惱まされながら、桐の根元にさびしく咲いてゐる豆菊の白い花を眺めて、日の暮れるまで、ぢつと經机の前に坐つてゐました。

それから二三日の間は、不思議に氣が咎めて、不動明王の前へ香花を手向けるのさへ、氣が進まない位でしたが、その内にだんだん心もちが違つて來て、間もなく前の通り——或は前よりも懈怠なく、看經を勸めるやうになりました。なぜかと云ふと、前から私の心の中に潜んでゐた性欲を肯定する心もちが、何時の間にか深い根を下ろして、邪淫戒を守ると云ふ事と、僧侶の生活をすると云ふ事とが、互に何の關係もなささうに思はれて來たからです。ですから私は時々、以前の事を思出すと、何だか妙な氣がしました。性欲が起ると云ふ事さへ、阿闍梨の前へ出て懺悔をする程、良心の苛責を起させたのに、今はそれ以上の破戒をしてゐながら、何故かう落着いてゐられるのだらう——さう思ふと今でも不思議です。第一、女は夫の目を忍んで、毎日のやうに庵室へ通つて來てゐたのですから。

その後、私とその女との關係は二月近く續きました。さうしてそれが續くのにつれて少しづつ或變化が出來て來ました。それは、何時の間にか、二人共性欲を弄ぶやうになつて來た事です。

私が先へさうなつたか、女が先へさうなつたか、それは私にもわかりません。が、私だけについて云へば、第一に私は、性欲が起るのを待たずに、求めて性欲を起すやうになりました。何しろその女との關係が、私に云はせれば、まるで戀愛關係ではありません。私はその女を戀しく思ふ事よりも、憎く思ふ事が多く、憎く思ふ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
・・
。・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・（未完）

（大正六年頃）

夢幻

今夜は十六になる蓮香が、この家の美しい一人息子と、花燭の典を擧げる良宵である。廣い廳堂の中には、既に多くの客が簇々と紗帽を連ねてゐるが、いづれも肅然と威儀を正して、笑ひ興ずる聲さへ聞えない。客の靴の下にある廳堂の床は、見渡す限り磨き上げた碧い瓦を、つややかに海の如くひろげてゐたが、その瓦の盡きた正面には、不老長春の圖であらう。簇る花の臙脂を重ねたやうな上を蔽つて、蒼翠の枝をのべた松の幅が、客の頭を壓するやうに、重たく壁間を塞いでゐた。するとその前の卓に載せた、白磁の香爐から昇る煙も、縷々としてたなびきながら、この畫の容に立ち迷ふと、自然と瑞雲の趣をなして、「・・・・・・・・・・・・」とある聯の文字も、氣のせいか宙に浮んで見える。

その廳堂のまん中に、蓮香は媒人の後について、天仙玉女とでも形容しさうな、儼然たる新人の裝を凝しながら、描いたやうに立つてゐた。ここへ來る途の轎子の中で、暗い夜に降りしきる雨の音を聞いて、悲しい事ばかり思ひ續けたのも、今になつてはまるで嘘のやうにしか思はれない。この畫のやうな明さと、この華々しい廳堂の飾りつけと——これも或は一場の夢ではなから

うか。凝然として立つてゐた蓮香は自分の眼を疑ふやうに、梅花の匂のする堆い髷の上へ、一重輕々とかけた紅の頭面覆の下から、恐る恐るあたりを透かして見た。自分の傍には媒人の趙老が、日頃の氣むづかしさも忘れたやうに、長い髯を撫でながら、時々隣にゐる自分の方へ、滿足さうな微笑を送つてよこす。すると新人がそれに答へない代りに、つき添つてゐる養娘が、やはりうす痘痕のある顏に微笑を浮べて、嬉しさうに媒人の方を見返した。唯、自分について來た四人の若い傍娘ばかりは、厚く白粉を塗つた顏を、さつきから瞬き一つしないやうに、行儀よく一列に並べてゐるが、これは大方新人同樣、多ぜいの目に見られてゐる恥しさと戰つてでもゐるのであらう。

いや、これは夢ではない。情ない伯父の家の婢になつて、煮炊きの業に逐ひ使はれてゐた、悲しい昔こそ夢である。或はこれも無慈悲な伯母の爲に、盜みもしない金釵を盜んだと云ふ無實の罪を着せられて、裸の儘、門前の柳にくくりつけられた、暗い雨降の夜こそ夢である。今はもうあの恐しい夢も覺めた。自分には伯父もなければ、伯母もない。あるのは唯、父の縣令ばかりである。その父の慈愛で、自分は今日まで何不足なく育つて來た。さうして今夜は又、ここの息子の美玉のやうな少年と、花燭の大禮を擧げようとしてゐる――さうだ。これは夢ではない。

蓮香はもう一度、自分の考へを確めるやうに、眼をあげて美々しい廳堂の中を見まはした。が、さうしてゐる間にも、やがて新郎がここへ來て、自分と拜を交すと云ふ事を考へると、自然に顏が火照つて來る。嬉しいのか、恥しいのか、それもはつきりはわからない。唯かうしてゐると、

長い睫の先へ何時か涙さへたまつて來る。ああ、自分は幾度、今夜の花燭を夢みた事であらう。新郎は何時ぞや江上の競渡があつた時に、自分が轎子の中から水に投げた柘榴の花を、岸に繋いである龍船の舷で、拾ひあげてくれた少年である。あの時の水の光――牌樓の上の雜色の旗が、翻々と軟風にひるがへつて、金碧の彩を極めた競渡船の龍鱗が、徐に江波を分けて進んだ時、見る目も眩い水の光の中を、見物の人々の放した白い家鴨の群が、或は嚴しい艫の龍頭をめぐつて、或は青龍刀の形をした何本かの櫂の先を追うて、時ならない雪を亂したやうに、數も知らず的々と浮んでゐる。あの時、あの競渡に加らない龍船の臺上に立てた大きな涼傘が、翠金の天井をひろげた下で、今夜ここへ新郎として來る少年は、旣に船が江上へ辷り出してからも、やはりその柘榴の花を口へあてて、まるで銅鑼や笛の音も聞えないやうに、岸に轎子を据ゑた自分の方を、ぢつと何時までも見つめつづけた。――それから今夜まで殆一年に近い間、自分は、梳洗してゐる時でも、女紅にいそしんでゐる時でも、胸の中にあるその時の景色を、見はぐつたと云ふ事は一度もない。刺繡の針を休めてゐると、自ら龍船の形が目の前に浮んで來る。それから江上の波の音が、何處からか耳底に通つて來る。さうして最後に涼傘の影を浴びた、辮髮の長い美少年の姿が、やさしく微笑しながら現れて來る――さうして、とうとう、この待ちに待つた洞房花燭の夜が、媒人の苦心で自分たちの上へ臨んで來た。これがどうして、嬉しがらずにゐられようか。

……………

かう云ふ思ひに耽つてゐた蓮香は、自分の傍に立つてゐた媒人が、何時か見えなくなつたのに

も氣がつかなかつた。それがふと我に還つたのは、廳堂の扉が左右に開いて、大紅袍に粉底の皀靴をはいた新郎が、媒人の後から靜にはいつて來た時である。蓮香は體中に云ひやうのない戰慄を感じながら、思はず眼を落して、自分の美しい圓領の繡を、眺めるともなく眺めやつた。そこには金と銀とで絡んだ、何とも知れない五彩の花が、鸞鳳の嘴に啣へられて、きらびやかに春を驕つてゐる。しかし眼はその繡の上に漂つてゐても、自分を見てゐる新郎の姿は、不思議に眸底を離れない。新郎は廳堂へはいつた時から、あの時のやうに又ぢつと自分の方を眺めてゐる。唯、その眼なざしの中には、あの時とは違ふ不思議な何物かが、漣漪のやうに動いてゐるらしい。それは、新郎も自分と同じ、抑へ難い喜びを感じてゐるからであらうか。或は又、一度しか遇つた事のない自分たちを、新郎新娘としてこの廳堂に立たしめた、大きな運命の力の前に、一種の怖れでも感じてゐるからであらうか。

かう云ふ緊張した沈默が、どの位つづいたか分らない。が、程なく蓮香は、まるで物に驚いたやうに、慌しく視線を繡の花から離して、ほつと小さなため息をついた。これはその時、明い中にも明い燈火の光が、緣どりの金糸銀糸の上に落ちて、花の底の蕊や萼が、丁度星でも宿したやうに、きらきらと俄に輝いたからである。見るとこの燈火は、折しも二人の下僕の手で、內廳からここへ運ばれた一對の燭臺の光であつた。

蓮香はその下僕の一人を見ると、ふと夢の中で見た伯父の顏を思ひ出した。禿げ上つた額と云ひ、睫毛のない小さな眼つきと云ひ、この下僕と伯父とは、殆寸分の違ひもない。が、夢の中の

伯父は、蓮香の姿さへ見れば、すぐに憎さげに罵り立てたが、この下僕は恰も生れついた奴隷のやうに、誰の前にも恭しく腰をかがめて、鞠躬如と命に従つてゐる。殊に燭臺を据ゑる拍子に、金銀で花を描いた、紅蠟燭の焔がゆらりと動いて、一滴の蠟涙を床・・・（未完）

（大正七年頃）

あの頃の自分の事

〔第二巻二六三頁に〕

その頃自分は日本間の二階に、安物の西洋机や椅子を並べて、そこを書齋に定めてゐた。本は一時大分賣り拂つたから、書棚にはどれも大抵穴のあいた所が出來てゐた。その書棚のない壁には、西洋の畫の複製が、額になつて何枚もぶら下つてゐた。尤もこれはメディチの複製が關の山で、碌なものは一つもなかつた。額と云へばもう一つ、隅によせた机の前の壁には、寫樂の幸四郎の複製の額があつた。當時の自分は如何に西洋人が褒め立てた所で、浮世繪が日本美術の精髓だらうなどとは、どうしても考へられなかつた。大部分の浮世繪は、唯、版畫としての色の面白さが自分に訴ふだけだつた。畫家で云ふと世界的な北齋が、自分は先大嫌ひだつた。彼はマンネリズムの大家であると共に、鼻持ちのならない俗趣味の大家だとしか思はれなかつた。(何時かヂオオヂ・ムウアが、一枚の北齋を救ふ爲なら、世界中の日本人を鏖殺しにしても好いと書いたのを讀んで、自分は半可の癖に生意氣を云ふなと憤慨した覺えがある。) 廣重も人の騷ぐ程、難有い風景畫家だとは思はなかつた。歌麿は流石に立派な藝術家には違ひなかつたが、あの蘭燈の油の

ぬくみのやうな、纏綿たる情緒の世界は、餘りに自分と緣が遠すぎた。淸長は――以下面倒だから省略するが、その中で自分がほんとうの意味で美しいと思つたのは、東洲齋寫樂の繪と鈴木春信の繪とだけだつた。そこでもう一度、机の前の壁にかけてある寫樂の複製へ立ち戻るが、自分はその額の下で、毎晩本を讀んだり、小說を書いたりした。時々洒落れて、側机や机の上へ、草花の鉢を置いた事があつたが、無精な自分は水をやる事を忘れて、大抵は情なく枯らしてしまつた。

この書齋の中が、混沌たる和漢洋の寄せ物であるが如く、その頃の（或は今でも）自分の頭の中には、やはり和漢洋の思想や感情が、出たらめに一ぱいつまつてゐた。だから讀む本もそれだけ又、恐る可く雜駁を極めてゐた。のみならずその和漢洋が、それぞれの範圍内でも、やはり雜駁を極めてゐた。尤も洋と云つても語學は、獨逸語も佛蘭西語もものにならなかつたから、比較的ものにならなさの甚しくない英語で、一番餘計本を讀んだ。（語學と云へば思ひ出すのは、當時成瀨と二人で伊太利語を習つた事である。これは習ふ學生が我々二人の外にゐなかつたので、途中で辟易し出したにも關らず、先生に對する義理から已むを得ず一年敎はつてしまつた。おかげで「一二三四」と云ふ勘定位なら、今でも出來る。）讀んだ本の中で、義理にも自分が感服しずにゐられなかつたのは、何よりも先ストリントベルグだつた。その頃はまだシエリングの譯本が澤山あつたから、手あたり次第讀んで見たが、自分は彼を見ると、まるで近代精神のプリズムを見るやうな心もちがした。彼の作品には人間のあらゆる心理が、あらゆる微妙な色調の變化を含んだ

七色に分解されてゐた。いや、「インフエルノ」や「レゲンデン」になると、怪しげな紫外光線さへ歴々としてそこに捕へられてゐた。「令孃ジユリア」「グスタフス・アドルフス」「白鳥姬」「ダマスコへ」――から並べて見ただけでも、これが皆同一人の手になつたとは思はれない程、極端に懸け離れたものばかりである。何かの中でドオデエは、小說を一つ書かうと思つても、パリの町には至る所に、バルザツクの影がさしてゐると嘆じてゐたが、ストリントベルグを知らない彼は、まだしも幸福な人間だつた。「マイステル・オラアフ」が現れて以來、我々は世界の至る所に、ストリントベルグの影がさすのを見た。しかもそれは獨り人間の上ばかりぢやない。彼は獸も書いた。鳥も書いた。魚も書いた。昆蟲も書いた。更に一步を進めては、日の光を吸つてゐる草花や風に吹かれてゐる樹木も書いた。實際彼は當時の自分にとつて、丁度魂のあるノアの箱船が蜃氣樓よりも大仕掛に空を塞いで漂つてゐるやうな感があつた。さうしてかう云ふ以上に彼の作品を喋々するのは、僭越のやうな氣が今でもする。又喋々した所で、到底あの素ばらしい箱船が、髣髴出來るものぢやない。出來たと思つたら、それは僅に船腹の板をとめてゐる釘の一本位なものだらう。(序に云ふが、ストリントベルグの「青い本」の中に、彼は內村鑑三氏の「余は如何にして基督敎徒たりしか」を讀んだと云ふ事が書いてある。はつきりは覺えてゐないが、そこには何でもあの樂天的な日本人でさへ、神を求めるのにはこれ程苦しんでゐるかとか何とか註がついてゐた。尤も彼に比べれば、樂天的なのは獨り日本人に限つた事ぢやない。)ぢや嫌ひな方は誰かと云ふと、モオパスサンが大嫌ひだつた。自分は佛蘭西語でも稽古する目的の外は、彼を讀んでよ

かつたと思つた事は一度もない。彼は實に悪魔の如く巧妙な贋金使だつた。だから用心したがらも、何度となく自分は贋金をつかませられた。さうしてその贋金には、どれを見ても同じやうたNihil と云ふ字が押してあつた。强ひて褒めればその巧妙さを褒めるのだが、遺憾ながら自分はまだ、掬摸に懷のものをひきぬかれて、あの手際は大したものだと敬服する程寛大にはなり切る事が出來ない。好惡から云つてこの二人の中間にゐる作家のものも、ちよいちよい覗いて見た事があるが、やはり面倒だからあとは省略する事にする。

それからこの自分の頭の象徴のやうな書齋で、當時書いた小說は、「羅生門」と「鼻」との二つだつた。自分は半年ばかり前から悪くこだはつた戀愛問題の影響で、獨りになると氣が沈んだから、その反對になる可く現狀と懸け離れた、なる可く愉快な小說が書きたかつた。そこでとりあへず先、今昔物語から材料を取つて、この二つの短篇を書いた。書いたと云つても發表したのは「羅生門」だけで、「鼻」の方はまだ中途で止つたきり、暫くは片がつかなかつた。その發表した「羅生門」も、當時帝國文學の編輯者だつた靑木健作氏の好意で、やつと活字になる事が出來たが、六號批評にさへ上らなかつた。のみならず久米も松岡も成瀨も口を揃へて悪く云つた。それから自分の高等學校以來の友だちの中には、一體自分が小說を書くのが不了見なのだから、匆々やめるが好いと意見の手紙をよこした男さへゐた。自分が Cacaoethes Scribendi と云ふ碌でもない拉甸語を覺えたのは、その男の手紙を讀ませられたおかげである。(彼はその下へ括弧をして「書きたがる病」と註を入れてゐた。)が、自分は小說を書くのは書く事に意味を認めてゐるのだから、

出來不出來にまで心を煩はす必要がないと云ふ便利な論理を楯にして、自分で自分の辯護をした。勿論それでも心細い事は、依然として心細かつた。事によると自分は、やはりその「書きたがる病」にとりつかれてゐるだけで、中學の英語の教師にでもなる方が適材ぢやないかと云ふ氣もする事があつた。そこへ幸「新思潮」再興の相談が持ち上つたものだから、多少勇氣を得て「鼻」を書き出した。それが捗取らずにゐる事は前にも云つたが、一週間ばかり揑ね返した揚句、やつと出りなりにも結末がついたのは、成瀨と二人で久米の所へ行つた、その日の晩の事である。自分は書いてしまふと、丁度鼻の先の置時計の針が、一時を指してゐるのを見た。書齋の中には、凋んだ菊の匂がかすかにしてゐる。前の壁には寫樂の幸四郎が、人を莫迦にしたやうに脂下つてゐる。机の上には書き損じた原稿用紙が、羅紗の色も見えない位ちらかつてゐた。自分はひどい氣疲れと一しよに、何とも云へないはかない心もちがした。愉快なる可き小說が、一向愉快とも何とも思はれなかつた。さうしたらどこか遠くの方で夜啼鷄の聲が二三度した。

×

〔第二巻二七八頁に〕

「君の方の大學も退屈だらうが、こつちだつて格別面白い事はない。英文科ぢや、松浦さんの講義が評判が好いやうだ。齋藤さんの講義も聞いたが、これもロオレンス先生よりは面白いと思ふ。

ロオレンスと云ふ人は個人的には好い御爺さんらしいが、講義だけは實際支離滅裂でね。さうさう、ロオレンス先生と云へば、この間僕が圖書館の入口で遇つたら、僕をつかまへて、何たか訣のわからない事を十分ばかりしやべり續けた。英語が判然しないばかりでなく、一向要領を得ないから、唯、顔ばかり眺めてゐると、向うでも妙だと思つたと見えて Are you Mr. ——? 何とかと云つた。そこで斷々乎としてノオと云つたら、損をしたやうな顔をして、匆々元來た方へ歸つちまつた。して見ると、僕はそれまでそのミスタア・何とかと間違へられてゐたんだらう。これが今日までの所、僕とロオレンス先生との間に起つた一番親密な十分間だつた。」

「西洋人には君も知つてゐる通りまだ外に、スヰフト先生と云ふ人がゐる。何でも松岡はこの間この先生に、英語で話を一つしろと命令されたら、『昔々或所に犬が三匹居りました。所がその犬が一匹どこかへ行つてしまひました。すると暫くして又一匹どこかへ行つてしまひました。さうしたら三匹目の犬も、やがて見えなくなつてしまひました。先生、この三匹の犬がどこへ行つてしまつたか御存知ですか』と云つたさうだ。勿論先生には、そんな事のわかる訣がないから、知らないと返事をした。すると松岡は『私も知りません』つて、それつきりで御しまひにしちまつたつて云ふんだがね。いくらスヰフト先生だつて、(この先生自身も、この間久米に詩を讀ませて、聲だけ好いと褒めた事がある)こんな惡辣な學生にかかつちや、手がつけられないのに違ひない。」

僕はこの話を松岡自身から聞いて、大に先生の方に同情した。

「それからこの間は、上田敏さんの講義の模様を知らせてくれて、大に面白かつた。あの人位影

響する所が廣くつて、あの人位何もしてゐない人はない。考へると少し氣の毒な氣がする。その上この間上田さんの「獨語と對話」を讀んで見て、すべてが甚陳腐なので驚いた。昔から上田さんと新しいと云ふ事とは、始終僕の頭の中で一つになつてゐたんだから、それだけ餘計驚いた。が、考へて見ると、この新しいと云ふ事はインフオメエシヨンの上の新しさで、思想そのものの新しさぢやなかつたんだ。だからさう云ふ新しさに冷淡になつた我々が、上田さんの書いたものを陳腐だと感じるのは、勿論不思議でも何でもないんだ。それでも『上田さんも古くなつたかな』と思つたら、實際妙に寂しかつた。上田さんは結局、いろんな着物をシツクリつける名人だつたんだらう。が、我々の問題はもう着物やその着方を通り越して、下にある肉體に及んでゐるんだから仕方がない。

「この頃久米と僕とが、夏目さんの所へ行くのは、久米から聞いてゐるだらう。始めて行つた時は、僕はすつかり固くなつてしまつた。今でもまだ全くその精神硬化症から自由になつちやゐない。それも唯の氣づまりとは違ふんだ。さつき着物の例を出したから、その例をもう一度使ふと、つまり向うの肉體があんまりよすぎるので、丁度體格檢査の時に僕の如く痩せた人間が、始終感ず可く餘儀なくされるやうな壓迫を受けるんだね。現に僕は二三度行つて、何だか夏目さんにヒプノタイズされさうな、——たとへばだ、僕が小說を發表した場合に、もし夏目さんが惡いと云つたら、それがどんな傑作でも惡いと自分でも信じさうな、物騷な氣がし出したから、この二三週間は行くのを見合せてゐる。人格的なマグネテイズムとでも云ふかな。兎に角さう云ふ危險性

のあるものが、あの人の體からは何時でも放射してゐるんだ。だから夏目さんなんぞに接近するのは、一概に好いとばかりは云へないと思ふ。我々は大人と行かなくつても、まあいろんな點で全然小供ぢやなくなつてゐるから好いが、さもなかつたら、のつけにもうあの影響の捕虜になつて、自分自身の仕事にとりかかるだけの精神的自由を失つてしまふだらう。兎に角東京へ來たら、君も一度は會つて見給へ。あの人に會ふ爲なら、實際それだけにわざわざ京都から出て來ても好い位だ。――」

自分は當時菊池へ宛てて、こんな手紙を書いた事があつた。

（大正八年一月）

未定稿

一

夫れ柳風の狂句に曰、舊弊は隱居の名かとおさん尋き。日進開化の君が代は、二錢の郵便一分の鐵道、駕と飛脚は昔にて、千里を走ればおのづから惡事も何時かエレキテル、不思議の巧みを駿河臺、椎の木屋敷と呼ばれたる、門の瓦斯燈いかめしき、家の主は名にし負ふ、金も有川兵吉とて、持丸長者の隨一人、八犬傳のそれならで、仁義禮智の差別なく、淫酒二つに耽りたる、その流連の歸り路、時しも六月十日の夜、折から降り來る五月雨に、乘る人力も金春の、三等煉瓦を後にして、十二時圭も止る汐滿の、山城河岸や神田橋、やがて我家の冠木門、歌舞伎ならねど本釣に、常盤木落葉ばらばらと、落す桿棒諸共に、桐油を取れば有川は、無殘や既にくれなゐの、血嘔吐を吐きし斷末魔、車夫の仰天、一家の愁嘆、明くるも待たで交番所へ、訴へ出でたる大變は、唯毒殺とばかりにて、仇は誰とも白藤の、夫人の涙乾く間なき、大急ぎの報道件の如し。——朝野新聞所載——

この話のあつたのは、明治十二三年——東京の町には開化の日が照ると同時に、やはり舊弊の

泥濘の多かつた、丁度あの時代の事でした。と云ふよりも或は、司馬江漢の銅版畫にでもありさうな、日本の空氣と西洋の光線との不思議な位際どい調和が、風俗の上にも建築の上にも、反映してゐた時代と云つた方が、實は適當かも知れません。當時まだ私は洋學と漢學と、どちらも中途半端な教育を、しかも駈足で通りぬけた二十代の青年でしたが、それでも父と別懇だつた成島柳北先生の肝入りで、及ばずながら朝野新聞の編輯局へ毎日顏を出してゐました。私は其處で本多保さんに――これも同じ社員ではありながら、寧ろ副業の素人探偵で有名だつた、あの本多さんに始めて會つたのです。

本多さんは昔から一切身なりにはかまはない人で、殊に帽子なぞは一年中、鼠色の大きなヘルメツトを何時も大あみだにかぶつてゐました。その上風采も至つて揚らない方で、あの通り色の黑い、うす痘痕のある不男が、脊も低くければ、人並より痩せてもゐると云ふのですから、初對面の時なぞは、誰でもこれがあの評判の才物かと意外に思はないものはありません。私なぞも入社匆々、あの人が永らく英吉利にゐたと云ふ事を、柳北先生に聞いた時は、やはり人の悪い先生にかつがれたのではないかと云ふ疑さへも持つたものです。よく才氣のある人は、眼を見て知れるなどと云ひますが、本多さんはその眼まで、どんよりと唯白いやうな、甚光の鈍い方でしたから。

見た所はその通り、何處か下まはりの壯士めいた、一向振はない人物でしたが、頭のよく切れる事は、その時分から有名で、後年△△侯の懐刀と云ふ綽名のあつた藤村さんと一對に、在朝在

野の兩才子と並び稱されてゐたものです。これは一つには藤村さんがああ云ふアングロメニアの高襟だつたのに、本多さんは國粹主義者の寧頑固な一人でしたから、それだけ對照の妙を極めてゐる因緣づくもあつたのでせう。が、或結果だけ與へられて、それから逆に原因へ溯つて行く、本多さんのあの銳敏な分析的推理力に至つては、或は藤村さんさへ三舍を避けるかと思ふ位、恐る可き的確性を持つてゐました。さうして又本多さんには、その敏活な推理力を驅使するのが、丁度强壯な筋力の所有者が野外の競技を悅ぶやうに、殆どんな道樂にも換へられない、非常な興味の源になつてゐるらしく思はれました。ですからあの人が素人探偵として、不思議な令名を博したのも、實は唯この推理力を探偵の爲の探偵に使つたので、金錢上の利益などが一切眼中になかつたのは勿論、犯罪事實の摘發と云ふ事を道德的に考へて、それから進んであの副業に從事したと云ふ次第でもありません。何時ぞや本多さん嫌ひの福地櫻痴居士が、「あいつは磁石みたいなやつだ。何時でも人の惡事へ惡事へと劍先を向けてゐるぢやないか。」と罵倒した事がありましたが、惡い意味さへ取つてしまへば、實際あの人の探偵癖は、磁石の針が極を指すやうに、或必然的な內部衝動性に全然支配されてゐたやうです。

その好い證據は、これから御話しする事實などがそれですが、さう云ふ重大な場合でなくとも、家常茶飯に本多さんは、好んであの神速な推理力を動かしました。現に一度などは編輯局の窓際で、隣屋根に降る五月雨を眺めながら、社長始め一同が、卷線香の燻つてゐる煙草盆をとりまいて、晝休みの油を賣つてゐると、それまで默つて煙草を吸つてゐた本多さんが、突然柳北先生を

つかまへて、
「昨夜はあの降りに、餘程御酩酊のやうでしたな。何しろああ河岸を變へて、御飲み直しになつたのぢや、いくら先生でもたまりますまい。」と、微笑しながら、かう云ふのです。
始は柳北先生もうつかり釣込まれて、机の上に頰杖をついた儘、
「何しろ石井のやつと一しよだからね。萬八から柳光亭へ御酒輿を移す時なんぞは、全く蹣々だつたよ。」などと、云つてゐましたが、その内にふと氣がついたと見えて、あの長い顏を頰杖の上で、急に本多さんの方へ向け直すと、眠の足りない眶を心持ち見開いて、
「どうして又君は、そんな事を知つてゐるのだい。」と怪訝さうに尋ねました。すると本多さんは古風な鉈豆の煙管か何かで、意地惡く脂下りながら、
「天網恢々踈にして洩らさずと云ふぢやありませんか。ちやんと證據は擧つてゐます。おまけに昨晩は、大分阿嬌も大ぜい居りましたな。中でもあの小千代などと云ふ御酌とは、先生も大に若返つて、きやつきやつと騷いでいらしつたでせう。」
「へええ、これは不思議だ、ぢや君はあの時隣り座敷にでもゐたのかい。それなら始からさう云へばいいのに――」
「冗談云つちやいけません。私は例のミルの飜譯で、徹夜もしかねない位な忙しさです。」
これを聞いて呆れたのは、柳北先生ばかりではありません。我々は皆話をやめて、云ひ合せたやうに本多さんと柳北先生とを見比べました。が、本多さんは相不變、人の惡い微笑を洩らしな

がら、煙草の煙を吐くばかりで、容易に何とも答へません。

「ぢやどうして、さう云ふ手證が擧つたね。」

それがやつと口を開いたのは、暫くしてから柳北先生がかう改めて尋ねた時でした。

「何、種を明せば、極くだらない事からわかつたのです。わかつたと云ふよりは、中つたと云ふ方が或は當を得てゐるかも知れません。ごらんなさい。あの窓の明りにすかして見ると、先生の羽織の右の袖には、昨日までなかつた酒の汚點(しみ)がついてゐるでせう。外の人なら兎も角も、先生が袖へ酒を御こぼしになるやうぢや、餘程御酩酊なすつたのに違ひありません。次にさつき拜見すると、やはり羽織の裾の方に、揉んで落してはありますが、ちよいちよい泥の痕が見えました。どうせ往き還りは俥でせうから、はねの上つてゐる所を見ると、近くの御茶屋から御茶屋へ、雨の中を御歩きになつたのも、略見當がつくと云ふものです。最後に校書が大ぜいゐたと云ふ事は――」

かう云つて、本多さんは鉈豆の煙管をはたきながら、あの白い眼でちよいと柳北先生の顔を見ると、何故か瞬(また)きを一つしました。

「校書が大ぜいゐたと云ふ事は、先生の召し物の匂でわかります。」

一同はこの言(ことば)につれて、どつと一度にふき出しました。これには流石の柳北先生も少してれた形でしたが、大方その笑を揉み消すつもりだつたのでせう、急に頬杖を片づけると、故(ことさら)に眞劍な聲を出して、

「ぢや小千代とふざけたのは、どうしてわかつたらう。」と訊いたものです。先生はさつき茶を召し上つた後で、袂から手巾を御出しになつたでせう。」
「それも造作のない事からわかつたのです。先生はさつき茶を召し上つた後で、袂から手巾を御出しになつたでせう。」
「さてはあれに紅でもついてゐたのかい。」
柳北先生はにやにや笑ひながら、狡猾さうに本多さんの顔を偸み見ました。が、本多さんは眞面目な調子で、
「いや、紅はついてゐませんでした。又ついてゐたにしても、紅だけぢや小千代だか誰だか、わかりません。それよりあの時手巾と一しよに、豌豆が一粒下へ落ちました。だから御酌だなと思つたのです。先生はよくああ云ふ物を貰つて、酒席でも御酌におやりになるでせう。さうして、先生の御贔屓の御酌が小千代と云ふ位な事は、私もとうに知つてゐます。」
萬事がかう云ふ調子でした。ですから柳北先生も本多さんには、照魔鏡と云ふ綽名をつけて、あの大和魂といふ狂樂府を作つた時にも、「世上豈無照魔鏡、分明照見正興邪」と云ふ樂屋落ちの句を入れたものです。所が當時の私と云ふのは、京都で曝し首になつた親父ゆづりの謀叛氣があつて、何でも冒險的な事と云ふと一種の惝恍を持つてゐましたから、目の前に本多さんのやうな名高い探偵がゐる以上、どうしてその崇拜者にならずにゐられませう。私は一週間で本多さんに心服し、一月で本多さんの部下になり、三月で本多さんの行く所へは、どこでもついて行くやうになつてしまひました。――さうしてその間に一番私の興味を惹いたのが、これから御話ししよ

うとする、不思議な殺人事件の探偵なのです。

二

確この喜劇の一幕があつた前後だと思ひますが、或日――これもやはり梅雨中の、一日寂しい雨が降りつづけてゐる、黴臭い新聞社の午後でした。私が編輯局の机に向つて、濱町の或待合にあつた艶つぽい怪談を、春水張りの文章か何かで一生懸命に書いてゐると、給仕が一人私の所へやつて來て、小泉さんに御目にかかりたいと云ふのです。

「ぢや應接所へ御通し申して置け。」

から云つて給仕を追拂ふと、私は大急ぎで又五六行、精々物凄い筆を揮つて「その因縁はいづれ次號に」と、勿體らしく結んでから、筆を耳へ挾んだ儘、一張羅の怪しげな縞の背廣に紅緒の上草履をひつかけて、名前だけは立派な應接所へ取りあへず先行つて見ました。するとそこには給仕の云つた通り、私も面識だけはある、交際家で有名な清水警部が、まだ椅子にも腰も下さないで、ぼんやり窓の外の隣屋根の、五月雨に光つてゐるのを眺めながら、きな臭い巻煙草を退屈さうに吸つてゐましたが、私の顔を見たと思ふと、急に人が變つたやうに、愛想よく笑つて見せて、

「やあ小泉さん、どうも御多用の所を御呼び立て申してすみません。實は本多さんに御目にかからうと思つて伺つたのですがな、生憎まだ御出社にならないさうで、就いてはあなたから一つ御

言傳てを願ひたいのですが。」
「何です。又何か犯罪事件でもあつたのですか。」
「あつたのですかは驚きますな。新聞記者がそれぢや心細い。金春の往來で昨日の朝、洋服の紳士が殺されてゐたと云ふ一件です。今ぢや東京中どこへ行つたつて、その噂で持ち切つてゐる位ですぜ。」
「ああ、あの新聞配達が屍骸を見つけたと云ふ事件ですか。あれなら知つてゐますよ。知つてゐます所か、社中では昨夜から大分議論の問題になつたものです。何でも今日聞けばあの紳士と云ふのは、實業家の有川ださうぢやありませんか。」
「さうです。有川兵吉、渾名を僞文大盡と云ふ先生ですがな。あなた方にはよく叩かれてゐた男ですから、もう何も彼も御承知でせう。」
清水警部はかう云つて、血色の好い顏に溢れるばかりの微笑を浮べながら、妙に上眼を使ふやうにして、ちよいと私の顏を覗きました。新聞記者とは云ひながら、まだここへ棲みこんで、半年とたたない年若の私は、元より僞文大盡の行狀なぞを知つてゐる訣はありません。そこで素直に首をふつて、
「いいえ、何にも知りません。何か面白い事でもあるのですか。」
「面白いにも何にも、あの僞文の悪逆無道を御存知ないやうぢや、殘念ながらまだ本多さんの片腕とは行きませんな。まあ一言にして盡せば、女好きな獸ですが、それもあいつのはまるで氣違

同様と來てゐるのです。一度なぞは横濱へ行く汽車の中で、乘合せたよその奥さんにさへ怪からん眞似をしたと云ふのですから、略一斑はわかりませう。尤もあの時は大將、どこからか痲醉劑を手に入れてゐたさうですがな。そら「かなよみ新聞」か何かに、「痲醉劑車中芬蘭」と云ふ讀物が出たのは、あの一件を書いたのです。」
「大變なやつですね。よくそんなやつが法律の制裁を受けないものです。」
「そこは金の力です。」と云つて、淸水警部は、何故か急に間の惡るさうな、顏をしながら、剃り痕の靑い顋のあたりを二三度掌で撫でまはして、
「何しろ金はうなる程あるのですからな。現に京都の祇園か何處かで、舞妓が一人體よくあいつに殺された時なんぞも、金で內濟にすませたらしいのです。勿論東京ぢや、そんな事はさせません。あなた方新聞記者もゐる。我々警察官もゐる。いくら僞文でも、東京ぢや駄目です。「世上豈無照魔鏡、分明照見正與邪」成島先生はうまい事を云ひますな。」
淸水警部が調子に乘つて、丁度かう辯じ立てた途端です。まるで默阿彌の散髪物にでも出て來さうな機會(きつかけ)で、應接室の戶がばたりと開くと、如何はしい黑絽の紋附きの羽織に襞の分らない袴をはいた、脊の低い本多さんが、無精らしく片手を懷へ入れて、その薄痘痕のある顏を突然私たちの前へ現しました。それを見た淸水警部が、相好を崩して悅びながら、早速本多さんの方へ向き直ると、今まで私に話した通りを、もう一層大きな聲で、手を揉み揉み饒舌り立てたのは、元より云ふまでもありますまい。が、日頃から無愛想な本多さんは例の白い眼を動かして、ぢろり

と清水警部を一瞥すると、自分は圓テエブルの側の椅子の上へ、無造作に腰を下しながら、
「あの事件の話なら、僕は昨日から、もう聞き飽きる程聞きましたよ。」と、折角の話の腰を手もなく折つてしまひました。これには流石の清水警部も、ちよいと拍子抜がしたと見えて、何のとつつきもなく新しい卷煙草へ火をつけると、本多さんの向うの椅子へ、思ひ出したやうに腰をかけましたが、
「何しろ珍しい殺人ですからな。ああ云ふ金滿家が往來で殺されてゐる――まるで飜譯小說にでもありさうな話です。あなたなどの探偵なさるのには、絕好の事件でせう。」
「何、御頼みがなければ、探偵しなくつてもよろしい。」
本多さんは殆笑とも思はれない程の笑を脣に浮べながら、皮肉にかう答を投げ返しました。その時の淸水警部の顏を思ひ出すと、今になつてさへ私は微笑せずにゐられません。
「いや、御頼み所ぢやありません。實は今日は私が、全東京市内の警察官を代表して、是非とも一臂の勞を借して頂くやうに、歎願をしに上つた次第なのです。」
「そんな大袈裟な御頼みを受ける程の人間ぢやないが、手傳へと仰有るなら、御手傳ひ申してもよろしい。」
「それを伺つて、私も大安心です。何しろ今度と云ふ今度は、のつけから私たちには手のつけやうがないのですからな。」
から云ふ問答を聞いてゐた私は、大に好奇心を動かしましたが、何しろ事件が私には全く關係

のない事なので、邪魔になるのも氣が利かないと思ひましたから、ちよいと二人に目禮して、早速應接所の戶へ手をかけました。すると本多さんが、後から聲をかけて、

「君、大して忙しくもなかつたら、二人で清水さんの御話を伺はうぢやないか。その方が僕も勝手だから。」と、體よくその場を取繕つてくれました。これは勿論本多さんがすべて冒險とか探偵とか、さう云ふものに興味のある、年少な私のロマンティシズムに前から同情があつたからでせう。そこで私も安心して、本多さんの隣の椅子へ、さも一かどの探偵らしく、大風に尻を落着けました。實際有名な本多さんと一しよに、しかもこの重大な殺人事件に就いて、警視廳の清水警部と協議をめぐらすと云ふ事は、可成私には嬉しい事だつたのです。

「と云ふ訣はですな。」と、清水警部は言を次いで、「これは極祕密に御相談申し上げなければならないのですが、肝腎の犯人がどうも意外な所に發見されさうな容子なのです。その上その嫌疑者が下等社會の人間だと、一先所轄警察署へ引致して、取調べると云ふ事も出來るのですが、生憎立派な身分のある紳士なので、確な證據の擧らない中は、迂濶に手が下されません。萬一こつちの見こみ違ひで、腹でも切りかねない場合に立ち至ると、いくら私でも閉口しますからな。」

「へええ、もうそんな嫌疑者が出たのですか。」

…………………………………………………

……されたのは、あの近江屋（假名）と云ふ質屋と堺屋（假名）と云ふ藥種屋とが向ひ合つてゐる、日吉町××丁目の三等煉瓦の四つ辻でした。最初に發見したのは、報知新聞の配達人で、それが最寄りの交番所へ急報したのは、丁度そこの時計で午前四時十分だつたさうです。屍骸は仰向けになつて倒れてゐましたが、鋭い刃物で突いたらしい創が、チョツキの胸に二つと、右の掌に一つあり、頰には又紫色の打撲傷が顋へかけて一つついてゐました。それから被害者のポツケツトにあつたものは、金側の時計、紙入、名刺入れ、藝者の寫眞が三枚、名前は玉八に小藤お蔦です。手紙が一通、差出し人は横濱ジエムス商會、――これはどれも犯人が手をつけたらしい形跡はありません。」

「現場に何か落ちてゐたものはなかつたですか。」

「あります。ええと――被害者の山高帽と銀の握りがあるステツキとの外に、襟飾らしい葡萄色の巾の裂けたのが一つ、蝶貝製の鈕が一つ、それから少し離れて、あすこの郵便箱の下にダイアナと云ふ金口の卷煙草の吸殼が一つ、――尤もこれは、あの事件に格別關係はないかも知れません。」

「成程、卷煙草の吸殼が一つ、ありましたか。これは面白い。」

本多さんは始めて、興味を動かしたらしく、例の白い眼を大きく明けて、滿足さうに微笑を洩

らしました。が、淸水警部はそれに氣がつかなかつたのか、相不變愉快さうに手帳の頁を繰りながら、まるで新聞の記事でも朗讀するやうな聲を出して、
「現場の容子はざつとかう云ふものですが、まだその外に申し上げる必要があるのは、その夜——と云ふよりはもう午前一時前後ですから、その朝と云ふ方が好いかも知れません。その朝、あの四つ辻の近所で、兇行の前後を見聞したものが、三人ばかりある事です。その一人は日吉町×丁目の夜廻りで、これは近江屋の土藏の角を曲つて半町ばかり行つた所で、洋服を着た紳士が一人息を切らしながら、走つて來るのに行きちがひました。もう一人は堺屋の若い者で、ふと小用に起きた所が、外で人聲が聞えたので、ちよいと耳を澄ませて見ると、始に「うぬ」と云ふ言、それから「ふぢ」と云ふ言が聞えたさうです。その後は妙な物音がして、それからしんとなつたさうですから、同時に兇行も完つたのでせう。最後の一人は夜蕎麥賣ですが、これは殆殺人を目擊したと云つても、好いかも知れません。何しろその夜蕎麥賣があの四つ辻を通りかかると、やはり洋服を着た紳士が二人、往來のまん中でつかみ合つてゐたと云ふのです。一人は杖を持つてゐたと云ひますから、勿論滿村氏だつたのでせう。さうしてその二人がつかみ合つてゐる側を、怖怖通りぬけた所が、やはり「こふぢ」とか「ふぢ」とか云ふ聲を聞いたさうです。」
　前から一種の興奮を感じてゐた私は、その時とうとう耐へきれなくなつて、思はず側から口を出しました。
「さつきの藝者の寫眞にも、小藤と云ふのがありましたね。」

「そこです。そこに我々も目をつけてゐるのです。この小藤と云ふのは、工部省の原さんと大分浮名を流してゐる藝者ですがな。どうもこれが犯人の捜索には、餘程與つて力がありさうです。實は嫌疑者を嗅ぎ出せたのも、この蔓をたぐつて行つたからでした。」

清水警部はかう云つて、自分の言の重みを計るやうに、暫く話を途切らせた儘、圓テエブルに肘をついて如何にも得意らしいうす笑を、私たちの方に送りました。が、本多さんは依然として、口角に浮んでゐる皮肉な表情を、刻み煙草の煙にまぎらせながら、退屈さうに頷いて、「成程」と一言云つただけです。それが私の眼から見ると、如何にも齒痒い氣がしましたから、私は清水警部の言を追ひかけるやうに、早口にかう問ひかけました。

「さうしてその嫌疑者と云ふのは誰です。」

「さあ、そこで愈前に申し上げた肝腎の問題にはいるのですが、一體原氏と滿村氏とは、その小藤と云ふ藝者から起つた鞘當筋で、始終いがみ合つてゐたらしいのですな。現にあの兇行の當日も、二人は木挽町の對月(假名)であつた宴會の席上で、杯のやりとりから、既に立廻りさへ演じ兼ねない程の喧嘩をした事があるのださうです。これはその場にゐた第×銀行頭取の淺田氏の話ですが、滿村氏が小藤の一件を云ひ出すと、原氏はまるで血相を變へて、「覺えてゐろ。原も男だから。」と捨臺辭を殘した儘、席を蹴つて歸つて行つたと云ふ事でした。宴會が終つたのは十時半で、滿村氏は自宅へ歸るやうな事を云ひながら、俥で對月を出たさうです。所がその俥を挽いた車夫をつかまへて訊いて見ると、氏は〔二字缺〕橋を煉瓦の方へ渡つた所で、俥を返してしまつ

たさうですから、それから兇行の時刻まで、どこに氏がゐたかと云ふ事は、差當り見當のつけやうがありません。しかし――」
「犯人は原さんだと云ふのですか。」
　本多さんは銃豆の煙管を指の先で弄びながら、ゆつくりと睡むさうな聲で尋ねました。
「まあ、さうです。勿論それもまだ外に有力な證據があつての上なのですがな。」と云つて、清水警部は、相手の機嫌を窺ふやうな、心もとない微笑を浮べて、神經的に手帳の頁をあちこちと開けて眺めながら、「と云ふのはあの晩、一時前後に原さんは、金春の袖の家(假名)と云ふ待合を叩き起して、止つて行つたと云ふ事實があるのです。しかも女將の云ふ所によると、何か非常に興奮してゐる容子だつたさうですし、襟飾のちぎれてゐたのも確に見たと云ふぢやありませんか。まだその上に上衣の鈕の一つとれてゐたのは、原氏自身も氣がついて、「醉つ拂ひにかかり合つたので、とんだ恥つかきな目にあつた。」と、獨り言を云つてゐたさうです。さうして袖の家は夜廻りが怪しい紳士に遇つた所と、半町ばかりしか離れてゐません。――どうです。これが當り前の人間でごらんなさい。卽座に拘引する位な事は、立派にやれるだけの證據があるでせう。」
「所が向うは原さんで、原さんの伯父さんには參議がゐる――そこで詮議が面倒になると云ふ訣ですね。」
　私は今更のやうに同情の眼を清水警部に注ぎました。もしその時本多さんが、突然眠から醒めたやうに、鋭く反對の一句を射なかつたら、私は猶何時までも、清水警部と一しよに逮捕難を歎

いてゐた事でせう。が、本多さんは煙管を筒へ納めると同時に、嘲るやうにぢつと相手を見て、
「しかし原さんも滿村も、煙草を吸ひはしませんぜ。」
「ですからですな。ですから、先刻も煙草の吸殼は、この事件と關係はなからうと申し上げたのです。」
清水警部は餘程狼狽したと見えて、慌しく椅子を進めながら、手を振つてから答へました。それが本多さんには可笑しかつたからでせう、あの人は薄痘痕のある顏を、强ひて笑ふまいとするやうに歪めながら、ちよいと眼を床の上に落しましたが、
「さあどう云ふものですか――實はここへ來ると途中で、私の知つてゐる、――知つてゐるも可笑しいが、手先に使ふ事のある竹と云ふ乞食に遇つたらば、あの夜一人の洋服を着た紳士が、現場から餘り遠くない外濠端で、通りかかつた人力車を一臺呼んで、數寄屋橋の方へ行くのを見たと云つてゐました。尤もこれは兩手をポツケツトへ入れて、格別慌てる容子もなく、悠々と煙草をふかしながら、煉瓦の方から步いて來たと云ふのですが。」
「しかしそれが犯人かどうかは、原氏以上に問題でせう。」
「勿論問題には違ひありません。が、竹がその紳士の車に乘つた跡へ來て見ると、こんなものが落ちてゐたさうです。」
本多さんは袂を探つて、何だか反故紙に包んだものを、私たちの前へ出して見せました。その紙を擴げる間も惜しいやうに、淸水警部と私とが、兩方から頭をつき出して、叮嚀にそつと開け

て見ると、その乞食が外濠端で拾つたと云ふ品物は、やはりダイアナと銘のある、金口の巻煙草の吸殼だつたではありませんか。淸水警部は啞然として、暫くは唯本多さんの顔を眺めた儘、「ダイアナ、ダイアナ」と口の中で、誰に云ふとも〔無く〕呟くばかりでした。あの雨の日のうす暗い應接室と圓テエブルを圍んだ私たちと、さうしてその圓テエブルに擴げた反故紙の底に、冷く光つてゐる金口の巻煙草の吸殼と――私はあの時の事を想ひ出すと、未にその吸殼を見た瞬間の、何とも云はれない興奮が還つて來るやうな氣がします。……

「その上竹がその俥を見覺えて置いたのは、全く目つけものでした。何でも牡丹に唐獅子の描いてある俥だつたさうです。」

程經て本多さんは、遠い所を見るやうな眼つきをしながら、靜にかうつけ加へました。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

「誰が一番先へ出て來ました？」

本多さんは又急にかう云ふ質問の句を射ました。

「一番先へ出て來たのは、北川と云ふ書生です。それから村瀨と云ふ執事の老人が來る。お吉と云ふ召使ひが來る。それに車夫も手傳つて、漸く滿村氏を玄關の式臺まで擔いで來ると、その時には奥さんまで、寢間着の儘、奥から出て來ました。ここで御注意申し上げて置きたいのは、その時でも滿村氏は、まだ幾分か息があつたと云ふ事です。」

清水警部は自分の言の重みを量るやうに、暫く話を途切らせました。が、本多さんは依然として、表情のない顔を刻み煙草の煙に隱した儘、少しも先を聞きたがる容子を見せません。私は流石に清水警部が氣の毒になりましたから、

「さうして？」と話を促しました。

「さうして奥さんの顏を見ると、「藤」と一言云つたさうです。奥さんの名が藤子と云ふ事は、わざわざ割註にも及びますまい。滿村氏はその一言を吐いただけで、間もなく絶命してしまつたのです。これは當時氏を介抱してゐた、お吉と云ふ召使ひから聞きました。」

「それだけですか。」

本多さんのさう云ふ聲が、欠伸まじりのやうに聞えたのは、事によると私の邪推かも知れません。しかしそれ程、その時の本多さんは、退屈さうな顏をしてゐたのです。

「いや、まだあります。その後で滿村氏を奥座敷へつれて行つて、着てゐる洋服を脱……

……………………………………

……………………………………（未完）

（大正九年四月）

河童

序

河童と云ふ動物に關しては古來奇怪な傳說に乏しくない。この話も主人公は、紛れのない一匹の河童である。しかし近代の科學的精神は河童の存在さへ認めようとしない。況やわたしの話などは、一噱にも價せぬと思はれさうである。して見れば本文へはひる前に、河童とは抑何であるか？　實在の動物か架空の動物か？　多少の解釋を加へるのも、あながち無用ではないかも知れない。

今人は疑ふにも關らず、古人は河童の存在に堅い信念を抱いてゐた。しかし古人と今人とは、信不信の差別こそあれ、日常の經驗を根據とする事は、いづれも趣を一にしてゐる。古人は靑蘆の茂つた沼に、岩の側立つた谷川に、いや、日傘の往來の絕えない江戶京橋の堀り割にさへ、河童の遊ぶのを目擊した。が、今人は博物館にも、河童の剝製のある事を聞かない。この故に一は有を主張し、一は無を說いてやまないのである。しかしその自家の經驗以外に、有無の理由がないとすれば、今人は古人を嘲る事は出來ない。のみならずたとひ剝製はなくとも、河童の捕獲に關する記錄は、今でも諸書に散見してゐる。常陸の河童、豐後の河童又は越前の河童等、――寫

生圖の殘つてゐるものも少くはない。たとへば享保元年六月五日水戸に捉へた河童の如きは、丈三尺五寸餘、重さ十二貫、「總體骨なき様に相見え、」尻の穴は三つあつたさうである。又弘化三年六月八日加藤雀庵の目撃した、双頭の河童の陰干しの如きは、丈三尺ばかり、齒は上下四枚、奥齒は左右に二枚、「そのかほかたち、猿を干し固めたるものに似て」ゐたと云ふ。これらの文獻をも參照せず、妄に河童をなしとするならば、今人は寧ろ古人の爲に、嘲られる事を免れないであらう。古い茶臼の心木の穴から、龍の昇るのを見た人々が、口々に驚き騷いだ時、西鶴は作中の老法師に、何と彼等を嘲らせたか？「各〻廣き世界を見ぬ故なり」！

しかしこれらの文獻に、疑惑を持つ學者も稀ではない。彼等は諸國の河童記事に、幾多の相違があるのを見ても、河童の存在は疑はしいと云ふ。成程筑後川に産する河童は、褐色の皮膚に毛が生えて居り、三河越前に産する河童は、頭部以外に毛のないばかりか、皮膚の色彩も暗緑色である。が、これらの相違だけでは、河童の存在は否定し難い。もし否定し得るとすれば、諸國の駱駝記事を檢しても、或は二つ瘤があると云ひ、或は一つしか瘤はないと云ふ、文獻上の相違から、駱駝の存在も疑はれるではないか？　況や皮膚の色彩などは、周圍の色彩に應ずる事、カメレオンの如き動物もある。ああ、河童とカメレオンと！　この二つの動物に、近似性を想像するのは、必しも不當とは思はれまい。いや、わたしは河童の皮膚も、カメレオンの皮膚の通り、隨時隨所に變化する事を確信してやまない一人である。

が、學者はこの外にも、河童の存在を疑ふべき、多少の理由は持たないでもない。彼等の主張

する所によれば、河童に關する文獻は、近世二三百年に限られてゐる。下學集以外倭名抄以後、歷代の語彙に徵しても、河童の名目は揭げてない。これは河童の存在が、疑はしい證左ではないかと云ふ。成程歷代の語彙に名のあるものは、實もあつた事は確かである。しかし名のなかつた事は、實もなかつたと云ふ證據にはならない。遠い歷代の語彙は問はず、現代の辭書を開いて見ても、實際存在する事物の名前が、揭げてない例は無數にある。この事實を否定するものは、辭書を出版する本屋以外に、恐らくは天下に一人もあるまい。既に辭書に名のないものも、存在する事實を認めれば、河童の有無を疑ふものも無意味に了る事は勿論である。

ではわたしの見解は、全然古人と同一であるか？　いや、少くとも一點では、明らかに古人と異つてゐる。古人は何時も河童と云へば、怪物と考へる傾向があつた。「水神」「ひや會」を見ても、河童が怪類に屬する事は、「うすへ」「川の殿」等、九州に行はれる河童の異名は、殆河童を敬ふ事、神とひとしかつた證據である。が、わたしの所見によれば、これは古事記や風土記の著者が、蛇や猪を神としたのと少しも、異つた所はない。河童も正體を見極めれば、蛇や猪と同じやうに、やはり動物の一種である。更に詳しい記述をすれば、大體下の通りになるかも知れない。

―

「河童は水中に棲息する動物なり。但し動物學上の分類は、未だこれを詳らかにせず。その特色三あり。(一)周圍の變化により、皮膚の色彩も變化する事、カメレオンと異る所なし。(二)人語を發する鸚鵡に似たれども、人語を解するは鸚鵡よりも巧みなり。(三)四肢を切斷せらるるも、

切斷せられたる四肢を得れば、直ちに癒着せしむる力あり。産地は日本に限られたれども、大約六十年以前より、漸次滅亡し去りしものの如し。」一（未完）

以上は河童の話の一部分、否、その序の一部分なり、但し目下インフルエンザの爲、如何にするも稿を次ぐ能はず。讀者並びに編輯者の諒恕を乞はんとする所以なり。作者識。

（大正十一年四月）

河内屋太兵衞の手紙

まだお目にかかつた事はありませんが、是非ともあなたの御所存を承りたいと存じますから、失禮をも顧ず、この手紙を差上げる事にしました。勿論近松門左衞門樣と申せば、日本六十餘州の中にも、隱れのないあなたの事ですから、かう云ふ手紙をお受けとりになるのも、珍らしい事ではありますまい。しかしどうかこの手紙は、うるさいなどと思召さず、兎に角御披見を願ひたいと存じます。その上もし御差支へなければ、折り返し御意見をお聞かせ下さい。あなたにこんな事をお願ひするのは、勿論僣上の沙汰とは存じてゐますが、何しろ下にも申し上げる通り、これはわたし、河内屋太兵衞の命にも關る一大事なのです。いや、或は大阪を始め、津々浦々の若いものの命にも關る一大事なのです。ですから虫の好いお願ひにもしろ、わたしの心をお察しの上、どうか一概に却けないで下さい。

恥を申さなければわかりませんが、わたしはこの一二年、曾根崎の茶屋津の國屋の小まんと云ふ白人に、深い馴染みを重ねて來ました。あなたに聞いて頂きたいのも、實はこの小まんとわたしとの、二人の間に持ち上つた、泣いたらば好いか、笑つたらば好いか、方返しのつかない出來

事なのです。と云つても格別自慢さうに、一々二人の睦じさ加減を吹聽する次第でもないのですから、その邊は御心配には及びません。わたしが小まんと馴れ染めたのは、――そのいきさつを申し上げる前に、わたしの身の上はどうなつてゐるのか、それを一通り書いて見ませう。さもなければ肝腎の話も、なぜさう云ふ始末になつたか、はつきりしない惧がありますから。

わたしの父、河内屋徳兵衞は、わたしが七つ、弟の與兵衞が四つの時、故人の數へはひりました。その後母へ入夫をしたのが、今の父の徳兵衞です。それから母はもう一人、お近と云ふ妹を儲けました。現在はわたしだけ順慶町に、あとは皆ずつと本天滿町に、どちらも油屋を渡世にしてゐます。いづれお近にでも婿を取れば、親讓りの見世はそちらに渡し、與兵衞はやはりわたしのやうに、分家する事になるのでせう。

わたしは順慶町に見世を持つた時、お種と云ふ女房を貰ひました。お種は美人ではありませんが、素直な、技巧のない、その代り多少子供じみた、云はば善良な女房なのです。わたしは世帶を持つた當座、この正直すぎる位、無邪氣な所が氣に入つてゐました。いや、今でも其處だけは、何にも換へられないと思つてゐます。確か祝言をすませてから、一月とたたない頃だつたでせう。まだ風の寒い時分でしたが、お種は買ひ物に行つた歸りに、牡丹を一枝買つて來ました。輪の大きい、薄い紅をさした、目のさめるやうな寒牡丹です。わたしは時候が時候ですから、これは安い價段では賣るまい、どの位とられたと尋ねて見ました。するとずゐぶん高うございました、二十何匁とか云ふではありませんか？　わたしもさすがに驚きました。このせち辛い世の中に、い

くら里の母に貰つた、小遣ひが殘つてゐるにしても、そんな金を使ふやうでは、さき行きも氣づかはれると云ふものです。しかしお種が嬉しさうに、その花を活けてゐるのを見ると、小言を云ふ氣になるよりは、まづ頬笑んでしまひました。それがかう云ふ所を見たら、どんな顏をするだらうと思つたのです。同時に人の思惑などには、善かれ惡しかれ氣のつかないお種が、(つけば悄氣てしまふのですが、)妙に可憐な氣がしたのです。お種も今では子持ちですから、如何に世間を知らないと云つても、その時程の事はありません。が、お種の善良さには、少しも變りは見えないのです。

もう一つ次手に申し上げれば、丁度子供が生まれた年、――太吉は今年三つですから、もう一昨年になりますが、小さい頸や胸のあたりに、ひどい汗疹の出來た事があります。わたしはそれへつけてやるのに、天瓜粉を買へと云ひつけました。所が朝云ひつけたのに、夕方行水を使ふ時になつても、未に天瓜粉は買つてありません。わたしはお種に小言を云ひました。するとお種はあやまる所か、そんな事を仰有つても、外に手のある訣ではなしなどと、不服がましい理窟を並べるのです。わたしは腹が立ちましたから、二言三言云ひ合つた末、里へ歸れと怒鳴りつけました。その日はありふれた夫婦喧嘩のやうに、それぎり無事にすんだのです。が、ずつと後になつてから、もう彼是大晦日に間もない時分の朝の事ですが、例年通り神棚を清めてゐると、ふと氏神の御札の陰に、扇を一本見つけました。しかもこの無地の扇は、何時か何處かへ見えなくなつた、わたしの古扇ではありませんか？ わたしはお種に扇を見せながら、妙な事があるものだ、

お前は知らないかと尋ねて見ました。しかしお種はどうしたのか、笑つてばかりゐるのです。勿論笑ふ所を見ると、お種の仕業には違ひないのですが、なぜ神棚へ隱して置いたのか、その訣はとんとのみこめません。それでも眞面目に問ひつめられると、お種はとうとう極り悪さうに、こんな事を白狀しました。「何時か夏天瓜粉の事から、出て行けと仰有つた事がございませう。あの時もしどうしても、此處へ置かないと仰有つたら、その扇を一本だけ、頂いて參るつもりで居りました。所があれぎりになりましたから、つい神棚へ載せて置いたなり、出し忘れてしまつたのでございます。」わたしはお種の話を聞きながら、つまらない事を思ひ出しました。それは丁度四年前に、お種と祝言をした時にも、この扇を持つてゐたと云ふ事です。

もうこれだけ申し上げれば、わたしの女房はどう云ふ女か、大抵御推察がついたでせう。久わたしがかう云ふ女房に、何の不足も感じてゐないのは、格別不思議でもありますまい。ではなぜ小まんと深い仲になつたか、——あなたはさう仰有るでせう。いや、心中物の作者たるあなたは、そんな事を仰有るには、餘りに人間の本性を知り過ぎていらつしやるかも知れません。が、もし假にさう仰有つたとすれば、かうわたしは申し上げたいのです。成程お種自身には、何の不足も感じてゐません。しかし我々の夫婦暮らしは、時々退屈に感ぜられるのです。我々の、——これは我々ばかりでせうか？　わたしはひとり我々に限らず、誰のでもさうらしい氣がするのです。なぜと云へばお種のやうに、不足のない女房を持つてゐてさへ、退屈さに變りはないのですから。

わたしはこの退屈さの爲に、時々曾根崎へ遊びに行きました。これはわたしに云はせると、た

とひ惡い事にしても、やむを得ない事だつたのです。しかし小まんに夢中になつたのは、のみならず飛んでもない人騷がせをしたのは、「やむを得ない」だけではすまされません。なぜわたしはああなつたか、わたしは忘れ難い一昨日の夜、小まんと二人歩きながら、その事ばかり考へてゐました。すると突然、——實際それは花火のやうに、突然心に浮んだのです。——わたしはずつとあなたの爲に、欺されてゐた事を發見しました。

あなたに欺されてゐたと云ふのは、——その訣は少時お待ち下さい。わたしはまづ小まんの事から、申し上げなければなりません。小まんは前にも書いた通り、津の國屋の抱への白人です。これも美人ではありません。が、どう云ふ因緣か、小まんは殆ど何から何まで、わたしの女房とは反對なのです。お種がすらりと瘦せてゐれば、小まんは圓々と肥つてゐる、お種が地味なつくりをすれば、小まんは派手なつくりをする、お種が技巧を知らなければ、小まんは技巧を知り過ぎてゐる、お種の右の頰に黑子があれば、小まんは左の頰に黑子がある、——あなたはまさか黑子まではと、お笑ひになるかも知れません。が、それもほんたうなのです。わたしは最初小まんを見た時、この何一つわたしの女房と、似てゐるもののない所に、人知れない興味を感じました。もし小まんに少しでも、お種と變らない所があつたら、たとひあなたに欺されたにしても、あれ程のぼせつめはしなかつたでせう。ああ、女房と裏腹な女に、どんな誘惑がひそんでゐるか、わたしはそれを考へると、常に變化を求めるのは、避け難い人間の宿命とは云へ、今更のやうに恐しい心もちがします。しかもこれはわたしばかりか、御前町の紙屋の主人、治兵衞もさうではあ

りませんか？　紙治はやはり曾根崎の茶屋、紀の國屋の小春に通つてゐます。小春は痩せた女ですが、治兵衞の女房を御覽なさい。あの位象のやうに大きい女が、一人でも外にゐるでせうか？……しかしそんな事は餘談です。

わたしは小まんの誘惑が、大きかつた事を申し上げました。しかしその誘惑と一しよに、始終わたしを支配してゐたのは、恐しいあなたの嘘の力です。ではその嘘とは何だつたか、あなたはわたしと小まんとの、二人のいきさつをお聞きになる内に、自然とおわかりになるでせう。これは去年の秋ですが、わたしは掛け先を廻つた戻りに、生玉の社へさしかかりました。すると誰か後ろから、「たあ樣、たあ樣」と聲をかけるのです。わたしは編笠をかぶつたなり、聲のする方をふり返りました。と、出茶屋の床にゐるのは、投島田に結つた小まんです。「何だ、お前か？」――わたしはさう云つた時には、もう其處へ腰かけてゐました。聞けば小まんは田舍の客と、三十三番の觀音を廻り、あとは日暮らし酒にする爲、此處に來てゐると云ふのです。そんな話を聞いてゐる内に、わたしはだんだん色男らしい、しんみりした氣もちになつて來ました。あなたは勿論さう云ふ氣もちが、どんなものだかも御存じでせう。あの「曾根崎心中」の中に、丁度これと同じやうな、生玉の一場をお書きになつたあなたは。わたしは今考へれば、既にもうその時から、あなたの犧牲になつてゐたのです。しかしその時は小まんと二人、唯しみじみと寄り添つた儘、苦たるい話に耽つてゐました。いや、そればかりではありません。わたしは人目のないのを幸ひ、簾のかげに隱れながら、ちよいと小まんの口を吸ひました。と同時にわたしの口には、苦いもの

が一ぱいに擴がりました。何でもこの苦いものは、今し方胸の痛んだ爲、小まんの呑んだ熊の膽なのださうです。あなたはこんな事をお聞きになれば、お笑ひになるのに違ひありません。しかしわたしは笑ふ所か、氣の毒がる小まんの手をとつたなり、もう一度眞面目に話し出しました。この笑ひさへしなかつたのを見ても、如何にわたしが莫迦だつたか、容易に御想像が出來るでせう。

（未完）

（大正十一年頃）

寂しい神代の夜明けだつた。人氣のない磤馭盧島の渚には、大きい八咫の鴉が一羽、小高い岩の上に止まつてゐた。岩の裾には薄明るい砂に、浪の往來が絶えなかつた。其處には又これも大きい、千尋の鰐が腹這つてゐた。彼等はこの靜かな世界に、人間の耳へは屆いた事のない、神々の話をしてゐるのだつた。

「どうだね。天上の神々は？　相不變戰をしてゐるかね？」

鰐は浪に洗はれながら、徐ろに頭をさし伸ばした。その頭には森のやうに、海草や珊瑚が生ひ茂つてゐた。

「相不變戰ばかりしてゐる。昨夜などは殊に烈しかつたやうだ。」

「昨夜の稻妻は格別だつたからね。神々も中々苦しいと見える。」

「苦しい所ではない。命がけの戰なのだ。――」

鴉は考深かさうに、ちよいと頭を傾けた。その頭にも鳥の巣があるのか、逆立つた羽根の間からは、何羽も小鳥が首を出してゐた。

「神々の敵も手強いからね。」
「しかし大日孁も生まれたと云ふし、月弓も生まれたと云ふのだから、おひおひ人間の間にも、
『神々の弓矢』は殖えて來たぢやないか?」
「神々の敵も手強いからね。——」
鴉はもう一度繰り返した。
「大日孁、月弓、——まだそれだけでは十分ではない。神々の敵は一日の中に、千人の味方を造ると云ふのだ。すると神々も一日の中に、千五百人の味方は造らなければならない。」
「千五百人、——神々も中々苦しいと見える。」
鰐は太い息を吐いた。
「苦しい所ではない。神々は何時も蒼ざめた額に、汗と血とを滴らせてゐる。それは勿論今までには、一度も神々の負けた事はない。しかし永久に勝ち續ける爲には、まだ十の大日孁や百の月弓が必要だね。……」
鴉と鰐とは少時の間、默然と浪の音に聞き入つてゐた。
「おや、赤子が啼いてゐる!」
鰐は突然唸るやうに云つた。成程さう云はれて見れば、薄暗い島の何處からか、かすかに聞えて來る啼き聲があつた。鴉はその聲を聞き定めると、嬉しさうに太い喉を鳴らした。

×

丘の芒はまだ青々と、つややかな葉を垂らしてゐた。が、その所々には、既に紅の穂を房々と靡かせてゐるものもあつた。丘の向うには海があると見えて、あたりに垂れた芒の葉には、絶えず潮騒のどよむ音が、間だるく通つて來るらしかつた。いや、海の近い事は、たとひさざ波さへ立たない日でも、その穂の末が拂つてゐる鰯雲の光に明らかであつた。雲は眩ゆく燦きながら、層々と鱗を疊んだ間に、紛れやうのない海の色をほんのりと青く漂はせてゐた。

芒の中には一人の女が、じつと聞き耳を澄ませながら、唆い砂の上に坐つてゐた。頸に懸けた勾玉や腕に卷いた釧を見ると、女は人皇何代かの古の民に違ひなかつた。さう云へば腰のあたりにも、美しい領布の垂れた陰から、三寸程のすず鏡がつつましく日の光を照り反してゐた。――

女は今から一年あまり以前、やはりこの丘の芒の中に、たつた一人眠つてゐた。するとその油斷を窺つて、何か人目に見えない物が、否應なく女を自由にした。それは日の光よりも捉へやうのない、風よりも自由に飛んで歩く神々の一人かも知れなかつた。女は折り敷いた芒を摑んで、時々玉のやうな兩脛を振はせながら、苦しさうに長い間喘いでゐた。が、やがてその何物かは、來た時のやうに音さへ立てず、顏を火照らせた女を殘して、何處へともなく立ち去つてしまつた。

唯この時女の眼には、丁度かすかな虹に似た雲氣が、大空を透かせた青芒の末へ、ほのぼのと昇つて消えるのが見えた。女はすぐに起き直つた。それから兩手を顏に當てて、急にさめざめと泣き始めた。それ以來女の胎内には、この神と人とも知れない、怪しい物の胤が宿つたのであつた。

——女は人氣のないのを聞き定めると、群る芒の中に横はつて、徐に出產の時を待つらしかつた。芒は相不變靑々と、日の光の中に戰いでゐた。それは中空に啼く雲雀の眼にも、見すべからざる女の姿を遮つてしまふのに十分であつた。あたりはその後暫くの間、………(未完)

(大正十一・二年頃)

冬心

自分はこの秋も神經衰弱に罹つた。この秋もと云ふのは一昨年の秋、支那見物から歸つた時にも、やはり同じ病の爲に三月ばかり苦しんだことがある。今度のはその時の程重いのではないが、催眠劑を用ひない限り、眠られないことは同じだつた。又催眠劑を用ひたにしろ、二時か三時に目が覺めたなり、天明を待つことは稀ではなかつた。「赤ときや蟋なきやむ屋根の裏」——自分は寢返りを繰り返しながら、かう云ふ句を作つた覺えもある。

その間はまだ風流だつた。それがだんだん嵩じると、何をするのも厭になり出した。自分は人にも會はたければ、手紙にも返事を出さないやうになつた。しまひにはとうとう返事どころか、封さへ滅多に切らないやうになつた。手紙は大抵一週間目に黑塗りの亂れ箱に一ぱいになる。自分はその度に女中を呼んでは、みんな風呂の下に燒かせることにした。折角の手紙を煙にするのは勿論自分にも愉快ではない。しかし煙にするより外に仕かたのなかつたことも事實である。

自分は唯さう云ふ中にも、隔日に近所の下島さんへカルシウムを注射をして貰ひに行つた。これも行つたと云ふよりは行くことにしてゐたと云ふのかも知れない。夜もおちおち眠られない自

分は十二時過ぎ迄起きないことがある。すると宅診の時間に間に合はないから、つい出かけるのを見合せてしまふ。又行けば行ける時でも、ぷつりと腕の靜脈へ注射針のはひることを想像すると、どうも出かける氣にならない。そんなこんなに絡まれる爲に、二日置き、三日置き、――或は彼是一週間も出澁つてしまふことは度たびだつた。

或野分の烈しい朝、自分はやはり何日目かに下島さんへ注射に行つた。診察室の寢臺に寢てゐると、硝子窓のずつと上に庭さきの棕櫚が二三本、高い梢だけ少し見える。棕櫚は風を受ける度に、ばさばさした葉を煽るやうにする。同時にその葉の一裂けづつも細かにひらひら震動する。大きい葉全體の動きかたから見ると、一裂けづつの動きかたは如何にも神經的に感じられる。下島さんはこの窓を後ろに注射器の具合を檢べてゐた。それがやつと注射針にカルシウムの液を吸はせながら、かう自分に話しかけた。

「どうです、體の具合は？」

「何だか舊態依然としてゐます。」

下島さんはちよいと默つた後、「注射を續けなけりやいけませんな」と云つた。自分は返事に困つたから、まじまじ棕櫚ばかり眺めてゐた。すると下島さんはもう一度同じことを繰返した。自分は少し反抗的になつた。

「しかし神經衰弱ぢや死なないでせう？」

「死にますよ。大死にですよ。營養神經が參りやそれつきりです。この間も一人ありましてなあ、

……」

下島さんは注射をすませた後、その患者の話をした。それは中里邊に住んでゐる退職官吏の娘だつた。當人は圖畫が得意だつたから、小學校を卒業すると、一途に畫家になりたがつた。が、經濟上の關係もあり、兩親は全然とり合はない。その內に烈しい神經衰弱に罹り、一日一日と憔悴し出した。始は不眠が續いたり、亂視が起つたりする位だつた。が、おひおひ食慾が衰へ、しまひには床に就いたぎりになつた。かう云ふ重態に陷つたら、もうどうにも取り返しはつかない。削られるやうに瘦せ細りながら、とうとう昨日の朝死んでしまつた。年はやつと十六歲、器量も中中好い方だつたと云ふ。

「それでも殆ど死に際迄畫ばかり描いて居りましてなあ。又非常に器用なのです。わたしも一二枚貰ひましたから、一つあなたにもお目にかけませうか?」

下島さんはデスクの抽斗から水彩畫や鉛筆畫を出して見せた。畫は成程器用だつた。が、見た儘を描いたと云ふよりも、或畫の型を眞似たものだつた。花を描いた水彩畫などは殊に素直さに乏しかつた。自分は何だか寂しい氣がした。

下島さんに聞いた話はその後も時時思ひ出した。思ひ出す度に死と云ふものが身近かに來たやうな心もちがした。自分は冬へ押し移る書齋にぼんやり煙草を啣へながら、自分の死ぬことを考へたりした。自分の死ぬことを考へると、死そのものには恐怖もなかつた。が、子供の死ぬことを考へると、いつ死に襲はれるかわからない人間の命は情けなかつた。

ゼンマイ仕掛の蠅取器がある。あの砂糖と酢とを塗つた木板の上に止まる蠅は自然と金網の箱に呑まれてしまふ。この「自然と」と云ふところに底深い恐しさのあるやうな氣がした。
自分は又二三日してから、下島さんへ注射に出かけた。下島さんは自分の顔を見ると、「先日お話した娘がなあ」と、もう一度あの患者の話をし出した。娘の父親の退職官吏は生前娘に薄かつた代りに、死後はどうにかしてやりたいと思つた。が、恩給暮らしの貯金位では到底葬式は立派に出來ない。せめては火葬にする時でも、一等の竈にしてやりたいと思つた。ところが火葬場に問ひ合せると、一等は生憎滿員だと云ふ。二等ならばまだ明いてゐると云ふ。父親はとうとう當惑の餘り、一切の事情を掛りのものに話した。それからどうか一等の竈を都合してくれと懇願した。掛りのものは弱つたやうに少時帳簿を檢べてゐた。しかししまひには笑ひながら、「では一等の料金をお拂ひなさい。特等の竈にして上げます」と云つた。——下島さんはかう云ふ話をしてから、顏中に滿足らしい色を出した。
「火葬場も中中感心ですなあ。どうです、こりやちよいと小說じみてゐるでせう?」
この話は自分にも好い感じを與へた。しかし寂しいことは變らなかつた。人間同志の同情は焚き火のやうに暖を與へるかも知れない。が、まはりの冬を思へば餘りに小さい焚き火だと思つた。その小さい焚き火にさへたよらなければならないと云ふのはずゐぶんたまらないことだとも思つた。下島さんから歸る途には墓原に沿つただらだら坂がある。自分はその坂を登りながら、妙にやけ糞な心もちになり、霜解けもかまはず滅茶苦茶に步いた。

（大正十二・三年）

俊寛

一　硫黄が島

鬼界は十二島から成つてゐた。そのうち五島は日本に屬し、七島は琉球に屬してゐた。
硫黄が島は五島のうちでも最も南に位してゐた。源平盛衰記は第七卷にこの島のことをかう記してゐる。――「眼に遮る物は燃え上る火の色、耳に滿つる物は鳴り下る雷の音、肝心も消ゆるばかりなれば、一日片時堪へて有るべき心地せず。……昔は鬼の住みたれば、鬼界の島とも名付けたり。今も硫黄の多ければ、硫黄が島とぞ申しける。」しかしこれは邊土を知らぬ盛衰記の作者の誇張だつた。成程この島の活火山は谷々に硫黄を產してゐた。又かう言ふ島の土味は膏腴でもないのに違ひなかつた。けれども火山さへ半腹以下は榕樹や芭蕉に蔽はれてゐた。況や麓から海へ下る平地は麥や琉球芋の畑だつた。

硫黄が島は周圍七里餘だつた。この島の人びとは海岸の處々に幾つかの村を營んでゐた。村は遙かに日本に臨んだ、最も大きい岩殿でも笹の葉を葺いた家ばかりだつた。が、南は琉球から、北は又日本から時々便船の渡る爲に、必しも文明のない訣ではなかつた。少くとも代々岩殿に住まふ、今は年とつた島守りの家には黑棚や几帳も並んでゐた。

けれどもこの離れ島へ俄かに文明の流れこんだのは安元三年の暮秋だつた。遠い都から三人の流人のはるばる渡つて來た暮秋だつた。烏帽子さへかぶらぬ島びとには都めいた三人の流人の姿も文明そのものに違ひなかつた。のみならず門脇の宰相は日本から便船の渡る度に、姫君の聟に當る一人の流人、——丹波の少將成經のもとへ衣類だの調度だのを送つて來た。

三人の流人は岩殿の南、海に面した丘のかげに三人一つに住む家を造つた。家はやはり笹葺きだつた。が、寢殿に擬した構へは島守りの家よりも手廣かつた。其處へ剪栽の芭蕉の葉かげに美美しい小几帳なども立てまはしてあつた。島びとはこの淸らかな住居を只「屋形」と稱してゐた。頭の白い島守りを始め、島びとは皆三人の流人を主人のやうに尊敬した。「屋形」へ召使ひに召されることは常に島びとの誇りだつた。しかし流人は三人とも言ひ合せたやうに沈んでゐた。殊に年少の成經は島びとの敬意を受けるのさへ、如何にも不快に堪へないらしかつた。

「あの殿たちは都びとの中でも、雲の上に住まはれた方がたぢや。この侘しい島住まひの御意に入らぬのも尤もぢやがのう。……」

安元三年も暮れかかつた或夜、島守りの翁は千鳥と言ふ十六歳の一人娘を前に、しみじみから歎息した。赤い燈臺の光の中に何か夢みてゐる一人娘を前に。

（未完）

（大正十三年十二月）

大導寺信輔の半生

空虛

「ええ、わたしは何でもえらい學者になりたいのです。
下界の事から天上の事まで窮めまして、
自然と學問とに
通じたいと存じます。」

「ファウスト」の中の學生はかうメフィストフェレスに語つてゐる。この言葉はその儘學生時代の信輔にも當て嵌まる心もちだつた。尤も彼のなりたいものは必しも學者とは限らなかつた。それは純粹の學者よりも寧ろ學者に近いものだつた。或は藝術家にも近いものだつた。が、兎に角「精神的にえらいもの」であるには違ひなかつた。彼は只この「精神的にえらいもの」になるのに滿足してゐた。思想家になるとか、詩人になるとか、或は又小說家になるとか、具體的には何も考へなかつた。その又「精神的にえらいもの」は何か無造作になれさうだつた。若し彼さへなりたいと思へば、明日にも忽ちなれさうだつた。若し彼さへなりたいと思へば、——彼さへほんたう

になりたいと思へば！　彼はかう言ふ空想の中に漫然と何年かの月日を暮した。けれども空想はいつの間にか腐敗の臭氣を放ち出した。彼はそれでも何箇月か豚の安逸を貪つた後、とうとう眞面目に「精神的にえらいもの」にならうと決心した。

信輔も彼の友だちのやうに哲學を第一の學問にしてゐた。同時に又彼の「えらいもの」も哲學的を第一の條件にしてゐた。彼はその爲に何よりも先に哲學の中へ沒頭した。當時の哲學はベルグソンに第一の座を讓つてゐた。信輔はまづ手當り次第に「時間と自由意志」へ侵入した。それは硝子の建築よりも透明を極めた建築だつた。彼はこの冷たい壯嚴の中を犬のやうに彷徨した。が、犬の求める肉は不幸にも其處には見當らなかつた。彼はベルグソンの建築を出た後、これも當時の流行だつたオイケンの門へはひらうとした。しかしオイケンの宗教的情熱は忽ち彼を不快にした。それから――それからは彼の放浪時代だつた。彼は只あせりにあせりながら、精神科學の十字街を乞食のやうに放浪した。或時はラ・メトリイの唯物主義に流し眄を與へたこともあつた。或時はスピノザの汎神論に齒の痕を殘したこともあつた。或時は又カントの「純粹理性批判」に、――信輔の「純粹理性批判」はレクラム版の古本だつた。彼は彼是二年の間、この本を書架に並べて置いた。しかし畢に三頁よりも先を讀んだことは一度もなかつた。かう言ふ哲學的摸索の失敗は一層彼を不安にした。彼は時々立ち止つては彼の道程を振り返つた。成程二三の哲學者は――ニイチエやショオペンハウエルは少くとも彼に一臠の肉を惠んでくれたのに違ひなかつた。けれども彼の饑ゑは依然としてゐた。彼は實は第一に準備的智識に不足してゐた。第二に根氣にも乏・

しかつた。第三に概念を糧にするには餘りに感覺に執してゐた。が、それ等の考へは當時の彼には起らなかつた。彼は愈彼自身の中に空虚を感ずるばかりだつた。

のみならず信輔の「えらいもの」は「藝術的」をも第二の條件にしてゐた。彼はその爲にあらゆる情緒をインクと紙とに表現しようとした。しかしそれも困難だつた。あらゆる情緒は穀物のやうに彼自身の中に積まれてゐた。少くとも積まれてゐる筈だつた。が、ペンを執つて見ると、紙の上へ髣髴出來るものは感歎詞の外に何もなかつた。しかしそれはまだ好かつた。彼は今度はありのまま見聞を書いて見ようとした。が、この試みも失敗だつた。彼には一匹の犬の姿も、或は二人の學生の電車の中に話してゐる容子も滿足には文章にならなかつた。彼は二度目の失敗に失望――と言ふよりも驚嘆した。實際から言ふ表現的陰萎は彼自身にも意外な發見だつた。信輔はなほ念の爲に友だちをふり返つた。すると彼等は――彼等の二三は殆ど表現に苦しまなかつた。彼等のペンは紙の上へ續々と文章を綴つてゐた。彼は彼等を嫉妬するよりも寧ろ彼自身に憤りを感じた。若しこの表現上の才能も全然彼に缺けてゐたとすれば、畢竟彼の大望の全部は夢に了るより外はなかつた。それは當時の信輔には悲劇以上の悲劇だつた。彼は少時躊躇した後、三度目には飜譯を試み出した。飜譯は彼には美術館へ模寫に出かけるのと同じだつた。彼はポオの短篇を一日に一頁づつ譯して行つた。しかしこれも容易ではなかつた。彼は複雜な從屬句の前に度たびペンを拋り出した。いや、一つの形容詞の前にも度たびペンを拋り出した。元來彼の志したのは完全にポオを譯すよりも、寧ろ大は一篇の布置を、小は文章の構成をポオに學ぶことに潛んでゐ

た。が、事實上この區別は當時の彼には出來惡かつた。彼は畢竟飜譯にも、——彼の三度目の試みにも倦怠を感ずるばかりだつた。

信輔はかう言ふ道程を經た後、やつと當時の彼自身の如何に無力かを發見した。尤もそれは幸ひにも彼を絶望には陷れなかつた。彼は前にも言つた通り、只彼自身の中の空虛を痛切に感じたばかりだつた。しかしこの空虛を感ずることは當時の彼には恐しかつた。彼はその恐しさを避ける爲に絶えず机に向ふやうにした。圖書館へ行つたり、夜學へ通つたり、羅甸語の獨習を始めたりした。けれどもこの空虛の感は時々彼を襲來した。現に或晩春の夜、彼は湯島の坂をおりながら、ふと目の下の家々の空に大きい月の出を發見した。月は薄曇りの立つた中に無氣味なほど赤い色をしてゐた。彼はその月を眺めた時、突然息もつまるやうに彼自身の中の空虛を感じた。同時に又彼のいつの間にか學生時代を浪費したのを感じた。これは當時の信輔には必しも珍らしい出來事ではなかつた。が、彼の半生の間に自殺と言ふことを考へたのは前にも後にもこの夜だけだつた。……

＊〔欄外ニ〕endevouring to be great and finding to be small.

〔厭世主義〕

信輔は既に厭世主義者だつた。厭世主義の哲學をまだ一頁も讀まぬ前に既に厭世主義者だつた。

彼の家庭は前にも擧げたやうにいつも貧困を免れなかつた。のみならず彼の健康は何かと故障を生じ勝ちだつた。成程彼は彼の頭腦の彼と同級の青年よりも多少鋭いのを恃んでゐた。が、この自信も己惚以上に出てゐるかどうかは怪しかつた。現に彼の計畫したことは、――たとへば古典語を學ぶことなどは何度も徒らに猛然と初歩を繰り返すばかりだつた。彼はその爲に大學を出次第、中學の教師にでもなるより外に仕かたはないと信じてゐた。それは勿論信輔には墳墓に近い生計だつた。同時に又到底貧困の脅威を脱することの出來ない生計だつた。彼は時々目に見るやうに彼に英語や數學を教へた教師たちの一生を髣髴した。彼等の一生は見渡す限り、唯佗しい塵勞や病苦の影の中に沈んでゐた。彼の一生もことによれば、かう言ふ彼等の一生よりも見すぼらしいものかも知れなかつた。しかし彼はどう言ふ目にあつても、兎に角生きてだけは行かなければならぬ。何の爲に？

何の爲に？　この疑問はいつか信輔に厭世主義を教へてゐた。彼は彼の生涯の外に人生を認めない訣ではなかつた。いや、寧ろ彼の不幸はおのづから彼を彼以外の人びとの幸か不幸かに敏感にしてゐた。しかし兩親、親戚、知人、――彼の接して來た人びとの生涯はいづれも明らかに不幸だつた。成程彼等の或ものは所謂「片隅の幸福」を見出してゐたかも知れなかつた。が、彼等の生涯を浸した苦しみや悲しみに比べれば、それは暗夜に火を點じた蠟燭よりも小さい幸福だつた。或は感傷的な虚僞を含んだ、言はばロマンティックな不幸だつた。彼は或土曜日の午後、薄暗いガイゼル・ウント・ギルベルトの店に Familienbild と言ふ題をつけた、横に大きい原色版のレ

ムブラントを見たことを覺えてゐる。その又三人の子女を擁した、幸福らしい夫婦の姿に苛立たしさを感じたのを覺えてゐる。況や「片隅の幸福」さへない大多數の人びとの生涯は彼には意味のない悲劇だつた。彼の友だちの何人かはこの悲劇を解決するものの神の外にないのを信じてゐた。けれども神は信輔には一度も夢魔以上に出たことはなかつた。彼は又はつきり覺えてゐる。天井の高い教會の內部を、讚美歌を、オルガンを、金色の十字架を、どこか綿羊の匂のする亞米利加の宣教師の說教を。しかしかう言ふ「神の家」の空氣はいつも唯彼には輕蔑を交へた憎惡を燃え上らせるばかりだつた。

信輔は旣に厭世主義者だつた。厭世主義の哲學をまだ一頁も讀まぬ前に、――いや、彼の厭世主義は厭世主義の哲學とは緣の遠いものに違ひなかつた。彼も亦あらゆる青年のやうにいつか哲學に溺愛してゐた。殊に二三の哲學者は彼には神々も同じことだつた。信輔は何人かの手垢のついたショオペンハウエルを讀む爲に夜を徹したことを覺えてゐる。又或友人の藏書を借りたワイニンゲルを寫す爲に學校を休んだことを覺えてゐる。けれどもそれは求道心の外にも感傷主義や衒學癖や獨逸語に對する尊敬(!)を交へた或精神的流行病だつた。彼は今日ふり返つて見れば、純粹に哲學に沒頭する爲には餘りに感覺に執着してゐた。のみならず餘りに思索以外の哲學的訓練を無視してゐた。彼の「神々」はその爲にいつも一代の哲學者よりは寧ろ一代の名文家だつた。しかし彼の厭世主義はたとひ抒情詩を交へてゐたとしても、兎に角机上の產物ではなかつた。信輔は勿論厭世主義の哲學に、――殊にショオペンハウエルのアフォリズムに彼の厭世主義を辯護

する無數の武器を發見してゐた。が、それは武器だけだつた。彼の人生に對する非難は、――彼はいつまでも薄暗いランプを、彼の「自ら欺かざるの記」を、磯臭い朝燒けの大川端に浮かんだ坊主頭の屍骸を覺えてゐた。

しかし二十前後の信輔に絶えず不安を與へ……………………………………………………………

………

……………………………………………………………………………………………（未完）

（大正十四年）

美しい村

一

淺井は美しい村である。いや、今は村ではない。今上天皇の御卽位と共に町制を布いたと云ふことである。同時に又美しい昔の景色も大半は失はれたと云ふことである。しかし今は問ふ所ではない。わたしの讀者に紹介したいのは御大典以前――と云ふよりも寧ろ日露の戰役さへ始まらぬ以前の淺井村である。まだ電氣の會社も興らず、製紙の工場も建たなかつた二十年以前の淺井村である。

淺井は××縣倉橋郡の北半に位する村落である。倉橋郡の北半の地形はパレツトに似てゐると思へば好い。パレツトの指を入れる穴は周圍六里の矢矧沼であり、あとは昔淺井が原と呼ばれた、麥畑の多い平野である。もし誰か飛行機の上から、初夏の風の渡つてゐる倉橋郡の北半を見下したとすれば、必ずこのパレツトの上は大抵麥秋の黄いろの畫の具に彩られてゐることを見出すであらう。又パレツトの南の緣、――かすかに矢矧沼の光つてゐる向うは幾つも松山の綠いろの畫の具を盛り上げてゐることを見出すであらう。最後にその松と麥とのパレツトの緣なりに交つたあたりは東から西へ鐵道を一條、丁度パレツト・ナイフの痕のやうに走らせてゐることをも見出

すであらう。淺井はこの鐵道の沿線、――矢矧沼の北岸に落ちた處いろの畫の其の一隼である。

倉橋郡の北半の平野の淺井が原と呼ばれたことは前に擧げた通りである。德川幕府は二百年來、一つには馬を養ふため、一つには軍旅の足慣らしをするため、淺井が原の開墾を禁じてゐた。が、明治の新政府はかう云ふ禁令を廢すると共に、開墾を奬勵するつもりだつたか、殆ど無代價も同樣に民間へ土地を拂下げた。昔は馬ばかり歩いてゐた平野に地主の生まれたのはこの時である。爾來淺井は年々に藁屋根の數を加へ出した。と云つても勿論農家ばかりではない。松山のかげを土塀に圍つた日蓮宗の寺をはじめ、鍛冶屋、散髮屋、荒物屋、縄暖簾を下げた一膳飯屋、天狗の看板を上げた煙草屋なども續々と軒を並べ出したのである。

其處へ明治三十年の初夏、倉橋郡を横斷する□□鐵道の開通したことは一層この美しい村の發展する機會を促進した。□□鐵道は縣廳のある××市を淺井に繋いだばかりではない。同時に又彼是十五里を隔てた東京をも淺井に繋いだのである。その爲に淺井は穗麥の間に白じろと信號柱の聳えた後、見る見る倉橋全郡の農產物を聚散する中心となり、明治三十五年頃にはもう其處此處に瓦屋根も見える一かどの大村落に變つてゐた。わたしの讀者に紹介したいのは丁度この前後の淺井村である。新聞屋、宿屋、運送屋、――さう云ふ店は建ち並んでも、入り目のさした往來にはまだ如何にも悠々とミノルカ種の鷄の餌を食(は)んでゐた二十年前の淺井村である。

當時の淺井の美しかつたことはわたし自身鮮かに記憶してゐる。が、更に證據を擧げれば、紀行文に堪能の名を博した「讀賣新聞」の一記者はその「××游記」の中にかう淺井を讃美してゐる。

――「麥秋の日も傾ける頃、矢矧沼のほとりなる淺井に入れば、吳服商、酒商、賣藥商など賑はしく軒を連ねたるを見る。されどもあながちに輕佻なる都會の風に染みたりとも見えず。麥打ち唄のをちこちに聞ゆる、家々の籬に庚申薔薇の咲ける、草積みたる馬の道のべに憩へる、いづれか詩情を唆らざるべき。ポプラアに圍まれたる村役場は更なり、桑畑のかなたなる小學校さへペンキ塗りならざるは嬉しからずや。………」

×

或夏の午前、淺井村の大地主の奥村喜右衞門は彼のもとへ屆いた郵便物の中に見慣れない新聞を發見した。それは薄赤い紙に刷つた一部四頁の新聞だつた。喜右衞門は始めこの新聞を縣下の小新聞かと思つてゐた。が、他の郵便物へ目を通した後、何氣なしに帶封を切つて見ると、意外にも東京の新聞だつた。のみならず名前さへ聞いたことのない、「黎明新聞」と云ふ新聞だつた。彼は老眼鏡……………………………………………………

……………………………………………………………………（未完）

（大正十四年頃）

夢

わたしはすつかり疲れてゐた。肩や頸の凝るのは勿論、不眠症も可也甚しかつた。のみならず偶々眠つたと思ふと、いろいろの夢を見勝ちだつた。いつか誰かは「色彩のある夢は不健全な證據だ」と話してゐた。が、わたしの見る夢は畫家と云ふ職業も手傳ふのか、大抵色彩のないことはなかつた。わたしは或友だちと一しよに或場末のカツフェらしい硝子戸の中へはひつて行つた。その又埃じみた硝子戸の外は丁度柳の新芽をふいた汽車の踏み切りになつてゐた。わたしたちは隅のテエブルに坐り、何か椀に入れた料理を食つた。が、食つてしまつて見ると、椀の底に殘つてゐるのは一寸ほどの蛇の頭だつた。――そんな夢も色彩ははつきりしてゐた。

わたしの下宿は寒さの嚴しい東京の或郊外にあつた。わたしは憂鬱になつて來ると、下宿の裏から土手の上にあがり、省線電車の線路を見おろしたりした。線路は油や金銹に染つた砂利の上に何本も光つてゐた。それから向うの土手の上には何か椎らしい木が一本斜めに枝を伸ばしてゐた。それは憂鬱そのものと言つても、少しも差し支へない景色だつた。しかし銀座や淺草よりもわたしの心もちにぴつたりしてゐた。「毒を以て毒を制す、」――わたしはひとり土手の上にしや

がみ、一本の卷煙草をふかしながら、時々そんなことを考へたりした。

わたしにも友だちはない訣ではなかつた。それは或年の若い金持ちの息子の洋畫家だつた。彼はわたしの元氣のないのを見、旅行に出ることを勸めたりした。「金の工面などはどうにでもなる。」――さうも親切に言つてくれたりした。が、たとひ旅行に行つても、わたしの憂鬱の癒らないことはわたし自身誰よりも知り悉してゐた。現にわたしは三四年前にもやはりかう云ふ憂鬱に陷り、一時でも氣を紛らせる爲にはるばる長崎に旅行することにした。けれども長崎へ行つて見ると、どの宿もわたしには氣に入らなかつた。のみならずやつと落ちついた宿も夜は大きい火取虫が何匹もひらひら舞ひこんだりした。わたしはさんざん苦しんだ揚句、まだ一週間とたたないうちにもう一度東京へ歸ることにした。……

或霜柱の殘つてゐる午後、わたしは爲替をとりに行つた歸りにふと制作慾を感じ出した。それは金のはひつた爲にモデルを使ふことの出來るのも原因になつてゐたのに違ひなかつた。しかしまだその外にも何か發作的に制作慾の高まり出したのも確かだつた。わたしは下宿へ歸らずにとりあへずMと云ふ家へ出かけ、十號位の人物を仕上げる爲にモデルを一人雇ふことにした。かう云ふ決心は憂鬱の中にも久しぶりにわたしを元氣にした。「この畫さへ仕上げれば死んでも善い。」――そんな氣も實際したものだつた。

Mと云ふ家からよこしたモデルは顏は餘り綺麗ではなかつた。が、體は――殊に胸は立派だつたのに違ひなかつた。それからオオル・バックにした髮の毛も房ふさしてゐたのに違ひなかつた。

わたしはこのモデルにも滿足し、彼女を籐椅子の上へ坐らせて見た後、早速仕事にとりかかることにした。裸になつた彼女は花束の代りに英字新聞のしごいたのを持ち、ちよつと兩足を組み合せたまま、頸を傾けてゐるポオズをしてゐた。しかしわたしは畫架に向ふと、今更のやうに疲れてゐることを感じた。北に向いたわたしの部屋には火鉢の一つあるだけだつた。わたしは勿論この火鉢に緣の焦げるほど炭火を起した。が、部屋はまだ十分に暖らなかつた。彼女は籐椅子に腰かけたなり、時々兩腿の筋肉を反射的に震はせるやうにした。わたしはブラッシュを動かしながら、その度に一々苛立たしさを感じた。それは彼女に對するよりもストオヴ一つ買ふことの出來ないわたし自身に對する苛立たしさだつた。同時に又かう云ふことにも神經を使はずにはゐられないわたし自身に對する苛立たしさだつた。

「君の家はどこ？」

「あたしの家？　あたしの家は谷中三崎町。」

「君一人で住んでゐるの？」

「いいえ、お友だちと二人で借りてゐるんです。」

　わたしはこんな話をしながら、靜物を描いた古カンヴァスの上へ徐ろに色を加へて行つた。彼女は頸を傾けたまま、全然表情らしいものを示したことはなかつた。のみならず彼女の言葉は勿論、彼女の聲も亦一本調子だつた。それはわたしには持つて生まれた彼女の氣質としか思はれなかつた。わたしはそこに氣安さを感じ、時々彼女を時間外にもポオズをつづけて貰つたりした。

けれども何かの拍子には目さへ動かさない彼女の姿に或妙な壓迫を感じることもない訣ではなかつた。

わたしの制作は捗どらなかつた。わたしは一日の仕事を終ると、大抵は絨氈の上にころがり、頸すぢや頭を揉んで見たり、ぼんやり部屋の中を眺めたりしてゐた。わたしの部屋には畫架の外に籐椅子の一脚あるだけだつた。籐椅子は空氣の濕度の加減か、時々誰も坐らないのに籐のきしむ音をさせることもあつた。わたしはかう云ふ時には無氣味になり、早速どこかへ散歩に出ることにしてゐた。しかし散歩に出ると云つても、下宿の裏の土手傳ひに寺の多い田舍町へ出るだけだつた。

けれどもわたしは休みなしに毎日畫架に向つてゐた。モデルも亦毎日通つて來てゐた。そのうちにわたしは彼女の體に前よりも壓迫を感じ出した。それには又彼女の健康に對する羨しさもあつたのに違ひなかつた。彼女は不相變無表情にぢつと部屋の隅へ目をやつたなり、薄赤い絨氈の上に横はつてゐた。「この女は人間よりも動物に似てゐる。」――わたしは畫架にブラッシュをやりながら、時々そんなことを考へたりした。

或生暖い風の立つた午後、わたしはやはり畫架に向かひ、せつせとブラッシュを動かしてゐた。モデルはけふはいつもよりは一層むつつりしてゐるらしかつた。わたしは愈彼女の體に野蠻な力を感じ出した。のみならず彼女の腋の下や何かに或匂も感じ出した。その匂はちよつと黑色人種の皮膚の臭氣に近いものだつた。

「君はどこで生まれたの？」
「群馬縣××町。」
「××町？　機織り場の多い町だつたね。」
「ええ。」
「君は機は織らなかつたの？」
「子供の時に織つたことがあります。」

わたしはかう云ふ話の中にいつか彼女の乳首の大きくなり出したのに氣づいてゐた。それは丁度キャベツの芽のほぐれかかつたのに近いものだつた。わたしは勿論ふだんのやうに一心にブラッシュを動かしつづけた。が、彼女の乳首に――その又氣味の惡い美しさに妙にこだはらずにはゐられなかつた。

その晩も風はやまなかつた。わたしはふと目をさまし、下宿の便所へ行かうとした。しかし意識がはつきりして見ると、障子だけはあけたものの、ずつとわたしの部屋の中を歩きまはつてゐたらしかつた。わたしは思はず足をとめたまま、ぼんやりわたしの部屋の中に、――殊にわたしの足もとにある、薄赤い絨氈に目を落した。それから素足の指先にそつと絨氈を撫でまはした。絨氈の與へる觸覺は存外毛皮に近いものだつた。「この絨氈の裏は何色だつたかしら？」――そんなこともわたしには氣がかりだつた。が、裏をまくつて見ることは妙にわたしには恐しかつた。わたしは便所へ行つた後、匆々床へはひることにした。

わたしは翌日の仕事をすますと、いつもよりも一層がつかりした。と云つてわたしの部屋にゐることは反つてわたしには落ち着かなかつた。そこでやはり下宿の裏の土手の上へ出ることにした。あたりはもう暮れかかつてゐた。が、立ち木や電柱は光の乏しいのにも關らず、不思議にもはつきり浮き上つてゐた。わたしは土手傳ひに歩きながら、おほ聲に叫びたい誘惑を感じた。しかし勿論そんな誘惑は抑へなければならないのに違ひなかつた。わたしは丁度頭だけ歩いてゐるやうに感じながら、土手傳ひに或見すぼらしい田舍町へ下りて行つた。

この田舍町は不相變人通りも殆ど見えなかつた。しかし路ばたの或電柱に朝鮮牛が一匹繋いであつた。朝鮮牛は頸をさしのべたまま、妙に女性的にうるんだ目にぢつとわたしを見守つてゐた。それは何かわたしの來るのを待つてゐるらしい表情だつた。わたしはかう云ふ朝鮮牛の表情に穩かに戰を挑んでゐるのを感じた。「あいつは屠殺者に向ふ時もああ云ふ目をするのに違ひない。」――そんな氣もわたしを不安にした。わたしはだんだん憂鬱になり、とうとうそこを通り過ぎずに或横町へ曲つて行つた。

それから二三日たつた或午後、わたしは又畫架に向ひながら、一生懸命にブラッシュを使つてゐた。薄赤い絨氈の上に横たはつたモデルはやはり眉毛さへ動かさなかつた。わたしは彼是半月の間、このモデルを前にしたまま、捗どらない制作をつづけてゐた。が、わたしたちの心もちは少しも互に打ち解けなかつた。いや、寧ろわたし自身には彼女の威壓を受けてゐる感じの次第に強まるばかりだつた。彼女は休憩時間にもシュミイズ一枚着たことはなかつた。のみならずわた

しの言葉にももの憂い返事をするだけだつた。しかしけふはどうしたのか、わたしに背中を向けたまま、(わたしはふと彼女の右の肩に黒子のあることを發見した。)絨氈の上に足を伸ばし、かうわたしに話しかけた。

「先生、この下宿へはひる路には細い石が何本も敷いてあるでせう?」

「うん。……」

「あれは胞衣塚ですね。」

「胞衣塚?」

「ええ、胞衣を埋めた標に立てる石ですね。」

「どうして?」

「ちやんと字のあるのも見えますもの。」

彼女は肩越しにわたしを眺め、ちらりと冷笑に近い表情を示した。

「誰でも胞衣をかぶつて生まれて來るんですね?」

「つまらないことを言つてゐる。」

「だつて胞衣をかぶつて生まれて來ると思ふと、……」

「?……」

「犬の子のやうな氣もしますものね。」

わたしは又彼女を前に進まないブラッシュを動かし出した。進まない?――しかしそれは必し

も氣乘りのしないと云ふ訣ではなかつた。わたしはいつも彼女の中に何か荒あらしい表現を求めてゐるものを感じてゐた。が、この何かを表現することはわたしの力量には及ばなかつた。のみならず表現することを避けたい氣もちも動いてゐた。それは或は油畫の具やブラッシュを使つて表現することを避けたい氣もちかも知れなかつた。では何を使ふかと言へば、――わたしはブラッシュを動かしながら、時々どこかの博物館にあつた石棒や石劍を思ひ出したりした。

彼女の歸つてしまつた後、わたしは薄暗い電燈の下に大きいゴオガンの畫集をひろげ、一枚づつタイティの畫を眺めて行つた。そのうちにふと氣づいて見ると、いつか何度も口のうちに「かくあるべしと思ひしが」と云ふ文語體の言葉を繰り返してゐた。なぜそんな言葉を繰り返してゐたかは勿論わたしにはわからなかつた。しかしわたしは無氣味になり、女中に床をとらせた上、眠り藥を嚥んで眠ることにした。

わたしの目を醒ましたのは彼是十時に近い頃だつた。わたしはゆうべ暖かつたせゐか、絨氈の上へのり出してゐた。が、それよりも氣になつたのは目の醒める前に見た夢だつた。わたしはこの部屋のまん中に立ち、片手に彼女を絞め殺さうとしてゐた。(しかもその夢であることははつきりわたし自身にもわかつてゐた。)彼女はやや顏を仰向け、やはり何の表情もなしにだんだん目をつぶつて行つた。同時に又彼女の乳房はまるまると綺麗にふくらんで行つた。それはかすかに靜脈を浮かせた、薄光りのしてゐる乳房だつた。わたしは彼女を絞め殺すことに何のこだはりも感じなかつた。いや、寧ろ當然のことを仕遂げる快さに近いものを感じてゐた。彼女はとうとう目

をつぶつたまま、如何にも靜かに死んだらしかつた。——かう云ふ夢から醒めたわたしは顏を洗つて歸つて來た後、濃い茶を二三杯飮み干したりした。けれどもわたしの心もちは一層憂鬱になるばかりだつた。わたしはわたしの心の底にも彼女を殺したいと思つたことはなかつた。しかしわたしの意識の外には、——わたしは卷煙草をふかしながら、妙にわくわくする心もちを抑へ、モデルの來るのを待ち暮らした。けれども彼女は一時になつても、わたしの部屋を尋ねなかつた。この彼女を待つてゐる間はわたしには可也苦しかつた。わたしは一そ彼女を待たずに散歩に出ようかと思つたりした。が、散歩に出ることはそれ自身わたしには怖しかつた。わたしの部屋の障子の外へ出る、——そんな何でもないことさへわたしの神經には堪へられなかつた。

日の暮はだんだん迫り出した。わたしは部屋の中を歩みまはり、來る筈のないモデルを待ち暮らした。そのうちにわたしの思ひ出したのは十二三年前の出來事だつた。わたしは——まだ子供だつたわたしはやはりかう云ふ日の暮に線香花火に火をつけてゐた。それは勿論東京ではない、わたしの父母の住んでゐた田舍の家の緣先だつた。すると誰かおほ聲に「おい、しつかりしろ」と云ふものがあつた。のみならず肩を搖すぶるものもあつた。わたしは勿論緣先に腰をおろしてゐるつもりだつた。が、ぼんやり氣がついて見ると、いつか家の後ろにある葱畠の前にしやがんだまま、せつせと葱に火をつけてゐた。のみならずわたしのマッチの箱もいつかあらまし空になつてゐた。——わたしは卷煙草をふかしながら、わたしの生活にはわたし自身の少しも知らない時間のあることを考へない訣には行かなかつた。かう云ふ考へはわたしには不安よりも寧ろ無氣味

だつた。わたしはゆうべ夢の中に片手に彼女を絞め殺した。けれども夢の中でなかつたとしたら、……

モデルは次の日もやつて來なかつた。わたしはとうとうMと云ふ家へ行き、彼女の安否を尋ねることにした。しかしMの主人も亦彼女のことは知らなかつた。わたしは愈不安になり、彼女の宿所を敎へて貰つた。彼女は彼女自身の言葉によれば谷中三崎町にゐる筈だつた。が、Mの主人の言葉によれば本鄕東片町にゐる筈だつた。わたしは電燈のともりかかつた頃に本鄕東片町の彼女の宿へ辿り着いた。それは或横町にある、薄赤いペンキ塗りの西洋洗濯屋だつた。硝子戶を立てた洗濯屋の店にはシャツ一枚になつた職人が二人せつせとアイロンを動かしてゐた。わたしは格別急がずに店先の硝子戶をあけようとした。が、いつか硝子戶にわたしの頭をぶつけてゐた。この音には勿論職人たちをはじめ、わたし自身も驚かずにはゐられなかつた。

わたしは怯づ〳〵店の中にはひり、職人たちの一人に聲をかけた。

「……………さんと云ふ人はゐるでせうか？」

「……………さんはをととひから歸つて來ません。」

この言葉はわたしを不安にした。が、それ以上尋ねることはやはりわたしには考へものだつた。わたしは何かあつた場合に彼等に疑ひをかけられない用心をする氣もちも持ち合せてゐた。

「あの人は時々うちをあけると、一週間も歸つて來ないんですから。」

顏色の惡い職人の一人はアイロンの手を休めずにかう云ふ言葉も加へたりした。わたしは彼の

言葉の中にはつきり輕蔑に近いものを感じ、わたし自身に腹を立てながら、匇々この店を後ろにした。しかしそれはまだ善かつた。わたしは割にしもた家の多い東片町の往來を歩いてゐるうちにふといつか夢の中にこんなことに出合つたのを思ひ出した。ペンキ塗りの西洋洗濯屋も、顏色の悪い職人も、火を透かしたアイロンも――いや、彼女を尋ねて行つたことも確かにわたしには何箇月か前の(或は又何年か前の)夢の中に見たのと變らなかつた。のみならずわたしはその夢の中でもやはり洗濯屋を後ろにした後、かう云ふ寂しい往來をたつた一人歩いてゐたらしかつた。それから、――それから先の夢の記憶は少しもわたしには殘つてゐなかつた。けれども今何か起れば、それも忽ちその夢の中の出來事になり兼ねない心もちもした。……………

(昭和二年)

〔題未定〕

……………………………………………………

僕の書かうとしてゐるのは或一家の出來事だつた。或家の主人は或事件の爲に何年かの刑を言ひ渡される、が、執行猶豫中に或事業に失敗する、主人はその爲に自殺を遂げる、――大體かう云ふ出來事を何人かの男女を描き分けながら、その間にからまつた金の問題も取り扱つて見ようと思つてゐた。しかしそれはペンを動かして見ると、始めに豫期したよりも大仕事だつた。のみならず僕はペンを動かしてゐるうちにだんだん憂鬱を感じ出した。誰でも苦勞は多いのにそんな小說を讀ませるには當るまい、――かう云ふ氣も多少はしないわけではなかつた。

僕は机の前に仰向けになり、「名將言行錄」を讀みはじめた。「皺腹一つ搔き切れば何もすむことなりと申されたり、」――かう云ふ安藤帶刀の言葉は妙に僕を心丈夫にした。僕は僕の小說の主人公の一生を考へ、（それは實在の人物だつた。）彼も亦やぶれかぶれだつたらうと思つたりした。彼も或時は自動車を持つたり、大きい屋敷に住んだりしてゐた。しかし彼の死んだ時は或山の中に彼の死骸を運び、雨のふる夜更けに火葬にした。彼の死骸は肥つてゐただけに絕えず脂肪の燒け

る音や匂をさせてゐたとか云ふことだつた。……

そこへ僕を尋ねて來たのは田舍の或青年だつた。この青年は農業の合ひ間に時々短篇を仕上げてゐた。僕は彼を机の前へ坐らせ、彼の短篇に目を通す前に彼のゐる田舍の話などをした。彼は骨の太い手を膝の上へのせ、快活に僕と話をした。若し生活力と云ふ言葉を使ふとすれば、彼の體は逞しい生活力に漲つてゐた。僕はいつか彼を見た時、椎の木を感じたことを思ひ出したりした。

「僕は一そ君の田舍へでも住み着かうかと思つてゐるんだがね。」

「なぜかね？」

「田舍は東京よりも暮らし善いだらう？」

「譃を！　何が暮らし善いもんかね。何でも東京よりは高いずら。野菜は安いには安いけれども。」

「風俗淳良とも行かないかな？」

「風俗ね、わしはこの間わしの家の畠の柹の木を一本盜まれてしまつた。」

僕は默つて卷煙草に火をつけ、椎の若葉を眺めたりしてゐた。が、彼の話したことは何かとうに知つてゐる氣もしてゐた。

「それよりも書いたものを見ておくんなさい。」

彼の懷ろからとり出したのは罫の赤い和紙の原稿用紙に筆細の楷書を並べたものだつた。僕は

この短篇を讀みながら、時々誤字を指摘したりした。が、讀んでしまつて見ると、今更のやうに憂鬱にならずにはゐられなかつた。それは子供の出來ないやうにしてゐても、いつか子供の生まれた爲にその子供を殺さうとする或貧しい自作農の心もちや所業を描いた短篇だつた。「どろどろに水に溶かしたセメンを赤ん坊の口へ流しこんだ」――かう云ふ一行は前後の關係もあり、就中僕には主人公の苦しみを感じさせずには措かなかつた。

「これはほんたうにあつたことかね。」

「ええ、わしのしたことです。」

彼は淺黑い面長の顏に頰笑みに近いものを浮かべてゐた。僕はかう云ふ彼自身に少しも不快を感じなかつた。が、婆婆苦をものともしない、――彼自身の言葉を使へば、陰惡さへ積まうとしてゐる彼に子供の荷になつてゐると云ふことを意外に感じたのは確かだつた。彼は忽ち僕のけはひを察し、彼自身も卷煙草を啣へたまま、詰じるやうに僕に話しかけた。

「お前さんはわしのしたことを惡いことと思つてゐる？」

僕は暫く返事をせずに卷煙草ばかりふかしてゐた。椎の若葉の茂つた空はいつかどんより曇つてゐた。のみならず蒸し暑さも加はり出してゐた。彼は卷煙草を煙草盆の灰に突きさし、もう一度僕の顏を見て尋ねかけた。

「どうだね？」

「善いとも惡いとも思つてゐない。」

「ぢや何でもないと思ふ？」
「唯不便だと思つてゐる。」
「不便とは？」
「唯君の生活を便利にしないと云ふことさ。それは一度は便利にしてね。……」
「どうしてだね？」
「それでわからなければ默つてゐろ。」
僕も亦いつか頬笑んでゐた。が、彼は默つたなり、何か考へてゐるらしかつた。それから急に僕の顏を見上げ、「さうかも知れないね」と言つたりした。僕はだんだん氣安さを感じ、もう一度話を常り障りのない彼の生活の上へ引き戻した。
「君の細君はどうしてゐる？」
「不相變です。」
「君の暮らしも不相變かね？」
「ええ、……畠はだんだん賣るばかりだがね。それでも子供が死ねば善いと思ふのはわしの貧乏してゐるせゐぢやないだよ。」
「そんなことは勿論わかつてゐる。」
「手前可愛さに思つてゐるかね？」
「それも思つてゐないことはない。」

「しかし何もそればかりぢやないだよ。第一わしは生まれて來ることを一番惡いことと思つてゐる。」

彼はそんなことを話した後、「又來ます」と言つて歸つて行つた。僕は彼の歸つたあとの煙草盆や茶碗や菓子鉢を眺め、妙に僕ひとりのとり殘されたのを感じた。彼と話してゐることはいつも僕を野蠻にした。それは僕には檻の前に立ち、コオルタアルじみた匂のする野獸を見てゐるのと變らなかつた。僕はふと彼に或懷しさを感じ、彼の帽でも見る爲に二階の緣側に立つて行つた。しかし椎の若葉の向うにはもう何も見えなかつた。椎の木は目のあたりに立つて見ると、若葉や新芽を盛り上げた中に枯れ葉も可也まじへてゐた。……………

（昭和二年）

斷片

I

〔或畫家の話〕

僕はカアペツトを一枚買ひたいと思ひ、S君と一しよに日本橋から京橋を探しまはることにした。唯カアペツトを一枚買ふだけならば、そんな手數などをかける必要はなかつた。しかし僕は價の安い上に善いカアペツトを買ひたいと思つてゐた。……

それは丁度三十日だつた。のみならず烈しい吹き降りだつた。僕等は洋傘を傾けながら、アスフアルトの上を歩いて行つた。水の流れてゐるアスフアルトは僕等の姿を映してゐた。薄茶色の夏外套を着たS君や黑い夏外套を着た僕の姿を。

僕等の第一にはひつたのは日本橋の或デパアトメントストアアの家具部とか云ふ所だつた。が、價の安いカアペツトは勿論、善いカアペツトも亦一枚もなかつた。それから次にはひつたのは銀座の或絨氈屋だつた。僕はその店の入り口に柱のやうに圓く卷いた、青いカアペツトを一枚を見つけ、兎に角價だけ聞いて見ることにした。

「これはつまり四疊半ですな。お價段は四百五十圓に致しておきませう。」

僕等は勿論もう一度吹き降りの往來を歩いて行つた。三番目に僕等のはひつたのは日本橋の或「支那屋」だつた。僕は古い北京絨氈の賣りもののあることを賴みにしてゐた。が、生憎その店には毛氈の積んであるばかりだつた。

「北京絨氈をお探しならば、この先の××屋さんへ行つて御覧なさい。」

「××屋さん」は大きい骨董屋だつた。僕は厚い硝子戸越しにひつそりした店の容子を眺め、どうも足を踏み入れるのにためらはない訣には行かなかつた。しかしやつと勇氣を出してかう云ふことに恐れないS君を先立て、兎に角硝子戸の中へはひることにした。そこには成程店の隅に花や鳥の模様のある北京絨氈が何枚もつみ上げてあつた。S君は洋傘を杖にしたまま、顏の滑かな番頭を相手に僕の代りに話し出した。

「これは一枚いくらするの?」

「こちらは八疊間でも引けますが、………六百圓でございます。」

「ははあ、六百圓ね。」

僕等はこの店の外へ出ると、横から煽りつける雨脚に洋傘の調子をとりながら、どちらからとなしに笑ひ出した。

「ははあ、六百圓ね。」

「ははあ、――には違ひないんだから。」

それから又僕等は一生懸命に日本橋や京橋を歩きまはつた。が、善いカアペットも見つからな

ければ、安いカアペツトも見つからなかつた。僕等はとうとうがつかりし、ちよつと京橋の或カツフェの二階に疲れ切つた足を休めることにした。

このカツフェの二階は靜かだつた。僕はそこへ上つた時、何か嗅覺の鈍るのを感じた。それは僕等を包んでゐた雨の匂のしない爲だつた。僕等は窓際に腰をおろし、どちらも卷煙草に火をつけながら、カアペツトのことを話し出した。

「僕等の生活ではカアペツト一枚買へない。」

「文化絨氈を買へば善いのに。」

「あれぢや反つて落ちぶれたやうな氣になる。この上落ちぶれてはやり切れない。」

「そんなことを言つてゐるのもかう云ふ時代には贅澤なんだな。」

小やみのない雨は窓硝子の上にやはり絶えず流れてゐた。かう云ふ窓硝子を透かした外は、――家々の屋根や軒看板は妙にふだんよりも見すぼらしかつた。僕等は卷煙草を啣へたまま、僕等自身を慰める爲に僕等の仕事のことを話し出した。

「モデルはもう雇つてあるの？」

「あしたから來て貰ふことになつてゐるんだ。さもなければこんなに雨のふるのにカアペツトを探して歩きはしない。」

「ああ、カアペツトは畫に使ふのか？」

「うん、それも一つにはね。――一つには部屋を明るくしたいんだ。」

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

「ここへも風ははひつて來るね。」

「しめつぽい風がね。」

「又あしたは仕事をするのか。」

僕は紅茶をのみながら、S君や僕自身を慰める爲に仕事のことを話しはじめた。が、それはいつものやうに無數の疑問を生じ出した。僕等は卷煙草を啣へたまま、半ば遊戲的にこれ等の疑問と、――手に了へない怪物と闘つて行つた。……

「しかしカアペツトへ立ち戻ればだね。――」

「立ち戻れば、――又歩きまはるのかな。」

僕等はこのカツフエをあとにした後、今度は芝へ出かけることにした。雨は僕等の休んでゐるうちに仕合せにもいつか小降りになつてゐた。けれども風は前よりも一層強くなつたくらゐだつた。僕等は洋傘の骨を折られるのを恐れ、時々落ちて來る雫の中を洋傘をさざずに歩いて行つた。

芝にも家具屋には五六軒あつた。僕はそれ等の一軒の店に珍らしい薄茶色のカアペツトを見つけた。カアペツトには何も模様はなかつた。が、可也よごれた上、しみも一つ隅に殘つてゐた。その又しみは僕の目には牛乳の罎にそつくりだつた。

「これはいくらするの?」

「二十圓位に致しておきませう。」

病身らしい若主人（?）は晝の電燈の光の中にかう僕に返事をした。「二十圓」は僕には誘惑だつた。僕は何度も押し問答をした後、とうとうこのカアペットを十八圓五十錢に買ふことにした。

「では後ほどお屆け申します。」

僕等はかう云ふ言葉をあとにやつと荷をおろした氣もちになり、風の強い往來を歩いて行つた。そこを通るのも二三度目だつた。僕はこのカアペットを買ふ爲に何度そこここの家具屋の店を覗きこんだことだかわからなかつた。僕は家具屋以外の店の人々に何か羞しさに近いものを感じた。

「あの煙草屋の娘などは何と思つてゐるだらう?」

II

×

平井音吉は苛いらしてゐた。それは今度の彼の仕事の豫期通りに進んでくれない爲だつた。彼は或一圓本を二三十萬賣る計畫を立て、その爲に何箇月もつぶしてゐた。が、彼の部下たちは（事實上音吉の試みてゐることは金や信用を砲彈に使ふ必死の戰爭に違ひなかつた。）彼の命令通りに動かなかつた。のみならず世の中の不景氣は彼の前にどつしりと立ち塞がつてゐた。音吉は彼の

店の二階に葉卷を口に啣へたまま、毎日小さい卓上電話を前に目まぐるしい事務をとりつづけた。が、時々窓の外の空にかう云ふ彼自身の生活を憂鬱に思ふこともないわけではなかつた。

彼の財産は三十萬圓ばかりあつた。しかし夥しい廣告料はもうこの財産へも食ひこんでゐた。彼は一面の新聞廣告は勿論、日本全國へ活動寫眞班を出したり、一圓本のマアクをつけた象を五頭も東京中に歩かせたり、殊に三臺の飛行機に時々ビラを撒かせたりしてゐた。それ等の宣傳は進軍喇叭のやうに音吉を勇ませたのに違ひなかつた。彼は彼の會社の上を通る飛行機のプロペラの音を耳にし、いつかふだんよりも興奮したりしてゐた。

それはあらゆる戰のやうに敵のあることは確かだつた。彼の敵も彼のやうに拔け目のない戰法を工夫してゐた。音吉は金の工面をする爲にフォオドの自動車を走らせながら、ふとこの敵の店の前を通り、雜色の旗やポスタアを「敵ながらけなげに」感じたりした。が、次の瞬間には「負けないぞ」と彼自身に呼びかけたりした。

音吉はまだ獨り者だつた。が、彼是七十に近い養母を一人抱へてゐた。養母は勿論彼の仕事のどの位烈しいかを知らなかつた。しかしぼんやりと彼女の養子の危機に立つてゐるのを感じてゐた。音吉はたまにうちへ歸り、(その外は宴會に追はれてゐた。)切り髮の養母を前にしたまま、晩飯の膳に向つたりした。養母は彼の機嫌を窺ひ、いつもさりげない話ばかりしてゐた。音吉は大抵言葉少なだつた。が、四月の或夕がた、黑い高足の膳の上に走りの胡瓜を見た時には何か養母を劬りたいのを感じた。

「今度の仕事さへ成功すれば、お母さんを高い蒲團に寢かせますよ。梯子をかけるほど高い蒲團にね。」

しかし養母は箸を動かしながら、手短かにかう言つたばかりだつた。

「あたしなどはもうとる年だからね。」

それは確かに感傷的だつたと共に妙に險のある言葉だつた。音吉はふとこの養母の嫁の世話にはならないと云つて足袋ばかりさしてゐたのを思ひ出した。實際又養母は賢い中に片意地を持つてゐるのに違ひなかつた。音吉は急に不機嫌になり、默つて夕飯の膳の前を離れることにした。が、そこにはあきらめも——養母のヒステリイに對するあきらめもまじつてゐるのに違ひなかつた。中庭（なか）には唯石の井戸の上に一抱（かか）へほどの冬青の木の枝をひろげてゐるだけだつた。彼は縁側にしやがんだまま、一本の卷煙草に火を移した。それから——ふとゆうべ遇つた或藝者の顏を思ひ出した。

×

一圓本の締切り日はそのうちにだんだん迫り出した。音吉はいろいろの著者たちは勿論、銀行や取引所にも走りまはつてゐた。が、世の中はつひこの頃遺産を相續した音吉にはどこにも誠を示し勝ちだつた。彼は世の中や彼自身に度たび憤りに近いものを感じた。尤も「これも經驗になる」と云ふ言葉は彼を慰めたのに違ひなかつた。が、或廣告屋の主人などに「一肌脱ぎます」と言

はれた上、月末にちやんと支拂ひの來る時には何か情無さを感じ勝ちだつた。

かう云ふ音吉を慰めたのは富奴と云ふ藝者だつた。彼は宴會のある度に必ず彼女を招いでゐた。のみならず用にかこつけては彼女と夜を明かすことも稀ではなかつた。彼等の夜を明かす場所は町中の或待ち合だつた、音吉はこの待ち合の一間に湯帷子一枚になつたなり、度たび彼女と寢そべつてゐた。しかし彼女と三十分以上話してゐるのは退屈だつた。彼は卷煙草を吸ひながら、いつか彼女には無頓着に彼の仕事のことを考へてゐた。が、富奴の持ちかける話に調子を合はすことは忘れなかつた。それはこの都會に育つて來た彼のつとめ氣にも元づいてゐた。富奴は彼や彼の仕事に興味を持つてゐるらしかつた。「成績はどう?」――そんなことも時々話しかけたりした。音吉はいつも薄笑ひをしたぎり、何ともこの言葉に取り合はなかつた。のみならず時々肚の中に「何を言つてゐやがる」と思ふこともあつた。しかし兎に角富奴に惹かれてゐることは確かだつた。長繻絆一つになつた富奴はやはり寢そべつてゐたものの、彼に卷煙草を吸ひつける時にもどこか淑やかにふるまつてゐた。丁度卵の殼に似た顏を彼の顏の側へ近づけながら。……

しかし音吉は店にゐるうちには富奴のことを忘れてゐた。彼の心を支配してゐるものは唯彼の仕事だけだつた。彼は絕えず手形を書いたり、廣告文へ目を通したりしながら、時々中學の西洋歷史の中にあつたナポレオンのことを思ひ出した。が、彼自身をナポレオンにすることは危い氣のすることもないわけではなかつた。彼の店の二階の窓は古い瓦屋根に向つてゐた。その又瓦屋根は瓦の間に煤けた艸を生やしてゐた。音吉は人出入りのない時にはいつもこの艸へ目を移した。

「この店の出來たのはいつだつたかしら？」

彼は火の消えた葉卷を啣へ、いつか東京の空に飛ぶ蝙蝠のないことなどを考へてゐた。しかし誰かはひつて來ると、忽ち少しも隙を見せない、ふだんの實業家に變つてゐた。

III

×

僕はかねがね彼の家に或氣味惡さを感じてゐた。それはコンクリイの壁を蔽つた、夥しい蔦の葉の震へる爲だつた。震へる？——それはどうしても「吹かれる」のではなかつた。僕はその蔦の葉の震へるのを見る度に何か赤屋根の家全體も一しよに震へてゐるやうに感じた。……

この家の主人は辯護士だつた。僕は或關係上、可也彼と懇意にしてゐた。逞しい體をしてゐた彼は人一倍瘦せてゐる僕を半ば本能的に輕蔑してゐた。のみならず或小新聞の文藝部の記者をしてゐた僕をこれは意識的に輕蔑してゐた。

「君も足を洗つちやどうだ？」

彼は度たびこんなことを言つた。

IV

×

平松の家はこの町内でも舊い家の一つだつた。平松道明は封建時代には將軍家のお側に勤める「お奥坊主」の一人だつた。彼の養父も「お奥坊主」だつたものの、芝居の「河内山宗俊」に近い惡人の一人に數へられてゐた。博打を打つたり、押し借りをしたり、三人の娘を花魁に賣つたり、——彼の仕業には惡御家人（わるごけにん）たちも大抵は敬意（！）を感じてゐた。かう云ふ養父を持つた道明は勿論箸の上げ下ろしにも折檻ばかり受けつづけだつた。「おれはお父つさんのいらしつた時には藁の中にも寢たことがある。」——それは養父の歿くなつた後、彼のいつも子供たちに自慢する言葉の一つになつてゐた。

道明は大酒をする外には何も道樂のない律義者だつた。のみならず「律義者の子澤山」の例に洩れず、男女八人の子供を持つてゐた。しかし〔六字缺〕は幾分かの所謂「餘德」と一しよに家計を維持するのに十分だつた。彼は黑羽二重の紋服を着、朝々お城へ通つて行つた。それから家へ歸つて來ると、黑塗りの高足の膳を前に五合餘りの晩酌をした。（その又酒の燗の加減は——だんだん熱燗になる燗の加減は彼自身するのを常としてゐた。）黑塗りの膳は行燈の火かげや柱にかけた繭玉を映してゐた。

「造酒次郎、ここへ來い。」

彼の次男の造酒次郎は時々この晩酌の時に道明の小言を受けたりした。それは大抵大晦日の晩

に町内の松飾りを一つ殘らずどこかへ持つて行つてしまつたなどと云ふ惡戲の爲に受けるものだつた。實際又造酒次郎は兄の長太郎に比べると、全然兄弟とは思はれないほど負けじ魂を持ち合せてゐた。小心ものの長太郎は町内の子供たちと遊んでゐても、兎角誰かにいぢめられては泣いて家へ歸り勝ちだつた。造酒次郎はかう云ふ時には必ず「おいらが敵を取つてやる」と言ひ、木刀を持つて家を出て行つた。勿論町内の子供たちはガムシヤラな彼を恐れてゐた。從つて年上の子供たちさへ、――長太郎と同じ年頃の子供たちさへ餓鬼大將の彼の指圖によつてはどう云ふ惡戲もし兼ねないのだつた。……

とし月は次第に移つて行つた。長太郎はやはりお坊主になり、造酒次郎は彼の家に近い星野元右衞門と云ふ劍術使ひの道場へせつせと通ひ出した。五十を越した道明は子供の生ひ先を樂みに狂句や狂歌などを作つてゐた。しかし時々晩酌の後には炬燵に當つてゐる妻のお睦を抱きよせる位の元氣は持つてゐた。「いけませんよ。いけませんと言ふのに。」――或村名主の娘に生まれたお睦は炬燵櫓にかぢりついたまま、かう云ふおほ聲を出すこともない訣ではなかつた。道明はいつもこの手に會ふと、ちよつと頸を縮めながら、子供たちのゐる次の間へ出て來るのだつた。

時代はいつか移つて行つた。上野の山に栖こもつた彰義隊は德川家の爲に一戰ひする、――そんな話も次第に擴がり出した。家族の多い平松の家でも殊に興奮したのは造酒次郎だつた、彼は度々星野の道場へ出かけ、彰義隊へ加はるか加はらぬかを師匠と膝詰めに談判したりした。が、

星野團右衞門は容易に返事をする氣色もなかつた。

「先生も箍がゆるんだな。」

造酒次郎は彼の朋輩たちに時々かう云ふ言葉を洩らした。彼等の一人は町人の息子、――或酒問屋の息子だつた。彼の劍術は同輩の中でも決して上手とは言はれなかつた。が、大たぶさに髮を結つた彼はいつも袴に黄びらの羽織をひつかけ、朱鞘の大小を閂ざしにしてゐた。

V

×

それは或「世の末」だつた。羅生門の屋根には茂つた草や武德殿の床の上を歩いてゐる犬はこの「世の末」を現してゐた。そこへ京へはひつて來たのは太郎と云ふ田舍の侍だつた。尤も太郎はひとりではなかつた。彼よりもはるかに骨細に出來た弟の次郎も一しよだつた。太郎は彼の兩親の記憶をはつきりと彼自身にとどめてゐた。彼の母は彼の父の死骸の上に泣き伏してゐた。それから彼の母も二三箇月後には病氣になつて死んでしまつた。彼の父は文書を僞せ書きにした爲に或國司の郎黨たちに殺されたのだつた。かう云ふ記憶は七歲前の（それは彼の七歲の秋だつた。）彼の記憶を打ち消してしまつた。太郎は彼等をみなし子にした彼の父を憎んでゐた。が、何ごとも欲の多かつた肉太の彼の父の子には違ひなかつた。弟の次郎は太郎よりも氣の弱い母にそつくり

だつた。出家して娑婆苦を逃れることはいつも彼の望みになつてゐた。現に又彼は兄の太郎よりもはるかに文字に通じてゐた。

彼等は京へはひつた後、彼等の末の弟に當る三郎の宿を尋ねることにした。三郎は藤太夫と云ふ［二字缺］の家に勤めてゐた。彼等は久しぶりの挨拶をし、三郎にいろいろの話をした。が、彼は彼等の話に餘り興味を持たないらしかつた。淺黑い彼の細面は彼等の顏と違つてゐるやうに長年京にゐる彼の氣もちも彼等の氣もちとは離れてゐた。彼は時々彼等の言葉に冷笑に近いものを浮かべたりした。その又冷笑に近いものは太郎を憤らせずには措かなかつた。太郎は憎惡を嚙みながら、野蠻に三郎に突つかかつたりした。けれども三郎は鞣皮に似た顏の筋肉さへ一つ動かしたことはなかつた。

「おれは兄さんたちの話を聞いてゐると、泥や血の匂ばかりして來るからだ。兄さんたちはおれよりも正直なんだらう。おれは年は若いけれども、兄さんたちよりも世の中を見てゐる。」

彼の「正直」と云ふ意味は「阿呆」と云ふ意味にも通じるらしかつた。彼等は三郎の宿をあとにした後、犬ばかり多い道を歩いて行つた。太郎は先に立つて歩きながら、時々酒のことを口にしたりした。しかし次郎はもの優しい聲に自然と兄の機嫌をとり、弟の三郎をとりなしてゐた。

「三郎はああ云ふたちなんだから……」

「そんなことはおれにもわかつてゐる。」

太郎は六月の空の下にせつせと足を運んでゐた。往來に捨ててある死骸の臭氣に時々太い眉を

ひそめながら。……

VI

×

或寒さの嚴しい朝、お万はふと目を醒ますと、枕もとに垂れた幕の上に小さい景色の映つてゐるのを見つけた。それは向うの戸の節穴から映つて來るものに違ひなかつた。逆まに映つた木々の中には道が一つこちらへうねつてゐた。その又道の上には騎馬武者が一人やはり向うへ歩いてゐた。それ等は薄赤い光の加減か、妙に皆どす黑かつた。

×

お万は主人の言葉を聞いた時、羞しさを感じたばかりだつた。羞しさを?――しかしそこには直行ほどの侍の寵愛を受けてゐたと云ふ誇りもまじつてゐない訣ではなかつた。しかし主人の前を下つて來ると、だんだん不安を感じ出した。それは大御所の家康は勿論、主人も亦彼女のもの狂ひを或は彼女の狂言と思つてゐるかも知れないと云ふ不安だつた。

家康の憎しみを受けることは彼女には恐しいのに違ひなかつた。が、それよりも恐しかつたのはいつか彼女自身の氣持ちを信用出來ないやうになつたことだつた。

お万はこの恐しさを紛らす爲にひとりゐることも恐れ出した。が、他人と話してゐても、その「他人と話してゐる」と云ふことをはつきりと意識したが最後、忽ち不安になつてしまふのだつた。

VII

×

それから一週間ばかりたつた或午後、ひな子は一人の女中もつれずに奥庭の裏へ散歩に行つた。奥庭の裏は松林だつた。彼女は勿論から云ふ時には袿や緋の袴をつけてゐなかつた。パラソルをさした彼女の姿は當り前の夫人と云ふよりも寧ろ令嬢に近いものだつた。彼女は小みちを歩きながら、鋭い松脂の匂を感じた。それは何か彼女の體に荒あらしい刺戟を與へるものだつた。

ひな子はふとみちばたに一匹の雨蛙のゐるのを見つけた。若しこの雨蛙を踏み殺したら、――そんなことも彼女を不安にした。彼女はちよつと足を休め、わざと二三度足踏みをした。が、雨蛙は動かなかつた。ひな子はとうとうパラソルをつぼめ、その細つそりした象牙の先に雨蛙の背中を突くやうにした。雨蛙はやつと驚いたやうに根笹の中へ跳ねて行つた。

小みちはこの松林の中を鐵道線路へ通じてゐた。彼女はもう一度パラソルをひろげ、線路に沿うて歩いて行つた。線路は砂利の盛り上つた上をまつ直に向うへ走つてゐた。のみならず磨ぎ澄

ました刃物(はもの)のやうに妙に無氣味に光つてゐた。ひな子はこの線路の上に彼女の姿の映るのを見ながら、いつか姉のすま子だの謙吉だののことを考へてゐた。

彼女は格別謙吉に愛を感じてゐた訣ではなかつた。從つて又すま子にも特に惡意のあつた訣ではなかつた。が、何か彼等の爲に彼女の一生の運命の狂つたことを感じてゐた。彼等の爲に？――それも或は一概に彼等の爲と云ふことは誤つてゐるかも知れなかつた。けれども若し七年前に或山の中の溫泉宿へすま子や謙吉を尋ねて行かなかつたとすれば、……彼女はふと頤髯の長い敎主の顏を思ひ出した。この新らしい宗敎の敎主は勿論大勢の信者たちには不思議な力のある神人だつた。しかし彼女には世間並みの夫と餘り變らない夫だつた。

彼女はあたりを眺めまはした。それは何か彼女の前に白いシグナルの柱が一本、立つてゐるやうに思つたからだつた。が、そこには何もなかつた。ひな子は唯頭(あたま)だけ歩いてゐるやうに感じながら、今度は又いつか彼女自身の現在の生活を考へ出した。敎主は第三夫人だつた彼女を始め、どの夫人たちにも優しかつた。が、何か知らない力は彼女を敎主から引き離してゐた。

それは彼女の信仰の足りない爲かも知れなかつた。しかし兎に角彼女の心が誰か敎主以外の男性に向つてゐることは確かだつた。ひな子はこの男性を幼馴染みの謙吉の中にも認めてゐたのに違ひなかつた。けれども謙吉は彼女には謂はば一つの旣知數だつた。

VIII

×

格太郎は夏になり次第、東京へ出ることになつてゐた。彼のなりたいのは洋畫家だつた。實際又彼は中學時代にも畫だけはいつも滿點だつた。格太郎は度たび畫端書だの寫眞だのから東京を想像してゐた。それは唯石や煉瓦の日の光に照りつけられてる都會だつた。彼はかう云ふ東京へ來た後、樹木を描けない場合を心配し、彼の町の內外にある柳やポプラアを寫生して歩いた。

「東京だつてそんなものはあるらあね。」

彼の友だちの清一はかう格太郎に注告した。が、彼は東京へ行つた「清一」の言葉さへ信用しなかつた。

「だつてこんな伸びのびしてはゐまい。」

格太郎のスケッチ・ブックはいろいろの樹木に一ぱいになつた。やつと二十三になつた彼は彼の仕事に滿足してゐた。が、一つ上の清一は彼に好意を持ちながら、やはり彼の迂濶さ加減を輕蔑しない訣には行かなかつた。

清一はこの田舍の町でも資產家の息子に生まれてゐた。彼のなりたいのは小說家だつた。しかしそれは兩親の反對を受けるのに違ひなかつた。彼はその爲に或大學の文科へはひることを名目

にし、格太郎と一しよに東京に下宿でもしたいと思つてゐた。

×

彼等は一しよに或カッフェへ行つたり、(それは或露西亞人の經營してゐるカッフェだつた。)櫻桃の多い山の手を散步したりした。〔清一〕は〔格太郎〕に比べると、はるかに都會人らしい青年だつた。それは或は半世紀ほど前に東京から移住して來たと云ふ彼の祖父の遺傳かも知れなかつた。が、彼は兎も角も何ごとにもこだはり易い一面と共に何ごとにも亦無分別にぶつかつてしまふ性情を持ち合せてゐた。

或北風の吹きつのつた午後、清一は或カツフェのテエブルに格太郎ととりとめのない話をしてゐた。しかし格太郎の沈んでゐることはだんだん清一を不安にし出した。清一は卷煙草をふかしながら、彼自身の不安と闘つてゐるうちにふと或少女の顏を思ひ出した。それはやや眉毛の薄い、頰の圓まるした少女だつた。(清一はこの少女の頰にいつも杏の實を感じてゐた。)

「あれだな?」

清一はかう思ふと同時に頰笑まない訣には行かなかつた。

「おい、紅茶をもう一つ」

格太郎は後ろをふりかへりながら、かう主人に聲をかけた。しかし主人のロシア人は、赤更紗を垂らした窓の前にいつか晝寐をしてゐるらしかつた。……

IX

〔或畫學生の手紙〕

わたしはこの手紙を上げるのを可也躊躇してゐました。が、きのふの出來事以來、急に勇氣を生じました。

きのふの午後、わたしはパイプを啣へたまま、研究所の二階を駈け下りて來ました。するとあなたは階段の下に年の若い事務員と話してゐました。わたしはパイプを離しながら、かう事務員に聲をかけました。

「君、モデルが腦貧血を起したから、水を持つて行つてやつてくれ給へ。」

あのモデルは美人です。動物的な感じはするものの、兎に角世間並みの美人です。これはいつかあなたとも「美しい牝と云ふ感じですね」などと常談を言つたことがありました。わたしは格別あのモデルに氣のあつた訣ではありません。しかし誰も騒いでゐる外にどうしてやると云ふものもありませんから、寶丹でも買つて來てやらうと思つたのです。あなたはわたしにその話を聞くと、妙にはげしくかう言ひました。

「寶丹など入りはしない、逆さにしてゆす振つてやれば好いのに。」

わたしは正直に白狀すれば、あなたの言葉の殘酷なのに多少の不快を感じました。しかし研究

所を出るが早いか、忽ち愉快な興奮が湧き上つて來ました。この手紙を上げるのは未だにその興奮を感じてゐるからです。

わたしはあなたを愛してゐます。どうかこの手紙に返事をして下さい。

X

〔杏の花〕

野島は果物の籃をぶら下げたまま、雨上りの往來を歩いて行つた。狹い往來の兩側は大抵飾り窓のある商店だつた。その又飾り窓の板硝子は丁度映畫のフィルムのやうに、それからそれへと順々に野島の姿を映して行つた。靑みがかつた鼠の中折帽、同じ色のオォヴァ・コオト、ゲエルをかけたエナメルの靴、——野島は時々流し目にかう云ふ姿を眺めながら、彼自身の趣味の好いことに少からず滿足を感じてゐた。

その內に十七八の藝者が一人、向うからまつ直に歩いて來た。それは近代の文明の產んだ、令孃の風格のある藝者だつた。藝者は野島の五六步前へ來ると、突然彼へ擧手の禮をした。野島は勿論びつくりした。咄嗟の間に見覺えのある十二三人の藝者を思ひ出しもした。が、今目の前に立つてゐる藝者はどうしても記憶に上らなかつた。彼はもしやと思ひながら、そつと後ろを振り返つて見た。すると後ろにも藝者が一人、やはりちやんと「失敬」をしてゐた。野島は輕い失望を

感じた。それから、――何と云ふ理由もなしに中折帽をちよつとかぶり直した。

XI

×

×××町は高原にあつた。町を貫いた往來は爪先上りに山へ向ひ、その又往來の兩側には藥局、青物店、毛糸店、Curio-dealer、運動具店、教會、鳥屋、敷物店などが何軒も庇を並べてゐた。が、朝は靜かだつた。白い馬に跨つたB國公使のお孃さんやヘルメットのかげに頤髯を延ばしたU教會の宣教師の外には殆ど誰も通らなかつた。唯夥しい燕だけは涼しい朝日の光の中に絶えず往つたり來たりしてゐた。

町の突き當りを塞いでゐるのは、昔から名高いU峠だつた。峠は時々雲に埋まり、暗い綠いろの山腹ばかり…………………………………………………………………………

×

水松や落葉松の枝を張つた、山砂の荒い路の角に十字架めいた道標が一本、細つそりと白く佇んでゐた。道標はそこを通る人にかう云ふことを教へるのだつた。

Way to town

Way to station

或アメリカの老婦人が一人、この Way to town を如何にも悠々と歩いて行つた。老婦人は黑いパラソルをさし、その又パラソルをさした腕に支那緞子のバッグをぶら下げてゐた。老婦人の身なりは質素だつた。若しそこに少しでも花々しい色彩があつたとすれば、それはこの紐の長い、無恰好なバッグばかりだつた。バッグは岩だの珊瑚樹だの靑海波だのを重ねた上に鳳凰を一羽舞はせてゐた。

老婦人は殆ど目もふらずに道標の側を通りすぎた。その拍子に偶然バッグの中から海泡石(かいはうせき)のパイプが一本落ちた。これは………………………………………………………………………………………

×

F子さんは丁度六年ぶりにK町の別莊へ來ることになつた。落葉松の中の別莊は殆ど舊態を改めなかつた。いや、槍のやうにミドリを拔いた落葉松も昔の通りだつた。F子さんはかう云ふ別莊に勿論多少の懷しさを感じた。が、まだF子さんの學生だつた三年前と變らないことに或妙に矛盾した感じを抱かない訣にも行かなかつた。

この三年間(かん)はF子さんには決して短いとは云はれなかつた。三年前のF子さんは學校のテニス

の選手だつた。しかし今のF子さんは或外交官の夫人となつた上、サン・パウロに一年暮らし、更に樓蘭(Rolland)と云ふ名をつけた當歳の子供の母になつてゐた。
或寒いほど涼しい晩、F子さんは兩親や弟妹たちと別莊の客間に話してゐた。(Cottage風の別莊の客間は黃絹の笠をかけた大燭臺の光に天井も壁も籐椅子も飴色の統一を保つてゐた。それはそこに集つた人々の變化を笑つてゐる、――と云ふよりも寧ろ人々の變化に頰笑んでゐるかと思ふ位、少しも三年前に變らなかつた。F子さんは乳を見せないやうにそつと乳飲み兒に乳をやりながら、何度もこんな言葉を繰り返した。
「ちつとも昔と變らないのね。」
しかし昔と變つてゐるものも少くとも一つはない訣ではなかつた。と云ふのは向うの壁に懸けた十號ほどの油畫だつた。油畫は幾つかの赤茄子に薊の花をあしらつたF子さん自身の作品だつた。その赤茄子や薊の花はいつか昔の鮮かさを失ひ、すつかり古色を生じてゐた。F子さんは勿論この事實にも氣づかない訣には行かなかつた。
「あれだけは古ぼけてしまつたのね。もう屋根裏へでもやつてしまへば好いのに。」
……………………………………………………………………………………
×
鳥屋のお上さんは店の前に十二三羽の家鴨に餌をやつてゐた。家鴨は皆脊の低い鐵網の籠に伏

せてあつた。店の前にはその外にもまるまると肥つた七面鳥が一羽に鶏が五六羽歩いてゐた。
そこへFさんの坊ちやんが一人、珍らしく店先へはひつて來た。尤も坊ちやんとは言ふものの、彼は白いフェルトの帽子に背廣をひつかけた青年だつた。
「君の所には七面鳥がゐるね？」
「ええ、番ひをります。」
「それを一羽借りたいんだがね。」
お上さんは思はず坊ちやんを見つめた。
「お貸し申すんでございますか？」
「何、畫を描いてゐるもんだから、——寫生をするのに借りたいんだがね。」
坊ちやんは成程去年の夏もオウディトリアムの前の芝生に一本の白樺を寫生してゐた。お上さんはそれを思ひ出したものの、まだかう言ふお客には一度も遇つたことのないだけにやはり躊躇せずにはゐられなかつた。
「幾日ぐらゐでございませう？」
「一週間、——まあ十日ぐらゐだがね。」
「番ひともでございますか？」
「いや、雄を一羽借りたいんだ。どつちでも借り賃はおんなじだらう？」
坊ちやんは常談のやうにかう言つた。お上さんはちよつと坊ちやんから七面鳥へ目を移した。

それは實際「ちよつと」だつた。が、お上…………………………………………

XII

〔兄弟〕

その日は朝から雨天だつた。僕は午後の三時頃から、久しぶりに上京した京都のTと二階の書齋に話してゐた。ちよつと二人の話が途絶えると、さあつと言ふ雨の音が聞える。Tは置火燵に膝を入れたまま、硝子戸越しに庭を見ては、「柘榴がいくつもなつてゐるね。あれは食へるの？」と尋ねなどした。

Tが鞍馬の火祭の話をし出した頃にはもう大分薄暗かつた。が、電燈はまだつかない。僕は何か曖昧にTの話に返事をしてゐた。薄暗さの影響もあつたのだらう。Tは時々出雲訛を出し、若し自動車がなけらねば、車に乘つて」などと話してゐた。と、急に産聲がした。元氣の好い、短い産聲だつた。「生まれたね。」――Tはかう言つて微笑した。僕は只「うん」と答へて措いた。ほつとすることは勿論した。しかし露骨にそんな顏をするのは多少Tにも面映ゆかつたのだ、

僕は二階を下りて行つた。白い手術衣を着た産婆は玄關脇の四疊半にもう産湯を使はせてゐた。この部屋は二階よりも暗い位だらう。母はちやんと産婆の側に手燭の火をかかげてゐた。伯母や

長男もそのまはりにゐた。僕は母の後ろから盥の中を覗きこんだ。赤兒は豫想してゐたよりもずつと小さい。存外長い髮の毛がべとべとに濡れ、それに手燭の火が映つてゐる。產婆は赤兒を仰向けにし、顋の下を洗つてゐる所なのだ。僕は長男の生まれた時には妙に赤兒を氣の毒だと思つた。こいつもわざわざ苦勞をしに生まれて來たのだと思つたのだ。しかし今度は何ともなかつた。

僕は……………………………………………………………………………………………

兒にざぶざぶ湯をかけてやり、「さあさあ、お父樣に御挨拶なさい」などと言つてゐた。赤兒は御挨拶をする所か、啼き聲一つ立てなかつた　ぢつと目をつぶつたまま、只時々しかめ面をする。石鹼の匂がしみるのかも知れない。それを又母は「きつとこの兒は癇癪持ちですよ」などと評してゐた。

妻は鄰の八疊に寢てゐた。指の長い兩手を胸の上に組み、如何にもがつかりしたと言ふ風だつた。僕は襖側に佇んだまま、ちよつと看護婦にお時宜をし、それから妻に聲をかけた。妻は仰向けになつたなり、頭の上の僕を見る爲に大きい目を一層大きくした。

「又男。でもずゐぶん苦しかつた。」

妻はそれでも笑つてゐた。

「Tさんは?　Tさんに御飯を上げるんでせう?」

「うん。外で食ふから好い。」

その時比呂志の聲がした。

（大正十三年頃より昭和二年まで――但し逆編年順）

人と死と

PROLOGUE

夜。三日月が出てゐる。作者が月の方を向いて立つてゐる。

作者　お月様。

月　何だい。

作者　あなたは、いつでも、獨りで、さみしくはありませんか。

月　ちつとも、さみしくはないよ。

作者　さうですか。私は、友だちが大ぜいゐてもさみしくつて、仕方がありません。

月　友だちが澤山ゐるから、さみしいんだよ。

作者　さうでせうか。

月　あゝ、さうだよ。

暫、默つてゐる。

作者　お月様。

月　何だい。

作者　あなたは、いつでも、容ばかり歩いてゐて、さみしくはありませんか。
月　ちつとも、さみしくはないよ。
作者　さうですか。私は、仕事が澤山あつてもさみしくつて、仕方がありません。
月　仕事が澤山あるから、さみしいんだよ。
作者　さうでせうか。
月　あゝ、さうだよ。
　暫、默つてゐる。
作者　お月様。
月　何だい。
作者　あなたはようござんすね。
月　何故だい。
作者　いつでも、さうしてゐるでせう。銀貨のやうに白くなつたり、縫針のやうに細くなつたりしてもやつぱり、ちやんとさうしてゐるでせう。所が人間はさうは行きませんよ。
月　……
作者　お月様、お月様。
月　呼んだかい。
作者　えゝ、何故だまつてしまつたんです。

月　さう云はれたら、急にさみしくなつて來たからさ。
作者　それでだまつてしまつたんですか。
月　あゝ。
作者　私は、又、死ぬ事を考へると、何時でもきつと、さみしくなつてしまひますよ。
月　さうかい、私は死ねない事を考へたら、急にさみしくなつてしまつたよ。
作者　不思議ですね。
月　あゝ。
　暫、默つてゐる。
作者　お月樣。
月　何だい。
作者　私はもう、かへりますよ。
月　さうかい。
作者　仕事がありますからね。それから、友だちが待つてゐますからね。
月　ぢやあ別々、さみしい思をするのだね。
作者　えゝ、ぢやあ左樣なら。お休みなさい。
月　あゝ、左樣なら。
　作者が去る。三日月ばかり。

一

或支那の街を流れる運河。粉壁の樓がいくつも水に臨んでゐる。深夜。ＡとＢと畫舫を漕ぎながら出て來る。

Ａ　君が漕げと云ふから、此處まで漕いで來たんだが、一體この夜ふけにどこへ行くつもりなんだ。

Ｂ　あの家の下まで行けばいゝんだ。

Ａ　あの家？　あれはあの女の家ぢやあないか。

Ｂ　うん、あの女の家だ――實は少し面倒な事が起つてね、是非君の手を借りなければならない事になつたんだ。まあ舟をつないでくれ給へ。

Ａ　（舟を繫ぐ）何だい、用と云ふのは。

Ｂ　どうもとんでもない事になつてしまつたんだ。

Ａ　どうして。

Ｂ　とう〳〵二人の關係が見つかつてしまつたんだ。

Ａ　見つかつた？　誰に。

Ｂ　勿論、亭主にさ。

Ａ　ほんとうかい、それは。

B　ほんとうだとも。
A　そいつは弱つたね。
B　弱つたね所ぢやあないよ。
A　どうして又、そんな事になつたんだい。
B　なあに、一昨日の晩、あすこへ行つたらう。すると、急にそれ迄留守だつた亭主が歸つて來たと云ふ騷ぎなんだ。
A　なあるほど。
B　そこで、慌てゝ逃げる拍子に、履(くつ)を片足落してしまつたぢやあないか。
A　おや、おや。
B　そいつが又、運惡く、亭主に拾はれたんだ。
A　そこで、とう〳〵露現してしまつたのかい。
B　うん――考へて見ると莫迦々々しいよ。一度もほんとうに關係したと云ふ事があるんぢやあなし、一昨日の晩だつて、やつとあの部屋へはいつたかと思ふと、その騷ぎなんだからね。これで、亭主に恨まれりやあ世話はないよ。
A　さう云へばさうだね。
B　あんな女に、手なんぞ出さなけりやあよかつた。かうなると、君にも恨があるぜ。
A　ふん、僕があの女と關係しろつてすゝめたからかい。

B　無論さ。
A　しかし、あの女だつて君にやあ隨分氣があるんだらう。
B　どうだか。
A　氣があるとして見りやあ、僕のすゝめた事だつて、まんざら功德にならない事もなささうだぜ。それに、亭主に感づかれたのは、全然君のぬかりだからね。
B　しかし、君もさう云ふ責任がある以上は……
A　それは僕だつて出來る丈の事はするつもりさ。
B　いや難有い。それでこそ君だよ。實は今日、あの女から手紙が來てね、かうなつた以上は、一しよに逃げるより外に仕方がないつて云ふのさ。
A　だが、亭主はどうする。
B　どうするか僕は知らないが……
A　嘘をついても駄目だよ。君の知らない筈はないんだから。
B　いや、嘘をつく譯ぢやあないが、出來れば云ひ度くない事だから……なに實は、いつか君に貰つた睡り藥をのませる事にしたのさ。
A　その責任は僕にはない事にして貰ひたいね。
B　まあ、そんな事を云はずに聞いてくれ給へ。そこで、兎も角も逃げる事になつたんだが、それには舟で川を下るのが、一番いゝし……

A　なあるほど、それで僕が船頭か。

B　まあ嫌でもたのまれてくれ給へ。僕たち二人の命にかゝはる事なんだから。

A　僕がたのまれたら、反つて君の命にかゝはりやあしないか。

B　そんな冗談を云つてゐる場合ぢやあないよ。をがむから、うんと云つてくれ給へ。

A　をがまなくつてもいゝがね、兎に角舟をこぐだけはひきうけるとしよう

B　さうか、それは難有い。これでやつと安心した。僕は何もわざ〳〵君をたのまなくつてもと思つたんだが、あの女が又存外氣が小さくつてね、何でも見ず知らずの船頭ぢやあいやだと云ふもんだから。

A　いやはや、とんだ御見立てにあづかつたものだ。

B　いざとなると、女と云ふものは實際意氣地のないものだからね。

A　ぢやあそろ〳〵仕事にかゝらうか。

B　うん、いくら夜が長いと云つても、夜明けまでに、出來るだけ遠くへ行かなければならない體だからね。

Aが纜を解いて、畫舫を或樓の下に漕ぎ寄せる。

A　あたるぜ。

B　大丈夫だ。

A　相圖でもきめてあるのかい。

Ｂ　うん。（畫舫の中から月琴を出して彈く）
暫くは、月琴の響ばかり。やがてその樓の窓が開いて、女がそつと顏を出す。
女　Ｂさん？
Ｂ　さうだ。
女　（手眞似をして）しつ。
すぐに、窓から綱を下ろし、それにすがつて女がこはごは下りて來る。Ｂが途中で抱いて、畫舫の中へおろす。
Ｂ　どうしたい、あいつは。
女　ねてゐるわ。（Ａの方を透して見る）どなた？　Ａさん？
Ａ　さうです。
女　どうも御苦勞さま。
Ａ　どういたしまして。
Ｂ　何が可笑しいんだい。
女　だつて可笑しいぢやありませんか。
Ａ　ぢやあ舟を出すぜ。（靜に畫舫を漕出す）
Ｂ　己の履はどうしたい。
女　おいて來たわ。

Ｂ　おいて來た？

女　えゝ。

Ｂ　莫迦だなあ。

女　だつておいて來たつて、いゝのぢやあなくつて。私と一しよに逃げたのが知れたつて格別悪いわけは、ないんでしよ。

Ｂ　そりやあさうさ。

女　ぢやあだまつていらつしやいよ。

Ｂ　だまつてゐろ？

女　えゝ、もうあなたのする丈の芝居はすつかりしてしまつたんですもの。あとは樂屋でゆつくり休んだ方がいゝぢやあありませんか。

Ｂ　何を云つてゐるんだ。

女　まだ、わからない？

Ｂ　誰がわかる奴がゐるもんか。

女　ぢやあ、もつとよくわからしてあげるわ。（Ａに）ちよいと、早くさ。

Ａ　よし。（後から、突然、Ｂの頸を絞める）

Ｂ　あゝ。（死ぬ）

女　やつと、片づいたわね

Ａ　これで、けりがついたと云ふものさ。（Ｂの體を水の中へ落す）亭主は目がさめてからお前がＢと一しよにかけ落ちをしたと思ふだらう。

女　身を投げたと思ふかもしれないわ。

Ａ　何とでも思ふがいゝ。（櫂で水を切りながら）これから川づたひに、橋をくゞり橋をくゞりして行けば、夜があける迄に揚州へは行けるだらう。

女　月が出たやうね。

Ａ　うん、さう云へば水の上が明くなつたやうだ。そこにあいつの月琴があるだらう、ねむけざましにそれでも彈くがいゝ。

女　さうね。

畫舫は靜に水の上を辷つて見えなくなる。月明。たゞ月琴の音だけが、遠くなりながら聞えてゐる。

（大正四年頃）

尼と地藏

人物

尼

小供

その母

ずるい男

場所

京都の町はづれ。右も左も正面もすべて黄色い土塀。中央より少し右に、實のなつてゐる柿の木。その木の上に、十ばかりの小供が、登つて、柿を食べてゐる。

時刻

午後から夕方まで。時代は「昔」と云ふ語だけで、十分に理解されるやうな時代。

小供の母が右から來て中央より少し左で、ずるい男と行きちがふ。

男　今日は。

母　おや今日は。どちらへ。

男　二條まで用がありましてね。お上さんは。

母　私は一寸、庄屋樣まで行つて來ようと思つて……そりやあさうと、うちのぢざうをお見かけなさりやあしませんか。

男　ぢざう――ですか。あの地藏堂にある……。

母　いゝえさ。うちの惣領の男の子を。

男　あゝさう〳〵。お上さんの所の惣領はぢざうさんつて云ひましたつけね。この頃、見ちがへるやうに大きくなつたぢやありませんか。

母　えゝ。その代りもう惡戲で、惡戲で、手のつけやうがないんです。やれ蜻蛉を釣るの、やれ栗を拾ひに行くのつて家にぢつとしてゐる事は一日だつてありやあしません。何故あゝですかね。

男　今が丁度、惡戲盛りだから仕方がありませんよ。それより、何だつて又、あんな妙な名をつけたんです。

母　何故ですか、私は知りません。うちでつけた名なんですから。

男　旦那がつけたつて、お上さんの知らないつて法はありませんぜ。

母　（笑ふ。）大方、うちの氣まぐれなんでせう。

男　そこで、そのぢざうが——なに、ぢざうさんがどうかしたんですか。
母　えゝ。今日からうちで寺子屋へつれて行くつて云つてゐるんですが、おひるから遊びに出たつきり、未に歸つて來ないもんですから。
男　おや、おや。それぢやあお上さんはぢざうを探して歩いてゐるんですね。まるで、あの尼のやうぢやあありませんか。
母　尼——ですか。尼と云ふのは何です。
男　知らないんですか、お上さんは。あの尼を。
母　知りませんよ。どこのお寺の尼さんです。
男　さあどこの寺にゐた尼だか、詳しい事は私も知りませんがね、毎日、こゝいらを地藏はゐはしないかつて探して歩いてゐる奴がゐるんです。
母　うちの子をですか。
男　なあに地藏をでさあ。
母　ですからさ。
男　間違つちやあいけません。あの地藏を——ほらあの地藏堂にある地藏をですよ。
母　ぢやああの地藏堂を教へておやんなされぱいゝのに。
男　地藏堂にある地藏は、地藏堂にある地藏ですがね。それがあれぢやあ駄目なんです。
母　だつてあの地藏様は御利盆があるつて云ふ事ぢやあありませんか。

男　御利益があつてもなくつても、たゞ地藏ぢやあいけないんです。ちやんと生きてゐて獨りで往來を歩く、正眞の地藏でなくつちやあいけないんです。
母　そんなものこゝいらにはゐないぢやあありませんか。
男　私だつてゐるとは云ひませんよ。唯、その尼がさがしてゐると云ふ丈の事なんです。
母　まあ莫迦々々しい。どうしてそんなものを探す氣になつたんでせう。
男　何でも、夢で御告げがあつたんださうです。尤も人の話ですからあんまり當てにはなりませんがね。あの尼が寐てゐると、地藏が夢枕に立つて、こゝいらにゐるから、あひに來いと云つたつて云ふ事です。あふと極樂へ行けるんださうですが。
母　へえゝ。ほんとうでせうか。
男　だからあんまり、當てにはならないつて云つたんですよ。
母　でもその尼さんは正氣でさがしてあるいてゐるんでせうか。
男　さあ正氣だか氣ちがひだかわかりませんがね、一生懸命にさがして歩いてゐる事丈は確です。一生懸命でなけりやあ、丹波から京都まで來やあしません。
母　へえゝ。丹波から來たんですか。
男　さうださうです。
母　おどろきますね――おや、話に實が入つて、庄屋樣の所へ行くのが遲くなりました。ぢやあ、いゝぢざうが見えましたら、早く歸れと云つて下さいまし。

男　お安い御用です。ぢやあさやうなら。
母　さやうなら。(去る。)
男　(行きかけてふと柿の木を見上げる。)おや、そこにゐるのは、ぢざうさんぢやあないか
子　(木の上から)あゝ。
男　今、おかあさんが通つたらう。
子　あゝ。
男　おかあさんがさがしてゐるのを知つてゐるかい。
子　あゝ。みんな此處で聞いてゐたよ。
男　それぢやあ、そんな所にゐないで、早くうちへ歸ればいゝぢやあないか。
子　いやだよ。
男　いやだ?
子　あゝ。
男　何故、いやだい?
子　寺子屋へやられるから。
男　寺子屋へやられたつていゝぢやあないか。
子　いやだよ。
男　そんな事ばかりしてゐると、字が覺えられないぜ。

子　覺えなくつたつていゝや。
男　字を覺えなけれりやあ困るぜ。
子　困らないよ。
男　（獨り言。）困つた小僧だな。
子　やあおぢさんの方が困つてらあ。
男　そんなに惡戯をすると、おかあさんに叱られるよ。
子　叱られたつていゝや。
男　叱られりやあ泣くだらう。
子　泣いたつていゝや。
男　（行きかけながら）その柿は澁いぜ。食べるとおなかが痛くなるぜ。
子　澁いもんか。（柿をもぎつて食べる。）甘いや。もうさつきから五つ食べた。
男　（獨り言。）成程、惡戯子だ。（子に）ぢやあどうでも勝手におし。おかあさんに叱られても
　おぢさんは知らないから。
子　いゝよ。知らなくつても。おぢさんは村中で一番ずるいんだつて、おかあさんがさう云つて
　ゐたよ。おぢさんの云ふ事なんか聞かなくつたつて、おかあさんに叱られるものか。
男　（獨り言。）あれだ。手がつけられない。（行きかける。年をとつた尼が右から出て來てずるい
　男とすれちがふ。尼は柿の木を通り越して左へ行く。小供は看客に背をむけて柿を食べてゐる。

ずるい男は又、あと戻りをして尼をよびかける。）もし、もし。

尼　（立止つてふり返る。）私ですか。

男　さうです。（左へ來て尼と二人で並びながら）あなたは、よくこゝいらを通りますね。誰か尋ねる人でもあるのぢやあないんですか。あるのなら、私が教へてあげますよ。この近所なら、大抵どこでも知つてゐますからね。

尼　難有うございます。

男　御遠慮には及びませんよ。

尼　いえ。尋ねる人がある事はあるのでございますが。

男　誰です。

尼　まるで取り止めもない話しのやうで、御笑ひなさるかもしれませんが、この近所で地藏様を御見かけになりはしますまいか。

男　地藏ならあすこの地藏堂にあります。

尼　いえ。その木や石の地藏様ではないので。

男　あゝ。繪にかいた地藏ですか。

尼　いゝえ……

男　ぢやあ――何です。

尼　御生身の、地藏菩薩でございますが。

男　御生身の――はゝあ、生きて歩く……

尼　さやうでございます。

男　つまり人間の通りな地藏ですね。

尼　はい。御存知でございますか。

男　知つてゐる事は知つてゐますがね、尤も菩薩だか如來だかわかりませんが、地藏の事だけは地藏です。

尼　あの生きてお歩きになる？

男　歩きますとも。木にさへ登りますからね。

尼　木に？　へえゝ左樣でございますか。さうして、どこにゐらつしやいませう。

男　どこつて、私が御案内申してもようござんすがね。

尼　ではどうか一つ御願ひ致したうございますが。實はその事ではるぐ丹波の國から出て來たのでございますから。

男　それは、それは。

尼　それもあなた、一通りの苦勞ではございません。追剝にあひますやら、雨風にうたれますやら、こゝ迄參りましたのが、不思議な位でございます。けれども、一目、御生身の地藏菩薩の御目にかゝれさへしますれば、命なぞはどうなつてもかまひは致しません。今日、あなたに御聲をかけて頂きましたのも、きつと神佛の御加護でございませう。

男　その御喜びも無理はありませんが、何にしても、外の人間がをがんだ事のない地藏を御をがみにならうと云ふんですから……

尼　左樣でございますとも。この位の苦勞は何でもございません。いえ。あまり樂に御目にかゝれすぎて、勿體ない位でございます。

男　何しろ唯の木や石で拵へた地藏ををがむのでさへ……

尼　左樣でございますとも。隨分遠方から御信心に御出でになさる方があるのでございますから。私の願がかなひます事なら、百里や二百里の路はおろかな事でございます。御聞き及びでもございませうが、多田の滿仲樣の御家來に、殺生戒の罪で地獄へ御墮ちになつた方がございますさうで、その方があなた、地獄の呵責をごらんになつて、大方、わしも今生の業でかう云ふ責苦にあふ事かとお思召したのでございませう、ふと懺悔の心をお起しなさいますと、尊いお上人が一人、御出になつて早く故鄕へ歸つて、罪亡しをしろと仰せになつたさうでございます。すると、あなたその御家來が、どこかお上人のお顏に見たやうな所があつたものでございますから、どなたでございますと御伺ひになりますと、そなたがわしの前を通る時に歸依の心を起した地藏菩薩だと仰有つたさうでございます。成程、考へてごらんになりますと、鹿を追ひかけて、ある御地藏堂の前をお通りになつた時に、左の手には弓をお持ちになりながら、右の手で笠をお脫ぎになつて、會釋をなすつた事があつたさうで、さてはあの地藏尊かと御思召したと思ふと、あなた、まあ、どうでございませう、その御家來がおよみ返りになつたと申すでは

ございませんか。かうして御話し申す中にも、涙がこぼれますやうな、お慈悲深い難有い御功徳で……(涙を拭ふ。)

男　さう云ふ難有い地藏をおをがみなさるんぢやあ、御賽錢なんぞはお惜みにならないでせうね。

尼　左樣でございますとも。命さへ惜くはございません。おきゝ遊ばせ。かう云ふ事もございましたさうで。何でもさる尊い方の御子樣で……

男　まあ御待ちなさい。御話しを伺ふよりは早速その地藏の所へおつれ申さうぢやありませんか。

尼　左樣でございますか。どうも何と御禮を申したらよろしうございますか……

男　なあに御禮と云ふ程の事はありませんが、私も用のある體ですから、御案内をする手數料に、頂ければ何か頂きたいもので――いや、何も大した事には及びません。ほんの、その御志しで結構です。

尼　よろしうございますとも。では、ほんの僅ではございますが、こゝに私の胴卷きがございますから。

男　さうですか。それは御氣の毒ですね。(胴卷をうけとる。)これを皆、頂いてもよろしいんですか。

尼　よろしい所か、お恥しい位でございます。一日、お地藏樣の御姿ををがみさへすれば、どうなつてもよい體でございますから、お金など入る筈はございません。

男　では頂いておきませう。そこで地藏ですがね。
尼　はい、はい。（袈裟を新しいのにかけかへたり、笠をぬいだりしながら）
男　すぐそこにゐますから、こつちへお出でなさい。もう少しさきです。そら、そこに杮の木がありませう、あの上にゐる小供がぢざうです。よく御をがみなさい。私は是で御暇をしますから。（去る。）
尼　（恭しく跪いて手を合はせる。）歸命頂禮、南無地藏菩薩……尼が三拜九拜する。その時、木の上の小供が尼の方へ向くと、忽、圓光を頂いた、美しい地藏菩薩の姿になる。尼は、杮の實にかこまれた、此小さな地藏菩薩を見て、愈〻念珠の手を止めない。暫、沈默。その內に左で「ぢざう、ぢざう」と呼ぶ聲がする。地藏菩薩の姿が又、元の小供になる。さうして慌しく木からとび下りる。左から小供の母が出る。
母　何をしてゐたのだえ。あんな所で。
子　杮をとつてゐたの。
母　おぢさんがさう云つてゐたよ。いくらさう云つても木から下りて來ないつて。さあさつさとお出で。おかあさんがおしおきをしてやるから。（子を引き立てて、右へ去る。）
尼　（木の上に小供のゐなくなつたのも氣がつかないやうに、杮の木の前にひれ伏しながら）南無地藏菩薩、南無地藏菩薩……

（大正七年頃）

サロメ

ヘロデ王の宮殿の露臺。露臺は饗宴の間に接してゐる。右に大階段。左に青銅の枠のある井戸。

月明。

兵卒數人、露臺の左右を守つてゐる。

少時の後、王妃ヘロディアス、十七歳の王女サロメと共に饗宴の間から露臺へ出て來る。王妃は如何にも疲勞した態。サロメ、兵卒たちに相圖をする。兵卒たち、左右へ退いてしまふ。

サロメ　お母様、大丈夫？

妃　ああ、大丈夫だよ。少し風に吹かれさへすれば、直に氣分は癒つてしまふよ。ちよいと頭痛のするだけだからね。それよりもお前はあちらへ御出。お前までゐないとお客たちも妙に思はないとは限らないからね。

サロメ　だつてお母様はずゐぶん蒼い顏をしていらつしやるわよ。

妃　それはお前、お月様のせゐだよ。

サロメ　あら、お月樣のせゐばかりぢやなくつてよ。ほら、こんなに冷汗もかいて、……誰か呼んで來て上げませうか？

妃　いいえ、好いよ。好いのだよ。みんなついて來さうにしたのを、わざわざ止めて來たのだからね。（微笑）お前だけは何と云つても、お母樣の云ふことを聞かなかつたけれども……

サロメ　それはわたしは聞きはしないわ。お父樣の云ふことでも聞かないのですもの。

妃　だからお父樣も御心配なさるのだよ。サロメは羅馬の學者の書いた哲學の本ばかり讀んでゐる、今に新らしい女にならなければ好いつて、この間もさう云つていらしつたよ。

サロメ　あら、そんなことを仰有つたの。ずゐぶんお父樣は失禮だわね。わたしはもうとうの昔に、新らしい女になつてゐるのに。……ほんたうにお母樣はお苦しくはない？

妃　ああ、もう大へん樂になつたよ。何しろあの大勢の中から此處へ來ただけでもほつとするからね。あちらではお酒の匂はするし、サドク人とパリサイ人とは議論をするし、わたしはもう目の前の薔薇の花も見えないやうになつてしまつたけれども……（兩手に顏を埋める）

サロメ　お母樣、お母樣つてば。

妃　（顏を擧げる）何だよ？　びつくりするぢやないか？

サロメ　わたしこそびつくりするぢやないの？　急に突伏したり何かなさるのですもの。……ねえ、お母樣、お母樣はほんたうにお苦しくない？

妃　何度同じことを聞くのだよ。大へんに樂になつたと云つてゐるぢやないか？

サロメ　だつて……ねえ、お母様、………

妃　何だよ？　どうかおしなのかい？

サロメ　いいえねえ、……でもお母様はもしかすると、お怒りになるかも知れないわね。

妃　（微笑）あ、又お前、頸飾りか何か買ひたいのだね？

サロメ　あら、そんなことぢやないわ。ぢやわたし、思ひ切つて云つてしまふわよ。その代りお母様もお怒りになつちやいやよ。あのねえ、わたし、お母様をほんたうにお氣の毒だと思つてゐるの。

妃　何だねえ、この人は？　何を云ふのだよ？

サロメ　だつてあちらにいらつしやると、誰でもみんなお母様のお顔を見ないやうに見てばかりゐるのですもの。お母様はそれがお苦しいのでせう？　いいえ、わたしにはわかつてゐるわよ。さうでせう？　ねえ、お母様。けれどもお母様のなすつたことはちつとも悪いことぢやないわ。唯前のおつれあひの弟と御結婚なすつただけだわ。それをあんなに見たり何かするのはほんたうにお母様にお氣の毒よ。

妃　好いよ、好いよ、そんなことはどうでもお母様はかまひはしないよ。どうせ世間の人と云ふものは何かに悪口を云ひたがるのだからね。お母様は唯お前さへ……唯お前さへさう云つてくれれば、………（再び兩手に顔を埋める）

サロメ　泣いちやいやよ。よう、お母様。わたし、こんなことはお母様に云はうかどうしようか

と思つてゐたのよ。けれどもあんまりお氣の毒なのですもの。ねえ、お母樣。今夜のお客なんぞは野蠻人ばかりよ。みんなあの豫言者の云ひ出したことをほんたうにしてゐる野蠻人ばかりよ。あんな人たちは何と云つたつて、ちつともわたしたちの知つたことぢやないわ。だからもう泣くのはよして頂戴。お母樣、よう、お母樣つてば！

妃　（顏を擧げる）ああ、もう泣きなんぞはしないからね。わたしのことは心配しないでも好いよ。それよりも早くお前だけはあちらの席へ行つてゐておくれ。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

サロメ　お前かい。ヨハネと云ふのは？

ヨハネ　さうです。

サロメ　わたしはサロメだよ。ヘロデ王の娘のサロメだよ。

ヨハネ　ああ、お名前は知つてゐます。大へん美しいかただと云ふ、……

サロメ　（頷いて見せる）

ヨハネ　しかしお目にかかつて見ると、思つたほど美人ではいらつしやらないやうです。

サロメ　思つたほど何だつて？

ヨハネ　（大聲に）思つたほど美人ではいらつしやらないやうです。

サロメ　（憤然と）お前はわたしを莫迦にするのかい？

ヨハネ　それは勿論莫迦にします。
サロメ　（たじたじとなる）莫迦にする？
ヨハネ　ええ、莫迦にします。お孃さん、わたしは豫言者です。豫言者の莫迦にしないのは唯當來の天國だけですよ。
サロメ　お前は危險思想家だね。
ヨハネ　勿論危險思想家です。お孃さん、これは教育上の御參考迄に申し上げますが、あらゆる思想は危險ですよ。
サロメ　お默んなさい。そんなことは本に書いてあります。
ヨハネ　わたしの書いた本にでせう？　それは勿論書いてあります。
サロメ　（ヨハネに背を向ける）さつさと井戸の中へお歸りなさい。
ヨハネ　厭です。井戸の中はまつ暗です。

（未完）

（大正十二年頃）

女親

處　バンガロオ風の別莊の一室。正面にバルコンから庭へ出る戸。右(向つて)に玄關へ通ずる戸。左に奧へ通ずる戸を除き、他は二つとも開け放してある。テエブルの上に卓上電話、暖爐の棚の上に置時計等。家具は皆輕快の趣を具へてゐる。

時　七月の或午後

人　若主人と思はれる青年が一人、新聞の卷いたのを振り上げながら、一匹の雨蛙を追ひまはしてゐる。青年は目鼻立ちのはつきりした、血色の好い顏の持ち主。雨蛙は――格別特色はない。

青年　(とうとう根負けがしたやうに、ぐつたりとソフアへ坐りながら)弱つたな、こいつにやあ。とつ捉まへると云ふ訣にやあ行かずと、――おい、もう後生だから、出て行つてくれ。お願ひだよ、ほんたうに。(あたりを見まはす)おや、あん畜生、何處へ行つたらう?　(立ち上る)出つて行つてしまつたかしら?

雨蛙　(置き時計の上から)コロロツ!　コロツ!

青年　（雨蛙を見る）あ、あんなところにゐやあがる！　（もう一度新聞を振り上げながら）畜生！　さあ、出て行け！

雨蛙　コロッ！　（青年の胸へ飛び下りる）

青年　ええ、こん畜生！　（無茶苦茶に新聞を振りまはしながら）畜生！　畜生！　畜生！　（そのはずみに椅子を倒したりする）

この騒ぎを聞いたと見え、小間使らしい女が一人、小走りに奥からはひつて來る。これはやつと二十位。都會じみた服裝の陰に田舍育ちの生地を隱した、相當に美しい女である。

小間使　まあ、若旦那様、何をなすつていらつしやるの？

若主人　（喘ぎ喘ぎ）何をしてゐるつて、大立ちまはりをしてゐたのさ。ああ、ひどい目に合はせやがる。すつかり又汗になつてしまつた。

小間使　（椅子を起しながら）だつて又何と大立〔ちまはり〕・・・

×

松本家の西洋間。向つて右の戸は玄關へ、正面の佛蘭西窓は新綠の庭へ、左の戸は奥へ通じてゐる。部屋の中央に大きい圓卓、圓卓の上には卷煙草の箱、灰皿などが並べてある。

松本家の長男賢太郎は、この部屋の一隅の長椅子に、小間使のお八重と接吻してゐる。

賢太郎　(お八重を抱きしめながら)お前は、お前は、お前は、——
お八重　(甘えるやうに)お前は何?
賢太郎　お前は、その、實に可愛い。(又接吻する)
お八重　それから?
賢太郎　それからと、——それからさきも無茶苦茶に可愛い。
お八重　あら、何時もはさうは仰有らないわ。
賢太郎　何時も一つ事を云つたつて始まらないぢやないか?
お八重　それでもわたし、云つて頂きたいんですもの。
賢太郎　ぢや云ふがね。一體何時もは何と云ふんだつけ。
お八重　あら、昨日も仰有つた癖に!
賢太郎　いくら昨日も仰有つたつて、忘れちまつたものは仕方がないさ。
お八重　ぢやわたし、教へて上げますわ。おお、まいぢあれすとらぶつて。
賢太郎　(びつくりする)へええ、お前、英語が出來るのかい?
お八重　だつて始終さう仰有るんですもの。自然と覺えてしまひますわ。一番始がお前は可愛い、
　その次がおお、……
賢太郎　(お八重の發音の妙なのに閉口しながら)My dearest love つてかい?
お八重　ええ、——らぶつて愛の事ですわね。

賢太郎　(好い加減に)ああ、さうさう、愛の事だ。
お八重　ぢやあの、まいぢあれすとつて仰有るのは?
賢太郎　(愈持て扱ひながら)まいぢあれすとかね。ぢあれすとと云ふのは、――弱つたな、――dear, dearer, dearest つて訣なんだがね。――そんな事はまあ、どうでも好いぢやないか?
お八重　どうでも好かございませんわ。わたしに仰有る事なんですもの。わたしがわからなけりやつまりませんわ。
賢太郎　何もお前にさう云ふんぢやないよ。僕が唯一人さう云ふんだよ。
お八重　そんなら御一人の時でもさう仰有つて?
賢太郎　一人でもそんな事をしやべつてゐりや、色氣違ひだと思はれてしまはあ。
お八重　ぢややつぱりわたしに仰有るんですわ?
賢太郎　(愈持て餘しながら)わからないかなあ。My dearest love なんてやつは、差向ひの時に云ふ獨り語なんだよ。
暖爐の上の時計が二時を打つ。
お八重　あら、もう二時!　ぢやわたし、あちらへ參りますわ。(立上る)
賢太郎　(助かつたやうに)さうか。ぢやさやうなら。
お八重　(又坐る)あら、まあ、ちつとも止めて下さらないのね。
賢太郎　(恬然と煙草へ火をつけながら)止めなけりや又坐るのに違ひないからさ。

お八重　憎らしい。(賢太郎を打たうとする)

賢太郎　(咄嗟に立ち上る)

×

此處は松本家の應接室である。部屋は戸の三つある西洋間。向つて右の戸は玄關に、正面の戸は二階の梯子に、左の戸は奥に通じてゐる。右の壁には火のない暖爐、中央には大きい圓卓を据ゑ、その上に灰皿、巻煙草の箱、雜誌等を載せてある。左の壁には樂譜を積んだピアノ。壁には油繪の額と一しよに、日本の懸け物もぶら下つてゐる。

或晴れた初夏の午後。

この家の嫡男賢太郎は、ピアノの側にある長椅子に、小間使のお八重と接吻してゐる。

賢太郎　(お八重を抱きしめながら)お前は、お前は、お前は、――

お八重　(甘へるやうに)お前は何?

賢太郎　お前は、その、實に可愛い。(又接吻する)

お八重　(やはり甘えるやうに)それから?

賢太郎　それからと、――それからさきも無茶苦茶に可愛い。

お八重　あら、何時もはさう仰有らないわ。

賢太郎　何時も一つ事を云つたつて始まらないぢやないか？
お八重　それでもわたし、云つて頂きたいんですもの。
賢太郎　ぢや云ふよ。何とでも御意の通り云つて見せるがね。一體何時もは何と云つたつけ？
お八重　あら、昨日も仰有つた癖に？
賢太郎　いくら昨日も仰有つたつて、忘れちまつたものは仕方がないよ。
お八重　ぢやわたし、教へて上げますわ。お前は食べてしまひたい位だつて。
賢太郎　よし、そんな事は訣なしだ。お前は、——（笑ふ）こりやいけない。お前は——お前は食べ、——（又笑ふ）どうも可笑しい。何しろかう云ふ事は調子もんだからね。もう一度キスでも仕直さなけりや、到底眞面目にや云へやしないよ。
お八重　（つんとする）どうせ眞面目には仰有れませんとも。
賢太郎　ぢやお前、眞面目に云つて見るさ。あなたはお食べ申したい位だつて。
お八重　そりや無理でございますわ。そんな又莫迦な事を、——（吹き出してしまふ）
賢太郎　それ見ろ。一體人生と云ふやつは、素晴らしい事になればなる程、眞面目ぢや云ふ事が出來ないんだ。お前に惚れたとか、萬歳々々とか、我に自由を與へよ、然らずんば死を與へよとか、——
お八重　又そんなむづかしい事を！　ええ、ええ、どうせわたしは無學でございます。
賢太郎　又つんとしたな。どうだい、つん子と改名しちや？（卓上電話のベルの音、賢太郎は受

話機をとり上る）はい、はい、さうです。僕、賢太郎です。え？　誰？　中村君？　さうか？　そいつは少時だつたなあ。何時內地へ歸つたんだい？　一昨日？　何、嫁を探しに？　當はあるのかい？　ない？　冗談だらう。え？　難有う。母も相不變だよ。ぢや待つてゐるからやつて來給へ。さやうなら。（お八重に）おい、中村が來るんだとさ。（お八重は返事もしない。）あいつはお前に惚れてゐたつて云ふぢやないか？　おい、何を默つてゐるんだ？　ははあ、今度はつんぼと改名したたな。

お八重　（笑はないやうに努力しながら）存じません。わたし、もうあちらへ參ります。

賢太郎　・・・・・・・

×

お八重　（賢太郎の腕をほどきながら）もうおよしなさいましよ。奥様がいらつしやいますよ。

賢太郎　お母さんなんぞ來はしないよ。お前今さう云つたぢやないか？　呉服屋さんが參りましたつて。いくらお母さんが賢夫人だつて、其處は女の悲しさだよ。呉服屋のやつにつかまつた日にや、たつぷり一時間は動けやしないよ。

お八重　だつてもう三十分も前でございますよ、呉服屋さんの參りましたのは。

賢太郎　（わざと快活に）ぢやまだ三十分あるぢやないか？　三十分ありやキス位したたつて、――

お八重　でもいらつしやらないとは限りませんもの。
賢太郎　來たらば來た時の事にするばかりさ。どうせ一度は渡る橋だもの。堂々とさう云ひや好いぢやないか？　僕はお八重を愛してゐますつて。
お八重　そんな事を仰有つちや大變ですわ。直にわたしお暇になりますわ。
賢太郎　お暇になんぞなるもんかね。そりやお母さんの事だから、始の內は何とか反對するだらうさ。反對したところが知れたもんぢやないか？　お父さんでもゐりや兎も角も、しまひには折れるに違ひないやね。僕はお前と結婚しなけりや、――
お八重　（純粹に）あら、若旦那様！　ほんたうにわたしと結婚なさるおつもり？
賢太郎　（その純粹さにたじろぎながら）そりや勿論將來はね。（わざと憂鬱に）だが將來の事はわからないよ。あしたにも僕だつて死ぬかも知れない。
お八重　あら、緣起の惡い！　そんな事を仰有るのはおよしなさいましよ。――それでもあの、將來はきつと結婚して下さいますわね？　お捨てになる事なんぞございませんわね？
賢太郎　（今度は斷然と）そんな事は當り前ぢやないか？
お八重　きつと？　まあ、嬉しい。（突然寂しさうに）でも將來の事はわかりませんわねえ。――
賢太郎　眞似をしちやいけない。
お八重　いいえ、眞似ぢやございませんわ。わたしほんたうにさう思ひますの。どんな奥様でもお貰ひになれるのに、わたしと結婚して下さるなんて、――あんまり何だか夢のやうですわ。

（急に）ねえ、若旦那樣、わたし巳年生まれのせゐでせうか？

賢太郎　何だい、藪から棒に？　何が巳年生まれのせゐなんだい？

お八重　だつてわたし疑ひ深いんですもの。そりや若旦那樣の仰有る事は嘘だとは思つちや居りませんわ。嘘だとは思つちや居りませんけれども、わたしと一しよになつて下さる、それから仕合せ・・・・・・

×

お八重　又そんなむづかしい事を。（暖爐の棚の上の時計が二時を打つ）まあ、もう二時、――ぢやわたし　あちらへ參らなくつては、――

賢太郎　學校ぢやあるまいし、二時引けにしなくつたつて好いぢやないか？

お八重　だつて又奧樣でもいらつしやると、それこそ大變でございますもの。

賢太郎　何、お母樣に見つかつたら、その時は堂々とかう云ふのさ。――わたしたちは互に愛し合つてゐますつて。お母樣は勿論びつくりするね。が、搦つた揉んだやる内にや、其處は女親の難有さだよ、それ程愛し合つてゐるもんなら、結婚させようと云ふ段どりになる。――

お八重　（眞率に）あら、若旦那樣、ほんたうにわたしと結婚なさるおつもり？

賢太郎　（その眞率さにたじたじとなる）そりやその、勿論將來はね。――急にはちつとむづかし

いが、
お八重　ええ、將來はでございますわ。將來は結婚たすつて下さいまして？
賢太郎　（曖昧に）どうせ結婚問題などと云ふものは、結局は僕の意志一つだからね。（お八重の疑はしさうなのを氣にしながら、）僕は愛のない結婚はしないつもりだし、――
お八重　でも小早川様とかの御孃様に、御縁談があるさうぢやございませんか？
賢太郎　（父たじたじとなる）誰にそんな事を聞いたんだい？
お八重　・・・・・・

×

母　賢太郎！
賢太郎　何です？
母　お前、今何をしてゐたんです？
賢太郎　僕ですか？　僕は、――その、お八重がね、お八重が目に五味がはひつたつて云ひますから、とつてやつてゐたんです。
母　嘘をおつきなさい。お前はわたしを目くらだと思つてゐるんですか？
賢太郎　目くら――ぢやないでせう。しかしお母さんの近眼は六度位でしたね。

母　（憤然と）お前はお母さんを莫迦にするのかい？　わたしはけふが始めてぢやないよ。この間からどうもお前の素振りが可笑しいと思つてゐたんだよ。

賢太郎　そんなら何も今更のやうに訊いて見なくつたつて好いぢやありませんか？

母　訊いて見たつて好いぢやないか？

賢太郎　悪い趣味ですね。云ふべからざる事を云はせようとする、――風俗を壞亂する趣味ですね。芝居だと上場を禁止されるかも知れません。

母　（憤然と）お默んなさい。お母さんを莫迦にするのも程があります。ぢきに趣味だとか何だとか、――お前こそ悪い趣味ぢやないか？　お八重のやうな召使ひなんどと、……

賢太郎　（憤然と）召使ひがどうしたんです？　お母さんだつてお八重だつて、みんな同じ人間ぢやありませんか？　召使ひがどこが悪いんです？

母　見つともない。大きな聲を出すのはよしておくれよ。そりやわたしだつてお八重だつて、みんな同じ人間だらうさ。だがお八重は召使ひ、わたしは此處の主人なんだからね、それだけの區別は・・・・・・・

（大正十二・三年頃）

織田信長と黑ん坊

三

〔小姓の一人〕‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥は何にもならぬ。その代りに僕一人先に起せば、みんながまだ慌ててゐるまに兜もかぶれれば槍も持てる。拵（かせ）ぎが出來るのは僕ばかりだ。

黑ん坊　そりや君の言ふ通りだ。

小姓の一人　だからまつ先に僕を起せよ。好いか？　きつと忘れるなよ。

黑ん坊　手前勝手なことを言つてゐるなあ。

小姓の一人　何、誰が手前勝手だ？

黑ん坊　ううん、何とも言ひはしないよ。

小姓の一人　新參ものの癖に生意氣なやつだ。（それぎり又寐入つてしまふ。）

黑ん坊は暫く欠伸をしたり、つまらなさうにあたりを眺めたりしてゐる。そのうちに篝火はかすかになり、次第に月夜に變つてしまふ。すると黑ん坊は驚いたやうにぢつと何かに聞き入つてゐた後、獵犬のやうに飛び立つたと思ふと、風上へ鼻を反らせながら、——

黒ん坊　おや、馬の匂ひもする。焰硝の匂ひもするやうだぞ。あの音は、――あれは蹄の音だな。待てよ。まだ足音も聞える。差し物が風に鳴る音も聞える。こりやあいつが言つたやうに。……

黒ん坊は忽ち四つ這ひになり、靜かに陣幕の外へ這ひ出してしまふ。尤も黒ん坊が言つたものは聞えても來なければ、匂つても來ない。あとには唯ひつそりした月の光ばかり照り渡つてゐる。

傍らに肘を枕にした小姓の一人（急に寐返りを打ちながら）この黃粉をつけた餅を一人で食へとは忝けない。（これも勿論寐語に違ひない。）

二三分たつたかたたぬうちに黒ん坊は四つ這ひになつたまま、陣幕の中へ歸つて來ると、身輕に體を起すが早いか、松千代の側へ飛んで行き、――

黒ん坊　（小聲に）松ちやん！　松ちやん！

松千代　（目を開き）誰だい？　ああ、君だつたか？

黒ん坊　大へんだよ。君。夜打ちがかかつたんだよ。さあ、早く槍を持つんだ。

松千代　え、何がかかつた？

黒ん坊　夜打ちだつてばさ。

松千代　何、夜打ちがかかつた？　（急に槍を執つて立ち上る。）よし、初陣の功名に……

黒ん坊　（松千代の腕を抑へ）未だここへは來ないんだよ。唯向うの薄の中を大勢こつちへ忍ん

で來るんだよ。

松千代　君は確かに見屆けて來たんだね？

黑ん坊　ううん、そうつと聞き屆けて來たんだよ。その前にも嗅ぎ屆けては置いたんだけどね。

松千代　え、嗅ぎ屆けて置いたつて？

黑ん坊　（得意さうに鼻を指さしながら）僕の鼻はすばらしいんだよ。君たちは一町先にゐる尨犬の匂さへわからないだらう？　けれども僕は風下にゐりや、三町先に蛙を呑んでゐる蛇の匂ひでもわかるんだぜ。（突然又松千代の腕を抑へ）ああ、だんだんやつて來やがつた。夜露にしめつた指し物だの草鞋だのの匂ひもし始めたよ。

松千代　ありがたう。僕は君のおかげで今夜だけは遲れをとらずにすむよ。

黑ん坊　實は夜打ちでもかかつたら、眞つ先に起してくれろつてね、あいつに（具足櫃によりかかつた小姓の一人を指さし）賴まれてゐたんだけれど、君だけ今起しに來たんだよ。

松千代　どうして又僕だけ起しに來てくれたの？

黑ん坊　だつて……

松千代　それでもほんたうに御禮を言ふよ。

黑ん坊　（突然そこへあぐらをかき、兩手に顏を隱してしまふ。）そんなことを言つちやいけないよ。そんなことを言つちやいけないよ。

松千代　どうしてさ？（黑ん坊の顏を覗きこみ）おや、君は泣いてゐるね？　何か急に悲しくな

つたの？

黑ん坊　ううん、悲しくはないんだよ。ちつとも悲しくはないんだけれどね、唯僕は生まれてから、一度もお禮つてものを言はれなかつたんだよ。それを今君に言はれたもんだから……（短刀をひき拔き）松ちやん、君はこはくはないかい？　僕は膝頭ががくがくしてゐるんだよ。

松千代　敵を恐れるのは侍ぢやない。僕のお父さんも十七の年に一番槍の功名を立ててゐるんだ。

黑ん坊　だつて君も震へてゐるぢやないか？

松千代　これは武者震ひと云ふもんだよ。

かう云ふ松千代の言葉のうちに忽ち鬨の聲や鐵砲の音。續いて夜打ちの本願寺勢が大勢、槍や刀を閃かせながら、ばらばら陣幕の中へ亂れ入つて來る。小姓たちも前後して飛び起きるが早いか、手ん手に得物を執つて戰ひ合ふ。一本の槍を二人がかりで引き合つたりするものも少くない。具足櫃によりかかつてゐた小姓の一人は槍を提げて飛び起きると、――

小姓の一人　黑ん坊のやつはどこへ行つた？　約束を守らぬ不屆ものめ！　黑ん坊のやつはどこへ行つた？

本願寺勢のまつ先に立つた身の丈拔群の法師武者が一人、大薙刀をふりまはしながら、――

法師武者　（大音を擧げ）敵味方の中に人も知つたる大夫坊覺明を黑ん坊などとは緩怠至極！

小姓の一人は槍を合はせるが早いか、忽ち一薙ぎに薙ぎ倒されてしまふ。

覺明　小倅どもでは相手に足らぬ。大將の織田殿はどこへ行かれた？　さあ、織田殿に見參しよう。

松千代　竹村松千代！　參る！　（不相變がたがた胴震ひをしながら、一心に覺明に突いてかかる。）

覺明　この小わつぱめ！　邪魔立てするな！

黑ん坊　（敵味方の間を縫ひまはりながら）あぶないよ。松ちやん、あぶないつてば。そいつは一番强さうだよ。

覺明は二三合渡り合つた後、大薙刀の石突きで無造作に松千代を突き倒してしまふ。それを見た黑ん坊は一生懸命になり、短刀を片手にふりかざしながら、思はず本國の言葉を發し、

黑ん坊　チヤツク、ラツク、バアル！

覺明　何だ、貴樣は？　人間か、猿か？

覺明はさすがに驚きながら、それでも黑ん坊に打つてかかる。黑ん坊は忽ち辟易し、あちらこちらと逃げまはつた後、短刀を口に啣へたなり、するすると柳の木に登つてしまふ。

覺明　大將の織田殿はどこへ行かれた？　さあ、織田殿に見參しよう。

松千代はやつと起き上り、怯づ怯づ覺明に突いてかからうとしてゐる。が、覺明の勢ひに呑まれ、容易に槍をつけることが出來ない。

鐵砲の音や人聲に滿ちた、火かげ一つ見えない暗やみの中を例の黑ん坊がたつた一人、やはり口に短刀を啣へ、右から左へ一目散に氣違ひのやうに走りつづけてゐる。………………

五

竹藪を負うた狄江の住居。一段高い住居の床には古疊が一二枚敷かれてゐる。土間の左は戸口になり、そこに崩れかかつた土竈など。土間の右に接した壁には犬もくぐり兼ねない穴が一つ。穴の上の竹格子の窗から月明りが一すぢ土間に落ちてゐる。遠近に人聲や鐵砲の音。そこへ正面の暖簾の中から帶に懷劍をさしたまま、行燈をかかげて走り出したのは勿論この住居の女主人である。

狄江　さては合戰が始まつたと見える。若しや殿の御本陣に敵の夜打ちでもかかつたとしたら、……(行燈をおろす。)と云つて女の身一つでは松千代の安否も尋ねには行かれぬ。をう、さうぢや。どちらが夜打ちをかけたものやら、鄰の甚兵衞殿に見て來て貰はう。尤も耳の遠い甚兵衞殿はこの騷ぎも知らずに寐入つてゐるかも知れぬ。

から云ふ狄江の言葉のうちに右の壁に明いた穴の中から黑い脚が二本見えはじめる。

荻江　（ふとこの黒い脚を見つけ）や、何ぢや、あそこにあるのは？（黒い脚はかう言ふうちに黒い尻に變つてゐる。）大猫のたぐひでもないやうな。（ひらりと土間へ飛び下りると、片手に黒ん坊の褌を捉へ、片手に懐劍を拔きながら）こりやその方は何ものぢや？　たとひ見る影はないあばら家にもせよ、案内もなしに侍の家へ泥脚(どろあし)を入れるとは無禮であらう。女ながらも織田殿の身うち竹村權之丞の女房荻江、返答によつては用捨はせぬぞ。

黒ん坊　（壁の向うから）僕だよ。おばさん。僕だつてば。おばさんは松ちやんのお母さんだらう。

荻江　松千代のことも知つてゐる上は妖怪變化であらうも知れぬ。妖怪變化でも恐しくはない。さあ、その方は何ものぢや？

黒ん坊　（同上）だから僕だつて言つてゐるぢやないか？　僕だよ。あの黒ん坊だよ。瓶の中から出た黒ん坊だよ。

荻江　何、黒ん坊！（まだ少しも油斷せずに）成程さう言はれて見れば、あの時の黒ん坊のやうでもある。その又黒ん坊が何の爲に來たのぢや？

黒ん坊　（同上）敵の夜打ちがかかつてね、殿樣さへどこかへ行つてしまつたから、命あつての物種だと思つて一生懸命に逃げて來たのだよ。

荻江　（思はず手を放して立ち上る。）何、殿のお行くへもわからぬ？

黒ん坊　（同上）そこへこの家の明りが見えたのだらう？　僕はしめたと思つてね、兎に角這ひこまうとしかけたのだよ。

荻江（ぼんやりと）さては味方の總崩れぢやな。
黒ん坊（同上）ねえ、おばさん、家の中へ首を入れても好いだらう？　ここの藪つ蚊のひどいこ
　とと言つたら。
荻江（はつとしたやうに懐劍ををさめ）おう、はひつても好い所ではない。おばさんが足を引つ
　ぱつて上げようか？　瓶の中から出た時のことを思へば、懐しさは又人一倍ぢや。おばさんも
　お前の顔が見たい。
黒ん坊（やつと壁の穴から這ひ出し）譃をついてゐらあ。松ちやんの話を聞かせて貰はうと思
　つて。

（未完）

（昭和二年）

發掘

中華民國河南省の或客棧。小さいランプを置いたテエブルを中に日本人が二人話してゐる。竹を編んだ寢臺が二つ。正面の戸口の外は大きい鉢植ゑの柘榴などに月光の落ちた庭になつてゐる。テエブルの上や棚の上に土偶、鑄金佛、土器などの發掘品。左に卍字格子の窓が一つ。短い顋鬚を生やした一人は口髭もない一人よりも年長らしい。部屋の隅に發掘用の道具。

二人とも默つて卷煙草をふかしてゐる。

顋鬚のある一人　（ちよつと時計を出して見る）もう十時か？

もう一人　道理で僕は眠くなつて來た。

一人　ぢや寢るさ。枕の代りには鞄をするのだよ。

もう一人　君は？

一人　僕はまだだ。

もう一人　まだ何か書いたりするのかね？

一人　書くのはここを立つてからでも善い。僕には妙な習慣があつてね。人と一しよに寐る時に

はいつも先に眠つて貰ふのだ。殊に初對面の人などとは。……
もう一人　そんなことをして退屈しないかね？
一人　まあ、何か考へてゐるから。
もう一人　考古學的にかね？
一人　考古學的にもさ。
もう一人　たとへばどんなことを考へるのだ？
一人　新聞記者かたぎを出しはじめたね？
もう一人　いや、素人として知りたいのだよ。考古學上の素人としてね。（間）君はずつと日本にゐれば、何不足もない身分だ。それが何年もこんな處にゐて毎日土ばかり掘り返してゐる。
一人　こんな處へ歸つて來たのだよ。前にはもつと奥へはひつてゐた。
もう一人　それだからさ、それだから何か考古學的な考へも多いと思ふのだよ。
一人　そんなものは雜誌に發表してゐるしね、……
もう一人　それは君の研究報告さ。僕の聞きたいのは感想だね。もつと素人にもわかり易い――たとへば或時代の趣味などと云ふことを。
一人　それは趣味も或時代には……
もう一人　（熱心に）趣味も或時代にはどうかしてゐたかね？
一人　（土偶を一つとり上げ）から云ふ顏は今ははやらない。しかし或時代には美しかつたのだ。

従つて今美しいと云ふ顔はこの時代には醜かつたらう。逆に又この時代に美しかつた顔は……

……（ちよつと相手の顔を見つめ）そんなことは君にはつまらないだらう。

もう一人　いや、大いに面白いよ。

一人　ふん、君は新聞記者だ。桑や麻の栽培を視察にやつて來た新聞記者だ。（間）遠慮などをしずに横になり給へ。

もう一人　僕もそんなことには興味を持つてゐるのだ。

一人　そんなこととは？

もう一人　或時代の趣味とか　人情とか、（間）それから又道徳とか……

一人　（常談のやうに）ぢや發掘の手傳ひをするさ。

もう一人　これから君の助手になつてかね。

二人とも笑ふ。

もう一人　（急に眞面目に）僕はきのふかう云ふ話を聞いた。――何でもこの近所の百姓だがね、牛を一匹買ひたいものだから、或デンマアクの商人へ女房を賣りに行つたと云ふのだが、……

一人　そんな話は僕も聞いてゐる。

もう一人　しかしそいつは賣はなかつたさうだ。（間）僕は百姓に同情したね。

一人　ふん、それも或見かただ。

もう一人　君はさうは思はないかね？　（間）牛を持つてゐないのは困るだらう。

一人　この邊では牛を持つてゐなければ、碌な耕作は出來ないのだ。
もう一人　ぢや僕と同意見だね。
一人　さうさね。その百姓にもよりけりだが、……
もう一人　百姓は存外平氣だつたらしいよ。女房は泣いてゐたさうだがね。
一人　僕の聞いた話では女房は泣いてゐなかつたさうだ。（間）別の話かも知れないがね。
もう一人　そんなに何人もこの邊では女房を賣るやつがゐるものかね？
一人　それはゐないとも限らないさ。何しろ去年は不作だつたからね。そんなことは君の方が專門家だつけ。（笑ふ）
もう一人　あすこに牛の土偶もあるね。
一人　うん、これはをととひ發掘したのだ。
もう一人　牛は今も變らないぢやないか？
一人　牛はね。馬は可也變つてゐる。
もう一人　馬は日本でも變つてしまつた。今は皆脊の高いアラビア種の馬になつてゐる。尤も未だに田舍などには脊の低い馬も殘つてゐるがね。
一人　在來日本にあつた馬だね。あれは滿洲あたりの馬と同じことだ。
もう一人　僕は田舍の僕の家にもああ云ふ馬のゐたのを覺えてゐる。
一人　君の田舍は？

もう一人　長野縣だがね。
一人　長野縣の……？
もう一人　どこと云ふことは尋ねずにくれ給へ。誰にも言つたことはないのだから。
一人　何、勿論尋ねずとも善いさ。唯僕も同縣人だから。
もう一人　ぢや僕も尋ねずに置くか。
　二人とも笑ふ。口髭もない一人はランプの心を直す。
一人　まだ君は起きてゐるかね？
もう一人　ああ、眠氣もさめてしまつた。
　顋髯のある一人は欠伸をする。
もう一人　しかし故郷は忘れ難しだね。尤も僕は十五六の年に家を飛び出してしまつたのだが、
……
一人　故郷――かね。僕の故郷は日本と云ふ島だ。
もう一人　それでも時々は思ひ出すだらう。蠶棚だの、池の鯉だの、――

（未完）
（昭和二年）

第二

浮世繪師の多くは、餘りに、わかり切つた事ばかり畫いてゐる。自然の見方でも、人間の見方でも、彼等に教へられる所は、殆ない。彼等の畫いてゐる事は、日本人でさへあれば、常人でも畫ける事ばかりである。すぐれた藝術の作品は、さう云ふ物ではない。その中には、必、かうも見られるものかと感心するやうな所を持つてゐる。さうして、更に、それを、かうも正確に現せるものかと驚くやうな所を持つてゐる。それが、多くの浮世繪師には、見出されない。個體の眞を捉へると同時に、普遍の眞へ食ひ入つて行く丈の、眞劍さが缺けてゐるからである。尤も、彼等の作品にも、ジヤンルとしての興味はある。その上、歴史的乃至文學的の聯想は、動もすれば、この興味を助長して、浮世繪から受け入れられる物は、それだけのやうに思はせ易い。殊に、江戸趣味を提唱する浮世繪の鑑賞家は、大抵、かう云ふ見方に囚はれてゐるやうである。が、これは、中學生がメエソニエの「一八一四年」や「一八〇七年」を見て、ナポレオンの勝敗を想見するのと、大した變りはない。畫その物の價値とこの種の聯想とは、少くとも、理論上、沒交渉なる可き筈だからである。この類(たぐひ)のハンディ・キヤツプを除いて見ると、浮世繪の大部分は、一部の西

洋人と一部の日本人とが買冠つてゐるより、大分、藝術作品としての相場が下つて來る。文政前後の歌川派とか北齋派とかのすぐれた浮世繪師を見ても、この意味で、俗流と五十歩百歩の間にある者が多い。稀世の風景畫家と稱される一立齋廣重にしても、自分には、まだ、物足りない所がある。まして、文化天保以後の浮世繪師になると、一人として、流俗の見を脫し得た者がない。悉、時好に投ずるやうな、いい加減な繪ばかり、畫いてゐる。

しかし、その浮世繪師の中でも、少數の天才だけは、立派に彼等自身の領土を開拓してゐる。自分は、日本人として、何よりもこれを嬉しく思ふ。彼等は、外の浮世繪師と同じ題材を取扱ひ、同じ版元の力を借り、同じ町人を相手にしてゐる。それでゐて、外の連中とは比べものにならない程、自由に、思切つて、彼等自身を生かしてゐる。つまり、民衆藝術と云ふ浮世繪の特質に掣肘されてゐさうで、實は少しもされてゐない。そこに、彼等の大きさがある。しかも、彼等の畫いてゐる繪には、ほんとうの意味での日本がある、ほんとうの意味での日本人がある。同時に、それらの背後に呼吸してゐる、大きな自然と人間とがある。彼等の繪を國民的と云はなければ、外に國民的な藝術はない、同時に又、彼等の繪を世界的と云はなければ、外に世界的な藝術はない。これはパラドックスのやうであるが、眞理である。獨り、彼等の繪に止らず、あらゆるほんとうの藝術作品に、當嵌まる眞理である。自分は、この意味で、彼等を尊敬し、且、愛したいと思ふ。彼等がゐなかつたら、どんなに自分たちは心細いかわからない。どんなに日本人の能力を疑ひたくなるかわからない。少くとも、自分にとつて、彼等がゐたと云ふ事は、日本に不二と云

ふ一つの休火山があると云ふ事よりも、重大である。——自分が、ここに東洲齋寫樂を論じようと思ふのも、彼がこの少數の天才の一人だつたからに外ならない。……

八

浮世繪の歴史から考へても、寫樂の占めてゐる位置は、有意味なものではなからうか。自分には、享保以前の浮世繪師と、享保以後の浮世繪師とを比べると、その間に、著しい態度とか作畫の理想とかの相違があるやうに思はれる。(或は、これを寶暦以後に分つた方が、一層適切かも知れない。)享保以前の浮世繪を見ると、師宣にしても、信清にしても、その特色は、寧、比較的古典的な、形式美にあるやうであるが、享保以後、殊に、明和以後に輩出した浮世繪師の作品を見ると、それ以上に、まだ何物かが、力強く現れてゐる。これが、獨り浮世繪のみならず、當代の日本畫に共通だつた寫實主義(レアリスム)の傾向である事は、云ふまでもない。勿論、享保以前の浮世繪師にも、この傾向があるにはあつた。しかし、彼等の寫實主義と明和以後の浮世繪師のそれと比べると、そこに、自(おのづから)なる區別がある。丁度、文藝の方面で、これとパラレルをなすものは、西鶴の寫實主義と一九のそれとであるが、單にその傾向そのものから見れば、前者は、到底後者の徹底してゐるのには若かない。しかも、一方、享保以前の浮世繪に現れた反寫實的傾向を見ると・・・

・・

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・して、あらゆる「彩られた寫眞」から、超越せしめる。彼の畫いた大首の似顏畫を見ると、その「赤く隈取つて、横眼を使つた小さい眼」や、「一方を堅くむすんでゐるが、片側では接目の漆がはなれかかつてゐる」脣や、「すべすべに剃つた頭の兩側」にくつついてゐる「鳥の翼のやうな」「まつ黑な髮」には、一切の皮相を脫離した、「眞實」が人に迫つてゐる。ひとしく、寫實主義的傾向によつて、育まれた浮世繪師の中でも、彼の如く、Phenomena を去つて、Nomena に肉薄したものはない。彼は、實に、應擧が自然に於て成功した仕事を、人間に於て完成したのである。

浮世繪の歷史は、その最盛期に於て、彼がゐる爲に、最も面白いバランスがとれた。彼がゐなかつたとしたら、大いなる春信は、どんなにきは立つた對照の面白さを失ふことであらう。彼と踵を接してゐた歌麿や清長は、どんなに・・

の人々の出なかつた浮世繪の歷史と云ふ物を考へる事は、元より出來ない。しかし、自分にとつては、寫樂の出なかつた浮世繪の歷史ほど、さびしいものはないやうな氣がする。彼の藝術がある爲に、彼以前と彼以後との藝術が、その長所とその短所とを、如何にもあざやかに自分の眼の前へうき上らせてくれるからである。——自分はかう云ふ極限的な意味でも、東洲齋寫樂を、浮世繪師の第一人に數へなければならない。

×

寫樂の生涯は、浮世繪類考に出てゐる四五行の記事以外に、正確な事は何もわからない。「江戸八丁堀に住す、俗稱齋藤十郎兵衞、東洲齋と號す、阿州侯の能役者なり、歌舞伎役者の似顏を寫せしが、あまり眞を畫かんとしてあらぬさまに書きなせしかば、長く世に行はれず、一兩年にして止む。」それきりである。尤も、類考の曳尾庵手寫本には「しかしながら、筆力雅趣ありて賞すべし」とあると云ふから、或程度の好評は博した事があるのかも知れない。が、筆力雅趣ありて賞すべしと云ふ評語から見ると、これも唯、寫樂の線が認められてゐたのに過ぎなかつたのではなからうか。*成程、彼の描いた線は、むだのない、底力のある線である。北齋のやうに、徒に力を衒つた線とは、殆くらべものにならない。だから、この點だけでも、明に彼は、俗流の浮世繪師とは、同列に置かれない丈の特色を持つてゐる。しかし、彼のずばぬけた天分は、決して線だけに現れてゐる訣ではない。マイエル・グレエッフェか誰かが云つたやうに、「色彩は絨氈をつくる事が出來る。が、畫は出來ない。」線でも、同じ事である。

兎に角、寫樂が、彼の天才に相當する名聲を得てゐなかつた事は、事實である。さうして、その不評の原因が、「あまりに眞を畫かんとして、あらぬさまに書きなせし」爲なのも、確らしい。日本畫の發見者と呼ばれるフエノロサでさへ、彼の似顏繪を目して、單なるカリカツゥルとしてゐるのを思へば、この不評も決して無理ではない。式亭三馬の編纂した稗史億說年代記に出てゐる

倭畫巧名盡(やまとゑしのなつくし)と云ふ浮世繪分布圖を見ると、歌川、鳥居、勝川の諸流は、尨然たる大陸をなしてゐるが、寫樂國に至つては、一點の青螺となつて、僅に掌大の地を邊陲の海上に保つてゐる。……

×

寫樂は、何人にも師事しなかつたらしい。彼の名には、前人の一字を貰つて、雅號にした跡がないからである。が、彼は又、彼に先立つた二三の浮世繪師の作品から、技巧上の影響をうけたらしい。多くの批評家は、これを勝川春章と鳥居清長とに歸してゐる。自分は、彼等が寫樂に影響を與へたと云ふ事が、歴史的にほんとうかどうかは知らない。しかし、少くとも論理的には、彼の一人立二人立の人物が、所謂新場の清長の人物に負ふ所の多いのは、認めてゐる。唯、春章になると、これを清長と共…………………………

……………………………………………………

……………………………………………………

（大正五年頃）

＊〔別稿ニ〕　あの尨大な寫樂研究の著者ユリウス・クルトが寫樂の色をシュトゥックに比べると共に、その線をロオトレエクに比べてゐるのは、決して不當な比較ではない。

或藝術作品を鑑賞する際に、鑑賞者が經驗する心理的事實をかりに(a)感覺的要素と(b)情緒的要素とに分けて見る((a)は或は認識的要素と云つた方がいゝのかもしれない)。すると小說と演劇とで大へんな相違が出來て來る。小說の場合は直接鑑賞者の感官を刺戟するのが、文字だけだから、鑑賞者は感情移入を行ふ前に、先、そこに敍述されてある情景なり人物なりを一度想像でレアリジイレンしなければならない。しかもそのレアリジイレンされたものは、人によつて幾分の相違があるものと思はなければならない。云ひかへれば、小說の場合に於ては感覺的要素に妥當性が少ないと云ふ事にならなければならない。これは誰でも承認しなければならない事實だらうと思ふ。今例を引いて見るとアンナ・カレニナの讀者が想像するアンナの顏は人によつて甚ちがふ。これはその外の人物についても同じ事である。するとそれらの人物の出沒する競馬場とか舞踏會とか云ふ情景も亦當然誰にも同じだと云ふわけには行かない。だから論理上アンナ・カレニナを感覺的にのみ讀者の頭の中で組立てると千人が千人で非常にちがふと云ふ事になる。

この感覺的要素なるものは本來情緒的要素と因果關係にあるものであるから、かう云ふ前者の

妥當性缺乏（ギルトローヂッヒカイト）は、勢、後者にも影響を及ぼす事になる。從つて、鑑賞者の印象の全部が非常にインディヴィドゥエルな性質を持ち易い。

所が演劇になると鑑賞者の感官を直接刺戟するものは俳優と舞臺上の裝置とである。從つて、感覺的には鑑賞者はいづれも同じものを經驗すると云はなければならない。演劇で見るアンナ・カレニナの顏はそれに扮する或一定の女優の顏である。その舞踏場も亦彩色した布と木とからなる或一定の舞踏場である。つまり演劇の場合に於ては、感覺的要素の妥當性が非常に（繪畫よりも）强いと云ふ事にならなければならない。（少くも或一つの色に對する感覺の個人的差違を云々するやうな心理的嚴密を除いた上の議論として）

そこで演劇と小說との二つの場合を比較すると前者は後者より「表現された物」と「印象された物」との關係が緊密だと云ふ事になる。これも今までの議論のプロセスを承認すれば誰でも否定する事は出來ない事實だらうと思ふ。

この事實を藝術が民衆へ働きかけるフンクティオンの方へ持つて來たらどうであらう。ここで云ふフンクティオンなるものは結局感化力と云ふにすぎないから、今感化力と云ふ字を使ふと「演劇は槪して小說より感化力に富んでゐる」と云はなければならない。（警視廳の保安課の役人は直覺的にこの事實を知つてゐるらしい）何故と云へば演劇は小說よりより必然に鑑賞者の心を支配する事が出來るからである。

既にさうだとすれば「惡しき演劇」が人間を墮落させる事は「惡しき小說」がさうさせるより遙に

甚しいと云ふ事は誰でも豫め覺悟してかからなければならない。この覺悟なくして演劇に從事する者は悉輕薄である。と云つても先大體差支ないかと思ふ。

そこで飜つてライゲンを見ると(ライゲンはあれを全部上場してこそ全體を一貫するドイトゥングが現前する訣である。だから一幕だけ上場すると云ふ事は既に半あの Drama の價値を滅殺してゐる。が、それは今論じないとしても)第一に感ぜられる事は、あれを上場する爲に犯す危險は、あれを上場する爲に得る所の物(たとへば或眞理)より遙に大きいと云ふ事である。少し誇張して云へばあれは「善き戲曲」かも知れないが同時に又「悪しき演劇」だと云ふ事である。これはヴェデキントの「春のめざめ」についても云はれると思ふ。(ラアル・プウル・ラアルの立場に立てば別であるが)

では何故悪しき演劇かと云へばライゲンそのものの戲曲的價値まで立ち入らなければならないから、ここでは唯簡單にライゲンの表現してゐるものは、演劇と云ふ形式による必要のないものだと云つておく外はない。(その「表現してゐるもの」を君の所謂美的麻痺だと假定すれば猶更さうである)或は演劇と云ふ形式によらない方が遙によく表現されるものだと云つてもよい。

最後にこの非難は「特殊の興行方法が民衆の徳性に及ぼす危險を豫防してある」と云ふ遁辭によつて辯護されるかもしれないと思ふ。しかし「知識階級」が一般民衆ほどこの種の演劇に對して危險性がないかどうかは疑問である。忌憚なく云はしめば、新劇場の俳優及關係者諸君は、ライゲンを上場すると云ふ事によつて、既に諸君の徳性上に及んでゐる危險を天下に公表してゐるので

はあるまいか。妄言多罪。

（大正五年）

「Lies in Scarlet」の言

——Arthur Halliwell Donovan——

×

「藝術は遊戯ではない。」——から云ふ程、現代は遊戯に對する見解が墮落したのである。しかし藝術に對する見解は、毫もその爲に進歩してゐない。

×

人間は或皮肉な約束の下に置かれてゐる。最も卑いと思つてゐる時が、實は最も尊い事なども、その一つの場合に過ぎない。

×

藝術は人類にとつて、絶對に必要なものであらうか。スウエデンボルグの天國では、それもやはり不必要なものの一つにはいつてゐる。

×

答は常に、異れる問に過ぎない。斯くして自分は安んじて答を與へる事が出來るのである。

×

天才とは偉大なる感情の連續だと、ニイチエが云つてゐる。さうだ。連續にちがひない。もしさうでなかつたなら――

×

「お前に何が出來る？　お前は一人の女を愛す事さへ出來ないではないか。お前に何が出來る？」

×

自分は二種の愛の告白を知つてゐる。それ以外の愛の告白は、悉自分の趣味に合はない。一つは基督の言（ことば）である。さうしてもう一つは――これは云はない方が好いかも知れない。

×

獨斷を哂ふものは、それ自身獨斷だと云ふ事に氣がつかない。

×

眞理も時としては、趣味に過ぎない。（自分はここにこの「時として」と云ふ言（ことば）を加へた程、謙遜である。）

×

「お前はお前の惡口を云ふのが、俗衆だと云ふ事は知つてゐるだらう。しかし實はお前を賞めるものも、俗衆なのだぜ。」

×

もしプラトニツク・ラヴと云ふものがあつたら、自分は必人間より馬に惚れたのに相違ない。

×

文明とは、理智が本能の眞似をする事である。

×

自分は國家の爲にすべてを犧牲にする事を否むものではない。唯、さうする理由を聞かせて貰ひたい丈である。

×

文明を築いたものは半人半馬神である。パラス・アテエネは何もしない。

×

幸福とは幸福を問題にしない時を云ふ。

×

人工の天國と云ふ言は、ボオドレエルが發明した。が、古來天國は大抵、事實に於て人工である。

×

自分の知つてゐる最大の懷疑家は、カイロで遇つた事のある回教の坊主である。その男は地球が四角な板だと云ふ事さへ信じてゐた。

×

自分は十八ヶ國の外國語に通じてゐると云ふ男に遇つた。しかしまだ遠視眼の眼鏡と近視眼の

眼鏡とを十八持つて、得意になつてゐる男には遇つた事がない。

×

一切の精神的文明は、結局詩に過ぎない。

×

ツアラトストラの死んだ事は書いてない。しかしニイチェは死んだのである。我々同様死んだのである。

×

「君は何故君の眼を信用するのだい。」
「僕の眼は健全だから。」
「どうして又そんな事がわかつたのだらう。」
「眼醫者が保證したから。」
「眼醫者の眼は君自身の眼ではない筈だが。」
或日、バアナアド・ショウと自分との間にこんな會話が交換された事がある。

×

藝術の境に未成品はない。あればそれは下等な完成品である。

×

不幸にして自分は、眞面目を標榜する程不眞面目にはなり得ない。

×

自分はあらゆる反抗の精神に同情する。

×

如何にして年をとらうか——これが人間に與へられた最大の問題である。

×

トルストイの思想を知るには、トルストイの著書を讀めば好い。しかしトルストイの思想を得るには——さう思ふと、トルストイの思想を論じるより先に、口を噤まざるを得ない。

×

藝術家の偉大は、批評し得られない所にのみある。

×

「浪曼主義に病的で、古典主義は健全である」——ゲエテはこの點でも、觀察の正鵠を誤らなかつた。

×

如何なる惡作を讀むのでも、自分にとつては、全然何も讀まないよりは好い。

×

運命は自由意志の中にある。

×

「人間らしさ」は動物にもあると云ふ事を忘れてはいけない。

×

溫良なる娼婦の如く、良妻賢母たり得るものはない。

×

彈指の間に萬劫がある。

×

平和論者と戰爭論者との差は、實に唯一歩である。

×

彈丸に中つて死ぬのと、饑死するのと、どちらが好いか。それはまだよく考へた上でないと、きめられない。

×

戰ひたくないと思つたら、やはり戰ふ外はない。たとひそれが敵國に對してでなくとも。

×

成程疑ふと云ふ事實を信ずる所に、懷疑說は始まるだらう。しかし始は本質ではない。

×

利己主義も愛國心と呼ばれ得るやうに、興味も時には信念と呼ばれ得る事がある。

×

經驗を卑むな。人間は生存する爲には、胃と共に食物が必要である。

×

最大の奇蹟は言語である。

×

永久に自分を慰めてくれるものは、素朴觀念論である。

×

素朴觀念論の藝術的表現が、東洋では僞と云はれるのではなからうか。

×

戀愛は自然の折衷主義が産んだものである。

×

意志は藝術の惡作を完成するにさへ必要である。

羽賀宅阿譯

(大正六年頃)

寫生論

寫生と云ふ意味を少し考へて見たい。

第一に寫生には文字通りの意味がある。卽ち周圍の自然をその儘句にすると云ふ意味がある。例を擧げれば子規先生の「かたまりて黃なる花咲く夏野かな」と云ふやうな句であらう。この意味の寫生を主張するのは勿論句作の上で重要な價値があるのに相違ない。殊に句作の傾向が技巧に走つた時代には一層有益だつたらうと思ふ。今日天下が句作の眞諦としてゐる寫生と云ふ語も子規先生がそれを主張した當時に於ては恐らくこの意味(だけでなくとも大部分は)で用ひられたのだらうと思ふ。が、この意味の寫生だけが句作の上に價値があるのでは勿論ない。ぢやその外にどんな意味があるかと云ふと、

第二に周圍の自然を的確に摑んで行くと云ふ意味がある。この場合はその的確に摑んで行くと云ふ事が大切なのだから、前の意味よりはもつと內面的になつてゐるとも云ふ事が出來るだらう。例を擧げれば石鼎氏の句が殆すべてそれである。たしか一月のホトトギスだつたと思ふが、あの中で鬼城氏が水中の針金蟲を如何に寫生すべきかと云ふ事を問題にしてゐた。あれもこの意味の

寫生をしようと云ふのである。前の意味だけの寫生だつたら水に動く針金蟲や秋日影とか何とか云つてもすんでしまふ。それですまされないのは針金蟲の動くのを――その動く感じを端的に句にしたかつたからである。この意味の寫生をしようと云ふ傾向に概して云ふとこの頃の句にはどれにも著しく見えてゐる。中にはこの意味の(或は前の意味をも併せて)寫生をしない限り句にならないかの如く主張する人さへ少くない。が、翻つて古今の句を見渡して見ると、前記二つの意味の寫生だけでは出來ないものが澤山ある。虚子先生の句だけとつて見ても「初空や大悪人虚子の頭上に」と云ふのがそれである。「老衲炬燵にあり立春の禽獸裏山に」と云ふのがそれである。或は又古い所で「冷奴死を出で入りし後の酒」と云ふのもそれである。これらの句を見ると周圍の自然がその儘句になつてゐる訣でもなければ自然そのものの核心を捕へたと云ふ次第でもない。ここに現されてゐるのは作者自身の或心もちである。だからこの場合も寫生と云ふ語を使ふとすれば(無理にも使ふ必要があるかどうか疑問だが)、

第三に寫生にはその對象を外から內へ移して作者自身の心もちを直下に描き出すと云ふ意味がある。と云ふと第二の意味の寫生と格段に違ひがあるやうだが實は周圍の自然を的確に摑むと云ふ事がそれ自身もう內面的な問題なのだからそれ程甚しい相違がある訣ではない。唯、この二つの寫生が多少趣を異にしてゐる點は第二の意味の寫生の場合は對象が自然だから對象そのものには高下の區別がない。針金蟲の活動でも乃至秋雲の變化でも句材としての價値は同じ事である。要は唯如何にそれを句にするかにある。(ここで句にすると云ふ意味は句の形にまとめると云ふ意

味だけではない。如何にその對象の眞を捕へるかと云ふ意味も含んでゐる。）所が第三の意味の寫生になると對象たる心もち自身が問題になつて來る。云ひ換へれば平俗な心もちと雅馴な心もちとの間には價値の高下が出來て來る。何時か蛇笏氏が「靈的に表現されんとする俳句」とか云ふ論文を書いたのもこの心もちの上の價値如何が問題だつたやうに思ふ。（勿論この心もち――むづかしく云へば主觀の價値を定める標準に就いてはまだいくらも議論の餘地があるのに違ひない。自分としては蛇笏氏の示した標準が必しも唯一のものだとは思つてゐない事をつけ加へて置く。）が、かう云ふ差別も更に一歩進めて考へれば第二の意味の寫生の眞諦がやはり自然の感じ方にあると云ふ點で存外皮相なものに過ぎないとも云はれよう。

　そこで今まで考へて來た所をふり返つて見ると寫生或は句作の態度には三つの意味があると云ふ事になる。さうしてその三つは假に純客觀から純主觀に至る三段の經過だと云ふ事が出來ると思ふ。或は眞の理想から他の理想へ移る三段の經過だとも云はれるかも知れない。この三種の意味の寫生はそれぞれどの句にも明に現れてゐる訣ではないが一般に句作の態度がこの三種の寫生を出ない事だけは云はれるかと思ふ。唯、歷史的な句或は人事の句と云ふやうな種類は多少例外の觀を與へ易いがこれも三種の寫生と根本に於て相違ない。殊に歷史的の句の如きは今日でこそ歷史的の色彩を帶びてゐるものもあるがその句の出來た當時に於ては第一の意味の寫生の句が可成あるのに相違ない。又昔から歷史的の句と云ふのも第一或は第三の意味の寫生の手段を過去の景物の上に或は景物によつて應用したまでである。だから歷史的な句と雖も俳句として別に辯護

すべきものでも何でもない。この點に於て屢繰返される鳴雪翁の主張は甚尤もなものである。が、この種の句はその性質上第一の意味の寫生に止る時も第三の意味の寫生に出づる時も往々にして陳腐に陥り易い。さうして既に陳腐に陥る以上たとひ美の一字を借りて來てもその句を救助する事が出來ないのは云ふまでもない話である。

最後に今まで考へて來た事を事實の上に照して見ると子規以後の俳壇は第二及び第三の意味の寫生に向つて進んで來たかの觀がある。しかも最近に於てはその傾向が意識的に促進されてゐるらしい。或はもう少し仔細に觀察すると第二の意味の寫生が全盛を極めつつあると同時に第三の意味の寫生を求める傾向が既に後から起つて來てゐるらしい。前に擧げた蛇笏氏の論文などはその傾向を代表する恰好な例だらうと思ふ。もしこれが季題の約束の下にあつて一層極端に進んだらシンボリズムの詩のやうな句が出來る事も全く考へられない事ではない。但しさうなる事が俳句として喜ぶべき現象かどうかは自ら又別な問題である。

以上は極ざつと寫生と云ふ語の意味を吟味したまでだから猶細部に立ち至つたらいろいろ問題が出て來るのに違ひない。が、それは自分の如き門外漢より專門家の研究に一任する方が然る可きものだらうと思ふ。唯、自分の考へた事或はそれから必然に發展して來る問題に關しては喜んで大方の叱正を蒙りたいと思つてゐる。

我　鬼　生

（大正七年）

聖ジユリアン物語

一、ジユリアンが生まれる時その父母に別々の幻現れジユリアンの將來を豫言する所あり。父に現れし幻はジユリアン將帥たる可しと云ひ母に現れし幻はジユリアン名僧たる可しと云ふ。この二つの豫言が內容より云ひて全篇を構成する二大眼目なり。技巧より見れば二つの幻に各別様の趣ありて共に一種の凄味ある點凡手の描き難き所なり。

二、ジユリアンが城外城內に於ける生活の描寫極めて精妙なり。中世紀の大名暮し彷彿として見るが如し。

三、鹿の豫言は前掲二種の豫言を二つながら成立せしめる大切な楔なり。卽ジユリアンの話は三つの豫言によりて發展すとも云ふを得べく豫言相互の關係より云へばこの豫言最も重みありと云ふを得べし。牡鹿の描寫殊に愛す可き中世紀の風格を帶びたり(角の澤山な枝に分かれてゐる所など)。

四、鹿の豫言を聞いてより家出するまでのジユリアンの生活(內面的にも外面的にも)も巧に描かれたるを見るべし。始父親の衣を劍にて裂き次に母親の帽の羽毛を投槍にて縫ひとめ而して家

出する段取り甚自然なり。これらの事件なく豫言を聞いて後直に家出するとせんか、そはジュリアンの性格を説明すべく餘りに唐突なるを如何せん。

五、家出より皇帝の婿になる迄の間例の如く描寫巧緻を極む。

六、ジュリアンの獵に出て鳥獸に莫迦にせらるる所全篇を通じて結末と共に千古に冠絶する名描寫なり。暮夜叢林の中幾百の禽獸ジュリアンを旋つて翻弄を逞うする光景歴々として畫圖を睹るが如しと云ふべし。

七、父母を殺して後ジュリアンが再び家出するまでさしたる事なし。

八、家出して後苦艱を嘗むる描寫亦簡にして要を得たり。泉畔水中に映れる已が面の父に似たるを見て自殺を思ひ止る所の如き最もよし。

九、渡し守になりてより天上するまでも大手腕なり。癩病人の描寫數行にしてしかも蒼勁たるを見るべし。風波の凪ぎたる、食器に斑點の生じたる、水の葡萄酒に變りたる等奇蹟は次第に重ね來りて遂にクリストを描出する所亦甚自然なり。末段昇天の數行(ジュリアンが裸になつて癩病人を抱いてより以後)は技巧の妙云ふ可からず。これを形容すれば萬丈の光焔忽然として脚底より迸出するが如し。

以上讀法のあらましなり。ジュリアンを讀む際これらの諸點に留意せらるれば多少は得る所あるべしと信ず。小生の好みより云へばジュリアンを除いて現代小品中「齒痛」「鴉」「白」などを面白しとすべき乎。「負けたる人」も興味なきにあらざれどこの種のものは既に古し。ふと思ひつき

たるまゝ御注意まで。以上。

（大正九年）

雜筆

眼

醜を見る眼の外に、美を見る眼はない。

貞操

女子の貞操とは、處女が男子との Coitus に感ずる羞恥心の異名である。だから既に妻たつた女子は、第一義的貞操を失つてゐると云つて差支へない。第二義的貞操とは、女子が夫以外の男子との Coitus に感ずる羞恥心の異名である。世間が不貞の烙印を與へるものは、第二義的貞操及びそれ以下の貞操を失つた女子に限るやうである。賣笑婦間の道德たる精神的貞操の如きは、單に畸形的貞操の一種たるに過ぎない。彼等の精神偏重は、救靈の爲に苦行する聖徒の狂信に似てゐる所がある。(三月七日)

空想

僕は貧しい人間である。だから時々大金を得て、自在を極める時を空想する。その場合僕の所

謂大金は、何百萬圓何千萬圓と云ふ制限を知らない。唯僕が自在を極めるのに十分なだけの金額である。所が金持ちの空想は、必彼等の所有する金額の制限を受けるらしい。更に詳しく云へば彼等の空想は「所有の金額の全部を使つたら」、或は「その一部を使つたら」と云ふ條件の下に開展する。だから僕等貧乏人の空想は、常に彼等金持ちの空想より壯大なのを常とする。物臭太郎の空想に奔放の氣を漲らした、足利時代の御伽草子の作者は、確にこの間の消息に通ずる所があつたのに相違ない。（三月八日）

貴族

あらゆる貴族に共通な悲劇は、彼等も亦僕等の如く厠に上ると云ふ事である。さもなければ彼等は安んじて、神々の裔だと確信したかも知れない。德川時代の大諸侯が參覲交代の途次、砂積めの四斗樽に一々彼等の糞便をさめて、江戸或は國元へ送らせたのは、彼等が如何にこの現實曝露を惧れてゐたかを語るものである。（四月五日）

民衆

民衆の味方に缺くべからざる物、——第一には樂天主義。第二にも樂天主義。第三にも亦樂天主義。（四月五日）

流俗

流俗とは、何時も前代に有用だつた眞理を固守してゐる人間である。尤も一時代の長さは何年と、精密にきまつてゐる訣ではない。往々日本の文壇なぞでは、五年又は十年が一時代に當る事もあるやうである。一時代前に有用だつた眞理、二時代前に有用だつた眞理、三時代前に有用だつた眞理、――流俗もその眞理の時代なみに、何種類もある事を忘れてはならぬ。しかし流俗の有害な程度は、その固守してゐる眞理の時代の新しさに丁度正比例する。嘘だと思つたら、尊王攘夷の精神なぞが如何に今は無害になつたかを見るが好い。（七月二十一日）

浪漫主義

浪漫主義とは、未開地或は未開時代に理想の生活を求める傾向である。ルツソオの「自然へ歸れ」から、谷崎潤一郎氏の小說に至るまで、さう考へると一つも例外はない。序ながら云ふ。「青い花」はこの頃社會主義者のユウトピアにも咲いてゐるやうである。（四月三十日）

繪畫と詩歌

「アララギ」に齋藤茂吉氏が「寫生の說」を書いてゐる。齋藤氏の「寫生」の語義は、東洋畫論の「寫生」の語義である。あれを讀んでゐる内に思ひ出したが、昔樗牛が何かの中に「詩歌は繪畫を學

ぶべきものではない。詩歌の本質は動を寫すにある」なぞと、論じてゐるのを見た事があつた。當時まだ中學生だつた自分は、樗牛の説を名言だと思つた。が、今になつて考へて見ると、樗牛は餘り省察も加へず、「ラオコオン」を祖述してゐたのである。東洋の詩歌は西洋のエポスとは違ふ。青蓮龍標の絶句を讀めば、いくらでも「有聲の畫」を拾ふ事が出來る。「夕顔や醉うて顔出す窓の穴」や「五月雨や大河を前に家二軒」でも、やはりその儘畫になつてしまふ。齋藤茂吉氏の「寫生」の語義が、東洋畫論に根ざしてゐるのは、興味ある必然と云はねばならぬ。

鶸

籠の鶸を日向へ出して置いたら、水も餌もあるのに死んでしまつた。日の光に射殺されたのだと思ふと、恐しい心もちがする。日は死んだ鶸の上にも、酷薄にかんかん當つてゐた。その屍骸を眺めながら、何にしようとか何とか思つてゐる、人間のおのれは憎むべし。（九月十二日）

（大正九年）

一

〔「人事を盡して天命を待つ」とは小說作法の上にも通用することである。如何に技巧の妙を極めたとしても、氣韻の高い作品を作ることだけは人力の及ぶ所ではない。作者の性情の雅俗高下のおのづから作品に露はれるのは、〕たとへば澗花の發する時、澗水に香あると同樣なり。尤も古來書を讀んで性情を陶淑すなどと言ふこともあれど、どの位陶淑出來るものかは勿論疑問なりと言はざるべからず。我等の見る所を以てすれば、陶淑出來るのは二、三分にして、あとの七八分は母の胎內より授かり來りしものならん乎。よし又陶淑出來るにもせよ、その作品に露はるるは作者の意識を超越すること、前にも述べし通りなれば、まづ氣韻の一事ばかりはどうにもならぬものと觀念すべし。否、妄りにこだはるよりは寧ろ雲煙過眼視すべし。若し捉ふべからざるものを捉へんとし、努めて東奔西走する時は愈その醜を露はすこととなり、如何に割引きして考ふるも、手間賃だけは畢竟損をせざるべからず。

二

小說を作るのも「作る」と言ふ上より見れば、箱を造るのと同樣なり。それを何か蜃氣樓でも造るやうに思ひ、鉋の使ひかた一つ學ばざらん乎、一生小說を作り難かるべし。由來藝術家と言ふものは恰も神韻縹渺のうちに作品を成せる如き顏をするものなり。然れどもそれは外見に過ぎず、實は古天才も一面には指物師と同一なりしと心得べし。ポオに Philosophy of Composition と言ふ論文あり。これは「拵へもの」の大家ボオドレエルも多少のシャルラタニズムありなどと言つてゐれど、我等の目には比較的正直なる議論と言はざるべからず。尤もポオはこの論文に言へる如く、彼の「大鴉」の詩を作るに二二が四的作法を用ひたりや否やは疑問なり。然れども彼の詩や小說は大體煉瓦を積むやうに作られたることは事實なるべし。又バトラアの言なりしと覺ゆ、「古人のお弟子には師匠を凌駕するものあり。是に反して今人のお弟子は大抵師匠の片腕にも及ばず。その所以は如何となれば、今人は或は金の爲に、或は高尙なる理想の爲にお弟子を敎育するを常とすれど、古人は己の贋作を作らせん爲に作法上の呼吸でも何でも敎へたるが故なり。」と言ふがあり。この言は恐らく眞實なるべし。兎に角我等初學の徒は丹念に作法を學ばざるべからず。

三

我等は未だに「小說作法」などと言ふ本に興味あれど、肯綮を得たりと思ふものには不幸にも一度も遭遇せず。支那の小說の批點には作法上の講釋を加へたるものあり。馬琴、京傳等の作家は支那の小說に趣向を得たる外にも、かう言ふ講釋に啓發されしことも存外尠からざりしなるべし。

然れども好箇の「小説作法」なく、又今日の小説には金聖歎批も餘り難有からずとせば、自ら古今の小説を讀んで作法上の工夫を凝らさざるべからず。この工夫に比ぶれば、師匠をとるなどは末の又末なり。たとひバルザック再來底の大小説家を師匠にとるとも、自ら古人喫緊の處を看破する修業を怠らん乎、一生瞎漢の譏りを免れざるべし。若し「コロンバ」を讀むべくんば、作者プロスペル・メリメエと共に「コロンバ」を作る心を以てせよ。等閑に面白がるのみに了ること勿れ。親鸞上人は何と言ひしか知らねど、藝道だけは自力の外には成佛することあるべからず。

四

若し我等にして不世出の天才ならば、父母兄弟と接するのみにても、おのづから人情の機微を捉らへ、一篇の好作品を作るを得べし。然れども天才ならずとせば、…………

……………………………………

……………………………………

……………………………………（未完）

客觀的と言ふ言葉を用ひれば、德田秋聲氏の作品ほど客觀的なるは稀なるべし。男女いろいろの人物を明鏡止水のやうに寫す手際は到底我等の及ぶ所にあらず。のみならず德田氏の作品には常に品の好い美しさあり。それも「マダム・ボヴァリイは全部鳶色の調子で行かうとした。」などと言ふフロオベル流に凝つたものならざれど、南畫風の淡彩なるだけ如何にも日本人らしい所ありと言ふべし。この美しさのあることは葛西善藏氏の作品も同樣なり。但し葛西氏の美しさは德田氏の美しさよりも一概により深しとは言ひ難けれど、より特色あることは確かなり。我等は葛西氏の短篇を讀む度に、何か雨後の風景に似たる、薄暗き美しさに打たるるを常とす。これは葛西氏の獨造底の持ち味なり。然れども男女十人を寫して眉目皆異るの工夫は葛西氏も勿論德田氏に及ばず。尤もこれは葛西氏自身も努めんとする所にあらざるべし。この美しさを逸すれば、兩氏、――少くとも葛西氏の作品は何の感興をも與へざるならん。偶兩氏の作品を讀みたれば、次手を以てこの文を作る。但し我等は婆娑つ氣多ければ、當分は兩氏に倣はんとは思はず。（十四年一月）

×

我等の見る所を以てすれば、我日本の作家位謙遜の美徳に富みたるはあらざるべし。否、謙遜の美徳と言ふよりは赤面の天才と言はざるべからず。殊に我等はロマンティック・テムペラメントを有することを恥づるやうなり。この頃「酒ほがひ」等を讀み、大いに殘念に思ひしことなれど、吉井勇氏などもロマンティック・テムペラメントを有することをあんなに恥ぢたり何かせねば、もつと偉い人になつてゐたるならん。由來男と言ふものは小面憎いほど好いものなり。況や作家とも呼ばるるものはいやが上にも小面憎からざる可らず。

×

何びとも戒心せざるべからざるは我等自身を恥づることなり。苟くも一藝に志す上は、我等は我等自身なりと覺悟をきめ、圖々しく尻を据ゑることを工夫すべし。我等自身を恥ぢざることなどは至つて手輕さうに思はるれど、我等の見る所を以てすれば、往年有爲の作家なりし人さへ、彼等自身を恥ぢたる爲に發育の止まりたるもの少からず。この己を恥づることは金の爲に濫作するよりも一層我等には有害なり。ブレエクの「鷲は鴉の眞似をするほど、時間を空費することなし」と言へるはよくよくその毒を知れるなるべし。尤もどちらが鴉かは後代の言を待つ外はなけれど、――或は後代の言を待つも分明し難きかも知れざれど、何びともまづ差當りは大鷲を以て

任ずることなり。

由來男と言ふものは小面憎いほど好いものなり。況や作家となりし上は、いやが上にも小面憎からざるべからず。親鸞上人は何と言つたか知らねど、藝道だけは自力の外に成佛し難しと心得べし。鈴が森の雲すけ曰、「がんばれ、がんばれ」と。或は我等初學の徒の座右の銘たるに近からん乎。

×

文藝上の作品を作ることにより、人格も鍛錬されると云ふのは正宗氏の言つたやうに疑問である。あれは鍛錬と云ふ言葉に執する餘り、藝術上の鍛錬を人格上の鍛錬にも及ぼした結果ではないであらうか?

人格上の鍛錬は藝術上の鍛錬と幷行することもあるに違ひない。しかし或作家の人格を指さし、その立派に完成したのは文藝上の作品を作ることにより、鍛錬を經た爲と云ふのは早計である。なぜ又早計であるかと言へば、文藝上の作品を作らずとも、人格上の鍛錬を經たものは市井人の中にも少くない。それから又人格上の鍛錬を經ないものも屢善い抒情詩だの善い戲曲だのを書いてゐるからである。

或はかう云ふ解釋には下の駁論を生ずるであらう。――「人格上の鍛錬を經ると云ふ意味は世間並みの定木に合はせた人格上の鍛錬を經ることではない。飲んだくれでも、不良少年でも、色魔でも、イカサマ師でも藝術家的に人格上の鍛錬を經ると云ふ意味である。」しかしその所謂「藝術的に人格上の鍛錬を經る」と云ふことは畢竟唯その人が作家だつたと云ふことだけである。誰でも年をとるに從ひ、又いろいろの經驗を經るに從ひ、多少は人格上の鍛錬を、――或は運命に對する知慧を體得するやうになるであらう。(傳記作者の感激に滿ちた諸天才の傳記なども勿論言葉通りに信用出來ない。尤も唯我々を鼓舞する進軍ラツパとしては有效である。)

しかしその人格上の鍛錬もどの位その人の素質の上の長短を補ふかは疑問である。これは作家に就いて言ふばかりではない。政治家でも禪家でも同じことである。天の與へた剛柔賢愚は存外人力には如何とも出來ない。「運命は性格の中にある。」と云ふ言葉は餘程深い實感を含んだものである。

(大正十四・五年)

〔アフオリズム〕

風流

――久米正雄、佐藤春夫の兩君に――

×

「風流」とは清淨なるデカダンスである。

×

「風流」とは藝術的涅槃である。涅槃とはあらゆる煩惱を、――意志を掃蕩した世界である。

×

「風流」もあらゆる神聖なるものと多少の莫迦莫迦しさを共有してゐる。

×

「風流」は意志か感覺か？　――兎に角甚だ困ることは感覺とか官能とか云ふと同時に、忽ちアムプレシオニストの油畫のありありと目の前に見えることである。

×

「風流」の享樂的傾向、――黄老に發した道教は王摩詰の藝術を與へた外にも、猥褻なる房術を

も與へたのである。

×

「風流」の一つの傳統は釋迦に發する釋風流である。「風流」のもう一つの傳統は老聃に發する老風流である。この二つの傳統は必しもはつきりとは分れてゐない。しかし釋風流は老風流よりも大抵は憂鬱に傾いてゐる。たとへば沙羅木の花に似た良寛上人の歌のやうに。

×

「風流」を宗とする藝術とはそれ自身既にパラドツクスである。あらゆる藝術の創作は當然意志を待たたければならぬ。

×

百年の塵は「風流」の上に骨董の古色を加へてゐる。塵を拂へ。塵を拂へ。

所謂內容的價値

藝術は表現であるとは近來何人も云ふ所である。それならば表現のある所には藝術的な何ものかもある筈ではないか？

藝術はその使命を果たす爲には哲學をも宗教をも要せぬであらう。しかし表現の作ふ限り、哲學や宗教は知らず識らず藝術的な何ものかに縋るのである。ショオペンハウエルの哲學の如き、藝術的敍述を除き去つたとすれば、（事實上それは困難にしても）我我の心に訴へる所は減じ去る

ことを免れまい。

いや、藝術的な何ものかは救世軍の演説にもあり得る。共產主義者のプロパガンダにもあり得る。況や薄暮の汽車の窓に蜜柑を投げる少女の如き、藝術的なのも當然ではないか？

是等の例の示す通り、他にあり得ると云ふことは必しも藝術の本質と矛盾しない。わが友菊池寛の內容的價値を求めるのは魚の水を求めるのと共に、頗る自然な要求である。しかしその內容的價値を藝術的價値の外にありとするのには不贊成の意を表せざるを得ない。わたしの所見を以てすれば、菊池寛は餘りに內氣であり、餘りに藝術至上主義者である。もつと人生に忠でなければいかん。

理解

會得するのは樂しい事である。僕に一番會得し易いのは、小說や戲曲の可否である。その次は俳句の可否である。その次は、——何とも云ふ事は出來ない。詩歌、書畫、陶磁器、蒔畫等、理解し足らぬものはまだ澤山ある。そんな事を思へばいやが上にも樂しい。淸少納言は樂しい事の中に、「まだ見ぬ草紙の多かる」を數へた。草紙は讀めば盡きるかも知れぬ。理解する樂しさは盡きる時があるまい。

井原西鶴

西鶴に自然主義者を見るのは自然主義的批評家の色目鏡である。西鶴に滑稽本の作家を見るのも大學の先生連の色目鏡である。

西鶴は恐るべき現實を見てゐた。しかもその現實を笑殺してゐた。西鶴の作品に漲るものはこの闊太い笑聲である。天才のみが持つ笑聲である。かのラブレエを持たない事は必しも我我の不幸ではない。我我は西鶴を持つてゐる。堂堂と婆婆苦を蹂躪した阿蘭陀西鶴を持つてゐる。

或幻

われ夢にトルストイを見たり。躓き倒れたるトルストイを見たり。われは立ち、トルストイは匍匐す。憐むべきかな、トルストイ！　われトルストイを嘲笑ふ。しかも見よ、這へるトルストイは歩めるわれよりも速かなるを。われは疾驅し、トルストイは蛇行す。されどわれトルストイに及ぶ能はず。トルストイは天外に匍匐し去れり。トルストイよ！　偉いなる芋蟲よ！

善い藝術家

善い藝術家以上の人間でなければ、善い藝術を作る事は出來ない。このパラドツクスを呑込まない限り、「藝術の爲の藝術」は永久に袋露路を出られないであらう。

作家は誰も信條通り、小説を書いてゐるのではない。その外に書きやうを知らないのである。それをまづ信條があり、その次に創作があるやうに云ふ。云ふものは畢竟人が惡いか、蟲が好いかどちらかである。

修身

辯難攻擊が盛だつた古雜誌を一册保存するが好い。さうして氣の屈した時にはその中の論文を讀んで見るが好い。如何に淺はかな主義主張は速かに亡んでしまふものか、それをしみじみと知る事は何人にも大切な修身である。

評家病

リアリズムを高唱するものは今の世の批評家先生である。しかし何等かの意味に於ては、ロマン的傾向の作家と雖も、リアリズムを奉じてゐぬものはない。これに反して批評家先生は悉稀代のロマン派である。

今昔

昔帝國文庫本の「三國志」や「水滸傳」を讀んだ時、十何才かの僕は「三國志」よりも「水滸傳」を好んだものである。これは年の長じた後もやはり昔と變らなかつた。少くとも變らないと信じてゐ

た。が、この頃何かの拍子に「三國志」や「水滸傳」を讀んで見ると、「水滸傳」は前よりも面白みを減じ、「三國志」はその代りに前よりもはるかに面白みを加へてゐる。「水滸傳」は及時雨宋江だの、智多星呉用だのと云ふ、特色のある性格を描いてゐる。けれどもそれらの性格はスコットの作中の性格と大差あるものとは思はれない。それだけに面白みを減じたのであらう。「三國志」は三國の策士の施した種種の謀計を描いてゐる。その又謀計は人間と云ふものを洞察した知慧の上に築かれてゐる。殊に少時神算とも鬼謀とも更に思はなかつたものほど、一層悪辣無双なる策士の眼光を語つてゐる。これは或は「三國志」の作者の手柄と云ふよりも、寧ろ史上の事實そのものの興味に富んでゐる爲かも知れない。が、兎に角「三國志」の今の僕に面白いのはかう云ふ面白みの出來た爲である。僕は昔政治家などの所業に少しでも興味を感ずることは永久にないものと信じてゐた。しかし今の調子ではもうそろそろ久米正雄の所謂床屋政治家の域にはひりさうである。

愛國心

我我日本國民に最も缺けてゐるものは國を愛する心である。藝術的精神を論ずれば、日本は列強に劣らぬかも知れぬ。又科學的精神を論ずるにしても、必しも下位にあるとは信ぜられまい。しかし愛國心を問題にすれば、英佛獨露の國國に一籌を輸することは事實である。

愛國心の發達は國家的意識に根ざすものである。その又國家的意識の發達は國境の觀念に根ざ

すものである。けれども我我日本國民は神武天皇の昔から、未だ嘗痛切に國境の觀念を抱いたことはない。少くとも歐羅巴の國國のやうに、骨に徹するほど抱いたことはない。その爲に我我の愛國心は今日もなほ石器時代の蒙昧の底に沈んでゐる。

ルウル地方の獨逸國民はあらゆる悲劇に面してゐる。しかも彼等の愛國心は輕擧に出づることを許さぬらしい。我我日本國民は李鴻章を殺さんとし、更に又皇太子時代のニコライ二世を殺さんとした。もしルウルの民のやうに、たとへば鄰邦たる支那の爲に食糧等を途絕されたとすれば、日本に在留する支那人などは忽ち刺客に襲はれるであらう。同時に日本はとり返しのつかぬ國家的危機に陷るであらう。

けれども我我日本國民は愛國心に富んでゐると信じてゐる。――いや、或は富んでゐるかも知れぬ。あらゆる未開の民族のやうに。

强盜

社會は金を出さない限り、我我の生存を保證しない。これは强盜の「有り金を渡せ、渡さなければ命をとる」と脅迫するのも同じことである。すると强盜とは何かと云へば、つまり社會の行ふことを個人の行ふことと云はれるであらう。ではなぜ强盜は罰せられるか？　社會は夙に團體的强盜のパテントを取つてゐるからである。

或問答

「君は破壞しに來たのか？」
「いいえ。」
「建設しに來たのか？」
「いいえ。」
「では君は何をしに來たのだ？」
「どちらにすれば好いか考へる爲に。」

（大正十二年―大正十四年）

〔斷片〕

I

〔第六卷五一頁ニ〕

一 罪と罰と

或空氣の澄んだ雨上りの午後、髮の毛を亂した男が一人、往來の泥の中に跪いたまま、通りがかる人々に懺悔をしてゐた。彼は重おもしい顏をしてゐた。それから家々の向うにある、薄靑い空を見つめてゐた。しかし彼のしてゐる懺悔はかう云ふ一行に外ならなかつた。
「皆さん、わたしのしたやうになさるものではありません。わたしの言ふやうにして下さいまし。」

彼の懺悔は大勢の人々を立ち止らせたのに違〔ひなか〕つた。しかしそこへ通りかかつた、髮の毛の明るい靑年はちよつと彼を見下したまま、かう言つてさつさと歩いて行つた。

・・

三　人間

神は未來の人間たちの爲に薔薇色の學校を開いてゐた。この學校の授業課目は一に算術、二に算術、三に、――三も算術だつた。しかし二三人の怠けものは滅多に教室へ出たことはなかつた。

　彼等は他の生徒たちと一しよに人間界に生まれることになつた。彼等の授業を怠つた罰は忽ち彼等へ加へられ出した。彼等は皆氣違ひになつたり、或は罪人になつたりした。しかしいづれも言ひ合せたやうに彼等の詩をそつと大事にしてゐた。

　神は彼等さへ憐んでゐた。が、どうにも仕かたはなかつた。彼等は人間界を去つた後、もう一度神の前へ歸つて來た。神は薔薇色の學校の中に彼等を集めて話しかけた。それはどこか嚴かな中にも優しみのある言葉だつた。

「今度は算術を勉强しろ。」

　彼等は一齊に返事をした。

「いやです！　あすこを御覽なさい。」

「あすこ」とは卽ち人間界だつた。そこには頭の禿げた卒業生たちが大勢、或大きい紙の上へ一しよにかう云ふ式を作つてゐた。

　2＋2＝5 *

*〔別稿二〕2＋2＝4

四　マイクロフォン

詩人は神の造つたマイクロフォンである。誰も、この人間界ではほんたうのことをおほ聲では言はない。が、詩人は彼等の小聲を忽ちおほ聲にしてしまふのである。若し一例を擧げるとすれば、——

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

II

×

「わたしのしたいことをするな、
わたしの言ふやうにしろ。」
あらゆる懺悔はかう云ふものだ。

×

前世に天國の幼稚園へはひり
(石鹼の匂のする薔薇の花の

一ぱいになつた幼稚園だ。)
算術を習つて來た叔父さんたち。
君たちこそ現世の紳士だ。

III

1

夜だけは僕を靜かにする。
僕は夜はダイアモンドを截り
僕のピンに嵌めようとしてゐる。
多角形に截つたダイアモンドを。
それもつまり考へて見れば、
氣違ひの息子に生まれたからだらう。

2

僕自身にも欺されない僕を

誰が欺してくれるものか？
僕は薔薇を食ふ犬たちではない。
晝まも目の見える金鍍金（きんめつき）の梟（ふくろふ）だ。

3

僕はアラセイトウの花のやうに
僕自身を五つの花びらにしてゐる。
・・・・・・・・・・・・

（昭和二年）

レオナルド・ダ・ヴインチの手記

——Leonardo da Vinci——

×

おお、神よ。爾は、一切の善きものを、勞力の價を以て、我等に賣り給へり。

×

古人を模倣する事は、今人を模倣する事より、賞賛に値する。

×

「生」に於て、「美」は死滅する。が、「藝術」に於ては、死滅しない。

×

感情の至上の力が存する所に、殉教者中の最大なる殉教者がある。

×

我等の故郷に歸らんとする、我等の往時の狀態に還らんとする、希望と欲望とを見よ。如何にそれが、光に於ける蛾(ひとりむし)に似てゐるか。絕えざる憧憬を以て、常に、新なる春と新なる夏と、新なる月と新なる年とを、悅び望み、その憧憬する物の餘りに遲く來るのを歎ずる者は、實は彼自

身已の滅亡を憧憬しつつあると云ふ事も、認めずにしまふ。しかし、この憧憬こそは、五元の精髓であり精神である。それは肉體の生活の中に幽閉せられながら、しかも猶、その源に歸る事を望んでやまない。自分は、諸君にかう云ふ事を知つて貰ひたいと思ふ。この同じ憧憬が、自然の中に生來存してゐる精髓だと云ふ事を。さうして、人間は世界の一タイプだと云ふ事を。

×

善く費された日が、幸福な眠を齎すやうに、善く用ひられた生は、幸福な死を將來する。

×

自分が、如何に生く可きかを學んでゐたと思つてゐる間に、自分は、如何に死す可きかを學んでゐたのである。

×

鐵は、用ひない時に、銹る。溜り水は、濁つて、寒天には、氷結する。懈怠が心の活力を奪ふ事も亦、これに比しい。

×

おお「時」よ。一切を滅却する爾よ。おお嫉みふかき時代よ。爾は、年の鋭き齒牙を以て、徐なる死に、一切を破壞し、一切を併呑する。ヘレンは、老年が面上に刻した皺を、鏡中の影に認めた時、泣いて、何故に彼女が二度までも誘拐し去られたかを怪んだ。

おお「時」よ。一切を滅却する爾よ。おお一切を滅却する嫉みふかき時代よ。

×

木は、木を滅する火の燃料となる。

×

最大の不幸は、理論が手腕を超過した時である。

（抄譯）

（大正三年頃）

囁く者

——Fiona Macleod——

（雜沓した倫敦の街路である。夏の日午。日の光は、斜に、薄い青の面帕を洩れて、路上に靑ざめた金を落してゐる。そして、又その路上には、限りない〔二字缺〕の大浪が、狹い海峽に、〔一字缺〕かれた海水のやうに、動いてゐる。忙しさうに、往來する、群集の中を、一人の男が歩いて行く。その男は、兼ねて憧れてゐた何物かを、遙かの彼方に見出したかの如く、向ふをぢつと眺めてゐる。時として、彼は急に立止つて、驚いた瞳を、その時その傍にゐた男女の上に注ぐ事がある。時として、彼は又、獨りで口を開く事がある。しかし誰も彼に答を返す者はない。）

男　（足早に東へ歩いてゐたのが、突然立止る。眼の光が消えようとしてゐる。）誰だ、口をきいたのは？

囁く者　己だ。

男　誰だ、お前は？

（沈默）

男　（始、彼の傍を通りすぎる一人に向つて、それから、又一人に向つて）何です？

（各〻、暫、眼を見合はせる。しかし誰も答へない。彼が聲をかける人々は、皆、急いで彼にかまはずに、歩いてゆく。中には五六人、彼を一瞥して、腹立しげに、或は侮辱したやうに、呟いてゆく者もある。徐に彼は又、歩きはじめる。すると、聲が又耳にはいる。）

男　誰だ、口をきいたのは？

囁く者　己だ。

男　誰だ、お前は？

囁く者　己は、見張をする者の一人だ。

男　誰を？

（沈默）

男　何を？

（沈默）

男　お前は此處にゐるのか？

囁く者　此處にゐる。

男　己には見えない。お前は何處にゐるのだ。

囁く者　己は、渦を卷く車と甃石に落ちる蹄との律動（リズム）の中にゐる。己は、無數の足の響と億萬の呼吸の呟きとの中にゐる。燕は、己の足跡の中に閃き、高い太陽の光は、己の眼の中に輝いて

ゐる。

男　お前は何の用があるのだ。

囁く者　己には意志はない。おゝ砕ける波よ、「お前は何の用があるのだ」とは、己の方で云ふ事だ。

男　己は何處にゐるのだ？

囁く者　お前は大きな渦巻の中にゐる。その渦巻は又、更に大きな海の中にある。

男　それでは、己は、失はれた波か？

囁く者　お前は起伏する波だ。

男　（小聲で繰返す）起伏する波だ？

囁く者　起伏する波だ。

男　精靈か、お前は？

（沈默）

男　何だ、お前は？

（沈默）

男　（たまらなくなつて、傍の老人に向ひながら）君だ。さあ云ひ給へ。

（老人は、氣味惡るさうに、彼を見て、とられた手をふり離して、急いで又歩いて行つてしまふ。）

囁く者　己は此處にゐる。
男　己がもし、お前の見張つてゐる者の一人なら、お前は何の爲にさうするのか話してくれ。
囁く者　見たければ見るがいゝ。聞きたければ聞くがいゝ。もし
男　よし。己は聞きたい。そして見たい。
（男は、まだ言の完らない內に、路上の群集が三重になつたのを見る。しかし又耳には、啼泣と慟哭との響が、勝利と反抗との遠いかすかな叫聲と共に、傳はつて來る。數しれず碎ける海上の波のやうに、人間の情熱の爭が、〔一字缺〕然と錯雜した呟きになつて、希望、恐怖、激怒、畏懼、驚愕を、もの狂はしい眸に浮べた、影のやうな形に現れてゐるのである。各〻の男女の傍には、二人の他の男女が步いてゆく。靈魂の幻と、肉體の幻とである。常に牽牛花の瞳をかゞやかせた靈魂の幻は、肉體の面帕（ヴエール）を透して、或は力のない、或はまどろんでゐる、或は疲れてゐる、或は匆卒な、或は專念に耳を傾ける、或は潑剌と生動する、その「人」を見守つてゐる。そして、又、肉體の幻は、常に、稍、その「人」に先立つて、眼の前には蠱惑の呪をかけ、耳の中には〔二字缺〕の歌をうたひ、絕えず低い聲で笑つてゐる。その足の焰が、薔薇のやうに見え、その頭にある塵や灰が、匂ひの高い百合の花にまがひ、その體をつゝむ、腐爛した壞肉（ゑにく）が、人を森に誘ふ、綠り葉の枝のやうに、ゆらぐからである。）
男　（戰きながら）惡魔が至る處に凱歌をあげてゐる。
囁く者　惡魔と云ふ者はゐない。

男　しかし、彼は――墓窖の〔二字缺〕と、腐敗の祕文とを織つてゐる。肉體の幻は――

囁く者　見ろ。

（男は眼をあげて、唯、一つの姿が、各〻先を急ぐ億萬の人々の傍に動いてゐるのを見る。）

男　誰だ――誰だ、あれは？

囁く者　男の、それでなければ、女の幻だ。

男　では一つなのか、靈魂の幻と肉體の幻とは？

囁く者　一つだ。

男　（甚しく恐怖してゐる）そして、お前は？

（沈默）

（未完）

（大正三年頃）

火と影との呪

——W. B. Yeats——

或夏の夜、靜寂が四方を籠めてゐた時である。敬虔なサア・フレデリツク・ハミルトンの指揮の下に、二十人ばかりの清教徒の騎兵が、白衣(ホワイト・フライアース)僧の僧院の扉を破つて、闖入した。僧院は、スリゴにあるガラ湖の上に、立つてゐたのである。扉が、凄じい響を立てて仆れると、彼等は一群の僧侶が、祭壇の周圍に集つてゐるのを見た。白い僧服が、聖蠟の鮮な光の中に、輝いてゐる。僧は皆、跪いてゐた。唯、首座だけは、祭壇の階段に佇みながら、手に大きな黄銅の十字架を持つてゐる。「撃て。」サア・フレデリツク・ハミルトンが叫んだ。が、誰も動かない。兵卒は皆、新に改宗した者ばかりで、十字架と聖蠟とに、怕を抱いてゐたからである。祭壇からさす白い光が、騎兵の影を、高く、天井や壁に投げてゐる。彼等が動くのに從つて、影も、持送りの棒材や記念牌の間に、不思議な舞踏をする。暫の間は、凡てが靜かであつた。それから、サア・フレデリツク・ハミルトンの護衛兵だつた五人の騎兵が、小銃を擧げて、五人の僧を射倒した。その音と煙とは、祭壇の青ざめた光の神祕を、忽に一掃した。さうして、外の騎兵も、それに勇氣を得て、射撃を開始した。一瞬の中に、僧は、祭壇の周圍に、算を亂して、仆れた。彼等の白い僧服

も、今は血にまみれてゐるのである。「家に火をつけろ。」サア・フレデリック・ハミルトンが叫んだ。言下に、一人の騎兵が外へ出て、乾いた藁を一山、持つて來た。さうして、それを、西の壁側に積んだ。が、これをしてしまふと、その男は後へ下つて、火をつけるのを、人に讓つた。十字架と聖燭との恐怖が、まだ、心に殘つてゐたからである。これを見ると、サア・フレデリック・ハミルトンの護衞兵だつた五人の騎兵が、躍り出でて、各々聖燭を手にしながら、その藁を焔にした。火の赤い舌は、一時に迸つて、持送りの棒材から棒材へ、記念牌から記念牌へと、搖ぎながら、床を這つて、多くの椅子や腰掛けを、見る間に、一團の猛火と變らせてしまふ。影の舞踏が止んで、火の舞踏が始まつたのである。騎兵は皆、南側の壁にある扉の方へ退いて、それらの黄色い踊り手が、其處此處と、飛びまはるのを見つめてゐた。

暫の間、祭壇は、その白い光の唯中に、依然として、立つてゐた。此處にだけは、まだ火もかからない。騎兵の眼は、自、それへ向つた。彼等が死んだとばかり思つた首座は、何時か立上つて、兩手に十字架を高くかざしながら、その前に佇んでゐる。すると突然、首座が、聲を揚げて、かう云つた。「主の光の中に住める者を亡さんとするものみなは災なるかな。彼等は、治すべからざる影の中にさまよひ、又、治すべからざる火の後を追ふべければなり。」かう叫ぶと、彼はうつぶせに倒れて死んだ。さうして、黄銅の十字架も、祭壇の階段を轉び落ちた。煙が、今はもう、濃くなつてゐる。そこで、騎兵は皆、戸外へ出た。彼等の前には、家々が燃え上つてゐる。彼等の後には、聖徒や殉教者の像で一ぱいになつた、僧院の硝子繪の窓が輝いてゐる。その聖徒や殉

教者は、神聖な恍惚狀態(トランス)からでも覺めたやうに、佛然として、生返つて來たのかと思はれる。騎兵の眼は、眩(くら)んで、暫の間は唯、聖徒や殉教者の燃え立つてゐる顏しか、見えなかつた。が、直に、彼等は、埃にまみれた男が一人、此方へ驅けて來るのを見た。「二人の使者を。」その男は叫んだ。「負けた愛蘭人が出しました。ハミルトン莊園のまはりの國々に、叛旗を擧げさせるつもりなのです。使者をつかまへなければ、うちへ歸らない中に、あなた方は森の中でひどい目にあひますよ。使者は、ベン・ブルベンとカシエル・ナ・ゲエルとの間を、東北へ馬をやりました。」

サア・フレデリツク・ハミルトンは、始に僧を狙擊した五人の騎兵を呼んで、かう云つた。「早く馬に乘れ。さうして森の中を山の方へ行け。先まはりをして、使者の奴を殺してしまふのだ。」

五人の騎兵は、卽座に出發した。さうして幾秒もたたない中に、流を亂して川を渡ると、森の中へ突進した。その川のある處は、今は「バツクレイの津(しん)」と呼ばれてゐる。彼等は、川の北岸に沿うてうねつてゐる小路を辿つて、進んだ。赤楊と山秦皮樹との枝が、頭の上で一つになつて、朧げな月の光を隱してゐる。路は、殆、眞の闇と云つてもよい。彼等は、一しよに饒舌つたり、暗い中を走りまはる迷子の鼬や兎に氣をつけたりしながら、足早に馬を進めて行く。その中に、森の沈默が重苦しく彼等に迫つた來た。そこで、彼等は次第に、馬を近づけて、忙しく話しはじめた。皆、古馴染みで、互に身の上の事を、よく知り合つてゐる。一人はもう妻をむかへてゐた。その男は、この慌しい白衣僧の討伐を完つて、無事に歸つて來る自分を見たなら、さうして又、急いだだけに、萬事が運よく、はこんだと云ふ事を聞いたなら、どんなに細君が喜ぶ事だらうと

云ふ。五人の中で、一番年かさなのは、上の棚で自分を待つてゐる葡萄酒の瓶の事を話した。この男の妻は、もう死んでゐるのである。それから、一番年下の男には、自分の歸りを待つてゐる戀人が一人ゐた。その男は、外の仲間より少し先に馬を立てて、一語も口をきかない。すると突然、この若者が馬を駐めた。見ると、その馬がふるへてゐる。「何か見えた。」若者が云つた。「が、己には何だかわからない。どうも、影の一つだつたやうな氣がする。頭に銀の冠をかぶつた、大きな蠕蟲のやうなものだつた。」五人の中の一人は、恰も十字を切らうとするやうに、手を額にあげた。が、宗旨を換へてゐたのに氣がついて、手を下して、それから、かう云つた。「なにきつと、影だらう。己たちのまはりには、隨分澤山、いろいろな妙な影があるから。」そこで、彼等は又、默つて馬を進めた。日のうちは、雨が降つてゐたので、滴が枝から落ちて來る。さうして、それが彼等の髮や肩を、しめらせる。暫して、彼等は又、話し始めた。五人とも皆、數度の戰場で、多くの叛民と戰つたものばかりである。彼等は、互に又自分が創痍をうけた時の話を、繰返して、話し合つた。さうして、彼等の心には、すべての友情の中で最も強い友情が、劍の友情が目ざめて來た。かくして、彼等は、恐るべき森の寂しさをも、半は忘れてしまつたのである。

突然、先に立つてゐた二頭の馬が嘶いて、それから、ぴたりと足を駐めた。先へは、一足も歩まうとしない。彼等の前には、一條の水が、きらめいてゐる。その淙々たる響で、一行は、川だと云ふ事を知つた。彼等は、馬を下りて、度々曳張つたり、欺したりしながら、やつと馬を、川の岸へつれて來た。水のまん中には、脊の高い老婆が、灰色の着物の上に、灰色の髮の毛を亂し

て、立つてゐる。水は、膝までしかとどかない。老婆は、洗濯でもしてゐるやうに、時々身をかがめる。間もなく彼等には、その老婆が、何か牛、水に浮んでゐる物を、洗つてゐるのが見えた。折から、搖曳する月色が、その上に落ちたので、彼等は、それが人の屍骸だと云ふ事を知つた。見てゐる中に、流れの渦が、その顔を此方（こちら）へ向かせる。五人の騎兵は、各〻同時に、それに自分の顔を認めた。あまりの事に彼等が、愕然として、唖の如く身動きもせずに、立つてゐると、老婆は、徐に大きな聲で、こんな事を云ひ始めた。「おまへ方は、わしの倅を見たかの。わしの倅は、頭（かしら）に銀の冠をかぶつてゐる。冠の中には、紅玉（ルビイ）が幾つもある。」すると騎兵の中で、一番年かさなのが、一番澤山負傷した事のあるのが、劍（けん）をぬいて、叫んだ。「己は、己の神の眞理の爲に戰つた。惡魔の影を怕れる必要……………………………………

……………………………………………………………………

…………………………………………………………（未完）

（大正三年頃）

〔ディイダラス〕

——James Joyce——

自習室に坐つたまま、彼は机の蓋をあけた。さうして中に貼つてある番號を、七十七番から七十六番に取り換へた。しかしクリスマスの休暇はまだずつと遠い。しかし何時かは來るに違ひない。地球は始終廻轉してゐるから。

彼の地理の書の第一頁には、地球の圖が揭げてある。——雲の中にある、大きな球が。フレミング(彼の名)は〔三字缺〕の箱を持つてゐる。さうして或晩温習の時間に、彼は地球を綠色に、雲を海老茶色に色どつて置いた。それはダンテの戸棚にある、二つのブラツシュのやうであつた。綠色の天鵞絨の背のある、パアヌルのブラツシュと、海老茶色の天鵞絨の背のある、マイケル・デエヴィツトのブラツシュと。しかし彼(ダンテ)はフレミングに、地球や雲をさう云ふ色に彩れと云つた事はなかつた。フレミングが勝手に彩つたのである。

彼は地理の書をあけて、勉強にとりかかつた。しかし彼は亞米利加の地名を覺える事が出來なかつた。それでもそれらはそれぞれ違つた名前のある、みんな違つた場所であつた。それらはみんな違つた國にあり、その國々はいろいろな大陸にあり、大陸は世界の中にあり、世界は宇宙の

中にあつた。

彼は地理の書のフライ・リイフに向つた。さうして其處に書いて置いた事を讀んだ。彼自身と彼の名と彼のゐる場所の事とを。

ステファン・ディイダラス
〔一行空白〕
クロンゴオス・ウツド學校
サリンズ
キルデェア州
愛蘭土
歐羅巴
宇宙

それは彼の筆蹟だつた。フレミングは或晩〔六字缺〕その頁の裏へかう書いて置いた。

ステファン・ディイダラスはわが名なり
愛蘭土はわが國家ぞ
クロンゴオスはわが住む地なり

さて天・・・・・・・・・・

〔"A Portrait of the Artist as a Young Man" ヨリ〕

（大正十一年頃）

手記其他

我鬼窟句抄

大正七年

遲櫻卵を破れば腐り居る

熱を病んで櫻明りにふるへ居る

この匂藪木の花か春の月

春の月常磐木に水際仄なる

草の戸の灯相圖や雉ほろと

冷眼に梨花見て轎を急がせし

蜃氣樓見んとや手長人こぞる

干し傘を疊む一々夕蛙

裸根も春雨竹の青さかな

鐵條（ゼンマイ）に似て蝶の舌暑さかな

炎天にはたと打つたる根（ネ）つ木（キ）かな

水打てば御城下町の匂かな

日傘人見る砂文字の異花奇禽

青蛙おのれもペンキぬりたてか
時鳥山桑摘めば朝燒くる
青簾裏畠の花を幽(かすか)にす
晝の月霍亂人が眼ざしやな
松風や紅提灯も秋隣（鵠沼谷崎潤一郎幽棲）
老骨をばさと包むや革羽織
秋風や水干し足らぬ木棉糸
黑き熟るる實に露霜やだまり鳥
癆咳の頬美しや冬帽子
惣嫁指の白きも葱に似たりけり
勳章の重さ老軀の初明り
われとわが綺羅冷かに見返りぬ（偶感）
凩にひろげて白し小風呂敷
凩や東京の日のありどころ
篁に飛花堰きあへず居士が家
君琴彈け我は落花に肘枕
秋暑く竹の脂をしぼりけり
風蘭や冷光多き巖の隈

瓦色黄昏岩蓮華所々
春風の驢に鞭喝を寛うせよ（原稿を斷る）
檣に瑠璃燈懸けよ海の秋
灰墨のきしみ村鬢の返り花
暖や蕊に蠟塗る造り花
飮食ひにござれ田端は梅の花（松岡讓に）

大正八年

梅花飛び盡せば風を見ざりけり（先考悼亡）
怪しさや夕まぐれ來る菊人形
水朧ながら落花を浮べけり
この頃や戲作三昧花曇り（人に答ふ）
胸中の凩咳となりにけり（三汀の病を問ふ我亦時に病床にあり）
醉ひ足らぬ南京酒や盡くる春（細田枯萍を訪ふ）
春に入る竹山ならん微茫たる
殘雪や墓をめぐつて龍の髯
歸らなんいざ草の庵は春の風（學校をやめる）

引き鶴や我鬼先生の眼ン寒し

もの言はぬ研屋の業や梅雨入空

長崎にて

粉壁や芭蕉玉巻く南京寺

偶谷水二首を作る（五月二十二日）

夕影はおぎろなきかもほそぼそと峡間を落つる谷水は照り

あしびきの岩根は濡れて谷水の下光り行く夕なりけり

欄前に茶を煮る僮や竹の秋

黒塚や人の毛を編む雪帽子

鵠は白く鴉は黒き涼しさよ

主人拙を守る十年つくね藷

夜半の秋算木や幾度置き換へし

飯中の八仙行くや風薫る

青嵐鷺吹き落す水田かな

似無愁抄

二十四日　時雨

時雨れんとす椎の葉暗く朝燒けて
柚落ちて明るき土や夕時雨

二十五日　曇　春意あり

春に入る竹山ならん微茫たる
霞みけり――

（大正八年二月）

我鬼句抄

春

殘雪や小笹にまじる龍の髯（先考の墓に詣づ、八年）
この匂藪木の花か春の月（七年）
暖かや蕊に蠟塗る造り花（七年）
歸らなんいざ草の庵は春の風（致師をやめる、八年）
白桃は沾(ウル)み緋桃は煙りけり
晝見ゆる星うら〳〵と霞かな
春の夜や小暗き風呂に沈み居る（九年）
曇天の水動かずよ芹の中
舌たるう蜜豆くひぬ桃の花
お降りや町ふかぶかと門の竹
雨吹くやうすうす燃ゆる山のなり
春雨の中やいづこの山の雪
おらが家の花もさいたる番茶かな　ウマイウマイ

夏

青簾裏畠の花を幽にす（六年）
時鳥山桑摘めば朝燒くる（六年）
松風や紅提灯も秋隣（鵠沼谷崎潤一郎幽棲、七年）
晝の月霍亂人が眼ざしやな（七年）
日盛や松脂匂ふ松林（八年）
青蛙おのれもペンキぬりたてか（七年）
風すぢの雨にも透る青田かな（八年）
笹原や笹の匂も日の盛（八年）
三四人だんびら磨ぐや梅雨入空
向日葵も油ぎりけり午後一時
夏山や山も空なる夕明り（八年）
水蘆や虹打ち透かす五六尺（八年）
曇天や蝮生き居る罎の中（八年）
寒天や夕まぐれ來る水のいろ

秋

秋風や水干し足らぬ木綿糸（七年）
怪しさや夕まぐれ來る菊人形（七年）
松風の中を行きけり墓參人
花芒拂ふは海の鱗雲
竹林や夜寒の路の右左（八年）
山蔦に朝露すべる葉數かな

冬

木枯や東京の日のありどころ（六年）
木枯にひろげて白し小風呂敷（六年）
痨咳の頰美しや冬帽子（七年）
凩や目刺に殘る海の色（六年）
炭取の底にかそけき木の葉かな
蠟梅や枝疎なる時雨空
風落つる枯藪高し冬日影

天雲の光まぼしも日本の聖母の御寺今日見つるかも

天雲のしきはふしたよ日本の聖母のみ寺けふ見つるかも
まかゞよふ海に音なしわらはべは耳かたむけて居たりけるかも
末の世のくゞきの歌の歌聖吉井勇に酒奉る
秋ふくる晝ほのぼのと朝顔は花ひらき居りなよ竹の末に
足曳の山のまほらに路たえず如何なる人かゆきかよひけん

沙淺蒲猶綠
石疎波自皺
遙思明月下
時有浣沙人

鼎茶銷午夢
薄酒喚春愁
杳渺孤山路
風花似舊不

靑灣茶〔寮〕圖錄　四册？（竹田供養）

（大正六年―大正八年）

蕩々帖

我鬼

河郎の歌

赤らひく肌もふれつゝ河郎のいもせはいまだ眠りてをらむ

わすらえぬ丹の穗の面輪見まくほり古江ぞ出でし河郎われは

人間の女を戀ひしかばこの川の河郎の子は殺されにけり

小蒸汽の波立つなべに河郎は瞼冷たくなりにけらしも

川そこの光消えたれ河郎は水こもり草に眼をひらくらし

水そこの小夜ふけぬらし河郎のあたまの皿に月さし來る

岩根まき命終りし河郎のかなしき瞳を見るにたへめや

○

小穴隆一に贈る十三日夜くれた畫はがきの返事

寂しもよ月の繪のある古德利誰か描きけむこの古德利

柱がけの菊は香ぐはしとろとろと入谷の兄貴醉ひにけらずや

註ニ曰　小澤碧童[二字不明]呼んで入谷の兄貴となす

この鳥は何鳥ならん紅菊の菊の花見て啼けりや否や

男三人醉へばまさびしこの宵は日蓮上人の御命日かも

註ニ曰　三人トハ碧童、隆一、古原草ナリ

○

恒藤恭に贈る松茸を貰つたお禮

松茸はうれしきものか香を高みわが床のべを山となすかも

○

卽事

野茨にからまる萩の盛りかな

○

木犀や夕じめりたる石だたみ

コノ句折柴のお褒メニ預ル作者自身ハアマリウマイト思ハズ

○

秋の日や竹の實垂るゝ垣の外

○

時雨るゝや層々暗き十二階

石崖に木蔦まつはる寒さかな

二句共途上所見

○

文壇の近事を知らず

黒船の噂も知らず薄荷摘み

○

白玉の舞姫ひとり舞ふなべに小澤忠兵衞ほのぼのとなる

舞姫はかなしきものか錢を乞ふ手のおしろいも剝げてゐにけり

○

或人の長崎行を送る

赤寺の南京寺の瘦せ女餓鬼まぎはまぐとも酒なのみそね

○

行燈の火影は嬉し靑竹の箸にをすべき天ぷらもがな

行燈の古き火影に隆一は柹を描くなり蜂屋の柹を

磐禮彥かみの尊も柹をすと十束の劍置きたまひけむ

（行燈の會の歌　十一月二日）

○

閑庭時雨（十一月四日）

濡れそむる蔓一すぢや鴉瓜

○

大地茫々愁殺人

秋風や人なき道の草の丈（十一月六日）

○

笹の根の土乾き居る秋日かな

○

喪平に與ふ

かた岡の笹掘りかへす赭土に今日の時雨は流れてをらむ

君が家の軒の糸瓜は今日の雨に臍腐れしやあるひはいまだ

○

卽事

寒むざむと竹の落葉に降る雨の音をききつゝ厠にわが居り

雨の音の竹の落葉にやむ時は鑄物師秀眞が槌の音聞ゆ（十一月十二日）

○

澁谷の土娼に賃五錢なるものある由

白銅の錢に身を賣る夜寒かな

○

十二月十日雪降る

夕暮やなびき合ひたる雪の竹

ぬば玉の夜風に春は冴ゆる頃を一游亭よ風ひくなゆめ

星赤し人無き路の麻の丈

炎天に上りて消えぬ箕の埃（大正十年八月）

荒々し霞の中の山の襞

赤ときや蜩なきやむ屋根のうら

夕立の來べき空なり蓮の花

白南風の夕浪高うなりにけり

夏山や山も空なる夕明り

啼き渡る蟬一聲や薄月夜

初秋や朝顔ひらく午さがり

酒赤し、甘藷畑、草紅葉

五月雨や玉菜買ひ去る人暗し

草の家の柱半ばに春日かな

元日や手を洗ひ居る夕心

橋の上ゆ胡瓜投ぐれば水ひびきすなはち見［ゆ］る禿のあたま

桐の葉は枝のむきむき枯れにけり

秋の日や榎の梢の片靡き
春雨や作り木細る路つづき
ゆららかや杉菜の中に日は落つれ
風澄むや小松片照る山のかげ
石垣に火照りいざよふ夕べかな（北京）
麥埃かぶる童子の眠りかな（洛陽）
炭取の底にかそけき木の葉かな
　伯母の云ふ
薄綿はのばしかねたる霜夜かな

鼎茶銷午夢
薄酒喚春愁
杳渺孤山路
風花似舊不

（大正九年—大正十一年）

蕩々帖

雨吹くやうすうす燒くる山の形
　五條はたご
笋の皮の流るる薄暑かな
　太秦
花降るや牛の額の土ぼこり
　高臺寺はたご
新參の湯をつかひをる火かげかな
　あてかいな　あて宇治のうまれどす
茶畑に入日しづもる在所かな
　恒藤恭とエンゲルスの話をする　僕曰エンゲルスは金があつたのだろ
　恭曰西洋人は中々蕨ばかりは食はんさ　僕曰僕も蕨ばかり食ふのは御免

だ　郎戯れに

山住みの蕨も食はぬ春日かな

一力のお秋さん云ふ

花の都の一軒屋　六角堂に人住まず　話したさにあひに來る
なにや――自働電話
宇治に狐のゐイへんのは――茶の木ばかり
天の星さん數いくつ――よまんせん
からすの昆(コン)布卷――かかあまかれ
兎のとんぶり返り――耳が痛い
まむきの牡丹――けちんぼ

加茂の堤

夏山やうす日のあたる一ところ
ひと茂り入日の路に當りけり

與茂平に代りておはまさんへ

うき人もをさな寂びたり衣かへ

佐賀語

對等

問　あんじやいもんは──ゐつこう？

兄　貴──目上ニ をんさるかんた？

答　ゐるくさい　はいらんこう

目上　ゐるばんた　おはいんさい

女　おはいんさいなあたあ

いけばよし‖無頼漢

蒲原春夫に教はる

永見家藏幅

二天　山水

馬遠　手長猿

無名氏　虎　豪壯

稼圃　山水（九尺床一ぱい）

沈南蘋　春秋對幅　愛スベシ

竹田　丸山寫生圖

藍田叔　山水（九尺床一ぱい）
東坡墨竹　神韻あり
仙崖三、鍾鬼尤も佳　妖鬼何處耶沈香亭北倚欄干
仙崖對幅　竹に虎と雲に龍
　虎乎猫乎將又和唐内乎
　客曰何耶我曰龍客大咲我亦大咲ノ贊アリ
王若水　錦鷄　畫ノ具剝落甚シ
雪舟　鷺と蓮
逸雲　山水（大幅）
梧門　夏景山水
逸雲　唐人遊女と枕引きの圖（蜀山の贊あり）

長崎の宿
みじか夜の町に鐘なりもろこしのワンタン賣はすぎ行きにけり

五月十一日
鐵翁　山水小幅
梧門　端午景物

逸雲　菊
右三幅購入
松倉家藏幅
光琳　東坡　贋なるべし
〃　騎虎の鍾鬼　贋紛れなし
〃　小柴垣に菊の屏風　素性よろしからず
唐畫無款　寒山拾得　凡作
雪舟　破墨山水　贋
○與茂平と五月十三日松本家へ畫を見に行く、松本氏與茂平の叔父)は事業家らしき老人なり
海鶴蟠桃
丙辰九月寫似漢老學長兄清鑒南蘋沈銓
老夫騎牛圖
陳灑瓢　田家樂事寒來稀記後去年春社時云々の贊、出來榮よろし
張鳳儀　杏花書屋
若冲　鷄(黃毛黑尾　梅花枝上ニアリ)

戴峻　青綠山水（仿趙松雪金箋）
沈南蘋　蓮花之圖（翡翠二　白鷺一）
　仿徐熙　神韻アリ　三圓にて買ひしよし
列仙圖　無落款　凡作
　以上松本家藏幅
二十九日記、沈南蘋の蓮猶目にあり
　道具屋の持ち來りし幅
宋紫石　瀑布圖　佳作ナラズ
鐵翁　蟹　燥裂
錦江　菊
梧門　雪景　惡シカラズ
鐵翁　紺紙金泥ノ梅竹團扇
熊斐　虎溪三笑　出來ヨロシ但し予はこの種の畫を好まず
胡公壽　山水
唐畫（款ナシ）　牡丹錦鷄（朽損甚し補筆畫力を殺し居り）
錢舜擧　米嚢花（贋）

與茂平曰酒九の句に「松が枝に朝日おめでたうござります」と云ふのがあります即ち口語句を試む

お若さんの庭に萱草の花あり

萱草も咲いたばつてん別れかな

別るゝや眞桑も甘か月もよか

與茂平と試みし連句

○

良寛様も炭火もるなり　龍

小屏風のうしろに猫は生れつゝ　庫

木の芽ふくらむ枝の向き々々　龍

日南ぼこ面影見えて靜かなる　庫

棚に裾ひく女人形　龍

三日目もあはずに歸る夕霞　庫

○

花を持ち荷蘭陀こちを向きにけり　龍

空はすかひに落つる凧あり　庫

○

麥藁の家に小人の夫婦住み　龍
煙管持つ手ものばしかねたり　庫

○

茶筌さばきもなれた酒九　庫
花鳥の一間に風は吹きかよひ　龍
つき合ひさけて禁書ひもとく　庫

○

白鷺の聲たのめなや初時雨　庫
藪は透きたる枯木一もと　龍

黑南風の海搖りすわる夜明けかな
晝中は枝の曲れる茂りかな

長崎晝

日傘さし荷蘭陀こちを向きにけり

人に

あさあさと麥藁かけよ草苺

秋ふくる晝ほのぼのと朝顔は花ひらきたりなよ竹のうらに
おぼろかに栗の垂り花見えそむるこのあかつきはしづかなるかも
晝曇るさ庭を見れば椎の木の葉かげの土も荒れてゐにけり

風澄むや小松片照る山のかげ

伯母の云ふ

薄綿はのばしかねたる霜夜かな
木の枝の瓦にさはる暑さかな
庭芝に小みちまはりぬ花つつじ
更くる夜を上ぬるみけり泥鰌汁
晝深う枝さしかはす茂りかな
葛水やコップを出づる匙の丈

北京北海

來て見れば軒はふ薔薇に青嵐

送一游亭

霜のふる夜を菅笠のゆくへかな

古瓦新婚

甘栗をむけばうれしき雪夜かな

羅生門の初版を持ちし人に

振り返る路細そぼそと暮秋かな

菊池寛につかはす

時雨るゝや堀江の茶屋に客一人

再遊長崎

唐寺の玉巻芭蕉肥りけり

初秋や蝗握れば柔かき

かげろふや猫にのまるる水たまり

初霜や藪に鄰れる住み心

竹の芽も茜さしたる彼岸かな

冬の日や障子をかすする竹の影

藤の花軒端の苔の老いにけり

一游亭

朝顔や土に這ひたる蔓のたけ

大災後芝山内をすぐ

松風をうつつに聞くよ古袷

飲與碧童

枝豆をうけとるものや澁團扇

線香を干した所へ桐一葉
山茶花の莟こぼるる寒さかな
山峽の杉冴え返る谺かな
初霜の金柑殘る葉越しかな
三月や茜さしたる萱の山

久しぶりに姪にあひて

かへり見る頰の肥りよ杏いろ

佐藤惣之助に

空にみつ大和扇をかざしつつ來よとつげけんミヤラビあはれ
遠つ峯にかがよふ雪のかすかにも命をもると君につげなん(室生に)
天雲にかよふ光や日のもとの聖母の御寺けふ見つるかも
わが庭は枯山吹の青枝のむら立つなべに時雨ふるなり
露霜の朝々ふれば甘柿は葉を落したり澁柿はまだ
葉をこぞり風になびける墨の竹誰か描きけんこの墨の竹

(大正十一年—大正十二年)

ひとまところ

澄江子

大正十三年九月十八日如例胃を病んで臥床す「ひとまところ」は病中の閑吟を錄するもの也

小庵

朝寒や鬼灯のこる草の中
秋さめや水苔つける木木の枝

旅中

秋風や秤にかゝる鯉の丈
手一合零餘子貰ふや秋の風

碓氷峠

水引を燈籠のふさや秋の風

枕べに樗良の七夕の書贊を挂けたり

風さゆる七夕竹や夜半の霧

枕頭にきりぎりす來る

錢おとす枯竹筒やきりぎりす
煎藥の煙をいとへきりぎりす

有客來相訪　通名是伏羲
泉石烟霞之主

但看花開落　不言人是非
與君一夕話　勝讀十年書
天若有情　天亦老　搖々幽恨難禁
悲火常燒心曲　愁雲頻壓眉尖
書外論文　睡最賢
虚窓夜朗　明月不減故人
藏不得是拙　露不得是醜

一目怪、人魂、傘、のつぺらばう、竹林坊、

異花開絕域　滋蔓接淸池
漢使徒空到　神農竟不知

我鬼窟日錄

大正八年

五月廿五日　晴
朝一回出來る。今村隆、菊池の本の裝幀の見本を持つて來る。出來思はしからず。裝幀なんぞ引受けなければよかつたと思ふ。午後になつて塚本八洲來る。十七で一高の試驗を受けるのだから及第すれば二十三で、學士になる訣である。

五月廿六日　陰晴定ラズ
この頃の若葉は見てゐても恐しいやうな勢あり。手水鉢の上の椎の木、今年は無暗に花をつける。今朝手を洗ひながら、その匂の濃いのに驚かされた。小說一向捗取らず。
新聞で菊池の雜感三則を讀む。同感。
午後谷崎潤一郞來る。赤いタイをしてゐた。一しよに外へ出て富坂の菊池の所へゆく。留守。更に本鄕三丁目へ出、又須田町まで行つてミカドで飯を食ふ。それから神田の古本屋を門並み冷やかして十二時半頃歸る。谷崎が維新時代の小說を書くなら半井桃水の何とか云ふ通俗小說を讀めと云つてゐた。受信、南部、岩井京子、野口眞造。

五月廿七日　陰　雨來ラントシテ來ラズ

午後小林勢以子來る。大へん柄の好いセルを着てゐた。長唄を浚つて夜になつてから歸る。夜引き續き小説を書く。

五月廿八日　晴

午後南部修太郎來る。辰子の寫眞を見せたら貸してくれと云つて持つて行つた。夕方一しよに鉢ノ木で飯を食ふ。それから菊池へ行つたら後から小島政二郎が來た。菊池剃刀負けがし繃帶を頭から頤へ卷いてゐる事クリスマスキヤロルへ出る幽靈の如し。

二十九日　晴

午後社へ顏を出し松内氏と文藝欄の打合せをする。畑を尋ねたがゐなかつた。又ジョオンズを尋ねたが留守なり。新橋の二階の東洋軒で飯を食ふ。二階の窓から見ると驛前の甘栗屋が日の下に見えて赤い提灯と栗をかきまぜる男とが甚風流だつた。古本屋を根氣よく探す。俳書六七册買ふ。月評を書き出す。

三十日　晴

午後畑耕一來る。久保正夫が友だちを集めてインフェルノを伊太利語にて講義せし事を話す。菊池來り三人で文藝欄擴張の話を少しする。夕方谷崎潤一郎小林勢以子を同道して來る。皆で晩飯を食ふ。谷崎が北原白秋を除き詩人は皆酢豆腐だと云つた。九時過ぎに皆歸る。後で俳諧江戸調を讀む。俗惡句を成さざるもの頻出す。猫を貰ふ。

五月卅一日　晴　後ニ陰　風アリ

客を謝して小說を書く。第一回から改めて出直す事にした。
午過ぎ久しぶりに詩を作る。五絕三、七律一。
夕方萬世橋驛のミカドにあるホイットマン百年祭へ行く。有島武郎氏、與謝野晶子氏、鐵幹氏などに會ふ。卓上演說もやつた。室生犀星、多田不二の兩氏と一しよに歸る。雷雨大に催す。

六月一日　晴
朝室生犀星の詩集第二を持つて來てくれる。長崎で買つた和蘭陀燒の茶碗を見て大丈夫本物ですと云ふ。
午後大彥の若主人來る。日暮から一しよに柳橋へ行つて花長の天ぷらを食ひ更に待合へ行つて藝者を見る。御孃樣のやうな無邪氣な藝者に會つて甚敬意を生じた。
熊本の高等學校にゐる西村熊雄なる人「猿」を英譯し發表しても好いかと云つて來る。好いと答へる。

六月二日　晴
午後弟と淺草へ行つて電氣館の「呪の家」を見る。活動寫眞程見て忘れるものなし。事件の繼起する速度が人間の記憶能力をどこかで超越してゐるのぢやないかと思ふ。
午頃中根氏羅生門の扉、表紙等を持つて來て見せる。里見弴の建てた土藏の話を聞いて少し羨しくなつた。
舟木重信「悲しき夜」を書いて、芥川龍之介、長與善郎の徒を退治す。

六月三日　晴
勉强して月評を書く。大阪每日より原稿早く送れの電報あり。大に恐縮す。
長崎の武藤長藏、盛に本を送つて人を惱ます。

六月四日　陰　後雨

高等工業學校文藝部より講演を頼む。平に御免を蒙る。
中根氏羅生門の印税を持つて來る。福島大將がムヤミに女中へ手をつける話をして行つた。
午後雨聲を聽きながら晝寐をする。
大阪毎日へ電報を打つて小說を延期して貰ひたいと云つてやる。

細田枯萍へ送るの句

惜め君南京酒に盡くる春

六月五日　雨　後陰

午後菊池と一しよに中戸川吉二を訪ふ。鉢ノ木で飯を食つてから小柳へ伯山を聞きに行く。伯山の藝なるもの派手すぎて蒼勁の趣なきもの丶如し。
菊池東洋大學で演說をする由。

六月六日　晴

午前小林勢以子來る。
今日にて月評を終る。
夕方久米の所へ行く。湯ケ原より歸り立てなり。山本勇三と落合ふ。山本大に國民文藝協會の芝居の惡口を云つてゐた。
久米と菊池、小島、岡、を訪ふ。皆留守なり。今日華氏八十四度。我鬼先生閉口す。

六月七日　陰
やはり暑し。午前瀧田樗陰先生、大な書畫帖を二册かつぎこみ句と歌とを書かせる。
午後木村幹來り一しよに平塚雷鳥を訪問す。序に叔父ワニヤの舞臺稽古を見る。
今日朝から晩まで癇癪の起しつづけなり。私に自ら恥づ。大觀、大隈侯の名にて茶話會に招待す。斷る。

六月八日　陰
午前高等工業學校の中原氏來訪。俳談を少々やる。しまひに例の講演を賴まれ遂に承諾す。
午後赤木桁平、小島政二郎、富田碎花、室賀文武等來る。桁平先生聖德太子を論じ平子鐸嶺を論じ白井壽美代を論じ意氣軒昂なり。先生日常その卓勵風發を以て僕と相當ると做す。豈敢て當らんや。
富田碎花に草の葉の譯を貰ふ。

六月九日　陰　後ニ雨
午後木村幹來る。一しよに谷崎を訪ふ。久米、中戸川、今、などが來てゐた。夕方雨の中を久米、木村、谷崎と四人づれで烏森の古今亭へ飯を食ひに行く。谷崎例の如くよく食ふ。夜自働車で谷崎の家へ歸りそこから又俥で歸宅。谷崎の說によれば香水を澤山集めて香を嗅ぎ分けようとしたら判然しないばかりか頭痛がして來た由。

六月十日　雨
紀州の東俊三書生に置いてくれと云つて來る。置きたくも置く所なし。斷り狀を書く。
夕方より八田先生を訪ふ。留守。

それから十日會へ行く。會するもの岩野泡鳴、大野隆徳、岡落葉、在田稠、大須賀乙字、菊池寛、江口渙、瀧井折柴等。外に岩野夫人等の女性四五人あり。遲れ馳せに有島生馬、三島章道を伴ひ來る。
それから更に室生犀星の愛の詩會へ行く。行けば會既に散じたる所にて北原白秋、小松玉巖、近藤義二、川路柳虹、加能作次郎、室生犀星等と平民食堂へ行く。食堂の名を百萬石と云ふ。蓋前田家の近傍なればなり。白秋醉つて小笠原島の歌を歌ふ。甚怪しげな歌也。歸りに夏帽子を買ふ。

六月十一日　雨
午前高桑義生、新小說の用事にて來る。
午後菊池を訪ふ。あらず。ジョオンズを訪ひ東洋軒にて食事。

十二日　雨
夜第三中學校へ行く。圖書館設立寄附金を募るの議に與る爲なり。久作、山口の諸君と歸途ミカドで珈琲を飲む。今村隆來訪。

十三日　雨
午前弟、午後土田善章來る。弟これから英語を勉强すると云ふ。
夕方弟と鉢ノ木へ飯を食ひに行く。それから二人で久米の所へ行つたら小說が出來ないと云つて悄氣てゐた。

十四日　雨

午後成瀨來る。一しよに晩飯を食ふ。紐育で青樓へ行つたら既に警察の手が廻つた後で巡査に Get away, you dirty dog! とドナられた話などして行つた。新小說の寄稿をやめる事にする。

十五日　陰

午後來客、稻葉實、中村眞雄、小林勢以子、今東光。

夜に入つて瀧井折柴が來て又俳論を鬪はせた。海紅句集を一册吳れる。

細君の齒痛未癒。大に齒醫者を輕蔑してゐた。

十六日　陰　後に雨

夜成瀨と有樂座へ「伯父ワニヤ」を見に行く。玄關で岡榮一郞と岩淵の奧さんに遇つた。「ワニヤ」はチエホフが戯曲と云ふオディソイスの弓を小說の所まで引いて見せた好例なるべし。所々に獨白を挾まざるを得ざりしは畢竟やむを得ざるに出づるなり。二幕目、四幕目殊に感に堪へた。聊戯曲が書いて見たくなる。廊下で万太郞、長江、秀雄、泡鳴、楞陰等の諸先生に遇ふ。

十七日　陰

夕方久米正雄の見舞に行く。關根正二の葬式に行つてまだ歸らず。暫くして黑絽の紋附で大いに男振りを上げながら歸つて來る。關根は死ぬまで畫を描く眞似をしてゐたさうだ。今宗敎畫めいたものが大概出來てゐると云ふ。關根は行年二十一。今死んでは予よりも猶死にきれざるべし。生きてゐる內に一刻でも勉强する事肝腎なり。留守に土田善章ピアストロの音樂會の切符を持つて來てくれる。

十八日　雨

無事。又詩を作る。五律二。細君、弟、姉「ワニヤ」見物。

十九日　陰

朝香取秀眞氏の所へ花瓶を頼みに行く。雲坪の話。奈良の大佛の話。左千夫の話。歸ると今村隆が來て舊稿バルタザアルを新小說へくれと云ふ。仕方なく承知する。大毎から原稿の催促あり。

二十日　陰

紫陽花旣に開く。中央公論の小說「疑惑」起稿。

二十一日　晴

夜瀧井折柴來る。忙しいからと云つて歸つて貰ふ。「我等の句境」を貰ふ。いろ〱貰つてばかりゐて恐縮なり。

二十二日　雨

赤い鳥の音樂會へ行く。井汲清治、澤木梢の諸先生に始めて會ふ。オーケストラの連中演習足らず甚危げなり。南部、江口夫婦、小島政二郞の令姉と東京ランチへ行く。その後南部と風月にて食事。慶應へ行つてピアストロ、ミロウィッチを聞く。安倍能成氏、ミロウィッチが公衆を眼中に措かない所がえらいと云つて褒める。

二十三日　晴　後陰小雨
亡父百ヶ日なり。但寺へ行かず。夕方より芝へ行く。歸りに龍泉堂で詩箋を買ふ。

二十四日　晴
午後菊池と久米の所へ行く。久米の前に下宿してゐた家の婆さん二人中、一人は發狂して歸國し、一人も今度その發狂したのと一しよになる爲歸國すると云ふ。但歸るのがいやだと云つて泣く由。甚同情す。
高工の中原君より櫻實を一箱貰ふ。

二十五日　晴
夕方赤城の山本へ行く。來月中旬支那へ行く筈。暮まで向うにゐると云ふんだから大變だ。

二十六日　雨
夜菊池の所へ行く。久米、佐治來る。後鉢ノ木へ行き佐治の Poe 論を聞く。荒唐無稽も甚しいものなり。

七月十六日　晴
夜鹿島龍藏氏邸の御馳走に招かる。香取秀眞、山本鼎、菊池寛、予の四人なり。針重氏も來る筈の所飲みすぎて下痢を起した由にて斷る。小杉未醒君亦奧州へ行つてゐて出席せず。十一時半まで話して歸る。

七月十七日　晴

めつきり暑くなる。妻新富座へ行く。叔母、姉同行なり。

七月十八日　半晴半陰

太陽の鈴木德太郎何でも書けと云ふ手紙をよこす。書けと云つても書けないんだから仕方がない。この上書けば頭は一年たゝぬ内に空になるべし。

九月九日　晴　風强し

旣に秋意あり。

朝大鐙閣の由良農學士來る。舊譯のイエーツを送る事を諾す。

閑に良寛詩集を讀む。二三を抄錄す。

回首七十有餘年　人間是非飽看破
往來跡幽深夜雪　一炷線香古窓下

君抛經卷低頭睡　我倚蒲團學祖翁
蛙聲遠近聽不絕　燈火明滅疎簾中

籬外蔓華兩三枝　喬林蕭疎寒鴉飛
千峯萬嶽唯夕照　正是收鉢僧歸時

千峯凍雲合　萬徑人跡絕
每日唯面壁　時聞灑窓雪
手把兎角杖　身披空華衣
足著龜毛履　口吟無聲詩
文珠騎獅子　普賢跨象王
妙音化寶臺　維摩臥一床
靑天塞雁啼　空山木葉飛
日暮煙村路　獨揭空盂歸

詩皆巧ならず。然而遺情無限。

九月十日　雨
午後菊池の家へ行く。宮島新三郎が來てゐる。三人で月評を作る。
夕方から十日會へ行く。
夜眠られず。起きてクロオチエがエステティクを讀む。

九月十一日　雨

妖婆續篇の稿を起す。
この頃どう云ふものか傷神し易し。努めてむづかしき本を讀む事にしたり。

九月十二日　雨
雨聲續聲。盡日枯座。愁人亦この雨聲を聞くべしなどと思ふ。

九月十三日　陰
菊池へ行く。佐治に遇ふ。「妖婆」評を六枚書いた由。聊恐縮す。松坂屋にて晝食。兩人に別れて歸る。
今日惲南田畫集、雲林六墨を購ふ。留守に瀧田樗陰來りし由。
衷心孤寂。妖婆續篇の稿進まず。

九月十四日　雨
日曜なれど終日客なし。塚本八洲來る。
夜に入つて風雨大に催す。

九月十五日　陰
午後江口を訪ふ。後始めて愁人と會す。夜に入つて歸る。
心緒亂れて止まず。自ら悲喜を知らざるなり。

九月十六日　陰　時ニ雨

終日鬱々。夜岡榮一郎を訪ふ。

九月十七日　晴
午後大彥來る。一しよにミカドへ晩飯を食ひに行く。後小島を訪ふ。江口あり。十時に至つて歸る。不忍池の夜色愁人を憶はしむる事切なり。

九月二十一日　陰
久保田万太郎、南部修太郎、佐佐木茂索、ジョオンズ等來る。夕方久保田を除き三人にて更科へ蕎麥を食ひに行く。燗酒の中に蚊あり。ジョオンズ洒落れて曰、この酒を蚊帳で漉して來て下さい。

九月二十二日　晴
妖婆續篇の稿やつと終る。夜十二時なり。無月秋風。臥榻に横はつて頻に愁人を憶ふ。

九月二十三日　晴
句作。秋十句を得たり。
夜空谷居士より愛石が柳陰呼渡の一軸を贈らる。淡々の意愛す可し。

九月二十四日　陰

久米を訪ふ。今夜成瀨やジョオンズと飯を食はん打合せの爲なり。久米帝劇のマチネエへ行つてから歸りに茶屋へ來ると云ふ。茶屋は鶯溪の伊香保なり。
歸れば留守に瀧井折柴が來た由。後魏中岳嵩高靈廟碑と宋拓禮器碑との拓本を置いて行つてくれた。會はなくて殘念なり。
夜伊香保で久米、成瀨とジョオンズの爲に別宴を開く。ジョオンズに畫を書かせ久米と二人で贊をする。

一もとの桔梗ゆらぐや風の中　　三汀
搔けば何時も片目鰻や五月雨　　我鬼

九月廿五日　雨
午後院展と二科とを見る。安井曾太郎氏の女の畫に敬服する。愁人と再會す。
夜歸。失ふ所ある如き心地なり。

こゝにして心重しも硯屛の青磁の花に見入りたるかも

數年來始めて歌興あり。自ら驚く。

九月廿八日　晴
午後瀧井、菅忠雄、佐佐木來る。夕方菅、佐佐木同伴、自由劇場を見に帝劇へ至る。ブリユウの「信仰」は二三十年時代遲れの問題劇なり。後日比谷カツフエへ行き久しぶりで安成貞雄に遇ふ。カツフエに醉漢一人あり。山田憲を死刑にして見ろ承知しないぞと云つて卓を打つ。出づれば電車なし。Taxi にてかへる。

九月廿九日　陰

菊池、佐佐木と社へ行く。初音で夜食。佐佐木の原稿を春陽堂へ持つて行く。芝へ行つて泊る事にする。愁人今如何。

九月卅日　雨

朝芝から久米を訪ふ。緣談の件なり。

十月一日

百不識者の然々は一識者の否々に若かず。

見る所少ければ怪しむ所多し。

下士は道を聞いて乃ち大に之を笑ふ。

若夫淺薄固執の人今日之を爲して是の如く明日之を爲して亦是の如し。卽ち終身之を爲して亦是の如きに過ぎざる者は印板の畫なり。

鄙吝滿懷。淺嘗薄植。

人の學を爲す貴きこと志を立つるに在るを若し先づ其志を隳さばその爲さゞるの逸なるに若かじ。

筆墨は本通靈の具也。

好手響を絕つ。

躁急の筆を以て以て速成を幾ふときは但神韻の短淺なるのみならず亦且つ暴氣將に乘らんとす。

(油滑佻撻の弊)其弊一度成るや畢生挽く無し。

猛烹極煉の功に在らずして一生の醍醐と云ふ者なり。
外丹成れば卽內丹成る。
爭競躁戾の氣を平にし機巧便利の風を息めよ。

黃粱夢、英雄の器、蛙、女體。

時鳥雨のかしらを鳴いて來る
山亢として(五月雨の)
日の暑さ
照り曇る十方くれの暑さかな
蒸しのぼす堤の息や
葉の動き(止)
入道のよゝと參りぬ納豆汁
埋火に我夜計るや枕上
白鷺驚る
夏にふたする
淋しさ凝りて

澄江堂日錄

大正十四年

二月四日
力石平三、女中をつれて來る。十七歲。名はミツ。勞働者(失業の)三人、金を貰ひに來る。但し甚だ慇懃なり。
神代來る。
小穴より來書。「よべの豆はばかりまでの寒さかな」とあり。宛名は風神殿。予の風邪にかかれるが爲なり。久しぶりに句を作る。

春雨や檜は霜に焦げながら

一游亭の下宿を訪ひて、

枝炭の火もほの めけや燒りんご

二月五日
香取先生より鴨を賜る。金澤の蕪鮓をおかへしにする。蕪鮓は泉さんに貰ひしもの。使を待たせておいて速製の歌を作る。「たてまつる蕪の鮓は日をへなばあぶらや浮かむただに食したまへ。」
妻、比呂志をつれて牛込へ行く。八洲相不變のよし。蒲原來る。
「たてまつる」を「金澤の」に改む。六日追記。

二月七日
蒲原と編著ものに從ふ。
明日大彥老人の十日祭に當る故、精養軒に來てくれと言ふ囘狀來る。德田さんの名の下に出席とあり。出席する事を約す。
菊池、三宅、岡來る。自笑軒にて晚飯。
庭の殘雪全く消ゆ。
中央公論に「田端人」を、思想に「澄江堂雜詩」を送る。

二月八日
建具屋書齋の杉戶を持ち來る。書齋のカマチは本の重量の爲もう二分五厘下りゐるよし。大彥老人の十日祭の御馳走に行く。德田さんに會ふ。德田さんは土耳古のネクタイ・ピンをして來た。午後二時散會。歸りに室生による。一游亭の畫の落款をもう少し上げて貰ひ、下を一寸五分ほど斷ちたしと云ふ。室生の所にて堀、水上、小田に會ふ。
留守に山本實彥、春陽堂主人、神代など來たよし。春陽堂、良寬を一幅くれる。まだホンモノともガンブツとも見當つかず。

二月十七日
道具屋、室生、神代、田沼、宮崎來ル。一枚モ仕事出來ズ。アシタハ又岡一件ノ爲ニ大彥來ルベシ。不愉快ナリ。

〔輕井澤日記〕

千が瀧に別莊を借りてゐるＹが來てゐた。二人で二階に話してゐた。そこへ「Ａさん」と言ふＨの聲がした。肘かけ窓の障子をあけて見ると、Ｈは庭を隔てた廊下にゐ、姿は松や〔一字缺〕のかげになつて見えないが、「Ｓさんが來ました」と言つてゐる。

「あとで行く、今Ｙ君が來てゐるから。」

しかしＹにＳの來たことを話し、すぐに自分だけＭの部屋へ行つた。廊下に桃色や黑のパラソルがねかしてあるのでＳの細君も來たのかと思つた。が、部屋へはひつて見ると、一人はＩ子と言ふＳの妹、もう一人は丸髷に結つた、知らない人だつた。Ｓは白い背廣を着、あぐらをかいたまま「やあ」と言つた。Ｉ子やもう一人の女の人は「どうぞあちらへ」と言つた。「あちら」と言ふのは座敷の奧、卽ち床の間の前なのだ。好い加減な所に坐ると、Ｍは（机の前に坐つてゐたが）「Ｉ子さんは知つてゐるね。これもＳ君の妹さんだ」と丸髷の人を紹介した。丸髷の人は愛想よくお時宜をした。

暫く（五六分）話してから、部屋へかへり、Ｙと一しよに午飯を食つた。Ｏの惡口など話題になつた。それから、又ＹとＭの部屋へ行き、ＹをＳに紹介した。（Ｓの妹たちは彼等の部屋へ行つてゐた。Ｓは短いＭの單衣をきてゐた。）二時頃皆で散歩に出た。宿の前には昨夜來た羽左衞門や梅幸の立つ所だつた。梅幸（洋服を着た）はＹに「やあＹさん」と言つた。「あなたもこちらですか？」「いいや僕はＡ君をたづねてやつて來たんだ。」梅幸はちよつと自分の方を見た。自分は何だか嫌な氣がして、匆々貸下駄をはいて外へ出た。ＳやＳの妹たちはもう外に立つてゐた。ちよつとＭの來るのを待つてゐると、女中が下駄ばきで午飯のメニューを

持つて來た。往來で「チキンカツレツにお椀に」などとやるのはちよつときまりが惡かつた。これは何もＳの妹たちに對してではない。女中がＳやＭにメニユーを見せてゐる間に自分はＨやＳの妹たちと宿の前の路へはひつた。右側が別莊の塀になつてゐ、左側はやはり石垣をつんだ別莊の庭になつてゐる。その小路へはひつて四人とも立ち止まつた。が、自分は手もち無沙汰だつたので少し先へ歩いて行き、綺麗な流れの橋の上へ行つた。ふりかへつて見ると、もうＳやＭもおひついて皆こちらへ歩いて來た。

テニスコートを見た。これを見るのはＭの發議だ。けふは女は一人もテニスをしてゐない。皆男ばかりだ。テニスコートの横を万平の方へ歩きながら、Ｍは「万平へ行つてアイスクリィムをのまう」と言つた。自分は三尺をしめてゐたし、素足だつたし、ひげものびてゐたから、それに反對し、Brett's Pharmacy でアイスクリィムをのまうと言つた。Brett's Pharmacy と言ふのはコートの側にある藥屋なのだ。Ｍは「ぢやよすか」と言つた。橋まで行つてひきかへし、(Auditorium の芝生には白樺の影が落ちてゐた。)Brett へはひつた。板張りの床へ下駄で上るのはいつもながら氣がとがめた。皆でココアサンデエをのんだ。自分の鄰にはＩ子さんが坐つた。Ｉ子さんもＹ子(Ｓにきいた)さんも言葉少なだつた。相客にスポオトできたへ上げたらしい、體格の好い二十七八の男が學生と一しよにゐた。二人とも運動服を着、ラケツトを持つてゐた。(自分のパナマをＳが褒めた。自分はこのパナマの手にはひつたことを話した。Ｙ子さんはパナマを手にとつて見て「上等でございますわね」と言つた。)自分はサンデエをもう一杯のみたかつたが誰も贊成しなかつた。

郵便局の前でＹに別れた。Ｙはこれから千が瀧へかへるのだ。かへる時にあした來ないかと言つた。行つても好いと答へた。

煙草屋の横をはひり、アタゴ山の方へはひつた。別莊ばかり並んだ小路だ。一二町行つた所でＭは「休まう」と言つた。Ｍは疲れ易かつた。男は皆別莊の低い石垣に腰をかけて休んだ。女は立つてゐた。それが如何にも手もち無沙汰らしかつた。五分ばかりして引き返した。西洋人の子供が二人自轉車にのり、「はい、は

い」と變な調子で言つてゐた。

往還へ出る角の果物屋へより、Sは淺間ぶだうを買つた。紫より藍に近い色のぶだうだ。「西洋人は煑てジヤムにする」と果物屋の主人が言つてゐた。買つたのはSの發案らしかつた。往還には西洋人の青年と子供とが大きい犬を二匹引つぱつてゐた。ちよつと無氣味だつた。水車の横を通り、宿へかへつた。

その晩自分は自分の部屋で食事をした。それからMの部屋へ行つた。MはSとビイルをのんでゐた。Sの妹たちは部屋へかへつてゐた。自分はSにY子さんの名を教はつた。Sは「あれをTが好きなんだ。あれもTの小說をよんでゐる。君のもRだけはよんでゐる」と言つた。MはY子さんよりもI子さんが好きらしかつた。「あの顏は特色があるね」などとも言つてゐた。そこへHも來た。それから皆で花をやるかKさんの麻雀戲をかりてやるか、どちらかしようと言ふ事になつた。が、麻雀戲はMもSも知らないので(Sは教はつてもやりたがつてゐたが)花にする事にした。花は宿のを借りた。カトオサンが持つて來た。黑ばかりだつた。

花はSの部屋へ行つてした。妹たちは二人とももう浴衣に着かへてゐた。生憎碁石は宿で碁を打つてゐる人に借りられてゐるので、その代りにSの名刺を使つた。Y子さんは小さいサツクにはひつた日本鋏を出し、Sの名刺を四つに切りながら、「何しろ鋏が小さいものだから」などと言つてゐた。三十一と聞いて見れば成程もう皮膚も荒れてゐる。しかしSには多少甘えた、親しみのある口をきいてゐた。M、S、I子、Y子、H、自分の六人に名刺の切れを分け(一枚一貫)、借り貫は軸の赤いマチにきめ、更にSが規則を半紙へ鉛筆で書いた。Mは面倒臭がつて「もう好いぢやないか」と何度も言つた。

花は一勝一敗あつたが、Mの親になつた時、Mは札を配る前にSにのぞんで貰ふのを忘れた。それをSに注意されてやり直した。やり直したが今度はまく順を間違つた。それで又やり直すと、今度は又のぞんで貰ふのを忘れた。皆可笑しがつてMにいろいろの事を言つた。Hも「Mさんはうちで花をやる時に僕等が何か

やると、生意氣だと言ふ」と言つた。するとMは怒つてHの顏を見、「僕がそんな事を言ふかな」と言つた。と思ふと花をチャブ臺に叩きつけ、「よさう」と言つて部屋へ歸つて行つた。皆ちよつと毒氣を拔かれた。Mは癇癪を起す動機を數日前から蓄へてゐた。それは第一に天候、第二に鄰室の肺病の客、第三にKさんなどと話す時にHや自分に優先される不快、第四に今日立たうとしてゐた所へSの來たことなどだつた。

僕等はつづけて花をやつた。Hは存外ふだんと變らなかつた。一番その時特色のあつたのはY子さんだつた。しかしMの氣もちを劬はる氣色はないでもなかつた。Sは「あれはM君の癖だ」と言つた。Y子さんは濃い眉一つ動かさずに「すぐにお直りなさるんでせう」と微笑してSに尋ねてゐた。いかにもそんな事には慣れ切つた態度だつた。どこか冷たい強さのある態度だつた。そのうちにSは便所へ行き、かへつて來ると、「今M君の部屋を覗いたら、よく寢てゐる」と言つた。「寢てゐても眠つちやゐないよ。」「さうかな。」――それから皆花をした。

その晚R氏が自分の俳句の惡口を言つたので、自分は怒つて、R氏の銅色の頰をぴしやぴしや打つた。しかしR氏はすまして惡口を言つてゐる。それを父や伯母が心配してゐる。そんな夢を見た。あけがたに見たので、さめたあとも變な氣もちがして不快だつた。Mの怒つた印象が夢になつたのだと思つた。

（大正十四年八月）

講演草稿

短篇作家としてのポオ

予の講演の目的は短篇作家としての Poe が他の方面(poem, *Ureka*, criticism, 講演家)の Poe と異るを説くにあらず、Poe なる一人格が短篇作家たる side には如何に見えるかを云はんとするなり。

(一) *Narrative of Arthur Gordon Pym.*

Introductory note : Richmond (V) Poe.

Nantucket——16歳ノ時——Mr. Barnard の子 Augustus(2歳年長)——Augustus は wheeling voyage に行きし事あり——Grampus(船名)——母 hystery, g[randfather] 怒る—— 1827 June の牛——

Bedford の Ross の僞筆の手紙——船底に隠す——Nantucket を離れざる故—— First mate の叛逆——

二十人死す——暴風雨が起る etc.

Note.—Pym が急死、尻切蜻蛉、Poe は detail の不確と話の後牛の incredulous ナル爲…

(二) *Pym* 談の特色

(イ) 事實らしく書いてある事

勿論どの小說も事實らしきには違ひなし。されど *Pym* の事實らしさは生々してゐる意味にあらず。乾

燥無味の事實らしさなり。こは例を引けばすぐわかる。——

Albatross は South Sea の鳥中最も大にして最も獰猛なるものの一なり。こは鷗屬なり。飛行しつつ獲物を囚ふ。子を育む外陸上に來る事なし。この鳥と Penguin との間には最も珍しき友情あり。彼等の巢はこの二種の間に協定せられし計畫に基づき頗る一様に形成せらる。卽 A の巢は四羽の P の巢に圍まれたる正方形の中間にあり。

是等の群島は既に 1762, Aurora 號の船長により發見せられたりと云ふ。1790, Captain Manuel de Ugarvido の說によれば彼は Royal Philippine Company に屬する Princess 號にのりその群島間を直航せり。1794, Spain の Atrevida はこの群島の位置を確定せん爲に航海したり。Royal Hydrographical Society of Madird の 1809 發行せる報告によれば——(報告書あり)

その少し先に、

最北なる島は南緯 52°37′24″ 西經 47°43′15″

中間は南緯 53°2′40″ 西經 47°55′15″

最南は南緯 52°15′22″ 西經 47°57′15″

この車力の車をひく如き點は Defoe を彷彿せしむ。

(ロ) Defoe に似たる點

我名は Arthur Gordon Pym. 我父はナンタッケットの海具商ナリ。我は Nニ生レタリ。母方ノ祖父ハ繁昌セル辯護士ナリ。——祖父は何人よりも予を愛したる如し。死なばその遺產予のものたるべしと思へり。祖父は六歳の時予を old Mr. Ricketts の學校に送れり。Mr. R は片腕なき變人なり。——

Robinson Crusoe の起首と比較せよ。

（ハ）然らば P は悉 Defoe 流かと云ふに然らず。例へば嵐の描寫の如し。*

夜は暗い上にも暗かつた。我々を包んだ恐しい shrieking din and confusion は到底描寫は出來ぬ。甲板は海と水平だつた。と云ふよりも寧ろ我々は聳え立つ泡の絶壁に取圍れてゐたのである。さうしてその絶壁の一部はたえず我々の上に崩れかかるのである。我々の頭は三秒に一秒も水上に出てゐなかつたと云つても好い。我々はぴつたりくつついてゐるけれども互を見る事が出來なかつた。又實際我々が轉々してゐる舟そのものも全然眼にははひらなかつた。我々は時に聲をかけ合つた。さうして希望を失はぬやうにした。

Defoe にかかる暴風雨の描寫なし。

この後間もなく私は部分的に無感覺狀態にはひつた。その間に如何にも愉快な幻が私の想像に浮んで來た。青い木や實つた穀物の波だつ原や踊り子の一むれや騎兵の行列やその外いろいろの幻が。私は今思ひ出す。私の目の前を過ぎ去つたものは皆運動 (motion) が predominant idea であつた。私は決して動かない物を空想しなかつた。家とか山とかさう云ふ物を。しかし風車や船、大きな鳥、輕氣球、馬上の人、疾驅する馬車、その外類似の動く物が無限に私の眼に浮んで來た。

此處は Defoe を去る數百步なり。Poe は內界を描く。のみならず motion のみなりと進みたる所既に後年の analysis の面目を見る。

* *Pym* の如く Defoe に似たるものもなければ *Pym* の如く Defoe に似ざるものもなし。

（ニ） Defoe ニ似タル點ト似ザル點ノ關係――兩者ノ懸絶セル矛盾

(1) Defoe ヲ學ベルハ意識的ナリ。Poe ノ評論 *Robinson Crusoe* ヲ讀メバワカル。

(2) 故ニ Defoe 風ノ所ハ Poe ガ Defoe ヲ ape シタノニテ Defoe 風ナラザル所ガ Poe ノ本質ナリトスルモノアリ。タトヘバ Arthur Ransome ノ如シ。

(3) サレド予ノ見ハ之ニ異ル。PガDを學ベルハ學ベル理由――DガPニ appeal スル所ナカルベカラズ。換言スレバPガDヲ學ンダト云フ事ソレ自身ガ、Pノ傾向ナリ性質ナリヲ語ツテヰルト云ハザルベカラズ。(理由Ⅰ)且又 Defoe 風ナルハDノ如何ナル點ヲ學ベルカト云フニP自身ヲシテ語ラシムレバ、「讀者ハ *R. C.* を目するに文壇上の作品を以てせず。D は讀者の心を一つも捉へず、唯 R のみそれを捉ふ。その wonder を行へる力はその wonder の stupendous ナル爲ニ却テ隱れて現れず。」*

即PはDの verisimilitude ニ感服シタルナリ。コハ rightly ナリ。verisimilitude ** ト云フ點ヨリ見レバ *R. C.* ガ unique ナルコトハ Marryat の冒險小説ヲ讀メバワカル。Mモ暴風雨、野蠻人、猛獸等トノ爭ヒヲ描クモ本當ト云フ氣ハセズ、ヤヤモスルト講釋師見テ來タヤウナ嘘ヲツキノ觀アリ。*R. C.* ハ然ラズ。コレハソノ手法ニヨル平氣平左。

* 十中一人 no, 五百人中一人も *R. C.* を讀む時天才所か通常の talent すらその創作の際用ひられたりとは思ふまじ。

** シカモDの事實らしさはたとへば J. Austen のやうに家常茶飯の事がらを書いた事實らしさとは全然違ふ。後年の naturalism の主張とも違ふ。御承知の通り *R. C.* ハ冒險ばかりの小説デアル。船ガヒツクリ返ツタリ、犬や鸚鵡と生活シタリ、Friday ガ出タリスル。シカモ讀ンデ見タ所市會議員ガ收賄したと云ふ夕刊の記事よりも他奇なし。

(4) 思フニ romantic 殊ニ fantastic ナル材料ヲ小説的ニ取扱ふ上には realistic ナル手法ヲ最モ必要トス〔縹渺たる case は別なり、fairy tales の如く〕。サモナイト莫迦ゲテキテヨメヌコトトナル。Lewis Monk の *Monk* ノ如し。(*Ambrosio, Rosario, Lorenzo, Antonia, Wandering Jew, Bleeding Nun, Lucifer*) 草双紙位ノモノナリ。

(5) 然レバ此處に一人の作家アリ。romantic ナ性質ニ從ヒソノ種ノ小説ヲ書カントス。而シテソノ小説ガ

poetical ナモノナラズシテ實際ソノ境ニ望ムノ感ヲ抱カセンコトヲ期ストスレバ〔附記一〕、ソノ小說家ガ範ヲ Defoe ニ取ルハ必シモ不思議ナラズ。予ハコノ見ニヨリPガDヲ學ベルハ自然ナルコトヲミトムルナリ。而シテ一見矛盾セル如き二ツノ側面モ、實ハ銀貨の兩面ノ如ク不卽不離ノ關係ニアリト存ズルナリ。

(6) 而シテ Poe ガ短篇作家トシテノ成長ハコノ realistic method と romantic material との調和ニアリシト云フモ過言ニアラズ。換言スレバ彼ハ彼ノ analytical intellect ト poetic temperament トノ鍊金術ニ苦勞シタ作家ナリ〔附記二〕。唯 Defoe ヨリモ鋭敏ナ感受性と Defoe よりも逞しい理智を有せし彼はその realistic method ニ於テハDの外ニ踏ミ出シタリ。

(7) ソレハ暴風後の心理を敍シタル所ヲ見ルモ明ナラン。彼ハ此處ニ外界ヨリ內界ヘ眼ヲムケタリ。ノミナラズ眼底ニ浮ブモノ悉 motion ヲ有スト云フ如キ analysis サヘモ施シ居レリ。コレPノ realistic method ガ external realism ト共ニ psychological realism ヘ向ヘル最初ノ一聲ナリ〔附記三〕。

(8) Poe ノコノ傾向ハ彼ノ諸作ヲ通ジテ明ナレド今例ヲ擧グレバ、

1 *Pit and Pendulum.*

2 Auguste Dupin を主人公とせる探偵小說
Purloined Letter.
(dirty blue ribbon——card——racket——brass-knob)

3 *A Descent into the Maelström*
(1) 大は早く小はおそし
(2) 球は早く他はおそし
(3) 圓筒はおそく他は早し

(9) されどその最も顯著なるものは *The Imp of the Perverse* の Thema なり。病的な心理に立入つたもの。

Imp of Perverse

諧謔、蠟燭

The Tell-Tale Heart

v ── 眼 vulture ニ似タリ (pale blue with film).

watch が cotton につつまれた如し

The Black Cat

(10) コレラハ detective stories ナラズ。Sherlock Holmes ト異ルハ彼ノ理知ト情熱トガヨクソレラヲ深メタルナリ。

(11) 予ハＰハ ardent aspiration と cold intellect との特殊なる mixture なりと云へり。彼が近代の大陸殊に佛蘭西に反響多かりしはこの點にありと信ず。近代の佛蘭西文學をつくれるものは二人の American なりと云ふ。且又 Poe の傑作は Baudelaire なりと云ふ。Baudelaire 全集の８中３は Poe の飜譯なり。Ｂを動かしたるものは何ぞや。予はこの理性と情熱との奇怪なる結合なりと思ふ。(美をみとむ、didacticism を排す、mystery を愛す、*Les Fenêtres*, express 出來ぬものはない、Lemaître の言を借りれば lunaire な風景を描くにせよ。)

彼等は共に欺かれるには餘りに聰明であり且欺かれずにゐる爲にはあまりに落莫たる人生に堪へ得なかつた人であります。

L'Invitation au Voyage の中に、"rêves, toujours rêves."

All that we see or seem,

Is but a dream within a dream.

さうしてこの心境は獨りPがBにのみ共響した訣ではありません。*To Helen* の詩人、*The Masque of the Red Death* の作者の心境は同時に又我々の心境の一部をなす事であります。

（大正十年二月五日東京帝國大學に於ける講演の草稿）

附記一―〔餘白ニ〕ココに romantic temperament ある作家あり、且又その作者は鋭き理性を有す、大體の case は幽靈を見るより早く枯尾花を見るとせよ、その作家がその romantic temperament に從ひ小說を書かんとすれば――

附記二―Poe は keen intellect ノ所有者ナリシコトヲ證明セバ予ガ見ハ確ナリ。然ルニ彼ノ intellectual ナリシコトハ作品ヲ見ルモ明カナレド、彼ノ criticism ノ至ル所ニ作品ヲハナレテ技巧の本問題ヲ論ジテキル。

〔Plot, inversion, 伏線、長さ、literature's harmony and counterpoint.――*Self-conscious.*――

"I appeal to the greatest poets of to-day whether it is not an error to assert that the finest passages of poetry are produced by labour and study" (*Shelley*)〕

彼は作品を作るに止まらず、その作る經路を知るものなり。彼が Hawthorne 論中すぐれた作品は或事件を作つて後 effect を生まず、effect を生む爲に事件を作ると云ふが如し。(Totality of effect.) 且この intellectual ナル所ガ彼ト Hawthorne トヲ別ツ點デアル。*Birth mark* ノ如シ。

附記三―Poe の作品を通覽すれば *Shadow, Silence, Masque* の如きは最も彼の詩に近きものであり、それが *Berenice, Morella* 等から *The Fall of the House of Usher, Assignation* と漸次小說的なものになる。この手法上の realism は後者に近づくに從ひ顯著となる。そは自然なり。

ポオの一面

Introduction

1) Poë　General Poe (David)

　　David Poe

2) Edgar A. Poe

John Allan (Richmond) (tobacco)

Bostonian

Rufus Griswold ノ評 : pedagogue vampire

{1809 正月　Boston に生まる
{1840 十月　Baltimore に死す

＊

(1) Poe ハ critic トシテミトメラル

1835 : 26歳　{Southern Literary Messenger
　48雑誌　{Burton's Gentleman's Magazine
　　　　　{Graham's Magazine

(2) 5 or 600—200—86 (Stedman, Woodberry)

(3) Specific & abstract.

相對的：ab. ハ晩年に多し

(4) Specific：惡文：殊に superlative ノ濫用。

La Vie Littéraire トノ比較

W. M. Payne ノ評語（*A. Literary Crit.*）

(5) 例——美：Horne's *Orion.*

醜：William Ellery Channing.

(6) 惡口多シ：Lowell ノ評語：prussic-acid（青酸）

(7) ソノ理由——時代 { Cooper & Bryant, Irving.
Longfellow, Lowell, Whittier, Hawthorne, Emerson, Lowell.

——His Æstheticism : France

——His Method : [*Poetic Principle*]

(8) His Æsthetic ハ彼ノ ab. ニ就イテ見ルベシ。

代表的ナルモノ三種。——

(9) 特ニ *Philosophy of Composition* ニ就イテ述ベン。ソノ理由——包容的。

(10) *Ph. of Com.* ハ異色アル論文ナリ。

"*Raven*" ノ創作假定ヲ說明セルモノ。

Poe の言。

正確サ加減——intention.

Baudelaire の言葉二つ

(11) 詩ハ pleasure ノ爲ナリ

Letters to Mr.——(1831—21歳)

Pl. ヲ immediate object トス : Science : Tr.

(12) Pleasure ハ美ヲ感ズル所ヨリ來ル

The most intense, the most elevating, the most pure ハ美

又 *Poetic Principle* ニテモ□(原)ト言フ

〔didactic 排斥〕

(13) Art for art's sake の先驅

(14) 更ニソノ美ヲ表現スルニハ如何ニスカト言フニ totality of effect ヲ必要トス

long poem

short poem

(15) 散文ニハエルス *Robinson C.*

(16) 如何ナル美ヲ最上トスベキカ。tears ヲ誘フモノ卽チ melancholic

Baudelaire { ardent and sad / a little vague / opens the way to the imagination }

(17) Beauty + strangeness

Bacon の言葉——Alphonso Smith (海大、Vir.)

(18) 大體カクノ如シ。*Ph. of Com.* ニヨル。

(19) 果シテ Poe ハカクノ如ク詩作セリヤ否ヤ。予ハ多少ノ誇張アラズヤト思フ。

(20) But コレダケハ動カシガタシ。即チPハ作品ノ craftsmanship ニ鋭キ目ヲ有シタル事。

"It is the curse of a certain kind of mind, that it can never rest satisfied with the consciousness of its ability to do a thing. Not even content with doing it, it must both know and show how."

(*Marginalia*)——[Cryptography]

(21) ココニテモウ一度 specific ヘカヘル。Since, plagiarism ノ非難。Hawthorne & Longfellow.

例 *The Haunted Palace* (1839, April)
The Beleaguered City (May)

(22) Hawthorne 論ハ最モ有名ナリ。ソノ理由：Hawthorne ト彼トノ類似、彼ノ短篇小說論

(23) 彼ノ短篇小說論：短篇ニ限ル

詩ノ rhyme ハ truth ニ至ル邪魔、terror, passion, sarcasm, humour 等ハ短篇ノ目的、only 美ヲ目的ニスベカラズ。

France——Bierce ノ先驅

(24) コノ truth ノ問題ヨリ verisimilitude ノ問題起ル

Poe ノ *Robinson Crusoe* ノ批評

The Adventures of Arthur Gordon Pym.

The Journal of Julius Rodman.

The Fact in the Case of M. Valdemar.
A Descent into the Maelström.

(25) カカル Poe ノ評論ノ constructive ナルハ問フヲ待タズ、殆ド作法指南書ナリ。

Barnaby Rudge ノ批評

1) prospective ＼
2) retrospective ／ technician

(26) 又 Poe ハ彼自身ノ method ニ忠實ナル故、彼ノ批評ハ彼の作品への introduction となる。

(27) *To Helen.*

Ulalume.

Annabel Lee.

The Pit and [*the*] *Pendulum.*

{ *The Imp of Perverse*——verisimilitude.
{ *The Tell-tale Heart*——psycho-analysis.

The Black Cat.

(28) Originality, totality of effect, didactic 否定、plagiarism ダトカヲ hobbies トスト言ヘル。

[Killis Campbell Tex. Ph. D.]

(29) 1909 ノ大典 [ロシア]

{ Baudelaire & Mallarmé
{ Spielhagen

Emerson——Henry James

Dickens

(26) 死ニザマ [Baltimore]——Griswold

"E. A. P. died. This statement will startle many but few will be grieved."

The Authors of America.
A Critical History of American Literature

Annabel Lee 他人ノ手
The Bells in type

墓。弗 1000 ばかり。〔貨車〕

1865—死後 16 年 380 弗
1871（六年） 587 弗

Lowell——残念乍ら出席出來ズ（四行）
Bryant——御招待難有存候
Whittier——原則として晴れの場所に出ぬ
Longfellow——出席出來ヌ
Walt Whitman——Good, Grey Poet（*Democratic Vistas.*）

（昭和二年五月新潟高等學校其他に於ける講演の草稿）

小說の讀み方

(一) 題して小說の讀み方と云ふも或は批評家の資格と云ふを妨げず。何となれば讀者は或意味に於て批評家たるべきを以て也。故に存外大問題なり。

(二) 小說と云へど內容は千差萬別なり。*猶瀨戸物と云ふも丼あり皿あるが如し。文學の標榜する所が何と何で、表現する題目の範圍がどこまであつて、表現する手段に幾通りあつて、將來の文化發展と共にどこまでそれが擴るか、——と云ふシステマティックな研究は、今までもなかつたし、これからもなからうと思ふ。それ程 complex なり。たとへば一九の〔凡三字缺〕、イリアッド、西遊記、罪と罰。故にその差別を認めざるべからず。卽その作品の立場に自分も一度は立たざる可らず。然らざる批評家は杓子定規なり。たとへば一九に壯嚴なきを攻め、イリアッドに諧謔なきをせめ、西遊記に眞なきを攻め、罪と罰に神韻縹渺たる趣なきを攻むるが如し。その出たらめなる事論を待たず。是に注意すべき事はその差別を認むるを個々の作品に就いてなす事なり。作者自身の思想傾向の變化。フロオベエル、ストリントベルク(自然主義時代、インフェルノ時代、マアテルリンクの影響をうけた時代、グスタヴァス・ヴァザ、ロダン。

(三) 旣に丼は丼、皿は皿と認めたりとせよ、その作品に於ける完成を見ざるべからず。*(皿の用と形、卽內容と形式)つまり今までは內容をディフェレンシエエトしたのなり。今度はそのディフェレンシエエトされた內容が或形式によつてどの位完全に表現されたかを見る。卽個々の作品に對する形式的考察なり。形式とは何か。「人生の爲の藝術」派の形式輕蔑論、その概略。されど形式は文章(リズム)→(スタイルある文章と名

文)→技巧→觀照(これは繪畫彫刻音樂にも云はるべし、唯マイナア・アアトは例外とす、形式のみ)。卽形式と內容とは fuse する事となる。唯作家の主觀を通過して自然人生を再現する方法なり(白と白墨)。故に形式の考察は同時にディフェレンシエエトされた個々の內容が depth の問題と變化する事となる。淺薄なる內容に深刻なる形式なし(藝術の爲の藝術)。是に於て茶碗相互を比較して採點する事を得(全然同一傾向の作品少なけれども)。サラムボオとリツトン或はダンヌツィオ、モオパスサンとクラカツソオプ。

(四) さてディフェレンシエエトされた內容相互の關係、評價の問題なり。卽茶碗と丼といづれが瀨戶物として最も好むやの論、各人の自由なれど(皆わかる人は趣味廣き人)勿論その自由を back すべき理由なかるべからず。その理由なくして妄に甲を擧げ乙を貶す(下戶と上戶)は暴擧なり。又その好きな理由は多く相對的で絕對的ならざるべし。その理由は(1)時代に依つて違ふ(希臘時代、現代)。(2)人に依つて違ふ(ケエベル先生、私)。しかしそれは飽くまでも好き嫌ひの問題で上下優劣の問題ではない筈。…のみならずその好きに偏する時はその傾向の作品だけしか分らなくなり易い。その上その傾向の作品自身にも高下をつける事が困難になり易い。ロオランとアナトオル・フランス。

(五) (a)作品個々の立場。(b)立場を認めた上での內容形式の問題。(c)その問題を解決した上で個々の立場の比較。最後の問題に關しては予自身もう少し立ち入つた見解あれど省略する事とす。(予は最初批評について云ふと云へり。されどこれは創作についても云へると思ふ。卽表現能力を加ふれば可なり。)唯この立場に新しく深く、廣く觸れた人を文藝上の聖人と云ふ。

(大正九年五月東京高等工業學校に於ける講演の草稿)

内容と形式

A 題ノ因縁及ビ説明。

1 Literature——文字を ex. の means とする。

Art
- 畫 Colour
- 彫 Block
- 音 Sound

2 Form and Inhalt. その意味、及び relation, 又それらの adaptation.

3 Popular meaning——紅茶々碗。

4 道ばたの木槿の例。

Form——五七五
- 廣い form. 一般の form. 約束。
- 狹い form. 句、歌、詩、小説ノ form.

Inhalt ——Meaning (moral ハ問ハズ。後ニ説カン。)

5 Inhalt の説明——F+f. (散文 or 他の語形 or 句ノ形ヲカヘレバ變ル。)

6 Form and Inhalt の相關々係——葉卷、紙卷の例。

7 Convenience 第一。水湯、畫模様、動植物。

8 Repetition of our definition.
- 五七五の principle
- meaning (total)

novel 然り。drama 然り。

（以上第一段）

B　Inhalt 論

1　First mistake ——Inhalt: a moral thought.

木樺——月並
馬琴——小說上の勸善懲惡
Ibsen, Tolstoi 等の drama, novel の類

2　Second mistake——Inhalt: a thought or concept religious, political, economical, historical, scientific, etc.

3　然ラザル所以(Second ハ First ヲ含ム。)（脫帽、禁煙）

(1)　Thought ハ感銘ヨリ abstract シ得ルモ感銘ハ thought ヨリ reduce シ得ズ。

(*Crime and Punishment*, *Crainqueville*, 藤十郎の戀)

(2)　Thoughtless ノ作品アリ。

（*Salambo*, *Midsummer Night's Dream*, お絹とその兄弟）

故ニ thought ナケレバ Inhalt ナシトハナラズ。且 thought ハ作品ノ價値ヲ加ヘズ。（價値ハ後ニ說カン。）社會主義ト文藝。好惡——must ナル可ラズ。

4　Third mistake——Inhalt ought not to comprise a thought.

A　Thought アル作品ハ上述ノ如シ。（岩野泡鳴）
B　印象派の movement との比較。

5　Inhalt ハ F+f ナリ、whole ナリ。

附言。一句ノ場合モ然リ。「沈默ハ金ナリ」「太陽ハ金貨ノ如シ」「時間ハ錢ナリ」「月ハ銅貨ノ如シ」

(以上ヲ第二段トス)

C　Form 論(principle)

1　First mistake——Form：比譬(明喩、暗喩ヲ問ハズ)

- 沈默は金なり：沈默は尊い
- 頰が薔薇のやうに赤い：頰が赤い

2　Second mistake——Form：技巧(比喩ヨリ more complex な trick)

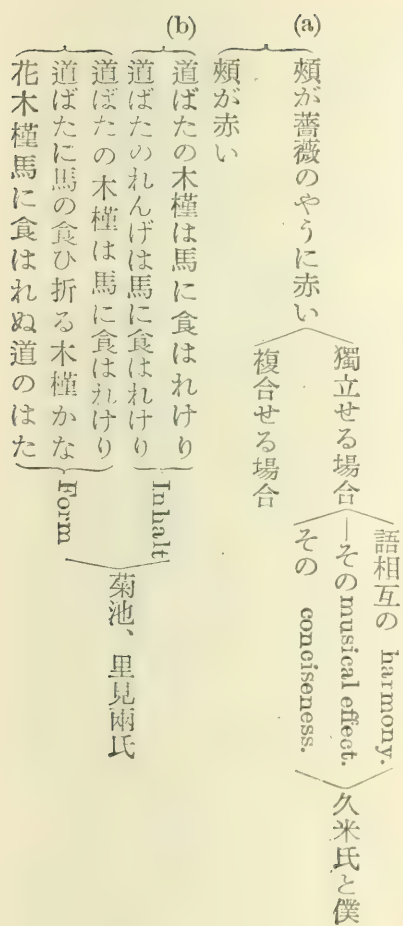
- 有馬山猪名の笹原風ふけばいでそよ人を忘れやはする(古今集と萬葉集)
- 太陽が欲しい。——光が欲しい。闇がいやだ。——銀とプラチナ。

3　Form とは文章を支配する principle なり。

(a)
- 頰が薔薇のやうに赤い —— 獨立せる場合
- 頰が赤い —— 複合せる場合

　{語相互の harmony. / —その musical effect. / その conciseness.} —— 久米氏と僕

(b)
- {道ばたの木槿は馬に食はれけり / 道ばたのれんげは馬に食はれけり} —— Inhalt
- {道ぼたの木槿は馬に食はれけり / 道ばたに馬の食ひ折る木槿かな / 花木槿馬に食はれぬ道のはた} —— Form

　—— 菊池、里見兩氏

注意。形式と內容との不可別。殊に句の如き短詩形は然り。

(c) 小說、戲曲デハ、字ト字、文ト文、囘ト囘、全體ノ組ミ上ゲ方。

(以上ヲ第三段トス)

D 價値論(outline)

1 内容の價値(菊池氏ノナラズ)
  形式の價値

2 形式の價値

(a) Harmony の整つたモノ。

(b) 句や歌より小說戲曲は複雜なり。

(c) 最も不變なる部分：Milo の *Venus*, Rembrandt の夜番。

(d) But 固定せず。固定せるは型(abstraction)。Aristoteles の *Law*, Wagner.

3 内容の價値。

(a) Religious, political, etc. の價値ヲ除ク。(ヨブ記、*Arms and Men*)即 Artistic Wert. (所謂詩的ならず。)(Dostoefsky の *Karamazow*.)

(b) 予ハコノ點 l'art pour l'art なり。

(c) ソノ標準ハ何處ニアルカ。Norm ハイロイロアラン。Tragical, comical, lyrical, etc. —— ソノイヅレニテモヨイ。文藝ハ廣シ。笑ト淚、眞面目ト冗談、Sの悲とMの喜、武者と宇野。

(d) 文藝殊に小說戲曲は人間生活の表現なり。それだけ一つの作品の Inhalt W. を構成するものも complex なり。夜の宿の言葉。吾人を見よ。善惡喜怒、religious, political, etc. の思想の一切を盛る。Tre-

mendous life! 眩ぜんとす。又翻つて小說戲曲の傑作を見るに然り。この前には art for art's sake は消滅す。予は art for art's sake の論者ならず。

4 コノ兩價値ノ豐ナルモノヲ傑作ト云フ。コノ傑作ヲナスモノヲ天才ト云フ。

天才の部分的 recognition— {Windelband—*Präludien* / Campania} —Shakespeare, Rembrandt, Beethoven.

—New 形式と New 内容— —俗物— —David, Berlioz—Your own sake!

（大正十二年?）

手帳より

一

3 weaknesses in the

i) desire for worldly powers < baseness / cowardly

ii) sensuality

iii) indolence

Don't forget these are my death-enemies !

＊

〔大正五年〕

〔一月十六日〕 弟、岸と共に來る。晴日。

〔一月十八日〕 久米、土屋來る。大龍寺へゆく。夕日。夜ベルリオをよむ。興奮する。

〔一月十九日〕 Fの事を考へる。Egoism of the unhappy.――夕方月の下で犬が二匹ねてゐるのを見る。Artist の病に三つある。(i)いゝものの模倣。(ii)時代にのる事。(iii)人の惡作に對して安心する事。――それ以上は病でない。Artist にとつてである。

〔一月二十日〕「鼻」をかき上げる。久米と成瀬と夜おそく Café Lion ではなす。かへりにCの事を考へる。かはいさうになる。

〔一月二十二日〕成瀬、トルストイを送る。…三枚。夜 Berson(Miss) & Ore(Mr.)の concert へゆく。Ginza Café で宮島の死んだ話をきく。死と Kunst と。—Nur Kraft ist der Kern der Kunst.

〔一月二十三日〕昨柳先生の所へゆく。それから八田先生へゆく。留守。Voltaire を買ふ。山本へ手紙を出す。Fを思ふ。Tod の問題が頭へこびりついてゐるらしい。何を見ても Tod ばかり考へる。

〔一月二十四日〕小説をかく。Cを思ふ。さびしくなる。

〔一月二十六日〕今まではぼくは彼等の愛の中に生きた。これからは彼等をぼくの愛の中に生かしてやる。たとへその境に彼等がぼくをにくみ、ぼくが彼等をにくむ事があらうとも。
海軍士官の話をかきつゞける。
間歇的にくるYの memory に壓倒された。

〔一月二十七日〕夜山本から平塚の入院をしらせて來た。その時己の心には victor の感じがうすいながらあつた。人間は同胞の死をよろこぶものらしい。恐しいが事實だ。上瀧へ手紙を出した。

〔一月二十八日〕　平塚を見舞。殆何事もなかつた。Spitzen だが。犬が二匹共犬ころしにころされたらしい。かはいさうだ。おやぢがふさぎきつてゐる。Fを思ふ。

〔一月二十九日〕　久米から赤門雜誌の事をきく。成瀨、久米とパウリスタへゆく。Art の monism と parasitism についてはなす。矢代をとふ。夜熱が少しあるやうだ。おやぢが犬のしんだのでしよげてゐる。

〔一月三十一日〕　甲の前で乙をほめるのは甲が全く乙をしらないか or 乙に感心してゐる時に限る。甲が乙を輕蔑してゐたら決して乙をほめない。

日と烙印と。

Fを思ふ。

＊

他人に與へられし injury と伴ひて起る自己强大感。

＊

低き動機の否定による善人はそれを高調する惡人に劣る。

＊

一圓やつてよろこぶ顏のみられた孫が大きくなつて自分の小づかひではよろこばせる事の出來なくなつた(しかも愛してゐる)祖母のさびしさ。

＊

最大の不快は現在の諸制度の缺點より來らず。その制度の止むを得ざるを認めてしかもその缺點を發見するより來る。

*

〔偸盗〕

兄弟＋女

始めは兄が弟を殺すかの如くかき女をころすに完る。

"There is something in the darkness," says the elder brother in the Gate of *Rasho*.

兄は貞操を肉體に限らんとす、弟はそれを精神に限らんとす。

この葛藤 — bodily にすれば明なるも難點多し、spiritual にすれば不明なるも moral value あり。

兄と女との關係を depict する scene. ——朱雀門(?)邊偸盗の集合する光景。(女は覆面にて出で兄と弟はそのまま出す。) 兄のそこへ赴くみちより書出す。

中に comical scene と abstract allegory と入れんとす。前者は狡猾なる neben の人物によりて起され、後者は老人によりて起さる。

發端 —— 老人の盜賊。Dostoefsky の「虐げられし人々」の發端をみよ。

病人及弱者の egoism を書かんとす。

兄弟の enmity 及その肉親の relation の weak なる點。

人身賣買の問題。

牛頭大王の夢。或人の子が痘死す。卽廟をこはす。

關帝廟。道士あらかじめ毒酒を與へて無頼に帝廟を罵らしむ。利益分配爭ひよりわかる。

皆、神の無を語る。婆來つて否定す。(There is something in the darkness.)*

朱雀門上の火。

*魔術——Old witch. Hand in the fire. "What is it" one asks. "What is in the darkness" is the reply.

弟は sly.——放免となりて兄をつかまへに來る。Fraternal love の explosion.

Witch の所へ二人の仲を separate する事をたのみにゆく。Witch は女の母。

妻爭ひも入れるべし(刀とか玉とかをとつたものの妻になると云ふ所)。

女がにげてくる。男がおつてくる。それをたすける。それが緣になる。さてあつて見ると女は前の男と一

しよになつてゐる。

婆さんの所へ thief はいる。Thief 婆さんにゆるしてもらふ。外へ出ると Frau の放免に追はれてくるのにあふ。さうして自分をとりに來たのかとおそれて始ちよいとかくれる。

*

牢中の女のくれた花をみる件、——即すくふ前に女を見そめる事を入れよ。

屋上の鷄　　布すだれ　　筏ひき舟
鵜船　　井戸　　岸に一人
渡船　　太刀持　　水に三人
牛車(俵をつむ)　　うつぼ　　はなれて水に一人
乞食　　鎧函持　　ヱボシかさ
屋上の石　　主人　　四艘つたぐ
山法師　　蓑の下人
路傍の卒都婆塚　　　　築地の門
橋下の童子釣す　　　　窓にひさし戸
洗馬(三人の下人)　　　　下はあじろ
鼻をたつる人　　雨がはの人
薪をつむ馬　　扇の間より見る人　　およぐ子兒
柳　千鳥　　棧しきに傘さして見る人　　田中のかかし

鳥居　　下人のさし傘　　米俵をつけた牛
　　手に下駄をはくゐざり　　大きな扇
土まんぢうに卒都婆四本　　井戸にふたあり
　　俵をつむ牛

石塔婆二本(兩側)
圓頂石塔
石垣の上にある

*

すずしの生絹の水干をきた童。
茱をうる販婦(ひさぎめ)。 茱はいらんかな。——すゞな、すゞしろ、あしなづな、せり、はこべら、みつばせり、——茱はいらんかな。
播磨の國飾磨の里。
卯花のかざみを着た女の童。

*

大友宗麟—— Iconoclastic novel.
畫家良秀——禮拜不動。
男地藏—— Poe の *Domain of Arnheim.* 鷗外の傳記的に hard にかく。
Assignation (Poe)——Venice——日本使節（筋未定）。

*

Æstheticism の公卿が lepra にかかる Thema.

*

殺人に interest ある役者がつとむる殺人場面。――徳川時代にして書け。

二

顧眄

1 先生　　5 第四新思潮時代のスクラップ(松岡の寐顔)

2 志賀氏の家(松江)　　6 鈴木三重吉の first impression (夏)

3 師走(山田との原稿いきさつ)　　7 成瀬の手紙

4 第三新思潮時代のスクラップ　　8 ……

*

信房　イセティシストにしてレプラなり
　　　スケプティックなり ＞ 否定家なり

義信法師　ファナティックにして肯定家なり

義信の戀人なりし女房

*

Confess しても猶 death を恐るる僧の心理。(即 punishment の horror と death の horror との別を知りし horror.)

死の horror の爲に自ら死す心理。

*

紅茶――戀人の姙娠を墮胎せしむる話。

人面瘡――自分の顏が向うの膝へ出る話、役者立廻りの時膝をうつて怪我す。

素戔嗚尊――1) Revolt. 2) Maturity. 3) Elder.

日本武尊――(1)運命の輕蔑。Pride.（熊襲）
　(2)運命に祝さる。（燒津）
　(3)運命に呪はれつつ歿る。（姫）
　(4)運命の勝利。（伊吹山）

寫樂――芝居に life を見、life に芝居を見る。

鷗外氏――歌日記。（二つの生と一つの死、動植物の生と人間の死。）

畫壁――如夢幻泡影。

曾呂利新左衞門の死――洒落のめしつづける爲の死。

*

探偵――聯想實驗法の衝突する例。

川舟――芭蕉の死に對する門弟の態度（花屋日記）*
　(1)去來　壓迫去る感　　(2)丈艸　利己的さびしさ
　(3)乙州　悲哀享樂　　(4)支考　一度師の死をねがひし悔恨
　(5)正秀　芭蕉門下なる事を師の柩と同舟する事によりて示さんとする心
　(6)惟然　今度は己の番だと思ふ心　　(7)其角　女に對する欲望

* Accursed objectivity＝支考

第二世之助の話——最よき妻は貞淑なる娼婦。
業火燃える時のみ口說くに成功す。
口說きたき女ほど口說く氣せざる矛盾。

＊

(1)大殿は地獄變の屛風と共に娘を返す約束をす。
(2)良秀始めは娘を忘れず次第に仕事に熱中す。
地獄變。(右二ケ條書き加へよ。)

＊

男、女を愛しその女他の男と結婚す。蓋女男を愛ししかも男の愛を知らざる也。後、男嫉妬の爲に夫を殺す。女はじめて男の love を知るの Thema.

＊

利休のアンニユイ
新井白石—— These＋Antithese.
荻生徂徠——紫雲
賴山陽—— as man.
女が男だと思はれてゐる話—— Saint Maria.

＊

日蓮の受難
傘張——俗人　　○放下師——一切を滑稽化せんとする世間智
若き禪僧——傍觀者　　○漁夫——信者

○良寛——反對者　　童子——Joy の人格化
侍——半信半疑　　○時宗——爲政者
○最後の天變

*

Physical world の psychology に對する influence.

*

病人と看護婦、——看護婦が蠅をつかまへると病人が寐ごとにいたいと云ふ話。

*

女男が己を戀せるものと思ひ夫にそれをつぐ。夫男と絶ゆ。女後にそれを悔ゆ。而して己のその男を戀せるを知る。

*

聖母マリヤ吉原の女郎となる話。——道中の途中より昇天す。

*

自分の尊敬する人の自分に對する評價を當てにして自信を保つてゐる男。相手の評價が實は negative なるを知ると共に自信を失ふ。

*

日本の歷史にもクリスト出現の當時奇蹟ありしを(或はオリンプス時代ありしをも)語る文書。——南蠻僧の手に成るもの。

*

うるがん伴天連京都へ入る話。——美しき惡魔の告白。

*

姦通されし夫とその妻(姦夫を憎める)とその姦夫(夫を憎める)との triangle. ——最後に夫、妻と姦夫とを殺す。

*

村の習俗として姦夫姦婦を罪す(古代)。

*

今昔の本朝六(396)——女男に對する love. 男—蛇。觀音殺蛇。女—失戀。

*

Enemy.——女(妻)夫の死後その情婦たる疑ある女にその祕密を明させんとす。然るにその女實は夫を love し detest されしものなり。その爲反つて情婦たりしものの如く裝ひ妻の心をやぶらんとす。

*

芥川と龍之介と分れる夢。——馬上龍之介を落とす。

*

舌だけ活きてゐる話。——夢(テーマ未考)。

*

李太白酒をもらひ一生涯の 1 moment をやる話。

*

ファウストの序曲を模すべし
Every man (morality) の狂言化
踏繪の話の短篇
古侍の元祿武士評

Love. ——Interest, love of conquest, practical bearing, sex.

*

〔妖婆〕

Magician 女を trance にし、その所見を語らしめ書く。（自己がやればさめて忘るる故。）女、戀人あれど magician の離さざるを惧れ男と計りて trance を裝ひ男と一しよにせずば魔術師死すべしと云はんとす。さて magician 女を trance に導くや女之に陷らざらんとして得ず。遂に陷る。覺めて後 magician 悵然たり。女家へかへれば程なく魔術師より手紙と金と來る。女の trance に語りし所語らんとせし所と一致せるなり。

*

或 mysterious なる園遊會。mask せる男女の群。印度人の magician 月を廻す。孔雀を吐く。

*

衣服と人と離れて活動す。

*

Crhist. ——果物賣の小娘。

*

牧師の林檎、林檎の中に Christ あり。

*

敵をとりひしぐ、クリスト敵に似たり。

*

マリヤ、クリストの love story を信ずる信徒の傳道。

*

——心中。かけ落ちの途中、女 rape さる。男を殺す。(Story beyond the sea. —— *French Mediaeval Legend.*)

*

娘の後夫知らずして前夫の僕を sebastian にせんとす。娘夫にこひてゆるしを得、他の囚人に代ふ。他の囚人は前夫なり。前夫死す。娘夫の僕を殺さんとして得ず。共に泣く。後夫來る scene.

*

Los Caprichos.

齒——裝飾品

靴——人皮

何を書いても一度前に書いたやうな氣のする小說家の話——過去身

水夫の妻——老乞食

*

長崎でお菊さんに遇ふ話。

*

作家が已の作品の immortality を得る爲に soul を devil に賣る話。——紫式部 or 羅貫中。

*

精神的に冒險的精神つよきものあり、これをデカダントと云ふ。——猛獸使。

*

人は苦難に處する case すら第三者の地に身をおく程茶氣を有す(己が死ぬ時を dramatic に想像する如き)。

*

二人の肺病患者の話。——妻に「お前の病氣はもう好いよ、すぐ癒るよ。」And さびしき氣。Egoism. 海岸でもう一人の肺病患者に遇ふ。

*

自然に因果存す、されど因果的なるが故に自然ならず。(必然性は偶然を寛容する所に生ず。)

*

The Way of Destiny. ——踏切に汽車
- 來らば
- 來らずば
- 待つ事ありて來らば

*

本田子爵の mesmerism.—— Wonder を求むる人間の心。欺かれたい——欺かれぬ時の失望、アンニユイ。

*

男を飜弄して scandal を得ざる女——淫婦
その反對——愚婦(so called 淫婦)
妲妃のお百より毒悪にして誰にでもよく思はれる女と contrast して書くべし
女の云ふ事を男の云ふ事より true とする世間

*

或女男に身を任かせず、ごめんなさいと云ふ。後ちよいとした時にも同じ emphasis でごめんなさいと云ふ。男怒る。

春の彼岸に山へ入れば木と夫婦になつてしまふ(出雲の神々)

*

髪赤の女

外の女の lover を戀ふ

その戀をすてる時髪黒くなる

木との結婚をする爲山へはいる

聲

狐罠

(1)長者の家

(2)同庫

(3)山の中

姉男を戀ふ　男妹を戀ふ

姉石神の婆にそのかされ妹を木の妻とす(手段を考)

姉又男を口說く　男却く

姉婆より代れば妹を助くと云ふを聞く　代らんとす

Climax　姉の死

(1)妹を木の妻とするまで

(2)男に却けらるるまで(代る suggestion)

(3)妹に代りて死するまで

三

女Aの名を利用してBとあひびきす。女とAと未知。女よそにてAに叮嚀にす。その恩を報ぜないと變な氣がしたからなり。

女始めて丸髷に結ぶ。影が自分でないやうな氣がする。

*

女城を守る。男攻む。女男に惚れ妻としてくれれば城をひらくと思ふ。男許す。一夜の後男女を磔刑にす。

*

兄弟、婢を愛す。兄結婚す。婢不貞。弟、その不貞の愛を拒ぐ。姉、弟を憎む。兄、弟を劬はる。弟、姉の憎に苦しみ兄の愛に苦しみ自殺するに了る。

*

姦通の case
(1) 夫より卑しき人格の Frau
(2) Frau より卑しき人格の夫
故に(2)の夫が(1)の夫を同類と思ふは僣越
(1)の妻の(2)の妻に於けるも同じ

*

ランデヴウ。停車場。女來る。男見る。女男を見ずまづ化粧室に入る。男微笑す。來る。鏡中にて會ふ。

*

人力 or 自動車、速力早くなりし如し。氣づけば唯狹き路に入れるのみ。

*

クリスト賣春婦の梅毒を癒す。——賣春婦自身の話。

*

女と落合ふ。落合ふまで捉はれたる感じ。落合はんとして遲れ女に遇はざる時の loneliness.

*

夫婦の愛が漸く薄くなる時、夫婦別れをしなければならないやうな事情が起る。急に二人の愛が深くなる Thema.

*

子女と食つく。父女を子に醜と云ふ。後、人に美と云ふ。親の嘘(どちらが嘘か？)——*Pathos.*

＊

Love-letter を石垣（神社の）にかくす男。

＊

夫婦あり。夫今までの love affair を皆妻に明かす。故に平和あり。偶然最も innocent な love affair (sacred な氣がする故）を妻にかくし置きしがその發見する所となりその爲夫婦間に gap を生ず。——*à la Goncourt.*

＊

日本 aeroplane 發明の事。

＊

朗讀中少女の顔を見てどぎまぎす。(Heine, XI, Prose Writing)

＊

海水浴場にて女の着物をぬすむ。女裸で出られず。罪名不法監禁罪。

＊

電車中女の尻を抱く。その刹那これが友人の尻であれば好いと思ふ。

＊

電車中老婦人に足を踏まれ怒つてその足をける。老婦人「この人は私が誤つて足を踏んだのにわたしの足をけました」と演說す。

＊

人をのみ相手に生くる男。家にかへると wooden face になる。人中へ出ると lively になる。Symbolic に書く。

西太后西洋曲馬を見るの記。

*

或男姦通せる婦人に飽きこれと離れんとして亭主にアノニマス・レタアをやる話。

*

甲、乙にこれを讀んでくれと云ふ。英語なり。乙よむ。乙は英語を學びし事なし。自ら唖然とす。――*Medium.*

*

×情死――小春治兵衛の如き case に治兵衛反つて Frau と心中する Thema.

*

×二つの情死――一つは成功し一つは失敗す、love は同じ or 成功せる方少し。

*

現在關係しつつある女と初めて逢つた時の事を考へる、さうしてその時の she の美しかつたのに驚く、she はその時子供らしく今は動物的なり。

*

Cupid になつた女が love を得ない話。

*

夫婦共通の suffering あり。夫は落語家、jokes を高座にて云ひ後それを聞きゐたる妻にあひ赤面す。

*

A husband not loved――crippled――a husband loved for the first time.

*

第二世之助の話。――世之助女を口說き失敗す、女に惚れし爲失敗す。

*

二つのアプリオリがあるんだね、さもなけれやあんなにあせりやしない。

*

メタルを澤山持つてゐる waitress そのメタルを投げ捨てる。

*

岸駒の虎を賣つて海水浴にゆく。

*

Bizare.――覇王樹と女。

*

Hystery.――活動寫眞の film に己自身現る。

*

義眼の人、――通夜。

*

畫家 sitter を見ずに sitter の vision を見てかく、vision と實際と區別がつかなくなる。

*

死ねば好い(好意から)と思ふと病人がどんどん惡くなつて死んでしまふ。

*

古事記のやうな極安全な本を讀んで危險思想にかぶれる話。

*

Ghost or ghostly phenomena と思ひし事然らずして、却つて然らずと思ひし事 ghostly になる件。

*

日本人の revengeful なる nurse（支那）子供を憎む。子供の顔に人面瘡を生ず。

*

夕暗中を自轉車行く。よく見れば黒洋服の人その傍を歩みつゝあるなり。

*

夢中一室にあり。何者か戸を叩く。

*

Nature の dependency. 雌雄蕊は虫を待つ。人も然り。動物も然り。

*

素性をかくす女。男怒る。女には素性をかくす事その事に bliss ありしなり。

*

藝者子とめぐり合ふ。子は母に disillusion し、母は子と名乘合ふ爲に旦那を失はん事を恐る。

*

賣笑婦の二重生活。Virtuous life を送りつゝ死ぬ。三月に一月の割。

*

A玩具のやうな劍を持つ。B輕蔑す。Aその劍にて巨人を斬る。

*

沙金、屍骸の髮の毛をぬすむ。

*

レエルに血が流れる話。

*

村の子(sheep skin jacket の句)。

*

Pater noster qui es in coelis.　Ave Maria gratia plena.

*

(猿が帽をとる話を發端にす)
强者女を愛す。女弱者を愛す。强者その女よりより美人にあひそれをめとらんとす。女の周圍女の意を强ひ强者にとつがしむ。强者知らずめとる。後、然る事を發見し弱者に誇りしを思ひ悄然とす。且女と絶つ。女一度嫁ぎし名譽を如何にするかと問ふ。答へず。同棲す。(この case は女の social standing を重ずるやう書く)(强者の親戚に對する女の愛も可)

*

A女を愛したる甲、B女と出來す。乙、A女にホレル。A女、乙を愛する如くにしてB女より甲を離さんとす。甲、B女を去りA女と出來んとす。その時A女いつしか乙を愛しつつありしを發見す。(幸福なる悲劇)
(花柳小說)

*

細川忠興夫人の自殺。——自殺と聞いて悲觀してゐたクリスチアン、他殺と聞いてよろこぶ。

*

Romanticism is a tendency to find the golden age in the primitive stage of culture. (Return to

Nature!)

*

美の Kinds. *Räumlich?* 卽アングルの美がレンブランのそれより淺いと云ふ事なく全然別種なりとす。しからば俗美と美との限界如何。

*

歡樂極まつて哀傷を生じ功名成つて災害來る。歡樂を寫して哀傷を寫さざるものは Romanticism なり。哀傷を寫して歡樂を寫さざるは Naturalism なり。歡樂を寫して哀傷を忘れしめず哀傷を寫して歡樂を忘れしめざるもの夫 Classicism の大道乎。

*

The meaning of Poe's importance on

1) self-conscious techn'que——*Baudelaire.*

2) his man—always enterprising——*Balzac.*

3) inhalt. 1) pseud-scientific stories.

2) psychological stories.

3) symbolic stories.

Searching spirit, never satisfied by mere natural science.

四

Professor

文鳥(tamed)

Sneers of the merchant.

But I found the bird's happy.

'Tis something.

*

夏の午後。

女中。恒子、靜子。人が呼ぶ。靜子去る。恒子一人のこる。(monologue.)

子供來る(antipathy)。恒子去る。子供と女中(noteをのこす)。

靜子來る。恒子暫くして follows. 二人談話、——夕立。

恒子去る。靜子 monologue.

恒子バルコンより來る。monologue. 子供の note へ手紙をかく。

子供來る。靜子手紙をことづく。靜子手紙をよむ。虹。

*

共同の evil を犯すものは親密なり。

*

大事件の owen として a crowd of butterflies を見る事。

*

心中せんとする男女。——汽車心中の男女をひく。心中を思ひとまる。

*

A King's Tragedy.

A, completely defeated and cowed.

B, too desolated.

*

Los Caprichos.

1 齒。

2 鏡の中に過去の光景を見る。

3 人面瘡。

4 ……

*

〔三つの窓〕

旅順港外よりかへる××艦上、機關ノ下士、副長點檢前便所へ行く男と共に行く。甲板士官にとらへらる。「後甲板に立て。」「善行賞を奪ふもよし、進級が一年おくるるもよし。」立つ(十二吋砲側)。「部下に命令し殘したることあり。」去りて遺書を書く。かへる。月明。戰鬪中故スタンションなし。突然入水す。大混亂。××信號す。××、××皆とまる。探照燈交照見えず。

その職務　その官位　後續艦數

*

Tolstoi の小說中の人物の如くしか行動出來ぬ男が Tolstoi へ書を與へて牛耳るもの。

*

Criminal が crime を白狀する。その crime 小なりとて輕蔑され憤慨しだんだん大袈裟な法螺をふくに

至る。

*

運命のよすぎるのに壓迫される人 } 戰國時代
運命を求めて得ざる人

*

1 旅行せず旅行案内を書く人。

2 作家の egoism.——魂を一卷の本ととりかふ。

3 Allegorical story.——哲人女の evil を說く、女に落つ、卽ち女を眞に強しと知る。

*

Shoes-polish : human skin.——a scene at a station.

*

光る soup.——毒殺を計り燐を皿中に入る。停電。皿光る。夫知る。

五

社交の foundation は lie なり。精々 truth を suggest する lie なり。斷じて truth にあらず。

隣人を如何に思ふやを正直に云ふとせよ、社交は必死せん。

最も幸福なる社交の結果は完全に相互を輕蔑する場合に起る。孟子曰大人を見る時は之を藐す。この眞理に觸れたるものなり。

*

待合の女將着物をうると云ふ。友だちと車にのりてゆく。自動車澤山とまつてゐる。ねまきをきてゐる故引返す。銀座通り坂になる。上に春菊をつむ女あり。

*

ほんたうを云ふ時もウソかと思ふ程噓が上手だ。

*

"Don't speak to a Japanese in such tone." "All right, he is always a decendant of gods."

*

夢——廣瀨淡窓——旭窓(子)　孫は?——I、夢窓だらう——先生

*

* Truly…here (this is hell, hell is nowhere but here.) *Thema.*

*

Every school is a humbag. We sell our taste, moral, ——our whole personality to school-education merely to get the way of bread-winning.

*

Family-system is hell Every member of a family sacrifices oneself more or less for the family. What a disgust!

*

家庭の主人(兄)——中學の漢文の教師、家族の犧牲

その弟——その犧牲を免れしもの

主人の長男
主人の妻

*

You say religion is declining. But you will tremble if not.

*

Misunderstanding (so-called) is only the misunderstanding which is convenient to you.

P. S.—Inconvenience is the mother of all discovery, (as necessity is the father of all invention.) 胃弱の爲に胃を知る如し。

P. S.—This is not only of misunderstanding, but all human relation. For instance: heredity.

*

Sexual course (from marriage to child-birth) is so vulgar that 人モ犬モ同ジ.

*

P. S.—So, sodomy or any abnormal sexual course is certainly aristocratic. And eating is also vulgar, so that *senins* refuse to take any common food. Perhaps *senins* less like normal sexual course than any abnormal one.

*

Do the parent have the right to educate their children? If not who has it, I wonder.

*

The attraction of christianity for a Japanese. 1) Æsthetical side. 2) Ridiculous side. 3) Symbolism. ヤムヲ得ザルヲ知ル。

*

或女中の憤慨。客病臥中(足をくじき)、女の來る前夜、女中に曰「明日ハお前ノ世話ニナラナイヨ。」女中莫迦ニシテヤガルト思フ。 Jealousy underlies in this aff ir. For, if the lady were his wife, the maid would not have been so angry.

*

Everything turns on a tautology: he is because he can, and he can because he is. 小說がかける故小說家になる、小說家なる故小說がかける。

*

This world is more hell-like than hell, because in hell ——たとへば果物が下る、それをとらうとすると上る、しかし world では時にとれる、—— so much tantalizing. Hell is monotonous, so one is comparatively easy to adapt oneself in hell.

*

I write of all defects of mine when I write novels & stories; while I write of all defects of others when I write essays & criticism.

*

化銀杏。——殺さず。その時感激し謝す。後又こだはる。女だんだん發狂す。

*

Your ideal wife is a woman to be easily deceived. O fie!

*

月の光は日光よりも速に魚を腐らしむ。

*

父と妻と私通す(父は馬喰)。子(杣)木曾ヨリカヘリ、戸外ニ内ノ容子ヲ知リ、近邊(二町)の男に(ウスノロ)事情をきき、家ニカヘリ、怒ラズ着物を出サセ去ル。行方不明。

*

或悲劇の beginning.——夫ハ母ノ情人タルヲ知ル、妻(藝者)ハ父ト關係アルヲ知ル。

*

江州の百姓、大阪に出、荒物屋をひらきかたはら投機事業をやり、成功せず。相場をやり、最初よく、後に大分すり economics を知れば儲ると思ひ、本をよみ、socialist となる。

*

參謀本部の地圖を見る。濶葉樹、針葉樹、水田、乾田に從ひ鳥の匂を感ずる sportsman.

*

或漢學者、漢和大字典ヘンサン中漢字の腹につまりし夢を見る。

*

法城を護る人々の喜劇化。

*

支那の長沙邊に stage をとり militalism ノ dramatization.

*

Thaïs et Paphnuce ——Waitress *et* ambitious boy.

*

WハBニヨリ save サレBハWニヨリ damn さる。

*

Headlight に照らされたる葬用自動車。

*

苦痛と悲哀の表情筋の發達せざる爲、上つ方は氣品ある顏をなす。

*

猫の作文を作りし子供曰、人我を猫に似たりと云ふ。

*

貧民通俗小說をよむ。伯爵、大學生など出て來るとよろこび貧民出て來ると悲觀す。(美しき村)

*

新しい母の Thema.——老いたる人形。

母、息子の結婚近づくと共に落寞に堪へかね情人をつくる話。(*drama.*)

*

自轉車を股へのり入れる。職人曰おらあトンネルぢやねえぞ。

*

〔美しい村〕

家の前に線香を立つ。

壯士を東京 or 田舍よりやとふ。日當東京のは二圓、田舍のは一圓。

興奮してかへる。妻と喧嘩す。國家の爲。

鐘一つ、拍手三、シヤンシヤンヨ、オシヤシヤンノシヤンヨ、と叫ぶ。

一票五圓、名刺の下に入る。向うより告發すれば名譽毀損すと云ひこちらより告發す。

四方より金をとる。告發さる。どちらとせうかと思ふ。

旅費を拂つたのに運動せぬと云つて告發す。

買收する人、金を鞄に入れると見つかる故、下駄のうら、靴下の中等にかくす。

買收する人、收出の傳票を煙草盆、火入れの裏等にはる。百圓は 10 也。English written は却つて面倒故 10 を用ふ。10 ならば十錢とも云ひ得らる。

*

Savages kill animals and worship them : this may be the origin of "the respect for one's enemy," = reflection of his own satisfaction.

*

Fore-runners are always *men*, but their successors always *beasts*. Impossibility of Ut[opia].

*

They don't know the exact location of social illness but *facts*. The conceit of the politicians.

*

When impassioned by love, revenge or desire to get a fashionable dress, a woman's face becomes suddenly younger, say 15 years.

*

Humanity is too stupid not to be ruled by a despot, but that despot must be in favour of the oppressed but not of the oppressors.

*

彼は chewing-gum を製造して millionaire になつた。我々はその wealth に敬意を表する。しかし gum には敬意を表さない。しからば artist に敬意を表しても artistic work に敬意を表せぬのは當然ぢや。——或 capitalist の言。

*

文藝の demoralizing power をとくものは決して demoralize せざるやつ也(1)。Political conflict の眞面目なるは亡國のみ(2)。

*

孔子の遊說は heavenly paradise の也、earthly paradise の爲にあらず。——石門の吏(*Thema.*)

*

求偉——inferno——求福 ——————disillusion.
socialism

*

女男に惚れてゐる。男度々女を訪ふ。一日壁をぬりかふ。男 propose す。

*

Hamlet.——他の方面へ向へば偉大なるべき才能が運命の爲にその方向へ向けられた爲死ぬ。

河童國。――莊重の事を云ふと笑ふ。すべてを逆にせよ。

＊

支那漫遊記の「漫遊」と云ふのは如何と兄にきく。お前の心の如し。

＊

利根川の麥畑に坐り遠く川に流さるるを感ず。

六

直江津（信州より）へ學校中ゆく（12の時）。沖に大船あり。小舟にて通ふ。外の學校の生徒も來る。外の學校の先生抱きて外の船にのす。驚と恐と愉快。おのれの學校の先生うけとりに來る。あやまつて曰、うちの生徒にそつくりです。

＊

山鳥の尾羽根の節十二以上になると化ける、尾より火をひく、薄明を放つ。
松の枝は水音をきくと下る。
テツビンの底の煤に火うつる時は風ありと知るべし。

＊

祖父傾城を買ひ（東京）かへりてその時習ひし歌を祖母に教ふ。祖母祖父歿後もその唄を愛唱す。――この度諏訪の戰に松本身内の吉江樣大砲かためにおはしますその日の出で立ち花やかにいさみ進みし働きは天つ晴勇

士と見えにける敵の大玉身(オホダマ)にうけて是非もなや惜しき命を豐橋に(スハの先の地名)草葉の露と消えぬとも末世末代名はのこる」(大津繪)

ランプ來る、始、三分心、一圓五十錢。(年代不明)
明治二三年時代。百兩のムジン飛び切り。凡そ七八兩が通例。七八兩にて良馬あり。
明治十二三年。大工の手間五匁。(八錢六リン六毛)(食事さきもち)
同時代。娼妓五匁、酒一合八リン、散らし(一時間三味線をひき騷ぎゆく事)四錢。洗馬に石鹼來るは二十年頃。
華魁の夷講。身錢を切つて客をよぶ。客なければ友だちをよぶ。年季をますも恐れず。
河童――明治二三年、洗馬に二十人程入れる小屋をかけ、(地藏裏のあき地)赤胡蘿に長毛をつけ、水にうかし時々うかし河童と稱ず。豚一匹外に見せ物とす。大人小人の見料を拂ふ。(覗きは三文と云ふ言葉あり。)

小兒の言葉。――
鬼の齒よりおれの齒の方が先へはえろ。
御天陽、御天陽、御手紙あげるで戸をあけておくんなさんし。(雨天に云ふ)
女の中に男が一人もの、女をかばふはへぼ男。

せせらぎ――せんげ、せんぎ or せぎ。雨乞鳥――蓑笠きこきいとナク。(夏)

＊

易者前世に着物を一枚かりたりと云ふ。女着物を寺におさめに行く、途中乞食にあひその着物をやる。乞食驚く。

*

大工六百圓に體をうる。屍體解剖（脊高き爲）。その金にて洋服靴をつくる。靴出來し時金なし（のんでしまふ。）靴は十二文甲高故外にはきてなし。靴屋原料代にてよしと云ふ。それもなし。靴屋へきてくさしたる。

*

活辯。（東京に活動はやらざりし内）長岡へゆく。新派ホトトギスの fi m. 毎晩來る客、年增の女。樂屋へ通し物が來る。（すぐ行くと估卷を下げ且連中一同がまき上げる。便宜上始數囘はとりまきをつれて行く。もう自分の手の內と思ふ時のり出す。）のり出せし時酒肴出づ。活辯がくどかんとする時女がしかみをあけ佛壇を指さし、「今まで汝を呼びしは亡夫に似し故なり。佛の供養」と云ふ。

*

研究所の二階。モデル倒る。皆近よる。皆近よるにたへず。外へ饅丹をかひに行く。かへりに階下の事務所に女畫師を見る。「水はないか」と云ふ。女畫師、さう云ふ時は逆にぶら下げれば好いと云ふ。嫉妬たるべし。後、池の端のカッフエに人の妻となりしモデルとあふ。面やつれ、肉體を知り居る事、不快なり。

*

青年伊豫がすりの仕立て下しをきて湯に行く。肌に紺色のこる。

*

松山。——京都へ出て（17 or 18歳）、日本畫の肖像かきのもとへ弟子入りす。東京へ出る前東京に木たしと思ひむやみに木をスケッチす。東京へ來る。汽車。水兵辨當を買つてくれる。東京へ來る。木あり。

*

鷄。——惡しき卵をうむものは頑健、善き卵をうむものは餌と氣候との變にも死す。

*

夫に對する嫉妬。——アナタイツモオ若イノネ。

*

天草四郎時貞の史劇。Faith——worldly-vanity——faith and death.

*

Bear. ——戰場ヶ原。馬鈴薯一袋。友だちねがへり、ぶつかる故肘にてつく、木樵にきく。口盜なし、熊なり。

*

G[host] on seaside. ——磯臭き cemetry. Ghost 出る。兵士上り行く。女あり。船長の死せし後その船長を知りし淫賣來りて徘徊するなり。

*

Curious tale.——夫婦にて(旗本)吉原へゆき遊び面白くなり財産を蕩盡す。つひに子供二人をさし殺し、亭主の血を見ておそれ走る。途中亭主に肩を切らる。亭主死す。後妻は再縁す。娘四人、その娘の一人なり。倅一人、川村清雄。

*

二對の lovers あり。一對は關係あり。一對はなし。兩親と談ずる時、前者は成功し後者は失敗す。

*

遺傳——狂。重大な case に狂の爲大事業をす。(*Jean d' Arc.*)

*

三十越した女（子供をおいて旅す）兩乳はり卒倒す。旅人乳をすひすくふ（腦貧血）。旅人は弟の生まれるまでに間ありし故、乳の吸ひ方を知る。男女共春情を催す。

*

英語の教師。英語をやらねば出世せぬと云ふ。生徒思ふ。先生は如何。

*

男西洋人の少女に「Xmas の夜 stove より baby 來る」とは嘘なりと云ふ。十年後男女より手紙を貰ふ。I have loved you but I couldn't say so to you, because I heard from you that baby ハ stove カラ生マレヌ etc. I ハアナタノ手巾ニ initials ヲ縫ツタ。But 君ハ知ラナカツタ。南洋へユク。

*

家康女を利用するに妙を得たり。

*

かみゆひ、女の子に枕をはづすなといふ。その後その女の子を藝者にやる。

*

相愛するものが一しよにゐる爲に苦しむ話。——mother and son.

*

Artist, superb art を見 art ノ及ビ難キヲ知リ non artist トナル。

*

甲人嘘をつかぬ教育をうけ、乙人嘘をつく教育をうく。甲いろいろ苦しみ後安し。乙いろいろ苦しみ後安からず。同樣同情するやうにする。

*

犬の着物をつくる店。――チヨツキ、ハンケチ、タイ。

*

美人の肖像を示す。客それは己の祖母なりといふ。輕き shock.

*

人氣あるものは Mars の屬なり。

*

スリ手の中へ入れる刃物をたのむ(ヤスリ屋へ)。

*

巡査病人の藥を落せしをひろひ、その家をとどけんとしてさがす。

*

碧童、五錢を落せし車夫に苦しむ。

*

河童。――二十七年己卯夏四月己亥の朔壬寅四日近江國言く、蒲生河に物有り其形人の如しと。秋七月攝津の國の漁父(アマ)罟(アミ)を堀江に沈(オ)けり。物ありて罟(アミ)に入る。其の形兒(ワクゴ)の如く、魚にも非ず、人にも非ず、名づけむ所を知らず。(推古天皇紀)

*

父、藝妓を妾とす。子その藝妓を愛す。父その藝妓と心中す。

*

武士の妻、――Christ is a coward.

*

細川忠興夫人の死、—— suicide 問題。

*

Typhus, Malaria ノ細菌ハ Antitoxin ヲ造リ自ラ死滅ス。

*

神は自殺する能はず。

*

暴行ハ相手を論破するより容易なり。

*

まいろや、まいろや、パライゾの寺にまいろや。パライゾの寺とは申すれど、廣い寺とは申すれど、廣い狹いは我胸にあり。（浦上）

*

Café の女ノ顔ズット(ソノ日中)忘ル。曉方思ひ出す。

*

Political conflict is genuine only in the broken country. See Corea.

*

Have you a conscience. Go to theatre! You will be welcomed as a modern prodigal son!

*

日蓮上人金を得る爲に運動す。——money の問題。

*

どうして車へのつたんだい。のりたいから。——Weltanschauung ヲ一變ス。

得戀の爲自殺す。

*

Jealous man の告白。——Hotel にゐる。Hotel へ他の旅客が來る。Hotel の人が歡迎する。それに jealousy をもつ。

*

醫者人にあひし時大動脈のつき場や心臟の位置を透視する氣がする。

*

或女自殺する前に好きな蜜豆を三杯食ふ。

*

All love-affairs are tedious for me, even an hour with a mistress,——況ヤ married life ヲヤ。

*

父母ノ爲に married life の bit by bit drained away される Thema.

*

父ガ後妻ヲムカヘルニ對シ子ノ非難スル權限。Moderns do not like 世話女房。Your ideal of wife is not my ideal of that.（Words of son）

*

十圓札をうけとる。札のうらにヤスケニシヨウカと書いてある。

*

電車中の電燈落つ。吊革に下がれる女周圍を見まはし、車中の注意をひかんとす。醜婦なる故に誰も顧ず。

＊

今日寺を存在せしむるものは monks にあらず、檀徒なり。檀徒の妄をひらく事は坊主攻撃にまさる。法城を護る人々の缺點なり。

＊

Lassalle の悲劇。

＊

僕等は僕等の短所は萬人に共通とし、僕等の長所は僕等のみにありとしてゐる。

＊

天國はせざる事の後悔にみち、地獄はなせる事の後悔にみつ。

＊

Lover の寫眞を持ちて死ぬ。その lover の寫眞は實際以上に美しくうつりし photo なり。兩方(lovers)が持ちてもよし。

＊

荷車ひきに加セイシ却ツテ罵ラル。後ソノ荷車ヒキ炭俵ヲ人アツカヒス。好意を感ず。

＊

白い布についたしみはとれぬと云ふ言葉より白髮染の trick を發見す。

＊

是だけは心得置くべし。——*An humorous essay.*

＊

鬼ごつこをする女の兒の顏の seriousness. 結婚をする時の女の顏の seriousness.

*

兵士、café の女給の妻なるを發見す。

*

相愛の女結婚す。その夜(雪ナリ)電報を打つ。「タカサゴヤタカサゴヤ。」名なし。女も夫も祝はれたと思ひ目出度がる。

*

Proretariat の群に加はりつつ、しかも proretariat 出ならざる事を苦しむ loneliness.(美しい村)

*

運轉手赤旗を青旗と見あやまりカアブを半ばまはらんとす。旗ふり急に旗をふる。運轉手大聲に曰、まちがひました!

*

銀時計と思ひニッケルをとりし賊の憤怒は大盜と思ひ小盜を捉らへし刑事の怒りに似たり。

*

カアネエションは音樂を嫌ふ。

*

Enthusiastic ニモノヲ云フ時片目ツブリ鏡ヲ覗クヤウニスル人。

*

Umpire の psychology. ——思はず間違ひ、それを逆にとりかへさんとし、一方を寛にす。好きな pitcher, 好きな玉には反つて判斷 strict になる。

*

洋食のくひ方を苦にし neurasthenia になる。式に出て洋食を食ふ。なほる。愈くひたくなる。食ふ機會なし。

※

——君、お八重は處女ぢやないんだぜ。

——(平然と)若樣、私も處男ぢやありませんよ。

——處男？　處男とは何だい？

——女が處女なら男は處男ぢやありませんか？

※

——僕はこれから嘘をつくまいと思つたんだけれども人と話してゐると何時か嘘をついてしまふんだね。

——私は滅多に本當の事はしやべるまいと思つたんです、けれども人と話してゐると何時かほんとの事を云つちまふんですね。

＊

Contemporary authority ニ服スルハ危險ナリ。Co〔ntemporary〕au〔thority〕の高さ未定なればなり。

——山陽と木米。

七

某女元祿袖の着物を着るを褒める。相手曰そんな事をしては片身わけの時に困る。若き奥さん曰わたしは片身にする着物のない爲に死に切れない。相手曰わたしは××の叔母さんの片身に鼠のお高祖頭巾を貰ふ。

當時の娘は皆紫色なりしかど、ちりめん故それをかぶつた云々。

*

顏に腫物出來、醫者へ行く。醫者切る。かへる。母曰何ぼお醫者でもあんまりだとて泣く。おのれも泣く。その爲に學校を休み、後出る。先生出席簿をよみ返事に驚き、「ああ、出てゐるんですか」と云ふ。又「御飯粒がついてゐます」と云ふ。萬創膏を少々はれる也。

*

母産婆の稽古に行き、二人きり故、子供學校よりかへるも母なし。且戸じまりしてある故、雨天にはシネマへはひる。成績惡し。自習學校に一圓、家庭教師に六圓也。「どうか中學へあげたい」と云ふ。始め受持の教師に家庭教師にたのむ。受持、いけないと云ひ、他の教師にたのむ。（小學校教師に家庭教師組合あり。）禮は？　五六圓と答ふ。一週に一時間づつ三度。先生怠ける。その外につけ屆をする。先生座蒲團を持つて來いと云ふ。拵へて行く。

*

女曰、お醫者樣がさういふ事は（氣の違ふ事）月經の時にあると云ひました。その女はもう月經もありとは思はれぬ。黄面なり。（半年 or 二年にて癒る。）その女の子一高の試驗をうけむとし勉强す。母これを惡魔の同類とし追ひまはす。子供泣いて二階に上る。母も二階に上る。後にその事を話して曰、向うは泣いてゐたんですが、こつちには近眼故見えなかつた。發狂中は夫も子供も憎し。且彼等の罪惡を犯す樣見ゆ。故に彼等を責む。後にその事を話して曰、それでもよくわたしを咎めずに置いてくれた。

度々話せし發狂中の事故誰も聞くものなし。父はトランプの獨り遊びをなし居る。突然歌をうたひ始む。「ホントニソノ通リダ」と獨語す。

父曰よくそんな事を覺えてゐるね。

二十四型の時計ナンゾトラナイ。
歌ニハサウ言ツテヰル。

＊

子に、——
諏訪へ來て氷すべりせよ。湖水はあぶなければ裏の田畝に氷はる故そこへ來てせよ。宮様もそこでやる。

＊

結婚前の娘と母とのヒステリイ。

＊

おおフロリアンよ、フロリアンよ、わたしにおいしいお菓子をたべさせてくれたフロリアンよ(結句)
畫の中の女　足少し惡イ
獨乙のゲニイネの中の主役フロリアン
三好の畫——春の野邊
三角の肩かけ(赤)——女
「欄外ニ」
O Soldi　ナポリの民謠
Door——Palace of Sweet (gilded)

＊

蒙古の子供カボチヤを食ふ。顔が黄いろくなる。お前は南瓜を食つたね。銑割南瓜。

＊

塗料の職工の組長、ニツケル時計を失ふ(工場で)。易者に見て貰ふ。日盜まれたり。年三十五六と云ふ。

組長その後三十五六の職工に當つける。六年間變らず。人を介して了解を求むれどもきかず。組長曰一生言ふといふ。職工易者を恨む。

*

叔母、習字の甲上を障子に貼る。子一晩泣く。

*

プラクテイカルな男の戀愛觀。女は何を話してもやりこめられる程利巧だと云ふ。

*

學校にて忘れものせし人を立たせ、スケッチの model とす。「オ前ナド忘レモノバカリシテ皆ガマタアノモデルカ　アキタト云フダラウ」

*

將軍。——頼朝、尊氏、家康。

*

父と女子と母と

女子 }→父　Strindbergian tragedy.
母 }

父→子

*

決死隊（天津の）、强弱の差アラハレ、强者弱者を輕蔑す。戰後强者弱者和す。

或男の哲學。——虎は虎、猫は猫、どちらもよろし。

＊

革命の成功は文明の破壊となる時如何するや。

アレキサンドリアの圖書館。

＊

白髪をかくすので髪の形などにかまつてゐられない。三十は皺、四十は白髪。

＊

母娘に聟をとり、聟に娘はすぎものと言ふ。娘死す。聟に後妻をとる。今度は聟はすぎものと言ふ。

手に黒子あり。天才か、盗癖か。

睫毛ぬき、眶赤し。

＊

盲人姿勢を正し、點字本をよむ。にやりと笑ふ。

＊

「宣教師」

利根川口、アアネスト・グレン、西洋婦人、日本日曜學校の先生など三四人を別棟に住まはしむ。その女の一人、或朝、井戸端に鑵を洗ふ。鑵亦昇天せんとす。川に近し。川中の船、漁(鰹)ある度に太鼓を打つ。或時、各國の女三人、集まり、讃美歌をうたふ、オルガン、マシマロに café.

造酒屋の主人、朝鮮併合前、朝鮮にあり(事業さがし)、日グレンは好いが、アアネストはいけない。

＊

ここは何と言ふんです。——小石川アツパアトメントと言ふんです。——アツパアトメントと言ふのは何ですか?——さあ。——西洋のデパアトメントとは違ふんですか?——何でもデパアトメントと言ふのはも

のを賣る所ださうです。

八

印刷屋の二階。下のリンテンキ鳴る。小さい汽船中にゐる如し、ねられる。

＊

ジムバリスト航海中の作曲を送る。

＊

外にチャルメラ吹き來る。方々へむける故、音かはる。

＊

室外の日光は室内の光よりも百倍つよし。卽室外の一年は室内の百年に當る。

＊

電車にとび上らんとし、落ち、人事不省になる。住所を英語にて言ふ。それより自信を生ず。

＊

カッパ語の語原。——たとへばＢＡＰＲＲ（莫迦）はＢＡＰ（莊嚴）より來るが如し。又カッパには月光も日光なり。

＊

少年、禁煙、もろこしの毛を煙管につめてのむ。

＊

樺太。――

ギリアク犬、教導犬、二匹分一匹につとめる、氷の穴の中にて子をうむ。橇は他種の犬。

黒百合あり。

氷の上を自動車にて走る。シベリアとつづく。自動車を八十圓(トラック)にて賣る。買ひ手なし。

鑵づめ三年分。

海豹の敏感、七八町先にて人間を感ず。

ギリアク犬五頭、小樽は通り函館にてかへす。食糧人間よりかかる。

横須賀へつき蛙をきく。なつかし。東京ではなかず。

氷やけ、潮風を感ずる手。

＊

婆曰、うちの旦那はえらい、日本語はすつかり覺えてしまつて外國へ行つて辭引にない字を習つてゐる。

＊

ワクラバニワガ見出ツルナメクジリ硝子ノ箱ニカヒニケルカモ

＊

樂の菓子鉢を sweets 入れに使はむとす。しかし郊外にすむ。日本の炊事婦煮豆などを作り、それを入れる爲に樂の色よくなる。(海外談)

＊

向うで二人並んで顏を洗ふ(ホテル)。ひとりの腰より何か落つ。他の一人何かと思ふ。一人あわててそれをしまふ。他の一人何かと言ふ。一人出して見せる。バットの箱位の布に木綿糸にてクリストの像。上に聖書の文句あり。二人とも外交官。一人の前任地にてつくる。

寫眞に畫の具があるんだよと一人言ふ。一人曰領事につかまり、畫帖を出さる。畫の具なしと言へば畫の具持ち來る。その畫の具シヤシンの畫の具なり。卽ち茄子を書く。向ふにも茄子あるかねと一人言ふ。一人曰あるさ。

＊

服はシヤツのやうにつくれと言ふ（ハイカラ）。洋服屋の作り來る洋服シヤツの如くにしてシヤツを着ては着られず。

＊

兎屋の母、信州の温泉へ行き、東京へ行く男に河鹿、櫻實、笹餅をとどけさす。土瓶の中に河鹿あり。男六十二匹、女二匹。女を別にしないと皆男を食ふ。河鹿は死ぬ時合掌して死す。

＊

漆の師匠をとふ。留守。鄰にて聞けば手紙があるさうです。師匠もお上さんもるす。上りて手紙を見れば午頃まで待てと言ふ手紙なり。そこへ半玉二人來る。手紙がありますよと言へば上りてよみ、笛、鼓などをいぢりて待つ。

＊

女優募集の看板を出して女を釣る。そこへ女たづねて來る。男はその女にこんな所へ來るなと言ふ。そこへ刑事來り、二人ともつかまる。

＊

名刺を出す。一枚では當にならんと言ふ。五枚出す。

＊

おれはあいつを殺したのにあいつの事を考へると屍體の事は考へない。生きてる姿を考へる。

*

信輔、雨中の稲電の如き mental flash を欲す。

*

There is a palm that flowers only once in its life-time, though it lives 76 years. —— *The talipot-palm.*

*

足の非常に長い蜘蛛(胴ハ淡褐也)、ハジキ飛バセシニ足ダケ一本疊の上ニ動イテヰル。

*

宿屋で植木屋が二三人茶をのんでゐる。そのそばを通る。皆默る。それだけでも不快なり。

*

(1)猿(寫生用)、雌黄を食はんとす、少し食へば下痢、多く食へば死。
(2)鷄、卵をうむ時學校中さがしまはる。
(3)七面鳥は牝牡と價異る(モデル賃)、牡を借りしに卵をうむ。

*

十三人の子を產んで家出せし妻(世間——十三人も子のある癖に。
妻——十三人も子を生せられただけでもやり切れない。)

*

障子の戸の穴より風景映る。

*

河童國、——遺傳的義勇隊。

孝子、性欲的に母を慰む。

＊

＊

〔斷片XI（三一〇頁）〕

1七面鳥　2寫眞機　3アンマ　4 This キリノ box（？）　5本屋（？）　6八百屋の禁煙　7風呂　8畫の古びる話　9畫を描いてゐるうちに風景のかはる話（壁、庭木、人物）

＊

Error のある事即ち humanity ない事は divinity or machinery.
Saint for his virtue. We for our sins.　不公平も甚し。

＊

時計を炬燵へのせると熱で暖まりぐるぐるまはる。

＊

坂みちを人一人下り來る。ネクタイピンの如きもの赤し。何かと思へば長きパイプの先に卷煙草の火赤きなり。

＊

インクのセピア色に血を感ず。

＊

丹前を着た三人の男川の對岸に來り、寫眞をとる（宿の）、我をうつされし如く無氣味なり。

＊

岩の動くを感ず。

☝の札 life-like なり。

*

天然を愛するは天然の怒つたり嫉妬したりせぬ爲なり。

*

古道具屋。螺鈿の硯箱よごれ不細工なり。猿面硯でも入れたくなると言へば小穴(白ズボン)「何、端溪でも似合ふ」と言ふ。鐵の兜や鳥籠もあり。誰か外にもゐる。

*

墓場へ位牌をすててゆく。夜汽車でかへる。

*

偉大なる悲劇も lookers-on には單なる comedy なり。

*

男の Bovarism.

(大正五年—大正十五年)

補遺

＊

〔孤獨地獄參照〕

梅が香の句。

山城河岸四番地、家も地面も賣りて、日吉町（モト山王町）十番地に來る。兩家とも火事に燒く。二三日に死す。夜十二時、若紫コトお房に腹がへつた故、むすびを三つ拵へてくれろと云ひ、それを食ふ。芝居話をし、「河竹も老いこんだな、××に信乃をさせることはない。」十二時すぎに寢、三時に起上る。おフサお上水ですかと云ふ、バタリと仆れる。鼾つよし、だんだん靜かになる、鍼醫をよぶ。駄目と云ふ。棺は別拵へにしたり。湯灌する時に見れば兩腕に彫ものあり。一は鳥かごの口あき小鳥立つところ（田舍源氏の若紫）、一は牡丹に揚卷の紐のかかれるところ、朱の入りしホリモノ。葬式はさびし。一切伊三郎、願行寺に葬る。

バラ緒の雪駄、唐棧の道行、五分サカユキ、白木の三尺、繻絆をきし事なし、單ものの重ね着、チヂミでもマオカでも荒磯、足袋をはかず。

ツンボの粗（素）中——旅役者

母 10 代

千代 40 代

千枝——女の俳諧師╱越後の人　藝者、婆さん

木和——千枝の夫╲　爺さん

津藤、小使ひのない時には鐵の棒(鍔のつきし木刀)を持つて「伊」へ來る(この棒は棺へ入れる)。「向う横町から叔父さんが來たよ」と云へば、子供、奉公人の terror. 米でも何でも「伊」より仕送る。「伊」へ來れば鰻が好いとか鮨が好いとか云ふ。十圓位小使を持たせてやる。居候三四人ゐない事なし。

吉原の河東節の老太夫連中(三味線ひきは婆藝者おせき)來り、「伊」方にて語る。これは「伊」に馳走や何か持たせる爲なり。「津」竹の棒にて老太夫のつけ搖をとる、「ダンナ、およしなんしよ」と云ふ。(「伊」の妻河東を語る。)毛氈をひき、見臺をおき、太夫二人、三味線ひき一人、「助六」などかけ合ふ。百目蠟燭、眞鍮の燭臺、うちのものだけ(親夫婦兄弟三人、婆や二人、店の番頭一人、若いもの四人、小僧二人)。他の家のものを呼ばず。「津」が何をするかわからぬ故。

親類の鳥羽屋(三村淸左衞門、十人衆、義太夫に凝る。三味線ひきは花澤三四郎。)「伊」の家に床をかけ、義太夫の揃ひをなす。三四郎の弟子は皆旦那衆。龍池と「津」「伊」と相談し、河東節をよぶこととす。されど向うの義〔太夫〕をきくも詮なしとて三人にて義太夫の急稽古す。鳥羽屋へは祕ミツ。野澤語市を師匠。阿古屋琴責め。三人及び三味線の名貼り出す。三人、肩衣をつけ、龍池—重忠、「伊」—岩永、「津」—阿古屋、をやる。義太夫の連中のうち、これをやる人緣側よりころげ落つ、「こちのや」と云ふ狂歌師なり。

*

〔斷片VII(三〇四頁)〕

夫人。(30歳) 嘗資産家に嫁し離緣になり後僧に嫁す(眞言宗)。僧は五十近し。好人物。書畫を愛す。性的に利かず。夫人曰二年間一度も交らず。

夫人の妹。(20—21歳) 東京の女學校にゐる。Mと四つ違ひ、同じ小學校にあり。

夫人の兄。

溫泉場へMをつれゆき怪まざりしは上京中の妹をMと一しよにすべくMの人物を知りたい爲一しよに行つてゐた。

夫人曰Mと夫人との間をつづける爲には妹の夫となれ、且夫不能の爲別居したし、故にMと妹と一しよになれば二人を東京にすませ、おのれも一しよになる。M曰そんな事は恐しくないか。夫人やや本心にかへる。M又曰結婚すべくんばもう一度見たし（小學時代に見し時は美しかりしも）。夫人とMと妹をよびよせる。M結婚する氣にならず。妹は一しよになつてもよいと思ふ。

妹再東京へかへる。その時船へのるのにWの別莊へ一晩とまる方よろし（Wは夫人の別莊なり）。夫人妹と別莊にとまらんとす。そは夫人Mととまる事を欲せしなり。されど別莊番の娘藝者にて、母のもとへ來る。この女Mを先生と稱す。別莊番の妻亦娘をMとりもたうなどと云ふ。それ故Mは夫人をそこへともなひたくなし。又Mに云はせれば妹來る事夫人との關係上困る故とうとう來る事を斷る。

Mその境涯に安んぜず、夫人に大島を拵へてもらひ上京す。二ケ年後には既に夫人の兄大本教信者となり、その爲夫人と妹と大本教となる。而して夫人の夫の僧も大本教となる。その結果本堂の本尊と大本教の神と二つ並べて禮拜し始む。

妹結婚されなくなりしは業なりとし、夫人及夫人の兄、妹の體を大本教の神に捧げよと云ひ、遂に王仁三郎に獻じ、夫人亦王仁三郎のもとに走る。（眞言宗の關係もあり。）大本の神をまつりし爲村をおはる。

detail.——

温泉場滯在中M、art を思ひ且その atmosphere にたへず、上京するにつき basket, etc. を買ふ。夫人皆買つてくれる。立つ時下着の大島を男物にしたて直しMにきせる。(金)頸にかける金鎖は舊式故、帶へまく時計にすれば半分となる。その拵へ直し方をたのみ、半はMにくれると云ふ。

M湯島天神丁(封筒を走らす宿)へかへる。その後二年間にMの妹上京す。Mの妹の友だちあり。こは郷里同じにてMと一しよになりたがり娘の親友Mの妹も賛成す。この女上京し大學病院の看護婦となる。又宿の女將の姪に女歌人(畫もかく)あり。M病氣にてねるとこの連中見舞に來る。但し妹は郷里にかへる。R(夫人)の妹出現。(Rの汽車中すすめらる。)結婚問題。當時M身神つかれ、夫人に云ひしに人參の廣告を見舞狀に封じてよこす。

宿の女房の夫は移民會社の船員。女房は荒物屋兼髮結をやりをる。故にMとも關係あり。亭主の鯉口の外套を着て歩く。亭主好人物にて亞米利加へ行きし時一弗の watch を買つてくれる。質に入れると二圓かす。

看護婦になりし女性、Mを見舞ふ(果物、菓子、藥)。怜悧なり。Mしばしば一しよにならんかと思ふ。されどRの妹の問題あり。その後その女看護婦として進級し、後病死す。死ぬまでMを忘れず。

Mの支那旅行中郷里の妹より手紙をよこす。Mは東京の家に wife と妹(白木屋に入り裁縫にて身を立つ)

と子供とをおきし故 Heimat より來りしに驚く。その手紙に「病氣になり郷里へかへる、×(看護婦)も死ねり」と云ふ。

閨秀歌人(畫)は横濱にあり。中流の娘。池上秀畝の門なり。其同門の弟子と折合はず、Mの art と同感し、Mに畫を見せ批評を請ふ。また歌をみせ批評をこふ(露骨な歌)。繪の具の材料などMに使用せしむ。この人亦肺病なり。通知來る。生前畫を約す。M行けば一家寺にあり。M畫をさげてゆく。兩親よろこぶ。娘の三脚畫の具等皆貰ふ。畫の具は他の日本畫家に賣る。

夫人の妹東京にて電報をうく。妹の友だちも皆結婚問題なりと云ふ。Hesitation, but desire to return and 幼な友だち同志相見る。

男あり(農)。夫人を口どきし事あり。その男などの口よりMと夫人の關係公にならんとす。

Mと夫人と溫泉場にゆきしは(Mの數年前に云ひしは)夫人が友だちの所へ遊びに行く事とし、友だちの方が萬事好いやうにしてくれる云々。

Mの上京後、Mの love が他にうつりし後Mの從弟(Mに似る)に夫人云ひよる。出來ず。結婚後もMは夫人に逢ふ。夫人は舊好をあたためたき氣あり。

〔玄鶴山房〕

＊

爺さん　目くら、呼鈴などなほす、左の耳だけ風をひく。

婆さん　腰ぬけ（脳エンボリ）、一の字も引けず、飯を食ふ時匙使へずして泣く。

妾（女中）　子供二人

船橋　　お父さん　おぢいさん

銚子へやる

爺さん　結核　六尺の褌（妾を銚子へやりし晩）

書家　バットをやめる、すふと咳きこむ、（痰の出るまで）

咳く故三十分も苦しむ、妾の名のみを呼ぶ、

「あなたも死にますね」ウハ言に妾の名を呼ばず。

養子　溫厚人　（古錢―結核をおそる、日曜も子供を遊ばせず。古錢雜誌、古錢會、）

中二　子供にも凡人になれと乙彦（オトヒコ）とつける。

妻　善人　五歳の女の子と共にねて產をする、

「カアチヤンガオ產ヲシテキタナイヨ」ト云ヒ婆さんの床の中へはひこむ。

妾の子供一人＼
妻の子供一人／常に喧嘩

婆さん　右の手だけきく、便器をさし入れる、手をふかず、「永井さん」に禮を云ひて泣く。

*

町を通ると叫聲
瓶にさした花ありと云ふ、なし、かへればある
窓ガラスの外に空中に寢た人
メヂアム・妙な本の line をよむ
家中が水になつた、
床にはつてゐる男を見る、
收容所の俘虜(支那人)日本軍人の死を見る。
足のかかとでものを見る
外を通る、實在せざる stone-balustrade を見る、後數日實在する。

初期の文章

義仲論

一　平氏政府

祇園精舍の鐘の聲、諸行無常の響あり。沙羅双樹の花の色、盛者必衰の理を現す。驕れる者久しからず、唯春の夜の夢の如し。

流石に曠世の驕兒入道相國が、六十餘州の春をして、六波羅の朱門に漲らしめたる、平門の榮華も、定命の外に出づべからず。莊園天下に半して子弟殿上に昇るもの六十餘人、平大納言時忠をして、平門にあらずンば人にして人にあらずと、豪語せしめたるは、平氏が空前の成功也。而して平氏自身も亦其成功の爲に仆るべき數を擔ひぬ。

天下太平は武備機關の制度と兩立せず。生産的發展は爭亂の時代と並存せず。今や平氏の成功は、其武備機關の制度と兩立する能はざる天下太平を齎せり。天下太平は物質的文明の進歩を齎し、物質的文明の進歩は富の快樂を齎せり。單に富の快樂を齎せるのみならず、富の渴想を齎せり。單に富の渴想を齎せるのみならず、又實に富の崇拜を齎し來れり。長刀短褐、笑つて死生の間に立てる伊勢平氏の健兒を中心として組織したる社會にして、是に至る、焉ぞ傾倒を來さざるを得むや。

平氏が藤門の長袖公卿を追ひて一門廟廊に滿つるの成功を恣にせるは、唯彼等が剛健なりしを以

て也。唯彼等が粗野なりしを以て也。唯彼等が菜根を嚙み得しを以て也。詳に云へば、唯彼等が、東夷西戎の遺風を存せしを以て也。彼等は富貴の尊ぶべきを知らず、彼等は官爵の拜すべきを解せず、彼等は唯、馬首一度敵を指せば、死すとも亦退くべからざるを知るのみ。しかも往年の高平太が一躍して太政大臣の印綬を帶ぶるや、彼等は彼等を圍繞する社會に、黃金の勢力を見、紫綬の勢力を見、王笏の勢力を見たり。彼等は、管絃を奏づる公子を見、詩歌を弄べる王孫を見、長紳を拖ける月卿を見、大冠を頂ける雲客を見たり。約言すれば彼等は始めて富の快樂に接したり。富の快樂は富の渴想となり、富の渴想は忽に富の崇拜となれり。

海賊と波濤とを敵とせる伊勢平氏の子弟にして、是に至る、誰か陶然として醉はざるを得るものぞ。然り、彼等は泥の如くに醉へり。恰も南下漢人を征せる、拓跋魏の健兒等が、其北狄の心情を捨てて、悠々たる中原の春光に醉へるが如く、彼等も亦富の快樂に沈醉したり。於是、彼等は其長紳を拖き、其大冠を頂き、其管絃を奏で、其詩歌を弄び、沐猴にして冠するの滑稽を演じつつ、しかも彼者自身は揚々として天下の春に謳歌したり。

野猪も飼はるれば痴豚に變ず。嘗て、戟を橫へて、洛陽に源氏の白旄軍を破れる往年の髭男も、一朝にして、紅顏涅齒、徒に巾幗の姿を弄ぶ三月雛となり了ンぬ。一言すれば、彼等は武士たるの實力をすてて、武士たるの虛名を擁したりき。武士たるの習練を去りて、武士たるの外見を存したりき。平氏の成功は天下太平を齎し、天下太平は平氏の衰滅を齎す。

彼等がかくの如く、長夜の惰眠に耽りつゝありしに際し、時勢は駸々として黑潮の如く、革命の氣運に向ひたりき。あらず、精神的革命は、既に冥默の間に成就せられし也。

平氏の盛運は、藤原氏の衰運なりき。法性寺關白をして「此世をば我世とぞ思ふ」と揚言せしめたる、藤門往年の豪華は遠く去りて、今や幾多の卿相は、平氏の勃興すると共に、彼等が漸、西風落日の悲運に臨めるを感ぜざる能はざりき。嘗て彼等が夷狄を以て遇したる平氏は、却て彼等を遇するに掌上の傀儡を以てせむとしたるにあらずや。嘗て彼等が、地下の輩と卑めたる平氏は、却て彼等をして其殘杯冷炙に甘ぜしめむとしたるにあらずや。而して嘗て屢々京童の嘲笑を蒙れる、布衣葦帶の高平太は、却て彼等をして其足下に膝行せしめむとしたるにあらずや。約言すれば、彼等は遂に彼等對平氏の關係が、根柢より覆されたるを、感ぜざる能はざりき。典例と格式とを墨守して、悠々たる桃源洞裡の逸眠を貪れる彼等公卿にして、かゝる痛烈なる打擊の其政治的生命の上に加へられたるを見る、焉ぞ多大の反感を抱かざるを得むや。然り、彼等は平氏に對して、はた入道相國に對して、漸くに抑ふべからざる反感を抱くに至れり。彼等は秩序的手腕ある大政治家としての入道相國を知らず。唯、鎌倉時代の遊行詩人たる琵琶法師をして「傳へ承るこそ、言葉も心も及ばれね」と、驚歎せしめたる、直情徑行の驕兒としての入道相國を見たり。權勢攝籙の家を凌ぎ、一門悉、靑紫に列るの橫暴を恣にせる平氏の中心的人物としての入道相國を見たり。狂悖暴戾、餘りに其家門の榮達を圖るに急にして彼等が莊園を奪つて毫も意とせざりし、より大膽なるシーザーとしての入道相國を見たり。是豈彼等の能く忍ぶ所ならむや。

彼等が平氏に對して燃ゆるが如き反感を抱き、平氏政府を寸斷すべき、危險なる反抗的精神をして、霧の如く當時の宮廷に漲らしめたる、寧ろ當然の事となさざるを得ず。かくの如くにして革命の熱血は沸々として、幾多長袖のカシアスが脈管に潮し來れり。是平氏が其運命の分水嶺より、

歩一步を衰亡に向つて下せるものにあらずや。

しかも平氏は獨り、公卿の反抗を招きたるのみならず、王荊公に髣髴たる學究的政治家、信西入道が、袞龍の御衣に隱れたる黑衣の宰相として、屢〻謀を帷幄の中にめぐらししより以來、寒微の出を以て朝榮を誇としたる院の近臣も亦、平氏に對する恐るべき勁敵なりき。彼等は素より所謂北面の下﨟にすぎずと雖も、猶龍顏に咫尺して、日月の恩光に浴し、一旦簡拔を辱うすれば、下北面より上北面に移り、上北面より殿上に進み、遂には親しく、廟堂の大權をも左右するに至る。かくの如き北面の位置が、自ら大膽にして、しかも、野心ある才人を糾合したるは、蓋又自然の數也。而して此梁山泊に集れる十の智多星、百の霹靂火が平氏の跋扈を憎み、入道相國の專橫を怒り、手に唾して一擧、紅幟の賊を仆さむと試みたる、亦彼等が位置に、頗る似合たる事と云はざるべからず。しかも彼等は近く、平治亂に於て、源左馬頭の梟雄を以てするも、猶彼等の前には、敗滅の恥を蒙らざる可からざるを見たり。七世刀戟の業を繼げる、源氏の長者を以てするも、亦斯くの如し。平門の小冠者を誅するは目前にありとは、彼等が、竊に恃める所なりき。名義上の勢力に於ても、外戚たる平氏に劣らず、事實上の勢力に於ても莊園三十餘州に及ぶ平氏に多く遜らざる彼等にして、かくの如き自信を有す。彼等が成功を萬一に僥倖して、劍を按じて革命の風雲を飛ばさむと試みたる、元より是、必然の事のみ。試に思へ、西光法師が、平氏追討の流言あるを聞いて、白眼瞋聲「天に口なし人を以て云はしむるのみ」と慷慨したる當時の意氣を。傍若無人、眼中殆んど平氏なし。彼は院の近臣の心事を、最も赤裸々に道破せるものにあらずや。しかも、彼等の密邇し奉れる後白河法皇は、入道信西をして「反臣側にあるをも知ろしめ

さず。そを申す者あるも、毫も意とし給はざる程の君也」と評せしめたる、極めて敢爲の御氣象に富み給へる、同時に又、極めて術數を好み給ふ君主に、おはしましき。かくの如き法皇にして、かくの如き院の近臣に接し給ふ、鬱勃たる反平氏の空氣が、遂に恐るべき陰謀を生み出したる、亦怪むに足らざる也。此時に於て、隱忍、輕悍、驕妒の謀主、新大納言藤原成親が、治承元年山門の爭亂に乘じ、名を後白河法皇の院宣に藉り、院の嬖臣を率ゐて、平賊を誅せむとしたるが如き、其消息の一端を洩したるものなりと云はざるべからず。小松内大臣が「富貴の家祿、一門の官位重疊せり。猶再實る木は其根、必傷るゝとも申しき。心細くこそ候へ」と、入道相國を切諫したる、素より宜なり。若し夫、唯機會だにあらしめば、弓をひいて平氏政府に反かむとするもの、豈獨り、院の近臣に止らむや。一葉落ちて天下の秋を知る。平治の亂以來、茲に十八星霜、平氏は此陰謀に於て、始めて其存在の價値を問はむとするものに遭遇したり。是、壽永元曆の革命が、漸くに其光芒を現さむとするを徵するものにあらずや。

かくの如くにして、平氏政府は、浮島の如く、其根柢より動搖し來れり。然れ共、吾人は更に恐るべき一勢力が、平氏に對して終始、反抗的態度を、渝へざりしを忘るべからず。

更に恐るべき一勢力とは何ぞや。曰く南都北嶺の僧兵也。僧兵なりとて妄に笑ふこと勿れ。時代と相容るゝ能はざる幾多、不羈不絆の快男兒が、超世の奇才を抱いて空しく三尺の蒿下に槁死することを得ず。遂に南都北嶺の緇衣軍に投じて、僅にその幽憤をやらむとしたる、彼等の心事豈憫む可からざらむや。請ふ再吾人をして、彼等不平の徒を生ぜしめたる、當時の社會狀態を察せしめよ。

平和の時代に於ける、唯一の衞生法は、すべてのものに向つて、自由競爭を與ふるにあり。而して覇權一度、相門を去るや、平氏が空前の成功は、平家幾十の紈袴子をして、富の快樂に沈醉せしむると同時に、又藤原氏六百年の太平の齎せる、門閥の流弊をも、蹈襲せしめたり。是に於て平氏政府は、其最も危險なる平和の時代に於て、新しき活動と刺戟とを鼓吹すべき、自由競爭と、完く兩立する能はざるアンチポヂスに立つに至りぬ。かくの如くにして社會の最も健全なる部分が、漸に平氏政府の外に集りたる、幾多の智勇辨力の徒が既に、平氏政府の敵となれる、而して平氏政府に於ける、位爵と實力とが將に反比例せむとするの滑稽を生じたる、亦宜ならずとせむや。此時にして、高材逸足の士、其手腕を振はむとする、明君の知己に遇ふ、或は可也。賢相の知遇を蒙る、亦或は可也。然れ共、若し遇ふ能はずンば、彼等は千里の駿足を以て、彼等の轗軻に泣き、彼等の不遇に歎じ、拘文死法の中に宛轉しつゝ、空しく槽櫪の下に朽死せざる可からず。夫、呑舟の大魚は小流に遊ばず。「男兒志願是功名」の壯志を負へる彼等にして無意義なる繩墨の下に其自由の餘地を束縛せられむとす。是豈彼等の堪ふる所ならむや。是に於て、彼等の或者が、「衆人皆醉我獨醒」を晒ひて佯狂の酒徒となれるが如き、彼等の或者が麥秀の悲歌を哀吟して風月三昧の詩僧となれるが如き、はた、彼等の或者が、滿腔の壯心と痛恨とを抱き去つて南都北嶺の圓頂賊に投ぜしが如き、素より亦怪しむに足らざる也。加ふるに彼等僧兵の群中には幾多、市井の悪少あり、幾多山林の狡賊あり、而して後年明朝の詩人をして「横飛双刀亂使箭、城邊野艸人血塗」と歌はしめたる、幾多、慓悍なる日本沿海の海賊あり。是等の豪猾が、所謂堂衆なる名の下に、白晝劍戟を横へて天下に横行したる、彼等の勢力にして恐るべきや知るべきのみ。想ひ見よ、幾

千の山法師が、日吉權現の神輿を擁して、大法鼓をならし、大法螺を吹き、大法幢を飜し、咄々として、禁闕にせまれるの時、堂々たる卿相の肝膽屢〻是が爲に寒かりしを。狂暴狼藉眼中殆ど王法なし。彼等が横逆の前には白河天皇の英明を以てするも、「天下朕の意の如くならざるものは、山法師と双六の釆と鴨川の水とのみ」と浩歎し給はざるを得ざりしにあらずや。

然れ共、彼等の恐るべきは是に止らざる也。彼等は、彼等の兵力以外に、更に更に熱烈なる、火の如き信仰を有したりき。彼等は上、王侯を知らず、傍、牧伯を恐れず、彼等は僅に唯佛恩の慈雨の如くなるを解するのみ。然り、彼等は、より剛勇なるサラセンの健兒也。苟も、佛法に反かむとするものは、其攝關たると、弓馬の家たると、はた、萬乘の尊たるとを問はず、悉く彼等の死敵のみ。既に彼等の死敵たり、彼等は何時にても、十萬横磨の劍を驅つて、之と戰ふを辭せざる也。見よ、西乘坊信救は「太政入道淨海は、平家の糟糠、武家の塵芥」と痛罵して、憚らざりしにあらずや。彼の眼よりすれば、海内の命を掌握に斷ぜる入道相國も、唯是剛情なる老黃牛に過ぎざる也。しかも彼等は、平刑部卿忠盛が、弓を祇園の神殿にひきしより以來、平氏に對して止むべからざる怨恨を抱き、彼等の怨恨は、平氏の常に執り來れる高壓的手段によつて、更に萬斛の油を注がれたるをや。所謂、青天に霹靂を下し、平地に波濤を生ずるを顧みざる彼等にして、危險なる不平と恐怖すべき兵力を有し、しかも、觸るれば手を爛焼せむとする、宗教的赤熱を帶ぶ、天下一朝動亂の機あれば、彼等が疾風の如く起つて平氏に抗するは、智者を待つて後始めて、知るにあらざる也。

かくの如くにして、卿相の反感と、院の近臣の陰謀とは、疎膽、雄心の入道相國をして、遂に禍

原遷都の窮策に出で、僅に其横暴を免れしめたる、烈々たる僧兵の不平と一致したり。しかも、平氏は獨り彼等の反抗を招きたるに止らず、今や入道相國の政策の成功は、彼が滿幅の得意となり、彼が滿幅の得意は彼が空前の榮華となり、彼が空前の榮華は、時人をして「入る日をも招き返さむず勢」と、驚歎せしめたる彼が不臣の狂悖となれり。天下は亦平氏に對して少からざる怨嗟と不安とを、感ぜざる能はざりき。彼が折花攀柳の遊宴を恣にしたるが如き、彼が一豎子の私怨よりして關白基房の輦車を破れるが如き、將彼が赤袴三百の童兒をして、飛語巷說を尋ねしめしが如き、平氏が天下に對して其同情を失墜したる亦宜ならずとせず。是に於て平氏政府は、刻々ピサの塔の如く、傾き來れり。

然れ共、平氏が猶其の覆滅を來さざりしは、實に小松内大臣が、圓融滑脫なる政治的手腕による所多からずンばあらず。吾人は敢て彼を以て、偉大なる政治家となさざるべし。さはれ彼は、夏日恐るべき乃父淸盛を扶けて、冬日親むべき政略をとれり。如何に彼が其直覺的烱眼に於て、入道相國に及ばざるにせよ、如何に彼が組織的頭腦に於て、信西入道に劣る遠きにせよ、如何に一身の安慰を冥々に求めて、公義に盡すこと少きの譏を免れざるにせよ、如何に智足りて意足らず、意足りて手足らず、隔靴搔痒の憂を抱かしむるものあるにせよ、吾人は少くも、彼が大臣たる資格を備へたるを、認めざる能はず。彼は一身を以て、嫉妬に充滿したる京師の空氣と、烈火の如き入道相國との衝突を融和しつゝも、尙彼の一門の政治的生命を强固ならしめ、上は朝廷と院とに接し、下は野心ある卿相に對し、勵精、以て調和一致の働をなさむと欲したり。彼はこれが爲に、一國の重臣私門の成敗に任ずべからざるを說いて、謀主成親の死罪を宥めたりき。彼はこれ

が爲に、君臣の大義を叫破して法皇幽屏の暴擧を戒めたりき。彼が世を終る迄は、天下未平氏を去らず。入道相國の如きも、動もすれば暴戻不義の擧を敢てしたりと雖も、猶一門を統率して四海の輿望を負ふに堪へたりし也。彼若し逝かずンば、西海の沒落は更に幾年の遲きを加へたるやも亦知るべからず。惜むべし、彼は、治承三年八月三日を以て、溘焉として白玉樓中の人となれり。彼一度逝く、入道相國は恰も放たれたる虎の如し。其狂悖の日に募るに比例して、天下は益〻平氏にそむき、一波先づ動いて萬波次いで起り、遂に、又救ふ可らざる禍機に陷り了れり。加ふるに、京師に祝融の災あり。飈風地震惡疫亦相次いで起り、庶民堵に安ぜず、大旱地を枯らして、甸服の外、空しく赤土ありて靑苗將に盡きなむとす。「平家には、小松の大臣殿こそ心も剛に謀も勝れておはせしが、遂に空しくなり給ひぬ。今は何の憚る所ぞ。御邊一度立つて麾かば天下は風の如く、靡きなむ。」と、勇僧文覺をして、抃舞、蛭ケ小島の流人を說かしめしは、實に此時にありとなす。平氏政府の命數は、既に眉端に迫れる也。危機實に一髮。

天下の大勢が、かくの如く革命の氣運に向ひつゝありしに際し、諸國の源氏は如何なる狀態の下にありし乎。願くは吾人をして、語らしめよ。嘗て、東山東海北陸の三道にわたり、平氏と相並んで、鹿を中原に爭ひたる源氏も、時利あらず、平治の亂以來逆賊の汚名を負ひて、空しく東國の莽蒼に雌伏したり。然りと雖も八幡公義家が、馬を朔北の曠野に立て、亂鴻を仰いで長驅、安賊を鏖殺したる、當年の意氣豈悉消沈し去らむ哉。革命の激流一度動かば、先平氏政府に向つて三尖の長箭を飛ばさむと欲するもの、源氏を措いて又何人かある。是平氏政府自身が恆に戒心したる所にあらずや。

然り、源氏は眞に平氏の好敵手たるに恥ぢず。彼は平氏に對する勁敵中の勁敵也。賴義家が前九後三の禍亂を鎭めしより以來、東國は其半獨立の政治的天地となり、武門の棟梁は、其因襲的の尊稱となれり。しかも平氏は、平氏自身の立脚地が西國にあるを知りしを以て、敢て其得意なる破壞的政策を東國に振はず。（恐らくは是最も賢き、最も時機に適したる政策なりしならむ）勇夫と悍馬とに富める、茫々たる東國の山川は、依然として、源氏の掌中に存したり。約言すれば、保元平治以前の源氏と保元平治以後の源氏とは其東國に有せる勢力に於て殆ど何等の徑庭をも有せざりし也。然りと雖も、彼等の勢力は未だ以て中原を動かすに足らざりき。駿河以東十餘ヶ國の山野は、野州の双虎と稱せられたる小山足利の兩雄、白河の御館と尊まれたる越後の城氏、慓悍、梟勁を以て知られたる甲斐源氏の一黨、はた、下總に龍蟠せる千葉氏の如き、幾多の豪族を其中に擁したりと雖も、覇を天下に稱ふるものは、僅に、所謂、周東、周西、伊南、伊北、廳南、廳北の健兒を糾合して八州に雄視する、上總の霸王上總介氏と、十七萬騎の貫主、北奧の蒼龍、雄名海內を風靡せる藤原秀衡との兩氏あるのみ。而して、此双傑の勢力を以てするも、猶、後顧の憂なくして西上の旗を飜すは、到底不可能の事となさざる可らず。何となれば彼等は、猶個々の小勢力なりしを以て、しかも互に相掣肘しつゝありしを以て也。遮莫、彼等は過飽和の溶液也。一度之に振動を與へむ乎、液體は忽に固體を析出する也。一度革命の氣運にして動かむ乎、彼等は直に劍を按じて蹶起するを辭せざる也。彼等豈恐れざる可からざらむや。然れども彼等は、未平氏に對して比較的從順なる態度を有したりき。請ふ彼等を以て、妄に生を狗鼠の間に偸むものとなす勿れ。彼等が平氏に對して溫和なりしは、唯平氏が彼等に對して溫和なりしが爲のみ。嘗

て、吾人の論ぜしが如く、平氏の立脚地は西國にあり。平氏にして、相印を帶びて天下に臨まむと欲せば、西國の經營は、其最も重要なる手段の一たらずンばあらず。さればこそ、入道相國の烱眼は、瀨戶內海の海權を收めて、四國九州の勢力を福原に集中するの急務なるを察せしなれ。西南二十一國が平氏の守介を有したる豈此間の消息を洩したるものにあらずや。既に平氏にして西國の經營に盡瘁す。東國をして單に現狀を維持せしめむとしたるが如き、亦怪しむに足らざる也。而して、自由を愛する東國の武士は此寬大なる政策に謳歌したり。謳歌せざる迄も悅服したり。悅服せざる迄も甘受したり。彼等は實に此優遇に安じて二十年を過ぎたりし也。然れ共今や平氏は完く其成功に沈醉したり。而して平氏の醉態は、平氏自身をして天下の怨府たらしめしが如く、亦東國の武士をして少からざる不快を抱かしめたり。嘗て、馬を彼等と並べて、銀兜緋甲、王城を守れる平門の豎子が、今は一門の榮華を誇りて却て彼等に加ふるに痴人猶波夜塘水の嘲侮を以てするを見る、彼等の心にして焉ぞ平なるを得むや。切言すれば、彼等は、漸に其門閥の貴き意義を失はむとするを感じたり。嗚呼、「弓矢とる身のかりにも名こそ惜しく候へ」と叫破せる彼等にして、焉ぞ此侮蔑に甘ずるを得むや。加ふるに大番によりて京師に往來したる多くの豪族は、京師に橫溢せる、危險なる反平氏の空氣を、冥默の間に彼等の胸奧に鼓吹したり。而して、平氏が法皇幽屛の暴擧を敢てすると共に、久しく鬱積したる彼等の不快は、一朝にして勃々たる憤激となれり。

しかも、天下の風雲は日に日に急にして、革命的氣運は、將に暗潮の如く湧き來らむとす。是に於て、彼等の野心は、漸に動き來れり。野心は如何なる場合に於ても人をして、其力量以上の事

業をなさしめずンばやまず。泰山を挾みて北海を越えしむるものは野心也。精衞をして滄溟を埋めしむるものは野心也。所謂天民の秀傑なる、智勇辨力ある彼等が、大勢の將に變ぜむとするを見て、抑ふべからざる野心を生じ來れる、固より宜なり。旣に彼等にして、其最大の活動力たる、野心と相擁す、彼等が天荒を破つて、革命の明光を、捧げ來る日の、近かるべきや知るべきのみ。啻に野心に止らず、平氏の暴逆は、又彼等をして、二十周星の久しきに及びて、殆ど忘れられたる源氏の盛世を、想起せしめたり。彼等は彼等が、旌旗百萬、昂然として天下に大踏したる、彼等が得意の時代を追憶したり。而して、顧みて、平氏の跳梁を見、源氏の空しく蓬蒿の下に蟄伏したるを見る、彼等が懷舊の涙は、滴々、彼等が雄心を刺戟したり。彼等はかくの如くにして、彼等の登龍門が今や目前に開かれたるを感じたり。彼等は其傳家丈八の緑沈槍を、ふるふべき時節の到來したるを覺りたり。治承四年、長田入道が、惶懼、書を平忠淸に飛ばして、東國將に事あらむとするを告げたるが如き、革命の曙光が、旣に紅を東天に潮したるを表すものにあらずや。今や熱烈なる東國武士の憤激と、彼等が胸腔に滿々たる野心と、復古的、革命的の思想を鼓吹すべき、懷舊の涙とは、自ら一致したり。若し一人にしてかくの如くンば一人を擧げて動く也。天下にしてかくの如くンば、天下を擧げて動く也。動亂の氣運、漸に天下を動かすと共に、社會の最も健全なる部分――平氏政府の厄介物たる、幾十の卿相、幾百の院の近臣、幾千の山法師、は未だ幾萬の東國武士の眼中には、旣に平氏政府の存在を失ひたり。彼等の腦裡には、入道相國も一具の骸骨のみ。平門の畫眉涅齒も唯是瓦鷄土犬のみ。西八條の碧瓦丹檐も、亦丘山池澤のみ。要言すれば、社會の直覺的本能は、旣に平氏政府の亡滅を認めたり。反言すれば、精神的革命は旣

に冥默の中に、成就せられたり。夫、燈は油なければ、即ち滅し、魚は水なければ、即ち死す。天下の人心を失ひたる平氏政府が、日一日より、沒落の悲運に近づきたる、豈、宜ならずとせむや。然り、桑樹に對して太息する玄德、青山を望ンで默測する孔明、玉璽を擁して疾呼する孫堅、蒼天を仰いで苦笑する孟德、蛇矛を按じて踴躍する翼德、彼等の時代は漸に來りし也。之を譬ふれば、當時の社會狀態は、恰も蝕みたる老樹の如し。其仆るゝや、日を數へて待つべきのみ。天下動亂の機は、旣に熟したる也。

「外よりは手もつけられぬ要害を中より破る栗のいがかな。」しかも平氏が堂上の卿相四十三人を陟罰して、後白河法皇を鳥羽殿に幽し奉り、新院に迫りて其外孫たる三歲の皇子を册立せし橫暴は、更に、其亡滅の日をして早からしめたり。是に於て、小松內大臣の薨去によりて我事成れりと抃舞したる、十のマラー、百のロベスピエールは、平氏政府の命數の旣に目睫に迫れるを見ると共に、劍を撫し手に唾して、蹶起したり。夫、天下は平氏の天下にあらず、天下は天下の天下也。平門の犬羊、いづれの日にか、其跳梁を止めむとする。嗚呼、誰か天火を革命の聖壇に燃やして、長夜の闇を破るものぞ、誰か革命の角笛を吹いて、黑甜鄉裡の逸眠を破るものぞ。果然、老樹は仆れたり。平等院頭、翩々として、ひるがへる白旗を見ずや。

然り、革命の風雲は、細心、廉悍の老將、源三位賴政の手によつて、飛ばされたり。

彼は、源攝津守賴光の玄孫、源氏一流の嫡流なりき。然れども、平治以降、彼は、平氏を扶けたるの多きを以て、對平氏關係の甚、圓滿なりしを以て、平氏が比較的彼を優遇したるを以て、平氏を外にしては、武臣として、未其比を見ざる、三位の高位を得たり。若し彼にして平和を愛せし

めしならば、或は榮華を平氏と共にして、溫なる昇平の新夢に沈睡したるやも亦知るべからず。さはれ、老驥櫪に伏す。志は千里にあり。彼は滔々たる天下と共に、太平の餘澤に謳歌せむには、餘りに不羈なる豪骨を有したりき。彼は、群を離れたる鴻雁なれども、猶萬里の扶搖を待つて、双翼を碧落に振はむとするの壯心を有す。彼は平門の紈袴子が、富の快樂に沈醉して、七香の車、鸚鵡の杯、揚々として、芳權一朝の豪華を誇りつゝありしに際し、其烱眼を早くも天下の大勢に注ぎたり。而して、彼は既に、平門の惰眠を破る曉鐘の聲を耳にしたり。彼は思へり「平家は、榮華身に餘り、積惡年久しく、運命末に望めり」と。彼は思へり「上は天の意に應じ、下は地の利を得たり、義兵を擧げ逆臣を討ち、法皇の叡慮を慰め奉らむ」と。彼は思へり「六孫王の苗裔、源氏の家子郎等を、駈具せば天が下何ものをか恐るべき」と。胸中の成竹既に定まる。彼は是に於て、其袖下に隱れて大義を天下に唱ふべき名門を求めたり。而して彼の擁立したるは、實に後白河法皇の第二の皇子、賢明人に超え給へる、而して未親王の宣下をも受け給はざる、高倉宮以仁王なりき。見よ。彼の烱眼は此點に於ても、事機を見るに過たざりしにあらずや。彼は近く平治の亂に於て主上上皇の去就が、よく源平兩氏の命運を制したるを見たり。彼は、朝家を挾ンで天下に號令するの、天下をして背く能はざらしむる所以なるを見たり。而して彼は、宣旨院宣、共に平氏の手中に存するの時に於て、九重雲深く濛として、日月を仰ぐ能はざるの時に於て、革命の壯圖を鼓舞せしむるに足るは、唯、竹園の令旨のみなるを見たり。然り、最も天下の同情を有する竹園の令旨のみなるを見たり。彼が以仁王を擁立したる所以は、實に職として是に存す。かくの如くにして彼の陰謀は、歩一歩より實際の活動に近き來れり。而して治承四年五月、革命の

旗は遂に、皓首の彼と長袖の宮との手によつて、飜されたり。天下焉ぞ雲破れて靑天を見るの感なきを得むや。
然れ共、彼、事を南都に擧げむとして得ず、平軍是を宇治橋に要し、宇治川を隔てて大に戰ふ。劍戟相交ること一日。平軍既に鞭を宇治川に投じ流を斷つて、源軍に迫る。是に於て革命軍の旗幟頻に亂れ、源軍討たるゝ者數を知らず。驍悍を以て天下に知られたる渡邊黨亦算を亂して仆れ、赤旗平等院を圍むこと竹圍の如し。弓既に折れ箭既に盡く、英風一世を掩へる源三位も遂に其一族と共に自刃して亡び、高倉宮亦南都に走らむとして途に流矢に中りて薨じ給ひぬ。かくして革命軍の急先鋒は、空しく敗滅の恥を蒙り了れり。
さもあらばあれ、こは一時の敗北にして、永遠の勝利なりき。壽永元曆の革命は、彼によつて其導火線を點ぜられたり。彼は、荒鷄の曉に先だちて曉を報ずるが如く、哀蟬の秋に先だちて秋を報ずるが如く、革命に先だちて革命を報じたり。あらず、革命に先だちて革命の風雲を動かしたり。彼は、ルーテルたらざるもヨハネスフツス也。項羽たらざるも陳勝呉廣也。彼の播きたる種子は小なれども、參天の巨樹は、此中より生じ來れり。彼は、彼自身を犧牲として、天下の源氏を激勵したり。彼は活ける模範となりて天下の源氏を蹶起せしめたり。然り彼は一門の子弟に彼の如くなせと敎へたり、而して爲せり。此時に於ては、懦夫も猶立つべし。況や、氏神と傳說とを同うせる、雲の如き天下の源氏にして、何ぞ徒然として止まむや。
「花をのみまつらむ人に山里の、雪間の草の春を見せばや。」殘雪の間に萌え出でたる嫩草の綠は、既に春の來れるを報じたり。柏木義兼は近江に立ち、別當湛增は紀伊に立ち、源兵衞佐は伊豆に

立ち、木曾冠者は信濃に立てり。今や平家十年の榮華の夢の醒むべき時は漸に來りし也。

二　革命軍

頼政によりて刺戟を與へられ、更に以仁王の令旨によりて擧兵の辭を與へられたる革命軍は、百川の旭の出づる方に向つて走るが如く、刻一刻により、平氏政府に迫り來れり、而して此焦眉の趨勢は遂に、平氏政府に於て福原の遷都を喚起せしめたり。請ふ吾人をして福原の遷都を語らしめよ。何となれば此一擧は、入道相國が政治家としての長所と短所とを、最も遺憾なく現したればば也。

彼は、一花開いて天下の春を知るの、直覺的烱眼を有したりき。而して又彼が政治家としての長所は、實に唯此大所を見るの明に存したりき。吾人は、彼が西海を以て其政治的地盤としたるに於て、彼の家人をして諸國の地頭たらしめしに於て、海外貿易の鼓吹に於て、音戸の瀨戸の開鑿に於て、經ヶ島の築港に於て、彼が識見の宏遠なるを見る、未嘗て源兵衞佐の卓識を以てするも武門政治の創業者としては遂に彼の足跡を踏みたるに過ぎざるを思はずンばあらず。(固より彼は多くの點に於て、頼朝の百尺竿頭更に及ぶべからざるものありと雖も)見よ、彼は瀨戸内海の海權に留意し、其咽喉たる福原を以て政權の中心とするの得策なるを知れり。彼は南都北嶺の恐るべき勢力たるを看取し、若し、彼等にして一度相應呼して立たば、京都は其包圍に陷らざるべからざるを知れり。而して彼が此胸中の畫策は、源三位の亂によりて、反平氏の潮流の滔々として止るべからざるを知ると共に、直に彼をして福原遷都の英斷に出でしめたり。彼が治承四年六月

三日、宇治橋の戰ありて後僅に數日にして、此一擧を敢てしたる、是豈彼が烱眼の甚だ明、甚だ敏、甚だ弘なるを表すものにあらずや。福原の遷都はかくの如く彼が急進主義の經綸によつて行はれたり。然れども彼は此大計を行ふに於て、餘りに急激にして、且餘りに强靭なりき。約言すれば、福原の遷都は彼が長所によつて行はれ、彼が短所によつて、破れたりき。

彼は、より無學にして、しかも、より放恣なる王安石也。彼は常に一の極端より他の極端に走りたりき。彼は今日計を定めて、明日其效を見るべしと信じたりき。詳言すれば彼は理論と事實との間に、幾多の商量すべく、打算すべく、加減すべき磨擦あるを知らざりき。而して又彼は、彼が信ずる所を行はむが爲には、直線的の突進を敢てするの執拗を有したりき。彼の眼中には事情の難易なく、形勢の可否なく、輿論の輕重なく、唯彼の應に行はざる可からざる目的と之を行ふべき一條の徑路とを存せしのみ。王安石は云へり「人の臣子となりては、當に四海九州の怨を避くべからず」と。彼をして答へしめば、將に云ふべし「一門の榮華を計りては、天下の怨を避くべからず」と。然れども彼の刈りたるは、僅に彼の蒔ききたるものの半ばに過ぎざりき。彼は其目的を行はむには、餘りに其手段を選ばざりき。餘りに輿論を重んぜざりき、餘りに、單刀直入にすぎたりき。彼は、疲馬に鞭ちて、百尺の斷崖を越えむと試みたり。而して、越え得べしと信じたりき。是豈、却て疲馬を死せしむるものたらざるなきを得むや。

彼が遷都の壯擧を敢てするや、彼は、桓武以來、四百年の歷史を顧みざりき。彼は「おたぎの里のあれやはてなむ」の哀歌に耳を傾けざりき。一世の輿論に風馬牛なる、かくの如くにして猶遷都の大略を行はむと欲す、豈夫得べけむや。果然、新都の老若は聲を齊うして、舊都に還らむこと

を求めたり。而して彼の動かすべからざる自信も是に至つて、聊か欹傾せざる能はざりき。彼は始めて、舊都の規模に從つて福原の新都を經營するの、多大の財力を費さざる可からざるを見たり。而して此財力を得むと欲せば、遷都の不平よりも更に大なる不平を蒙らざる可からざるを見たり。しかも頭を回らして東國を望めば、蛭ケ小島の狡兒、兵衛佐頼朝は二十萬の源軍を率ゐて、既に足柄の嶮を越え、旌旗劍戟岳南の原野を掩ひて、長驅西上の日將に近きにあらむとす。彼の胸中にして、自ら安ずる能はざりしや、知るべきのみ。加ふるに嫡孫維盛の恥づべき敗軍(治承四年十月)は、東國の風雲益〻急にして、革命の氣運既に熟せるを報じたるに於てをや。是に於て、彼は福原に退嬰するの平氏をして、天下の怨府たらしむる所以なるを見、一步を退くの東國の源氏をして、遠馭長駕の機を得しむるを見、遂に策を決して、舊都に還れり。嗚呼、彼が遷都の英斷も、かくの如くにして、空しく失敗に陷り了りぬ。

今や、平氏の危機は目睫の間に迫り來れり。維盛の征東軍、未一矢を交へざるに空しく富士川の水禽に驚いて走りしより、近江源氏、先響の如く應じて立ち、別當湛增亦紀伊に興り、短兵疾驅、莊園を燒掠する、數を知らず。園城寺の緇衣軍、南都の圓頂賊、次いで動く事、雲の如く、將に、旗鼓堂々として、平氏政府を劫さむとす。是豈、烈火の如き入道相國が、よく坐視するに堪ふる所ならむや。然り、彼は舊都に歸ると共に、直に天下を對手として、赤手をふるひて大挑戰を試みたり。彼が軌道以外の彗星的運動は、實に是に至つて其極點に達したりき。如何に彼が破壞的政策にして、果鋭峻酷なりしかは、左に揭ぐる冷なる日曆之を證して餘りあるにあらずや。

○治承四年十月二十三日　入道相國福原の新都を去り、同二十六日京都に入る。

○十二月二日　平知盛等を東國追討使として關東に向はしむ。
○同十日　淡路守清房をして、園城寺をうたしむ。山門の僧兵園城寺を扶けて、平軍と山科に戰ふ。
同日　清房園城寺を火き、緇徒を屠る。
○同二十五日　藏人頭重衡をして、南都に向はしむ。
○同廿八日　重衡、兵數千を率ゐて興福寺東大寺を火き、一宇の僧房を止めず、梟首三十餘級。
○同廿九日　重衡都へ歸る。

彼が駕を舊都に還してより、僅に三十餘日、しかも其傍若無人の行動は、實に天下をして驚倒せしめたり。彼は、時代の信仰を憚らずして、伽藍を火くを恐れざりき。然れども彼は僧徒の橫暴を抑へむが爲に、然かせるにあらず。內、自ら解體せむとする政府を率ゐ、外、猛然として來り迫る革命の氣運に應ぜむには、先、近畿の禍害を掃蕩するの急務なるを信じたるが爲めのみ。而して彼は、此一擧が平氏政府の命運を繫ぎたる一縷の糸を切斷せしを知らざる也。彼が此破天荒の痛擊は、久しく平氏が頭上の瘤視したる南都北嶺をして、遂に全く屛息し去るの止むを得ざるに至らしめたりと雖も、平氏は之が爲に更に大なる僧徒の反抗を喚起したり。啻に僧徒の反抗を招きたるのみならず、又實に醇篤なる信仰を有したる天下の蒼生をして、佛敵を以て平氏を呼ばしむるに至りたりき。形勢、既にかくの如し。自ら蜂巢を破れる入道相國と雖も、焉ぞ弃命に疲れざるを得むや。時人謠ひて曰く「咲きつゞく花の都をふりすてて、風ふく原の末ぞあやふき」と、然り眞に「風ふく原の末ぞ」あやふかりき。平氏は、福原の遷都を、掉尾の飛躍として、治承より養和に、養和より壽永に、壽永より元曆に、元曆より文治に、圓石を萬仞の峯頭より轉ずるが如

く、刻々亡滅の深淵に向つて走りたりき。

將門、將を出すと云へるが如く、我木曾義仲も亦、將門の出なりき。彼は六條判官源爲義の孫、帶刀先生義賢の次子、木曾の山間に人となれるを以て、時人稱して木曾冠者と云ひぬ。久壽二年二月、義賢の惡源太義平に戮せらるゝや、義平、彼の禍をなさむ事を恐れ、畠山庄司重能をして、彼を求めしむる、急也。重能彼の幼弱なるを憫み、竊に之を齋藤別當實盛に託し、實盛亦彼を東國にあらしむるの危きを察して、之を附するに中三權頭兼遠を以てしぬ。而して中三權頭兼遠は、實に木曾の溪谷に雄視せる豪族の一なりき。時に彼は年僅に二歳、彼のローマンチックなる生涯は、既に是に兆せし也。

吾人は、彼の事業を語るに先だち、先づ木曾を語らざるべからず。何となれば、彼の木曾に在る二十餘年、彼の一生が此間に多大の感化を蒙れるは、殆ど疑ふべからざれば也。請ふ吾人をして源平盛衰記を引かしめよ。曰、

木曾と云ふ所は究竟の城廓なり、長山遙に連りて禽獸稀にして嶮岨屈曲也、溪谷は大河漲り下つて人跡亦幽なり、谷深く棧危くしては足を峙てて歩み、峯高く巖稠しては眼を戴せて行く、尾を越え尾に向つて心を摧き、谷を出で谷に入つて思を費す、東は信濃、上野、武藏、相摸に通つて奧廣く、南は美濃國に境道一にして口狹し、行程三日の深山也。縱、數千萬騎を以ても攻落すべき樣もなし、況や、棧梯引落して栖籠らば、馬も人も通ふべき所にあらずと。

是、東海の蜀道にあらずや。惟ふに凾谷の嶮によれる秦の山川が、私闘に怯にして公戰に勇なる秦人を生めるが如く、革命の氣運旣に熟して天下亂を思ふの一時に際し、昂然として大義を四海に唱へ、幾多慓悍なる革命の健兒を率ゐ、長驅、六波羅に迫れる旭日將軍の故鄕として、はた其事業の立脚地として、恥ぢざるの地勢を有したりと云ふべし。然り、彼が一世を空うするの霸氣と、彼が旗下に投ぜる木曾の健兒とは、實に、木曾川の長流と木曾山脈の絕嶺とに擁せられたる、此二十里の大峽谷に養はれし也。然らば彼が家庭は如何。麻中の蓬をして直からしむものは、蓬邊の麻也。英雄の兒をして英雄の兒たらしむるものは其家庭也。是ハミルカルありて始めてハンニバルあり、項梁ありて始めて項羽あり、信秀ありて始めて信長あるの所以、鄭家の奴學ばずして、詩を歌ふの所以にあらずや。思うて是に至る、吾人は遂に、彼が乳人にして、しかも彼が先達たる中三權頭兼遠の人物を想見せざる能はず。彼の義仲に於ける、猶北條四郞時政の賴朝に於ける如し。彼は、より朴素なる張良にして、此は、より老猾なる范增なれども、共に源氏の冑子を擁し、大勢に乘じて中原の鹿を爭はしめたるに於ては、逐に其歸趣を同くせずンばあらず。義仲が革命の旗を飜して檄を天下に傳へむとするや、彼は踴躍して「其料にこそ、君をば此二十年まで養育し奉りて候へ、かやうに仰せらるゝこそ八幡殿の御末とも思させませませ」と叫びたりき。「立馬吳山第一峯」の野心、此短句に躍々たるを見るべし。始め、實盛の義仲をして彼が許に在らしむるや、彼は竊に「今こそ孤にておはしますとも、武運開かば日本國の武家の主ともなりや候はむ。いかさまにも養立てて、北陸道の大將軍ともなし奉らむ」と獨語したりき。彼が、雄心勃々として禁ずる能はず、機に臨ンで其驥足を伸べむと試みたる老將たりしや知るべきのみ。年

少氣鋭、不盡の火其胸中に燃えて止まざる我義仲にして斯老の膝下にある、焉ぞ其心躍らざるを得むや。彼が悍馬に鞭ちて疾驅するや、彼が長弓を横へて雉兎を逐ふや、彼は常に「これは平家を攻むべき手ならひ」と云へり。かゝる家門の歴史を有し、かゝる溪谷に人となり、而してかゝる家庭に成育せる彼は、かくの如くにして其烈々たる青雲の念を鼓動せしめたり。彼は實に木曾の健兒也。其一代の風雲を捲き起せるの壯心、其眞率にして自ら忍ぶ能はざるの血性、其火の如くなる功名心、皆、此「上有横河斷海之浮雲、下有衝波逆折之回川」の木曾の高山幽谿の中に磅礴したる、家庭の感化の中より得來れるや、知るべきのみ。吾人既に彼が時勢を見、既に彼が境遇を見る、彼が如何なる人物にして、彼が雄志の那邊に向へるかは、吾人の解説を待つて之を知らざる也。今や、跼天蹐地の孤兒は漸くに青雲の念燃ゆるが如くなる青年となれり。而して彼は滿腔の霸氣、鬱勃として抑ふべからざると共に、短褐孤劍、飄然として天下に放浪したり。彼が此數年の放浪は、實に彼が活ける學問なりき。吾人は彼が放浪について多く知る所あらざれども、彼は屢々京師に至りて六波羅のほとりをも徘徊したるが如し。彼は、恐らく、此放浪によりて天下の大勢の眉端に迫れるを、最も切實に感じたるならむ。恐らくは又、其功名の念にして、更に幾斛の油を注がれたりしならむ。想ふ、彼が獨り京洛の路上に立ちて、平門の貴公子が琵琶を抱いて落花に對するを望める時、殿上の卿相が玉笛を吹いて春に和せるを仰げる時、はた入道相國が輦車を驅り、兵仗を從へ、儀衛堂々として、濶歩せるを眺めし時、必ずや、彼は其胸中に幾度か我とつて代らむと叫びしなるべし。然り、彼が天下を狹しとするの雄心は、實に此放浪によつて、養はれたり。彼が靈火は刻一刻より燃え來れり。彼は屢々長劍を按じたり。然れども、彼は猶、機を窺

うて動かざりき。將に是、池中の蛟龍が風雲の乘ずべきを待ちて、未立たざるもの、唯機會だにあらしめば、彼が鵬翼の扶搖を搏つて上ること九萬里、靑天を負うて南を圖らむとする日の近きや知るべきのみ。思ふに、彼は、鹿ケ谷の密謀によりて、小松內府の薨去によりて、南都北嶺の反心によりて、平賊の命運、旣に旦夕に迫れるを見、竊に莞爾として時の到らむとするを視せしならむ。然り、機は來れり、バスチールを壞つべきの機は遂に來れり。天下は高倉宮の令旨と共に、海の如く動いて革命に應じたり。而して、彼が傳家の白旗は、始めて木曾の山風に飜されたり。時に彼、年二十七歲、赤地の錦の直垂に、紫裾濃の鎧を重ね、鍬形の兜に黃金づくりの太刀、鷗尻に佩き反らせたる、誠に皎として、玉樹の風前に臨むが如し。天下風を仰いで其旗下に集るもの、實に五萬餘人、根井大彌太行親は來れり、楯六郞親忠は來れり、野州の足利、甲州の武田、上州の那和、亦相次いで翕然として來り從ひ、革命軍の軍威隆々として大に振ふ。圖南の鵬翼、旣に成れり。是に於て、彼は戰鼓を打ち旌旗を連ね、威風堂々として、南信を出で、軍鋒の向ふ所枯朽を摧くが如く、治承四年九月五日、善光寺平の原野に、笠原平五頼直(平氏の黨)を擊つて大に破り、次いで鋒を轉じて上野に入り、同じき十月十三日、上野多胡の全郡を降し、上州の豪族をして、爭うて其大旗の下に參集せしめたり。是實に賴朝が富士川の大勝に先だつこと十日、かくの如くにして、彼は、殆ど全信州を其掌中に收め了れり。

革命軍の飛報、頻々として櫛の齒をひくが如し。東夷西戎、並び起り、三色旗は日一日より平安の都に近づかむとす。楚歌、蓬壺をめぐつて響かむの日遠きにあらず。紅燈綠酒の間に長夜の飮

を恣にしたる平氏政府も、是に至つて遂に、震駭せざる能はざりき。如何に大狼狽したるよ。平治以來、螺鈿を鏤め金銀を裝ひ、時流の華奢を凝したる、馬鞍刀槍も、是唯泰平の裝飾のみ。一門の子弟は皆、殿上後宮の娘子軍のみ、之を以て波濤の如く迫り來る革命軍に當らむとす、豈朽索を以て六馬を馭するに類する事なきを得むや。今や平氏政府の周章は其極點に達したり。然れ共、入道相國の剛腸は猶猛然として將に仆れむとする平氏政府を挽回せむと欲したり。彼は、東軍の南海を經て京師に向はむとするを聞き、軍を派して沿海を守らしめたり。彼は西海北陸兩道の糧馬を以て、東軍と戰はむと試みたり。彼が、困憊、衰殘の政府を提げて、驀然として來り迫る革命軍に應戰したるを見る、恰も、颶風の中に立てる參天の巨樹の如き概あり。吾人思うて是に至る、遂に彼が苦衷を了せずンばあらず。關東に源兵衞佐あり、木曾に旭日將軍あり、而して京師に入道相國あり、三個の風雲兒にして各〻手に唾して天下を賭す。眞に是れ、靑史に多く比を見ざるの偉觀也。しかも運命は飽く迄も平氏に無情なりき。平宗盛を主將とせる有力なる征東軍が羽檄を天下に傳へて、京師を發せむとするの前夜（養和元年閏二月一日）天乎命乎、入道相國は俄然として病めり。征東の軍是に期を失して發せず、越えて四日、病革りて祖龍遂に仆る。赤旗光無うして日色薄し、黃埃散漫として風徒に蕭索、帶甲百萬、路に滿つれども往反の客、面に憂色あり。嗚呼、絕代の英雄兒はかくの如くにして逝けり。平門の柱石はかくの如くにして碎けたり。棟梁の材旣になし、かくして誰か成功を百里の外に期するものぞ。見よ見よ西海の沒落は刻々眉端に迫れる也。

入道相國逝いて宗盛次いで立つ。然れども彼は不肖の子なりき。彼は經世的手腕と眼孔とに於て

は殆ど乃父淨海の足下にも及ぶ能はざりき。彼は興福東大兩寺の莊園を還附し、宣旨を以て三十五ケ國に諜し興福寺の修造を命ぜしめしが如き、佛に佞し僧に諛ひ、平門の威武を墜さしむる、是より大なるは非ず。彼は直覺的炯眼に於ては乃父に劣る事遠く、天下の大機を平正穩當の間に補綴し、人をして其然るを覺えずして然らしむる、活滑なる器度に於ては、重盛に及ばず。懸軍萬里、計を帷幄の中にめぐらし、勝を千里の外に決する將略に於ては我義仲に比肩する能はず。しかも猶、其不學、無術を以て、天下の革命軍に對せむとす。是、赤手を以て江河を支ふるの難きよりも、難き也。泰山既に倒れ豎子台鼎の重位に上る、革命軍の意氣は愈〻昂れり。しかも、此時に於て平氏に致命の打擊を與へたるは、實に其財政難なりき。平家物語の著者をして「おそらくは、帝闕も仙洞もこれにはすぎじとぞ見えし」と、驚歎せしめたる一門の榮華は、遂に平氏の命數をして、幾年の短きに迫らしめたり。夫水竭れば魚盆〻躍る。是に於て平氏は、恰も傷きたる猪の如く、無二無三に過重なる收斂を以て、此窮境を脫せむと欲したり。平氏が使者を伊勢の神三郡に遣りて、兵糧米を、充課したるが如き、はた、平貞能の九州に下りて、徭を重うし、賦を繁うし、四方の怨嗟を招きしが如き、是、平氏の財力の既に窮したるを表すものにあらずや。ああ大絃急なれば小絃絕ゆ。さらぬだに、凶年と兵亂とに苦める天下の蒼生は、今や彼等が倒懸の苦楚に堪ふる能はず、齊しく立つて平氏を呪ひ、平氏を罵り、平氏に反き、空拳を以て彼等が軛を脫せむと試みしなり。是に於て、靄の如く天下を蔽へる蒼生の不平は、忽にして、革命軍の成功を期待するの、盛なる聲援の叫となれり。しかも此危險に際して、猶諸國に命じて南都の兩寺を修せしめしが如き、傘張法橋の豚犬兒が、愚なる政策は、此聲援をして更に幾倍の大を加へ

しめたり。入道相國逝いて未三歳ならず、胡馬洛陽に嘶き、天日西海に沒せる、豈宜ならずとせむや。

吾人をして、再、我木曾義仲に、かへらしめよ。天下を麾いで既にルビコンを渡れる彼は、養和元年六月、越後の住人、城四郎長茂が率ゐる六萬の平軍と、横田川を隔てて相對しぬ。俊才、嚢中の錐の如き彼は、直に部將井上九郎光盛をして赤旗を立てて前ましめ、彼自らは河を濟り、戰鼓をうつて戰を挑み、平軍の彼が陣を衝かむとするに乘じて光盛等をして、赤旗を倒して白旗を飜し、急に敵軍を夾擊せしめて大に勝ち、遂に長茂をして越後に走らしめたり。是實に、淮陰侯が、井陘に成安君を破れるの妙策、錐は遂に悉く穎脫し了れる也。越えて八月、宗盛、革命軍の軍鋒、竹を破るが如きを聞き、倉皇として北陸道追討の宣旨を請ひ、中宮亮平通盛、但馬守平經正等を主將とせる征北軍を組織し、彼が奔流の如き南下を妨げしめたり。然れども、九月通盛等の軍、彼と戰つて大に敗れ、退いて敦賀の城に拒ぎしも遂に支ふる能はず、首尾斷絕して軍悉く潰走し、辛くも敗滅の恥を免るゝを得たり。是に於て、革命軍の武威、遠く上野、信濃、越後、越中、能登、加賀、越前を風靡し、七州の豪傑、嘯集して其旗下に投じ、劍槊霜の如くにして介馬數萬、意氣堂々として已に平氏政府を吞めり。薄倖の孤兒、木曾の野人、旭將軍義仲の得意や、知るべき也。北陸既に定まり、兵甲既に足る。彼は速に、遠馭長駕、江河の堤を決するが如き勢を以て京師に侵入せむと欲したり。而して大牙未南に向はざるに先だち、恰も關八州を席の如く巻き將に東海道を西進せむとしたる源兵衞佐賴朝によつて送られたる一封の書簡は、彼の征南を

して止めしめたり。書に曰、

平家朝威を背き奉り、佛法を亡すによりて、源家同姓のともがらに仰せて、速に追討すべき由、院宣を下され了ンぬ。尤も夜を以て日についで、逆臣を討ちて、宸襟をやすめ奉るべきのところ、十郎藏人私のむほんを起し、頼朝追討の企ありと聞ゆ。然るをかの人に同心して扶持し置かるゝの條、且は一門不合、且は平家のあざけりなり。但、御所存をわきまへず、もし異なること仔細なくば、速に藏人を出さるゝか、それさもなくば、清水殿(義仲の子清水冠者義高)をこれへ渡し玉へ、父子の義をなし奉るべし。兩條の內一も、承認なくンば、兵をさしつかはして、誅し奉るべし。

是、實に彼にとりては不慮の云ひがかりなりし也。蓋し、頼朝の彼に平ならざる所以は、嚮に、頼朝と和せずして去りたる十郎藏人行家が、彼の陣中に投じたるが爲のみにあらざりき。始め、頼朝の關八州をうちて一丸と爲さむとするや、常陸の住人信太三郎先生義廣、獨り、膝を屈して彼の足下に九拜するを潔しとせず、走つて義仲の軍に投じぬ。「爲人不忍」の彼は、義廣の枯魚の如くなる落魄を見るに堪へず、喜ンで彼をして其旗下に止らしめたり。是實に頼朝の憤れる所なりき。しかも義仲、已に霸を北陸に稱す、汗馬刀槍、其掌中にあり、鐵騎甲兵、其令下にあり。彼にして一たび野心を挾まむ乎、帶甲百萬、鼙鼓を撃つて鎌倉に向はむの日遠きにあらず、是實に頼朝の畏れたる所なりき。加ふるに義仲と快からざる、武田信光が、好機逸すべからずとして、彼を頼朝に讒したるに於てをや。三分の恐怖と七分の憤怨とを抱ける頼朝は、是に於て、怫然として書を彼に飛ばしたり。而して自ら十萬の逞兵を率ゐて碓日を越え、馬首東を指して彼と雌雄

を決せむと試みたり。今やかくの如くにして、革命軍の兇星は、戟を横へて茫漠たる信の山川に其勇を競はむとす、天下の大勢は彼が一言に關れり。彼は直に諸將を集めて問へり。「戰はむ乎否乎」と、諸將躍然として答へて曰「願くは戰はむ」と、彼、默然たり。諸將再切齒して曰「願くは、臣等の碧蹄、八州の草を蹂躙せむ」と、然れども、彼は猶答へざりき。彼は遂に情の人也。彼はよ、戈を逆にして一門の血を流さむには、餘りに人がよすぎたり。彼は此無法なる云ひがかりに對しても、猶、頼朝を骨肉として遇したり。而して彼は、遂に義高を送りて、頼朝の怒を和めたりき。然り、彼は遂に情の人也。彼は、行家義廣等の窮鳥を獵犬の手に委すに忍びざりき。彼は豆を煮るに、豆萁を燃やすを欲せざりき。彼は兒女の情を有したり。彼は行路の人に忍びざる情を有したり。あゝ「如此殺身猶洒落」なるもの、豈、獨り西楚の霸王に止らむや。請ふ吾人をして恣に推察せしめよ。若し彼にして決然として、頼朝の挑戰に應ぜしならば、木曾の眠獅と蛭ケ小島の臥龍との敢戰は、更に幾倍の偉觀をきはめしなるべく、天下は漢末の如く三分せられしなるべく、而して中原の鹿誰が手に落つべき乎は未俄に斷ずべからざりしなるべし。かくして、春風は再、兩雄の間に吹けり。頼朝は、旌旗をめぐらして鎌倉に歸れり。而して彼は遂に、久しく其豫期したるが如く、貔貅五萬、旗鼓堂々として南に向へり。

老いても獅子は百獸の王也。革命軍の鋭鋒、當るべからざるを聞ける宗盛は、是に於て、舞樂の名手、五月人形の大將軍右近衛中將平維盛を主將とせる、有力なる征北軍を組織し、白旄黄鉞、粛々として、怒濤の如く來り迫る革命軍を、討たしめたり。平軍十萬、赤旗天を掩ひ精甲日に輝く。流石に、滔天の勢を以て突進したる我北陸の革命軍も、平氏が此窮鼠の如き逆撃に對しては、

陣頭の自ら亂るゝを禁ずる能はざりき。我義仲が、富樫入道佛誓をして守らしめたる燧山城の要害、先平軍の手に歸し、次いで林六郎光明の堅陣、忽ちにして平軍の擊破する所となり、遂に革命軍が血を以て購へる加賀一州の江山をして、再び平門の豎子が掌中に收めしむるの恨事を生じたり。既に源軍を破つて意氣天を衝ける平軍は、是に至りて三萬の輕鋭を分ちて志雄山に向はしめ、大將軍、維盛自らは、七萬の大軍を驅つて礪波山に陣し、長蛇捲地の勢をなして、一擧、革命軍を越中より、掃蕩せむと欲したり。然りと雖も、平右近衞中將は、決して我義仲に肩隨すべき將略と勇氣とを有せざりき。越後にありて革命軍の敗報を耳にしたる義仲は、直ちに全軍を提げて越中に入れり。越中に入れると共に直ちに、藏人行家をして志雄山の平軍を討たしめたり。志雄山の平軍を討たしむると共に、直ちに鼓噪して黑坂に至り維盛と相對して白旗を埴生の寒村に飜せり。數を以てすれば彼は實に平軍の半にみたず、地を以てすれば、平軍は已に礪波の嶮要を擁せり。彼の之を以て平軍の鋭鋒を挫き、倒瀾を既墜にめぐらさむと欲す、豈難からずとせむや。然れ共、彼は、泉の如く湧く斂才を有したりき。彼は、其夜猛牛數百を集め炬を其角に縛し、鞭ちて之を敵陣に縱ち、源軍四萬。雷鼓して平軍を衝きぬ。角上の炬火、連ること星の如く、喊聲鼓聲、相合して南溟の衆水一時に覆るかと疑はる。平軍潰敗して南谿に走り、崖下に投じて死するもの一萬八千餘人、人馬相蹂み、刀戟相貫き、積屍陵をなし、戰塵天を掩ふ。維盛僅に血路をひらき、殘軍を合して加賀に走り、佐良岳の天嶮に據りて、再革命軍を拒守せむとしたるも、大勢の赴く所亦如何ともなすべからず。志雄山の平軍既に破れ、義仲行家疾馳して平軍に迫る、無人の境を行くが如く、安宅の渡を涉りて篠原を襲ひ、遂に大に征北軍を擊破し、勇奮突破、南

に進むこと、猛虎の群羊を驅るが如く、將に長驅して京師に入らむとす。かくして、壽永二年七月、赤幟、洛陽を指して、敗殘の平軍、悉く都に歸ると共に、義仲は北陸道より近江に入り、行家は東山道より大和に入り、革命軍の白旗、雪の如く、近畿の山河に滿てり。

此時に於て、平氏と義仲との間に橫はれる勝敗の決は、一に延暦寺が源平の何れに力を寄すべきかに存したりき。若し、幾千の山法師にして、平氏と合して、柄を源軍につきしとせむ乎、或は革命軍の旗、洛陽に飜るの時なかりしやも、亦知るべからず。然れども延暦寺は、必しも平氏の忠實なる味方にはあらざりき。延暦寺は平氏に對して平なる能はざる幾多の理由を有したりき。平氏が兵糧米を山門領に課せるが如き、嚴島を尊敬して前例を顧みず、妄に高倉上皇の御幸を請ひたるが如き、豈其の一たるなからむや。反平氏の空氣は山門三千の、圓頂黑衣の健兒の間にも充滿したり。彼等は恰も箭鼠の如し、彼等は撫づれば、撫づるほど其針毛を逆立たしむる也。清盛の懷柔政策が彼等の氣焰をして却つて、高からしめたる、素より偶然なりとなさず。今や、山門は、二人の獵夫に逐はれたる一頭の兎となれり。二人の花婿に戀はれたる一人の花嫁となれり。而して平氏は、其源軍に力を合するを恐れ、平門の卿相十人の連署したる起請文を送りて、延暦寺を氏寺となし、日吉社を氏神となすを誓ひ、巧辭を以て其歡心を買はむと欲したり。然れども山門は冷然として之に答へざりき。同時に義仲の祐筆にして、しかも革命軍の軍師なりし大夫坊覺明は、延暦寺に牒して之を誘ひ、山門亦之に應じて、明に平氏に對して反抗の旗をひるがへしたり。是、實に平氏が蒙りたる最後の痛擊なりき。山門旣に平氏に反く、平氏が、知盛、重衡等をして率ゐしめたる防禦軍が、遂に海潮の如く迫り來る革命軍に對して、殆ど何等の用をもなさ

ざりしも豈宜ならずや。かくの如くにして、革命の激流は一瀉千里、遂に平氏政府を倒滅せしめたり。平氏は是に於て最後の窮策に出で至尊と神器とを擁して西國に走らむと欲したり。龍駕已に赤旗の下にあらば又以て、宣旨院宣を藉りて四海に號令するを得べく、已に四海に號令するを得ば再天日の墜ちむとするを回らし、天下をして平氏の天下たらしむるも敢て難事にあらず。平氏が胸中の成竹は實にかくの如くなりし也。しかも、機急なるに及ンで法皇は竊に平氏を去り山門に上りて源軍の中に投じ給ひぬ。百事、悉、齟齬す、平氏は遂に主上を擁して天涯に走れり。翠華は、搖々として西に向ひ、霓旌は飄々として悲風に動く、嗚呼、「昨日は東關の下に轡をならべて十萬餘騎、今日は西海の波に纜を解きて七千餘人、保元の昔は春の花と榮えしかども、壽永の今は、秋の紅葉と落ちはてぬ。」然り、平氏は、遂に、久しく豫期せられたる沒落の悲運に遭遇したり。

ふるさとを焼野のはらとかへり見て末もけぶりの浪路をぞゆく

三　最後

鳳闕の礎空しく殘りて、西八條の餘燼、未晙なる壽永二年七月二十六日、我木曾冠者義仲は、白馬金鞍、揚々として、彼が多年、夢寐の間に望みたる洛陽に入れり。超えて八月十日、左馬頭兼伊豫守に拜せられ、虎符を佩び皐比に坐し、號して旭日將軍と稱しぬ。今や、彼が得意は其頂點に達したり。彼は其熱望したるが如く遂に桂冠を頂けり。壽永の革命はかくして彼が凱歌の下に其局を結びたり。然りと雖も、彼と頼朝とが、相應呼して、獵し得たる中原の鹿は、果して何人

の手中にか落ちむとする。若し彼にして之を得む乎、野心滿々たる源家の異兒にして焉ぞ、手を袖にして、傍觀せむや。若し賴朝にして之を得む乎、固より火の如き血性の彼の默して止むべきにあらず。双虎一羊を爭ふ、彼等が劍を横へて陣頭に相見る日の近きや知るべきのみ。しかも、シシリーに破れたるカルセーヂは、暫く蟄して大ローマの轅門に降ると雖も、捲土重來、幢戟南伊太利の原野に滿ちて、再カンネーに會稽の恥を雪がずンばやまず。鳳輦西に向ひて、西海に浮びたる平氏は、九州四國の波濤の健兒を糾合して、鸞旗を擁し征帆をかゝげ、更に三軍を從へて京師に迫るの日なくンばやまず。風雲將に至らむとして、氷天霰を飛ばす、義仲の成功と共に動亂の氣運は、再洪瀾の如く漲り來れり。

然り、彼は成功と共に失敗を得たり。彼が粟津の敗死は既に彼が、懸軍長驅、白旗をひるがへして洛陽に入れるの日に兆したり。彼は、其勃々たる青雲の念をして滿足せしむると同時に、彼の位置の頗る危險なるを感ぜざる能はざりき。彼は北方の强たる革命軍を率ゐて洛陽に入れり、而して、洛陽は、彼等が住すべきの地にはあらざりき。劍と酒とを愛する北國の健兒は、其兵糧の窮乏を感ずると共に、直に市邑村落を掠略したり。彼等のなす所は飽く迄も直截にして、且飽く迄も亂暴なりき。彼等は、馬を青田に放つて秣ふを憚らざりき。彼等は伽藍を壞ちて、薪とするを恐れざりき。彼等は、彼等の野性を以て、典例と儀格とを重ンずる京洛の人心をして聳動せしめたり。而して天下は、彼等を指して「平氏にも劣りたる源氏なり」と嘲笑したり。是、實に彼が入洛と共に、蒙りたる第一の打擊なりき。しかも獨り彼等の狼藉に止らず、悍馬に跨り長槍を横へ、圍を潰し將を斬るの外に、春雨に對して雲和を彈ずるの風流をも、秋月を仰いで洞簫を吹く

の諷事をも解せざりし彼等は、彼等が至る所に演じたる滑稽と無作法とによつて、京洛の反感と冷笑とを購ひ得たり。

加ふるに此時に當りて西海に走れる平軍は、四國の健兒を麾いて、瀬戸内海の天塹に據り、羽林の鸞輿を擁するもの實に十萬餘人。赤旗將に八島の天に燃えむとす。平氏は、眞に海濤の勇士なりき。「坂東武者は馬の上にてこそ口はきき候へども、船軍をば、何でふ修練し候ふべき、たとへば魚の木に上りたるにこそ候はむずらめ」とは、彼等が僞らざる自信なりき。而して平門の周郎たる、新中納言知盛は、絕えず宗盛を擁して、回天の大略を行はむと試みたりき。是、豈、彼が勁敵の一たるなからむや。內にしては、京洛の反感をかひ、外にして平氏の隆勢に對す、かくの如くにして革命軍の將星は、秋風と共に、地に落つるの近きに迫り來れり。彼が嘗つて、北越七州の男兒を提げ、短兵疾驅、疾風の威をなして洛陽に入るや、革命軍の行動は眞に脫兎の如く神速なりき。而して翠華西に向ひて革命軍の旗、翩々として京洛に飜るや、其平氏に對する、寧ろ處女の如くなるの觀を呈したりき。

彼は自ら三軍を率ゐて平氏を征するを欲せざりき。何となれば、彼を疎んじたる朝廷の密謀は、彼を抑ふるに源兵衛佐を以てせむとしたれば也。彼は之が爲に、其後を襲はるゝを恐れたれば也。しかも、彼が北陸宮をして、天日の位につけ奉らむと試みしより以來、彼と快からざる後白河法皇は、頼朝に謳歌して彼を除かむと欲し給ひしを以て也。彼が馬首西を指して、遠駕、平賊と戰ふ能はざりしや、知るべきのみ。然れども、院宣は遂に彼をして、征西の軍を起こして、平氏を水島に討たしめたり。北陸の健兒由來騎戰に長ず、鐵兜三尺汗血の馬に鞭ちて、敵を破ること、

秋風の落葉を掃ふが如くなるは、彼等が得意の擅場也。彼等は日本のローマ戰士也。彼等は山野の覇王也。然りと雖も、水上の戰に於ては、遂にカルセーヂたる平氏が、獨特の長技に及ばざりき。恰も長江に養はれたる、吳の健兒が、赤壁に曹瞞八十萬の大軍を鏖殺し、詩人をして「漢家火德終燒賊」と歌はしめたるが如く、瀨戶內海に養はれたる波濤の勇士は、遂に、連勝の餘威に乘じたる義仲の軍鋒を破れり。彼が百勝將軍の名譽は、此一敗によつて汚されたり。彼は、更に精銳を率ゐて平軍と雌雄を決せむと欲したり。然れども、彼は、賴朝の大擧、彼が背を討たむとするを聞きて危機旣に一髮を容れざるを知り、水島の敗辱を雪ぐに遑あらずして、倉皇として京師に歸れり。是實に壽永二年十一月十五日、法住寺の變に先つこと僅に三日。彼は京師に歸ると共に、直に賴朝に應戰せむと試みたり。

此時に於て、彼をして此計畫の斷行を止めしめしものは、實に、十郞藏人行家の反心なりき。行家はもと賴朝と和せずして、義仲の軍中に投ぜしもの、情の人たる義仲は、一門の長老として常に之を厚遇したり。彼が北陸の革命軍を提げて南を圖るや、行家亦、鑣を彼と並べて進みたりき。彼が、緋甲白馬、得々として洛陽に入るや、行家亦肩を彼と比して朝恩に浴したりき。行家の義仲に於ける交誼かくの如し。而して多恨多淚、人の窮を見る己の窮を見るが如き、義仲は、常に行家を信賴したり。信賴したるのみならず、帷幄の密謀をも彼に漏したり。然れ共、行家は、一筋繩ではゆかぬ老奸雄なりき。彼は革命軍の編裨を以て甘ぜむには、餘りに漫々たる野心と、老狐の如き姦策とに富みたりき。彼は、義仲の法皇を擁して北越に走らむとするを知るや、竊に之

を法皇に奏したり。而して法皇の、人をして、義仲を詰らしめ給ふや、彼は平氏追討を名として、播磨國に下り、舌を吐くこと三寸、義仲の命運の窮せむとするを喜びたりき。義仲が相提携して進みたる行家は、かくして彼の牙門を去れり。しかも、東國を望めば、源軍のリューポルト、九郎義經は、源兵衞佐の命を奉じて、帶甲百萬、鼓鼙地を撼して將に洛陽にむかつて發せむとす。彼の悲運、豈、憫むべからざらむや。

かくの如くにして彼は步一步より、死地に近づき來れり。然れ共彼は猶、防禦的態度を持したりき。彼は猶從順なる大樹なりき。然り、彼は猶、陰謀の挑發者にあらずして、陰謀の防禦者なりき。しかも、彼をして、弓を法皇にひかしめたるは、實に、法皇の義仲に對してとり給へる、攻擊的の態度に存したりき。而して、法皇をして義仲追討の擧に出でしめたるは、輕佻、浮薄、無謀の愚人、嘗て義仲の爲に愚弄せられたるを含める斗筲の豎兒、平判官知康なりき。事を用ふるを好み給へる、法皇は、知康の暴擧に贊し、竊に、南都北嶺の僧兵及乞食法師辻冠者等をして、義仲追討の暴擧に與らしめ給へり。而して十一月十八日仁和寺法親王、延暦寺座主明雲、亦武士を率ゐて法住寺殿に至り、遂に義仲に對するクーデターは行はれたり。法皇は事實に於て、義仲に戰を挑み給へり。彼の前には唯、叛逆と滅亡との兩路を存したり。燃ゆるが如くなる、血性の彼にして、焉ぞ手を袖して誅戮を待たむや。彼は憤然として意を決したり、あらず、意を決せざるべからざるに至れる也。彼は劍を按じて絕叫したり。「いかさまこは鼓判官がきようがいと覺ゆるぞ。軍能うせよ、者共。」而して白旗直に法住寺殿を指し、刀戟霜の如くにして鐵騎七千、稻麻の如く御所を圍み亂箭を飛ばして、天台座主明雲を殺し、院側の姦を誡るもの一百十餘人、其

愛する北國の勇士、革命の健兒等をして凱歌を唱へしむる、實に三たび。木曾の野人のなす所はかくの如く不敵にして、しかもかくの如く痛激なり。彼は其云はむと欲する所を云ひ、なさむと欲する所を爲す、敢て何等の衒氣なく何等の矯飾なかりき。然り彼は不軌の臣也、然れども、彼は不軌の何たるかを知らざりし也。

今や彼は、劍佩の響と共にクーデターに與りたる卿相四十餘人の官職を奪ひ、義弟藤原師家をして攝政たらしめ、賴朝追討の院宣と征夷大將軍の榮位とを得、壯心落々として賴朝と戰はむと欲したり。然れ共彼が此一擧は、遂に盜を見て繩を綯ふに類したりき。魚に臨ンで網を結ぶに類したりき。何となれば、反心を抱ける行家は、既に河内によりて義仲に叛き、九郎義經の征西軍は早くも尾張熱田に至り、鎌倉殿の號令一度下らば「白日秦兵天上來」の勢を示さむとしたれば也。是に於て彼は懼然として恐れたり。出でて賴朝と戰はむ乎、水島室山の戰ありてより連勝の餘威を恃める平氏が、龍舟錦帆、八島を發し鸞輿を擁して京洛に入らむとするや、火を見るよりも明也。退いて洛陽に拒守せむ乎、鞍馬の頑兒と、蒼髯の老賊とが、鼙鼓を打つて來り迫るや知るべきのみ。彼の命運や窮したり。勇名一代を震撼したる旭日將軍もかくして、日一日より死を見るの近きにすゝめり。しかも、彼の平氏に對して提したる同盟策が、濶達勇悍の好將軍知盛によつて、拒否せらるゝや、彼が滅亡は漸く一彈指の間に迫り來れり。

壽永三年正月、彼が、股肱の臣樋口次郎兼光をして行家を河内に討たしむるや、兵を用ふること迅速、敏捷、元の太祖が所謂、敵を衝く飢鷹の餌を攫むが如くなる、東軍の飛將軍、源九郎義經は、其慣用手段たる、孤軍長驅を以て、突として宇治に其白旄をひるがへしたり。同時に蒲冠者

範頼の大軍は、潮の湧くが如く東海道を上りて、前軍早くも勢多に迫り、義仲の北走を拒がむと試みたり。根井大彌太行親、今井四郎兼平、義仲の命を奉じて東軍を逆ふ。其勢實に八百餘騎、既にして兩軍戈を宇治勢多に交ふるや、東軍の精鋭當るべからず。北風競はずして義仲の軍大に破れ、士卒矛をすてて走るもの數百人、東軍の軍威隆々として破竹の如し。是に於て壯士二十人を從へて法皇を西洞院の第に守れる彼は、遂に法皇を擁して北國に走り、捲土重來の大計をめぐらすの外に策なきを見たり。而して彼、法皇に奏して曰「東賊、既に來り迫る、願くは龍駕を擁して醍醐寺に避けむ」と、法皇從ひ給はず。彼憤然として階下に進み劍を按じ眦を決して、行幸を請ふ、益〻急。法皇止む事を得ずして將に六馬行宮を發せむとす。時に義仲の騎來り報じて曰「東軍既に木幡伏見に至る」と。彼、事愈〻危きを知り、遂に一百の革命軍を從へて、決然として西洞院の第を出でぬ。赤地の錦の直垂に唐綾縅の鎧きて、鍬形うつたる兜の緒をしめ、重籐の弓のたゞ中とつて、葦毛の駒の逞しきに金覆輪の鞍置いて跨つたる、雄風凛然、四邊を拂つて、蹄聲戛々、東に出づれば、東軍の旗幟既に雲霞の如く、七條八條法性寺柳原の天を掩ひ戰鼓を打ちて鬨をつくる、聲地を振つて震雷の如し。義仲の勢、死戰して之に當り、且戰ひ、且退き、再、院の御所に至れば、院門をとぢて入れ給はず、行親等の精鋭百餘騎、奮戰して悉く死し、彼遂に圍を破つて勢多に走る、從ふもの僅に七騎、既にして、今井四郎兼平敗殘の兵三百餘を率ゐて、粟津に合し、共に鑣をならべて北越に向ふ。時實に壽永三年正月二十日、粟津原頭、黄茅蕭條として日色淡きこと夢の如く、疎林遠うして落葉紛々、疲馬頻に嘶いて悲風面をふき、大旗空しく翻つて哀涙袂を沾す。嘗て、木曾三千の健兒に擁せられて、北陸七州を卷く事席の如く、長策を

ふるつて天下を麾ける往年の雄姿、今はた、何處にかある。嘗て三色旗を陣頭に飜して加能以西平軍を破ること、疾風の枯葉を拂ふが如く、緋甲星兜、揚々として洛陽に入れる往年の得意、今、はた、何處にかある。而してあゝ、翠帳暖に春宵を度るの處、春雨桃李花落つるの時、松殿の寵姫と共に、醉うて春に和せる往年の榮華、今はた、何處にかある。是に於て彼悵然として兼平に云つて曰「首を敵の爲に得らるゝこと、名將の恥なり、いくさやぶれて自刃するは猛將の法なりとこそ聞き及びぬ」と、兼平答へて曰「勇士は食せずして饑ゑず、創を被りて屈せず、軍將は難を遁れて勝を求め死を去つて恥を決す、兼平こゝにて敵を防ぎ候はむ、まづ越前の國府迄のがれ給へ」と、然れども多涙の彼は、兼平と別るゝに忍びざりき。彼は彼が熱望せる功名よりも、更に深く彼の臣下を愛せし也。而して行く事未幾ならず、東軍七千、喊聲を上ぐること波の如く、亂箭を放ち鼙鼓を打つて、彼を追ふ益〻急也。彼、兼平を顧み決然として共に馬首をめぐらし、北軍三百を魚鱗に備へ長劍をかざして、東軍を衝き、向ふ所鐵蹄縱横、周馳して圍を潰すこと數次、東軍摧靡して敢て當るものなし。然れ共從兵既に悉く死し僅に慓悍、不敵の四郎兼平一騎を殘す、兼平彼を見て愁然として云つて曰「心靜に御生害候へ、兼平防矢仕りてやがて御供申すべし」と、是に於て、彼は、單騎鞭聲粛々、馬首粟津の松原を指し、從容として自刃の地を求めたり。しかも乘馬水田に陷りて再立たず、時に飛矢あり、颯然として流星の如く彼が内兜を射て鏃深く面に入る。而して東軍の士卒遂に彼を鞍上に刺して其首級を奪ふ。兼平彼の討たるゝを見て怒髮上指し奮然として箭八筋に敵八騎を射て落し、終に自ら刀鋒を口に銜み馬より逆に落ちて死す。嗚呼、死は人をして靜ならしむ、死は人をして粉黛を脱せしむ、死は人をして肅然として襟を正さしむ

るもの也。卒然として生と相背き、遽然として死と相對す、本來の道心此處に動き、本然の眞情此處にあらはる、津々として春雨の落花に濺ぐが如く、悠々として秋雲の青山を遶るが如し。夫鳥の將に死せむとする其鳴くや哀し、人の將に死せむとする、其言や善し。人を見、人を知らむとする、其死に處するの如何を見ば足れり。我木曾冠者義仲が其燃ゆるが如き血性と、烈々たる青雲の念とを抱いて何等の譎詐なく、何等の矯飾なく、人を愛し天に甘ンじ、悠然として頭顱を源家の吳兒に贈るを見る、彼が多くの短所と弱點とを有するに關らず、吾人は唯其愛すべく、敬すべく、慕ふべく、仰ぐべき、眞個の英雄兒たるに愧ぢざるを想見せずンばあらず。岳鵬擧の幽せらるゝや、背に盡忠報國の大字を黥し、笑つて死を旦夕に待ち、項羽の烏江に戮せらるゝや、亭長に與ふるに愛馬を以てし、故人に授くるに首級を以てし、自若として自ら刎ね、王叔英の燕賊に襲はるゝや、沐浴して衣冠を正し南拜して絕命の辭を書し、泰然として自縊して死せり。彼豈之に恥ぢむや。彼の赤誠は彼の生命也。彼は死に臨ンで猶火の如き赤誠を抱き、火の如き赤誠は遂に彼をして其愛する北陸の健兒と共に從容として死せしめたり。是實に死して猶生けるもの、彼の三十一年の生涯は是の如くにして始めて光榮あり、意義あり、雄大あり、生命ありと云ふべし。

かくして此絕大の風雲兒が不世出の英魂は、倏忽として天に歸れり。嗚呼青山誰が爲にか悠々たる、江水誰が爲にか汪々たる。彼の來るや疾風の如く、彼の逝くや朝露の如し。止ぬるかな、止ぬるかな、革命の健兒一たび逝きて、遂に豎子をして英雄の名を成さしむるや、今や七百星霜一夢の間に去りて、義仲寺畔の孤墳、蕭然として獨り落暉に對す。知らず、青苔墓下風雲の兒、今

はた何の處にか目さめむとしつゝある。

彼は遂に時勢の兒也。鬱勃たる革命的精神が、其最も高潮に達したる時代の大なる權化也。破壞的政策は彼が畢生の經綸にして、直情徑行は彼が一代の性行なりき。而して同時に又彼は暴虎馮河死して悔いざるの破壞的手腕を有したりき。彼は幽微を聽くの聰と未前を觀るの明とに於ては入道相國に讓り、所謂佚道を以て民を使ふ、勞すと雖も怨みず、生道を以て民を殺す、死すと雖も怨みざる、治國平天下の打算的手腕に於ては源兵衞佐に讓る。而して彼が壽永革命史上に一頭地を抽く所以のものは、要するに彼は飽く迄も破壞的に無意義なる繩墨と習慣とを蹂躪して顧みざるが故にあらずや。

彼は眞に革命の健兒也。彼は極めて大膽にして、しかも極めて性急也。彼は手を袖にして春風落花に對するが如く、悠長なる能はず。靑山に對して大勢を指算するが如く幽閑なる能はず。炎々たる靑雲の念と、勃々たる霸氣とは常に火の如く胸腔を灸る。彼は多くの場合に於て他人の喧嘩を買ふを辭せず。如何なる場合に於ても膝をつき頭をたれて哀を請ふ事をなさず。而して彼は世路の曲線的なるにも關らず、常に直線的に急歩せずンば止まず。彼は衝突を辭せざるのみならず、又衝突を以て彼の大なる使命としたり。彼が猫間中納言を辱めたる、平知康を愚弄したる、法住寺殿に弓をひきたる、皆彼が此直線的の行動に據る所なくンばあらず。水戸の史家が彼を反臣傳中の一人たらしめしが如き、此間の心事を知らざるもの、吾人遂に其餘りに近眼なるに失笑せざる能はざる也。彼は身を愛惜せず、彼は燎原の火の如し。彼は己を遮るすべてを燒かずンば止ま

ざる也。すべてを燒かずンば止まざるのみならず、彼自身をも燒かずンば止まざる也。彼が法皇のクーデターを聞くや、彼は「北國の雪をはらうて京へ上りしより一度も敵に後を見せず、假令十善の君にましますとも甲を脫ぎ弓の弦をはづして降人にはえこそまゐるまじけれ」と絕叫したり。若し兵衞佐賴朝をして此際に處せしめむ乎。彼は如何なる死地に陷るも、法住寺殿の變はなさざりしならむ。賴朝は行はるゝ事の外は行ふことを欲せず。彼は、其實行に關らず、唯其期する所を行はむと欲せし也。是豈彼が一身を顧みざるの所以、彼が革命の使命を帶びたる健兒たるの所以、而して賴朝が甘じて反臣傳に錄せらるゝをなさざりし所以にあらずや。

彼は彼自身、彼を信ずる事厚かりき。彼は、其信ずる所の前には、天下口を齊うして之に反するも、猶自若として恐れざりき。所謂自反して縮んば千萬人と雖も、我往かむの氣象は鬱勃として彼の胸中に存したりき。さればこそ彼は四郎兼平の諫をも用ひず、法住寺殿に火を放つの暴行を敢てせしなれ。彼の法皇に平ならざるや、彼は「たとへば都の守護してあらむずるものが馬一疋づつ飼ひて乘らざるべきか、幾らともある田ども刈らせて秣にせむをあながちに法皇の咎め給ふべきやうやある」と憤激したり。彼は彼が旗下幾萬の北國健兒が、京洛に行へる狼藉を寧ろ當然の事と信じたり。而して此所信の前には怫然として、其不平を法皇に迄及ぼすを憚らざりき。請ふ彼が再次いで鳴らしたる怨言を聞け。「冠者ばらどもが、西山東山の片ほとりにつきて時々入取せむは何かは苦しかるべき。大臣以下、宮々の御所へも參らばこそ僻事ならめ」彼は、彼に對するクーデターの理由をかゝる見地を以て判斷したり。而して、彼に一點の罪なきを信じたり。既に青天白日、何等の不忠なきを信ず、彼が刀戟介馬法住寺殿を圍みて法皇を驚かせまゐらせたる、

豈偶然ならずとせむや。

彼は、如上の性行を有す、是眞に天成の革命家也。輕浮にして輕悍なる九郎義經の如き、老猾にして奸雄なる藏人行家の如き、或は以て革命の健兒が楯戟の用をなす事あるべし。然れども其楯戟を使ふべき革命軍の將星に至りては、必ず眞率なる殉道的赤誠の磅礴として懷裡に盈つるものなくンばあらず。然り、狂暴、驕悍のロベスピエールを以てする尙一片烈々たる殉道的赤誠を有せし也。

彼は唯一の赤誠を有す。一世を空うするの霸氣となり、行路の人に忍びざるの熱情となる、其本は一にして其末は萬也。夫大川の源を發す、其源は溪間の小流のみ。彼が彼たる所以、唯此一點の靈火を以て全心を把持する故たらずとせむや。彼は赤誠の人也、彼は熱情の人也、願くは賴朝の彼と戰を交へむとしたるに際し、彼が賴朝に答へたる言を聞け。「公は源家の嫡流也。我は僅に一門の末流に連り、驥尾に附して平氏を屠らむと欲するのみ。公今干戈を動かさむとす、一門相攻伐するが如き、是源氏の不幸にして、しかも平氏をして愈々虛に乘ぜしむるもの也。我深く憂慮に堪へず。」と。何ぞ其言の肝膽を披瀝して、しかも察々として潔きや。辭を低うして一門の爲に圖つて忠なる、斯くの如し。啻に辭を低うするに止らず、一片稜々の意氣止むべからずして愛子を賴朝の手に委したるが如き、赤誠の人を撼す、眞に銀河の九天より落つるが如き概あり。再云ふ彼は眞に熱情の人也。實盛の北陸に死するや、彼其首級を抱いて泫然として泣けり。水島の戰に瀨尾主從の健鬪して仆るゝや、彼「あつぱれ强者や。助けて見て。」と歎きたりき。陣頭劍を交ふる敵を見る尙かくの如し。彼が士卒に對して厚かりしや知るべきのみ。彼が旗下は彼が爲に

「死且不辭」の感激を有したりき。彼敢て人を容るゝこと光風の如き襟懷あるにあらず。敢て又、人を服せしむる麒麟の群獸に臨むが如き德望あるにあらず。彼の群下に對する、唯意氣相傾け、痛涙相流るゝところ、烈々たる熱情の直に人をして知遇の感あらしむるによるのみ。彼が旗下の桃李寥々たりしにも關らず、四郎兼平の如き、次郎兼光の如き、はた大彌太行親の如き、一死を以て彼に報じたる、是を源賴朝が源九郎を赤族し、蒲冠者を誅戮し、藏人行家を追殺し、彼等をして高鳥盡きて良弓納めらるゝの思をなさしめたるに比すれば、其差何ぞ獨り天淵のみならむや。三たび云ふ、彼は眞に熱情の人也。彼が將として成功し、相として失敗したる、亦職として之に因らずンばあらず。百難を排して一世を平にし、千紛を除いて大計を定む、唯大なる手の人たるを要す。片雲を仰いで風雪を知り、巷語を耳にして大勢を算す、唯大なる眼の人たるを要す。相印を帶びて天下に臨む、或は一滴の涙なきも可也。李林甫の半夜高堂に默思するや、明日必殺ありしと云ふが如き、豈此間の消息を洩すものにあらずや。然りと雖も、三軍を率ゐて逐鹿を事とす、眼の人たらざるも或は可、手の人たらざるも亦或は可、唯若し涙の人たらざるに至つては、斷じて將帥の器を以てゆるす可からず、以て大樹の任に堪ふ可からず。彼は此點に於て、好個の將軍たるに愧ぢざりき。而して彼に歸服せる七州の健兒は、彼の涙によりて激勵せられ鼓吹せられ、よく赤幟幾萬の大軍を擊破したり。しかも彼の京師に入るや、彼は其甲冑を脫して、長裾を曳かざる可からざるの位置に立ちたりき。彼は冷眼と敏腕とを要するの位置に立ちたりき。彼は唱難鼓義の位置より一轉して撥亂反正の位置に立ちたりき。約言すれば彼は其得意の位置よりして、其不得意の位置に立ちたりき。然れども彼は天下を料理するには、餘りに溫なる涙を有した

りき。彼は一世を籠罩するには、寧ろ餘りに血性に過ぎたりき。彼は到底、袍衣大冠して廟廊の上に周旋するの材にあらず、其政治家として失敗したる亦宜ならずとせむや。壽永革命史中、經世的手腕ある建設的革命家としての標式は、吾人之を獨り源兵衛佐賴朝に見る。彼が朝家に處し、平氏に處し、諸國の豪族に處し、南都北嶺に處し、守護地頭の設置に處し、鎌倉幕府の建設に處するを見る、飽く迄も打算的に飽く迄も組織的に、天下の事を斷ずる、誠に快刀を以て亂麻をたつの概ありしものの如し。賴朝は殆ど豫期と實行と一致したり。順潮にあらずンば輕舟を浮べざりき。然れども義仲は成敗利鈍を顧みざりき、利害得失を計らざりき。彼は塗墻に馬を乘り懸くるをも辭せざりき。かくして彼は相として敗れたり。而して彼が一方に於て相たるの器にあらざると共に、他方に於て將たるの材を具へたるは、則ち義仲の義仲たる所以、彼が革命の健兒中の革命の健兒たる所以にあらずや。

彼は野性の兒也。彼の衣冠束帶するや、天下爲に嗤笑したり。彼が弓箭を帶して禁闕を守るや、時人は「色白うみめはよい男にてありけれど、起居振舞の無骨さ、物云ひたる言葉つきの片口なる事限りなし」と嘲侮したり。葡萄美酒夜光杯、珊瑚の鞭を揮つて靑草をふみしキヤバリオルの眼よりして、此木曾山間のラウンドヘッドを見る、彼等が義仲を「袖のかゝり、指貫のりんに至るまでかたくななることかぎりなし」と罵りたる、寧ろ當然の事のみ。しかも彼は誠に野性の心を有したりき。彼は常に自ら顧て疚しき所あらざりき。彼は自ら甘ぜむが爲には如何たる事をも忌避するものにはあらざりき。彼は不臣の暴行を敢てしたり。然れども、彼が自我の流露に任せて得むと欲するを得、爲さむと欲するを爲せる、公々然として其間何等の粉黛の存するを許さざ

りき。彼は小兒の心を持てる大人也。怒れば叫び、悲めば泣く、彼は實に善を知らざると共に惡をも亦知らざりし也。然り彼は飽く迄も木曾山間の野人也。同時に當代の道義を超越したる唯一個の巨人也。猫間黃門の彼を訪ふや、彼左右を顧て「猫は人に對面するか」と尋ねたりき。彼は鼓判官知康の院宣を持して來れるに問ひて「わどのを鼓判官と云ふは、萬の人に打たれたうたか、張られたうたか」と云ひたりき。彼の牛車に乘ずるや、「いかで車ならむからに、何條素通りをばすべき」とて車の後より下りたりき。何ぞ其無邪氣にして兒戲に類するや。彼は「田舍合子の、きはめて大に、くぼかりけるに飯うづたかくよそひて、御菜三種して平茸の汁にて」猫間黃門にすゝめたり。而して黃門の之を食せざるを見るや、「猫殿は小食にておはすよ、聞ゆる猫おろしし給ひたり、搔き給へ〳〵や」と叫びたりき。何ぞ其頑童の號叫するが如くなる。かくの如く彼の一言一動は悉、無作法也。而して彼は是が爲に、天下の嘲罵を蒙りたり。然りと雖も、彼は唯、直情徑行、行雲の如く流水の如く欲するがまゝに動けるのみ。其間、慕ふべき情熱あり、掩ふ可からざる眞率あり。換言すれば彼は唯、當代のキヤバリオルが、其玉杯綠酒と共に重じたる無意味なる禮儀三千を縱橫に、蹂躪し去りたるに過ぎざる也。彼は荒くれ男なれ共あどけなき優しき荒くれ男なりき。彼は所詮野性の兒也。區々たる繩墨、彼に於て何するものぞ。彼は自由の寵兒也。彼は情熱の愛兒也。而して彼は革命の健兒也。彼は、群雄を駕御し長策をふるつて天下を治むるの隆準公にあらず。敵軍を叱咤し、隻劍をかざして堅陣を突破するの重瞳將軍也。彼は國家經綸の大綱を提げ、蒼生をして衆星の北斗に拱ふが如くならしむるカブールが大略あるにあらず。辣快、雄敏、鷙拏の兵諫を敢てして顧みざる、石火の如きマヂニーの俠骨あるのみ。彼は壽永革命

の大勢より生れ、其大勢を鼓吹したり。あらず其大勢に乘じたり。彼は革命の鼓舞者にあらず、革命の先動者也。彼の粟津に敗死するや、年僅に三十一歳。而して其天下に馳騖したるは木曾の擧兵より粟津の亡滅に至る、誠に四年の短日月のみ。彼の社會的生命はかくの如く短少也。しかも彼は其炎々たる革命的精神と不屈不絆の野快とを以て、個性の自由を求め、新時代の光明を求め、人生に與ふるに新なる意義と新なる光榮とを以てしたり。彼の一生は失敗の一生也。彼の歴史は蹉跌の歴史也。彼の一代は薄幸の一代也。然れども彼の生涯は男らしき生涯也。彼の一生は短かけれども彼の教訓は長かりき。彼の燃したる革命の聖壇の靈火は煌々として消ゆることなけむ。彼の鳴らしたる革命の角笛の響は嚠々として止むことなけむ。彼逝くと雖も彼逝かず。彼が革命の健兒たるの眞骨頭は、千載の後猶殘れる也。かくして粟津原頭の窮死、何の憾む所ぞ。春風秋雨七百歳、今や、聖朝の德澤一代に光被し、新興の氣運隆々として虹霓の如く、昇平の氣象將に天地に滿ちむとす。蒼生鼓腹して治を樂む、また一の義仲をして革命の曉鐘をならさしむるの機なきは、昭代の幸也。

（明治四十三年二月、東京府立第三中學校學友會雜誌）

水の三日

講堂で、罹災民慰問會の開かれる日の午後。一年の丙組（當日は此處を、僕等——卒業生と在校生との事務所にした）の教室を這入ると、もう上原君と岩佐君とが、部屋のまん中へ机を据ゑて、何かせつせと書いてゐた。俯向いた上原君の顔が、窓からさす日の光で赤く見える。入口に近い机の上では、七條君や下村君や其他僕が名を知らない卒業生諸君が、寄附の浴衣やら手拭やら晒布やら淺草紙やらを、罹災民に分配する準備に忙しい。紺飛白が二人でせつせと晒布を疊んでは手拭の大きさに截つてゐる。それを、茶の小倉の袴が、せつせと折目をつけては、行儀よく積上げてゐる。向うの隅では、原君や小野君が机の上に鹽せんべいの袋をひろげてせつせと數を勘定してゐる。

依田君も其傍で、大きな餡ぱんの袋をあけてせつせと「えゝ五つ、十う、二十」をやつてゐるのが見える。何しろ、鹽せんべいと餡ぱんとを合せると、四圓ばかりになるんだから、三人とも少少、勘定には辟易してゐるらしい。

教壇の方を見ると、縄でくゝつた淺草紙や、手拭の截らないのが、雜然として取亂された中で、平塚君や國富君や清水君が、黒板へ、罹災民の數やら鹽せんべいの數やらを書いてせつせと引い

たり割つたりしてゐる。急いで書くせゐか、數字までせつせと忙しさうな恰好をしてゐるから、可笑しい。さうすると廣瀬先生が御出になる。一寸、二言三言話して、直又せつせと出ていらつしやる。其中にぱんが足りなくなつて、せつせと買足しにやる。せつせと先生の所へ通信部を開く交渉に行く。開成社へ電話をかけてせつせとはがきを取寄せる。誰でも皆せつせとやる。何をやるのでもせつせとやる。其代り埓のあくこと夥しい。窓から外を見ると運動場は、處々に水のひいた跡の、じく／＼した赤土を殘して、未、壁土を溶した様な色をした水が、八月の青空を映しながら、とろりと動かずに湛へてゐる。其水の中を、痩せた毛の長い黒犬が、鼻を鳴らしながら、ぐしよぬれになつて、駈けてゆく。犬まで、生意氣にせつせと忙しさうな氣がする。

慰問會が開かれたのは三時頃である。

鼠色の壁と、不景氣な硝子窓とに圍まれた、伽藍のやうな講堂には、何百人かの罹災民諸君が、雜然として、憔悴した顔を並べてゐた。垢じみた浴衣で、肌つこに白雲のある男の兒をおぶつた、おかみさんもあつた。よごれた、薄い縕袍に手拭の帶をしめた、目の爛れた、お婆さんもあつた。白いメリヤスの襯衣と下ばきばかりの若い男もあつた。大きな鍵裂のある印半纏に、三尺をぐるぐるまきつけた、若い女もあつた。色の褪めた赤毛布を腰のまはりにまいた、鼻の赤いおぢいさんもあつた。さうして此等の人々が皆、黄ばんだ、彈力のない顔を教壇の方へ向けてゐた。教壇の上では蓄音機が、鼻くたの様な聲を出してかつぽれか何かやつてゐた。

蓄音機がすむと、伊津野氏の開會の辭があつた。何でも、可也長いものであつたが、お氣の毒

な事には今はすつかり忘れて仕舞つた。其後で、又蓄音機が一くさりすむと、貞水の講談「かちかち甚兵衛」がはじまつた。賑かな笑ひ聲が、其處此處に起る。こんな笑ひ聲も此等の人々には幾日ぶりかで、口に上つたのであらう。學校の慰問會をひらいたのも、此笑ひ聲を聞く爲ではなからうか。硝子窓から長方形の青空を眺めながら、此笑ひ聲を聞いてゐると、ものとなく悲しい感じが胸に迫る。

講談が完(をは)ると程なく、會が閉ぢられた。さうして罹災民諸君は狹い入口から、各の室へ歸つて行く。其途中の廊下に待つてゐて、僕たちは、大人の諸君には、ビスケツトの袋を、少年少女の諸君には、鹽せんべいと餡ぱんとを、呈上した。區役所の吏員や、白服の若い巡査が「御禮を云つて、御禮を云つて」と注意するので、罹災民諸君は一々丁寧に頭をさげられる。中でも十一二の赤い帶をしめた、小さな女の子が、「御禮を云つて」と云はれるとぴつたり床の上に膝をついて、僕たちの靴であるく、あの砂だらけの床板に額をつけて、「難有う」と云はれた時には、思はず、ほろりとさせられて仕舞つた。

慰問會が完るとすぐに、事務室で通信部を開始する。手紙を書けない人々の爲に書いてあげる設備である。原君と小野君と僕とが同じ机で書く。あの事務室の廊下に面した、硝子障子をはづして、中へ圖書室の細長い机と、講堂にあるベンチとを持ちこんで、それに三人で尻を据ゑたのである。外の壁へは、高田先生に書いて頂いた、「たゞで、手紙を書いてあげます」と云ふ貼紙をしたので、直に多くの人々が此窓の外に群つた。愈〻はがきに鉛筆を走らせるまでには、どうに

か文句が出來るだらう位な、横着な根性ですましてゐたが、かうなつて見ると、いくら「候間」や「候段」や「乍憚御休神下され度」でこじつけて行つても、どうにもかうにも、行かなくなつて來た。二三人目に僕の所へ來たお爺さんだつたが、聞いて見ると、何でも小松川の何とか病院の會計の叔父の妹の娘が、其お爺さんの姉の倅の嫁の里の分家の次男に片づいてゐて、小松川の水が出たから、其お爺さんの姉の倅の嫁の里の分家の次男の里でも、昔から世話になつた主人の倅が持つてゐる水車小屋へ、何うとかしたところが、其病院の會計の叔父の妹が何うとかしたから、見合せて其爺の倅の友達の叔父の神田の猿樂町に錠前なほしの家へどうとかしたとか、何とか云ふので、何度聞直しても、八幡の藪でも歩いてゐるやうに、さつぱり要領が得られないので弱つちまつた。未だに、あの時の事を考へると、はがきへ何んな事を書いたんだか、一向判然しない。これは原君の所へ來た、お婆さんだが、原君が「宛名は」ときくと、平五郎さんだとか何とか云ふ。「苗字は何と云ふんです」と押返して尋ねると、苗字は知らないが平五郎さんで、平五郎さんて云へば近所中何處でも知つてるから、苗字なんか無くつても、とゞくのに違ひないと保證する。流石の原君も、「唯平五郎さんぢやあ、とゞきますまい」つて、恐縮してゐたが、とうとう匙を投げて、何とか町何とか番地平五郎殿と書いて仕舞つた。あれでうまく、平五郎さんの家へとゞいたら、いくら平五郎さんでも、よくとゞいたもんだと感心するに違ひない。

　殊に滑稽なのは、誰の所へ來たんだか忘れたが、宛名に「しようせんじ、のだやすつてん」と云ふやつがあつて、誰も漢字に飜譯する事が出來なかつた。それでも結局、「修善寺野田屋支店」だらうと云ふ事になつたが、こんな和文漢譯の問題が出ればどこの學校の受驗者だつて落第するに

きまつてゐる。

通信部は、日暮近くなつて閉ぢた。あのいつもの銀行員が來て月謝を取扱ふ小さな窓の方でも、上原君や岩佐君や其他の卒業生諸君が、執筆の勞をとつて下さつた。さうして此方も、彼此同じ時刻に窓を閉ぢた。僕たちの歸つた時には、あたりがもう薄暗かつた。二階の窓からは、淡い火影がさして、白楊の枝から枝にかけてあつた洗濯物も、もうすつかり取りこまれてゐた。

通信部はそれからも、つゞいて開いた。前記の諸君を除いて、平塚君、國富君、砂岡君、清水君、依田君、七條君、下村君、其他今は僕が忘れてしまつて、此處に表彰する光榮を失したのを悲む。幾多の諸君が、熱心に執筆の勞をとつて下さつたのは、特に附記して、前後六百枚のはがきの、此爲に費されたのが、決して偶然でないと云ふことを表したいと思ふ。

其翌々日の午後、義捐金の一部を割いて購つた、四百餘の猿股を罹災民諸君に寄贈する事になつた。皆で、猿股の一打を入れた箱を一つづつ持つて、部屋々々を廻つて歩く。ヂプシーのやうな、脊の低い區役所の吏員が、帳面と引合せて、一人々々罹災民諸君を呼び出すのを、僕たちが一枚々々、猿股を渡すと云ふ手筈であつた。殘念なことに、どの部屋で、どんな人がどんな事をしてゐたか忘れてしまつたが唯一つ覺えてゐるのは、五年の丙組の教室へ這入つた時だつたと思ふ。薄暗い隅つこに、色の褪めた、黒い太い縞のある、青毛布が丸くなつてゐた。始めは、唯毛布が丸めてあるんだと思つたが、例のヂプシーが名前を呼びはじめると、其毛布がむく〳〵と動

いて、中から灰色の長い髯が出た。それから、眼の濁つた赭ら面の老人が出た。さうして最後に、灰色の長く伸びた髪の毛が出た。しばらく僕たちを見てゐたが又眼をつぶつた。傍へよると酒の香がする。何となく、あの毛布の下に、ウオツカの罎でも隱してありさうな氣がした。

二階の部屋をまはつた平塚君の話では、五年の甲組の教室に狂女がゐて、ぢつとバケツの水を見つめてゐたさうだ。あの雨じみのある鼠色の壁によりかゝつて、結び髮の女が、すりきれた毛繻子の帶の間に手を入れながら、俯向いてバケツの水を見てゐる姿を想像したら、矢張小說めいた感じがした。

猿股を配つて仕舞つた時、前田侯から大きな梅鉢の紋のある長持へ入れた寄附品が澤山來た。落雁かと思つたら、襯衣と腹卷なのださうである。前田侯だけに、やる事が大きいなあと思ふ。

罹災民諸君が何日ぶりかで、諸君の家へ歸られる日の午前に、僕たちは、僕たちの集めた義捐金の殘額を投じて、諸君の爲に福引を行ふ事にした。

景品は其前夜に註文した。當日の朝、僕が學校の事務室へ行つた時には、もう僕たちの連中が、大ぜい集つて、盛に籤を拵へてゐた。うまく紙撚をよれる人が少ないので、廣瀨先生や正木先生が、手傳つて下さる。僕たちの中では、砂岡君がうまく撚る。僕は「へえ、器用だね」と、感心して見てゐた。勿論僕には撚れない。

事務室の中には、いろんな品物が堆く積んであつた。前の晩、之を買ふ時に小野君が、口を極めて、其效用を保證した龜の子だはしもある。味噌漉の代理が勤まると云ふ何とかの笊もある。

羊羹のミイラのやうな洗濯石鹸もある。草箒もあれば杓子もある。下駄もあれば庖刀もある。赤いべゝを着たお人形さんや、ロッペン島のあざらしの様な顔をした土細工の犬やいろんな玩具もあつたが、其中に、五六本、ブリキの銀笛があつたのは蓋し、原君の推奬によつて買つたものらしい。景品の說明は、いゝ加減にしてやめるが、もう一つ書きたいのは、黄色い、能代塗の箸である。それが何百膳だかこて／＼ある。後で何膳づつかに分ける段になると、其漆臭い臭ひが、いつ迄も手に殘つたので閉口した。一寸嗅いでも胸が惡くなる。福引の景品に、能代塗の箸は、孫子の代まで禁物だと、しみ／＼悟つたのは此時である。

籤が出來あがると、原君と依田君とが、各室を廻る勞をとつた。少し經つと、もう大勢籤を持つた人々がやつてくる。事務室の向つて右の入口から入れて、ふだんは〆切つてある、右の扉をあけて出す事にした。景品は箒と目笊と石鹸で一組、たはしと何とか笊と杓子で一組、下駄に箸が一膳で一組と云ふ割合で、一番割の惡いのは、能代塗の臭い箸が一膳で一組である。此奴だけは、僕なら、いくら籤に當つても、御免を蒙らうと思ふ。

砂岡君と國富君とが、讀み役で、籤を受取つては、一々大きな聲で讀み上げる。中には一家族五人悉く、下駄に當つた人があつた。一家族十人ばかり、悉く能代塗の臭い箸に當つたら、滑稽だらうと思つてたが、不幸にして、さう云ふ人は無かつたやうに記憶する。

一回、福引を濟ました後でも、景品は大分殘つた。そこで、殘つた景品のすべてに、空籤を加へて、再び福引を行つた。さうしてそれを完つたのは丁度正午であつた。避難民諸君は、もうそろそろ歸りはじめる。中には丁寧に御禮を云ひに來る人さへあつた。

多大の滿足と多少の疲勞とを持つて、僕たちが何日かを忙しい中に暮した事務室を去つた時、窓から首を出して見たら、泥まみれの砂利の上には、素枯れかゝつた檜や、丈の低い白楊が、鮮かな短い影を落して、眞黄の口が赤々とした鼠色の校舍の羽目には、亞鉛板や箒がよせかけてあるのが見えた。大方明日から、後掃除が始まるのだらう。

（明治四十三年、東京府立第三中學校學友會雜誌）

槍ヶ岳に登つた記

赤澤

雜木の暗い林を出ると案内者がこゝが赤澤ですと云つた。暑さと疲れとで目のくらみかゝつた自分は今迄下ばかり見て歩いてゐた。じめ〳〵した苔の間に鷺草のやうな小さな紫の花がさいてゐたのは知つてゐる。熊笹の折りかさなつた中に兎の糞の白くころがつてゐたのは知つてゐる。けれども一體林の中を通つてるんだか、藪の中をくゞつてゐるんだかはさつぱり見當がつかなかつた。唯無暗に、岩だらけの路を登つて來たのを知つてゐるばかりである。それが「此處が赤澤です」と云ふ聲を聞くと同時にやれやれ助つたと云ふ氣になつた。さうして首を上げて、今迄自分たちの通つてゐたのが、繁つた雜木の林だつたと云ふ事を意識した。安心すると急に四方のながめが眼にはいるやうになる。目の前には高い山が聳えてゐる。高い山と云つても平凡な、高い山ではない。山膚は白つちやけた灰色である。其灰色に縦横の皺があつて、くぼんだ所は鼠色の影をひいてゐる。つき出た所ははげしい眞夏の日の光で雪がのこつてゐるのかと思はれる程白く輝いて見える。山の八分が此粗い灰色の岩で後は黒ずんだ緑で斑につゝまれてゐる。其緑が縦にMの字の形をしてとぎれ〳〵に山膚を縫つたのが、何となく荒涼とした思を起させる。こんな山が屏風をめぐらしたやうにつゞいた上には淺黄繻子のやうに光つた青空がある。青空には熱と光

との暗影をもつた、溶けさうな白い雲が銅をみがいた樣に輝いて、紫がかつた鉛色の陰を、山のすぐれて高い頂に這はせてゐる。山に圍まれた細長い溪谷は石で一面に埋められてゐると云つてもいゝ。大きなのやら小さなのやら、みかげ石の眩ゆいばかりに日に反射したのやら、赤みを帶びたインク壺のやうな形のやら、直八面體の角ばつたのやら、歪んだ球のやうな圓いのやら、立體の數をつくしたやうな石が、雜然と狹い溪谷の急な斜面に充たされてゐる。石の洪水。少し可笑しいが全く石の洪水と云ふ語がゆるされるのなら正しくそれだ。上の方を見上げると一草の綠も、一花の紅もつけない石の連續がずーうつと先の先の方迄つゞいてゐる。一番遠い石は蟹の甲羅位な大きさに見える。それが近くなるに從つてだん／＼に大きくなつて、自分たちの足もとへ來ては、一間に高さが五尺ほどの鼠色の四角な石になつてゐる。荒廢と寂寞――どうしても元始的な、人を跪かせたければやまないやうな强い力が此兩側の山と、其間に挾まれた谷との上に動いてゐるやうな氣がする。案內者が「赤澤の小屋つてなアあれですあ」と云ふ。自分たちの立つてゐる所より少し低い所にくゝり枕のやうな石がある。それが又きはめて大きい。動物園の象の足と鼻を切つて、胴だけを三つ四つつみ重ねたらあの位になるかもしれない。其石がぬつと半起きかゝつた下に焚火をした跡がある。黑い燃えさしや、白い石がうづたかくつもつてゐた。あの石の下に寢るんだ相だ。夜中に何かの具合であの石が寢がへりをうつたら、下の人間はぴしやんこになつてしまふだらうと思ふ。溪谷の下の方は此大石に遮ぎられて何も見えぬ。目の前にひろげられたのは唯、長いしかも亂雜な石の排列、頭の上におほひかゝるやうな灰色の山々、さうしてこれらを强く照す眞夏の白い日光ばかりである。

自然と云ふものをむきつけに目のあたりに見る様な氣がして自分は愈〻はげしい疲れを感ぜざるを得なかつた。

朝三時

さあ行かうと中原が云ふ。行かうと返事をして手袋をはめてゐる中に中原はもう歩き出した。さうして二度目に行くよと云つたときには中原の足は自分の頭より高い所にあつた。上を見るとうす暗い中に夏服の後姿がよろけるやうに右左へゆれながら上つて行く。自分も杖を持つて後について上りはじめた。上りはじめて少し驚いた。路と云つては素より何にもない。魚河岸へ鮪がついた様に雜然ところがつた石の上を、ひよい〳〵とびとびに上るのである。どうかするとぐらぐらとゆれる奴がある。おやと思つて其次の奴へ足をかけると又ぐらりと來る。仕方がないから四つん這ひになつて猿のやうな形をして上る。其上にまだ暗いので何でも判然とわからない。唯まつ黑なものの中をうす白いものがふら〳〵と上つてゆく後を、いゝ加減に見當をつけて這つて行くばかりである。心細い事夥しい。おまけにきはめて寒い。昨夜ぬいで置いた足袋が今朝はごそごそにこはばつてゐる。手で石の角をつかむたんびに冷さが毛糸の手袋をとほして浸みて來る。鼻のあたまがつめたくなつて息がきれる。はつはつ云ふたびに口から白い霧が出る。途中でふり向いて見ると谷底迄黑いものがつゞいて其中途で白い圓いものと細長いものとが動いてゐた。「おゝい」と呼ぶと下でも「おゝい」と答へる。小さい時に掘井戸の上から中を窺きこんでおゝいと云ふとおゝいと反響をしたのが思ひ出される。圓いのは市村の麥藁帽子、細長いのは中塚の浴衣

であつた。黒いものは谷の底から猶上へのぼつて馬の背のやうに空をかぎる。其中で頭の上の遠くに、菱の花びらの半ばを尖つた方を上にして置いたやうな、貝塚から出る黒曜石の鏃のやうな形をしたのが槍ケ岳で、その左と右に齒朶の葉のやうな高低をもつて長くつゞいたのが、信濃と飛驒とを限る連山である。空は其上にうすい暗みを帶びた藍色にすんで、星が大きく明に白金のやうに輝いてゐる。槍ケ岳と丁度反對の側には月がまだ殘つてゐた。七日ばかりの月で黃色い光がさびしかつた。あたりはしんとしてゐる。死のしづけさと云ふ思が起つて來る。石をふみ落すとから／＼と云ふ音がしばらくきこえて、やがて又もとの靜けさに返つてしまふ。路が偃松の中へはいると、歩くたびに濕つぽい鈍い重い音ががさり／＼とする。ふいにギヤアと云ふ聲がした。おやと思ふと案内者が「雷鳥です」と云つた。形は見えない。唯闇の中から鋭い聲をきいただけである。人を呪ふのかもしれない。靜な、恐れを孕んだ絕嶺の大氣を貫いて思はずもきいた雷鳥の聲は、何となく或るシムボルでもあるやうな氣がした。

（明治四十四年頃）

日光小品

大谷川

馬返しをすぎて少し行くと大谷川の見える所へ出た。落葉に埋もれた石の上に腰を下して川を見る。川はずうつと下の谷底を流れてゐるので幅がやつと五六尺に見える。川を挾んだ山は紅葉と黄葉とに隙き間なく蔽はれて、其間を殆純粋に近い藍色の水が白い泡を噴いて流れてゆく。さうして其紅葉と黄葉との間を洩れてくる光が何とも云へない暖かさを洩らして、見上げると山は私の頭の上にも聳えて、青空の畫室のスカイライトの様に狹く限られてゐるのが、丁度岩の間から深い淵を窺いた様な氣を起させる。

對岸の山は半ばは同じ紅葉につゝまれて、其上は流石に冬枯れた草山だが、其ゆつたりした肩には紅い光のある靄がかゝつて、褐色の毛きらず天鵞絨をたゝんだ様な山の肌が如何にも優しい感じを起させる。其上に白い炭燒の煙が低く山腹を這つてゐたのは更に私を床しい思に耽らせた。

石をはなれて再山道にかゝつた時、私は「谷水のつきてこがるゝ紅葉かな」と云ふ蕪村の句を思ひ出した。

戰場ケ原

枯草の間を沼のほとりへ出る。

黄泥の岸には、薄氷が殘つてゐる。枯蘆の根には煤けた泡がかたまつて、家鴨の死んだのが其中にぶつくり浮んでゐた。どんよりと濁つた沼の水には青空が錆びついた樣に映つて、ほの白い雲の影が靜に動いてゆくのが見える。

對岸には接骨木めいた樹がすがれかゝつた黄葉を低れて力無さゝうに水に俯いた。それをめぐつて黄ばんだ葭が哀しさうに戰いて、其間から淋しい高原の景色が眺められる。

ほゝけた尾花のつゞいた大野には、北國めいた、黄葉した落葉松が所々に腕だるさうに聳えて、其間をさまよふ放牧の馬の群はそゞろに我々の祖先の水草を追うて漂浪した昔を想ひ出させる。原をめぐつた山々はいづれも侘しい灰色の霧につゝまれて、薄い夕日の光が僅に其頂を濡してゐる。

私は荒涼とした思を抱きながら、この水のじく〳〵した沼の岸に佇んで獨りでツルゲーネフの森の旅を考へた。さうして枯草の間に龍膽の青い花が夢見顏に咲いてゐるのを見た時に、しみじみあの I have nothing to do with thee と云ふ悲しい言が思ひ出された。

巫女

年を老つた巫女が白い衣に緋の袴をはいて御簾の陰にさびしさうに獨りで坐つてゐるのを見た。さうして私も何となく淋しくなつた。

時雨もよひの夕に春日の森で若い二人の巫女に遇つた事がある。二人とも十二三で矢張緋の袴

に白い衣をきて白粉をつけてゐた。小暗い杉の下かげには落葉を焚く煙がほの白く上つて、しつとりと濕つた森の大氣は木精の囁きも聞えさうな云ひ難いしづけさを漂せた。其物靜な森の路を物靜にゆきちがつた、若い、いや幼い巫女の後姿はどんなにか私にめづらしく覺えたらう。私はほゝゑみながら何度も後を振りかへつた。けれども今、冷な山懐の氣が肌寒く迫つてくる社の片かげに寂然と坐つてゐる老年(としより)の巫女を見ては、そゞろに哀しさを覺えずにはゐられない。

私は、一生を神に捧げた巫女の生涯の淋しさが、何となく私の心をひきつける様な氣がした。

高原

裏見ケ瀧へ行つた歸りに、獨りで、高原を貫いた、日光街道に出る小さな路を辿つて行つた。武藏野ではまだ百舌鳥がなき、鵯がなき、畑の玉蜀黍の穗が出て、薄紫の豆の花が葉のかげにほのめいてゐるが、此處はもうさながらの冬の景色で、薄い黄色の丸葉がひら〳〵ついてゐる白樺の霜柱の草の中に佇んだのが、靜かと云ふよりは寂しい感じを起させる。此日は風のない晙かな日和で、樺林の間からは、菫色の光を帶びた野州の山々の姿が何か來るのを待つてゐるやうに、冷々する高原の大氣を透して名ごりなく望まれた。

何時だつたかこんな話をきいた事がある。雪國の野には冬の夜なぞによくものの聲がすると云ふ。其聲が遠い國に多くの人がゐて口々に哀歌をうたふともきければ、森かげの梟の十羽二十羽が夜霧のほのかな中から心細さうになきあはすとも聞える。唯、野の末から野の末へ風にのつて響く相だ。何ものの聲かはしらない。唯、此原も日がくれから、そんな聲が起りさうに思はれる。

こんな事を考へながら牛里もある野路を飽かずにあるいた。何のかはつた所もない此原の眺が、どうして私の感興を引いたかはしらないが、私にはこの高原の、殊に薄曇りのした靜寂が何となく嬉しかつた。

工場（以下足尾所見）

黃色い硫化水素の煙が霧の樣にもや〳〵してゐる。其中に職工の姿が黑く見える。煤びたシャツの胸のはだけたのや、しみだらけの手拭で頰かぶりをしたのや、中には裸體で滿振を袈裟の樣に肩からかけたのが、反射爐のまつ赤な光を湛へた傍に動いてゐる。機械の運轉する響、職工の大きな掛聲、薄暗い工場の中に雜然として聞える此等の音が、氣のよわい私には一つ一つ強く胸を壓すやうに思はれる。——裸體の一人が爐の傍に近づいた。汗でぬれた肌が露を置いた樣に光つて見える。細長い鐵の棒で小さな爐の口をがたりとあける。紅に輝いた容の日を溶した樣な、火の流がずーうつとまつ直に流れ出す。流れ出すと、爐の下の大きなバケツの樣なものの中へぼとぼとと重い響をさせて落ちて行く。バケツの中が一杯になるに從つて、火の流がはいる度にはらはらと火の粉がちる。火の粉は職工のぬれ振にもかゝる。それでも平氣で何か歌を謠つてゐる。

和田さんの「煒燻」を見たことがある。けれども時代の陰影とでも云ふやうな、鋭い感興は浮ばなかつた。其後にマロニックの「不漁」を見た時も矢張暗い切實な感じを覺えなかつた。が今、この工場の中に立つて、あの煙を見、あの火を見、さうしてあの響をきくと、勞働者の眞生活と云ふやうな悲壯な思が抑へ難い迄に起つて來る。彼等の銅のやうな筋肉を見給へ。彼等の勇ましい

歌をきゝ給へ。私たちの生活は彼等を思ふ度にイラショナルな樣な氣がしてくる。或は眞に空虛な生活なのかもしれない。

寺と墓

路ばたに寺があつた。

丹も見るかげがなく剝げて、拔けかゝつた屋根瓦の上に擬寶珠の金がさみしさうに光つてゐた。緣には鳥の糞が白く見えて、鰐口のほつれた紅白の紐のもう色がさめたのにぶらりの長くさがつたのが何となくうらがなしい。寺の內はしんとして人がゐさうにも思はれぬ。其右に墓場がある。墓場は石ばかりの山の腹にそうて開いたので、灰色をした石の間に灰色をした石塔が何本となく立つてゐるのが、侘しい感じを起させる。草の靑いのもない。立花さへも殆ど見えぬ。唯灰色の石と灰色の墓である。其中に線香の紙がきは立つて赤い。これでも人を埋めるのだ。私はこの石ばかりの墓場が何かのシムボルの樣な氣がした。今でもあの荒涼とした石山と其上の曇つた濁色の空とがまざ〳〵と目にのこつてゐる。

溫き心

中禪寺から足尾の町へ行く路がまだ古河橋の所へ來ない所に、川に沿うた、あばら家の一ならびがある。石をのせた屋根、こまいの露な壁、仆れかゝつた垣根と垣根には竿を渡しておしめやら汚れた靑い毛布やらが、薄い日の光に干してある。その垣根について、此處らには珍しいコス

モスが紅や白の花をつけたのに、片目のつぶれた黑犬が懶さうに其下に寢ころんでゐた。その中で一軒門口の往來へむいた家があつた。外の光に馴れた私の眼には家の中は暗くて何も見えなかつたが、其明るい緣さきには、猫背の御婆さんが、古びたちやん〳〵を着て坐つてゐた。お婆さんのゐる所の前が直往來で、往來には髮ののびた、手も足も塵と垢がうす黑くたまつた跣足の男の兒が三人で土いぢりをしてゐたが、私たちの通るのを見て「やア」と云ひながら手をあげた。さうして唯笑つた。小供たちの聲に驚かされたと見えて御婆さんも私たちの方を見た。けれども御婆さんは盲だつた。

私はこの汚れた小供の顏と盲の御婆さんを見ると、急にピーター・クロポトキンの「青年よ、溫き心を以て現實を見よ」と云ふ言が思ひ出された。何故思ひ出されたかはしらない。唯、漂浪の晚年をロンドンの孤客となつて送つてゐる、迫害と壓迫とを絕えず蒙つたあのクロポトキンが溫き心を以てせよと敎へる心持を思ふと我知らず胸が迫つて來た。さうだ溫き心を以てするのは私たちの務めだ。

私たちは飽く迄態度をヒューマナイズして人生を見なければならぬ。それが私たちの努力である。眞を描くといふ、それも結構だ。然し、「形ばかりの世界」を破つて其中の眞を捕へようとする時にも必ず私たちは溫き心を以てしなければならない。「形ばかりの世界」に囚はれた人々はこのあばら家に樂しさうに遊んでゐる小兒のやうな、それでなければ盲目の顏を私たちの方にむけて私たちを見ようとする御婆さんのやうな人ばかりではあるまいか。

この「形ばかりの世界」を破るのに、あく迄も溫き心を以てするのは當然私たちのつとめである。

文壇の人々が排技巧と云ひ無結構と云ふ、唯眞を描くと云ふ。冷な眼ですべてを描いた所謂公平無私に幾何の價値があるかは私の久しい前からの疑問である。單に著者の個人性が明に印象せられたと云ふに止りはしないだらうか。

私は年長の人と語る毎にその人のなつかしい世なれた風に少なからず醉はされる。文藝の上ばかりでなく溫き心を以てすべてを見るのはやがて人格の上の試錬であらう。世なれた人の態度は正しく是だ。私は世なれた人のやさしさを慕ふ。

私はこんな事を考へながら古河橋のほとりへ來た。さうして皆と一緒に笑ひながら足尾の町を歩いた。

雜誌の編輯に急がれて思ふやうにかけません。宿屋のランプの下で書いた日記の抄錄に止めます。

（明治四十四年頃）

補遺第一

天主の死

General Plan.

(1) 天下平定後の小波瀾（大坂城内の christians）

(2) 後期吉利支丹の fanaticism（大坂城内の christians）

*

(1) Political side——益田甚兵衛好次 ⟨ Cold, courteous, cunning, sometimes cruel, hypocritical. (Politician)

(2) Spiritual side——蘆塚忠右衛門 ⟨ Warm-hearted, clever, sometimes weak, sentimental. (Utopian)

(3) Religious side——天草四郎時貞 ⟨ Dreamy, morbid, having some fits, always earnest. (Jean d'Arc) (Martyr)

*

(1) 天草群の蜂起マデ

(2) 板倉重昌の死マデ

(3) 落城マデ（四郎の首出島に曝さる、もと Jesuit chapel ありし所なり）

*

竪の關係

(1) 天下を得んとして得ず――Despair と同時に天命を知る――Bitterness
(2) 不義を正さんとして得ず――Despair と同時にあらゆる disillusion――Calmness
(3) 天國を地上に得んとして得ず――反つて天國を天に知る――Joy

*

(1) 千束善右衛門――A materialist
　玄札（好次の腹心）
　治兵衛（好人物）
(2) 有家休意――A demagogue
　マリア（城中に侍す）
　パウロ（殺さる）
(3) 山田右衛門作――A skeptic

*

橫の關係

(1) 好次と四郎と父子の struggle.――父に從ひ、後父に背き
(2) 四郎とマリアと lovers の struggle.――マリアに背き、後マリアに從ひ
(3) 右衛門作と忠右衛門と friends の struggle.――友人と離れつつ愛憐する心境

*

Neben の事件

梅毒
Christian の美術（佛像破壞）
侍の Rembrandt 燒毀

Political side は田舍紳士の政談を試みるが如し。是等ハ宇土の城ニアリシモノトシ
宇土城内 christians の事などを書け。

寛永 14 年 6 月古川町次兵衛を捕ふ（16日）
次兵衛は 12 年に天草島原の教徒と計り亂をなさんとす。

夕焼とその後の闇――Symbolical scenery
Dead sparrow――Dying spring

○席順の爭ひ

○產の爲に死ぬ女?

Perform a miracle, prophet! O! Perform M.（皮肉か眞劍かわからぬ叫聲）

*

有がたの利生や伴天連樣の御影で寄象の頸をすんと切支丹（貴利師檀）

參考書 Richard Cocks (Diary of) 1615, 6 月 15 日

「デウスの死」

序

元和元年五月七日の午過ぎだつた。赤裸になつた西洋人が一人、攝津國大坂天下茶屋の田舍道をうろうろ歩いてゐた。彼は額の禿げ上つた、頤髯の長い老人だつた。麥畑の間を縫つた道にはこの異樣な西洋人の外に、誰も人かげは見えなかつた。その代り何處を眺めても、討死の屍骸は澤山あつた。中には側杖を食つたらしい町人の屍骸もないではなかつた。屍骸は血にまみれたり、

火薬の煙に燻ぼつたり、蝿の群に蔽はれたり、二目とは見られない有様だつた。

　西洋人は足をひきずりながら、怯づ怯づ後ろを振り返つた。後ろにも一面に擴がつてゐるのは屍骸を撒き散らした麥畑だつた。が、まだその外にもずつと遠い、松のむら立つた青空には、大坂の城の天主閣が煙と火とを噴き上げてゐた。そちらからは又鬨の聲やつるべ打ちにする鐵砲の音もしつきりなしに聞えて來た。西洋人はさう云ふ景色を見るなり、忌々しさうに首を振つた。それから何か呟き呟き、もう一度田舍道を歩き出した。

　西洋人、――イエズス組の伴天連イグナシヨは關東の禁令を潜りながら、大坂の町々に布教してゐた。所が今度の戰ひは彼が難を避けない内に、住居も灰にしてしまへば同宿の奉教人も殺してしまつた。彼はやむを得ず兵馬の間に、聖母マリアの髮の毛を入れた金色の小箱を抱いたなり、兎に角戰場を逃げようとした。が、地理に疎い悲しさには何度も途に迷つた揚句、關東方か大坂方か、どちらかわからない軍兵の爲にさんざん打つたり蹴たりされた。その上大事の小箱は勿論、宗門の服や帽子さへも一つ殘らず剝ぎとられてしまつた。いや、もし老人でなかつたとすれば、命までとられたかも知れなかつた。イグナシヨはそれを考へると、今も肉の落ちた脇腹に初夏の風を感じながら、しみじみ「デウス」（神）の大慈大悲を感謝せずにはゐられないのだつた。

　半時間の後、疲勞に疲勞を重ねた彼は少時息を休める爲に、廣い木津川の川口に近い蘆荻の中へはひりこんだ。すると其處には案外にも町人らしい屍骸が一つ、彼よりも先に轉がつてゐた。彼ははつと思ひながら、蘆荻の外へ逃げ出さうとした。しかし屍骸だと思つたものは突然泥だら

けの半身を起した。と同時に驚いたやうに、「パアドレ」と彼を呼びとめた。イグナショは町人を見守つた。町人は妙に額のせまつた、片意地らしい小男だつた。それが今日は左の頬に生々しい蚯蚓腫を拵へてゐた。イグナショはやつと齒のない口に力のない微笑を浮べながら、「幸右衞門さんでしたか？」と返事をした。

「どうなさいました？　パアドレ！」

椀屋幸右衞門、――やはり吉利支丹宗徒の一人は伴天連に腰を下させた後、珍らしさうに相手の體を眺めた。實際又赤裸の西洋人を見るのは彼にも珍らしいのに違ひなかつた。イグナショは苦い顔をしながら、しぶしぶ途中の災難を話した。しかしその間も幸右衞門はややもすれば伴天連の胸や腹のあたりを眺め勝ちだつた。

イグナショの話が終つてから、幸右衞門は……………………

……………………………………………………

〔天主の死〕

序

元和元年五月七日、――大坂城の落ちた當夜だつた。イエズス組の天主教徒が二人、攝津の國

木津川の川口に近い蘆原の中に避難してゐた。彼等の一人パウロ彌兵衞は病身らしい若者だつた。しかも放れ馬に蹴られた爲、今は苦しさうに横になつてゐた。もう一人の伴天連セバスティアノは骨組みの逞しい老人だつた。これは關東の軍兵に宗門の服さへ剝がれた爲、裸の儘膝を抱へてゐた。二人は星明りに透かし合ひながら、時々小聲に話をした。あたりは勿論靜かだつた。鬨の聲や鐵砲の音はとうにもう鳴りををさめてゐた。その中に唯聞えるのは休みない木津川の水の音と藪蚊の聲とばかりだつた。

「お城はもう落ちたでせうか？」

彌兵衞は伴天連に話しかけた。

「まあ、多分落ちたでせう。天主閣にも火の手は揚つたのですから。――奉教人衆も大勢討死したでせう。」

「明石樣も討死なすつたでせうか？」

「明石樣？」

「明石掃部樣です。」

「ああ、あの方も討死されたでせう。――大坂の運も盡きてしまひました。これも皆基督のおん教を奉ぜず、邪神などを崇めた天罰です。太閤殿下を御覽なさい。神になると云はれたばかりか、實際豐國大明神とかに祀られてゐるではありませんか？　人間を神と同樣に祀る、――何と云ふ恐しい罪業でせう。大坂の滅びたのは當然です。ソドムやゴモラを燒かれた神は大坂にも天火を

降らされたのです。」

「しかしそれならばなぜ天主は江戸をお罰しにならないのでせう？　大坂にはあの明石様を始め、十字架のしるしをつけたものも大勢お城を守つてゐました。」

「さあ、それはなぜでせう。全能の天主の思召しは我々の知慧にはわかりません。それを兎や角詮議するのは人間の分に過ぎたことです。――しかし神のおん怒はきつと江戸にも下るでせう。丁度好い實を結ばない樹は斧に伐られてしまふやうに。……」

セバスティアノは突然口を噤んだ。それは間近い蘆の間に何か物音がしたからだつた。しかし不安は一瞬の後、無氣味な聲と共に飛び去つてしまつた。

「蒼鷺です。」

彌兵衞は藪蚊を逐ひながら、暗い中に寂しい微笑を見せた。伴天連はちよいと頷いた。それから又低い聲にさつきの話を續け出した。

「それまでは我々の試みられる時です。大坂の城を守つた中には今もあなたの云つた通り、奉教人衆が大勢ゐました。江戸の將軍は唯でさへ十字架の御威光を憎んでゐます。この恨もきつと我我の上に返す時があるに違ひありません。その時こそ日本の國中は我々の血に浸されるでせう。しかし唯天主をお信じなさい。我々の血の流れた跡には必薔薇が唉き出るのです、不可思議な天主のおん敎の薔薇が。」

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

序

元和元年五月七日、――大坂城の落ちた當夜だつた。頰髯の多い侍が一人、山城の國鳥羽の外れの或農家の圍爐裡の側に、この家の主人と坐つてゐた。主人は額の禿げ上つた、一徹らしい老人だつた。二人は薄暗い行燈を中に、何かひそひそ話してゐた。その覺束ない行燈の光も其處に解き捨てたちぎれ具足や大太刀を照らすには十分だつた。

「ではあの御天主にも火がかかりましたか？」

老人は聲を震はせてゐた。

「いや、天主閣ばかりではない。千疊閣、月見櫓、皆煙になつてしまうた。眞田殿は打たれたと云ふ。我君も御生害になつたかも知れぬ。大坂はもう御運の盡きぢや。身共も腹を切らうとしたが、――」

侍は太い息をついた。

「御宗門の掟には違背出來ぬ。」

「御尤もでございます。御無念はさることでございますが、來世の助かりには換へられませぬ。先殿樣を御覽なさいませ。八州島とやらへお流されになつても、――」

老人は突然口を噤んだ。それはこの時案外にも誰かかどの戸を叩いたからだつた。老人は侍に目配せをしながら、そつとかど口へ步・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

〔天草記〕

序の一　徳川家康

元和元年五月八日、――大坂城の落ちた翌朝だつた。徳川家康は茶臼山の本陣に本多正信を召し寄せてゐた。本陣とは云ふものの、此處はやつと間口九尺、奥行二間の板小屋だつた。しかも下の三疊は書院の代りに使はれてゐたから、家康の居間になつてゐるのは上の三疊に過ぎなかつた。家康はこの狹苦しい居間に茵を一枚敷いたぎり、樂々と脇息に凭れてゐた。なりは今日も鎧をつけず、唯下括りの袴をはき、茶色の羽織を着ただけだつた。

「どうぢや、佐渡、秀頼の命は？」

家康は靜かにかう云つた。

大坂城の天主閣に煙と火との卷き上つたのはもう昨日の午過ぎだつた。秀頼はその後母の淀と、山里丸の帶曲輪にある干飯倉に命を保つてゐた。しかしこの干飯倉も今は井伊直孝の兵にすつかり周圍を守られてゐたから、事實は生捕りも同樣だつた。

「助けてやらずばなるまいかの？」

家康はもう一度問ひかけた。

「さやうにございまする。」

正信は小首を傾けた。秀頼母子を殺すことは家康の計畫の一部である。それを今更尋ねなどするのは何か訣があるかも知れない。何か、——さう云へばまづ問題になるのは秀頼の籠中になつてゐた家康の孫の千姫である。が、これは幸ひにも昨日侍女の刑部卿の局と、危い城中を脫して來た。すると家康の肚にあるのは秀頼との間に取り換はせた神文の一條に違ひない。——咄嗟にさう察した正信はさりげない顏色を裝ひながら、やはり穩かに返事をした。

「さやうにございまする。御誓紙もあることでございますから、御助命遊ばさずばなりますまい。」

家康は少時沈吟した。正信は秀頼を助けろと云ふ。しかしそれは本意ではない。誓紙の一條さへ顧みなければ、秀頼を殺せと云ふのである。のみならず誓紙を破つたにしても、德川家の信義の廢る惧はない。誓紙の宛名は家康である。今は將軍の職にゐない七十四歲の老人である。……

「ぢやがの、佐渡。」

家康はやつと口を開いた。

「予も老先の長い體ではない。罰が當るならば當るのも僅ぢや。將軍家さへ仔細ないとすれば、

——」

大御所の聲は優しさを加へた。

「秀頼には腹を切らせるかの。」
正信は内心微笑した。
「お傷しい儀ではございますが、それも天下には換へられませぬ。さう遊ばせば御家の榮も萬々歳でございませう。」
・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

序

元和元年五月八日、大坂の城の落ちた翌日である。前將軍德川家康は二條の城へ歸る爲に、茶臼山の本陣を出發した。警護の役は年の若い板倉內膳の正重昌である。同勢は僅に弓一對、鐵砲二梃、對の槍二本、薙刀一振、――その外は乘馬を牽かせただけである。
駕籠の中の家康はけふも淺黃の帷子に廣袖の茶の羽織を着、葛布の下括りの袴の膝へ蠅を逐ふ拂子を投げ出してゐる。時刻は午の刻少し過ぎであらう。日の光は駕籠の右ひだりにきのふの戰場を照らしてゐる。踏み荒らされた田畑が見える。關東勢の仕寄せ場が見える。時には人馬の屍骸の上に點々と鴉が下りたのも見える。しかし家康にはさう云ふ景色も全然興味を與へないらしい。彼は兩手を膝にした儘、唯如何にも退屈さうに半ば兩眼を閉ざしてゐる。
一行は家康の駕籠を中に、生玉の社を左にしながら、大坂城の三の丸へはひつた。此處の景色

は城外よりも一層慘澹を極めてゐる。傾いた柵があるかと思へば、泥まみれになつた大幕もある。燒け殘つた竹束があるかと思へば、大崩れに崩れた土塀もある。その中に何か白いものがあるのは何時の間にか鎧を剝がれた下帶ばかりの屍骸だつた。しかし家康・・

序

元和元年五月何日かの午過ぎだつた。二條の城の一間にはでつぷり肥つた老人が一人、三四人の侍たちと水々しい瓜を食つてゐた。老人は廣袖の紗の羽織に葛布の袴と云ふ出立ちだつた。しかし日に燒けた顏を見ても、肩の威かつた體つきを見ても、田舍育ちの素性は爭はれなかつた。

「蒸すな、今日は。」・

老人、――德川家康は侍たちの一人へ話しかけた。侍は瓜を持つた儘、慇懃にかう返事をした。

「さやうでございます。しかし四五日前の事を思へば、極樂に居るやうでございます。」

四五日前は大坂の城もまだ殘喘を保つてゐ・・

（大正十二年）・

烈女

〔「糸女覺え書」別稿〕

石田治部少輔三成の亂のあつた慶長五年七月十三日、相不變妙に蒸し暑い、瓦の色ばかりぎらぎらする午下りのことでございました。お留守居役小笠原少齋(秀淸)河北石見(一成)のお二人はお臺所へわたくしをお呼びになりました。御承知の通り細川家では大人は勿論子供さへ、男と名のついたものは一足も奥へは入れさせぬ御家法になつて居りましたから、表から奥へのお取次はいつもわたくしの承ることにきまつて居つたのでございます。

わたくしはお二人の顏を見た時に何か起つたなと思ひました。お二人とも餘りふだんから愛想の好いかたではございません。殊に少齋様は女と云へばさも穢はしいもののやうに碌碌口もおききにならず、唯じろじろげじげじ眉の下からお睨めになるかたでございます。それが又けふはお二人とも苦り切つていらつしやいました。のみならず御挨拶をなすつた後はちよいと口をお切りになるのもためらつていらつしやるやうでございました。わたくしは愈氣になりましたから、「御用の筋は?」とお尋ね申しました。すると少齋様の仰有るには、實は今度治部少から東へお立ち

になつた大名衆の人質を取らせると云ふ風聞がある、もし萬一御當家へもさう云ふ沙汰のあつた時には何と取り計らつたものであるか、一應わたくしから御前様の御意を伺つてくれとのことでございました。

わたくしは差出がましいとは思ひましたが、念の爲にその風聞はまことかどうかお尋ね申しました。これは根も葉もない噂の爲に御前様の御心配を増すことがあつてはすまないと思つたからでございます。しかし石見様の仰有るには、このことは治部少の家中のものから密密に稻富伊賀(祐直)のもとへ知らせてよこした風聞である、して見ればまづ眞僞のほどは疑ひあるまいとのことでございました。伊賀様は下げ針さへ打つと云はれる砲術の達人でございます。わたくしもそのお弟子の中には治部少の家中の誰彼のまじつてゐることを知つて居りましたから、成程それでは御前様のお耳へも入れなければなるまいと思ひました。

御前様はけふもお机の前に御本を讀んでいらつしやいました。今はもう夢になりましたが、ぎやまんや十字架や畫毛氈や蒔畫のお道具に飾られた、奥深いお居間にたつたお一人、永の日をぢつと暮らしていらつしやる御前様のお姿は正身の「まりや」様かと思ふ位、お美しいものでございました。お年はもう三十八におなりだつたかと思ひますが、はた目にはまだ三十にもお見えにならなかつたでございませう。殊に何か仰有る時などはお心だけは姫君の昔と少しもお變りなさらないやうな、何か妙にもの寂しいお懷しさを具へていらつしやいました。わたくしは恐る恐る御前様へお二人の言葉を申し上げました。御前様は御本をお膝にしたまゝ、お顏の色一つ動かさず

にぢつとお聞きになつていらつしやいました。それからもの靜かに仰有るには、三齋(忠興)様と治部少とは兼ねがね御不和の間がらでもあり、かたがた御當家へは他家よりも先に人質を取りに來るかも知れない、さもなければ萬事他家並みに挨拶するのも一策であらう、しかも他家よりも先に來た節は何と返答したものであるか、それは二人のお留守居役の分別するやうにとのことでございました。わたくしは御前様のお言葉の中にほんのちらりとではございますが、何かかすかにお蔑すみに似た、冷たいものを感じました。けれども元來御前様はお側に仕へてゐるわたくしどもにさへ、滅多に喜怒をお見せになりません。その時もはつと思つた拍子にそつとお顏を窺ひましたが、お顏はやはり天人のやうにお美しいばかりでございました。

わたくしは早速お臺所へ下り、お待ちになつてゐるお二人へ御前様の御意をお傳へ申しました。するとヌお二人は當惑さうに顏を見合せていらつしやいました。が、やつと少齋様の獨り語のやうに仰有るには、與一郎(忠興の子忠隆)様や與五郎(同上興秋)様は三齋様と御一しよに東へお立ちになつた後ではあり、内記様(同上忠利)も今は江戸人質におなりになつてゐる始末ゆゑ、人質になどお出になるかたはまづお一人もない訣である、所詮はその旨を答へるより外に策はないとのことでございました。わたくしはだんだん高じて來る心もとなさを抑へながら、石見様の言葉を待つて居りました。しかし石見様の仰有るにも、なほヌ是非とも人質をと云へば、田邊(今の舞鶴)にいらつしやる幽齋(忠興の父、藤孝)様でもお上りになることにするか、どの途一應は斷るより外に仕かたはあるまいとのことでございました。わたくしはこの時女だけにふと邪推を起しま

した。と申すのはお二人の肚の底は御前様の人質にお出になることを心待ちに待つてゐるのではないか？　さもなければはるばる幽齋様にお上りを願ふなどと云ふ筈はないと疑ふ氣になつたのでございます。けれども邪推を起したのはほんの束の間でございました。このお二人はどう考へても、到底さう云ふ策略めいたことのお出來になるかたではございません。これはお二人の――とりわけ赤あかと額の禿げた、生眞面目な石見様の顏を見れば、誰にでもわかることでございませう。しかし邪推は消えたものの、心もとなさに變りはございませんから、わたくしは萬一御前様のおん身の危いことでもありはしないかと、押し返してお尋ね申しました。お二人も勿論そのことを御心配になつていらつしやいました。が、世の中は騷がしいものの、また合戰の始まる訣ではなし、治部少もよもや弓矢にかけても御前様を渡せなどとは云ふまいとのことでございました。わたくしは蟲の知らせたのか、成程と思ふ間にもやはり心もとなさを感じて居りました。とは云へお二人の古侍にわたくし一人臆病風に誘はれてゐるやうに思はれるのも心苦しい氣が致しましたから、兎に角もう一度御前様へ御留守居役の仰有つたことを申し上げに參りました。

御前様はその話をお聞きになると、かすかにお笑ひになりながら、ではさう致すやうにと仰有いました。この時もわたくしはお言葉の中に何か冷たいものを感じました。同時に又すつかりお心の底を伺ひたい氣もちも起りました。しかしさう云ふ失禮なことを申し上げる訣にも參りませんから、そのまま唯しほしほとお居間を下つて參りました。

その日の暮れがたでございました。わたくしはお廊下を通りながら、ふと向うの破風の空に蝶

蝶の群を見つけました。それも亦數さへわからないほど、上を下へと卍字なりに飛び狂つて居るのでございます。わたくしは世に蝶合戰と云ふのはこのことではないかと思ひました。が、時刻も大凶時ではあり、御當家には惡い前兆のやうな心もちも致しましたから、ちよつとの間眺めたぎり、誰にも敎へずにしまひました。のみならずその蝶蝶の群もぢきに薄明るい空の何處かへ流れて行つてしまつたのでございませう、二度目にお廊下を通つた時には唯もう黑ぐろと聳えた破風の暮れかかつて居るばかりでございました。

十四日もやはり蒸暑いことはきのふの通りでございました。この日はまだ巳の刻頃に澄見と申す尼が一人、御前樣にお目通りを願ひました。澄見は御城内へも出入をする六十ばかりの女でございますが、心底は中中一筋縄には行かないしたたかものださうでございます。その澄見の申し上げますには、(わたくしもほかの奥女房と丁度お側に坐つて居りました。)人質と申すのは如何ながら、兎に角御前樣だけ御城内へお住まひをお移し下さりさへすれば、治部少を始め一同の衆もさだめし滿足に思ふことであらう。就いては何ごとも御當家の爲に少時の間は御不自由をお忍び下さるやうにとのことでございました。しかし御前樣は相不變さりげない御容子をなすつたまま、三齋樣のお許しもないのに、御城内へ住まひを移すことなどは思ひもよらないと仰有いました。すると澄見は何も申さず、唯淚を流しました。それから又やつと申しますには、兼がね御前樣のお優しいことは澄見も一生の御恩に着てゐる、その爲に今度も打ち捨てて置いては御前樣のお身の上の大事と、幾何の餘命もない體にお使者の大役を申し請けて來た、この眞心の徹らないのは

何よりも悲しいとのことでございました。御前様はそれでもお美しい眉毛一つお動かしにならず、ぢつとお口をとざしていらつしやいました。かう云ふ御前様のお姿にはふだんとは又一しほ變つた氣高さのあつたものでございます。さう云へばいつぞや三齋様と御膳部を前になすつた時、どう云ふ粗匆か髪の毛が一すぢ、御前様のお椀の中にはひつて居つたことがございました。お思ひやりの深い御前様は下じもの者の越度になつては氣の毒と思召したのでございませう、そつとお椀の蓋のかげにその髪の毛をお隠しになりました。けれども三齋様は咄嗟の間に髪の毛のあるのを御覧になつたのか、「何をせられる？」とお尋ねなさいました。御前様はもとよりもの靜かに「何でもございませぬ」とお答へになりました。するとお氣性の烈しい三齋様は忽ち荒あらしい武者聲に「臺所のものをかばはれるな」と御前様をお睨みになつたと思ふと、長光のお佩かせを提げたなり、茵を蹴つてお立ちになりました。わたくしどもはうろうろする、お顔の色を變へた三齋様はつかつかとお臺所へお出ましになる、御前様はやはり御膳部を前に身じろぎもなさらずに坐つていらつしやる、――それが實は半時はおろか、ほんの僅かの間でございましたが、何かお附きのわたくしどもには長いながい氣が致しました。その内に又三齋様の大風のやうにお歸りになつたのを見ると、左のお手に生首を一つおさげになつていらつしやいました。三齋様は吊り眼にきつと御前様を御覧になるが早いか、いきなりこの生首を御前様のお膝へ投げつけました。同時に「そなたのひかせられる下﨟の首ぢや」とお笑ひになりました。侍の首は御前様のお膝を見る見るまつ赤に致しました。御前様はちらりと生首へ涼しいお目をおやりになりました。けれども端

然と坐つていらつしやることはとんと首のあることもお忘れになつたやうでございました。

（未完）

（大正十二年）

保吉の手帳から

〔プラン〕

1 就任——大本教、軍人勅語

2 生徒 { higher than English / lower than humanity

3 葬

4 ホの fool——Contempt

5 死

7 髮結床——Heroism

8 書庫——Rogue (Authority なき僞の親しみ、實は保吉も共犯者)

9 入學試驗——學校の humbug

10 東宮殿下、兵卒石をひらふ { honour / 殿下と小石

11 U教官

12 T教官

13 Projit
14 Horace

式

保吉は新調のフロツク・コオトを着、やはり新調の山高帽を持ち、出來るだけ眞面目に直立してゐた。彼の鄰にゐる淺井教授もフロツク・コオトは彼と同じだつた。唯帽子は山高帽の代りにけば立つたシルク・ハツトを手にしてゐた。淺井氏は保吉の就任と共に、辭任することになつてゐたのである。

二人の一歩後ろには文官教官が七八人、二列横隊に並んでゐた。これも服裝は一人殘らず、フロツク・コオトにシルク・ハツトだつた。さう云ふ中にたつた一人、宮川と云ふ理學士だけはシルク・ハツトの代用にオペラ・ハツトをぶら下げてゐた。

二人の向うに並んでゐるのは武官教官の一群だつた。これは川村とか云ふ中佐を筆頭に勳章の胸を並べてゐた。

二人のたには鍵の手に大勢の生徒が並んでゐた。生徒は海軍の學校だけに逞しい人間ばかりだ

つた。二人の右には壇の上に木本と云ふ少將の校長が上半身を少しかがめながら、始業式の辭か何か話してゐた。

保吉は由來何によらず、式と云ふものを好まなかつた。式は一切を退屈にするか、滑稽にするものだと信じてゐた。勿論この五六年このかた、免狀を貰ふ卒業式以外に、式に出たことは一度もなかつた。其處へ今始業式に列つたのだから、眞面目に直立してゐたとは云へ、內心は不愉快そのものだつた。

校長の式辭は何時になつても、盡きるところを知らなかつた。尤も生徒や教官は木乃伊のやうに嚴肅にしてゐた。しかしそれが又保吉には一層堪へ切れない重荷だつた。彼はとうとう窘窮の餘り、顏は少しも動かさずに、そつと淺井氏へ話しかけた。

「川村さんと云ふのですか、武官教官の首席にゐるのは？」

淺井氏はやはりこちらを向かずに、小聲にかう云ふ返事をした。

「ええ、川村君。しかしありや狐ですよ。」

保吉は思はず問ひ返さうとした。が、咄嗟に了解した。淺井氏は出口王仁三郎の創めた大本教の信者だつた。大本教の說によれば、我我俗人は天狗を始め、狐や狸にとり憑かれてゐる。淺井氏はかう云ふ信仰により、川村大佐にとり憑いてゐるのは狐だと判斷したのであらう。しかし「狐にとり憑かれてゐる」は「狐ですよ」の直截なのに若かない。保吉ははつきりと瞼の裏に、首だけ狐になつてゐる海軍士官を思ひ浮べた。同時に微笑を噛み殺した。

その後のことは書かずとも好い。保吉はこの一語の爲に、息苦しい退屈から救はれたのである。式には在職二年の間にまだ何度か參列した。が、もう淺井氏は彼の鄰に二度と姿を現さなかつた。保吉は時時勇ましい軍人勅語を謹聽しながら、淺井氏の姿を思ひ出した。すると妙に寂しい氣がした。淺井氏は夙に「クリスマス・キャロル」や「スケッチ・ブック」などを飜譯した、英吉利文學の紹介に貢獻の多い篤學・・・

紙幣

或初夏の午後である。堀川保吉は口笛を吹き吹き、教官室へ歸つて來た。白い窓かけの垂れた教官室には粟野教官がたつた一人、相不變巻煙草を啣へたまま、横文字の本をひろげてゐる。保吉はその横顏を見ると、忽ち口笛をやめたのは勿論、出來るだけ靴の音もさせないやうにそつと彼自身の机の前へ行つた。窓を右にした彼の机は粟野さんの机と向ひ合つてゐる。尤も向ひ合つたとは云ふものの、お互に顏の見える訣ではない。机の前にとりつけた書架は海語辭典だの兵語辭典だの會話辭典だのを並べた向うに、すつかり粟野さんを隱してゐるのである。

保吉はマドラスの本屋の出したマハトマ・ガンディの傳記を拔き出し、休み時間の退屈を紛ら

せる爲に刷りの悪い本文を讀みはじめた。ガンディは聖雄と云ふのださうである。聖雄とは如何なる牡の意味か、詳しい說明を聞いたことはない。が、兎に角父祖傳來の瘦せ我慢の强い男である。保吉は一本のバットに火をつけ、から云ふ一節を讀み下した。――「ガンディの母親は彼女の息子に下の三個條を誓はせた後、やつと英吉利へ留學することを許した。卽ち酒を飮まぬこと、女人の肌に觸れぬこと、肉類を食はぬことの三個條である。英吉利の土を踏んだマハトマ・ガンディは『英吉利紳士』にならんことを期した。その爲に舞踏を學んだり、ヴァイオリンの稽古をはじめたりした。……すると或日のこと、或晚餐會に臨んだ彼は一皿のスウプを啜るはめになつた。これは一生の危機だつた。母親に誓つた三個條を破るか？　それとも一人前の『英吉利紳士』になるか？　彼はこの二つの途のどちらかを選ばなければならなかつた。しかし彼の良心はとうとう誘惑を征服した。ガンディは唖然たる一座を後に、スウプの皿を殘したまま、晚餐のテエブルを離れたのである。……」

　讀んで此處に至つた時である。栗野さんは保吉の机の側へ……………………………………

…………………………………………………………

六七年前の初秋である。堀川保吉は××の宮殿下に拜謁を仰せつけられることになつた。尤も小說家堀川保吉として拜謁を仰せつけられる次第ではない。或海軍の學校の教官として拜謁を仰せつけられるのである。

拜謁を仰せつけられるのは微臣保吉の光榮である。が、御前へ現れる爲にはフロツク・コオトを着用し、シルク・ハツトをかぶらなければならぬ。それも格別大したことではない。しかしフロツク・コオトを着用し、シルク・ハツトをかぶる爲には、――兎に角フロツク・コオトやシルク・ハツトの存在を必要とする訣である。けれども保吉は不幸にも丁度一月ばかり前にフロツク・コオトやシルク・ハツトを質屋の藏に託してゐた。質屋の藏に託してあつても、三十何圓かの金さへあれば、勿論恐れるには當らぬ訣である。しかし三十何圓かの金は、――金のないことは斷らずとも好い。彼は既に金になるものは大抵金にし盡してゐた。

保吉はその爲に當日は母を病氣にしなければ彼自身病氣にならうと思つてゐた。すると殿下の行啓になる一日前の午休みである。彼は海風の通つて來る校舍の裏庭を歩いてゐるうちに粟野教官と一しよになつた。粟野さんは彼と同じやうに英吉利語を教へてゐるばかりではない。同時に又最古參の首席教官である。保吉はとりあへず粟野さんに母の急病を報告しようとした。が、粟野さんは彼よりも先にかう彼に話しかけた。

「ああ、堀川さん。さつきあなたの授業中に拜謁者名簿がまはつて來ましたから、代りにちよつとサインして置きました。勿論あしたはお出でになりますね？」

保吉は少からず狼狽した。のみならず狼狽した拍子にうつかり「ええ」と返事をしてしまつた。

「拜謁は始めてでせう？」

「ええ。」

「××の宮殿下にはわたしも始めてです。何でもあしたは御學友も大勢見えると言ふことですが、……」

栗野さんは氣輕にしやべりながら、秋薔薇のさいた庭を歩いて行つた。保吉は何度も「出るつもりですが」とか「實は母が」とか言はうとした。が、一度言ひそびれたことは誰でも手輕に言はれるものではない。そのうちに突然鳴り渡つたのは授業開始を知らせる喇叭である。栗野さんは歩みをつづけたまま、ちらりと腕時計へ目を落した。

「おや、喇叭が遲れてゐる。――ぢやあしたの拜謁時間は十一時半になつてゐますから。」

保吉は殆ど捨鉢にもう一度「ええ」と返事をした。同時に又あしたは何でも彼でも出なければならぬと覺悟をした。しかしこの決心を實行にするのは必しも容易の業ではない。彼は蝶結びのタイの下に重苦しい氣もちを抑へたまま、悄然と下宿へ歸つて來た。一食五十錢の賄料と一月五圓の間代とをとる或避暑地の安下宿へ。

金になるもののないことは前に言つた通りである。が、全然ない訣ではない。床の間へ一ぱいに積み上げた本は、――少くともヴォラアルのセザンヌ傳やマイエル・グレエフェの近代藝術史は十二三圓の金になる筈である。その外懷中時計、ネクタイ・ピン、萬年筆等を加へれば、――

保吉はふとニツケルの時計の狂つてゐることを思ひ出した。時計は藥罐を振るやうに力一ぱい振りさへすれば、一二分の間は動いてゐる。しかし龍頭は全然利かない。これでは到底三圓以上借りられないことは確かである。けれども土耳古玉のネクタイ・ピンは――姉はこのピンをくれる時に「この玉は安ものとは違ふんですからね」などと大いに勿體をつけたりした。が、姉に貰つた下駄の貼りものだつたことを考へると、薄靑い土耳古玉の正體も多少疑問になるのは勿論である。……

保吉はその晩の八時前後、やはり古袷の襟……………

…………………………………………

（大正十二年）

三つの指環

×

昔々、バグダッドのマホメット教のお寺の前に、一人の乞食が寢て居りました。丁度その時、說教がすんだので、人々はお寺からぞろぞろと出て來ましたが、誰一人としてこの乞食に、一錢もやる者はありませんでした。最後に一人の商人風の人が出て來ましたが、その乞食を見ると、ポケットから金を出してやりました。すると乞食は急に起き上つて「難有う御座います、陛下、アラアはあなたをお守り下さるでせう。」と云ひました。しかしその商人は氣にも止めずに行き過ぎようとしますので、乞食は云ひました。「陛下、お止り下さい。お話したい事があります。」すると商人風の人は振り返つて「私は陛下ではない。」と云ひますと、乞食は「いや、今度の陛下は駱駝追ひになつたり、水汲みになつたりして、下情を御覽になるさうです。私は朝からかうして憐みを乞うて居りますが、誰一人として私にお金を惠んで下さいません。私は陛下にお禮として、一つの指環を差し上げたいと思ひます。この指環は、アラビヤの魔神の作つたものでして、若し誰か陛下を毒害しようとすると、この指環についてゐる、赤い石が靑くなります。」と云つて、驚いて見てゐる商人風の人の手に指環をのせると、そのまま搔き消す樣に見えなくなりました。

次の日の夕暮れ、バグダッドの一つの井戸は、町の女達の水汲みで一頻り賑つてゐました。その井戸の前で、前の日お寺の前で乞食に陛下と云はれた商人が、一人の娘と話してゐました。その女は大層身窄らしいなりをしてゐましたが、非常に美しい、涼しい眼を持つた女でした。その時商人が娘に云ひますには「私は隨分長い間、毎日あなたとここで話して居りますが、いつでもあなたは、私の掛ける謎を卽座に解いてしまひます。私はあなたの頭の良いのと、その上美しいのに感心しました。どうか私の妻になつて下さいませんか。」娘「私の良人となる人は、本當に私を愛してくれる人でなくてはなりません。顏が美しいとか、醜いとか云ふのみで妻にしたいと云ふ樣な人には到底私は身を任す事は出來ません。」と云ひますと、商人は「それでは、私の家へ來て私と同じ生活をして、私が本當にあなたを愛してゐるかどうかを見て、そして私の心が分つたならどうか私の妻になつて下さい。その間私は、あなたを妹として取扱ふでせう。」と云ひます。娘「私は、あなたと長い間お話してゐますが、未だあなたのお名前もお所も存じません。」商人「私は、父の後を繼いで位についた、この國の王アブタルである。」と云つて口笛を吹きますと、何處からともなく大勢の奴隷が、象牙で拵へた美しい輿を持つて來て、その娘を乘せて宮城へと歸つて行きました。

さて、娘が王宮に伴れて行かれた翌朝、王樣はその娘と話をしようとして、娘の室に來ますと、驚いた事には、その娘の顏は一夜の中に腫物だらけとなつて、二目と見られない女となつてゐました。これを見た王樣は、一瞬間これは厄介なものを背負つたと思ひましたが、その聲、その態度、その頭の良さは前と決して變りはありませんので、王樣は漸く安心しました。

或日、話のついでに王樣は「私は國を治めて、隨分長くなるが、未だ信賴するに足る、大臣を得られないが、お前は誰か大臣にする樣な人を知らないか。」と云はれました。すると娘は「私が未だ落魄れて町に居り

ました時、ギラルリイと云ふ老人が市場に居りましたが、その老人をお用ゐになつては如何ですか。」と云ひました。そこで王様は家來をやつて、市場で壺造りをしてゐたギラルリイ老人を迎へにやりました。

翌日、大臣の就任式を濟ませた王様は、非常に不愉快な樣子をして、娘の處へ來て云ひますには、「あの老人は決して信頼するに足る人ではない。彼は私を毒殺しようとしてゐた。」娘は驚いてその理由を聞きますと、王様は「私の指環に嵌めてある石が靑くなつたので、怪んで老人を調べると、毒藥を持つてゐました。」と云はれました。娘「あの老人はそんな恐ろしい人ではありません。きつと何か間違でせう。どうか老人をここへ呼んで下さい。私が尋ねてみませう。王様は、どうか次の室に居て、老人がどんな返答をするか聞いてゐて下さい。」そこで娘は老人にその毒藥について聞きますと、老人が云ひますには、「私が今日宮城へ來ます途中で、一人の乞食が私に、一つの鐵の指環を吳れました。その指環を嵌めてゐると、人の祕密は殘らず分ると云ひましたが、私の長い經驗から、何も人の祕密を知る必要はありませんから、その指環は嵌めずに、帶の間に入れて置きました。しかし私が思ひますに、何處の王様でも、王様は我儘者ですから、もしも私が恥しめられる樣な事がありましたら毒を呑んで死んでしまはうと思つて、かうして毒を持つてゐるのです。」と云ふのを次の室で聞いてゐた王様は、自分の誤りから老人を疑つた事を深く詫びて、そこで食卓を共にする事となりました。その時着物を着換へに出て行つた娘が入つてくるのを見ると、驚いた事には、膏藥だらけだつた娘の顏は、非常に美しい、以前の美しさにも比べられない美しさになつてゐました。驚いて見てゐた王様に娘は「王様、私は決して惡い病氣にかかつたのではありません。私はあなたの心を試さうとして、顏に膏藥をはつてゐたのです。」と云ひながら、卓子(テエブル)の抽出しから一つの指環を出して、「私が未だ町に居りました時、一人の乞食からこの銀の指環を貰ひました。この指環を嵌めてゐると、如何なる男の心をも捉へる

事が出來ると云ふのでしたが、私はさう云ふ手段による事は正しくないと悟りましたので、決してこの指環は嵌めませんでしたが、指環によらないで自分を本當に愛して下さる人を見付けたのは本當にうれしい事です。」と云ひました。王樣は「三人共指環を貰つてゐるのに實際指にそれを嵌めたのは、私一人であつて、しかもそれによつて誤まらされたのは自分一人である。こんな指環は私には必要なものではない。」と云つて床に投げ付けると、その指環は割れて、內から焰が立つて、アラアがその焰の中から出て三人に祝福を與へて消えてしまひました。

そこで王樣は、この娘を妃にし、又この老人を大臣として政治を行つてゐました。然るに晩年に至つて亂が起つて、王樣は大臣と妃を伴れて、國を逃れてチフリス河のほとりに止り、そこで、自ら食を求めると云ふ樣な境遇になりました。が、しかしそこには、どこか樂しい所がありました。（談話）

×

一

バグダツドの或モスク（寺院）の前です。年をとつた乞食が一人、敷石の上にひれ伏してゐました。丁度禮拜の終つた時ですから、老若さまざまのアラビア人は薄暗いモスクの玄關から、朝日の光のさした町へ何人もぞろぞろ出て來るのです。が、誰一人この乞食に錢を投げてやるものはありません。その內に若い商人が一人、靜かに石段を下りて來ました。商人は乞食の姿を見ると、

ふとあはれに思つたのでせう、小錢を一枚投げてやりました。

乞食　難有うございます。陛下！

商人は妙な顏をしました。陛下と云ふのはアラビアではカリフ(王)だけにつける尊稱ですから。しかし商人は何も云はずに、乞食の前を通りすぎようとしました。すると乞食は追ひかけるやうに、もう一度かう繰返すのです。

乞食　難有うございます。陛下！　アラアは陛下をお守り下さいませう。

商人は足を止めました。

商人　お前は勿體ないことを云ふぢやないか？　わたしは唯の商人だよ。椰子の實を商ふハアヂと云ふものだよ。陛下などと呼ぶのはやめておくれ。

乞食　いえ、陛下は商人ではございません。陛下はカリフ・アブダル陛下でございます。

商人　わたしがあのアブダル陛下！　ははあ、お前は氣違ひだな。氣違ひならば仕かたはない。が、愚圖愚圖してゐると、今度はアラアと間違へられさうだ。

商人は苦い顏をしたなり、さつさと又行きすぎさうにしました。しかし乞食は骨張つた手に商人の裾を捉へながら、剛情になほ云ひ續けました。

乞食　陛下！　お隱しになつてはいけません。陛下は聰明のおん名の高いアブダル陛下でございます。或時は商人におなりになり、又或時は駱駝追ひにおなりになり、政治の善惡を御覽になると云ふアブダル陛下でございます。どうか御本名をお明し下さい。いや、お明し下さらないで

も、どうかこの指環をお受けとり下さい。

乞食は茫然とした商人に指環を一つ渡しました。それは大きいダイアモンドを嵌めた、美しい金の指環なのです。

乞食　陛下は聰明のおん名の高いアブダル陛下でございます。しかし惡人の毒害だけはお見破りになることは出來ますまい。ところがその指環のダイアモンドは毒藥の氣を感じさへすれば、忽ちまつ黒に變つてしまひます。ですからどうかこの後は始終その指環をお嵌め下さい。さうすればたとひ御家來に惡人が大勢居りましても、毒害におあひになることはございません。

呆氣にとられた商人は唯乞食と指環とを見比べてゐるばかりです。

乞食　その指環は唯の指環ではございません。或ヂン（魔神）の寶にしてゐた魔法の指環でございます。陛下は唯今わたくしにお金を惠んで下さいました。わたくしも亦お禮のしるしにその指環を陛下にさし上げます。

商人　誰だ、お前は？

乞食　わたくしでございますか？　わたくしの名は誰も知りません。知つてゐるのは唯空の上のアラアだけでございます。

乞食はかう云つたと思ふと、見る見る香の煙のやうに、何處かへ姿を隱してしまひました。あとには朝日の光のさした町の敷き石があるだけです。ハアヂと名乘つた商人は何時までも指環を手にのせた儘、不思議さうにあたりを眺めてゐました。

二

バグダツドの市場の噴き井の上には大きい無花果が葉を擴げてゐます。その噴き井の右にゐるのはハアヂと名乘つた先刻の商人、左にゐるのは水瓶をさげた、美しい一人の娘です。娘は貧しい身なりをしてゐますが、實際廣いアラビアの中にも、この位美しい娘はありますまい。殊に今は日の暮のせゐか、薄明りに浮んだ眼の涼しさは宵の明星にも負けない位です。

商人「マルシナアさん。わたしはあなたを妻にしたいのです。あなたは指環さへ嵌めてゐません。しかしわたしはあなたの指にあらゆる寶石を飾ることが出來ます。又あなたは薄ものや絹を肌につけたことはありますまい。しかしわたしは支那の絹や……」

娘はうるささうに手を振りました。

娘「わたくしの夫になる人はわたくしさへ愛せば好いのでございます。わたくしは貧しいみなし兒でございますが、贅澤などをしたいとは存じません。」

商人「それならばわたしの妻になつて下さい。わたしはあなたを愛してゐるのですから。」

娘「それはまだわたくしにはわかりません。たとひあなたはさう仰有つても、嘘ではないかとも思ふのでございます。」

商人は何か云はうとしました。が、娘は遮るやうに、口早に言葉を續けました。

娘「それはわたくしの顔かたちは愛して下さるかもわかりません。しかしわたくしの魂も愛し

て下さるでございませうか？　もし愛して下さらなければ、ほんたうにわたくしを愛して下さるとは申せない筈でございます。」

商人「マルシナアさん。わたしはあなたの魂も顔かたちと同じやうに愛してゐます。もし嘘だと思ふならば、わたしの家へ來て下さい。一月でも、二月でも、或は又一年でも、わたしと一しよに住んで下さい。わたしはアラアのおん名に誓ひ、妹のやうにつき合ふことにします。その間にもし不足があれば、何時出て行つてもかまひません。」

娘はちよいとためらひました。

商人「その代りわたしの心がわかれば、わたしの妻になつて下さい。わたしはこの三年ばかり、妻にする女を探してゐました。が、あなた一人を除けば、誰もわたしの氣に入らないのです。どうかわたしの願をかなへて下さい。」

娘は顔を赤らめながら、やつとかすかに返事をしました。

娘「わたくしは此處へ水を汲みに來る度に、何度もあなたにお目にかかりました。しかしあなたは何と仰有るかたか、それさへまだ存じません。ましてお住居は何處にあるか……」

今度言葉を遮つたのはハアヂと名乘つた商人です。商人は微笑を浮べながら、叮嚀に娘へ會釋をしました。

商人「バグダツドの町に住んでゐるものは誰でもわたしの家を知つてゐます。わたしはカリフ・アブダルです。父の位を繼いだアラビアの王です。どうか王宮へ來て下さい。」

商人は、――いや、カリフ・アブダルは脣に指を加へるが早いか、鋭い口笛を鳴らしました。娘はあまり思ひがけないのに、涼しい眼を見張つたなり、カリフの顏を眺めるばかりです。……………………………………（未完）

（大正十二年）

補遺第二

大須賀乙字氏

大須賀乙字氏には殆ど一二度しか御目にかかつた事がない。だから氏と僕とは殆ど生面の間柄であつた。その中の或時、或會合の席上で氏に會つた所が、氏は例の如く微醺を帶びながら、盛に僕をつかまへて老莊思想論を始められた。何でも老莊思想が日本の國民性に與へた影響から、俳句には殊にそれが著しく現れてゐると云ふやうな論旨であつた。その時氏は何とか云ふ支那人の書論を引張り出して、自說の根據の有力な事を立證されたと云ふ記憶もある。

その後僕は或必要があつて、當日氏が引用された書論の著者と名前とを手紙で氏に問ひ合せた。すると奧さんの代筆で、氏は目下熱が高いから返事が書けないと云ふ手紙を頂いた。氏の病氣を知らなかつた僕は勿論大いに恐縮した。が、家內にとりこみがあつたり何かしたものだから、唯恐縮しただけで御見舞の手紙も上げずにしまつた。ところがその後一二週間たつて、今度は氏の自筆の返事を頂戴した。それは遺憾ながら僕の問と食ひ違つた所もあつたが、如何にも叮嚀親切を極めた難有い手紙であつた。僕は二度恐縮して、早速御見舞を兼ねた御禮の手紙を書いた。それでも當時の心もちから云ふと何もう全快されたらう位な、甚のんきの事を考へてゐた。いや、當時の心もちばかりではない。今度は僕自身インフルエンザに罹つて、高い熱に苦しみながら、うんうん云つて居る最中に突然氏の訃音を聞いた時までは、依然として氏の病氣は快方

に向ひつつあるものと信じてゐた。僕は驚いた。さうして床の上から取り敢へず御悔みの手紙を送つた。氏と僕との交渉は殆どこれだけに盡きると云つて好い。が昨日何氣なく手帳を開けて見たら、古人の難解な句が五つか六つ鉛筆で亂暴に書き流してあつた。これは何時か氏の解釋を聞かうと思つて、心覺えに書き留めて置いたものであつた。僕はまだ藥は飲んでゐるが、兎も角も晝の間だけは書齋に坐つてゐる事が出來るやうになつた。乙字氏は、——もう二七日も過ぎたかも知れない。僕はさう思つた時の凍てつくやうな心もちが未に去らないやうな感じがしてゐる。

（大正九年二月）

「開化の殺人」附記

この小説を中央公論で發表した當時、自分に手紙をよこして、Pall Mall はペルメルと發音すべきだと注意してくれた人がゐる。が、自分はやはり外に Pell Mell と云ふ語がある以上、これはパルマルとした方がよからうと思ふ。又この小説を見た人が自分は Pall Mall の發音も知らないかと思つて、再度手紙などを貰ふと厄介だから、一言書き加へる事にした。

（大正七年）

「杜子春」附記

これは杜子春の名はあつても、名高い杜子春傳とは所々、大分話が違つてゐます。(三)のしまひにある七言絶句は、呂洞賓の詩を用ゐました。少年少女の讀者諸君には、「ちちんぷいぷいごよの御寶」と同じやうに思つて貰ひたいのです。

（大正九年）

愛の詩集

室生君。

僕は今君の詩集を開いて、
あの頁の中に浮び上つた
薄暮の市街を眺めてゐる。
どんな惱ましい風景が其處にあつたか、
僕はその市街の空氣が
實際僕の額の上にこびりつくやうな心もちがした。
しかしふと眼をあげると、
市街は、――家々は、川は、人間は、
みな薄暗く煙つてゐるが、
空には一すぢぼんやりと物凄い虹が立つてゐる。
僕は悲しいのだか嬉しいのだか自分にもよくわからなかつた。
室生君。

孤獨な君の魂はあの不思議な虹の上にある！

（大正八年十月）

おれの詩

おれの頭の中にはいつも薄明い水たまりがある。
水たまりは滅多に動いたことはない。
おれはいく日もいく日も薄明い水光りを眺めてゐる。
と、突然空中からまつさかさまに飛びこんで來る、目玉ばかり
　大きい青蛙！
おれの詩はお前だ。
おれの詩はお前だ。

（大正十二年十一月）

ロップス

（クロオド・バアル）

われは昨夜(よべ)「死」を見たり

街燈に氷雨降る
路狹く、人も無し。
唯一人わが前に
忘れんや、黑き裾、
帽子には枯れし薔薇、
弱腰もたをたをと
歩むなり、賣笑婦。
追ひすがり、呼べば、あゝ
街燈の光のもなか、

神の子よ、救はせ給へ。
見返りし髑髏の面(おもて)。
冷かに嘲笑ひつつ
云ひにしか、Bon Soir.

われは昨夜(よべ)「死」を見たり。

〔八寶飯〕

田中純君は「文藝春秋」のゴシップの卑俗に陷るを論難し、「古今の文人、誰か陽物の大小を云々せんや」と言へり。我等も亦田中君の義憤に聲援するを辭するものにあらず。然れども卑俗なるゴシップを喜べるは古人も亦今人に劣らざりしが如し。谷三山、森田節齋兩家の筆談を録せる「二家筆談」と言ふ書ある由、（三山は聾なりし故なり。）我等は未だその書を見ねど、市島春城氏の「隨筆頼山陽」に引けるを讀めば、古人も亦田中君の信ずる如く陽物の大小に冷淡ならず。否、寧ろ今人よりも潑剌たる興味を有したるが如し。

「山陽しばしば畫師竹洞の大陽物をなぶる。竹洞大いに怒り、自ら陽物を書き、『山陽先生、余の陽物を以て大なりと爲す。拙者の陰莖、僅に此の如し』とかきて山陽に贈る。畫工小田百谷座に在り。曰く、『是は縮圖であらう、原本必ず大なり焉。』一座大笑す。（是より文人、竹洞を名づけて縮圖先生と號す。）」（原文に交へたる漢文は假名まじりに書き改めたり。）

我等は今人は買冠らねど、古人を買ひ冠ることは稀なりと爲さず。又同じ今人にしても、海の彼岸にゐる文人を買ひ冠ることは屢なり。然れども彼等も實際は我等と大差なき人間なるべし。或は我等の几側に侍せしめ、講釋を聞かせてやるに足るものも存外少からざらん乎。と言へば大言壯語するに似たれど、兎に角彼等を冷眼に見るは衞生上にも幾分か必要なるべし。

今人を罵るの危險なることは趙甌北の「簷曝雜記」にその好例ありと言ふべし。南昌の人に李太虛と言ふものあり。明の崇禎中に列卿と爲る。國變に死せず。李自成に降り、清朝定鼎の後、脫し歸る。擧人徐巨源と言ふものあり。嘗之を非笑す。一日太虛の病を訪ふ。太虛自ら言ふ、「病んで將に起たざらんとす」と。巨源曰、「公の壽正に長し。必ず死せじ」と。之を詰れば則ち曰、「甲申乙酉に(明の亡びたる〔二字缺〕の末年なり。)死せず。則ち更に死期無し」と。太虛怒る。これは怒るのも尤もなり。更に又巨源、一劇を撰す。この劇は太虛及び龔芝麓賊に降り、後に清朝の兵入るを聞くや、急に逃れて杭州に至り、追兵の至るに驚いて、岳飛墓前、鐵鑄の秦檜夫人の跨下に匿る、偶この鐵像の月事に値ひ、兵過ぎて跨下を這ひ出せば、兩人の頭皆血に汚れたるを描けるものなり。太虛この劇の流行を聞き、丁度南昌に來れる龔芝麓と共に、密かに歌伶を其の家に召し、夜半之を演ずるを觀る。演じて夫人の跨下を出づるに至るや、兩人覺えず大哭して曰、「名節地を掃ふこと此に至る。夫れ復何をか言はん。然れども孺子の爲に辱めらるること此に至る。必ず殺して以て忿念を洩らさん」と。乃ち人をして才人巨源を何處かの逆旅に刺殺せしめたりと言ふ。按ずるに自殺に怯なるものは、他殺にも怯なりと言ふべからず。巨源のこの理を辨へず、妄りに今人を罵つて畢に刀下の怨鬼となる。常談も大概にするものなりと知るべし。

(大正十二年)

澄江堂雜詠

一　臘梅

〔第七卷三三七頁ニ收ム〕

二　ちろり

明星のちろりにひびけほととぎす

これはお茶屋の二階の作。その後もあの位形の好い一對のちろりを見たことはない。この句に苦勞してゐる間に鼻の下の長い婆さんの藝者謠つて曰、「四條の橋から何とかを見れば、灯が一つ見える、あれは何とかの灯か、二軒茶屋の灯か」と。（勿論唄の記憶は確かではない。）

三　「みやらび」

佐藤惣之助君に貰つた「琉球諸島風物詩集」によれば、琉球語に娘子を「みやらび」と言ふさうである。「みやらび」と言ふ言葉は美しい。卽ち禮狀のはしに「みやらび」の歌一首を書いて送つた。何でもこの「みやらび」どもはしんとんとろりと佐藤君に見とれたやうに聞き及んでゐる。

空にみつ大和扇をかざしつつ來よとつげけむ「みやらび」あはれ

四　「今戸の猫」

書贊などと言ふものはまだ一度もしたことはない。が、下島先生に岡本一平君の描いた夏目先生の戯畫をつきつけられ、いろいろ考へた揚句、やつとかう言ふ句を書いて見ることにした。

餅花を今戸の猫にささげばや

「今戸の猫」は通じないかも知れない。しかし作者は「今戸の狐」と言ふから、「今戸の猫」と稱することも差支へあるまいとこじつけてゐる。

五　松

大正十二年九月七日。芝へ行く。姉や弟の家のあたりは一面の燒け野原。いつか竹田の畫の展觀のあつた金持ちの家も灰燼になり、燒け棒杭になつた椎の木ばかり立つてゐる。あの畫も燒けたかなと思ふ。増上寺は無事。三門前の松林の不相變だつたのは嬉しかつた。

松風をうつつに聞くよ夏帽子

六　沙羅の花

〔第七卷三三八頁ニ收ム〕

（大正十四年五月）

比呂志との問答

僕は鼠になつて逃げるらあ。
ぢや、お父さんは猫になるから好い。
さうすりやこつちは熊になつちまふ。
熊になりや虎になつて追つかけるぞ。
何だ、虎なんぞ。ライオンになりや何でもないや。
ぢやお父さんは龍になつてライオンを食つてしまふ。
龍？（少し困つた顏をしてゐたが、突然）好いや、僕はスサノヲ尊になつて退治しちまふから。

無題

わたくしはけふの講演會に出るつもりでゐましたが、腹を壞してゐる爲に出られません。元來講演と云ふものは肉體勞働に近いものですから、腹に力のない時には出來ないのです。甚だ尾籠なお話ですが、第一下痢をする時には何だか鮫の卵か何かを生み落してゐるやうに感ずるのです。それだけでももうがつかりします。おまけに胃袋まで鯨のやうに時々潮を吐き出すのです。そこで友人佐佐木茂索君にこの文章を讀んで貰ふことにしました。勿論佐佐木君は讀むだけではなく、佐佐木君自身の講演もされることと信じてゐます。若し萬一されなかつたとすれば、どうか足を踏み鳴らして、總立ちになつてお騷ぎ下さい。右とりあへず御挨拶まで。

（大正十五年六月）

夏目先生

始めて先生に會つた時、萬歳と云ふことを人の中で言つたことがあるか、ないかと云ふ話が出た。で僕は、一度もないと言つた。さうしたら先生は、誰かの結婚式の時に、萬歳と云ふ音頭をとつて呉れと頼まれて、その時に言つたことがあると言はれた。それからその外に、よくは覺えてゐないが、二三度あると云ふ話であつた。その時、何故萬歳と云ふのが言ひ難いんだらうと云ふ話になつて、先生は、人の前で目立つことをするのは極りが惡いからだと言ふ、僕は、それもあるでせうが、一體萬歳と云ふ言葉が、人間が興奮して聲を出す時に、フラアと云ふ言葉のやうに出ないで、萬歳と云ふ言葉の響きが出にくいからなんだらうと言つた時、それを先生は斷乎として認めなかつた。それを僕が强情に言ひ張るもんだから、先生は厭な顏をして默つてしまつて、僕はへこたれたことがある。それ以來、どうも先生に反感を持たれてゐるやうな氣がした。

×

或時、僕が、志賀さんの文章みたいなのは、書きたくても書けないと言つた。そして、どうしたらああ云ふ文章が書けるんでせうねと先生に言つたら、先生は、文章を書かうと思はずに、思ふまま書くからああ云ふ風に書けるんだらうとおつしやつた。さうして、俺もああ云ふのは書けないと言はれた。

往來を歩いてゐたら、荷車の馬が車を離れて追かけて來た。で、逃げ出してよその家へ飛び込んだことがあるけれど、その馬は自分を本當に追かけたのか、外の人を追かけたのか、未だに分らないと言はれたことがあつた。

×

正岡子規が「墨汁一滴」だか何かに、先生と一緒に早稻田あたりの田圃を散步してゐた時、漱石が稻を知らないで驚いたと云ふことを書いてゐる。さうして先生とその話が出たことがあつた。さうしたら先生が言ふのには、いや俺は、米は田圃に植ゑるものから出來ることは知つて居る、田圃に植つて居るものが稻であると云ふことも知つて居る、唯、稻——目前にある稻と米との結合が分らなかつただけだ。正岡はそこまで論理的に考へなかつたんだと、威張つて居られた。

×

或る晩のこと、みんなが先生に猛然として、論戰を吹かけた。僕は何とも思はなかつたけれども、久米が氣にして、あんなに先生に戰を挑んでいいのだらうかと小宮さんに聞いた。さうしたら小宮さんが、先生はあれが得意なんだと言つた。皆に食つてかからせて蹴ちらすのが好きなんだと言つた。

×

エリシエエフ君が先生に、先生の物を飜譯するのに、「庭に出た」と云ふのと、「庭へ出た」と云ふのと、どこが違ふかと言つたら、先生は、俺も分らなくなつちやつたと言つて居られた。

×

タガヤサンのステッキの話。鈴木さんが、先生の小說の中にあるタガヤサンのステッキの話を見て、タガヤサンは堅い木で、とてもステッキなんかに切れる木ではないと言つたら、先生が眞面目な顏で、でも今は鐵でさへも切れる機械があるのに、タガヤサンの木が切れない筈はないと言つた。

×

安井曾太郞の畫を見て、先生は細かさが丁度俺に似て居ると言はれた。

×

先生は一寸したことでもよくおこつた。僕が一ぺんかう云ふ話をした。人から聞いた話で、高楠順次郞が、夏目さんなんか大學に居るよりも、外へ出て作家になつた方がよかつた人だと云ふことを言つて居たと云ふ話をしたら、先生は忽ちムッとして、俺に言はせれば高楠こそ大學に居ない方がいいんだと言つた。

先生が錢湯に入つてゐたら、傍に居た奴が水だか湯だかひつかけた。先生はムツとしてその男を取つつかまへて馬鹿野郎と言つた。言つたが直ぐに後で怖くなつてどうしたらいいかと思つてゐたら、いい幸に向うがこつちの劍幕に驚いてあやまつてくれたんで、俺も助かつたと言つて居られた。

×

夜、どつかに火事があつて、先生、火事を見に行つて歸つて來たら、刑事が非常線を張つて居るのに引かかつてしまつた。刑事が、お前はどつちから來たんだと言つた。火事場の方角から言へば向うから來たに違ひないのだけれども、家の方角から言へば、こつちから來たに違ひない、それで家は向うを出て來たが、火事場はこつちから歸つて來たんだと言つたら、刑事が兎に角そこへ待つてゐろと云つたから、丁度そこに材木のやうなものが積んであるから、そこへかけて待つて居た。そして警察へ行くのも面白いなどと考へて居る中に、又誰かが引かかつて摑まつて來た。さうしたら先生に、もうお前は行つても宜しいと言つたので、折角、一寸警察へ行つて見たいなんて考へて居る時だつたから、刑事にもう少しなんなら待つて居ませうかと聞いたら、もうよしよしと言はれて歸つて來た。

×

骨董を集めるのが好きで、あるものを買つたが、その字が讀めなくて、聞いたら、專賣特許と云ふ字だつ

た。

×

たしか正月だつたと思ふけれど、先生のお膳に栗が付いて居た。先生は糖尿病で甘いものは何も食へないのだ。所が先生、その栗を食ひながら、僕の家内はね、甘い物と云へば菓子だけだと思つてゐるんだよ、外のものならかまはないと思つてるんだよつて、首を縮めて食つて居た。

×

島崎柳塢の話。

×

先生はロダンを山師だと云ひ、モオパスサンを巾着切りみたいな奴だと言つてゐた。

（談話）

補遺第三

未定詩稿

＊

夜はの川べに來てみれば
水のもをこむる霧の中
花火は空に消えゆけり
われらが戀もかくやらむ

＊

人を殺せどあきたらぬ
妬み心も今ぞ知る
赤き光にとぶ蠅も
日頃は打つにうきものを

＊

ひるの曇りにしんしんと
石菖の葉はむらだてり
ひるの曇りにしんしんと
痛む心は堪へがたし

＊

山べを行けば岩が根に
何時しか苔も青みけり
日かげに煙る淸水にも
何かは人のなつかしき

*

かなしきものはほの暗き
月の中なる山の影
君が心のおところへも
見じとはすれど見ゆるなる

*

雨にぬれたる曼珠沙華
ふみつつひとり思ひけり
天女にあらぬ人の上
——釋迦佛の世は遙なり

*

ひとを戀ひつつただひとり
踏むは濡れたる敷石に
誰がまきすてし曼珠沙華
——釋迦佛の世は遙なり

*

澄むことしらぬ濁り江に
かがやかなりや支那金魚
わが煩惱のもなかにも
さこそはすぐる彌陀ごころ

*

ひとをまつまのさびしさは
時雨かけたるアーク燈
まだくれはてぬ町ぞらに
こころはふるふ光かな

*

のみ忘れたるチヨコレエト
つめたき色に澄むときは
幽かにつもる雪の音も
君が吐息にまじるなり

*

まひるの月を仰ぎつつ
萩原をあゆむやさ男
あれは阿呆かもの狂ひ
いやいや深草の少將に候

*

遠田の蛙聲やめば
いくたびよはの汽車路に
命すてむと思ひけむ
わが夫[2]はわれにうかりけり

*

心ふたつにまよひつつ
たどきも知らずわが來れば
まだ晴れやらぬ町ぞらに
怪しき虹ぞそびえたる

*

光はうすき橋がかり
靜はゆうに出でにけり
昔めきたるふりながら
君に似たるを如何にせむ

*

女ごころは夕明り
くるひやすきをなせめそ
きみをも罪に墮すべき
心強さはなきものを

*

紅蓮と見れば炎なり
炎と見れば紅蓮なり
安養淨土は何處やらむ
救はせ給へ技藝天

[*Sois belle, sois triste*]

何かはふとも口ごもりし

*

えやは忘れむ入日空
せんすべなげに仰ぎつつ
何かはふとも口ごもりし
その

入日の空を仰ぎつつ
何かはふとも口ごもりし
消えし言葉は如何なりし

*

「思ふはとほきひとの上」
波に音なきたそがれは

「思ふはとほき人の上」
船のサロンにただひとり
玫瑰の茶を啜りつつ
ふとつぶやきし寂しさは

水の上なる夕明り
畫舫にひとをおもほへば
たがすて行きし薔薇の花
白きばかりぞうつつなる

畫舫はゆるる水明り
はるけき人をおもほへば
わがかかぶれるヘルメット
白きばかりぞうつつなる

〔欄外三〕 *sois belle, sois triste* ト云フ

はるけき人を思ひつつ
わが急がする驢馬の上
穂麥がくれに朝焼けし
ひがしの空ぞ忘られね

*

みどりはくらき檜の葉に
ひるの光のしづむとき
つととびたてる大鴉

みどりは暗き檜の葉に
晝の光の沈むとき
ひとを殺せどなほあかぬ
妬み心も覺えしか

綠はくらき檜の葉に
晝の光の沈むとき

わが欲念はひとすぢに
をんなを得むと

みどりはくらき檜の葉に
ひるの光のしづむとき
きみが心のおとろへぞ
ふとわが

*

ひとをころせどなほあかぬ
ねたみごころもいまぞ知る
垣にからめる薔薇の實も
いくつむしりてすてにけむ

垣にからめる薔薇の實も
いくつむしりて捨てにけむ
ひとを殺せどなほあかぬ
ねたみ心に堪ふる日は

*

ひとり葉巻をすひ居れば
雪は幽かにつもるなり
かなしきひともかかる夜は
かそかにひとりいねよかし

幽かに雪のつもる夜は
ひとり胡桃を剝きゐたり
こよひは君も冷やかに
ひとりいねよと祈りつつ

ひとり胡桃を剝き居れば
雪は幽かにつもるなり
ともに胡桃は剝かずとも
ひとりあるべき人ならば

*

ひとり山路を越え行けば
雪は幽かにつもるなり
ともに山路は越えずとも
ひとり眠（いぬ）べき君ならば

ひとり山路を越え行けば
月は幽かに照らすなり
ともに山路は越えずとも
ひとり眠ぬべき君ならば

*

夜毎にきみと眠るべき
男あらずばなぐさまむ

*

雲は幽かにきえゆけり
みれん

夕づく牧の水明り
花もつ草はゆらぎつつ
幽かに雲も消ゆるこそ
みれんの

水は明るき牧のへも
花もつ草のさゆらぎも
わすれがたきをいかにせむ
みれんは

みれんは牧の水明り
花もつ草の

＊

いづことわかぬ靄の中
かそけき月によわよわと
啼きづる山羊の聲聞けば
遠き人こそ忘られね

何か寂しきはつ秋の
日かげうつろふ靄の中
茨ゆ立ちし鵲か
ふと思はるる人の顔

＊

雨はけむれる午さがり
實梅の落つる音きけば
ひとを忘れむすべをなみ
老を待たむと思ひしが

谷に沈める雲見れば
ひとを忘れむすべもなみ
老を待たむと思ひしが

ひとを忘れむすべもがな
ある日は古き書のなか

匂も消ゆる白薔薇の
老を待たむと思ひしが

＊

雨にぬれたる草紅葉
侘しき野路をわが行けば
片山かげにただふたり
住まむ藁家ぞ眼に見ゆる

＊

われら老いなばもろともに
穂麥もさわに刈り干さむ

夢むはとほき野のはてに
穂麥刈り干す老ふたり
明るき雨のすぎ行かば
虹もまうへにかかれとぞ

夢むは遠き野のはてに
穂麥刈り干す老ふたり
仄けき雨の過ぎ行かば
虹もまうへにかかるらむ

たとへばとほき野のはてに
穂麥刈り干すわれらなり

われらは今日も野のはてに
穂麥刈るなる老ふたり
雨に濡るるはすべもなし
幽かにかかる虹もがな

＊

ゆふべとなれば
物の象（かたち）はまぎれ

物の象のしづむごと

老さりくれば

牧の小川も草花も
夕となれば煙るなり
われらが戀も

牧の小川も草花も
夕となれば煙るなり
わが悲しみも
老いさりくれば消ゆるらむ

ゆふべとなれば草むらも

ゆふべとなれば海ばらも
……………………
今ば忘れぬおもかげも
老さりくれば消ゆるらむ

ゆふべとなれば波の穗も
遠島山も煙るなり
今は忘れぬおもかげも
老いさりくれば消ゆるらむ

夕となれば家々も
畑なか路も煙るなり
今は忘れぬおもかげも
老さり來れば消ゆるらむ

（大正十年）

澄江堂句抄

一

園藝を問はれたる折に。

あさあさと麥藁かけよ草いちご

ホフマンの傳奇を好める頃、ひとり鎌倉
の濱べに幻めける海を眺めつつ。

白南風(しらはえ)の夕浪高うなりにけり

藥酒の料にせんとや。

曇天や蝮生きをる罎の中

賣文に餬口するすべなさはけふも二階の八
疊に日ねもすペンを動かしつづけぬ。

木の枝の瓦にさはる暑さかな

我孫子なる折柴を訪へるかへるさ。

蒲の穗はなびきそめつつ蓮の花

景の詩に入る、巧を用ふるの暇あらず。

野茨にからまる萩のさかりかな

妻子は夙に眠り、われひとり机に向ひつ
つ。

咳ひとつ赤子のしたる夜寒かな

晩歸

竹林や夜寒のみちの右ひだり

調は虛栗の佶屈を喜び、意は言水の幻怪
を好める數年前のさかしらなり。

惣嫁指の白きも葱に似たりけり

湯河原の溫泉にて。

初霜の金柑見ゆる葉越しかな

飯田蛇笏へ贈る文のはしに。

春雨の中や雪おく甲斐の山

小閑を得たるうれしさに。

竹の芽も茜さしたる彼岸かな

二

夜來の春雨、曉來亦霏霏たり。京都を發し、神戸に向ふ。京攝の山川、夢裡に在るが如し。

雨吹くやうすうす燒くる山のなり

一游亭主人、病を伊香保に養はんとす。別情自ら愴然たり。

霜のふる夜を菅笠のゆくへかな

鎌倉平野屋に遊ぶ。舊遊何年の前なるか知らず。

藤の花軒端の苔の老いにけり

大正十二年八月下浣、古原艸と共に一游亭を訪ふ。庭前に朝顏數鉢あり。即ち戲れにこの句を作る。太震の後、再び一游亭に至る。一游亭主人、依然たる朝顏を指さしつつ、笑つて僕に語つて曰「この家が燒けりやあの句が活きるんだがね。」

朝顏や土に匍ひたる蔓のたけ

大震の後、偶芝山內を過ぎ、萬株の長松の恙なかりしを見る。宛然故人と相逢ふが如し。欣懷自ら禁ずること能はず。

松風をうつつに聞くよ古袷

三

田舍びとは夜のあることを知らず。知れるは唯闇ばかりなるべし。夜とはともし火にも照らされたるものを。この田舍は闇のけうとかりければ、

更くる夜を上ぬるみけり泥鰌汁

黑背廣に鼠色のソフトをかぶりたる俳諧師の心を思へ。

初秋や蝗つかめば柔かき

鎌倉なる三汀を訪ふ。庭は何の風情もなけれど、庭の外なる砂畠の秋の色のおもしろかりければ、

唐黍やほどろと枯れし日のにほひ

裏なる木の片かはは枯れ、片かはは茂れるを愛しつつ。

秋の日や榎の杪（うら）の片なびき

座敷には妻の古雛を飾りぬ。書齋には唯高麗の壺に手づから剪りたるひと枝をさしつつ、

白桃や莟うるめる枝の反り

のどかとはかかる心なるべし。人の庭の麗さをよろこびつつ、ひとり春の日をなまけ暮らしぬ。

庭芝に小みちまはりぬ花つつじ

龍門山の石佛を見むと、洛陽の古都に至りしも、いつしか三年の昔となりぬ。城外の麥の黄ばみたる、辮髪したる農男農女の昔ながらに麥を打てる、今もなほ目前にあるが如し。

麥ほこりかかる童子の眠りかな

久しぶりにあひたる姪の大人さびしさまも可笑しければ、

かへり見る頰の肥りよ杏いろ

（大正十二年—大正十三年）

我鬼句抄補遺

春

山椒魚動かで水の春寒き

冴返る魚頭捨てたり流し元

、草の戸の灯相圖や雉ほろと（七年）

、水朧ながら落花を浮べけり（八年）

、遅櫻卵を破れば腐り居る（七年）

、君琴彈け我は落花に肘枕（教師をやめる、八年）

、干し傘を疊む一々夕蛙（七年）

、引き鶴や我鬼先生の眼ン寒し（七年）

陽炎にもみ上げられし蝶々かな

、冷眼に梨花見て轎を急がせし（七年）

、熱を病んで櫻明りに震へ居る（七年）

、篁に飛花堰きあへず居士の家（教師をやめる、八年）

牛に積む御料檜や梅の花（六年）

夕垢離や濡れ石に藤の花垂るゝ

病間や花に遅れて蜆汁（風を引いて寢る）

花薊おのれは我鬼に似たるよぞ

山藤や硫黄商ふ山の小屋

、裸根も春雨竹の青さかな

葉牡丹はほぐれもあへぬ餘寒かな

春雨の雨脚見えず海の上

春の夜や鶏を飼はさぬ處神（伯州美保關）

、春返る竹山ならん微茫たる（八年）

日暦の日曜赤し福壽草（八年）

、勳章の重さ老軀の初明り（八年）

大風の障子閉しぬ櫻餅（七年）

春風や山谷通ひの白ぐゝり

篠懸の花咲く下に珈琲店かな

瑠璃鳥や水に枝垂れて桃の花

蓼科の山紫や百合根掘る（七年）

楚腰纖細掌中輕

春の夜や蘇小にとらす耳の垢

冴返る燕の喉赤かりし

大寺は今日陽炎に棟上げぬ

陽炎にもみ消されたる蝶々かな（八年）

祝砲やお降りなればどろどろと（八年）

初花の疎らに晝の曇りかな

糸櫻かすかに晝の曇りかな

夕闇や枝垂櫻のかなたより

花とぶや加茂の小路の夕日影

負うた子のあたま垂るゝや初蛙

負うた子のあたま日永に垂れにけり

春雨や枯笹ぬるゝ庭の隈

夏

宵闇や殺せども來る火取虫（八年）

五月雨や枇杷つばら見ゆ藪に住む（七年）

五月雨や雨の中より海鼠壁

向日葵の花油ぎる暑さかな（七年）

ゼンマイに似て蝶の舌暑さかな（七年）

八朔の遊女覗くや青簾

足の裏見えて僧都の晝寐かな

水玉の簪涼しき櫛目かな

もの云はぬ研屋の業や梅雨入空（八年）

草薙げば釣鐘草や時鳥

姫百合や｝行路病者に蠅群るゝ
炎天や

よべの風蘭田にしるしや朝曇（備後道中、八年）

短夜や泰山木の花落つる（七年）

人相書に日蝙蝠の入墨あり（六年）

行水の捨湯蛙を殺した）

鴆毒の壺も曝すやお虫干
人はたと沈んで海の日午なり
小ぎたなき古洋妾や花蓙に
石所々｝
滲み入りて｝苔に光る清水かな
炎天や逆上の人もの云はぬ
病間のダリアを見るや久米正雄

久米正雄の病初夏に入つて
漸く癒ゆ

枕頭やアンナ・カレニナ芥子の花
五色黄昏岩蓮華所々（七年）
夕立や土間にとりこむ大萬燈
大象も花笠したる祭かな（七年）
夕闇にめぐる怪體や煽風機
門外の潭や幾樹の蟬時雨（八年）
石象の腹暖し夏の月
麥秋や麥にかくるる草苺
雨の中に風すぢしるき青田かな（八年）
濡れ蘆の亂れゆゝしや虹五尺（八年）
虹ふくや亂れ伏したる川の蘆
濡れ蘆や虹を拂つて五六尺（八年）
牡丹剪つて氣上る見たり夕曇（八年）
牡丹切れば氣あり一すぢ空に入る
曇天に壓されて咲ける牡丹かな
べたべたと牡丹散り居り土の艶（八年）
夏山や幾重かさなる夕明り（八年）
江の空や拳ほどなる夏の山（八年）
水槽に寒天浮いて夕さりぬ
蓄音機するや煤けし葭戸越し
向日葵も油ぎりけり午後三時

秋

水墨の秋三竿の竹に見よ（自畫賛）
雁の聲落ちて芋の葉戰ぎけり
雁啼くや燈火洩るゝ船に蘆
雁啼くや提灯下げて栗畠

川岸蔵に月さす夜々や雁の竿
雁百羽くの字に立つて月出づる
月缺けてさかさに落す雁一羽
月傾や折れて崩れて雁の竿
晴明の屋形の空や雁亂る
夕燒や小田に降り來る雁の數
芒刈つて片岡廣し雁渡る
唐黍の先に夕日や雁渡る
月の雁貧しき町を渡りけり
わが庵の上啼き渡れ月の雁
缺月や身をさかしまに雁一羽
行燈の丁字落すや雁の聲
雁啼くや空城の草黄ばむべき
雪舟が繪卷の端や雁一羽
啼き渡れわれもさびしき月に雁
雁啼くや軒に下したる薄荷草
月の出や雁落ちかゝる佃島
雁啼くや草黄ばみたる土饅頭（八年）

秋暑く竹の脂をしぼりけり（六年）
古船の水かい出すや秋暑き（六年）
何となく墓をめぐるや墓參人
橋に瑠璃燈かけよ海の秋
きりぎりすはさと來りし燈籠かな
草の戸や來ん殿待つこ高燈籠
町行けば思はぬ空に花火かな
亢として柚味噌靜かや膳の上
秋雨や庭木植ゑつく土の色
しどけなく白菊散るや秋の雨
蘭の花恭鬼となるべき願あり
月清ら清らに匂ふ落葉かな
月今宵匂ふは何のすがれ花
稲妻や何ぞ北斗の靜なる
魅や招く伏木が下に鼠茸
花芒拂つて高し海の雲
雨や來る空すさまじき花火かな
雲飛んで砧せはしき夜となりぬ

朝寒やさざ波白き川の上
夜寒さやカンテラとぼす路普請
角燈に流るゝ夜霧郵便屋

漱石山房

山房を出づれば露のわが——
園竹のざわと地を掃く野分かな
野分して屋根に茅な（し杜小陵／き庵かな）
靜かさや野分の中に出づる月
椋鳥を礫に打つて野分かな
野分止んで一つ啼き出ぬちちろ蟲
啼き出でて一つ蛼や野分あと
野分朝木の葉散りたまる手水鉢
二日月白無花果は熟れ早き（八年）

ドストエフスキイが「罪と罰」中ラスコルニコフ、ナタシアを知る段殊に感を惹く

一痕の月に一羽の雁落ちぬ
夕紅葉人なき縁の錫の茶器
稲むらの上や夜寒の星垂るゝ（八年）
朝寒の葉を垂らしたる柏かな（八年）
新しき疊の匂ふ夜長かな
松風や人は月下に松露を掘る（八年）
秋風にゆらぐや蓮の花一つ（八年）
木の葉搔きつくせば三日の月もなし（八年）
巖かげに水滴るや二日月（八年）
天心のうす雲菊の氣や凝りし（八年）
白菊は暮秋の雨に腐りけり（八年）
顋引いて寫す細字や夜半の秋（八年）
夕焼や霧引く澤の檜林
竹山は霧引きながら夕焼けぬ
夕焼や霧這ひわたる藺田の水（八年）
明けがたや蔦の葉すべる露の音
青蔦にすべれる露か土じめり
山蔦の露もとどめぬ青葉かな

冬

老骨をばさと包むや革羽織（七年）
黒塚や人の毛を編む雪帽子
灰墨のきしみ村醫の返り花（六年）
拾得は焚き寒山は掃く落葉
山の月冴えて落葉の匂かな
榾焚けば榾に木の葉や山暮るる
黄昏るゝ榾に木の葉や榾焚けば（八年）
澤畔の晝や靜に草枯る、る（八年）
風に鳴る松や孤峯の草枯れて
夕波や牡蠣に老いたる船の腹
草枯るゝ夕々や松に風
凍て杉に聲ある夕の谷間かな（八年）
夕空や凍て杉しんと立てりけり

空低し一本杉や凍てゝ鳴る（八年）
時雨るゝや軒に日殘る干大根
埋火の灰に赤しわが心（ある人に、八年）
竹切れば寒き朝日や竹の中（八年）
何の肉赤き厨ぞ軒の雪（八年）
人絶えし晝や土橋の草枯るゝ
時雨るゝや灯りそめたるアアク燈
或夜半の炭火かすかにくづれけり
枯芝や根府川石の斜なる
枯芝や庭をよこぎる石の列
飛び石は斜めに芝は枯れにけり（八年）

〔編者附記　本卷所載「我鬼句抄」中、作者ニヨツテ抹殺セラレタル發句ノ過半數ヲ此處ニ收ム。但、ヽ印ヲ附セルハ「我鬼窟句抄」中ニ既ニ收メラレタルモノヲ示ス。〕

蕩々帖補遺

刈り麥もこぼれかかりつ草苺

伊勢長

鱧の皮水切りたらぬ餘寒かな

加茂の堤

葉柳や河原は暮れぬ石のいろ
うねうねと枝に縫はるる茂りかな
風先に枝さし揃ふ若葉かな

○

竹の秋祠も見えぬ鳥居かな

與茂平丸山へ行きたがる卽

なぐれ來て膳に落ちたり火取蟲

大村灣

夏山ははなれ立ちたる入江かな

長崎畫十句ヲ試ム

花を持ち荷蘭陀こちを向きにけり
象の腹くぐりぬけても日永かな

第二句成ラザル內ニ與茂平來リ十句吟御流レニナル

○

與茂平に代りておたまさんに

夕立やわれは眞鶴君は鷺

カウナルト俗ニ墮ツベシ作ラザルニ若カズ

○

石の垢ものうき水の日ざしかな
山風の曉落ちよ合歡の花

旅中

水飲めば與茂平戀し閑古鳥
ひな芥子は花びら乾き莖よわし

沼のはに木のそゝりたる霞かな
鴉瓜赤らみそめぬ時雨れつゝ
春雨や竹の根土にあらはるゝ
春雨に落つるは椎の古葉かな
秋の日の道椎柴に入りにけり
びいどろに葛水ともし匙のたけ
竹の根の土うち越せる餘寒かな
麥刈ればつばらに見ゆる莓かな
竹の根の土に跨る暑さかな
庭芝もほどろにのびぬ花つゝじ
日あたりや小屋の中から鴛鴦の首

日だまりに黍ほどろなる畠かな
星月夜山なみ低うなりにけり
線香の束とかばやな桐一葉

子規忌

雨に暮るる軒端の糸瓜ありやなし

一游亭に

いざさらば甘栗むかん雪夜かな
茶の色も澄めば夜寒の一人かな
ひと茂り入日の野路に起りけり
山山を枕にしきぬみの蒲團
つるぎ葉に花のおさるるあやめかな
盃中花さきに咲いたはあやめかな
冴え返る梨の蕾や雨もよひ

〔編者附記 本卷所載「蕩々帖」中、作者ニヨツテ抹殺セラレタルモノナリ。〕

雜

車中聯吟

ひと籃の暑さ照りけり巴旦杏　芥川
　海水帽の連れ立ちて行く　和辻
雨音のいつかやみたる夕日影　芥
　庭下駄おろす露路の水苔　和
月かげも竹むら越しに傾きて　芥
　沼ぞひ遠く梟のなく　和
ウ死なうかとふと云ひ出せし鬢のかげ　和
　堤にかはる芝居寂しき　芥
惜しまるゝ女形のぬけし一座にて　和
　夕まぐれ來る屋根のうす雪　芥
文債に痩せたる顏のひげののび　和
　窓の穴より山水を見る　芥
竹むしろ晝寢の臺の斜めなり　芥
　伽藍の軒に子雀のなく　和
天平の櫻しだるる朝ぼらけ　芥
　つかまされたる面の贋物　和
三代の醫者はへたなる春風に　芥
　思ひあまれる妻のふるまひ　和
黑えりに藍のみぢんぞなつかしき　和
　刀の詮義忘れたる今日　芥

〔編者附記　大正十三年五月、京都ヨリノ歸途、和辻哲郎氏ト同車、連句ヲ試ミシモノナリ。〕

金澤にて

はやうらとよながを食うてけふもまたおいその
山を見てをる我は

むさんこにあせない旅のしよむなさはだら山中
の湯にもはひらず

ひがやすな男ひとり來五日あまりへいろくばか
り云ひて去りけり

かんすいなせどの山吹すいよりといちくれ雨に
ちりそめにけり

（大正十三年五月）

輕井澤にて

川柳みやこを讀んでゐるうちに、小生
もちよつとまねをして見たくなりまし
たから、汽車の中で二句ばかり製造し
ました。これは空前絶後の事ですから、
ちよつと御吹聽申します。但し下手で
も笑つちやいけません。

きぬぎぬや耳の根ばかりあでやかに
死ねとも思ふ秋風の末

（大正十四年九月）

年譜

明治二十五年三月一日、東京市京橋區入船町に生まる。新原敏三の長男なり。辰年辰月辰日辰刻の出生なるを以て龍之介と命名す。生後母の病の爲、又母方に子無かりし爲、當時本所區小泉町十五番地の芥川家に入る。養父道章は母の實兄なり。

三十一年　本所區元町江東小學校に入學。成績善し。

三十五年　實母を失ふ。此頃より英語と漢學とを學ぶ。英語はナショナル・リイダアより始め、漢學は日本外史より始む。

三十八年　東京府立第三中學校に入學。上級に後藤末雄、久保田万太郎あり。文藝の書を多讀す。成績善し。

四十三年　第三中學を卒業。無試驗にて第一高等學校一部乙(英文科)に入學。同級に久米正雄、菊池寛、山本有三、松岡讓、成瀨正一、土屋文明あり。一級上に豐島與志雄、山宮允あり。特に作家たらむ希望なし。新宿二丁目七十一番地に移轉。

大正二年　第一高等學校を卒業。帝國文科大學英文科に入學。田端四百三十五番地に移轉。

三年　二月久米、菊池、松岡、成瀨、山本、土屋、豐島、山宮等と共に第三次「新思潮」を發刊す。同誌上

に處女作の短篇「老年」を發表す。其他アナトオル・フランスの「バルタザアル」、イエエツの「春の心臟」等の飜譯をも發表す。十月「新思潮」廢刊。

四年　短篇「ひよつとこ」を「帝國文學」四月號に、「羅生門」を同誌十月號に發表す。世評未だ一言をも加へず。十二月久米と共に夏目漱石の門に入る。林原耕三の紹介に據る。

五年　二月久米、菊池、松岡、成瀨と第四次「新思潮」を發刊す。短篇「鼻」を同誌創刊號に發表す。夏目漱石の賞讃を蒙る。爾來一箇年餘同誌上に毎月短篇を發表す。五月雜誌「希望」に「虱」を發表す。原稿料を得たる始なり。一枚金三十錢と記憶す。七月英文科を卒業。卒業論文は「ウイリヤム・モリス研究」なり。九月當時「新小說」主幹鈴木三重吉の好意に據り、短篇「芋粥」を同誌上に發表す。十月短篇「手巾」を「中央公論」に發表す。十二月海軍機關學校囑託となり、英語を教授す。第一高等學校教授畔柳芥舟の紹介に據る。同月夏目漱石の訃に接す。爾來概ね鎌倉に住す。

六年　五月短篇集「羅生門」を上梓す。

七年　二月塚本文と結婚す。

八年　一月短篇集「傀儡師」を上梓す。三月海軍機關學校囑託を辭し、大阪毎日新聞社に入る。同月實父敏三を失ふ。爾來再び田端に住す。

九年　一月短篇集「影燈籠」を上梓す。三月長男比呂志生まる。

十年　三月短篇集「夜來の花」を上梓す。小穴隆一の裝幀なり。爾後の短篇集概ね隆一の裝幀に係る。啻に親交に據るのみならず。藝術上隆一に服すればなり。同月又支那に遊び、上海より江南一帶に遊び、漢口を經て洛陽龍門を觀、北京より更に大同に至る。朝鮮を經て歸れるは八月なり。

十一年　三月隨筆集「點心」を上梓す。八月選集「沙羅の花」を上梓す。十一月次男多加志生まる。同月又中篇「邪宗門」を上梓す。
十二年　五月短篇集「春服」を上梓す。九月大震に遇へども、一家無事なるを得たり。
十三年　七月短篇集「黄雀風」を上梓す。九月隨筆集「百艸」を上梓す。
十四年　十一月紀行「支那游記」を上梓す。

〔編者附記　新潮社刊「現代小說全集」ノ爲ニ自ラ執筆セルモノナリ。〕

別稿

あなたは私の申し上げる事を御信じにならないかも知れません。いや、きつと嘘だと御思ひなさるでせう。昔なら知らず、これから私の申し上げる事は、大正の昭代にあつた事なのです。しかも御同様住み慣れてゐる、この東京にあつた事なのです。外へ出れば電車や自働車が走つてゐる。内へはいればしつきりなく電話のベルが鳴つてゐる。新聞を見れば同盟罷工や婦人運動の報道が出てゐる。——さう云ふ今日、この大都會の一隅でポオやホフマンの小説にでもありさうな、氣味の悪い事件が起つたと云ふ事は、いくら私が事實だと申した所で、御信じになれないのは御尤もです。が、その東京の町々の燈火が、幾百萬あるにしても、日沒と共に蔽ひかかる夜を悉く拂つて、晝に返す訣には行きますまい。丁度それと同じやうに、無線電信や飛行機が如何に自然を征服したと云つても、その自然の奥に潜んでゐる神祕な世界の地圖までも、引く事が出來たと云ふ次第ではありません。それならどうして、この文明の日光に照らされた東京にも、平常は夢の中にのみ跳梁する精靈たちの祕密な力が、時と場合とでアウエルバツハの窖（あなぐら）のやうな不思議を現じないと云へませう。時と場合所ではありません。私に云はせれば、あなたの御注意次第で、

驚くべき超自然的な現象は、まるで夜咲く花のやうに、始終我々の周圍にも出沒去來してゐるのです。

たとへば冬の夜更などに、銀座通りを御歩きになつて見ると、必アスファルトの上に落ちてゐる紙屑が、數にして凡そ二十ばかり、一つ所に集まつて、くるくる風に渦を卷いてゐるのが、御眼に止まる事でせう。それだけなら、何も申し上げる程の事はありませんが、ためしにその紙屑が渦を卷いてゐる所を、勘定して御覽なさい。必新橋から京橋までの間に、左側に三個所、右側に一個所あつて、しかもそれが一つ殘らず、四つ辻に近い所ですから。これも或は氣流の關係だとでも、申して申せない事はありますまい。けれどももう少し注意して御覽になると、どの紙屑の渦の中にも、きつと赤い紙屑が一つある――活動寫眞の廣告だとか、千代紙の切れ端だとか、乃至は又燐寸の商標だとか、物はいろいろ變つてゐても、赤い色が見えるのには、何時でも變りがありません。それがまるで外の紙屑を率るやうに、一しきり風が動いたと思ふと、まつさきにひらりと舞上ります。と、かすかな砂煙の中から囁くやうな聲が起つて、其處此處に白く散らかつてゐた紙屑が、忽ちアスファルトの空へ消えてしまふ。消えてしまふのぢやありません。一度にさつと輪を描いて、流れるやうに飛ぶのです。風が落ちる時もその通り、今まで私が見た所では、赤い紙が先へ止まりました。かうなると如何にあなたでも、御不審が起らずにはゐられますまい。私は勿論不審です。現に二三度は往來へ立ち止まつて、近くの飾窓（ショウウインドウ）から、大幅の光がさす中に、しつきりなく飛びまはる紙屑を、ぢつと透かして見た事もありました。實際その時は

さうして見たら、ふだんは人間の眼に見えない物も、夕暗にまぎれる蝙蝠程は、朧げにしろ、彷彿と見えさうな氣がしたからです。

が、東京の町で不思議なのは、銀座通りに落ちてゐる紙屑ばかりぢやありません。夜更けて乘る市内の電車でも、時々尋常の考に及ばない、妙な出來事に遇ふものです。その中でも可笑しいのは人氣のない町を行く赤電車や青電車が、乘る人もない停留場へちやんと止まる事でせう。これも前の紙屑同樣、疑はしいと御思ひになつたら、今夜でもためして御覽なさい。同じ市内の電車でも、動坂線と巢鴨線と、この二つが多いさうですが、つい四五日前の晩も、私の乘つた赤電車が、やはり乘降りのない停留場へぱつたり止まつてしまつたのは、その動坂線の團子坂下です。しかも車掌がベルの綱へ手をかけながら、半ば往來の方へ體を出して、例の如く「御乘りですか。」と聲をかけたぢやありませんか。私は車掌臺のすぐ近くにゐましたから、すぐに窓から外を覗いて見ました。と、外は薄雲のかかつた月の光が、朦朧と漂つてゐるだけで、停留場の柱の下は勿論、兩側の町家が悉戶を鎖した、眞夜中の廣い往來にも、更に人間らしい影は見えません。妙だなと思ふ途端、車掌がベルの綱を引いたので、電車はその儘動き出しましたが、それでもまだ窓から外を眺めてゐると、停留場が遠くなるのに從つて、今度は何となく私の眼にも、其處の月の光の中に、だんだん小さくなつて行く人影があるやうな氣がしました。これは申すまでもなく、私の神經の迷かもしれませんが、あの先を急ぐ赤電車の車掌が、どうして乘る人もない停留場へ電車を止めなどしたのでせう。しかもこんな目に遇つたのは、何も私ばかりぢやなく、私の知人

の間にも、三四人はゐようと云ふのです。して見ると、まさか電車の車掌がその度に寢惚けたとも申されますまい。現に私の知人の一人なぞは、車掌をつかまへて、「誰もゐないぢやないか。」と、きめつけると、車掌も不審さうな顏をして、「大勢さんのやうに思ひましたが。」と、答へた事があるさうです。

その外まだ數へ立てれば、砲兵工廠の煙突の煙が、風向きに逆つて流れたり、撞く人もゐないニコライの寺の鐘が、眞夜中に突然鳴り出したり、同じ番號の電車が二臺、前後して日の暮の日本橋を通りすぎたり、人つこ一人ゐない國技館の中で、毎晩のやうに大勢の喝采が聞えたり、――所謂「自然の夜の側面」は、丁度美しい蛾の飛び交ふやうに、この繁華な東京の町々にも、絶え間なく姿を現してゐるのです。從つてこれから私が申上げようと思ふ話も、實はあなたが御想像になる程、現實の世界と懸け離れた、徹頭徹尾あり得べからざる事件と云ふ次第ではありません。いや、東京の夜の祕密を一通り御承知になつた現在なら、無下にはあなたも私の話を、莫迦になさる筈はありますまい。もし又しまひまで御聞きになつた上でも、やはり鶴屋南北以來の燒酎火の匂がするやうだつたら、それは事件そのものに嘘があるせゐと云ふよりは、寧ろ私の申し上げ方が、ポオやホフマンの塁を摩す程、手に入つてゐない罪だらうと思ひます。何故と云へば一二年以前、この事件の當事者が、或夏の夜私と差向ひで、かうかう云ふ不思議に出遇つた事があると、詳しい話をしてくれた時には、私は今でも忘れられない程、一種の妖氣とも云ふべき物が、陰々として私たちのまはりを立て罩めたやうな氣がしたのですから。

この當事者と云ふ男は、平常私の所へ出入をする、日本橋邊の或る出版書肆の若主人で、ふだんは用談さへすませてしまふと、匆々歸つてしまふのですが、丁度その夜は日の暮からさつと一雨かかつたので、始は雨止みを待つ心算ででも、何時になく腰を落着けたのでせう。色の白い、眉の迫つた、痩せぎすな若主人は、盆提灯へ火のはいつた緣先のうす明りにかしこまつて、彼是初夜も過ぎる頃まで、四方山の世間話をして行きました。その世間話の中へ挾みながら、「是非一度これは先生に聞いて頂きたいと思つて居りましたが。」と、殆心配さうな顏色で徐に口を切つたのが、申すまでもなく本文の妖婆の話だつたのです。私は今でもその若主人が、上布の肩から一なすり墨をぼかしたやうな夏羽織で、西瓜の皿を前にしながら、まるで他聞でも憚るやうに、小聲でひそひそ話し出した容子が、はつきりと記憶に殘つてゐます。さう云へばもう一つ、その頭の上の盆提灯が、豐かな胴へ秋草の模樣をほんのりと明く浮かせた向うに、雨上りの空がむら雲をだだ黑く一面に亂してゐたのも、やはり妙に身にしみて、忘れる事が出來ません。

そこで肝腎の話と云ふのは、その新藏と云ふ若主人が(外に差障りがあるといけませんから、假にかう呼んで置きませう。)二十三の夏にあつた事で、當時本所一つ目邊に住んでゐた神下しの婆の所へ、ちと心配な筋があつて、伺ひを立てに行つたと云ふ、それが抑々の發端なのです。何でも六月の上旬或日、新藏はあの界隈に吳服屋を出してゐる、商業學校時代の友だちを引張り出して、一しよに與兵衛鮨へ行つたのださうですが、其處で一杯やつてゐる内に、その心配な筋と云ふのを問はず語りに話して聞かせると、その友だちの泰さんと云ふのが急に眞面目な顏をして、

「ぢやお島婆さんに見て貰ひ給へ。」と、熱心に勸め出しました。そこで仔細を聞いて見ると、この神下しの婆と云ふのは、二三年以前に淺草あたりから今の所へ引越して來たので、占もすれば加持もする――それが又飯綱でも使ふのかと思ふ程、靈顯があると云ふのです。「君も知つてゐるだらう。ついこの間魚政の女隱居が身投げをした。――あの屍骸がどうしても上らなかつたんだが、お島婆さんに御札を貰つて、それを一の橋から川へ抛りこむと、その日の内に浮いて出たぢやないか。しかも御札を抛りこんだ、一の橋の橋杭の所にさ。丁度日の暮の上げ潮だつたが、仕合せとあすこにもやつてゐた、石船の船頭が見つけてね。さあ、御客様だ、土左衞門だと云ふ騷ぎで、早速橋詰の交番へ屆けたんだらう。僕が通りかかつた時にや、もう巡査が來てゐたが、人ごみの後から覗いて見ると、上げたばかりの女隱居の屍骸が、荒菰をかぶせて寢かしてある、その菰の下から出た、水ぶくれの足の裏には、何だと思ふ、君？　あの御札がぴつたり斜つかけに食附いてゐたんだ。僕はさすがにぞつとしたね。」――と云ふ友だちの話を聞いた時には、新藏もやはり背中が寒くなつて、夕潮の色だの、橋杭の形だの、それからその下に漂つてゐる女隱居の姿だの――そんな物が一度に眼の前へ、浮んで來たやうな氣がしたさうです。が、何しろ一杯機嫌で、「そりや面白い。是非一つ見て貰はう。」と、負惜しみの膝を進めました。「ぢや僕が案内しよう。この間金談を見て貰ひに行つて以來、今ぢやあの婆さんとも大分懇意になつてゐるから。」「何分頼む。」――かう云ふ調子で、啣へ楊枝の儘與兵衞を出ると、麥藁帽子に梅雨晴の西日をよけて、夏外套の肩を並べながら、ぶらりとその神下しの婆の所へ出かけたと云ひます。

此處でその新藏の心配な筋と云ふのを御話しますと、家に使つてゐた女中の中に、お斂と云ふ女があつて、それが新藏とは一年越互に思ひ合つてゐたのですが、どうした訣か去年の暮に叔母の病氣を見舞ひに行つたぎり、音沙汰もなくなつてしまつたのです。驚いたは新藏ばかりでなく、このお斂に目をかけてゐた新藏の母親も心配して、請人を始め傳手から傳手へ、手を廻して探しましたが、どうしても行く方が分りません。やれ、看護婦になつてゐるのを見たの、やれ、妾になつたと云ふ噂があるの、と、取沙汰だけはいろいろあつても、さて突きつめた所になると、皆目どうなつたか知れないのです。新藏は始氣遣つて、それから又腹を立てて、この頃では唯ぼんやりと沈んでゐるばかりになりましたが、その元氣のない容子が、薄々ながら二人の關係を感づいてゐた母親には、新しい心配の種になつたのでせう。芝居へやる。湯治を勸める。或は商賣附合ひの宴會へも父親の名代を勸めさせる――と云つた具合に骨を折つて、無理にも新藏の浮かない氣分を引き立てようとし始めました。そこでその日も母親が、本所界隈の小賣店を見廻らせると云ふのは口實で、實は氣晴らしに遊んで來いと云はないばかり、紙入の中には小遣ひの紙幣まで入れてくれましたから、丁度東兩國に幼馴染があるのを幸、その泰さんと云ふのを引張り出して、久しぶりに近所の與兵衛鮨へ、一杯やりに行つたのです。

かう云ふ事情がありましたから、お島婆さんの所へ行くと云つても、新藏のほろ醉の腹の底には、何處か眞劍な所があつたのでせう。一つ目の橋の袂を左へ切れて、人通りの少い竪川河岸を二つ目の方へ一町ばかり行くと、左官屋と荒物屋との間に挾まつて、竹格子の窓のついた、煤だ

らけの格子戸造りが一軒ある――それがあの神下しの婆の家だと聞いた時には、まるでお敏と自分との運命が、この怪しいお島婆さんの言葉一つできまりさうな、無氣味な心もちが先に立つて、さつきの酒の醉なぞは、すつかりもう醒めてしまつたさうです。又實際そのお島婆さんの家と云ふのが、見たばかりでも氣が滅入りさうな、庇の低い平家建で、この頃の天氣に色の出た雨落ちの石の青苔からも、菌位は生えるかと思ふ位、妙にじめじめしてゐました。その上隣の荒物屋との境にある、一抱あまりの葉柳が、窓も蔽ふ程枝垂れてゐますから、瓦にさへ暗い影が落ちて、障子一重隔てた向うには、さも唯ならない祕密が潜んでゐさうな、陰森としたけはひがあつたと云ひます。

が、泰さんは一向無頓着に、その竹格子の窓の前へ立止ると、新藏の方を振返つて、「ぢや愈鬼婆に見參と出かけるかな。だが驚いちやいけないぜ。」と、今更らしい嚇しを云ふのです。新藏は勿論嘲笑つて、「子供ぢやあるまいし。誰が婆さん位に恐れるものか。」と、うつちやるやうに答へましたが、泰さんは反つてその返事に人の惡るさうな眼つきを返しながら、「何さ。婆さんを見たんぢや驚くまいが、此處には君なんぞ思ひもよらない、別嬪が一人ゐるからね。それで御忠告に及んだんだよ。」と、かう云ふ内にもう格子へ手をかけて、「御免。」と、勢の好い聲を出しました。するとすぐに「はい。」と云ふ、含み聲の答があつて、そつと障子を開けながら、入口の框に膝をついたのは、憐しい十七八の娘です。成程これぢや、泰さんが、「驚くな」と云つたのも、更に不思議はありません。色の白い、鼻筋の透つた、生際の美しい細面で、殊に眼が水々しい。――が、

何處かその顏立ちにも、痛々しい窶れが見えて、撫子を散らしためりんすの帶さへ、派手な紺絣の單衣の胸をせめさうな氣がしたさうです。すると娘は術なささうな顏をして、「生憎出まして留守でございますが。」と、さも自分が惡い事でもしたやうに、眶を染めて答へましたが、ふと涼しい眼を格子戸の外へやると、急に顏の色が變つて、「あら。」と、かすかに叫びながら、飛び立たうとしたぢやありませんか。泰さんは場所が場所だけに、さては通り魔でもしたのかと思つたさうですが、慌てて後を振返ると、今まで夕日の中に立つてゐた新藏の姿が見えません。と、二度びつくりする暇もなく、泰さんの袂にすがつたのは、その神下しの婆の娘で、それが息をはずませながら、一生懸命な聲で云ふのを聞くと、「あなた。今の御連れ樣にどうかさう仰有つて下さいまし。二度とこの近所へ御立寄りなすつちやいけません。さもないと、あの方の御命にも關るやうな事が起りますから。」と、かう切れ切れに云ふのださうです。泰さんは何が何やら、まるで煙に捲かれた體で、暫くは唯呆氣にとられてゐましたが、兎に角、言傳てを頼まれた體なので、「よろしい。確に頼まれました。」と云つたきり、よくよく狼狽したのでせう。麥藁帽子もぶら下げた儘、いきなり外へ飛び出すと、新藏の後を追ひかけて、半町ばかり駈け出しました。

その半町ばかり離れた所が、丁度寂しい石河岸の前で、上の方だけ西日に染まつた、電柱の外に何もない——其處に新藏はしよんぼりと、夏外套の袖を合せて、足元を眺めながら、佇んでゐました。が、やつと駈けつけた泰さんが、まだ胸が躍つてゐると云ふ調子で、「冗談ぢやないぜ。

驚くなと云つた僕の方が、どの位君に驚かされたか知れやしない。一體君はあの別嬪を――」と云ひかけると、新藏はもう一つ目の橋の方へ落着かない歩みを運びながら、「知つてゐるとも。あれが君、お敏なんだ。」と、興奮した聲で答へたさうです。泰さんは三度びつくりした――びつくりした筈でせう。何しろこれからその行方を見て貰はうと云ふ當の女が、人もあらうにお島婆さんの娘だと云ふ騷ぎなのですから。と云つて泰さんもその娘に賴まれた、容易ならない言傳ての手前、驚いてばかりもゐられますまい。そこで麥藁帽子をかぶるが早いか、二度とこの界隈へは近づくなと云ふお敏の言葉を、聲色同樣に饒舌つて聞かせました。新藏はその言葉を靜に聞いてゐましたが、やがて眉を顰めると、迂散らしい眼つきをして、「來てくれるなと云ふのはわかるけれど、來れば命にかかはると云ふのは不思議ぢやないか。不思議よりや寧ろ亂暴だね。」と、腹を立てたやうな聲を出すのです。が、泰さんも唯言傳てを聞いただけで、どうした訣とも問ひ質さずに、お島婆さんの家を驅け出したのですから、いくら相手を慰めたくも、好い加減な御座なりを並べる外は、慰めやうがありません。すると新藏は猶更の事、別人のやうに默りこんで、さつさと歩みを早めたさうですが、その内に又與兵衞鮨の旗の出てゐる下へ來ると、急に泰さんの方をふり向いて「僕はお敏に逢つてくりや好かつた。」と、殘念らしい口吻を洩しました。その時泰さんが何氣なく、「ぢやもう一度逢ひに行くさ。」と、調戲ふやうにかう云つた――それが後になつて考へると、新藏の心に燃えてゐる、焰のやうな逢ひたさへ、油をかける事になつたのでせう。程なく泰さんに別れると、すぐ新藏が取つて返したのは、回向院前の坊主軍鷄で、あたりが暗く

なるのを待ちながら、銚子も二三本空にしました。さうして日がとつぷり暮れると同時に、又其處を飛び出して、酒臭い息を吐きながら、夏外套の袖を後へ刎ねて、押しかけたのはお敏の所――あの神下しの婆の家です。

それが星一つ見えない、暗の夜で、惡く地息が蒸れる癖に、時々ひやりと風が流れる、梅雨中にありがちな天氣でした。新藏は勿論中つ腹で、お敏の本心を聞かない內は、唯ぢや歸らない位な氣組でしたから、墨を流した空に柳が聳えて、その下に竹格子の窓が灯をともした、底氣味惡い家の容子にも頓着せず、いきなり格子戸をがらりとやると、狹い土間に突立つて、「今晩は。」と一つ怒鳴つたさうです。その聲を聞いたばかりでも、誰だらう位な推量はすぐについたからでせう。あの優しい含み聲の返事も、その時は震へてゐたやうですが、やがて靜に障子が開くと、梱越しに手をついた、やつやつしいお敏の姿が、次の間からさす電燈の光を浴びて、今でも泣いてゐるかと思ふ程、悄々と其處へ現れました。が、こちらは元より酒の上で、麥藁帽子を阿彌陀にかぶつた儘、邪慳にお敏を見下しながら、「ええ、阿母さんは御在宅ですか。手前少々見て頂きたい事があつて、上つたんですが、――御覽下さいますか、如何なもんでせう。御取次。」と、白々しくずつきり云つた。――それがどの位つらかつたのでせう、お敏はやはり手をついた儘、消え入りたさうに肩を落して、「はい。」と云つたぎり暫くは涙を呑んだやうでしたが、もう一度新藏が虹のやうな酒氣を吐いて、「御取次。」と云はうとすると、襖を隔てた次の間から、まるで蟇が呟くやうに、「どなたやらん、そこな人。遠慮なうこちへ通らつしやれ。」と、力のない、鼻へ拔けた、

お島婆さんの聲が聞えました。そこな人も凄じい。お敏を隱した發頭人。まづこいつをとつちめて、――と云ふ權幕でしたから、新藏はずいと上りざまに、夏外套を脫ぎ捨てると、思はず止めようとしたお敏の手へ、麥藁帽子を殘したなり、昂然と次の間へ通りました。が、可哀さうなのは後に殘つたお敏で、これは境の襖の襖側へぴつたりと身を寄せた儘、夏外套や麥藁帽子の始末をしようと云ふ方角もなく、淚ぐんだ涼しい眼に、ぢつと天井を仰ぎながら、華奢な兩手を胸へ組んで、頻に何か祈念でも凝らしてゐるやうに見えたさうです。

さて次の間へ通つた新藏は、遠慮なく座蒲團を膝へ敷いて、橫柄にあたりを見廻すと、部屋は想像してゐた通り、天井も柱も煤の色をした、見すぼらしい八疊でしたが、正面に淺い六尺の床があつて、婆娑羅大神と書いた軸の前へ、御鏡が一つ、御酒德利が一對、それから赤靑黃の紙を刻んだ、小さな幣束が三四本、恭しげに飾つてある、――その左手の緣側の外は、すぐに竪川の流でせう。思ひなしか、立て切つた障子に響いて、かすかな水の音が聞えました。さて肝腎の相手はと見ると、床の前を右へ外して、菓子折、サイダア、砂糖袋、玉子の折などの到來物が、ずらりと並んでゐる簞笥の下に、大柄な、切髮の、鼻が低い、口の大きな、靑ん膨れに膨れた婆が、黑地の單衣の襟を拔いて、睫毛の疎な目をつぶつて、水氣の來たやうな指を組んで、魍魎の如くのつさりと、疊一ぱいに坐つてゐました。さつきこの婆のものを云ふ聲が、蟇の呟くやうだつたと云ひましたが、かうして坐つてゐるのを見ると、蟇も蟇、容易ならない蟇の怪が、人間の姿を裝つて、毒氣を吐かうとしてゐるとでも形容しさうな氣色ですから、これにはさすがの新藏も、

頭の上の電燈さへ、光が薄れるかと思ふ程、凄しげな心もちがして來たさうです。が、勿論それ位な事は、重々覺悟の前でしたから、「ぢや一つ御覽を願ひたい。緣談ですがね。」と、きつぱり云つた。――その言葉が聞えないのか、お島婆さんはやつと薄眼を開いて、片手を耳へ當てながら、「何の、緣談の。」と繰返しましたが、やはり同じやうなぼやけた聲で、「おぬし、女が欲しいでの。」と、のつけから鼻で笑つたと云ひます。新藏はじりじり業の煮えるのをこらへながら、「欲しいからこそ、見て貰ふんです。さもなけりや、誰がこんな――」と、柄にもない鐵火な事を云つて、こちらも負けずに鼻で笑ひました。けれども婆は自若として、まるで蝙蝠の翼のやうに、耳へ當てた片手を動かしながら、「怒らしやるまいてや。口が惡いはわしが癖ぢやての。」と、まだ半ばせせら笑ふやうに、新藏の言葉を遮りましたが、それでも漸く調子を改めて、「年はの。」と、仔細らしく尋ねたさうです。「男は二十三――酉年です。」「女はの。」「十七。」「卯年よの。」「生れ月は――」「措かつしやい。年ばかりでも知れうての。」婆はかう云ひながら、二三度膝の上の指を折つて、星でも數へるやうでしたが、やがて皮のたるんだ瞼を擧げて、ぎよろりと新藏へ眼をくれると、「成らぬてや。成らぬてや。大凶も大凶よの。」と、まづ大仰に嚇かして、それから又獨り呟くやうに、「この緣を結んだらの、おぬしにもせよ、女にもせよ、必一人は身を果さうぢや。」と、云ひ切つたらうぢやありませんか。かつとしたのは新藏で、さてこそ命にかかはると云つたのは、この婆の差金だらうと、見てとつたから、我慢が出來ません。じりりと膝を向け直すと、まだ酒臭い顋をしやくつて、「大凶結構。男が一度惚れたからにや、身を果す位は朝飯

前です。火難、劍難、水難があつてこそ、惚れ榮えもあると御思ひなさい。」と、嵩にかかつて云ひ放しました。すると婆は又薄眼になつて、厚い脣をもぐもぐ動かしながら、「なれどもの、男に身を果された女はどうぢや。まいてよ、女に身を果された男はの、泣かうてや。吼えようてや。」と、嘲笑ふやうな聲で云ふのです。おのれ、お敏の體に指一本でもさして見ろ――と氣負つた勢で、新藏は婆を睨めつけながら、「女にや男がついてゐます。」と、眞向からきめつけると、相手は相不變手を組んだ儘、惡く光澤のある頰をにやりとやつて、「では男にはの。」と、嘯くやうに問ひ返しました。その時は思はずぞつとしたと、新藏が後で話しましたが、これは成程あの婆に果し狀をつけられたやうなものですから、氣味が惡かつたのには、相違ありますまい。しかもさう問ひ返した後で、婆は新藏のひるんだ氣色を見ると、黑い單衣の襟をぐいと拔いて、「如何におぬしが揣らうとも、人間の力には天然自然の限りがあるてや。惡あがきは思ひ止らつしやれ。」と、猫撫聲を出しましたが、急にもう一度大きな眼を仇白く見開いて、「それ、それ、證據は目のあたりぢや。おぬしにはあのため息が聞えぬかいの。」と、今度は兩手を耳へ當てながら、さも一大事らしく囁いたと云ふのです。新藏は我知らず堅くなつて、ぢつと耳を澄ませましたが、襖一重向うに隱れてゐる、お敏のけはひを除いては、何一つ聞えるものもありません。すると婆は益〻眼をぎよろつかせて、「聞えぬかいの。おぬしのやうな若いのが、そこな石河岸の石の上で、ついてゐるため息が聞えぬかいの。」と、次第に後の簞笥に映つた影も大きくなるかと思ふ程、膝を進めて來ましたが、やがてその婆臭い匂が、新藏の鼻を打つたと思ふと、障子も、襖も、御酒德利も、

御鏡も、簞笥も、座蒲團も、すべて陰々とした妖氣の中に、まるで今までとは打つて變つた、怪しげな形を現して、「あの若いのもおぬしのやうに、おのが好色心に目が眩んでの、この婆に憑らせられた婆娑羅の大神に逆うたてや。されば立ち所に神罰を蒙つて、瞬く暇に身を捨てうでの。おぬしには善い見せしめぢや。聞かつしやれ。」と云ふ聲が、無數の蠅の羽音のやうに、四方から新藏の耳を襲つて來ました。その拍子に障子の外の竪川へ、誰とも知れず身を投げた、けたたましい水音が、宵闇を破つて聞えたさうです。これに荒膽を挫がれた新藏は、もう五分とその場に居たたまれず、捨臺辭を殘すのもそこそこで、泣いてゐるお敏さへ忘れたやうに、蹌踉とお島婆さんの家を飛び出しました。

さて日本橋の家へ歸つて、明くる日起きぬけに新聞を見ると、果して昨夜竪川に身投げがあつた。――それも龜澤町の榑屋の息子で、原因は失戀、飛びこんだ場所は、一の橋と二の橋との間にある石河岸と出てゐるのです。それが神經にこたへたのでせう。新藏は急に熱が出て、それから三日ばかりと云ふものは、ずつと床に就いてゐました。が、寢てゐても氣にかかるのは、申すまでもなくお敏の事で、勿論今となつて見れば、何も相手が心變りをしたと云ふ訣ぢやなく、突然暇をとつたのも、二度とこの界隈へ來てくれるなと云つたのも、皆お島婆さんの作略に相異ないのですから、今更のやうにお敏を疑つたのが恥しくもなつて來ますし、又一方ではこの自分に何の怨もないお島婆さんが、何故そんな作略をめぐらすのだか、不思議で仕方がなかつたさうです。それにつけても人一人身投げをさせて見てゐるやうな、鬼婆と一しよにゐるのぢや、今にも

お敏は裸の儘、婆娑羅の大神が祭つてある、あの座敷の古柱へ、ぐるぐる卷に括りつけられて、松葉燻し位にはされ兼ねますまい。さう思ふともう新藏は、おちおち寢てもゐられないやうな氣がしますから、四日目には床を離れるが早いか、兎にも角にも泰さんの所へ、知慧を借りに出かけようとすると、丁度其處へその泰さんの所から、電話がかかつて來たぢやありませんか。しかもその電話と云ふのが、外ならないお敏の一件で、聞けば昨夜遲くなつてから、泰さんの所へお敏が來た。さうして是非一度若旦那樣に御目にかかつて、委細の話をしたいのだが、以前奉公してゐた御店へ、電話もまさかかけられないから、あなたに言傳てを賴みたい――と云ふ用向きだつたさうです。逢ひたいのは、こちらも同じ思ひですから、新藏は殆送話器にすがりつきさうな勢で、「どこで逢ふと云ふんだらう。」と、一生懸命に問ひかけますと、能辯な泰さんは、「それがさ、」とゆつくり前置きをして、「何しろあんな內氣な女が、二三度會つたばかりの僕の所へ、尋ねて來ようと云ふんだから、よくよく思ひ餘つての上なんだらう。さう思ふと、僕もすつかりつまされてしまつてね、すぐに待合をとも考へたんだが、婆の手前は御湯へ行くと云つて、出て來るんだと聞いて見りや、川向うは少し遠すぎるし――と云つて外に然るべき所もないから、よろしい、僕の所の二階を明渡しませうつて云つたんだが、餘り恐れ入りますからとか何とか云つて、どうしても承知しない。尤もこりや氣兼ねをするのも、無理はないと思つたから、ぢやどこかにお前さんの方に、心當りの場所でもありますかつて尋ねると、急に赤い顏をしたがね。小さな聲で、明日の夕方、近所の石河岸まで若旦那樣に來て頂けないでせうかと云ふんだ。野天の逢曳は

罪がなくつて好い。」と、笑を嚙み殺した容子でした。が、元より新藏の方は笑ふ所の騷ぎぢやなく、「ぢや石河岸ときまつたんだね。」と、もどかしさうに念を押すと、仕方がないから、さうきめて置いた、時間は六時と七時との間、用が濟んだら、自分の所へも寄つてくれと云ふ返事です。新藏は禮と一しよに承知の旨を答へると、早速電話を切りましたが、さあそれから日の暮までが、待遠しいの、待遠しくないのぢやありません。算盤を彈く。帳合ひを手傳ふ。中元の進物の差圖をする。——その合間には、じれつたさうな顏をして、帳場格子の上にある時計の針ばかり氣にしてゐました。

さう云ふ苦しい思ひをして、やつと店をぬけ出したのは、まだ西日の照りつける、五時少し前でしたが、その時妙な事があつたと云ふのは、小僧の一人が揃へて出した日和下駄を突かけて、新刊書類の建看板が未に生乾きのペンキの匂を漂はしてゐる後から、アスフアルトの往來へひよいと一足踏み出すと、新藏のかぶつてゐる麥藁帽子の庇をかすめて、蝶が二羽飛び過ぎました。烏羽揚羽と云ふのでせう。黑い翅の上に氣味惡く、靑い光澤がかかつた蝶なのです。勿論その時は格別氣にもしないで、二羽とも高い夕日の空へ、揉み上げられるやうになつて見えなくなるのを、ちらりと頭の上に仰ぎながら、折よく通りかかつた上野行の電車へ飛び乘つてしまひましたが、さて須田町で乘換へて、國技館前で降りて見ると、又ひらひらと麥藁帽子にまつはるのは、やはり二羽の黑い揚羽でした。が、まさか日本橋から此處まで蝶が跡をつけて、來ようなどとは考へませんから、この時もやはり氣にとめずに、約束の刻限にはまだ餘裕もあらうと云ふので、

あれから一つ目の方へ曲る途中、看板に藪とある、小綺麗な蕎麥屋を一軒見つけて、仕度旁々はいつたさうです。尤も今日は謹んで、酒は一滴も口にせず、妙に胸が閊へるのを、やつと冷麥を一つ平げて、往來の日足が消えた時分、まるで人目を忍ぶ落人のやうに、こつそり暖簾から外へ出ました。するとその外へ出た所を、追ひすがる如くさつと來て、おやと思ふ鼻の先へ一文字に舞ひ上つたのは、今度も黑天鵞絨の翅の上に、青い粉を刷いたやうな、一對の烏羽揚羽なのです。その時は氣のせゐか、額へ羽搏つた蝶の形が、冷やかに澄んだ夕暮の空氣を、烏程の大きさに切拔いたかと思ひましたが、ぎよつとして思はず足を止めると、その儘すつと小さくなつて、互にからみ合ひながら、見る見る空の色に紛れてしまひました。重ね重ねの怪しい蝶の振舞に、新藏もさすがに怯氣がさして、惡く石河岸なぞへ行つて立つてゐたら、身でも投げたくなりはしないかと、二の足を踏む氣さへ起つたと云ひます。が、それだけ又心配なのは、今夜逢ひに來るお敏の身の上ですから、新藏はすぐに心をとり直すと、もう黃昏の人影が蝙蝠のやうにちらほらする回向院前の往來を、側目もふらずまつすぐに、約束の場所へ駈けつけました。所が駈けつけるともう一度、御影の狛犬が並んでゐる河岸の空からふはりと來て、青光りのする翅と翅とがもつれ合つたと思ふ間もなく、蝶は二羽とも凪になぐれて、まだ薄明りの殘つてゐる電柱の根元で消えたさうです。

ですからその石河岸の前をぶらぶらして、お敏の來るのを待つてゐる間も、新藏は氣が氣ぢやありません。麥藁帽子をかぶり直したり、袂へ忍ばせた時計を見たり、小一時間と云ふものは、

さつき店の帳場格子の後にゐた時より、もつと苛立たしい思ひをさせられました。が、いくら待つてもお敏の姿が見えないので、我知らず石河岸の前を離れながら、お島婆さんの家の方へ、半町ばかり歩いて來ると、右側に一軒洗湯があつて、大きく桃の實を描いた上に、萬病根治桃葉湯と唐めかした、ペンキ塗りの看板が出てゐます。お敏が湯に行くのを口實に、家を出ると云つたのは、この洗湯ぢやないかと思ふ。――丁度その途端に女湯の暖簾をあげて、夕闇の往來へ出て來たのは、紛れもないお敏でした。なりはこの間と變りなく、撫子模樣のめりんすの帶に紺絣の單衣でしたが、今夜は湯上りだけに血色も美しく、銀杏返しの鬢のあたりも、まだ濡れてゐるのかと思ふ程、艶々と櫛目を見せてゐます。それが濡手拭と石鹼の箱とをそつと胸へ抱くやうにして、何が怖いのか、往來の右左へ心配さうな眼をくばりましたが、すぐに新藏の姿を見つけたのでせう。まだ氣づかはしさうな眼でほほ笑むと、つと蓮葉に男の側へ歩み寄つて、「長い事御待たせ申しまして。」と使なささうに云ひました。「何、いくらも待ちやしない。それよりお前、よく出られたね。」新藏はかう云ひながら、お敏と一しよに元來た石河岸の方へゆつくり歩き出しましたが、相手はやはり落着かない容子で、そはそは後ばかり見返りますから、「どうしたんだ。まるで追手でもかかりさうな風ぢやないか。」と、わざと調戲ふやうに聲をかけますと、お敏は急に顏を赤らめて、「まあ私、折角いらしつて下すつた御禮も申し上げないで――ほんたうによく御出で下さいました。」と、それでも不安らしく答へるのです。そこで新藏も氣がかりになつて、あの石河岸へ來るまでの間に、いろいろ仔細を尋ねましたが、お敏は唯苦しさうな微笑を洩らして、「かう

してゐる所が見つかつて御覽なさいまし。私ばかりかあなたまで、どんな恐しい目に御遇ひになるか知れたものではございませんよ。」と、それだけの返事しかしてくれません。その内にもう二人は、約束の石河岸の前へ來かかりましたが、お敏は薄暗がりにつくばつてゐる御影の狛犬へ眼をやると、ほつと安心したやうな吐息をついて、その下をだらだらと川の方へ下りて行くと、根府川石が何本も、船から擧げた儘寢かしてある——其處まで來て、やつと立止つたさうです。恐る恐るその後から、石河岸の中へはいつた新藏は、例の狛犬の陰になつて、往來の人目にかからないのを幸、夕じめりのした根府川石の上へ、無造作に腰を下しながら、「私の命にかかはるの、恐しい目に遇ふのつて、一體どうしたと云ふ訣なんだい。」と、又さつきの返事を促しました。するとお敏は暫くの間、蒼黑く石垣を浸してゐる竪川の水を見渡して、靜に何か口の内で祈念してゐるやうでしたが、やがてその眼を新藏に返すと、始めて、嬉しさうに微笑して、「もう此處まで來れば大丈夫でございますよ。」と、囁くやうに云ふぢやありませんか。新藏は狐につままれたやうな顏をして、無言の儘お敏の顏を見返しました。それからお敏が、自分も新藏の側へ腰をかけて、途切れ勝にひそひそ話し出したのを聞くと、成程二人は時と場合で、命位は取られ兼ねない、恐しい敵を控へてゐるのです。

元來あのお島婆さんと云ふのは、世間ぢや母親のやうに思つてゐますが、實は遠縁の叔母とかで、お敏の兩親が生きてゐた内は、つき合ひさへしなかつたものださうです。何でも代々宮大工だつたお敏の父親に云はせると、「あの婆は人間ぢやねえ。嘘だと思つたら、横つ腹を見ろ。魚の

鱗が生えてやがるぢやねえか。」とかで、往來でお島婆さんに遇つたと云つても、すぐに切火を打つたり、浪の花を撒いたりする位でした。が、その父親が歿くなつて間もなく、お敏には幼馴染で母親には姪に當る、或病身な身なし兒の娘が、お島婆さんの養女になつたので、自然お敏の家とあの婆の家との間にも、親類らしい往來が始まつたのです。けれどもそれさへほんの一二年で、お敏は母親に死なれると、世話をする兄弟もなかつたので、百ケ日もまだすまない内に、日本橋の新藏の家へ奉公する事になりましたから、それぎりお島婆さんとも交渉が絶えてしまひました。さう云ふあの婆の所へ、どうして又お敏が行くやうになつたかは、後で御話しする事にしませう。

所でお島婆さんの素性はと云ふと、歿くなつた父親にでも聞いて見たら兎も角、お敏は何も知りませんが、唯、昔から口寄せの巫女をしてゐたと云ふ事だけは、母親か誰かから聞いてゐました。が、お敏が知つてからは、もう例の婆娑羅の大神と云ふ、怪しい物の力を借りて、加持や占をしてゐたさうです。この婆娑羅の大神と云ふのが、やはりお島婆さんのやうに、何とも素性の知れない神で、やれ天狗だの、狐だのと、いろいろ取沙汰もありましたが、お敏にとつては産土神の天満宮の神主などは、必何か水府のものに相違ないと云つてゐました。そのせゐかお島婆さんは、毎晩二時の時計が鳴ると、裏の縁側から梯子傳ひに、竪川の中へ身を浸して、ずつぷり頭まで水に隱した儘、三十分あまりもはいつてゐる――それもこの頃の陽氣ばかりだと、さほどこたへはしますまいが、寒中でもやはり湯巻き一つで、紛々と降りしきる霙の中を、まるで人面の獺のやうに、ざぶりと水へはいると云ふぢやありませんか。一度などはお敏が心配して、電燈を

片手に雨戸を開けながら、そつと川の中を覗いて見たら、向う岸の並藏の屋根に白々と霜が殘つてゐるだけ、それだけ餘計黑い水の上に、婆の切髮の頭だけが、浮巢のやうに漂つてゐたさうです。その代りこの婆のする事は、加持でも占でも驗がある。――と云ふと、善い方ばかりいやうですが、この婆に金を使つて、親とか夫とか兄弟とかを呪ひ殺したものも大勢ゐました。現にこの間この石河岸から身を投げた男なぞも、同じ柳橋の藝者とかに思をかけた或米問屋の主人の賴みで、あの婆が造作もなく命を捨てさせてしまつたのださうです。が、どう云ふ祕密な理由があるのか、一人でも其處で呪ひ殺された、この石河岸のやうな場所になると、さすがの婆の加持祈禱でも、そのゐまはりにゐる人間には、害を加へる事が出來ません。のみならず、其處でしてゐる事は、千里眼同樣な婆の眼にも、はいらずにすむやうですから、それでお敏は新藏を、わざわざこの石河岸へ呼び寄せたと云ふ次第なのです。

ではどう云ふ訣でお島婆さんが、それ程お敏と新藏との戀の邪魔をするかと云ひますと、この春頃から相場の高低を見て貰ひに來る或株屋が、お敏の美しいのに目をつけて、大金を餌にあの婆を釣つた結果、妾にする約束をさせたのださうです。が、それだけなら、兎も角も金で埒の開く事ですが、此處にもう一つ不思議な故障があるのは、お敏を手離すと、あの婆が加持も占も出來なくなる。――と云ふのは、お島婆さんがいざ仕事にとりかかるとなると、まづその婆娑羅の大神をお敏の體に祈り下して、神憑りになつたお敏の口から、一々差圖を仰ぐのださうです。これは何もさうしなくとも、あの婆自身が神憑りになつたらよささうに思はれますが、さう云ふ夢

とも現ともつかない恍惚の境にはいつたものは、その間こそ人の知らない世界の消息にも通じるものの、醒めたが最後、その間の事はすつかり忘れてしまひますから、仕方がなくお敏に神を下して、その言葉を聞くのだとか云ふ事でした。かう云ふ事情がある以上、あの婆がお敏を手離さないのも、まづ尤もと云はなければなりますまい。所が株屋の方は又それがつけ目なので、お敏を妾にする以上、必お島婆さんもついて來るに相違ありませんから、そこでこれには相場を占はせて、あはよくば天下を取らうと云ふ、色と慾とにかけた腹らしいのです。

が、お敏の身になつて見れば、如何に夢現の中で云ふ事にしろ、お島婆さんが惡事を働くのは、全く自分の云ひつけ通りにするのですから、良心がなければ知らない事、こんな道具に使はれるのは空恐しいのに相違ありません。さう云へば前に御話ししたお島婆さんの養女と云ふのも、引き取られるからこの役に使はれ通しで、唯でさへ脾弱いのが益〻病身になつてしまひましたが、とうとうしまひには心の罪に責められて、あの婆の寢てゐる暇に、首を縊つて死んだと云ふ事です。お敏が新藏の家から暇をとつたのは、この養女が死んだ時で、可哀さうにその新佛が幼馴染のお敏へ宛てた、一封の書置きがあつたのを幸、早くもあの婆は後釜にお敏を据ゑようと思つたのでせう。まんまとそれを種に暇を貰はせて、今の住居へおびき寄せると、殺しても主人の所へは歸さないと、強面に云ひ渡してしまつたさうです。が、勿論新藏と堅い約束の出來てゐたお敏は、その晩にも逃げ歸る心算だつたさうですが、向うも用心してゐたのでせう。度々入口の格子戸を窺つても、必外に一匹の蛇が大きなとぐろを巻いてゐるので、到底一足も踏み出す勇氣は、

起らなかつたと云ふ事です。それからその後も何度となく、隙を狙つては逃げ出しにかかると、やはり似たやうな不思議があつて、どうしても本意が遂げられません。そこでこの頃は仕方がなく何も因縁事と諦めて、泣く泣くお島婆さんの云ひなり次第になつてゐました。

所がこの間新藏が來て以來、二人の關係が知れて見ると、日頃非道なあの婆が、お敏を責めるの責めないのぢやありません。それも打つたりつねつたりするばかりか、夜更けを待つては怪しげな法を使つて、兩腕を空ざまに吊し上げたり、頸のまはりへ蛇をまきつかせたり、聞くさへ身の毛のよ立つやうな、恐しい目にあはせるのです。が、それよりも更につらいのは、さう云ふ折檻の相間相間に、あの婆がにやりと嘲笑つて、これでも思ひ切らなければ、新藏の命を縮めても、お敏は人手に渡さないと、憎々しく嚇す事でした。かうなるとお敏も絶體絶命ですから、今までは何事も宿命と覺悟をきめてゐたのが、萬一新藏の身の上に、取り返しのつかない事でも起つては大變と、とうとう男に一部始終を打ち明ける氣になつたのです。が、それも新藏が委細を聞いた後になつて、さう云ふ恐しい事をする女かと、嫌ひもし蔑みもしさうでしたから、愈〻泰さんの所へ駈けつけるまでには、どの位思ひ迷つたか、知れない程だつたと云ふ事でした。

お敏はかう話し終ると、又何時ものやうに蒼白くなつた顏を擧げて、ぢつと新藏の眼を見つめながら、「さう云ふ因果な身の上なのでございますから、いくらつらくつても悲しくつても、何もなかつた昔と諦めて、この儘――」と云ひかけましたが、もう我慢が出來なくなつたと見えて、男の膝へすがつたなり、袖を嚙んで泣き出しました。途方に暮れたのは新藏で、暫くは唯お敏の

背をさすりながら、叱つたり勵ましたりしてゐたものの、さてあのお島婆さんを向うにまはして、どうすれば無事に二人の戀を遂げる事が出來るかと云ふと、殘念ながら勝算は到底ないと云はなければなりません。が、勿論お敏の爲にも弱味を見すべき場合ではないので、無理に元氣の好い聲を出しながら「何、そんなに心配おしでない。長い間には又何とか分別もつかうと云ふものだから。」と、一時のがれの慰めを云ひますと、お敏は漸く涙ををさめて、新藏の膝を離れましたが、それでもまだ潤み聲で「それは長い間でしたら、どうにかならない事もございますまいが、明後日の夜は又家の御婆さんが、神を下すと云つて居りましたもの。もしその時私がふとした事でも申しましたら――」と、術なさゝうに云ふのです。これには新藏も二度吐胸を衝いて、折角のつけ元氣さへ、全く沮喪せずにはゐられませんでした。明後日と云へば、今日明日の中に、何とか工夫をめぐらさなければ、自分は元よりお敏まで、とり返しのつかない不幸の底に、沈淪しなければなりますまい。が、たつた二日の間に、どうしてあの怪しい婆を、取つて抑へる事が出來ませう。たとひ警察へ訴へたにしろ、幽冥の世界で行はれる犯罪には、法律の力も及びません。さうかと云つて社會の輿論も、お島婆さんの悪事などは、勿論哂ふべき迷信として、不問に附してしまふでせう。さう思ふと新藏は、今更のやうに腕を組んで、茫然とするより外はありませんでした。さう云ふ苦しい沈默が、暫くの間續いた後で、お敏は涙ぐんだ眼を擧げると、仄かに星の光つてゐる暮方の空を眺めながら、「いつそ私は死んでしまひたい。」と、かすかな聲で呟きましたが、やがて物に怯えたやうに、怖々あたりを見廻して、「餘り遲くなりますと、又家の御婆さんに

叱られますから、私はもう歸りませう。」と、根も精もつき果てた人のやうに云ふのです。成程さう云へば此處へ來てから、三十分は確に經ちましたらう。夕闇は潮の匂と一しよに二人のまはりを立て罩めて、向う河岸の薪の山も、その下に繋いである苫船も、蒼茫たる一色に隱れながら、唯竪川の水ばかりが、丁度大魚の腹のやうに、うす白くうねうねと光つてゐます。新藏はお敏の肩を抱いて、優しく脣を合せてから、「兎も角も明日の夕方には、又此處まで來ておくれ。私もそれまでには出來るだけ、知慧を絞つて見る心算だから。」と、一生懸命に力をつけました。お敏は頬の涙の痕をそつと濡手拭で拭きながら、無言の儘悲しさうに頷きましたが、さて悄々根府川石から立上つて、これも萎れ切つた新藏と一しよに、あの御影の狛犬の下を寂しい往來へ出ようとすると、急に又涙がこみ上げて來たのでせう。夜目にも美しい襟足を見せて、せつなさうにうつむきながら、「ああ、いつそ私は死んでしまひたい。」と、もう一度かすかにかう云ひました。するとその途端です。さつき二羽の黑い蝶が消えた、例の電柱の根元の所に、大きな人間の眼が一つ、髣髴として浮び出したぢやありませんか。それも睫毛のない、うす青い膜がかかつたやうな、瞳の色の濁つてゐる、何處を見てゐるともつかない眼で、大きさは彼是三尺あまりもありましたらう。始は水の泡のやうにふつと出て、それから地の上を少し離れた所へ、漂ふ如くぼんやり止りましたが、忽ちそのどろりとした煤色の瞳が、斜に背の方へ寄つたさうです。その上不思議な事には、この大きな眼が、往來を流れる闇ににじんで、朦朧とあつたのに關らず、何とも云ひやうのない惡意の閃きを藏してゐるやうに見えました。新藏は思はず拳を握つて、お敏の體をかばひ

ながら、必死にこの幻を見つめたと云ひます。實際その時は總身の毛穴へ、悉風がふきこんだかと思ふ程、ぞつと背筋から寒くなつて、息さへつまるやうな心もちだつたのでせう。いくら聲を立てようと思つても、舌が動かなかつたと云ふ事でした。が、幸その眼の方でも、暫くは懸命の憎悪を瞳に集めて、やはりこちらを見返すやうでしたが、見る見る内に形が薄くなつて、最後に貝殼のやうな瞼が落ちると、もう其處には電柱ばかりで、何も怪しい物の姿は見えません。唯、あの烏羽揚羽のやうな物が、ひらひら飛び立つたやうに見えたさうですが、それは事によると、地を掠めた蝙蝠だつたかも知れますまい。その後で新藏とお敏とは、まるで惡い夢からでも醒めたやうに、うつとり色を失つた顏を見合せましたが、忽互の眼の中に恐しい覺悟の色を讀み合ふと、我知らずしつかり手をとり交して、わなわな身ぶるひしたと云ふ事です。

それから三十分ばかり經つた後、新藏はまだ眼の色を變へた儘、風通しの好い裏座敷で、主人の泰さんを前にしながら、今夜出合つたさまざまな不思議な事を、小聲でひそひそと話してゐました。二羽の黑い蝶の事、お島婆さんの祕密の事、大きな眼の幻の事――すべてが現代の青年には、荒唐無稽としか思はれない事ですが、兼ねてあの婆の怪しい呪力を心得てゐる泰さんは、更に疑念を挾む氣色もなく、アイスクリイムを薦めながら、片唾を呑んで聞いてくれるのです。「その大きな眼が消えてしまふと、お敏はまつ蒼な顏をして、『どうしませう。此處であなたに御目にかかつたのが、もう御婆さんに知れてしまひました。』と云ふんだ。が、僕は『かうなつたが最後、あの婆と我々との間には、戰爭が始まつたのも同樣なんだから、知れようが知れまいが、かまふ

もんか。』つて威張つたんだがね。困つた事には今も話した通り、僕は明日又あの石河岸で、お敏と落合ふ約束がしてあるだらう。所が今夜の出合ひがあの婆に見つかつたとなると、恐らく明日はお敏を手放して、出さないだらうと思ふんだ。だからよしんばあの婆の爪の下から、お敏を救ひ出す名案があつてもだね、おまけにその名案が今日明日中に思ひついたにしてもだ。明日の晩お敏に逢へなけりや、すべての計畫が畫餅になる訣だらう。さう思つたら、僕はもう、神にも佛にも見放されたやうな心もちがしてね。お敏に別れて此處へ來るまでの間も、まるで足は地に着いてゐないやうな心もちだつた。」――新藏はかう委細を話し終ると、思ひ出したやうに團扇を使ひながら、心配さうに泰さんの顔を窺ひました。が、泰さんは存外驚かずに、暫くは唯軒先の釣葱が風にまはるのを見てゐましたが、漸く新藏の方へ眼を移すと、それでもちよいと眉をひそめて、「つまり君が目的を達するにや、三重の難關がある訣だね。第一に君はお島婆さんの手から、安全にだね、安全にお敏さんを奪ひ取らなければならない。第二にそれも明後日までには、是非共實行する必要がある。それからその實行上の打合せをする爲に、明日中にお敏さんに逢つて置きたい、――と云ふのが第三の難關だらう。そこでこの第三の難關はだね。第一第二の難關さへ切り抜けられりや、どうにでもなると思ふんだ。」と、自信があるらしい口調で云ふのです。新藏はまだ浮かない顔をした儘、「どうして？」と、疑はしさうに尋ねました。すると泰さんは面憎い程落着いた顔をして、「何、訣はありやしない。君が逢へなけりや――」と云ひかけましたが、急にあたりを見廻しながら、「かうつと、こりやいざと云ふ時まで伏せて置かう。どうもさつきからの

話ぢや、あの婆め、君のまはりへ嚴重に網を張つてゐるらしいから、うつかりした事は云はない方が好ささうだ。實は第一第二の難關も破つて破れなくはなささうに思ふんだが。——まあ、まあ、萬事僕に任せて置くさ。それより今夜は麥酒でも飲んで、大いに勇氣を養つて行き給へ。」と、しまひにはさも氣樂らしい笑に紛してしまふぢやありませんか。新藏は勿論それを、もどかしくも腹立たしくも思ひましたが、さてその麥酒が始まつて見ると、やはり泰さんの用心が尤もだつたと思ふやうな事が起りました。と云ふのは二人の間に浮かない世間話が始まつてから、ふと泰さんが氣がつくと、燻し鮭の小皿と一しよに、新藏の膳に載つて居るコツプがもう泡の消えた黑麥酒をなみなみと湛へた儘、口もつけずに置いてあります。そこで泰さんが水の垂れる麥酒罎の尻をとつて、「さあ、ちつと陽氣に干さうぢやないか。」と、相手を促した時の事でした。何氣なくそのコツプをとり上げた新藏が、ぐいと一息に飲まうとすると、直徑二寸ばかり圓を描いた、つらりと光る黑麥酒の面に、天井の電燈や後の葭戸が映つてゐる——其處へ一瞬間、見慣れない人間の顏が映つたのです。いや、もつと精密に云へば唯見慣れない顏と云ふだけで、人間かどうかもはつきりとはわかりません。こちらの考へ方一つでは、鳥とでも、獸とでも、乃至は蛇や蛙とでも、思つて思へない事はないのです。それも顏と云ふよりは、寧ろその一部分で、殊に眼から鼻のあたりが、まるで新藏の肩越しにそつとコツプの中を覗いたかの如く、電燈の光を遮つて、ありありと影を落しました。かう云ふと長い間の事のやうですが、前にも云つた通りほんの一瞬間で、何とも判然しない物の眼が、直徑二寸の黑麥酒の圓の中から、ちらりと新藏の眼を窺つた

と思ふと、忽消え失せてしまつたのです。新藏は飲まうとしたコツプを下へ置いて、きよろきよろ前後を見廻しました。が、電燈も依然として明るければ、軒先の釣荵も相不變風に廻つてゐて、この涼しい裏座敷には、更に妖臭を帶びた物も見當りません。「どうした。虫でもはいつたんぢやないか。」――から泰さんに尋ねられた新藏は、仕方なく額の汗を拭つて、「何、妙な顏がこの麥酒に映つたんだ。」と、恥しさうに答へました。これを聞くと泰さんは、「妙な顏が映つた？」と反響のやうに繰返しながら、新藏のコツプを覗きこみましたが、元より今はさう云ふ泰さんの顏の外に、顏らしいものは何も映りません。「君の神經のせゐぢやないか。まさかあの婆も、僕の所までは手を出しやしなからう。」「だつて君は今も自分でさう云つたぢやないか。僕の體のまはりにや、拔け目なくあの婆が網を張つてゐるからつて。」「大きにさうだつけ。だがまさか――まさかその麥酒のコツプへ、あの婆が舌を入れて、一口頂戴したつて次第でもなからう。それならかまはないから、干してしまひ給へ。」――から云ふ具合に泰さんは、いろいろ沈んだ相手の氣を引き立てようとしましたが、新藏は益〻ふさぐ一方で、とうとうそのコツプも干さない內に、もう歸り仕度をし始めました。そこで泰さんもやむを得ず、吳々も力を落さないやうにと、再三親切な言葉を添へてから、電車では心もとないと云ふので、車まで云ひつけてくれたさうです。

その晚は寢ても、妙な夢ばかり見て、何度となくうなされましたが、それでも漸く朝になると、新藏は早速泰さんの所へ、昨夜の禮旁〻電話をかけました。すると電話に出て來たのは、泰さんの店の番頭で、「旦那は今朝程早く、どちらかへ御出かけになりました。」と云ふ挨拶なのです。新

藏はもしやお島婆さんの所へでも、行つたのぢやないかと思ひましたが、打ち明けてさう尋ねる訣にも行かず、又尋ねたにした所で、餘人の知つてゐる筈もありませんから、歸り匆々知らせてくれるやうにと、よく番頭に賴んで置いて、一まづ電話を切つてしまひました。所が彼是午近くになると、今度は泰さんから電話がかかつて來て、案の定今朝お島婆さんの所へ、家相を見て貰ひに行つたと云ふのです。「幸、お敏さんに會つたからね、僕の計畫だけは手紙にして、そつとあの人の手に握らせて來たよ。返事は明日でなくつちやわからないが、何しろ非常の場合だから、お敏さんも振つて引受けさうなもんだ。」――かう云ふ泰さんの言葉を聞いてゐると、如何にも萬事が好都合に運びさうな氣がしますから、愈〻新藏はその計畫と云ふのが知りたくなつて、「一體何をどうする心算なんだ。」と尋ねますと、泰さんはやはり昨夜のやうに、電話でもにやにや笑つてゐる容子で、「まあ、もう二三日待ち給へ。あの婆が相手ぢや、電話だつて油斷がならないからね。ぢやいづれ又僕の方から、電話をかける事にしよう。さやうなら。」と云ふ始末なのです。電話を切つた新藏は、何時もの通りその後で、帳場格子の後へ坐りましたが、さあ此處二日の間に自分とお敏との運命がきまるのだと思ふと、心細いともつかず、もどかしいともつかず、さうかと云つて猶更又嬉しいともつかず、唯妙にわくわくした心もちになつて、帳面も算盤も手につきません。そこでその日は、まだ熱がとれないやうだと云ふのを口實に、午から二階の居間で寢てゐました。が、その間でも絶えず氣になつたのは、誰かが自分の一擧一動をぢつと見つめてゐるやうな心もちで、これは寢てゐると起きてゐるとに關らず、執念深くつきまとつてゐたさうです。

現に午過ぎの三時頃には、確に二階の梯子段の上り口に、誰か蹲つてゐるものがあつて、その視線が葭戸越しに、こちらへ向けられてゐるやうでしたから、すぐに飛び起きて、其處まで出て行つて見ましたが、唯磨きこんだ廊下の上に、ぼんやり窓の外の空が映つてゐるだけで、何も人間らしいものは見えませんでした。

かう云ふ具合でその翌日になると、益〻新藏は氣が氣でなくなつて、泰さんの電話がかかるのを今か今かと待つてゐましたが、漸く昨日と同じ刻限になつて、約束通り電話口へ呼び出されました。しかし出て見ると泰さんは、昨日より更に元氣の好い聲で、「とうとう君、お敏さんの返事があつてね、一切僕の計畫通り實行する事になつたよ。何、どうして返事を受取つた？　又用を拵へて、僕自身あの婆の所へ出馬したのさ。すると昨日手紙で賴んであるから、取次に出たお敏さんが、すぐに僕の手へ返事を忍ばせたんだ。可愛い返事だぜ。平假名で『しようちいたしました』と書いてある――」と、得意らしく辯じ立てるのです。所が今日は妙な事に、かう云ふ言葉の途中から、泰さんの聲ばかりでなく、もう一人誰かの聲がはいりました。尤もこの聲と云ふのも、何と云つてゐるのだか、言葉は皆目わからないのですが、兎に角勢の好い泰さんの聲とは正反對に、鼻へかかつた、力のない、喘ぐやうな、まだるい聲が、丁度陰と日向とのやうに泰さんの饒舌つて行く間を縫つて、受話器の底へ流れこむのです。始めの内は新藏も、混線だらう位な量見で、別に氣にもしませんでしたから、「それから、それから。」と促し立てて、懷しいお敏の消息を、夢中になつて聞いてゐました。が、その内に泰さんにも、この妙な聲が聞えたのでせう。「何だか

騒々しいな。君の方かい。」と尋ねますから、「いや僕の方ぢやない。混線だらう。」と答へますと、泰さんはちよいと舌打ちをした氣色で、「ぢや一度切つて、又かけ直すぜ。」と云ひながら、一度所か二度も三度も、交換手に小言を云つちや、根氣よく繫ぎ直させましたが、やはり蟇の呟くやうな、ぶつぶつ云ふ聲が聞えるのです。泰さんもしまひには我を折つて、「仕方がないな。どこかに故障があるんだらう。——が、それより肝腎の本筋だがね、愈〻お敏さんが承知したとなりや、まあ、萬々計畫通り成功するだらうと思ふから、安心して吉報を待つてゐ給へ。」と、又さつきの話を續け出しましたが、新藏はやはり泰さんの計畫と云ふのが氣になるので、もう一遍昨日のやうに、「一體何をどうする心算なんだ。」と尋ねますと、相手は例の如く澄ましたもので、「もう一日辛抱し給へ。明日の今時分までにや、きつと君にも知らせられるだらうと思ふから。——まあ、そんなに急がないで、大船に乘つた氣で待つてゐるさ。果報は寢て待てつて云ふぢやないか。」と、冗談まじりに答へました。するとその聲がまだ終らない内に、もう一つのぼやけた聲が急に耳の側へ來て、「惡あがきは思ひ止らつしやれや。」と、はつきり嘲笑つたぢやありませんか。泰さんと新藏とは思はず同時に兩方から、「何だ、今の聲は。」と尋ね合ひましたが、それぎり受話器の中はひつそりして、あの呟くやうな鼻聲さへ全く聞えなくなつてしまひました。「こりやいけない。今のは君、あの婆だぜ。惡くすると、折角の計畫も——まあ、すべてが明日の事だ。ぢやこれで失敬するよ。」——から云ひながら、電話を切つた泰さんの聲の中には、明かに狼狽したけはひが感じられました。又實際お島婆さんが、二人の間の電話にさへ氣を配るやうになつたとすると、

勿論泰さんとお敏とが祕密の手紙をやりとりしてゐるにも、目をつけてゐるのに相違ありませんから、泰さんの慌てるのも尤もなのです。まして新藏の身になつて見れば、どうする心算か知らないにもせよ、兎に角かけ換のない泰さんの計畫が、あの婆に裏を掻かれる以上、それこそ萬事休してしまふより外はありません。ですから新藏は電話口を離れると、まるで喪心した人のやうに、ぼんやり二階の居間へ行つて、日が暮れるまで、窓の外の青空ばかり眺めてゐました。その空にも氣のせゐか、時々あの忌はしい烏羽揚羽が、何十羽となく群を成して、氣味の惡い更紗模樣を織り出した事があるさうですが、新藏はもう體も心もすつかり疲れ果ててゐましたから、その不思議を不思議として、感じる事さへ出來なかつたと云ひます。

その晩も亦新藏は惡夢ばかり見續けて、碌々眠る事さへ出來ませんでしたが、それでも夜が明けると、幾分か心に張りが出ましたので、砂を噛むより味のない朝飯をすませると、早速泰さんへ電話をかけました。「莫迦に、早いぢやないか。僕のやうな朝寢坊の所へ、今時分電話をかけるのは殘酷だよ。」——泰さんは實際まだ眠むさうな聲で、から苦情を申し立てましたが、新藏はそれには返事もしないで、「僕はね、昨日の電話の一件があつて以來、とても便々と家にやゐられないからね。これからすぐに君の所へ行くよ。いいえ、電話で君の話を聞いた位ぢや、とても氣が休まらないんだ。好いかい。すぐに行くからね。」と、だだつ子のやうに云ひ張つたさうです。この興奮し切つた口調を聞いちや、泰さんも外に仕方がなかつたのでせう。「ぢや來給へ。待つてゐるから。」と、素直に答へてくれたので、新藏は電話を切るが早いか、心配さうな母親にもむづか

しい顏を見せただけで、何處へ行くとも斷らずに、ふいと店を飛び出しました。出て見ると、空はどんよりと曇つて、東の方の雲の間に赤銅色の光が漂つてゐる、妙に蒸暑い天氣でしたが、元よりそんな事は氣にかける餘裕もなく、すぐ電車へ飛び乘つて、すいてゐるのを幸と、まん中の座席へ腰を下したさうです。すると一時恢復したやうに見えた疲勞が、意地惡くまだ殘つてゐたのか、新藏は今更のやうに氣が沈んで、まるで堅い麥藁帽子が追々頭をしめつけるのかと思ふ程、烈しい頭痛までして來ました。そこで氣を紛せたい一心から、今まで下駄の爪先ばかりへやつてゐた眼を、隣近所へ擧げて見ると、この電車にも亦不思議があつた。――と云ふのは、天井の兩側に行儀よく並んでゐる吊皮が、電車の動搖するのにつれて、皆振子のやうに搖れてゐますが、新藏の前の吊皮だけは、始終ぢつと一つ所に、動かないでゐるのです。それも始は可笑しいな位な心もちで、深くは氣にも止めませんでしたが、その内に又誰かに見つめられてゐるやうな、氣味の惡い心もちが自然に強くなり出したので、こんな吊皮の下に坐つてゐるのが、いけないのだらうと思ひましたから、向う側の隅にある空席へわざわざ移りました。移つて、ふと上を見ると、今まで搖られてゐた吊皮が突然造りつけたやうに動かなくなつて、その代りさつきの吊皮が、さも自由になつたのを喜ぶらしく、勢よくぶらつき始めたぢやありませんか。新藏は每度の事ながら、この時もやはり頭痛さへ忘れる程、何とも云へない恐怖を感じて、思はず救ひを求める如く、外の乘客たちの顏を見廻しました。と、斜に新藏と向ひ合つた、何處かの隱居らしい婆さんが一人、黑絽の被布の襟を拔いて、金緣の眼鏡越しにぢろりと新藏の方を見返したのです。勿論それ

はあの神下しの婆なぞとは何の由縁もない人物だつたのには相違ありませんが、その視線を浴びると同時に、新藏は忽お島婆さんの青んぶくれの顏を思ひ出しましたから、もう矢も楯もたまりません。いきなり切符を車掌へ渡すと、仕事を仕損じた掏摸より早く、電車を飛び降りてしまひました。が、何しろ凄まじい速力で、進行してゐた電車ですから、足が地についたと思ふと、麥藁帽子が飛ぶ。下駄の鼻緒が切れる。その上俯向きに前へ倒れて、膝頭を擦剝くと云ふ騷ぎです。いや、もう少し起き上るのが遲かつたら、砂煙を立てて走つて來た、何處かの貨物自働車に、轢かれてしまつた事でせう。泥だらけになつた新藏は、ガソリンの煙を顏に吹きつけて、横なぐれに通りすぎた、その自働車の黄色塗の後に、商標らしい黑い蝶の形を眺めた時、全く命拾ひをしたのが、神業のやうな氣がしたさうです。

それが鞍掛橋の停留場へ一町ばかり手前でしたが、仕合せと通りかかつた辻車が一臺あつたので、兎も角もその車へ這ひ上ると、まだ血相を變へた儘、東兩國へ急がせました。が、その途中も動悸はするし、膝頭の傷はづきづき痛むし、おまけに今の騷動があつた後ですから、いつ何時この車もひつくり返りかねないやうな、縁起の惡い不安もあるし、殆ど生きてゐる容はなかつたさうです。殊に車が兩國橋へさしかかつた時、國技館の天に朧銀の縁をとつた黑い雲が重なり合つて、廣い大川の水面に蜆蝶の翼のやうな帆影が群つてゐるのを眺めると、新藏は愈自分とお敏との生死の分れ目が近づいたやうな、悲壯な感激に動かされて、思はず涙さへ浮めました。ですから車が橋を渡つて、泰さんの家の門口へやつと梶棒を下した時には、嬉しいのか、悲しいの

か、自分にも判然しない程、唯無性に胸が迫つて、けげんな顏をしてゐる車夫の手へ、方外な賃錢を渡す間も惜しいやうに、倉皇と店先の暖簾をくぐりました。
泰さんは新藏の顏を見ると、手をとらないばかりにして、例の裏座敷へ通しましたが、やがてその手足の創痕だの、綻びの切れた夏羽織だのに氣がついたものと見えて、「どうしたんだい。その體裁は。」と、呆れたやうに尋ねました。「電車から落つこつてね、鞍掛橋の所で飛び降りをしそくなつたもんだから。」「田舍者ぢやあるまいし、――氣が利かないにも、程があるぜ。だが何だつて又、あんな所で、飛び降りなんぞしたんだらう。」――そこで新藏は電車の中で出會つた不思議を、一々泰さんに話して聞かせました。すると泰さんは熱心にその一部始終を聞き終つてから、何時になく眉をひそめて、「形勢愈〻非だね。僕はお敏さんが失敗したんぢやないかと思ふんだが。」と獨り言のやうに云ふのです。新藏はお敏の名前を聞くと、急に又動悸が高まるやうな氣がしましたから、「失敗したんぢやないかつて？　君は一體お敏に何をやらせようとしたんだ。」と、詰問する如く尋ねました。けれども泰さんはその問には答へないで、「尤もかうなるのも僕の罪かも知れないんだ。僕がお敏さんへ手紙を渡した事なんぞを、電話で君にしやべらなかつたら、あの婆も僕の計畫には感づかずにゐたのに違ひないんだからな。」と、如何にも當惑したらしいため息さへ洩らすのです。新藏は愈〻たまらなくなつて、「今になつてもまだ君の計畫を知らせてくれないと云ふのは、あんまり君、殘酷ぢやないか。そのおかげで僕は、二重の苦しみをしなけりやならないんだ。」と、聲を震はせながら怨じ立てると、泰さんは「まあ。」と抑へるやうな手つきをし

て、「そりや重々尤もだよ。尤もだと云ふ事は僕もよく承知してゐるんだが、あの婆を相手にしてゐる以上、これも已むを得ない事だと思つてくれ給へ。現に今も云つた通り、僕はお敏さんへ手紙を渡した事も、君に打明けずに默つてゐたら、もつと萬事好都合に、運んだかも知れないと思つてゐるんだ。何しろ君の一言一動は、皆お島婆さんにや見透しらしいからね。いや、事によると、この間の電話の一件以來、僕も隨分あの婆に睨まれてゐないもんでもない。が、今までの所ぢや、兎に角僕には君程の不思議な事件も起らないんだから、實際僕の計畫が失敗したのかどうか、それがはつきり分るまでは、いくら君に恨まれても、一切僕の胸一つにをさめて置きたいと思ふんだ。」と、諭したり慰めたりしてくれました。が、新藏はさう聞いた所で、泰さんの云ふ事には得心出來ても、お敏の安否を氣使ふ心に變りのある筈はありませんから、まだ險しい表情を眉の間に殘した儘、「それにしても君、お敏の體に間違ひのあるやうな事はないだらうね。」と、突つかかるやうに念を押すと、泰さんもやはり心配さうな眼つきをして、「さあ。」と云つたぎり、暫くは思案に沈んでゐましたが、やがてちよいと次の間の柱時計を覗きながら、「僕もそれが氣になつて仕方がないんだ。ぢやあの婆の家へは行かないでも、近所まで偵察に行つて見ようか。」と、思ひ切つたらしく云ふのです。新藏も實は悠長にかうして坐りこんでゐるのが、氣が氣でなかつた所ですから、勿論いやと言ふ筈はありません。そこですぐに相談が纏つて、ものの五分と經たない内に、二人は夏羽織の肩を並べながら、匆々泰さんの家を出ました。

所が泰さんの家を出て、まだ半町と行かない内に、ばたばた後から駈けて來るものがあります

から、二人とも、同時に振返つて見ると、別に怪しいものではなく、泰さんの店の小僧が一人、蛇の目を一本肩にかついで、大急ぎで主人の後を追ひかけて來たのです。「傘か。」「へえ、番頭さんが降りさうですから御持ちなさいましつて云ひました。」「そんならお客様の分も持つてくりや好いのに。」――泰さんは苦笑しながら、その蛇の目を受取ると、小僧は生意氣に頭を搔いてから、とつてつけたやうに御辭儀をして、勢よく店の方へ駈けて行つてしまひました。さう云へば成程頭の上にはさつきよりも黑い夕立雲が、一面にむらむらと滲み渡つて、その所々を洩れる空の光も、まるで磨いた鋼鐵のやうな、氣味の惡い冷たさを帶びてゐるのです。新藏は泰さんと一しよに歩きながら、この空模樣を眺めると、又忌はしい豫感に襲はれ出したので、自然相手との話もはずまず、無暗に足ばかり早め出しました。ですから泰さんは遲れ勝ちで、始終小走りに追ひついては、さも氣忙しさうに汗を拭いてゐましたが、その內にとうとうあきらめたのでせう。新藏を先へ立たせた儘、自分は後から蛇の目の傘を下げて、時々友だちの後姿を氣の毒さうに眺めながら、ぶらぶら步いて行きました。すると二人が一の橋の袂を左へ切れて、お敏と新藏とが日暮に大きな眼の幻を見た、あの石河岸の前まで來た時、後から一臺の車が來て、泰さんの傍を走り拔けましたが、その車の上の客の姿を見ると、泰さんは急に眉をひそめて、「おい、おい。」と、けたたましく新藏を呼び止めるぢやありませんか。そこで新藏もやむを得ず足を止めて、不承々々に相手を見返りながら、うるささうに「何だい。」と答へると、泰さんは急ぎ足に追ひついて、「君は今、車へ乘つて通つた人の顏を見たかい。」と、妙な事を尋ねるのです。「見たよ。瘦せた、黑い色眼鏡

をかけてゐる男だらう。」——新藏はいぶかしさうにかう云ひながら、又さつさと歩き出しましたが、泰さんは更にひるまないで、前よりも一層重々しく、「ありやね、君、僕の家の上華客で、鍵惣つて云ふ相場師だよ。僕は事によるとお敏さんを妾にしたいと云つてゐるのは、あの男ぢやないかと思ふんだがどうだらう。いや、格別何故つて訣もないんだが、ふとそんな氣がし出したんだ。」と、思ひもよらない事を云ひ出しました。が、新藏はやはり沈んだ調子で、「氣だけだらう。」と云ひ捨てた儘、例の桃葉湯の看板さへ眺めもせずに歩いて行くのです。と、泰さんは蛇の目の傘で二人の行く方を指さしながら、「必しも氣だけぢやないよ。見給へ。あの車はお島婆さんの家の前へ、ちやんと止つてゐるぢやないか。」と得意らしく新藏の顏を見返しました。見ると實際さつきの車は、雨を待つてゐる葉柳が暗く條を垂らした下に、金紋のついた後をこちらへ向けて、車夫は蹴込みの前に腰をかけてゐるらしく、悠々と梶棒を下ろしてゐるのです。これを見た新藏は、始めて浮かぬ顏色の底に、かすかな情熱を動かしながら、それでもまだ懶げな最初の調子を失はないで、「だがね、君、あの婆に占を見て貰ひに來る相場師だつて、鍵惣とかの外にもゐるだらうぢやないか。」と面倒臭さうに答へましたが、その内にもうお島婆さんの家と隣り合つた、左官屋の所まで來かかつたからでせう。泰さんはその上自說も主張しないで、油斷なくあたりに氣をくばりながら、まるで新藏の身をかばふやうに、夏羽織の肩を摺り合せて、ゆつくり、お島婆さんの家の前を通りすぎました。通りすぎながら、二人が尻眼に容子を窺ふと、唯ふだんと變つてゐるのは、例の鍵惣が乘つて來た車だけで、これは遠くで眺めたのよりもずつと手前、丁度左

官屋の水口の前に太ゴムの轍を威かつく止めて、バットの吸殼を耳にはさんだ車夫が、尤もさうに新聞を讀んでゐます。が、その外は竹格子の窓も、煤けた入口の格子戸も、乃至はまだ葭戸にも變らない、格子戸の中の古ぼけた障子の色も、すべてが何時もと變らないばかりか、家内もやはり日頃のやうに、陰森とした靜かさが罩もつてゐるやうに思はれました。まして萬一を僥倖して來た、お敏の姿らしいものは、あのしをらしい紺絣の袂が、ひらめくのさへ眼にはいりません。ですから二人はお島婆さんの家の前を隣の荒物屋の方へ通りぬけると、今までの心の緊張が弛んだと云ふ以外にも、折角の當てが外れたと云ふ落膽まで背負はずにはゐられませんでした。

所がその荒物屋の前へ來ると、淺草紙、龜の子束子、髮洗粉などを並べた上に、蚊やり線香と書いた赤提燈が、一ぱいに大きく下つてゐる――その店先へ佇んで、荒物屋のお上さんと話してゐるのは、紛もないお敏だらうぢやありませんか。二人は思はず顔を見合せると、殆一秒もためらはずに、夏羽織の裾を飜しながら、つかつかと荒物屋の店へはいりました。そのけはひに氣がついて、二人の方を振り向いたお敏は、見る見る蒼白い頰の底にほのかな血の色を動かしましたが、さすがに荒物屋のお上さんの手前も兼ねなければならなかつたのでせう。軒先へ垂れてゐる柳の條を肩へかけた儘、無理に胸の躍るのを抑へるらしく、「まあ。」とかすかな驚きの聲を洩らしたとか云ふ事です。すると泰さんは落着き拂つて、ちよいと麥藁帽子の庇へ手をやりながら、「阿母さんは御宅ですか。」と、さりげなく言葉をかけました。「はあ、居ります。」「で、あなたは？」「御客樣の御用で半紙を買ひに――」――かう云ふお敏の言葉が終らない内に、柳に塞がれた店先

が一層うす暗くなつたと思ふと忽ち蚊やり線香の赤提燈の胴をかすめて、きらりと一すぢ雨の糸が冷たく斜に光りました。と同時に柳の葉も震へるかと思ふ程、どろどろと雷が鳴つたさうです。泰さんはこれを切つかけに、一足店の外へ引返しながら、「ぢやちよいと阿母さんにさう云つて下さい。私が又見てお貰ひ申したい事があつて上りましたつて――今も御門先で度々御免と聲をかけたんだが、一向音沙汰がないんでね、どうしたのかと思つたら、肝腎の御取次が此處で油を賣つてゐたんです。」と、お敏と荒物屋のお上さんとを等分に見比べて、手際よく快活に笑つて見せました。勿論何も知らない荒物屋のお上さんは、かう云ふ泰さんの巧な芝居に、氣がつく筈もありませんから、「ぢやお敏さん、早く行つてお上げなさいよ。」と、氣忙はしさうに促すと、自分も降り出した雨に慌てて、蚊やり線香の赤提灯を匆々とりこめに立つたと云ひます。そこでお敏も、「ぢや叔母さん、又後程。」と挨拶を殘して、泰さんと新藏とを左右にしながら、荒物屋の店を出ましたが、元より三人ともお島婆さんの家の前には足も止めず、もう點々と落ちて來る大粒な雨を蛇の目に受けて、一つ目の方へ足を早めました。實際その何分かの間は、當人同志は云ふまでもなく、平常は元氣の好い泰さんさへ、愈〻運命の賽を投げて、丁か半かをきめる時が來たやうな氣がしたのでせう。あの石河岸の前へ來るまでは、三人とも云ひ合はせたやうに眼を伏せて、見る間に土砂降りになつて來た雨も氣がつかないらしく、無言で歩き續けました。

その内に御影の狛犬が向ひ合つてゐる所まで來ると、やつと泰さんが顏を擧げて、「此處が一番安全だつて云ふから、雨やみ旁〻この中で休んで行かう。」と、二人の方を振り返りました。そこ

で皆一つ傘の下に雨をよけながら、積み上げた石と石との間をぬけて、ふだんは石切りが仕事をする所なのでせう。石河岸の隅に張つてある蓆屋根の下へはいりました。その時は雨も益々凄じくなつて、竪川を隔てた向う河岸も見えない程、まつ白にたぎり落ちてゐましたから、この一枚の蓆屋根位では、到底洩らずにすむ訣もありません。のみならず、霧のやうな雨のしぶきも、濕つた土の匂と一しよに、濛々と外から吹きこんで來ます。そこで三人は蓆屋根の下にはいりながらも、まだ一本の蛇の目を頼みにして、削りかけた儘になつてゐる門柱らしい御影の上に、目白押しに腰を下しました。と、すぐに口を切つたのは新藏です。「お敏、僕はもう御前に逢へないかと思つてゐた。」――かう云ふ内に又雨の中を斜に蒼白い電光が走つて、雲を裂くやうに雷が鳴りましたから、お敏は思はず銀杏返しを膝の上へ伏せて、暫くはぢつと身動きもしませんでしたが、やがて全く色を失つた顔を擧げると、夢現のやうな目なざしをうつとりと外の雨脚へやつて、「私ももう覺悟はして居りました。」と氣味の惡い程靜に云ひました。心中――さう云ふ穩ならない文字が、まるで燐ででも書いたやうに、新藏の頭腦へ燒きついたのは、實にこのお敏の言葉を聞いた、瞬間だつたと云ふ事です。が、二人の間に腰を据ゑて、大きく蛇の目をかざしてゐた泰さんは、左右へ當惑さうな眼を配りながら、それでも聲だけは元氣よく、「おい、しつかりしなくつちやいけないぜ。お敏さんも勇氣を出すんです。得てかう云ふ時には死神が、とつ着きたがるものですからね。――そりやさうと今來てゐるお客は、鍵惣つて云ふ相場師でせう。ええ、私もちよいと知つてゐるんです。あなたを妾にしたいつて云ふのは、あの男ぢやないんですか。」と、早速

實際的な方面へ話を移してしまひました。するとお敏も急に夢から覺めたやうに、涼しい眼を泰さんの顔に注ぎながら、「ええ、あの人なんでございます。」と、口惜しさうに答へたさうです。
「それ見給へ。やつぱり僕の見込んだ通りぢやないか。」――かう云つて泰さんは、得意らしく新藏の方を見返りましたが、すぐに又眞面目な調子になつて、劬るやうにお敏の方へ向ひながら、
「この降りぢや、いくら鍵惣でもまだ二十分や三十分は御宅にゐるでせう。その間に一つ、私の計畫がどうなつたか話して聞かせて下さい。もし萬事休したとなりや、男は當つて碎けろだ。私がこれから御宅へ行つて、直接鍵惣に懸合つて見ますから。」と、新藏の耳にも賴母しい程、男らしく云ひ切りました。その間も雷は愈〻烈しくなつて、晝ながらも大幅な稻妻が、殆絶え間なく瀧のやうな雨をはたいてゐましたが、お敏はもうその悲しさをさへ忘れる位、必死を極めてゐたのでせう。顔も美しいと云ふよりは、寧ろ凄いやうなけはひを帶びて、これぱかりは變らない、鮮な脣を震はせながら、「それがみんな裏を搔かれて、――もう何も彼も駄目でございますわ。」と、細く透る聲で答へました。それからお敏が、この雷雨の蓆屋根の下で、殘念さうに息をはずませながら、途切れ途切れに物語つた話を聞くと、新藏の知らない泰さんの計畫と云ふのは、たつた昨夜一晩の内に、こんな銳い曲折を作つて、まんまと失敗してしまつたのです。
　泰さんは始新藏から、お島婆さんがお敏へ神を下して、伺ひを立てると云ふ事を聞いた時に、咄嗟に胸に浮んだのは、その時お敏が神憑り（かみがかり）の眞似をして、あの婆に一杯食はせるのが一番近道だと云ふ事でした。そこで前にも云つた通り、家相を見て貰ふのにかこつけて、お島婆さんの所

へ行つた時に、そつとその旨を書いた手紙をお敏に手渡して來たのです。お敏もこの計畫を實行するのは、隨分あぶない橋を渡るやうなものだとは思ひましたが、何しろ差當つてその外に、目前の災難を切り拔ける妙案も思ひ當りませんから、明くる日の朝思ひ切つて、「しようちいたしました」と云ふ返事を泰さんに渡しました。所がその晩の十二時に、例の如くあの婆が竪川の水に浸つた後で、愈〻婆娑羅の神を祈り下し始めると、全く人間業では仕方のない障害のあるのを知つたのです。が、その仔細を申し上げるのには、今の世にあらうとも思はれない、あの婆の不思議な修法の次第を御話して置かなければなりますまい。お島婆さんはいざ神を下すとなると、あらう事かお敏を湯卷一つにして、兩手を後へ括り上げた上、髮さへ根から引きほどいて、電燈を消したあの部屋のまん中に、北へ向つて坐らせるのださうです。それから自分も裸の儘、左の手には裸蠟燭をともし、右の手には鏡を執つて、お敏の前へ立ちはだかりながら、口の內に祕密の呪文を念じて、鏡を相手につきつけつきつけ、一心不亂に祈念をこめる――これだけでも普通の女なら、氣を失ふのに違ひありませんが、その內に追々呪文の聲が高くなつて來ると、あの婆は鏡を楯にしながら、少しづつじりじり詰めよせて、しまひには、その鏡に氣壓(けお)されるのか、兩手の利かないお敏の體が仰向けに疊へ倒れるまで、手をゆるめずに責めるのだと云ふ事です。しかもかうして倒してしまつた上で、あの婆はまるで屍骸の肉を食ふ爬蟲類のやうに這ひ寄りながら、お敏の胸の上へのしかかつて、裸蠟燭の光が落ちる氣味の惡い鏡の中を、下からまともに何時までも覗かせるのだと云ふぢやありませんか。すると程なくあの婆娑羅の神が、まるで古沼の底か

ら立つ瘴氣のやうに、音もなく暗の中へ忍んで來て、そつと女の體へ乘移るのでせう。お敏は次第に眼が据つて、手足をぴくぴく引き攣らせると、もうあの婆が口忙しく疊みかける問に應じて、息もつかずに、祕密の答を饒舌り續けると云ふ事です。ですからその晩もお島婆さんは、から云ふ手順を違へずに、神を祈下さうとしましたが、お敏は泰さんとの約束を守つて、うはべは正氣を失つたと見せながら、內心は更に油斷なく、機會さへあれば眞しやかに、二人の戀の妨げをするなと、贋の神託を下す心算でゐました。勿論その時あの婆が根掘り葉掘り尋ねる問などは、神慮に叶はない風を裝つて、一つも答へない事にきめてゐたのです。所が例の裸蠟燭の光を受けて、小さいながら爛々と輝いた鏡の面を見つめてゐると、いくら氣を確に持たうと思つてゐても、自然と心が恍惚として、何時とたく我を忘れさうな危險に脅され始めました。さうかと云つて、あの婆は、呪文を唱へる暇もぬかりなく、じつとこちらの顏色を窺ひすましてゐるのですから、隙を狙つて鏡から眼を離すと云ふ訣にも行きません。その內に鏡はお敏の視線を吸ひよせるやうに、益〻怪しげな光を放つて、一寸づつ、一分づつ、宿命よりも氣味惡く、だんだんこちらへ近づいて來ました。おまけにあの靑んぶくれの婆が、絕え間なく呟く呪文の聲も、まるで目に見えない蜘蛛の巢のやうに、四方からお敏の心を搦んで、何時か夢とも現ともわからない境へ引きずりこまうとするのです。それがどの位かかつたか、お敏自身も後になつて考へたのでは、朧げな記憶さへ殘つてゐません。が、兎も角も自分には一晚中とも思はれる程、長い長い間續いた後で、とうとうお敏は苦心の甲斐もなく、あの婆の祕法の穽に陷れられてしまつたのでせう。うす暗い裸

蠟燭の火がまたたく中に、大小さまざまの黑い蝶が、數限りもなく圓を描いて、さつと天井へ舞上つたと思ふと、その儘目の前の鏡が見えなくなつて、何時もの通り死人も同様な眠に沈んでしまひました。

お敏は雷鳴と雨聲との中に、眼にも脣にも懸命の色を漲らせて、かう一部始終を語り終りました。さつきから熱心に耳を傾けてゐた泰さんと新藏とは、この時云ひ合せたやうに吐息をして、ちらりと視線を交せましたが、兼て計畫の失敗は覺悟してゐても、一々その仔細を聞いて見ると、今度こそすべてが畫餅に歸したと云ふ、今更らしい絕望の威力を痛切に感じたからでせう。暫くは二人とも啞のやうに口を噤んだ儘、天を覆して降る豪雨の音を茫然と唯聞いてゐました。が、その內に泰さんは勇氣を振ひ起したと見えて、今まで興奮し切つてゐた反動か、見る見る陰鬱になり出したお敏に向つて、「その間の事は何一つまるで覺えてゐないのですか。」と、勵ますやうに尋ねたさうです。と、お敏は眼を伏せて、「ええ、何も――」と答へましたが、すぐに又哀訴するやうな眼なざしを恐る恐る泰さんの顏へ擧げて、「やつと正氣になりました時には、もう夜が明けて居りましたんです。」と、怨めしさうにつけ加へると、急に袂を顏へ當てて、忍び泣きに咽び入りました。さう云ふ內にも外の天氣は、まだ晴れ間も見えないばかりか、雷は今にも落ちかかるかと思ふ程、殷々と頭上に轟き渡つて、その度に瞳を燒くやうな電光が、しつきりなく蓆屋根の下へも閃いて來ます。すると今まで身動きもしなかつた新藏が、何と思つたか突然立ち上ると、凄じく血相を變へた儘、荒れ狂ふ雨と稻妻との中へ、出て行きさうにするぢやありませんか。し

かもその手には、何時の間にか、石切りが忘れて行つたらしい鑿を提げてゐるのです。これを見た泰さんは、蛇の目を其處へ抛り出すが早いか、やにはに後から追ひすがつて、抱くやうに新藏の肩を抑へました。「おい、氣でも違つたのか。」――思はずから泰さんは怒鳴りつけながら、無理に相手を引き戻さうとすると、新藏は別人のやうに上づつた聲で、「離してくれ給へ。もうかうなりや、僕が死ぬか、あの婆を殺すかより外はないんだ。」と、夢中で喚き立てるのです。「莫迦な事をするな。第一今日は鍵惣も來合せてゐると云ふぢやないか。だから僕が向うへ行つて――」「鍵惣が何だ。お敏を妾にしようと云ふやつが、君の頼みなんぞ聞くものか。それよりか僕を離してくれ給へ。よ、友達甲斐に離してくれ給へつたら。」「君はお敏さんの事を忘れたのか。君がそんな無謀な事をしたら、あの人はどうするんだ。」――二人がかう揉み合つてゐる間に、新藏は優しい二つの腕が、わなわな震へながらも力強く、首のまはりに懸つたのを感じました。それから涙に溢れた涼しい眼が、限りなく悲しい光を湛へて、じつと彼の顏に注がれてゐるのを眺めました。最後に大雨の音を縫つて、殆聞きとれない程かすかな聲が、「御一しよに死なせて下さいまし。」と、囁いたのを耳にしました。と同時に近くへ落雷があつたのでせう。天が裂けたやうな一聲の霹靂と共に紫の火花が眼の前へ散亂すると、新藏は戀人と友人とに抱かれた儘、昏々として氣を失つてしまひました。

それから何日か經つた後の事です。新藏はやつと長い惡夢に似た昏睡狀態から覺めて見ると、自分は日本橋の家の二階で、氷嚢を頭に當てながら、靜に横になつてゐました。枕元には藥罎や

檢溫器と一しよに、小さな朝顏の鉢があつて、しをらしい瑠璃色の花が咲いてゐますから、大方まだ朝の内なのでせう。雨、雷鳴、お島婆さん、お敏、――そんな記憶をぼんやり辿りながら、新藏はふと眼を傍へ轉ずると、思ひがけなく其處の葭戶際には、銀杏返しの鬢がほつれた、まだ頰の色の蒼白いお敏が、氣づかはしさうに坐つてゐました。いや、坐つてゐるばかりか、新藏が正氣に返つたのを見ると、忽ちかすかに顏を赤らめて、「若旦那樣、御氣がつきなさいましたか。」と、つつましく聲をかけたぢやありませんか。「お敏。」――新藏はまだ夢を見てゐるやうな心もちで、かう戀人の名を呟きましたが、その時叉枕もとで、「まあ、これでやつと安心した。――おつと、その儘、その儘、なる可く靜にしてゐなくつちやいけないぜ。」と、これもやはり思ひがけない泰さんの聲が聞えました。「君もゐたのか。」「僕もゐるしさ。君の阿母さんも此處に御出でなさる。御醫者樣は今し方歸つたばかりだ。」――こんな問答を交換しながら、新藏は眼をお敏から返して、まるで遠い所の物でも見るやうに、うつとりと反對の側を眺めると、成程泰さんと母親とが、ほつとしたやうな顏を見合せて、枕もとに近く坐つてゐます。が、やつと正氣に返つた新藏には、あの恐しい大雷雨の後、どうして日本橋の家へ歸つて來たのか、更にさう云ふ消息がのみこめませんから、暫くは唯茫然と三人の顏ばかり眺めてゐました。が、その內に母親は優しく新藏の顏を覗きこんで、「もう何事も無事に治まつたからね、この上はお前もよく養生をして、一日も早く丈夫な體になつてくれなけりやいけませんよ。」と、劬はるやうに言葉をかけました。するとす泰さんもその後から、「安心し給へ。君たち二人の思が神に通じたんだよ。お島婆さんは鍵

惣と話してゐる内に、神鳴りに打たれて死んでしまつた。」と、何時もよりも快活に云ひ添へるのです。新藏はこの意外な吉報を聞くと同時に、喜びとも悲しみとも名狀し難い、不思議な感動に蕩搖されて、思はず淚を頰に落すと、その儘眼をとざしてしまひました。それが看護をしてゐた三人には、又失神したとでも思はれたのでせう。急に皆そはそは立ち騷ぐやうなけはひがし出しましたから、新藏は又眼を開くと、腰を浮かせかけてゐた泰さんが、わざと大袈裟に舌打ちをして、「何だ。驚かせるぜ。――御安心なさい。今泣いた烏がもう笑つてゐます。」と、二人の女の方をふり返りました。實際新藏はもうこの世の中にあの怪しい婆の影がささなくなつたのだと考へると、自然と微笑が脣に浮んで來るのを感じたのです。それから又暫くの間、この幸福な微笑を樂んだ後で、新藏は泰さんの顏へ眼をやりながら、「鍵惣は？」と尋ねました。と、泰さんは笑ひながら、「鍵惣か。鍵惣は目をまはしただけだつた。」と云つて、何故かちよいとためらつたやうでしたが、やがて思ひ直したらしく、「僕は昨日見舞に行つて、あの男自身の口から聞いたんだがね。お敏さんは神を下された時に、君たち二人の戀の邪魔をすれば、あの婆の命に關ると、繰返し繰返し云つたさうだ。が、あの婆は狂言だと思つたので、明くる日鍵惣が行つた時に、この上はもう殺生な事をしても、君たち二人の仲を裂くとか、大いに息まいてゐたらしいよ。して見ると、僕の計畫は、失敗に終つたのに違ひないんだが、その又計畫通りの事が、實際は起つてゐたんだらうぢやないか。しかもお島婆さんがそれを狂言だと思つた揚句、とうとう自滅したなんぞは、どう考へても豫想外だね。これぢや婆娑羅の神と云ふのも、善だか惡だかわからなくなつた。」と、

怪訝さうに話して聞かせるのです。かう云ふ話を聞くにつけても、新藏は愈〻この間から、自分を掌中に弄んだ、幽冥の力の怪しさに驚かないではゐられませんでしたが、忽ち又自分はあの雷雨の日以來、どうしてゐたのだらうと思ひ出しましたから、「ぢや僕は。」と尋ねますと、今度はお敏が泰さんに代つて、「あの石河岸からすぐ車で、近所の御醫者樣へ御つれ申しましたが、雨に御打たれなすつたせゐか、大層御熱が高くなつて、日の暮にこちらへ御歸りになつても、まるで正氣ではいらつしやいませんでした。」と、しみじみした調子で口を添へました。これを聞くと泰さんも、滿足さうに膝をのり出して、「その熱がやつと引いたのは、全く君のお母さんとお敏さんのおかげだよ。今日でまる三日の間、譫言ばかり云つてゐる君の看病で、お敏さんは元より阿母さんも、まんじりとさへなさらないんだ。尤もお島婆さんの方は、追善心に葬式萬端、僕がとりしきつてやつて來たがね。それもこれも阿母さんの御世話になつてゐない物はないんだよ。」と、末は勵ますやうに述べ立てるのです。「阿母さん。難有う。」「何だね、お前、私より泰さんに御禮を申し上げなくつちや。」――かう云ふ内に親子とも、いや、お敏も、泰さんも、皆涙を浮べてゐました。が、泰さんは男だけに、すぐ元氣な聲を出して、「もう彼是三時でせう。ぢや私は御暇しますかな。」と、半ば體を起しかけると、新藏は不審さうに眉をよせて、「三時？　今はまだ朝ぢやないのかい。」と、妙な事を尋ねるのです。呆氣にとられた泰さんは、「冗談云つちやいけない。」と云ひながら、帶の間の時計を拔いて、蓋を開けて見せさうにしましたが、ふと新藏の眼が枕もとの朝顏の花に落ちてゐるのを見ると、急に晴れ晴れした微笑を浮べて、こんな事を話して聞かせ

ました。「この朝顔はね、あの婆の家にゐた時から、お敏さんが丹精した鉢植なんだ。所があの雨の日に咲いた瑠璃色の花だけは、奇體に今日まで凋まないんだよ。お敏さんは何でもこの花が咲いてゐる限り、きつと君は本復するに違ひないつて、自分も信じりや僕たちにも度々云つてゐたものなんだ。その甲斐があつて、君が正氣に返つたんだから、同じ不思議な現象にしても、これだけは如何にも優しいぢやないか。」

（大正八年九月二十二日）

死後

……僕は床へはひつても、何か本を讀まないと、寢つかれない習慣を持つてゐる。のみならずいくら本を讀んでも、寢つかれないことさへ稀ではない。かう言ふ僕の枕もとにはいつも讀書用の電燈だのアダリン錠の罎だのが並んでゐる。その晩も僕はふだんのやうに本を二三册蚊帳の中へ持ちこみ、枕もとの電燈を明るくした。

「何時？」

これはとうに一寢入りした、隣の床にゐる妻の聲だつた。妻は赤兒に腕枕をさせ、ま横にこちらを眺めてゐた。

「三時だ。」

「もう三時。あたし、まだ一時頃かと思つてゐた。」

僕は好い加減な返事をしたきり、何ともその言葉に取り合はなかつた。

「うるさい。うるさい。默つて寢ろ。」

妻は僕の口眞似をしながら、小聲にくすくす笑つてゐた。が、暫くたつたと思ふと、赤子の頭

に鼻を押しつけ、いつかもう靜かに寢入つてゐた。
僕はそちらを向いたまま、說敎因緣除睡鈔と言ふ本を讀んでゐた。これは和漢天竺の話を享保頃の坊さんの集めた八卷ものの隨筆である。しかし面白い話は勿論、珍らしい話も滅多にない。僕は君臣、父母、夫婦と五倫部の話を讀んでゐるうちにそろそろ睡氣を感じ出した。それから枕もとの電燈を消し、ぢきに眠りに落ちてしまつた。――
夢の中の僕は暑苦しい町をSと一しよに步いてゐた。砂利を敷いた步道の幅はやつと一間か九尺しかなかつた。それへ又どの家も同じやうにカアキイ色の日除けを張り出してゐた。
「君が死ぬとは思はなかつた。」
Sは扇を使ひながら、かう僕に話しかけた。一應は氣の毒に思つてゐても、その氣もちを露骨に表はすことは嫌つてゐるらしい話しぶりだつた。
「君は長生きをしさうだつたがね。」
「さうかしら?」
「僕等はみんなさう言つてゐたよ。ええと、僕よりも五つ下だね、」とSは指を折つて見て、「三十四か? 三十四ぐらゐで死んだんぢや、」――それきり急に默つてしまつた。
僕は格別死んだことを殘念に思つてはゐなかつた。しかし何かSの手前へも着かしいやうには感じてゐた。
「仕事もやりかけてゐたんだらう?」

Sはもう一度遠慮勝ちに言つた。
「うん、長いものを少し書きかけてゐた。」
「細君は？」
「達者だ。子供もこの頃は病氣をしない。」
「そりやまあ何よりだね。僕なんぞもいつ死ぬかわからないが、……」
僕はちよつとSの顏を眺めた。Sはやはり S 自身は死なずに僕の死んだことを喜んでゐる、——それをはつきり感じたのだつた。するとSもその瞬間に僕の氣もちを感じたと見え、厭な顏をして默つてしまつた。
暫く口を利かずに歩いた後、Sは扇に日を除けたまま、大きい罐づめ屋の前に立ち止つた。
「ぢや僕は失敬する。」
罐づめ屋の店には薄暗い中に白菊が幾鉢も置いてあつた。僕はその店をちらりと見た時、なぜか「ああ、Sの家は青木堂の支店だつた」と思つた。
「君は今お父さんと一しよにゐるの？」
「ああ、この間から。」
「ぢや又。」
僕はSに別れてから、すぐにその次の横町を曲つた。横町の角の飾り窓にはオルガンが一臺据ゑてあつた。オルガンは内部の見えるやうに側面の板だけはづしてあり、その又内部には靑竹の

筒が何本も竪に並んでゐた。僕はこれを見た時にも、「成程、竹筒でも好い筈だ」と思つた。それから——いつか僕の家の門の前に佇んでゐた。

古いくぐり門や黑塀は少しもふだんに變らなかつた。いや、門の上の葉櫻の枝さへきのふ見た時の通りだつた。が、新らしい標札には「櫛部寓」と書いてあつた。僕はこの標札を眺めた時、ほんたうに僕の死んだことを感じた。けれども門をはひることは勿論、玄關から奧へはひることも全然不德義とは感じなかつた。

妻は茶の間の緣側に坐り、竹の皮の鎧を拵へてゐた。妻のゐまはりはその爲に乾皮つた竹の皮だらけだつた。しかし膝の上にのせた鎧はまだ草摺りが一枚と胴としか出來上つてゐなかつた。

「子供は?」と僕は坐るなり尋ねた。

「きのふ伯母さんやおばあさんとみんな鵠沼へやりました。」

「おぢいさんは?」

「おぢいさんは銀行へいらしつたんでせう。」

「ぢや誰もゐないのかい?」

「ええ、あたしと靜やだけ。」

妻は下を向いたまま、竹の皮に針を透してゐた。しかし僕はその聲に忽ち妻の譃を感じ、少し聲を荒らげて言つた。

「だつて櫛部寓つて標札が出てゐるぢやないか?」

妻は驚いたやうに僕の顏を見上げた。その目はいつも叱られる時にする、途方に暮れた表情をしてゐた。
「出てゐるだらう？」
「ええ。」
「ぢやその人はゐるんだね？」
「ええ。」
妻はすつかり悄氣てしまひ、竹の皮の鎧ばかりいぢつてゐた。
「そりやゐてもかまはないさ。俺はもう死んでゐるんだし、――」
僕は半ば僕自身を說得するやうに言ひつづけた。
「お前だつてまだ若いんだしするから、そんなことは兎や角言ひはしない。唯その人さへちやんとしてゐれば、……」
妻はもう一度僕の顏を見上げた。僕はその顏を眺めた時、とり返しのつかぬことの出來たのを感じた。同時に又僕自身の顏色も見る見る血の氣を失つたのを感じた。
「ちやんとした人ぢやないんだね？」
「あたしは惡い人とは思ひませんけれど、……」
しかし妻自身も櫛部某に尊敬を持つてゐないことははつきり僕にわかつてゐた。ではなぜさう言ふものと結婚したか？　それはまだ許せるとしても、妻は櫛部某の卑しい所に反つて氣安さを

見出してゐる、――僕はそこに肚の底から不快に思はずにはゐられぬものを感じた。
「子供に父と言はせられる人か？」
「そんなことを言つたつて、……」
「駄目だ、いくら辯解しても。」
妻は僕の怒鳴るよりも前にもう袂に顏を隱し、ぶるぶる肩を震はせてゐた。
「何と言ふ莫迦だ！　それぢや死んだつて死に切れるものか。」
僕はぢつとしてはゐられない氣になり、あとも見ずに書齋へはひつて行つた。すると書齋の鴨居の上に鳶口が一梃かかつてゐた。鳶口は柄を黑と朱との漆に卷き立ててあるものだつた。誰かこれを持つてゐたことがある、――僕はそんなことを思ひ出しながら、いつか書齋でも何でもない、枳殼垣に沿つた道を歩いてゐた。
道はもう暮れかかつてゐた。のみならず道に敷いた石炭殼も霧雨か露かに濡れ透つてゐた。僕はまだ餘憤を感じたまま、出來るだけ足早に歩いて行つた。が、いくら歩いて行つても、枳殼垣はやはり僕の行手に長ながとつづいてゐるばかりだつた。
僕はおのづから目を覺ました。妻や赤子は不相變靜かに寢入つてゐるらしかつた。けれども夜はもう白みかけたと見え、妙にしんみりした蟬の聲がどこか遠い木に澄み渡つてゐた。僕はその聲を聞きながら、あした（實はけふ）頭の疲れるのを惧れ、もう一度早く眠らうとした。が、容易に眠られないばかりか、はつきり今の夢を思ひ出した。夢の中の妻は氣の毒にもうまらない役ま

はりを勸めてゐる。Sは實際でもああかも知れない。僕も、――僕は妻に對しては恐しい利己主義者になつてゐる。殊に僕自身を夢の中の僕と同一人格と考へれば、一層恐しい利己主義者になつてゐる。しかも僕自身は夢の中の僕と必しも同じでないことはない。僕は一つには睡眠を得る爲に、又一つには病的に良心の昂進するのを避ける爲に〇・五瓦のアダリン錠を嚥み、昏々とした眠りに沈んでしまつた。……

（大正十四年九月）

昭和十年七月五日印刷
昭和十年七月十日發行

芥川龍之介全集第九卷

著作者　芥川龍之介

東京市神田區一ツ橋二丁目三番地
發行者　岩波茂雄

東京市神田區錦町三丁目十一番地
印刷者　白井赫太郎

東京市神田區錦町三丁目十一番地
印刷所　精興社

發行所　東京市神田區一ツ橋二丁目三番地
岩波書店
電話九段(33)一八七・一八八番
　　　　一八九・一八〇番
振替口座東京七四四一六番

（寺島製本）